

弊社NFFサービスはこの度、聖杯戦争への参加が決定致しました♡

ルルザムート

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第四時聖杯戦争：冬木市での大災害から約1年弱。

起こる筈の無い聖杯戦争がアメリカ、ワシントンD.C.にて発生した。

7人のマスターがそれぞれのサーヴァントを召喚しようとする中、その内の1人である男の前に『彼女』は現れた

「なんだお前は…アホを召喚した覚えはないぞ」

召喚陣へ対物ライフルを向ける自身のマスターになるであろう男へ、彼女は100点満点の営業スマイルで応える

「これは申し遅れました??此度はワタクシを召喚していただき、ま・こ・と・に・ありがとうございます！」

サーヴァントアサシン、タママヴィッチ・コヤンスカヤ。誠心誠意、秘書として務めさせていただきますのでえ…聖杯を掴むその時までどうか宜しくお願いしますね?マスター♡」

※時系列的にはFate/Zeroより少し後、オリ主とコヤンスカヤが行くオリ聖杯戦争(+α)の妄想を書き殴っていくものです

未熟な点は多々ありますが読んでいただけただけなら幸いです

(タイトルは『ギャング組織リーダー、聖杯戦争にてコヤンスカヤを召喚する』から変更しました)

## 目次

### 前章 ワシントンDC 聖杯戦争

第1話	知人の頼み	1
第2話	参加表明	13
第3話	聖杯戦争における1回目の戦い	28
第4話	様子見／調査	41
第5話	後始末	53
第6話	夢／信仰者	66
第7話	幕間 ルマス・プライマリ	80
第8話	『9人目』と『10人目』	90
第9話	痛恨『騎』	100
第10話	痛恨『殺』	108
第11話	求める声／避けたい手段	117
第12話	幕間 フーレン・アジャイル	128
第13話	記憶／能力	139
第14話	開発者	151
第15話	愛国者／影月の破片	160
第16話	殺戮技巧（人）／対話	169
第17話	志	181
第18話	休暇『前』	191
第18話	休暇『中』	199
第18話	休暇『終』	208
番外	いまさらキャラ設定集&お詫び	218
第19話	幕間 影月 遥（3）	230
第20話	救済	236

第21話	異次元からの贈り物／善と悪	245
第22話	影月	253
第23話	ねがいごとは	262
第24話	2つの願い、○つの器	274
第25話	NFFサービス、一部営業再開	281
第26話	最後の陣営／イレギュラー	290
第27話	大天才の下準備／天才の情報収集(?)	298
第28話	停電裏の激突	306
第29話	実らない恋	315
第30話	檻の中で	324
第31話	幕間 影月 遥(2)	329
第32話	覚醒	340
第33話	嵐の前の静けさ	348
第34話	全てを賭けた1戦	356
第35話	幕間 影月 遥(1)	369
第36話	身の程知らずの少女の愛矢	381
第37話	私の親友	398
第38話	女神との雑談	413
第39話	セイバー陣営	426
第40話	50年掛けた覚悟	437
中章 準備期間		
第41話	聖杯戦争終結／目覚めた厄災	451
第42話	友誼の証明	463
第43話	再会の姉妹	472
第44話	カミ	484

第45話	兄妹(?) 喧嘩とその結末	492
第46話	不碎の意思	504
第47話	無知な命、されど無価値にあらず	518
第48話	幕間 クライム・アルバート(2)	532
第49話	羊飼い	546
第50話	NFFスペシャル	557
第51話	ロンドンからの使者／ルマスの遺品	566
第52話	過去からの援軍	577
第53話	旗の下に	588
第54話	幕間 ビースト コヤンスカヤ(1)	599
第55話	幕間 ビースト コヤンスカヤ(2)	606
第56話	幕間 ビースト コヤンスカヤ(3)	612
第57話	カルデア式英霊召喚	621
第58話	《降臨者》コヤンスカヤ	632
第59話	故郷	640
第60話	それまで透明だった○○	649
第61話	異郷の痕跡	660
第62話	人類の希望	671
第63話	取引終了	682
第64話	この身は全て、我がマスターと世界の為に	694
第65話	希望を担うもの	706
第66話	冬木市の調査	723
第67話	人類を滅ぼすには	737
第68話	最後の機会	747
第69話	自分勝手な	757

第70話	守護者	767
第71話	ケガレ弾	779
第72話	50年前のセイバー	786
第73話	魔術特性 現在	797
第74話	とにかく影月が大好きな蛇のお姉さん	806
第75話	それぞれの準備期間	818
第76話	2年後の米軍基地	828
第77話	コヤンスカヤからの業務報告 その1	839
第78話	米軍の妖精／人でなしの勇者	846
第79話	幕間 バルン・ファクター(1)	858
第80話	幕間 バルン・ファクター(2)	873
第81話	コヤンスカヤの業務報告 その2	890
第82話	スカウト	896
第83話	埋められていた天才	908
第84話	友人として	918
第85話	決戦1年前の新事実	926
第86話	ザイルの本音	940
第87話	作戦会議	952
第88話	宣戦布告	965
終章 全人類生存権剥奪戦争		
第89話	開幕	978
第90話	強襲	991
第91話	囀	1007
第92話	堕ちる王	1018
第93話	広い世界	1035

第94話	少年の選択	1049
第95話	新撰組 v s 旧藤丸立香	1060
第96話	大海原の砲撃戦	1072
第97話	艦長の奇策	1082
第98話	それぞれの守るもの	1089
第99話	詰め3手前	1098
第100話	宇宙戦争	1101
第101話	鬼殺し	1171
第102話	かなた	1128
第103話	異郷の魔術師、その後継者	1138
第104話	並び立つ大江山の鬼たち	1151
第105話	騙る少女の行く末は	1162
第106話	はるか	1175
第107話	だいすき	1188

# 前章 ワシントンDC 聖杯戦争

## 第1話 知人の頼み

――

「――これはもう聖杯戦争ではない――」

「かなり弱らせたと思ったんだが…アレで逃げるとはな」

左手の義手でアンチマテリアルライフルを支え、右手の義手で弾倉を込める

俺は…世界で最も規模の大きい犯罪組織のリーダーというだけであつて英雄でもなんでも無い、これからやろうとしていることに正義はあつても正しさは無い

「――聖杯は既に成つた、既に聖杯戦争は終了した、つまりこれはただの殺し合い、ただ邪魔なものを排除しようとする戦い――」

「…ク、クツ」

男の口から思わず笑いが溢れる

ああ、くだらない…唯一絶対の正しさなんてものは最初からこの世に存在しない、英雄だろうと悪魔だろうと持つちやいない、そのように出来ているのだから…だから俺は聖杯を取る。俺自身のために。

「…なあコヤンスカヤ、お前はどう思ってるんだ？」

「ええ、ええ、私は好きですよ？あなたのその考え方♡」

光の失われた黒い街に合わせた真っ黒なフルスーツの戦闘服を着



込んだアサシンのサーヴァント：コヤンスカヤはセミオートスナイパーライフルのスコープを調整しながら声を上げずに笑う

聖杯に対するその願い。誰でも分かるような浅ましくて単純な、昔からまつつたく成長していない人間を体現したその願い：ええ、とても♡

本当に愉快で、気を抜けば街中にその声が聞こえるくらい大爆笑してしまいそうな彼の願い、あの時彼との契約を続行した理由の1つでもある

それを知っているからこそまだ戦う、聖杯戦争が終了した今この時でも。

「…」

2人が敵の姿を捕捉したのはほぼ同時だったが、2人はそれを知らず、また知る必要もない。

「ん…」

居たな…やれやれ、もう少し注意してればアツサリ終わっていたハズーいや違うな、人間の俺が対サーヴァントでここまで戦える方がおかしいのか、加えて相手は『奴』、近い高さに引きずり落とすだけでも良しと考えよう。

男のスコープが敵を捉える。そしてその頭に狙いを定め、ゆっくりと微調整していく、確実に仕留めるために。

「ズイブンと移動したものですねえ…」

まあ今更驚くことも無いでしょう…ハア、なんかやたらとグダリましたね…こんなチンケな戦いだからといってケチったのは悪手だったようです。ここは素直に『彼』の評価を改めますか…すぐに意味は

無くなりますが。

コヤンスカヤのスコープが敵を捉えると同時に一瞬だけ彼女の手が震える。いよいよ終わるといふ喜びと悲しみ、それら全てを一旦心の隅に追いやり、引き金に指を掛ける

——二重に重なった銃声が街に響いた

↳

アメリカ合衆国 ワシントンD・C. とある寂れた鋳物工場にて…

「久しぶりだな、まさか直接アジトに来るとは思わなかったが」

「実を言うと少しばかり焦っていてね、2人だけで話をしたいんだが…こんな大勢に銃を突きつけられちゃ話もできない、なんとかしてくれないか?」

「ごもつともだ、悪いな」

義手になっている右手を挙げ、馬鹿護衛どもに銃を下ろし、ついでに指示があるまで部屋に入って来るなど命令を出す

9人の内8人が出ていったが1人は俺の決定に異議があるらしく俺を見据えて言った

「しかしボス! 正体不明の男と護衛も付けずに——」

「護衛が成り立つのは護衛が敵と護衛対象よりも強い時だけだ、お前は俺より強いのか?」

「す、すみません…」

とぼとぼと部屋を出て行く9人目

クソ、馬鹿どもが…俺に9人も回してどうする? そんな暇があるな

ら筋トレでもしている、その方がよほど有意義だ

とはいえ流石に全ての人員を一度には掌握できない、こういうことはどうしても起きる、メンツというのものもあるしな…

「見れば見るほど『英雄』だな、ザイル」

皮肉を言う魔術師殺し…もとい衛宮切嗣。

魔術師殺しの衛宮切嗣、知り合ったのは…この市警と真つ向勝負をしていた時だったか。

当時いきなり入ってきたコイツのお陰で市警が一瞬で爆散、増援の軍隊と戦わずに済んだのが記憶に新しい。

魔術と縁もゆかりも無い俺が魔術を知るきっかけとなった人物であり、彼のおかげでそれまで対策しようなかった対魔術師戦も（実際に戦ったのはかなり少ないが）かなり簡単に片付けられるようになった

それ以降彼との協力関係は続いている。

魔術師相手に現代兵器でどう立ち回るか、名門と言われる魔術師の家系についての情報などと引き換えに物資を手配したり仕事を手伝ったりとすることがあった

「英雄？はんつ、笑わせるな」

呆れつつ言葉を返す

…ここを正義の軍隊か何かだと勘違いしている民衆も、俺を指導者だ英雄だと騒ぎ立てる団員も、その言葉を鵜呑みにして同じように騒ぎだす奴らも、英雄なんて皮肉を言う魔術師殺しにも、ウンザリだ

こういう気分の際は寝るに限るが…引退したあの魔術師殺しが前触れもなくアジトに直接やってきたんだ、話を聞かないわけにはいか

ない

「これでいいだろう、なんなら盗聴器とか探してみるか？」

「いや、時間が惜しい…始めよう。」

随分と急いでいるな…何故だ？

「…で、話を始める前にだが…今一度確認だ、お前は誰に話をしに来たか分かっているか？」

今、衛宮切嗣がやろうとしているのは犯罪組織へ助力を求めることに他ならない、その意味を彼に確認する

「ああ、世界一の犯罪組織集団ウルフルズ…その『リーダー』に、だ』『ザイル』ではなく『リーダー』に、と来たか…なるほどな

「遮って悪かった、話というのはなんだ？」

「話が早くて助かるよ…ここで行われる聖杯戦争についてだ、椅子に座ってもいいかな？」

「聖杯戦争？ああ、お前が行ったという冬木市のヤツだな？それと椅子は好きにしろ」

ふー、と老人のように椅子へ腰掛ける切嗣を見て、少しだけ気になったが仕事には関係は無い、ひとまず気には止めておく程度にして先を促すことにした。

「そうだ、単刀直入に言ってその聖杯戦争に参加して聖杯を勝ち取って欲しい」

「おいおい…」

飛躍しすぎる話に思わず頭を抱える

「自分でやれば良いだろう、聖杯戦争において対魔術師ならお前の右に出てくるのはいない、そもそもここで聖杯戦争が行われる？」

なんの冗談だ、次の聖杯戦争は再び冬木市で行われるとお前自身が言っていただろう…根拠は？」

「無い、だが分かる」

「……」

全く予想していなかった答えとそれを即答した切嗣を文字通り叩き出そうかとも思ったがそんなことに意味は無いと判断して止める

「……つたく、話にならん…帰れ」

「頼む…こつちで頼れる人間は…いや、もう他に頼れる人間は居ないんだ」

「…切嗣、お前冬木の聖杯戦争が終わってから何があつた？」

「…」

俺も直接目の当たりにしたわけでは無いが聖杯戦争の重要性は知っている。

「願いを叶える願望機、サーヴァントを従えた7人の魔術師達が聖杯を巡って殺し合い、6騎のサーヴァントを退去させて最後に立っていた奴が自分のサーヴァント共々聖杯で願いを叶えられるという…つまり譲渡などではできないわけだ。」

「…とにかく、お前にどんな願いがあるのかは知らんが俺が勝ち残ったところで意味は無いだろう、一体お前の狙いはなんだ？」

「誰にも聖杯を使わせないこと、その一点だけだ」

「はあ？」

ますます意味が分からない、それなら尚更自分でやるべきだ。

例えば俺が聖杯を使わない、と首を縦に振ったところで聖杯を勝ち取った後俺がその約束を守るといふ保証はどこにある？それを考えていないわけじゃ……

…

「…お前」

頼む、と頭を下げる切嗣の顔を見て…驚愕した、以前見た時とあまりにも違い過ぎていたからだ

やつれている？いや、そんなもんじゃ無い、これではまるで死にか  
けの老人…

「聖杯を使わせてはならない、アレは災厄…呪いそのものだ」

…ハア

「…：…まず前提として聖杯に参加者として認められなければならな  
いんだろ、それはどうするつもりだ？」

「サーヴァントを召喚すれば良い、準備はある程度整っている。もつ  
とも魔術回路が使い物にならなくなっている僕じゃ、途中までしかで  
きなかったけどね」

魔術回路が…？相当酷い目にあつたらしいな…

「…他のマスターの情報は？」

「無い、だがまだ参加枠が空いているのは保証する」

きっぱりと言い切る切嗣に舌打ちしつつ次を促す

「ツチ…開かれる聖杯戦争の規模は？」

「分からない」

やれやれ…

「無い無いと簡単に言ってくれるな…まあいい、マスターになったと  
してどこに参加表明をすればいい？」

「聖堂教会から派遣されてきた監督役に言えばいい、場所はここだ」

切嗣が差し示したのはやたらと人口密集地にある1つの教会だっ  
た

「こんな街中に？」

切嗣の地図を手に取りまじまじと見る

神秘の露呈を恐れてもつと人のいないところを選ぶと思ったが。

「他に場所が無かったのか単にバレない自信があるのかは分からないがここで間違い無いよ」

…バレない自信、ね…一応覚えておくか

「…そもそも情報も無しにマスターに勝てるのか？俺が今まで殺した魔術師なんぞ比較にならない奴らが出てくるんだろう？」

「正面から『代行者』を子供扱いにできる君なら問題ないだろう」

あれは――

「正面から不意打ちをして殺される前に殺したただけだ、それに埋葬機関みたいなのヤバいのが出てきてもおかしくない、油断はできん」

魔術についてまだ理解が浅かった頃の話だ、当時は代行者という存在すら知らなかったからかなり危なかった…まあそれは今関係ない、次だ。

「触媒は何を使う？」

「触媒は…」

そこで黙り込む切嗣に俺は事態を察する

「おい、まさか――」

「すまない…用意出来なかった」

コイツ本当に俺を勝たせる気があるのか…？

「ハア…それはもういい、サーヴァントとの関わり方は？…そもそもサーヴァントは安全なのか？無いと思いたいが仲が険悪になったからといって襲いかかられちゃたまったものじゃない」

「普通のサーヴァントなら道具でいい、しかし相手が王や神、もしくはその存在に近いサーヴァントの場合は気をつける必要があるだろう、安全性はそれ次第だ。」

「自分のサーヴァントすら脅威になる可能性があるのか、やれやれ…」  
そんな奴が出てきたら令呪でとつと自害させて他のマスターからサーヴァント奪う方が楽そうだ…

「こんなところか、他に何かあるか？無ければ今すぐに召喚をしに向かって欲しいが…」

「最後に1つ聞かせろ。…………冬木で何があった？あの大災害の裏でお前は何を見たんだ？」

「それは…」

結局切嗣はその質問に答えることはなかったが…俺はそれを答えとして受け取り、マスターになる事を選んだ

…

とある山中…

「この辺りだが…ん、ここか？…なるほど、如何にも…つてところだな」

アジトから長いこと車を走らせて辿り着いたとある山…その山中で見つけた、ぽつかりと空いた洞窟の中へ入る…するとすぐに『それ』が見えてきた

巨大な陣…魔法陣というやつだろう、まだ完成してないようだ。

陣を見て周り、作業段階を確認する

魔力が行使出来ないに進まないところ…ここか。

貰った道具一式と右腕の義手を見ながら作業を再開。

俺に魔術回路は無い、あったとしてもゴミみたいなものだが…ようするに魔力を魔術として打ち出すことが出来ればいい。



義手で触れ、段階を進める

その結果がこの義手だ…もつとも、俺にはこれがどういう仕組みなのかよく分かっているが…まあ『アレ』は俺に対して嘘は付けない、使えるものは使っておこう

「…」

空港での別れ際に『ありがとう』と言った切嗣の笑顔が作業中、頭に浮かぶ

「…やれやれ」

かつて、あいつのいる場所では常に誰かが死んでいた、お花畑だろうがシヨツピングモールだろうが、数え切れないほどの敵と味方が毎日死んでいた

だが…ああ、その顔を見れば分かったよ、お前は誰も失わずに済む生き方を見つけたんだな。

「それが死にかけてからつてのがいただけねえが…よし、これでいい」

切嗣の資料と照らし合わせながら召喚陣を再確認し、詠唱の準備に入る

ここでコケたらギャグどころの話ではない、もう一度詠唱の確認を――

カッ

「…!?」ボンッ

普段から持ち歩いている俺専用のアンチマテリアルライフルを反射で前方に射撃、その反動を利用して後方に飛び退く

いきなりサーヴァント召喚のために用意された陣が光りだしたからだ。

なんだ…？まだ何も唱えちゃいないぞ…！

「ッ…」

手元のライフルを部屋の中央に向かって構える

「クソ、なんだってんだ……いつ!」ズキン

生身の左手に痛みが走り、銃を落としそうになったが堪える  
こいつは…

3本の筒が重なったような赤い刺青のようなもの…令呪が俺の左手の甲に刻まれていた、そして――

「あーらあら、と…」  
サーヴァント  
そいつは現れた

く

「あーらあら、と…」

周りを見回し、状況を確認する

出てきてみましたが…どー見てもカルデアには見えませんねここ。  
あ、そもそもカルデアに召喚されるのは有り得ないんですけどっけ、ワタクシうっかりしておりました??

それである人間は…

目の前にはワタクシを召喚したと思われる、銀の三つ編みを後ろで留めたガラ悪そーな男が片手で対物ライフルを向けてきていた

「んー…」

男の左手に一瞬見えた令呪と一応繋がっているパス…

ふむ、認めたくありませんがフライトジャケットにデニムとかいうダサイ格好の彼…ワタクシのマスターのようですね

「なんだお前は…痴女アホを召喚した覚えはないぞ」

加えて初対面の人物に対する、なっていないクチの利き方…ええ、

よく居るタイプの人間ですねえ

「これは申し遅れました??此度はワタクシを召喚していただき、ま・こ・と・に・ありがとうございます!

サーヴァントアサシン、タマモヴィツチ・コヤンスカヤ。誠心誠意、秘書として務めさせていただきますのでえ:聖杯を掴むその時まで、どうか宜しくお願いしますね?マスター♡」

ーーー

ーーーこれで:7人目、最後のマスターが揃ったーーー

## 第2話 参加表明

街の教会にて…

「ではここに7人目最後のマスター、ザイル・ニツカーの参加を本聖杯戦争監督役である私、エナ・アルバートが認めます。魔術師の誇りを汚すことの無いよう、アサシン…マタ・ハリと共に聖杯を目指しなさい」

「ええ必ず、ではこれで失礼します…行くぞアサシン」

「はいいただきます」

今若干ジト目になっている俺のサーヴァント、コヤンスカヤを連れて教会の外へ――

(で、ぶつちやけなんでマタ・ハリになってるんですワタクシ?)

――出ると同時にコヤンスカヤの声が頭の中に響く

テレパシー?こんなこともできるのか…

(ええまあ、パス繋がってますし?これくらいサーヴァントならできますよ?それでマスター?)

コヤンスカヤの念話を聞きながら缶コーヒーを片手に街を歩く

なんだ?召喚した時に『秘書兼スパイ』だとお前は言っていた、そういう意味ではマタ・ハリはいい選択と思うが?

…ああそうか

そもそも何故偽ったか、か?

(まー、そうですね…)

そんなの簡単だ

聖堂教会が信用できないからだ、それ以外に無い

(ほー?)

「…」

切嗣の参加した聖杯戦争ではアーチャーのマスターとアサシンのマスターが裏で手を組み、監督役はそれを罰するどころか支援していたらしい。公平であるハズの監督役がこういうことをしている時点で信用はゼロ、全て敵だと思っただ方がいい。

(なるほど)

そもそも冬木の聖杯戦争からロクに時間が経っていない：遠坂の当主は死に、アインツベルンもホームクルスを失った、マキリもマキリで送り込んだ魔術師を失い：いや、マキリは化物じじいが裏から出てくる可能性があるにはあるが。ほぼ無いと考えていいだろう。聖杯戦争で付いた傷跡は決して浅くは無いハズだ

聖堂教会としては聖杯は回収したいが表立って教会の人間を参加させるワケにも行かない、だから冬木では御三家の内の一つ、遠坂家と組んだんだろう：なら今回の聖杯戦争は？今回聖堂教会はどうすればいい？

(…)

言う事聞きそうなアホのマスターを探して手を組むことだ、他マスターの情報と引き換えに聖杯の力の一端を見せてくれ、とでも言っちな：あとは掠め取るタイミングを間違えなければいい

(いつの時代も人間は変わりませんねえ)

人間なんてそんなものだろう、まあとにかく当分は誰も信用しないことだ。：誰も、な

一画減り、残り二画となった左手の令呪を見てため息をつく

(あら、もしかして後悔してます？くだらない命令に令呪使っちゃっ

たなー、つて)

それは無いな、今もあの命令は役に立っているし、どちらにせよこの聖杯戦争で令呪に頼ることはもう無い、問題はない

(それはそれは！もし要らないんでしたら一画譲ってくださいませんか？魔力の塊をしてもせずそのままなんて非生産的ですよ？)

それはお前の働き次第だな？

(アナタ性格悪いですねえ…だったらせめてその労働の許可くらい出してくれてもいいのではありませんか？)

「…やれやれ」

↳

数時間前、切嗣の用意した召喚陣のある洞窟にて…

「…早速だが令呪を持って命ずる。アサシン、俺が許可しない限り俺の目の届く範囲から消えることを禁止する。」

「え、いきなり?」

左手の令呪が一画消え、一画分の魔力がパスを通過してコヤンスカヤに流れ込む

「んもー、ワタクシがいくら美人だからって独占されては仕事に支障が出ちやいますよ?」

「それで構わない、この聖杯戦争でのお前の仕事は聖杯を取ること。それだけだ」

長いことギヤングのボスなんてやっていると一目見ればソイツという奴がどんな奴なのかなんとなく分かるようになる、コイツの場合は…ああ、アレだ。『放置すると敵より厄介になるタイプ』だろう

「いやあのですね?その聖杯を取るためっていうのにそんな制限をされたらー」

「…」

説明不足だったらしい

「言い直そう、お前の仕事は『完成した聖杯を手に取り、俺に手渡すこと』だ、それ以上は望まん」

「えーと？それはつまり6人のマスターとサーヴァントをアナター人で相手する、ということまで？」

「当分はな」

サーヴァントを使って敵を倒さねばならない、なんてルールは無い。そしてマスターさえ殺せばサーヴァントは現界できない。ならばマスターにのみの絞れば俺一人でも充分戦えるだろう：アサシン<sup>コイ</sup>に頼るのは最終手段だ。

「まあ！マスターとそれにくつつくサーヴァント相手に生身単身で挑むなんて、アナタって勇者だったんですね！」

心底バカにしたようにアサシンが笑う

実際にバカなんだろう、魔術師の立場で俺の行動を考えればただの自殺行為だ、魔術師の立場で考えるならばな

「…」

聖杯戦争に参加するマスターとしてではなく、これまで多くの人間を見てきたギャングのボスとして感じるのはアサシン<sup>コヤンスカヤ</sup>は危険だという直感、何故危険なのか？それはまだ分からない、分からないからこそ頼るワケにはいかない

どれだけ窮地に立たされようとも自分の理解の及ばないものの力には頼らない、頼ってはならない、理解できないものの力を使うということは自分で考えることを放棄した逃避とほぼ同意義だ：だから義手の製作を頼むのはかなり渋ったし：それに、そういう意味では聖

杯を求める時点で間違つてー

『誰にも聖杯を使わせないこと、その一点だ』

「……」

一瞬切嗣の言葉が頭に蘇る

まさか…そういうことなのか？切嗣…

「でー、これからどうするおつもりで？」

「…まず参加表明をしに行く、その後は基本様子見しつつ他マスターの調査と物資の準備、後はー」

チラリと右腕の義手に目をやる

「…この『製作者』のところに行つて整備してもらおう」

頭を切り替えて洞窟の外へ

やれやれ…サーヴァントの存在を知った今じゃ『奴』が本当に製作者なのか怪しいもんだが…

く

時は戻り現在…

とある豪邸の一室にて…

「じいや、じいや！ボール遊びしに来たぞ！起きろ！」

「主人殿は激務の疲れを癒していらっしやる最中、邪魔してはなりません！」

「…」むくり

部屋の外から聞こえてくる喧騒に目が覚める

「えー！」

「『えー！』ではありません！私だって我慢しているのです！」

「…」

軽く身なりを整えてドアを開ける



「あつー！じいや！聞いて！ライダーが意地悪するんだ！」  
「意地悪などではありません！…主人殿、起こしてしまい申し訳ありません！」

孫娘のミラとライダーがやいのやいのと言ってくるのを宥めつつ言う

「いや、いい…丁度起きようと思っていたところだ…ミラと遊びたくてな」

「ホント!?!」

「あつ!?!ずるいです！私の方が先に約束してたんですよ！」

「ははっ、もちろんお前との約束も忘れてはいないさ」

右手でミラ、左手でライダーの頭を撫でる

「〜♪」

…ふ、こんな老ぼれのどごが良いのか…だがまあ、悪くはない

上機嫌の2人を連れ、庭へ向かう

「…!」

丁度その時、最後のマスターが揃ったという知らせが使い魔を通し、情報として頭に届く

「主人殿？」

「じいや？」

「…いやなんでもない、じゃあボール遊びをしよう、まず最初は誰が一番長くボールの上に立っていられるか勝負するというのはどうだろうか？」

「なるほど！流石は主人殿！私の得意分野です！」

「私だって得意だもん！ライダーには負けないから！」

だからこそ今は2人との時間を大切にしなければならぬ、明日自

分がどうなっているか分からないのだから…

「…ところでライダーよ」

「ハッ…なんなりと！」

言おう言おうと思つて言えなかつたが意を決して言う

「その…シャツを着てくれたことには感謝している、だがー」  
「？」

…

ライダーの着ている『さあ、血を吐くまで遊べッ!!』と日本語でプリントされたTシャツが気になつて仕方がない…召喚した時彼女の格好に問題があつたため『そのような格好はやめてくれ』と注意した次の日から着ているのだが一体どこから持ってきたのか…

…幸いなのは日本語を理解できるのがここには私だけということくらいか

「服は用意する、だからその、今の服はもう着ないでくれ」

「え、ええっ!?!…そんなあ」氣に入っていたのですが…

く

とある一軒家にて…

「ああっ!?!」

「ハイ勝ち、テレビゲームなんて生前には無かつたが…この手の物ならオジサン、多分負けなによ？」

彼…ランサーとの勝負はもう何回負けたか分からず、勝てない苛立ちもあつてのたうち回るくらいしかできない

「んがあああ!戦力差おかしいでしょ!なんでこっちの兵力の半分以下でそんな強いのだよ!?!」

「いやー、対戦相手がCPU?だったらこうはいかないだろうけど：結局のところ対戦相手をどう油断させるかで勝負が決まると思うんだな、オジサンは。」

画面の中でメラメラと燃えるドット絵の城を見ながら笑うランサー

「ああもうー…ハア、ゲームの上手いサーヴァントなんて居るんだ…」「オジサンの場合、ゲームが上手いというよりこういうジャンルが得意なだけなんだよ」ちよつと煙草吸ってくる

上機嫌でベランダに出るランサーの後ろ姿とテレビ画面を交互に見てため息をつく

だからっていきなり始めてあっさりユーザー全国ランキング1位をキープされちゃたまつたもんじゃないわよ…知らないだろうけどあなた今ユーザーの中じゃ有名人よ?良くも悪くも…

腕はいいのにユーザー名のせいで一部のギリシャ神話を愛する方達から猛烈に批判されてるのよね、そのユーザー名というのが『アキレウスはクソ』『アキレウスは野蛮人』『アキレウスアンチ』『アキレウスウンチ』

こんな感じで色んな名前を付け替えて遊んでいる…

「…」汗

嫌いすぎじゃない…?いやまあ彼の真名を知っている身としては分からなくも無いけど。

余談だが批判しているギリシャファンとは別のギリシャファンからチャットでちよくちよく真名を呼ばれている、もちろん向こうはサーヴァントなんて知るわけ無いから単に呼びたくて呼んでるだけだろうけど

「ん」

使い魔に反応が…？

確認してみると…

「…ランサー！今いい？」

「どーした？」

ぐりぐりと煙草の火を消しながら戻ってくるランサー

あ、アレ2本目に火を付けたばかりだ、悪いことしちゃったかしら

…

しかしまあまた後で買ってあげればいいと思い、話を続ける

「7人目最後のマスターが揃ったらしいわ、残念だけどゲームの時間はここまでね。」

「ん、そうか…んじゃオジサンのアキレウスアンチ活動はしばらくお休みだな」

それはもういいから…汗

く

米演習場特別区画内、居住区にて…

「おいバーサーカー、話がある」

コンバットナイフを収納し、部屋の奥で武器の手入れをしているであろうバーサーカーを呼ぶ

「どうしたマスター？」

「情報だ…最後のマスターが揃ったらしい」

「そうか、じゃあ…出るか？」

「いや、まだその時では無い、情報が皆無だからな…しばらくは様子見と行くつもりだが…お前はどうしたい？」

バーサーカーに意見を聞いてみる…幸いなことに彼はバーサーカーのクラスに当てはめられているが理性はしっかり持っている、そ

れどころかその知性は普通の人間と比べて群を抜いて高い、その彼に意見を聞くのは間違いでは無いだろう

「情報を得るなら全く動かずにいるのはあまり勧めないな、大なり小なりの波を誰かが出さなきゃならねえ」

「そうだな」

結局様子見といっても誰かと誰かが戦い始めなければ様子見もクソも無い

「だから俺たちがその波を起こすべきだと考えている」

「敵に手の内を明かすと?」

「ああ、俺たちによつて都合のいい明かし方でな」

「:分かった、また後でその作戦を聞こう、時が来るまで今は休め」

「ああ、そうさせてもらおう」

例え理性があろうと彼はバーサーカーのサーヴァント、現界するにも他のサーヴァントより多くの魔力を使う、それを押して波を立てる側に回ろうと言った彼には何か考えがあるのだろうか

バーサーカーが引つ込んだのを確認し、仮眠室に入り横になる。

何が何でも聖杯は手に入れる、誇りある祖国:アメリカの為に!

く

とあるビジネスホテルにて:

「これは魔術師の家系だからとか才能があるとかそういう次元じゃないでしょ...もう一回聞いわ、どうやったのよ...?」

「こつちが聞きたいよ!」

信じられない物でも見るかのように姉さんが私の顔を覗き込む

いや、私だって信じられないんだけど。

「ともかく呼んじやったものは仕方ない、やるからには勝ちなさいよ

？」

それだけ言って姉さんは部屋から出て行く

そりゃ私も勝つつもりだよ、だってあんなカッコいいサーヴァントを召喚したんだから勝たなきゃウソつてもものだよ？

そんなことを考えていると部屋の奥から扉の開く音がし、トイレから大男が出てくる

「あいでっ！またドアに引っかけちゃった…な！マスター、ここ狭いし拠点は他のところにしない？」

「しない。もうお金払っちゃったし。」

ばつさりと一刀両断する私に、げえーマジか…と分かりやすく落胆するアーチャーのサーヴァント

「…」

ある日偶然見つけた正体不明の地下施設の入り口、興味本位で潜入した私はその奥での召喚陣を見つけた

誰が用意したのか分からない、ただ興味本位で手をかざしてみた、それだけだった。気付けば私の右手には令呪が刻まれており…

「ふあゝあ、暇だな…」

彼、アーチャーと契約していたのである

「最後のマスターがまだ揃っていない、もう少し待ってよ」

「あーうん、それはいいんだが…丁度いいからマスターに話しておきたい事があつてな？マスターとサーヴァントって関係以前に、さ」

「…？…何？」

初めて見る彼の真面目な顔に思わず背筋が引き締まる

「俺は…イヤ、うん…俺と付き合わない？w」

「…」

パキンと世界が割れる音が聞こえた気がした

「あつ、やっぱダメ？でも暴力はヤメテー」  
がつし

「あつ」

私の顔より大きなアーチャーの手を両手でがつしりと掴む

「是非。」

…

マジで!?!いいの!?

いいよ!?!

く

???にて…

「クソツ…!何故だ!何故…がつ…は…!」

「マスター!」

戦いと呼ぶには一方的過ぎる戦局に狼狽える、とあるマスター…本来どのクラスのマスターも余程のことがない限りこんな序盤から前線には出て来ないし、彼の使役するサーヴァントのクラスを考えれば尚更だ。そんな彼らがこうして直接対決の場にいるのは何故か?彼女達に引きずり出されたからに他ならない

「そのクラスのサーヴァントを召喚したのが運の尽きさ、恨みどころかキミのことなんて全然知らないけどここで死んでくれないと困るんだよねー」

ごめんねー、と少しも謝罪の気持ち伝わって来ない顔で謝る白衣の女性、その右手には確かに令呪が刻まれている

「モタモタするメリットも無いし…キャスター?頼める?」

「えー、ここで？気は進まないんだけどなあ…まあキミの頼みだ、仕方ない」

ため息混じりにキャスターが杖を掲げる

「なんでだ!?こんな…！話と違うぞー！お前たち聖堂教会に協力すれば必ず勝てると…！アルバートーギーやあああつ?!?!」

「マスターーきゃあーっ！」

サーヴァント共々、悲鳴ごと消し飛ぶ…そしてー

「…ああ、どうするのかなコレ」

残ったのは30分前まで使っていたハズの研究資材、それが見るも無惨な姿で…

あー、コレは2度と使い物にならなそうだね

「まー、新しいのは発注してあるし大丈夫大丈夫！」

「それ以前にキミはもう少し物を大事に扱っておくれよ？コレらを開発したのは私じゃないが…だからって気分の良いものじゃないからね？」

ごめんごめんととりあえずキャスターに謝り、さっきのマスターから奪った端末を開く

「んー？」

目に映る文字の羅列

「あつ？ああつ?!」

待ち望んでいたもの

「ひーっやつほーいっ!!!キタキタキタキターツ！我が世の春がキターツ！」

卍。 ▽。 ) 卍 ドルルルル

それが遂に来た！

「おっとー？もしや、もしやもしやー？」ニヤニヤ



若干不機嫌だったキャスターの表情が一転してイタズラっ子のよ  
うに変わる：が、そんなことは気にならない

「そうーそうなの！えっへへへ…」

最後のマスターが遂に揃ったという内容、だが重要なのはそこでは  
なくー

『マスター名 ザイル・ニツカー サーヴァント真名 マタ・ハリ』

「ザイルっ♪ザイルっ♪ザーイールー♪」

「キミ本当に彼のことが好きだね…」

「もっちろん大好き！えへへ…彼がこの聖杯戦争に…うん！踊ろう！  
飽きるまで踊ろう！とりあえず！」

しかしまあこんな場所で、サンダル履いて踊るなんてことをすれば

…

ゴス！

「ポギヤーツス!?!」ビョーン

早速小指を何かの角にぶつけ、痛みのがあまり飛び上がり、そし  
てー

「あつ、そこは…」

「ひよっ…あつ」

運悪くサンダルが空中で脱げ、さらに運の悪いことに着地点には  
むき出しになったコンセントの先端がー

ズシャ！

「(。◇。 )ホアアアアアオオツツ!!?!」

………地下施設にきつたない悲鳴が響く

「…あー、大丈夫かい？生きてる？」

「わ、私はもうダメだ…ザイルに…愛してるって…伝え…て…」ガクツ

力尽き、私は生き絶えた…

「あ、ザイルくんだ」

!!!

「どこどこどこ?!?ザイルどこ?!?」

…?」

あたりを見回しても酷い有様の研究室が見えるのみ…ということ  
は——

「嘘だよくなーんだ、元気じゃないか、良かった良かった」

「ンモー、キャスターったら!お尻叩くよ!?!」

魔術でバリバリに強化した黄金のハリセンを瓦礫の下から取り出し、キャスターのお尻に狙いを定める

「わあっ!ごめんごめん!ちよつとした悪ふざけ——」

「問答無用オ!オラア!」ドタドタ

「わああっ!?!お助け〜」バタバタ

〜

——起こりえないはずの聖杯戦争が多数のイレギュラーを交え、開幕する。『2人』には今のところ自覚は無い…が、そう遠く無い未来2人は気付く。

この聖杯戦争の中心は聖杯でも教会でも無く——

「行くぞコヤンスカヤ」

「ええ、ただちに♡」

——自分達である、と——

### 第3話 聖杯戦争における1回目の戦い

鑄物工場改めウルフルズアジトにて…

「…よっ」

普段から持ち歩く対物ライフルも、今回は置いていく。

一応分解、折り畳みすれば持つていけるが街中で使うメリットは無

い

ナイフとハンドガンという最低限の装備だけ持つていく

サーヴァント相手にこんな物役に立ちはしないだろうが…まあ敵マスターの頭を撃ち抜く分には問題ない、あとは…閃光弾とリモコン爆弾も持つていくか

「…それにしても遅い」

着替えに行ったコヤンスカヤがまだ戻ってこない、パスと発信機のお陰で隣の部屋にいるのは分かるが…

「なにをしているんだ…」

召喚した際のコヤンスカヤの格好…ルパン3世の峰不二子にでも影響されたようなあのライダースーツの格好で外へ連れていくわけには行かない、目立つというのものもあるが…

ん、

コンコンとノックの音と、ここ最近よく聞く部下の声がした

「入れ」

「失礼いたしますボス！…？あの…」

「コヤンスカヤならこの部屋には居ない」

「え、あ、その…何故分かったんですか？」

呆気にとられる部下…バルンに思わず頭を抱える

「こう休みがとれるたびにやって来ていればイヤでも分かる」

そうこれだ、俺の知らない間に組織の中でコヤンスカヤファンクラブという意味の分からんグループが出来上がっている。

コヤンスカヤは外見だけで言えば絶世の美女だ。その上でそれ違った団員全員に対し、胸焼けするような笑顔で自己紹介をする。『お初にお目にかかります??ワタクシはコヤンスカヤ、この度ザイル様に雇われました使用人です??以後お見知り置きを♡』という意味のわからない挨拶をあの痴女丸出しの格好でな

…ちなみに今俺の目の前にいるコイツがファンクラブ会長らしい

「そう、ですか…あはは…」

「…」

とはいえ仕事に支障は無い、それどころかファンクラブ会員を中心に団員の士気が上がり、結果として仕事効率が上がっている、だからこそファンクラブを解散させろとは言えない、士気に関わるからな…

霊体化させることも考えたがコヤンスカヤは少々特殊なサーヴァントらしく、霊体化できないと言っていた、耳と尻尾は隠せるようだが…もちろん奴の言ったことだ、本当は出来るかもしれないが確かめようも無い。

面倒なことだ…

「で、では私はこれで…」

「ん、待て」

バルンの右手に一瞬気になるものが見え、そそくさとバツが悪そうに部屋を出て行く彼の左手を掴む

「ボス？」

「…その右手の包帯、どうした？」

「え？ああ、これは先日の戦闘で少し負傷してしまいました…」

…

「見せてもらっぞぞ」

まさかとは思うが万が一のこともある、若干嫌な顔をするバルンを無視して包帯を取ると…

「…ボス？」

…！

…痛々しい火傷を負ったバルンの右手が露わになる

あー…少し過敏になり過ぎたか

「いや、すまなかった…俺の勘違いだ、ホラ変わりの包帯だ」

「…？はあ、ありがとうございます…？」

狐につままれたような顔をしたバルンはそのまま部屋の外へ。…  
そうだ、狐といえばー

「おいコヤンスカヤ、まだか？」

「乙女の身だしなみに焦りはNGですよ？ですが丁度終わりました  
♡」

小部屋から上機嫌で出てくるコヤンスカヤ、格好は…なんだ？あー  
…金持ちのボンボンみたいなの…

「やれやれ…」

まああのライダースーツよりはマシだろう、と半ば諦める

というか時間がかかりすぎだ。本当に勘弁してほしい、何故着替え  
だけで小一時間もかかるのか…

「あー今『何故着替えだけで小一時間もかかるのか』とか思いましたね  
!？」

ああそうだな、何故だ？と聞こうとしてやめた、聞いたところでも  
た無駄に時間を使うだけだと思ったからだ

「…着替えたのならさっさと行くぞ」

「凶星！凶星ですね！あなたって以外と分かりやすー！ピギヤーツ！？」

透明になっている尻尾をがっしり掴み、机の上のスタンガンをそれに押し当てた

「わ、ワタクシのふわふわもふもふのしっぽがこんなトゲトゲに…こんなのパワハラです…！うっうっ…」

「…次無駄な時間を使わせたならその尻尾に火を付ける、いいな？」

透明で見えんが…くしゃくしゃになった尻尾が数秒で元に戻るのは着替えを指示した時に確認済み、スタンガンのダメージも入っていない、無視でいいだろう

こうして涙目になり、静かになったコヤンスカヤを連れてアジトの外へ

「はあ…それで、どちらへ向かうのです？」

「ナショナル・ギャラリーという美術館だ、そこに義手の開発者がいる」

コヤンスカヤと共に俺は美術館を目指した

その、途中ー

「いきなり、か…」

付近に感じる今まで感じたことのない魔力ーいや、神秘の気配というべきか？…恐らくこれが切嗣の言っていた『サーヴァントの気配』だろう

戦場で遭遇した魔術師と似たような気配だが濃さは段違いだ、まともにもやり合えばまず負けると考えていいだろう

「おやっ…どうされましたかマスター？」

その声に振り向いた時に一瞬、ほんの一瞬だがコヤンスカヤの嫌な笑みを見た気がする…いや、実際には笑っていないのだろうがその態

度がそう見せる

「どうもしない、無駄口を叩かないで黙って歩け」

「はーい♡」

恐らくコヤンスカヤは分かっている、近くにサーヴァントがいる事がーとすると面倒だ、サーヴァントが探知できるというのなら向こうのサーヴァントもこちらに気付いていると見ていいだろう

「…」

美術館へと続くそこまで人の居ない大通りを歩きながら思考を巡らせる

あと確認することはマスターと行動を共にしているかどうか、この一点だ。それさえ分かればやるべき事が明確になる。逃げるか、排除するか…

「やれやれ…」

サーヴァントの気配は離れていない、間違いなく追ってきている…やるか

近くの売店に入り、缶コーヒーを2本購入してすぐに外へ

「あら？もしかしてワタクシの分も？ありがとうございます♡」

何か言っているコヤンスカヤを無視し、店を出ると同時にフタを開けて缶コーヒーを1本飲み干す

あー…苦いな、缶の紅茶でも有れば良かったんだが

だが無いものは仕方ないと割り切り、空になった缶の中に10セント硬貨とレシート、店の壁に貼り付いていた『ソレ』をねじ込み、そのままポイ捨てる

「うわあ…何やってるんです？」

「今に分かる、さて…」

今度は後ろから見えないように2本目の缶コーヒーを開け、そのまま飲み干す

え、2本目飲むんですか？ちよつとヒドくないですかソレは…ワタクシの分は…？とか聞こえるが当然無視…さて、ここで分岐点だ。音は…

「…」

…

「…」

…

歩きながら耳を澄ませる、そしてー

「…」

カランツ…

…！よし。

確定だ、後ろにはサーヴァントとそのマスターが付いてきている  
後は仕上げだな…

近くの角を曲がり、俺はそのままホームレス達がたむろしている路地裏へと入った…

数分前、ランサーのマスター視点

「やめた方がいいと思うけどなア」

「大丈夫でしょ、こっちは敵のサーヴァントの位置も分かってるわ！  
追いかけるわよ！」

気乗りしないランサーを強引に説得し、先程見つけたサーヴァントとマスターらしき人物を追う



「奴さん達もオジサン達が追いかけてきてるの分かってるんじゃないかな…？オジサンがああのピンク髪のねーちゃんをサーヴァントだつて分かるように向こうも…多分さ」

「大丈夫よ、一度でも顔を見られた？」

「…そんなの分かりっこないでしょ」

まーそうなんだけど…

正直なところ方が一、向こうがサーヴァントをけしかけてきてもらンサーが居るから安心して、というのはある。

何せ私が召喚したのはあのアキレウス相手に延々時間稼ぎが出来るような大英雄だ。倒すことは出来なくても不意打ちは効かない、と本人も言ってくれてるし最悪危なくなったら令呪を使ってここから離脱させて貰えばいい。逃走を考えるのは敵サーヴァントの姿が消えた時だ

「まーオジサンが守りに入る以上、相手がアサシンだろうと指一本触れさせないって自信はあるんだが…それでもなア」

「しっ…コンビニに入ってたわ」

追っていた2人がコンビニに入って行…ったかと思うと割とすぐ出てきた、手に持っているのは…缶コーヒーが2つ？

ということを買った方…男の方がマスター？いやいや、そう思わせる作戦なのかも…おっ？

「あーあ、悪い大人ね！」

男の方が缶コーヒーを飲むや否や空になった缶に何か…レシートみたいなものが見えたから多分ゴミ、を入れてそのままポイ捨てしてしまっただけ！

「あーいうふうにはなりたくないわね…じゃああの缶を回収しましよ  
う」

こんな形で敵マスターの痕跡が手に入るとは…

「待ちなつて、ソレ罨だつたりするかもしれないしオジサンが貰うよ」  
「ランサー？流石に私もバカじゃ無いわ、それくらい警戒してるわよ？」

その空き缶には魔力反応は一切感じられない、例え超一級のキャスターのサーヴァントが細工をしたとしても魔術で触れた以上神秘の痕跡は残るものだ。それが無いと言うことは文字通りただのゴミなんだろう

持ち上げるとカランと変な音が缶の中から聞こえた

「ほら、なんか入ってるよ、悪いこと言わないからそのまま捨てよ？な？」

「もー、心配症ね」

中からは何も感じない、魔力、呪力、生き物の気配、何一つ。

だから後悔した、軽い気持ちで缶をひっくり返したことを。

「さーて何を捨てたのかしら？えーと…レシートと…うん？10セント硬貨？音はこれだったのかしら？まだ入ってるわね…うーんと…取りづらいな、何だコレー」

レシートと10セント硬貨に続いて3つ目のものがポトツと靴の上に着る

…つてコレ！

「ゴキ〇リ!!?きやつ!!」

慌てて振り落として後退り！

「んー、コレただの死骸だな、パツと見た感じ特になんにも無さそうだが…うん、普通に悪質だなア」

躊躇なくつまみ上げるランサーに尊敬の念を抱きつつ、あたりを見

回す

「あいつらは…?」

「それならさつきその路地裏に入って行ったが…マスター、やつぱり止めよう、こりや警告だぜ多分。」

警告かあ…うーん

「いや追いかけるわ、ここで退散したら○キブリ如きにビビって逃げ出すへっぽこマスターだと思われるし!」

「いやオジサンとしてはむしろそういう風に見られるなら好都合だと思うんだが…ハア、まあいいか…だが俺から離れるなよ」

「分かってるわよ」

サーヴァントの気配はまあまあな速度…早足程度のスピードで私たちから離れて行ってる。キャスターでも無い限りこんな遠距離での攻撃なんて無いだろうし、そもそもキャスターのサーヴァントなら表には出てこない。

アーチャーのマスターとは既に同盟を結んでいて今は休戦状態だ、攻撃の心配は無い…それを分かった上でランサーも許してくれたんだろう

などと思いつつ路地裏へ入る、そこに敵マスターは当然居なかったが…

「…ちよつと、何ガン飛ばして来てるのよ…?」

浮浪者…5・6人のホームレスが向かって左側の壁に固まっただじつと私を見てきている…

あー、ね?私も一応ちゃんと(多分ある程度は)歴史のある魔術師の家系で育ってるけど別段裕福ってワケでも無いからさ、そういう目で見られても…

なんとなく見づらくなってホームレスから視線を逸らしても彼らはじつと見てくる

い、居心地悪い…

「なあ君たち、オジサンの連れが困ってるからそういうのはやめてくれないかな？」

察したランサーが間に入って注意してくれたがホームレス達は止める気配が無いのでランサーの陰に隠れながら路地裏を進む

「はあー…なんだか腹立ってきたわ…」

まだ何も始まっていないというのにゴキ〇リ至近距離で見ちやうわホームレスに見つめられるわ…

ホームレスと少しゴタゴタしていたせいで敵サーヴァントの気配はさらに離れてしまっていた

「なあ、マスター」

「分かってるわよ…」

これは追い付けないわね、走るのを目立つし…

「しょうがない、今日は帰るわよランサー」

「最初からそうすりや良かったんだよなあ」

ランサーの独り言を聞き流し、ため息をつく

「ハア…あー、もう！初っ端からこんななんて嫌んなっちゃうわよ！」

ホームレスがたむろしている壁とは反対側の壁付近にあった空き缶をイラつきを紛わすために思いつき蹴飛ばした

「……その、瞬間だった

「……え」

ボテリと背中が地面につく

あれ、なんで、私、倒れた、の？

なんだか煙も、上がってるし…

「……………」

立ち登る煙を見上げる私、それを覗き込んで何か叫んでるランサーの顔が見える

「ランサー、どうしたの？よく、聞こえないわよ、何故だか、分からないけど、耳がキーンって、なっちゃって、なにもー」

ともかく起きあがろうとしたが…足に力が入らなかった、いやー

「ーあ」

力を入れる足が無くなっていた

く

ザイルサイド

「おや？」

「…よし」

さっきの路地裏の方から爆発音が聞こえたのを確認し、張り詰めた気を少しだけ落ち着かせる

「さっき空き缶に入れたりモコン爆弾ですか？」

「正確に言うなら衝撃や物体を感知して爆発する地雷だ。一応遠隔操作できるが…」

「ふむ、ゴミも使いようですねえ」

「ああ、人間イラついてると物に当たるヤツは多い、それがプライドの高い奴なら尚更な」

魔術師の連中はどうも強いやつほど魔術に対して誇りとかそういうものが高い傾向にあるようだ。切嗣の話にあったエルメロイみたいな奴がわんさか居るといふ感じだろう…ここまでカンタンに引つかかるとは思っていなかったが。

「1つ目の缶の中にコインを入れて拾われるかどうか音で確認…まあサーヴァントは余程物好きで無い限り空き缶なんて拾いませんし、マスターの存在を確認するにはいい方法だったかと、そして虫の死骸も入れて挑発、次に物乞いへ金を渡して命令…その物乞いから離れるように移動すると足元には爆弾入りの空き缶…ワタクシが言うのもアレですが貴方中々な性格してますねえ」あの坊主とは気が合いそうですが。

「ただ人間について知っているだけだ。性格は関係ない、アジトに戻るぞ」

「おや？義手の開発者とやらに会いに行かれるのでは？」

「…しばらくはアジトで様子見だ、まさかいきなり敵に遭遇するとは思わなかったからな」

爆発現場には既にウルフルズ団員を2人派遣し、15秒ごとに状況報告をさせている。最新の報告は『右手の甲に赤い刺青を入れた女性の両足が消し飛んだ』とのことだ、マスターなのはほぼほぼ間違いないだろうが…確認すべきはその後だ、そのまま死ぬのか…もしくは蘇生するのか、知る必要がある。

死ぬのならそれでいい、だが蘇生できるとなるとやる事が一気に増える。

「数日様子を見るぞ」

「ええ、分かりましたマスター♡」

「…やれやれ」

常にこうありたいもんだな…

この聖杯戦争にて経験した1度目の戦闘は…敵の顔すら知ることなく終了した

∴  
残り5名∴  
?

## 第4話 様子見／調査

アジト、ザイルの自室にて…

「……以上が報告となります」

「…そうか、分かった。夜通しご苦労だった、しばらく休むといい」

「ありがとうございます、ボス！」

報告を終えた部下2人はピシッと敬礼の動作をしてから部屋を去る

「やれやれ…」

「ここは軍では無いと何度言えば分かるのか…」

「しかしまあ…」

苦労して軍から引き抜いただけあって有能だ、先日空き缶爆弾で吹き飛ばした女の詳細が事細かくまとめられている

「ツチ、やはりそう簡単には死なないか…」

「ハア…コヤンスカヤ、コーヒーを。」

「はい、こちらに♡」

ちなみに現在コヤンスカヤには最低限の身の回りの雑務、具体的には掃除や洗濯、武器整備に加え、聖杯戦争関係の資料整頓をさせている。

本来働かせるつもりは無かったのだが…まあ、色々あったんだ。

…時は巻き戻り、敵マスターを爆破したその夜…

「…」カチカチカチ…

薄汚い自室…一人机に向かい、自分で入れた不味いコーヒーを飲みながらひたすらキーボードを叩く

切嗣から受け取った冬木の聖杯戦争に関する資料…その確認がま



だ終わっていない…

征服王イスカンダル…こんな規格外のサーヴァントもいたのか、しかもそれを打ち負かすサーヴァントの存在…やれやれ、頭が痛い…

もちろん頭の痛い原因はそれだけでは無い

「あのーマスター？ワタクシに仕事はー」

「聖杯の受け渡しだ」

アジトに戻ってきてからと言うものコヤンスカヤから仕事は無い  
か、と催促が来るようになった

…何故急に言い出したのかは知らんがどちらにせよ任せることは  
無い

「ですから！それ以外で普段お役に立てることは」

「俺一人で済む、必要無い」

突っぱねるがそれでもコヤンスカヤは尻尾をふわふわと振りなが  
らズイズイ来る

「マスター！サーヴァントは言わば使い魔のようなもの！（ホントは  
違います）どんな些細なコトでもよろしいのですよ？」

やれやれ…

「…そうか、じゃあ一つ仕事を頼む。窓の外を見ろ」

「…はい！かしこまりました♡それでワタクシは何をすれば？」

トトトト…と素直に窓付近へ小走りで駆け寄るコヤンスカヤ

「今雨が降っているな？」

「ええ、降っていますね」

窓の前に立つ彼女に命令する

「降っている雨粒を数えてろ、そして話しかけるな」

「ハイ♪雨粒を数えー！は？」

「…」カチカチカチ…

「…」フリフリ…

カチカチとキーボードを叩く音とふわふわと揺れる尻尾…

「…」カチカチカチ…

「…」フリフリ…ピーンッ

少しの沈黙の後、コヤンスカヤの尻尾がビシツと立ちー！

「つけんじゃねーんですわ！ワタクシを召喚しときながら仕事は無い、と!?! 貴方初対面の相手に対して最も嫌がることをやる天才ですか!?!」

狐のキンキン声が耳と頭に響く

「おい、うるさいぞー！」

「シヤラップッ！黙ってワタクシの話を聞けってんですよ！っーかなんですか!?!ワタクシの存在意義全否定ですか!?!エエッ!?!あの令呪のせいで現職場はここしか無いというのに!」

「…」

…信じられないがコイツ本気だ、仕事ができないことに対して本気でブチ切れている

「ワタクシは有能な美人秘書ですが働く機会が無ければ宝の持ち腐れ！いいですかマスター？ワタクシを召喚雇用した以上は責任を持って！仕事を留意してくださいませ！」

「…分かった」

…

…時は戻り現在…

「マスター…資料、まとめておきました♡」

「ああ、そこに置いていてくれ」

…仕事が無いだけでここまで騒ぐとは思わず、つい許可を出してしまつたが…意外にも悪くない…いや、かなり助かっている

まず資料の整頓だが…コヤンスカヤは俺が読みやすいよう、10分程で整頓してくれた。具体的にはセイバーのサーヴァントについてならこのファイル、ライダーのマスターについてならこのファイルといったようにな

次に掃除や洗濯についてだが…コヤンスカヤ曰く、この部屋もマスターの服装も、仕事をするような環境ではありません!とか言つてかなり張り切っていた、結果としてほぼ廃墟のような部屋はまるで新築同然にリフォームされ、一体どこから取り出したのか分からんが道具を使つて壁や床のような内装まであつという間に修繕してしまつた

服も…多分クローゼットの中のどれかを洗濯したんだろう、あつという間に洗濯も終わらせて着替えるように強要された…綺麗な服に綺麗な部屋…正直落ち着かない、掃除と洗濯は自分でやるか…もしくは加減させないといけないな

次に武器整備だ、ここが1番助かっている…と言つていいだろう

当たり前の話だが装備は使わなくても劣化するし、使えばその劣化が早まる。それを少しでも抑えるために整備をするのだが俺の武装は殆どが対神秘にも使えるようカスタムした専用銃だ、魔術にある程度理解がある者でなくては難しい。

「マスター…こちらのライフル、お手入れしておきますね♡」

「ああ」カチカチカチ：

組織内で俺以外に整備できる人物が居なかったからな：

コヤンスカヤが整備に入ったおかげでそれに割く時間を節約できたのはかなり大きい

「…」カチカチカチ：

魔術、神秘の塊であるコヤンスカヤサーヴァントがなぜ銃火器に深い理解を持っているかは分からんが…こうして片手間に見ても特に細工等をするわけでもなく、『アレ』が作ったマニュアルを見ながら黙々と銃や弾丸の整備をしている

得体の知れない奴だが自分で言うだけあつて有能だということも分かった。今は大したことはさせていないが、しっかり使いこなせれば強力な柱になるかもしれない

…もつとも、頼らないのが一番なんだが

コンコンと扉から聞こえるノック音にコヤンスカヤが即座に答える

「はい、どちら様でしょうか？」

「バルンです！失礼いたします！」

「あらバルンさん？またお会いしましたね！」

「こ、コヤンスカヤさん！…と、いけないいけない、ボス！頼まれていたものができました！」

…思ったより早かったな

「そうか、そのままコヤンスカヤに渡しておいてくれ」

「了解です！」

ポストとバルンが手に持っていた封筒をコヤンスカヤに渡す

「へ？あの、なんですか？コレ」

「え？通帳とハンコですよ？コヤンスカヤさんもここで本格的に働き

始めたなら必要になるでしょう」主に給与の支払いで使われますので。

「あー、そういうコトですか、じゃあコレは受け取っておきますね」

意外にもアツサリそれを受け取るコヤンスカヤに少々面食らう

まあ働かせる以上、相手が何であろうと賃金は出さないと

：コヤンスカヤが金なんか使うとは思えないがとりあえず通信販売の使用は許可した。もちろんアジトに直接届けさせるわけにはいかないのです、コヤンスカヤが通販を使用した時はバルンの自宅に送ることになっている。バルンも同意済みだ

「ではこれで、失礼します！」

バルンが部屋を去ったのを確認し、席を立つ

「おや？マスター、休憩なされますか？」

「いや、休憩はしない。だが資料は一通り目を通したからな、今から別のことに取り掛かる：整備はどんな状況だ？」

ひとまず装備の整備状況を聞く

ライフルだけでも終わっていれば良いが：

「ザイル様専用アンチマテリアルライフルと対マスター用の特殊弾12発のみ終わっています、後1時間ほど下されば全ての装備の整備が完了しますが…」

「いやいい、残りは終わった後だ」

特殊弾の入ったケースとライフルを取り、支度を始める

「先日爆弾で吹っ飛ばした敵マスターについての資料だ、目を通せ」  
支度をしながら机の上の小汚いファイルをコヤンスカヤに投げる

「では拝見させていただきます♡ふむふむ…即死はしなかったものの、寝たきりでマスターとしてはほぼ機能していませんね」

「ああ、医療班が言うには足の他に腰…？脊椎…？だったかにダメー  
ジが行ってる可能性が高いそうで起き上がってくる危険性は無いら  
しいが…」

「…しかし令呪が消えていない、と」  
「そうだ」

送られてきた写真には両足を失った女性がとある病室の一室でよ  
く分からん機械に繋がれて寝たきりになっているものだったが…右  
手にはしっかりと令呪も確認できている

…つまりコイツはまだ敗北していないということだ

「後始末だ、ついて来い」

「ええ、もちろん♡」

俺が支度を終える頃、コヤンスカヤもいつの間にか支度を終えてい  
たらしい。俺はそのままコヤンスカヤを連れて部屋から出る

さて、どう始末するかな…

「場所は変わり、とあるビジネスホテル、2階、突き当たりの一室  
にて」

「これでよし、と…ランサー？もう実体化しても良いよ」

細工を終わらせ、霊体化しているであろうランサーに声を掛ける  
「つと…イヤア済まないね、わざわざ場所作って貰って」

申し訳なきように頭をかきながらランサーが私達の目の前に姿を  
現す

「…顔色わりいな、大丈夫かよ…？」

ランサーの姿を見たアーチャーが真っ先に言う

…確かにランサーの顔色はちよつと悪い、それは気分とかだけで無

くマスターからの魔力供給が弱まっていることも関係してるだろう、この部屋にいる間は彼も現界しているだけの魔力は補えるが…

「ああ、正直あんまり大丈夫じゃないかもなア…」

「…」

煙草をふかしながら呟くランサー…

確かに状況は悪い、彼のマスターは今死にかけている。

「その…ランサー？気にしないでっていうのは無理かもしれないけど…でも貴方のマスターは死ななかつた、ギリギリで貴方が気付いてスキルを発動させたから彼女は死なずに済んだんだ、貴方は彼女の命を守ったんだよ」

確か：『トロイアの守護者』という味方へのダメージをカットするスキルだ、咄嗟の発動だったらしく完全にカットすることはできなかったようだけど全身粉々になるような爆弾を至近距離で食らって生きていたのは彼が居たおかげに他ならない

「…いや、マスターを救ったのはお嬢ちゃんだ、俺だけじゃマスターはあのまま死んでいた」

：確かにランサーが両足の無い血塗れの彼女をここに運び込んできた時は驚いた

とりあえず私は病院の手配と…敵意を持った者が近づけば自動的に一画を消費、ランサーを彼女の元へ呼び出すように彼女の令呪に細工をしたけど…

「おいおい、トロイアの大英雄ともあろうお方がお通夜モードかよ、いか？お前の判断でお前のマスターは命拾いした、ならその拾った命をどう守るかがお前の考えることじゃねーのか？」

落ち込むランサーを励ますようにバシバシと言葉を投げるアーチャー

そういえば2人ともギリシャの英雄だっけ…もしかして面識ある

のかな…？

「…ああ、そうだな…その通りだ…！」

「よっし、んじや早速会議といこーぜ！まず敵が使ったって言う爆弾だが…」

「空き缶に偽装してあった、俺も全く気が付かなかったよ」

付近の浮浪者の位置に違和感を感じて…誘導されたと気付いた時にはスキルを使っていた、とランサーは言う

「ゴミに見せかけた爆弾…厄介だね」

「ああ、魔力や神秘を一切使っていないなかったのならある意味タチが悪いな、特にマスターも前線に出てくる必要のあるクラスのスーヴァントにとつちや脅威だ、敵スーヴァントと戦いつつどこにあるか分かんねえ爆弾を気にしなくちゃならねえ、超遠距離から攻撃できるキャスターか単独行動スキル持ち…この場合は俺が敵マスターを直接殴り倒すのが手っ取り早い…」

そうか、神秘も魔力も無い攻撃は生身であるマスターにとっては脅威だが神秘で守られたスーヴァントには無害だ、それなら…

「…そりゃ無理だろ、アーチャー」

「…だよな」

無理…？どういうことだろう？

ステータスを見た限りアーチャーの能力は群を抜いて強い、ランサーには悪いがはつきり言って比べ物にならないくらいだ、そのアーチャーが無理…？

「ねえ、その…ランサー？無理ってどういうこと？正直アーチャーが負けるなんて思えないんだけど…」

素直な疑問をランサーにぶつけてみると…ランサーは少し困った顔をしながら答えた



「あー、勝ち負けじゃなくて…もしかして聞いてなかったのか？アーチャーは今戦うわけにはいかないんだ、彼はグ」

「ヘクトール！」

「!？」ビクッ

いきなり大声を出したアーチャーに驚き、背筋が真っ直ぐに固まる  
「あ…悪いマスター…だがギリシャーの狩人の名にかけて、マスターの身は絶対守るつてのは変わらない、そこは信じてくれ」

「うん…信じてる」

けど、どういうことなんだろう…？

「…スマン」

「いや、俺も悪かった、だが…な？」

なにやらサーヴァント同士でよく分からない会話をしてるけど…今は聞かないでおこう、彼らも人外じみた強さを持つという以外は私達人間と何も変わらない、聞かれたく無いことだってあるはずだ

「…魔力不足で俺が退去するまであまり時間がない、今のうちに俺が調べたことをお前さん達に伝えておこうと思う」

そう言ってランサーは1冊のノートを取り出す

「これは？」

「お嬢ちゃんがマスターを病院に連れて行ってってくれてる間に色んなところを飛び回って他マスターを探してきた、まああまり成果はあげられなかったが…」

飛び回ってたって…ランサークラスの彼が？

「おい、無茶しすぎだ！お前には単独行動のスキルなんて無いだろ!？」  
「どつちにしろ俺が出来るのはコレくらいと…これ以上マスターを傷つけさせない事くらいだ、先のことは任せるさ」

怒鳴るアーチャーをまあまあ、と制止するランサー

「…」

差し出されたノートを受け取る…座から知識は持ってきてきているとはいえ慣れない言語で書いたせいも少々読みづらいところはありますが…要約すると…

「ライダーのマスターの情報…?」

「ああ、この地区の外れに大きな屋敷があるだろうか?あそこにライダーのマスターがいる、サーヴァントは…真名は分らんが多分日本の英霊だな」それとそのノートを書いたのはオジサンじゃないからね

他は調べる余裕が無かった、と謝るランサーに頭を下げる

「いいっていいって、向こうもオジサンのことは知ってるから、そのノート見せれば少なくとも話し合いには持っていける、その後のことは申し訳ないがお嬢ちゃんに頼むことになるな」

「うん、任せて」

アーチャーは深くは教えてくれなかったが…1人でも多くのマスターと同盟を結ぶ必要があるらしい、私には聖杯なんて興味が無かった…というかマスターになる気も無かったから別にいいんだけど…アーチャーは何をしようとしてるのだろうか?

「後は…うん、せめて俺のマスターを吹き飛ばそうとした奴の顔くらいは知りたいなア、ちよつとくらいは仕返し…」

シユンツ…と風を切るような音がしてランサーの姿が消える

「…!?おい、ヘクトール?」

あ…!

「多分細工した令呪が発動したんだ…!」

彼のマスターを吹き飛ばそうとした奴か、関係の無い別の敵か、そ

れは分からないけど…

「アーチャー！行くよ！」

「お、おいマスター！？俺はマスター契約者を守る目的以外じゃ戦えないぜ！」

背中に聞こえるそんな声に言い返す

「じゃ私が戦うから危なくなったら守って！」

それだけ言っただけ返答を待たずにホテルを飛び出す

私なんかには何ができるか分からない…けどこんな黙って待ってるだけなんて、そんなの許せない！

「ヘクトールさん…ルマスさん…！」

## 第5話 後始末

↳N地区 A病院、1階にて

「…」

目的の部屋を目指し、気配と足跡を消して歩く

「てつきり狙撃でもするかと思いましたが直接向かわれるんですねえ」

俺が麻醉銃で眠らせた看護婦を跨ぎながらコヤンスカヤが言う

「ああ、敵サーヴァントのクラスが分からない以上は遠距離攻撃は伏せる、一度しくじって攻撃方法を見られれば次は無いだろうからな」

魔術師の連中にとってライフルによる狙撃なんてのは予想の範囲外というだけであって分かっていれば簡単に対処できる、狙撃するなら殺せる確信がある時だけに留めたい

もし殺し損ねて向こうが気付いたら…いや、例え正確な場所が分からずとも、当たりを付けてエクスカリバーのような宝具を撃ち込まれたら終わりだ。

狙撃は遠距離から目立たず暗殺できる強力な排除方法だが逆に言えば遠距離からやれることは狙撃だけだ。防がれば殺される。

空爆や切嗣がやったような爆破解体も考えたが費用が馬鹿にならないし、こんな序盤で聖堂教会に目を付けられるわけにはいかないし、そもそもこの病院にいる人間…民間人も巻き込む事になる。起すとしても小規模なものだけだ、やれやれ…

…聖堂教会をどう誤魔化していたか切嗣に聞く必要もあるな  
そんな事を考えつつ目的の場所へ

「…この部屋か」

部屋の入口に付いている名前には『ルマス・プライマリー』と記入がされている。

…中からは規則性のある無機質な機械音がして、耳を澄ませば僅かに寝息も聞こえる

「…？」

サーヴァントの気配がしない…

「…」

この部屋に居る人間がサーヴァントを従えたマスターだと言うことは調べが付いている、見張りも交代でさせており、部屋から出ていないことも確認済みだ

また、どのクラスかは分からんが少なくともアサシンで無いことは分かるし、キャスターも…まあ無いだろう。つまり敵サーヴァントは俺たちをすぐさま攻撃できるような位置には居ない

「サーヴァントの気配がありませんねえ…マスターはどー見ます？」

「静かにしろ。…さて」

消去法で言えばアーチャーとライダーもあり得ない、アーチャーは単独行動のスキルを持っている。先日のようにマスターと共に行動する意味は無い。

また、ライダーなら何かしら乗り物を持っているはずだが部下の報告によれば中年の男が爆発で足なくなった女を抱え込み、ビルからビルへ飛ぶように走っていたらしい、マスターが窮地に陥れば例え宝具を使っても戦線から離脱しようとするだろう、このことからライダーもあり得ない

「…」

とすればセイバー、ランサー、バーサーカーのどれかか…？理性のないバーサーカーは除外…いや、サーヴァントである以上は理性が無

くともマスターを守ろうとするのは変わらないだろう、除外は出来ない…

クソ、殺せるとしてもクラスが判明してから殺すのとそうでないのとは今後の立ち回りに影響が出るが…答えが出ない以上仕方ない

「…ひとまず部屋の様子を伺って状況次第でマスターを殺害…のち、退くことにする」

「わかりました、マスター♡」

そう言つて部屋に一步、近付いた瞬間――

「…ッ!?」

ゾワッ、とまるで血流が一瞬無理矢理止められたような感覚に襲われ、全力で後ろに飛び退く!そしてその直後――

ズガンッ

「あーらら、避けられるとは思ってなかったなア」

剣…いや、槍?が壁から勢いよく突き出てきた、その切先はさつきまで俺の頭があつた場所を正確に捉えている

「…チィ、ランサーか!」

直前まで気配は無かつた…令呪の瞬間移動か?

なんにせよそんなことを考えている余裕は無い!

槍が引き抜かれ、部屋から中年の男が出てくる

「あーやっぱりアンタらか、こうして顔を合わせた以上はもう俺のマスターに手出しはさせない、いつもならそちらさんが諦めるまでイヤになるほど守りに入るんだが…今回ばかりはそういうワケにもいかないなア!」

…ッ!仕方ない!

「アサシン、戦闘態勢だ、俺の身を守れ！」

「ようやくですか？かしこまりました、マスター♡」

不安要素はあるがそんな事を言っている場合じゃない、生身でサーヴァントを相手にはできない！

「そらよつとー！」

俺を殺そうと振られるランサーの槍、それをコヤンスカヤが蹴りで打ち払う、がー

「まーだまだっ！」

カチンとランサーの武器が変形：分離して切先だと思っていた槍の刃が一本の剣に変わり、そのまま斬撃が繰り出される

「！」

何処から取り出したか分からんアサルトライフルでそれを防ぐ、がー

「…ツ！…いったいですねえ…！」

少し勢いを弱めた程度でライフルはあっさりと折れ、ランサーの剣がコヤンスカヤの左腕を斬りつける

まずいな…そもそもアサシンは正面切って戦うようなクラスじゃない、本来ならマスターとは別行動が当たり前のクラスだ。加えて相手はサーヴァントの中でも優秀な部類のクラスである、セイバー、ランサー、アーチャーの内の一騎…だいたい、何故サーヴァントのくせにわざわざ人間の兵器を使うんだ…？

分が悪いどころかこのまま続ければ負けるのは明白だ、ならー

「ツー」ダツ

左手に持った対物ライフルの銃口をランサーとは真逆の方向に向け、全力で床を蹴って前へ！

「マスター!?!」

「ツと!?!」

俺を驚異と認識するや否やコヤンスカヤを器用に押し退け、再び槍へ形態を戻したランサーの横薙ぎの一撃が迫る！

…やはりどうやっても一撃は貰うか

「つ…『レオレオ！防御機能強化！』」

詠唱、義手の耐久力を強化してガードする

ガンツ！

「よし…！」

防いだ！ふぎけた詠唱だが機能は本物だ、ただの横薙ぎとはいえずーヴァントの一撃、それを受けて義手には傷もついちやいない！

「なにっ!?く！」

一撃を防がれたランサーは一瞬だけ動揺したがすぐに持ち直して再び攻撃体制に入る、だがそれは敵わない

槍という武器の特性上、リーチが長い代わりに隙がでかい。それが弾かれたものなら尚更だ、ならば奴が次に取る行動は…

「させんよ！」パキン

予想通りに振り下ろされる剣の一撃、それを一瞬前に撃っていた対物ライフルの反動で病室内に逃げ、回避する

「…!!」

ライフルを捨て、対神秘改造コルトパイソン…マグナムをホルスターから抜き取る

「終わりだ！」

俺がベッド上の敵マスターへ銃口を向けるのと…

「うおおおっ！」

ランサーが俺と敵マスターの間に割り込もうとしたのはほぼ同時であり、厳密に言うのであれば…



「…やれやれ」

「……ランサーの方が一瞬だけ、早かった

「だが無意味だ」

しかしランサーがどれだけ早く割り込もうと関係は無かった、何故なら俺が撃った弾丸は正確に、敵マスターの額に風穴を開けていたのだから

「な…！マスター！馬鹿な！今のは間違いなく防いだはず……」  
「フッ！」

狼狽えるランサーに閃光弾を投げつけ、コヤンスカヤの手を掴んで外へ

「もう充分だ、退くぞ！」

「わ、わっ！？走れますので引つ張らないでくださいませ！」  
お構いなしに最短距離で走る

予想できた事ではあるがやはりライフルは回収できそうにないな、諦めるか…

走りながら遠隔で自壊機能を作動させてライフルを処分、部下に用意させておいたバイクに跨る

「残弾数は1発…特殊弾はもう補充が効かないということを考えれば1発で済んだのは理想形だろう」

仮にアレで生きていたとしても保険は掛けておいた、追ってくる気配もない…ランサーはもう問題ないだろう

「あの一、マスター？差し支えなければさっき起こった事象について教えていただけませんか？」

「ん？ああ、いいぞ」

これについては教えたところで特に問題はないだろう

「知人の持っていた礼装を参考に作った俺だけの礼装だ、といつてもコレを礼装と言っているか怪しいもんだが…」

「と、言いますと?」

バイクを走らせながら説明する

「俺は神秘にも魔術にも理解が浅い上にそもそも適性がほぼゼロだからな、魔術師殺しのように魔術や魔術回路のような神秘に干渉するには義手が無いと無理だ、だから逆に徹底して神秘に干渉できない弾丸を作ることにした」

「ふむふむ」

「結論から言えばサーヴァント…神秘の塊みたいな存在は軒並みこの弾丸に干渉できない、撃たれても傷付かないのはもちろん、掴むことも弾き飛ばすこともできん。」

神秘の差が開きすぎて互いが別次元の存在となり、干渉を拒む…そうだな、霧に石を投げつける様子を想像しろ」

「なるほどなるほど、確かに石は霧を晴らせませんが霧もまた石を止められない、と」

「その通りだ…目的無く、感情無く、愉悦も無く、先を見失ったまま戦場で無意味な虐殺を繰り返し…また、繰り返させてきた俺が作れたもの」

王のような使命もなく、勇者のような蛮勇さもなく、騎士のような誇りもなく、動物のような種の繁栄欲求もなく、殺人鬼のような快楽すら持たない英霊英雄というものを根本から否定したザイル・ニツカーという男が作り出したもの

コートの内側にしまつてある残り11発の内の1発を取り出し、コ

ヤンスカヤに見せて言う

「これが俺の礼装…『ひげんそうだん否幻想弾』だ」

「うーん、ダツサイ名前ですねえ…」

…やれやれ

「最初の感想がそれか、名前なんて付いていればどうでも良いだろう」  
「貴重な品こそ名前は大事だとワタクシは思いますが…材料は何を？」

「一昔前に切り落とされた右腕の…その5本指全てだ。」

親指、薬指、小指で2発ずつ、人差し指と中指で3発ずつの計12発だ」

「整備をした時は魔術や神秘を必要とした作業はありませんでしたがアレは？」

「整備内容自体は普通の銃や弾丸と変わらない、違いは整備する者が魔術に対してある程度の理解があるかどうか、それと整備にかける時間と回数だ」

『奴』曰く、神秘の存在を知っている者があえてそれを使わずに『ただの整備』を『何度も』やることに意味があるという

「ようするに神秘の否定という概念を補強してやっているんだ、俺の装備に『対神秘』と書かれているものは…」

「否幻想弾の能力を損なわず装填、撃発できるように神秘を薄めた武装…ですね？」

「ああ」

そういうことだ…ん、

ちょうど説明が終わったところでアジト…に繋がる入口の1つである喫茶店に到着する

「今日はここから帰る、ついて来い」

「はい、ただいま♡」

部下にバイクを処分するようにメールを送り、俺たちは喫茶店の中へと入った…

…

…その頃、N地区 A病院 1階にて…

「はっ、はっ、はっ、」

身体機能強化の術式を両足に集中させ、今にも消えてしまいそうな魔力反応に向かって走る

「マスター、待て！一人で行くな！…つとと!?!この看護師のねーちゃん達はなんでこんなトコで寝てんだ!?!」

後ろから聞こえるアーチャーの声も無視して前へ、前へ…そして…

「ここだ、ヘクトールさん！ルマスさん！」

部屋に入って最初に目についたのは額から血を流し、ベッド上で動かなくなったルマスと何も映さなくなった心電図、そして…

「…よオ、来たのかい、お二人さん」

「クソツッ！ヘクトール！」

力無く壁に寄りかかって煙草をふかしている彼…ランサーの姿があった

アーチャーも遅れて後ろから追いついてくる

「…ここで何が…」

カチツ

駆け寄る私を拒むかのように異音がして…

…!?!今の音は…

「!!マスター」

離脱する間も無く、大きな音、衝撃と共に真っ白な炎が私達を包む  
当然アーチャーは無傷で済むだろうが私は――

「へ?」

――私も無傷だった

これは一体…?

「…はは、今度はちゃんと間に合ったらしい、いつでも発動できるように身構えてた甲斐はあった」

「…そうか! 『トロイアの守護者』か!」

アーチャーが納得したように言う

そうか、私はランサーに、ヘクトールさんに守られたんだ

…あ!

「ヘクトールさん、身体が…」

「ああ、うん、流石に…無理、しすぎたらしい…俺は、ここまでだなア」

光に包まれ、足の先から徐々に消えていくランサーに私はただ狼狽  
えることしか出来なかった、けど――

「消える、前に、伝えておかなきゃ、ならないことが、ある…」

下半身が完全に消えても彼は諦めず言葉を紡ぐ

「いいか、俺のマスターの足を吹き飛ばし、お嬢ちゃんの事も…吹き飛ばそうとした、敵マスター、は――」

カチツ

「ツ!」

また異音が――

さっきの爆発とは別の場所から来る衝撃、だがまたしてもそれは私

に届くことは無く――

「…ああ、まったくよオ…あの一瞬で、仕掛けられる、のは…1個だけだと…思ったんだが、な…しかし、あいにく、と…守る事に関しちや、俺は――」

「ヘクトール!」

音も無く落ちた煙草の吸殻だけを残し、ランサーは…ギリシヤの英雄、ヘクトールは完全に消滅した…私を、守って。

「…マスター」

「うん、分かってる…他にも爆弾があるかも知れない、早くここを出よう」

↳ランサー敗退↳

…

←プロフィール

ザイル・ニツカー

8

軍隊すら恐れる最悪の犯罪組織集団ウルフルズ、そのリーダー。

年齢、性別、人種問わず人を惹きつけるカリスマと人や兵器に関する豊富な知識…そしてなにより、どこまでも冷酷、残忍になれる人間の無さから生じる高い戦闘能力を持つ男。

7

堅実なやり方を好み、博打を嫌う慎重派。やれやれ、が口癖

『まあ生死がかかっているからな、慎重になるのは当然だろう?』

6

魔術などの神秘に対しての理解や適性はお世辞にも良いとは言えず、外付け魔術回路である義手を使っても大した魔術を公使すること

は出来ない、故に相手が誰であれ、彼の手に取る武器は『否幻想弾』ひげんそうだんを除き、現代兵器のみである：今のところは。

5 ウルフルズという組織は大規模ではあるが武力だけで言えばただ規模のでかいテロリストと何も変わらない、軍隊がーいや、国が恐れている理由は武力よりも、ザイルに：ウルフルズに魅了されている大勢の民間人の存在である。

4 民間人にとってウルフルズに魅了される理由はいくつかあるが最も強いのは『富を独占する数%の人間からそれを奪い、貧困の者達へ流す』というものだろう、それによってタダ同然で救われた者はウルフルズに、ザイルという人間に興味を持ち、憧れるーだがザイルにとっては『大勢の民間人』という柱が欲しいだけであり、そこには愛も、慈悲も、関心も無く『必要だからやっただけ』である。

3 ザイル・ニツカーという名前も本名では無い、時と場合により彼は名前を使い分ける。

冷酷無慈悲な殺人機械としてのザイル・ニツカー  
人を惹きつけ、魅了するウルフルズのシンボルとしてのガルシア・クラウン

街を歩き、ただ知人に会いに行くだけのアンペルト・ローラー  
信用できる人間には名前を使い分ける事はしないがアテにするわけでは無い。

2 人を惹きつけられるのは1人1人の『言って欲しいことを理解し、発言する』から、残忍になれるのは『他人に興味が無い』から、どんな危機的状況でも冷静に判断が下せるのは『自分の生き死にすら興味が無い』からである。彼が切嗣から依頼を引き受けた理由の半分は『とりあえず今は死ねない理由』ができるからである。

1 生きる理由も死ぬ理由も見つからない彼が勝ち残り、もし聖杯が彼

を認めたとしたならば、願望機が叶える願いは果たして――



## 第6話 夢／信仰者

——にて

…

「…」

…?

気付けば俺は『そこ』にいた。

そこは檻だか牢だかの巨大な格子こうしが立ち並んでおり、それ以外は真っ黒に塗りつぶされたような暗闇で、内部の様子どころか周囲の様子も見えない。

身体は俺の意思とは関係無く、暗闇の中その格子に沿って歩いていく

…

「…」

少し間を置いて現状を認識する『ああ、また夢これか』と。

もう何度目か分からない夢、毎度場所や状況に違いはあれど本質的な内容は変わらない

「…」

しばらく歩くと牢屋(?)の入口らしき扉の前に着き、耳にこびりつくような不快な音を立ててひとりでにその扉が開く

…見えないな

扉の向こうも闇だけで何も——

「…」

これは…

扉をくぐった直後、今までの暗闇が嘘のように晴れ、桃色を基礎色とした女兒が好みそうな部屋へと地点が変わる

「…」  
デフォルメされたたくさん動物の人形が部屋の隅で山積みになっており、その中で1つだけ誰かを象つたのであろう精巧な人間の人形がポツンと今にも埋もれそうな形で乗っている…部屋で真っ先に気付いたのはそれだ

「…」  
次に部屋の1番奥にあるベッドに誰かが寝ているのに気が付き、近付いてみる

幸い、今は自由に自分の意思で動けるようだ

「…」  
「」  
ベッドには1人の少女が横になっていた、寝ていたと表現しないのは少女が眠っていないからだ、開いている目は俺を見ることがもせず焦点の合わない目でただただ天井をずっと見ている

「…」  
他に何か無いのか調べるために周囲を見回す

「…？」  
居心地の良さそうなソファや隅々まで清掃の行き届いた部屋、どれだけカフェインを摂取しようが眠れそうなふかふかのベッド、テーブルの上に用意された暖かい料理に、クローゼットを開ければ新品同様の子供用ドレス（中々高校生くらいなの？）が丁寧に入っている…

「…」  
寝たきりの子供がここまで用意できるとは思えない、おそらく他の誰かが用意したのだろう、あのベッドの少女は余程大事にされているらしい

「…！」

再び身体が勝手に動き始める

真っ直ぐ少女の元へと戻り、彼女の顔をもう一度覗き込む

…相変わらず少女は目を開けてはいるものの何も見ていない

「…」

赤い刺青…令呪の刻まれた右手で少女の頬を撫でる

「」

生きているのは間違いない、だがやはり少女が反応を示すことは何もなかった

「…」

どれくらいそうしていただろうか？それはよく分からないが少女を撫でる俺の手は急にそれを止め、すぐ横のテーブルの上へと右手を伸ばす

「…」

先程までは無かったハズの『ソレ』を手に取り、読み終わった本を棚に戻すように優しく、ゆっくりとした動作で『ソレ』を少女に向けて構える

「…」

やはりこうなったか、と内心想いつつも特に狼狽えることも無く、俺は勝手に動く身体を受け入れていた

カチリ

引き金へかかる人差し指に力が入り、そして――

「…やれやれ」

ベッドの上の少女は声一つ上げることもなく死んだ

ウルフルズアジト、ザイルの自室

「…」

目が覚めると同時に、枕元にあるであろう置き時計を右手で引き寄せる

やれやれ、相変わらずな内容の夢だな

何故こんな夢を見たのか少しだけ考える

原因は…先日ベッドで寝ていたランサーのマスターを撃ち殺した  
ことか？

日頃、殺し合う夢を見る事はあつても無抵抗の人間を殺す夢は珍しい…

「…」

時計を引き寄せるついでに自分の右腕を確認する。

…右肩から下にかけて覆うように接合された義腕、見てみると重くなりそうな黒鉄色、ところどころに施された外に出るたびに偽装の間が掛かってしまう淡く光る翠色の装飾と、義腕上部に彫られた俺には一生理解できなさそうな芸術彫刻が静かに神秘を感じさせる  
間違いない俺の義手であり、現実だ。

時計は午前5時を指しており、珍しくいつもより1時間も起床が遅いことが分かった

さて、普段ならすぐに端末かパソコンを立ち上げて部下たちからの報告を確認するところだが…それより先にやる事がたった今見つけた

「…おっ」

ぐいっ！と原因の首根を掴み、ベッドの外へ追い出す

「きゃーん♡乱暴はおやめくださいませー」

「…」

ため息をつくような出来事に遭遇することはよくあるが…これは初めてだ

「……………何をしている」

自分でも分かるくらいウンザリとした声色でコヤンスカヤに問い掛ける

「はい？護衛兼添い寝ですが何か？」

「…護衛も添い寝もいらん、第一サーヴァントに睡眠は必要ないだろう、余計な事をするな」

サーヴァントは魔力供給が充分なら睡眠の必要性は無いことは知っている

「んー、ですが最初の令呪行使の影響でマスターの側からは離れられませんし？ワタクシとしてもやる事が無くて暇というか困ると言うか」

「やれやれ…」

征服王のようか命令を聞きそうにないサーヴァント、騎士王のような変な正義感のあるサーヴァントでない分良しと思っていたが…これはこれで鬱陶しい。

「武器整備の仕事を任せる、だからどけ」

「かしこまりました♡」

厄介払いのために適当な仕事を押し付け、部屋を出る

確かカロリーメイトが棚にあつたな…

「お待ちくださいマスターー！」

「……………」

背後から聞こえるキンキン声、それを無視したい衝動を抑えて振り向く

「……………なんだ」

「ワタクシ、こう見えてキッチンとした食事も作れますので、そちらをお食べになつてくださいませ♡」

栄養調整食品ばかりでは味気ありませんし、何より不健康ですよ？とツカツカ台所へ向かうコヤンスカヤを引き止める

「作っている時間が惜しい、暇なら武器整備をしろ」

時間は有限だ。…といつても俺の場合、時間の使い方の大半が睡眠、団員のスカウト、戦闘のどれかだが

令呪の命令で俺はコイツを連れ回す必要がある、こういう時間は大事にしたい

……のだが

「ええ、そう仰られると思ひましてえ…既に完成した物がこちらです♡」

俺の考え事など完全無視し、台所に昨日は無かつたはずの鍋を手で示すコヤンスカヤ

「シチューか…いつ作ったんだ？だいたい令呪行使の影響で俺からは離れられないんじゃないのか？」

「それはマスターが寝ている間にちよいつとマスターを抱えて台所へ行ったのでなーんにも問題ナシなのです♡…にしてもよくシチューだと分かりましたねえ…」まだ蓋も開けていないのに

「…そうだな」

言われてみれば…なんでシチューだと分かつたんだ？…というか抱えて台所に、つてそれに気付かなかつた事実が衝撃だな…

「まあそんなことはさておき、これをお皿によそいまして…はい！召し上がりくださいませ♡」

ホクホクと食欲を誘う暖かい匂いがし、盛り付けられたシチューを

思わず凝視してしまう

「…あのー？その様子だと今までロクな物を食べていなかったのでは  
ありません？」

「…まあ、そうだな」

正直なところ栄養調整食品（流石にカロリーメイトだけで済まして  
は居なかったが）だけで今まで済んでいたのだからこう言った料理は俺に  
とって新鮮なものだった。

料理の手間も無く、手早く、そして後始末が楽。そういった理由で  
俺は食事を作らなかつた…というかそれに慣れすぎて作れない、とい  
うのが正しい。

生き残る上で食べることでできる動植物やその処理法などは知っ  
ているが…これを料理と叫びたら面倒なことになりそうなので言う  
のはやめておく

「…」

椅子に座り、用意されたスプーンで一口食べてみる…

シチューを口に運んでから遅れて『もう少し毒物とかに警戒するべ  
きでは？』とは思ったが…今更思っても遅い。

「…」

そして次の瞬間その警戒心も緩む

「どうですか？マス「コヤンスカヤ。」

スプーンを一旦置き、顔だけコヤンスカヤの方へ向ける

「はい？如何なされましたかマスター？」

「次からは俺に一声かけてから作れ、それと…久しぶりに美味しいもの  
を食べた。ありがとう。」

素直な気持ちをコヤンスカヤに伝え、残りのシチューを食べ始める  
…と

「え？あのーマスター？変なモノでも食べました？」  
目を丸くして聞き返すコヤンスカヤ

これは本気で驚いているな、やれやれ

「…お前俺をなんだと思ってるんだ？」

「無気力無関心ファツションセンスナシ人間…ですかね？」

「……………ああ、もうそれでいい」

ため息をついてから再びシチューを口に運ぶ

信の置けない奴なのは変わらないが少なくとも現時点で害意は無い、流石に手放しでそのまま用意された物を食べる、なんてことはこれつきりにするべきだが…

「…」

気付けば皿の中のシチューはもう無くなっていた

「おかわり、します？」

ああ、貰うーとーと言いかけたがやめた、最優先で片付けなければならぬ事項がたった今発生したからだ

「どけコヤンスカヤ」

椅子に座ったままぐいっ！とコヤンスカヤをどかし、ホルスターのハンドガンを抜き取り目標に向けて2発。

バキヤツ

サプレッサー（消音器）を付けたハンドガンから放たれた銃弾は1発目で正確に超小型ユニットが積んでいたカメラを破壊し、2発目でユニット本体の芯を捉え、破壊した

「おや、入って来た瞬間破壊しようと思ってきましたが…マスターはまるで来るのが分かってたみたいですねえ」



「…まあな、こんな時間に寄越すとは思わなかったが。」  
やれやれ、あの女…

…

く同時刻、とある場所の地下研究施設く

「ギャー！一秒で壊されたあああ!!!」

「うつ、わ?!い、いきなり叫ぶなよー!」

あまりのショックで彼のビビり声も耳に届くことはなく、ジタバタと汚い床を転げ回る

「あ、ああっ!おまえ!ついさっき僕に洗濯させたばかりじゃないか!なんてことするんだよ!?!」

そしてそのせいで洗濯したばかりの白衣が埃やら私が食べこぼしたカップ麺の残骸やら私の唾液やらが付いてぐっちゃぐちゃになる

「ええい!白衣なんぞ知ったことじゃない!

あーあ、光学迷彩ステルスに加えて魔力も遮断したのに…なーんでバレたのかなあ」

「…だいたい、お前さつきから何やってるんだよ?」

「え?盗撮だけど?」

「盗撮だけど?じゃなーい!」

「んー、やっぱり義手がアシストしてるのかな?いやそれも違うか、彼ったら義手付ける前から私に関しては何と敏感だったし…」

「こら!こちとら昨日の夕方から待ってるんだぞ!話をー!」  
「!!」

ここで私、衝撃の真実に気付く!

『私に関しては敏感…』なるほどなるほどお…:そうか、そうなんだ

ねザイル！ンモー素直じや無いなあ、えへへへへへでへへへへへへくねくね

その事実の嬉しさのあまり自分でもキモいと思えるようなくねくね踊りをしていたがー

バツシーン！

「オギャア!?!」

頭部へのキツイ1発により踊りが中断される

オーいてえ…

「いい加減にしろおまえ！僕はキチンと話しただろう！今度はそつちが話す番だ！」

そう言つて怒る彼の手には私がこの前キャスターのお尻を叩いたハリセンが…

あー、どーりで痛いワケだわさ

「分かった分かった、ちゃんと話すからまずそのハリセンを置きなさいな、ウェイバー君。」

怒る彼をなんとか落ち着かせて地味にお値段が高いソファに座る

「そいでは改めまして。私は世界一の科学者であり一級魔術師！ノーア・克蘭ツェル！好きなものはザイルと船旅！宜しくウェイバー君！」

…むう、できる限りの笑顔をしたはずだったんだが…ウェイバー君は依然として不機嫌なままだ

「…知ってるよそんなこと、さつきも聞いたし」

「えー？ならなんで言わせたのさー」

せつかく自己紹介したというのにこれではあんまりである！

「誰も聞いてないだろ！」

「…の割には名前でも呼んでくれないよねー」

名前呼びしないウエイバー君に若干むむつとしながら、集めた情報をまとめたファイルを机から取り出す

「えーと？誰だっけ？」

「ルマス・プライマリ、だよ！何回言わせるんだ…」

「はいはいちょっと待っててね…うん、あつたあつた！」

ファイルの中の…ルマス・プライマリの資料を取り出して読んでみる、と

「…あー、うん、ウエイバー君？ルマスちゃんってあなたの恋人？」

「はあ？何言い出すんだいきなり？ただの同級生だよ」

んー…聖杯戦争のことを話している時点でただの同級生じゃないと思うけど…そういうならいいか

「んーとね、結論から言う…彼女、もう死んだよ」

「っ…確かなのか？生きてたりはー」

「確定だよ、なんなら回収した遺体、見るかい？」

「…遠慮しとくよ」

「うん、それがいいね」

そう言っただけウエイバー君はアップルジュース、私はオレンジジュースを互いに飲む

「にしても…アンタ何者なんだ？いくら世界一って言ったってただの科学者がここまで魔術…というか聖杯戦争の事を知っているなんて普通じゃないぞ？」

もうジュースを飲み干したウエイバー君がジト目で言う

「アレツ、私一級魔術師って言わなかったっけ？」

そう言った瞬間『お前みたいなきげけた魔術師がいるわけない』というありがたーい言葉が帰ってきました！わー、かなしー

「進歩のために貪欲に色々吸収していった結果魔術師にも手を出したというワケだわさ、魔術も科学も片方だけで出来ることなんてたかが知れてる、でもそれらを組み合わせる、なんていうことをやってる人はそこまで多くない。私は科学の発展のために魔術というものを出して見たのさ！」

…まー、科学の発展のために、なんてのは嘘なんだけど。

「……なるほど」

「んでどーする？泊まってく？泊まってくなら色々用意するけど？」  
「いや、すぐにここを離れるよ。ルマスが死んだのなら僕がここにいる理由はもう無い。参加者でも無いのに聖杯戦争真っ只中に留まるのは避けたいからね。」

「んー…ねーウェイバー君」

ふと気になって聞いてみる

「彼女に聖杯戦争の事を話したの、悪い事をしたと思ってる？」

「…そりゃあ思うに決まってるだろ、事実僕のせいで死んだようなものじゃないか」

彼は前回の冬木で行われた聖杯戦争にて敗退したにも関わらず生き残った稀なマスターだ。その彼が彼女…ルマスにそれを話した事で彼女の心に火をつけてしまったらしい

通話越しにそれを察知したウェイバー君が慌てて彼女を止めるために遠路はるばるやって来て…で町でたまたま私と会ったワケだ

征服王のマスターだったという情報面では彼のことは知っていたので顔はすぐに分かったのが幸いだ、そこで私はルマスの情報と引き換えに資料だけではわからない、彼の経験した聖杯戦争について聞い

ていた（＋雑用もさせてた）…というところだ

「…まー、あまり引きずるなよー？としか言えないなあ、生者がどんな思いを描こうが死んだ人の心は分かんないし。」

「…」

結局その後ウェイバー君と何か話をするわけでもなく玄関（といっても地下なので厳密にはただの出入口だが）から彼を見送った

「ああ眠い…いつも昼まで寝てるもんだから頭が重くって仕方ないよ…」

「の割にはキミ、ザイルくんを盗撮するときは目がパツチリしてたね？」

不意に背後からキャスターの声が聞こえる

「そりゃあね？ザイルだし？」

「ホーント好きだねえ…とところでさ？冬木？の聖杯戦争の話きいたんだよね？私にも聞かせておくれよ」

ぎゅーと押し倒す勢いで背中からホールドしてくるキャスター

「はいはい、用事が済んだらね…とところでキャスター？」

なんだい？と聞き返す彼女に答える

「私の白衣、今メチャクチャ汚いけどそんな密着して大丈夫？」

「え？」ぬちやあ

「…」

「…」

「キャス」

「ギャー！なんでこんなことになってるんだキミはーっ!？」

…うん、ご愁傷様。切り替えていこー！

ほかすかと頭を叩いてくるキャスターを引き摺り下ろし、右手で彼女の頭を撫でながら左手でケータイという名のスマホを開く

「盗撮はできなかつたし直接電話して…お？」

「ここでまさかの着信音、相手はー」

「はあい…もしもし？」

『ザイルさんじゃないからって露骨にガツカリしないで下さい』

期待したけどザイルじゃなかつた…

「はあ…で？」

『はい、G地区にて戦闘が発生、おそらくマスター同士がぶつかり合っているのかとー』

なるほど他マスターか、ふむふむ…ならばここはー

「無視、二度寝する。」

『え、ちよつと待って』

ぶちっ

「さてとキャスター？私は寝るから何かあったら起こして〜」

「もーマイペースだなあ、いいよ。ゆっくり眠りたまえ…起きたばかりのキミに言うのも変なセリフだけど。」

「むふふ…そろそろ会えそうだね。」

ザイルに会ったら…そうだ！一緒にドライブ行きたいな！

よくわからない期待に胸を弾ませ、私は二度寝の快樂へと堕ちていった…

## 第7話 幕間 ルマス・プライマリ

幕間 ロンドン、時計塔にて…

12時30分。昼休みも残り半分となったのでそろそろ食堂へ向かう

「♪」

経費の無駄としか思えないような、だだっ広い廊下を歩いていると曲がり角から1人の生徒がふらりと現れたのでとりあえず挨拶する

「こんにちはー！」

「ああ、こんにちはー！ツチ、お前か」

いきなり舌打ちとは…ま、いつものことだけど。

どうもここの人達の大半は血筋の凄さ＝個人の凄さと思いついでいる節があり、弱小家系出身の私は目の敵にされているわけだ

「100年にも満たない弱小家系出身のお前みたいな底辺が、このボクに話しかけるなよ」

嫌悪感丸出しで言葉を吐き捨てる男子、それに負けじと言い返す

「…その底辺より成績が悪いじゃんアタタ。血筋を鼻にかけてロクに努力してないから私に追い抜かれるんじゃないの?」

「…お、お前なんか…！」

言った途端、彼はみるみるうちに顔を真っ赤にし、掴みかかる勢いでズイツと近づいて来る

まあ彼が努力…少なくとも人よりも一つ頭抜けて努力しているのを実は知っている。

その点を馬鹿にする気は無かったが、だからといってさっきのような言い方をされて黙っているのも癪に触る

私の魔術適正は低いというわけでは無いが時計塔の生徒に比べれば低い位置付けになる、もちろんそのままでは彼らを追い越すのは不可能であるため、その差分を知識で埋めている。

多分野の勉強に手を出すのはかなり辛かったがその甲斐あってちよつとした講義なら私でも開いていいとケイネス先生に言われたこともある。

「ふふん、悔しかったら結果出したら？」あつかんべー

「ツ！お前、お前っ！」

「…よりよって昼休みという最も人の往来が多い時間帯に、通路の真ん中を塞ぐものじゃ無いぞ、君達。」

！この声は…

「ケイネス先生!？」

講師であり、ロードの1人…ケイネス先生だ

「何の言い争いをしているか知らないが…その口論は道を塞いでまでする必要のあることかね？」

「無いです！すみませんケイネス先生!」

即答する。だって私は挨拶しただけだし。

「〜……………すみません」

無いと言った瞬間、彼が凄く睨んできたが…ま、気にしてたら保たないし気にしない！

「キミは以後気をつけるように。さ、もう行きたまえ…それとプライマリ君、キミには話がある」

「…はい」

ここで話があるってことは…ハア、言い争い最初から見ただってここね

食堂の方向から僅かに漂ってくる匂いを惜しみながら、ケイネス先



生に連れられて近くの空き教室へ

「プライマリ君…キミはもう少し愛想良く出来ないかね？」

予想通り開口一番これだ、私としてはただ挨拶しただけなんだけど「私はただ挨拶をしただけです、それだけで彼が突っかかってきたので『少し』言い返しただけです。」

それを聞いたケイネス先生は、まるで老人が数日ぶりに椅子から立ち上がったように、ハア…とため息を漏らし、話し始める

「私が言っているのは目上の者に対する言葉遣い…敬意を払う心なのだがね。彼の家系は知っているだろう？キミが友達感覚で挨拶するような人物じゃない」

「…」

結局彼自身は全然凄く無いってことじゃないですか、と言いたくなるのを抑える

「キミはもう少しそれが出来ていれば言う事は無いのだがね…気をつけるように。」

「…はぐ」

出したい言葉を飲み込んで教室を出て、そこから充分離れたところで――

「ハア…これさえ無ければなあ」

周りに誰も居ないのを確認してさつき飲み込んだ言葉を吐き出す

魔術師たる者、1番重んじるのは『血筋』である…私はコレが物凄く気に食わない

「…」

ケイネス先生もさつきの男子も…もちろん他の人も。知ってる限りはみんないい人だ、魔術師、魔術師の卵としてではなく、1人の人間として接すればそれが分かる（家系を偽ってお喋りしたからバレた

時ひどかったけど)

だから私はそれを変える…変えたいと思っっている。家系が小さな人だけのためじゃ無い。家系が大き過ぎて押し潰されそうになる人もきつと居るだろう。

微妙に考え方は違うがこの時計塔で血筋を重んじる考え方を嫌う知人も居る

「ルマス！お前また揉め事を起こしたのか？」

ん

噂をすれば何とやら。…いや噂ではないけど彼が来た

「やつほ、ウェイバー！」

「やつほ…じゃない！お前なあ…あんなこと繰り返してたら居場所が無くなるぞ？」

「えー？でも見てたならスッキリしたでしょ？」

「それは、まあ…」

うん、やつぱり彼とは気が合う。血筋を重んじるだけの人達を見返したいと言う彼の考え方は私も結構共感できるからね

「でしよー！」

…ま、私のやってることは無敵状態で時計塔の内側に泥ばら撒いてるようなものだからウェイバーの言うことも分かるんだけど。…あ

そういえばウェイバーに話があった事を思い出した、私たちにとつての千載一遇のチャンスかもしれないものだ

「ね、ちよつとナイショ話しない？」

「はあ？」

く

時計塔別館、ゴミ集積場にて…

「よし、ここにしよう」

魔術師…というよりプライドの高い人間はこんな場所に近付かないし、そもそもゴミ出しの時間とは大きくズレている、誰かの部屋や空き教室より安全だ

「なんだよ、こんな場所まで連れて来て話して？」

「それはね…私達が聖杯戦争に出れる！…かもしれない話。」

「え”っ!?”」

まさかそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだろう、ウェイバーの顔が普段に増して面白くなっている

「ケイネス先生が近く、冬木市の聖杯戦争に参加するって話は知ってる？」

「え、ああ、知ってるが…それがどうしたんだよ？」

ここで私は私だけが知り得た凄い情報を彼に伝える

「そのケイネス先生がね、用意した聖遺物を盗まれたって話だよ」

「!!そ、そうなんだ、それで？」

なんか予想より3倍くらいウェイバーの顔が面白いことになってる…そんなに驚いてもらえるところっちも面白いな

「ね、ね、今から私達でその盗んだ奴探さない？」

「…さ、探し当てたとして、さ?どうするんだよ?」

え?…そんなの決まってるじゃん

ひよいつ、と近くに落ちてた鉄パイプを手に取り、ブンブンと振り回しながら言葉を続ける

「ボコボコにして聖遺物を取り返す!そしてそれを私達のどっちかが使…ちよつとウェイバー聞いている?」

「え、あ、ああ、聞いている、聞いているぞ?…でも流石に時計塔内でそん

な暴力沙汰を起こすのはまずいんじゃないかな？」

なーんか反応が悪い…？珍しいな

「まあいいや、とりあえず私は来週から講義を休むよ、いきなり休んでも怪しまれるし…うん、空港で日本行きのを張ってることにしよう、時計塔の…それも今から聖杯戦争に行くぞって人なら多分雰囲気分かるし…ああ、安心して？ホントにボコボコにするつもりは無いから！」

多分…！

「そ、そうか…僕は遠慮しとくよ、レポートが溜まって今講義を休むわけには行かないから」

「んー、残念…」

相変わらず彼は真面目だなあ、気持ちは分かるがサボり時はサボっていいと思うけど。

結局空港に張るのは私一人だけということになったが…まさかあんなことになるとは、この時は夢にも思わなかった

く

時間は流れ、日本 とある老夫婦の一軒家 2階にて…

「ふむふむ？ライダー…征服王イスカンダルを召喚し、聖杯戦争を戦い抜いた、と…よし！ウェイバー？」

「な、なんだよ？」

「せいっ！」

顔を上げたウェイバーにすかさずナツクルを喰らわせる！

「いつ!?な、何するんだよ!？」

「うるさあい！この裏切りモンが！」

急に消えたウェイバーを探し、遂に見つけたと思ったら聖杯戦争

やってきました、と来た。そりゃこうするよ

「お前…本気で殴らなくなつていいじゃ無いか！」

「本気にもなる！…どれだけ心配したと思ってるの!？」

正直なところ聖遺物を1人で持つてこつそりロンドンから出て行った、という点には全く怒っていない、私がショックだったのは彼が私にも秘密にした、という点だ、聖杯戦争は文字通りの殺し合い…細部は知らないが死にそうになったこともきつとあるだろう

「いてて…悪かつたよ、黙つてて…でも言ったらお前『じゃあ頑張つてね！私も応援しに行くから！』とか言いだすだろ？」

「え、なんで分かつたの？」

「お前なあ…」

むしろなんで分からないと思つたんだよ、と呆れ顔で彼は言う

「それに言わないでにおいて正解だった、あれは僕らには早過ぎたんだ、お前も見たんじゃないのか？冬木市のニュース」

「あの大火事？え、あの件やっぱり聖杯戦争だったの？」

派手すぎるから流石に聖杯戦争とは関係ないと思つてたけど。

「向こうで何があつたのさ？」

「…まあお前なら話してもいいかー…ギヤツ！なんで殴るんだよ!？」

「なーんかムカついたから！で？何があつたの？」

「話は…うん、僕がこの家を隠れ家に決めた時からがいいかな…」

↳

さらに時間は流れアメリカ合衆国 ワシントンD・C. 行きの飛行機内にて…

ふん、いいんだいいんだ、のけ者にされたことなんかちつとも悔し

くない。

カバンをポフポフと手で触りながら、これから起こるであろう聖杯戦争に想いを寄せる

「…」

この異常と言える連続で開かれた聖杯戦争…参加しない手は無い

「触媒もある、うん…やれる！…できる！」

知名度MAXと言っても過言ではないギリシヤの英雄アキレウス…と互角に渡り合った英雄その人が身に付けていたと言われる鎧の断片、これが私の用意できた触媒だ

「…」

「…」でも

本当に参加するの？と私の臆病な部分が囁く

もちろん、とそれに応えるように私の勇敢な部分が宣言する

舞台は整ったんだ、チャンスは自分で作り、掴むもの！行くしか無いよ！

こうして彼女は内の不安を押し殺し、聖杯戦争の舞台へと降り立った

…もしこの時点でケイネス・エルメロイ・アーチボルトが聖杯戦争によって既に死亡していることを知っていたら彼女は引き返しただろう、だが当時ウェイバーが後ろめたさから意図的にケイネスについて話を伏せていたため、彼女はそれを知らなかった、聖杯戦争による命の取り合いに対する認識が甘かったのだ。それを少しでも身近に感じ取れていれば…

「

「クソツ…マスター！聞こえるか!?生きてるか!?!」

両足が無くなって少し軽くなった私の身体。

それを抱え、ひたすら何処かに向かつて走る私のサーヴァントをぼんやりと見つめながら思った

魔術の知識だけなら負けなと思ったのになあ、まさかシンプルに爆弾とは…

——ああ、確かに早過ぎた。

正直聖杯戦争のことを軽く考えていた、自分の親友であり、私とそう大した差の無い彼…ウェイバーも生き残れたのだから。

「……………いや」

違う

「……………怖かった、んだ」

「マスター！生きてるな!!よし、もう喋るな！」

「唯一、あの場所で、いっしょ、にいて…楽しい奴、が…遠い存在になるの、が」

彼が聖杯戦争を生き残ったと言うのなら、私も生き残らなきゃ——

「気の…合う親友、に、置いて、行かたく、無かったんだ」

ああ…今気付いた、聖杯戦争なんてどうでも良かったんだ

）

ベッドの上、夢か現実かも分からない中思う

最初の最初は、魔術師の考え方を変えようと必死だったはずだけど…いつからかなあ…？

「つ…『レオレオ！防御機能強化！』」

自分の考えを話すことから…いつからか彼に会うことが目的になってたんだ

「終わりだ！」

「うおおおっ！」

歪な形の弾丸が、槍をすり抜けて向かってくる

…こうなるって、分かっていたらなあ

「告白、してたんだけどな」

――――

――――

――――

――

――



## 第8話 『9人目』と『10人目』

キャスターのマスター…ノーアがふて寝している頃…

G地区、倉庫街にて…

「く…」

まずい状況だ…

掠った銃弾によって少しだけ肉が抉り取られた左腕に雨が染みて痛みが増す。

とりあえず大雑把に止血、次の攻撃に備えて構える

今日はライダーのマスターに接触する日…よりによつてこのタイミングで敵に遭遇するなんて…!

しかもアーチャーが言うには今戦っているマスターとサーヴァントも本来なら味方になってくれるハズの人物らしい、余計な潰し合いをしている場合ではないのに…!

「マスター…」

心配したアーチャーがセイバー(?)を一時押し退け、私の無事を確認しにくる

「私は大丈夫!敵サーヴァントの相手をお願い!」

だがこのレベルの敵相手にいつまでも時間稼ぎしてられないぞ!と言ってアーチャーは敵サーヴァントがいるであろう方向に駆けていく

分かってる!分かってるけど…!

「くっ!!」

再び何処かの影から飛んできた銃弾を紙一重で回避する

魔術師のくせに銃なんか使うってことは…

十中八九、ルマスさんを殺したマスターで間違いない、ただでさえ敵サーヴァントに手を焼いていると言うのに……!

撃たれた方向から敵方を察知し、別の遮蔽物に隠れて様子を伺うでも打つ手無しというわけではない、その一つが敵サーヴァントのクラス：そこから考えて時間稼ぎならこちらが有利だ

戦闘に入る前の光景が脳裏に浮かぶ

「……」

ライダーのマスターの隠れ家へ向かう途中、通り抜けようとした倉庫街で彼らとは遭遇した。

「……攻撃が来る!」

再び銃弾を回避、だが思考は止めない

会敵するや否や、俺達はセイバーとそのマスターだと名乗り、サーヴァント戦&マスター戦のタッグバトルに突入することになったんだ

「そうだ……」

まずこの時点でおかしい、何故彼らは隠れる場所や死角の多い倉庫街で待ち伏せしていたにも関わらずサーヴァントとマスター、2人揃って入口で姿を晒した?それもわざわざクラスまで宣言して……

殺す気ならもっと奥までおびき寄せてから不意打ちをするべきだ。：一騎討ちを重んじるセイバーだからしなかった?いいや、なら私と敵マスターが戦つてる理由にはならない

「どうした小娘!逃げているだけか!」

軍服の厳つい男が物陰から物陰へと少しずつこちらへ移動してきていたのが一瞬見える

恐らくあのサーヴァントはセイバーのフリをした他クラスの何かだが、大方予想はつく。

まずセイバーとアーチャー、ランサーは無条件で除外、アサシンは最後まで自分の正体を隠してこそこのクラスであんな正面切つてドカドカ戦うようなクラスじゃない、キャスターも同理由で除外、これから会う予定のライダーも除外。そうすると残るのは……

「狂戦士のクラス、バーサーカー」

…の、はずだがアーチャーと戦っている彼を見れば、彼にはしっかりと理性があり、会話も成り立つ。それをバーサーカーだと断言するのは少々難しい、しかしバーサーカーだとすればこの奇怪な行動の意図も辻褄が合う

バーサーカーは他クラスに比べて段違いに魔力消費が激しい、あくまで憶測だが最優のクラスであるセイバーを宣言し、わざわざ正面から戦いを挑んできたのは同盟が目的ではないだろうか？

同盟が組めれば必然的にバーサーカーだけで戦う頻度は減る、つまりそういうことだ

「こんな腰抜けのマスターとはな！従えているサーヴァントの格も知れたもの！」

さつきから繰り返しているこの挑発も、スタミナの無いバーサーカーの特徴から焦っているようにも見える…気がする

どうしよう…？

こちらから同盟を持ちかける？いや、かえって怪しまれる。この手の場合、多分向こうから同盟の話をさせないと難しいだろう。

ならどうやって相手に言わせる？敵がここまで散々戦っているのはおそらく、目的以外に全力を出せないアーチャーの不調を見抜いた

というのが1番自然だ、結果として私かアーチャーどちらかに致命的な損失を与えてから同盟を持ちかける、という形が敵の望む展開だ、選択権がなくなるから。

「うっ!?」

目を抉る勢いで飛んできた弾丸を回避する

このままじゃ持たない…!いくらバーサーカークラスのスタミナが無いと言ってもこれは…!

この男…! マスター最悪死ななければいつて魂胆だ!

今ここで敵の嘘を破るのは容易い。

『セイバー?冗談でしょ?喋れるバーサーカーとは驚いたけど工夫が足りないね!』とでも言えば1発だ

だがそれは最悪の手、向こうにしてみればバーサーカーだとバレたく無いからセイバーを名乗っている、こちらがクラスを見破ったと分かれば令呪を切つてでも口封じに来るに違い無い

そして、現状最もマズいのは――

「ああっ…もう!『ガンド』!」

「こオざかしいッ!」

移動の隙を狙って打ち込んだガンドが銃本体で弾かれ、反撃が来る

「うっ…わ!」

日本がかつて使われていたとされる火縄銃によく似た、言わば時代遅れの銃、兵器そうとしか見えないソレから放たれた弾丸が1秒前まで遮蔽物として使っていた倉庫外壁を粉々に吹っ飛ばす

火力が違いすぎる…!多分ただの銃じゃ無い!

私が使える魔術、それも飛び道具となるとせいぜい相手をちよつと吹き飛ばせる劣化ガンドだけ…大砲クラスのものもあるにはあるが

発射に時間がかかりすぎる

普段あまり回さない脳を全力回転させる、少しのミスが死に直結するのはルマスさんの件でよく分かったから…だが突如として現れた1つの気配が私の思考を強制停止させた

この感じ…別のサーヴァント!?

混乱のあまり一瞬頭が白一色になりそうになるが戦闘中だと思いついて正気を保つ

超速で接近してきたとか偽装を解除したというならまだ分かる、だが今の現れ方は…

「捉えたぞ！」

「!!」

迫る鉛玉。令呪の発動も、間に合わない！

死ぬ…！

「…生憎と、我々が潰し合っている余裕は無い」

「…え？」

私を救ったのは、サーヴァント…だが、アーチャーでは無かった

社交ダンスのように右手で私の手を取り、左手で私の背中を支える青年

ソレは鋼鉄の倉庫外壁を吹き飛ばす威力がある銃弾をただの蹴り1発で弾き飛ばしてそう言った

「イギリス人…？」

最初の感想はそれだった、状況が急変したせいで頭の整理を優先するか戦闘を優先するか迷っていたのだ。…それが先程突然出現した気配の主だということを理解したのはその少し後。

「さて、自己紹介をしたいところだがあのような野蛮な戦闘狂達に狙

われていてはおちおち話も出来ない…いや、そもそも自己紹介をするわけにも行かなくてね、要点のみ話そう」

どうかそこは許して欲しい。と彼は体勢を戻して手を離す

「彼…アーチャーと…そのマスターである君、君たちは言わば最後の砦だ、君達の死は即ちこの世界の終わりを意味する」

「え…?」

それはどういう…

だがサーヴァントは私が質問する暇も与えず言葉を続ける

「聖杯戦争なんかをしている場合では無いと言っただよ、君の呼び出したサーヴァントは他6騎とは呼ばれた目的が違う」

「ちよ、ちよつと…」

そんなこと一気に言われたって分かるわけが…

「私もできる限りのことはしよう、さあ…もう行きなさい」

ここは私が引き受けよう、とサーヴァントはこの雨の中わざわざキセルをふかす

「マスター！逃げるぞ！」

「待ってアーチャー！この人には聞きたいことが…わっ!!」

がっし、と猫を掴むように背中を引っ捕まえられたと思うとあつという間に倉庫街が見えなくなる

一体これはなんなの？聖杯戦争をしている場合ではない？呼ばれた目的が違う？

以前からアーチャーが言っていた目的…もしかしてあの人はそれを知っている…?

敵マスターとバーサーカー（推定）から離脱できたのは良かったが私の中にはモヤモヤとした違和感がより大きくなって残ったままだった…

分からない…この聖杯戦争の裏で一体何が…？

）

同時刻、倉庫街にて

「…」

下がれバーサーカー

念話でバーサーカーに指示を出す

（下がれ？てめえ…今俺に『退け』つつったのか？）

「…」

やはりこういう部分はバーサーカーなのだな、戦闘行為に対する執着というか執念というべきか…戦闘時以外は俺よりも遥かに頭が回るが戦闘に入った途端勝つこと以外考えなくなるのは玉に傷か。

戦闘行為を中断しろと言った、お前のスキル…なんだったか忘れたが代償強化…強制束縛スキル？にマスターからの指示以外の戦闘禁止という禁があった筈だ、1つの破ることに無視できないダメージが蓄積する禁の1つの…それに同盟の作戦を立てた時点でお前は既に禁を1つ破っている。今はこのサーヴァントの正体を探る方が先だ…まあ安心しろ。

……全ては勝つためだ……

その言葉にしぶしぶバーサーカーも引き下がる

全く御し難い…が、意思疎通ができる分、クラスが気付かれにくい点は助かっているがね…

目の前の男がどんなクラスのサーヴァントにせよ、アーチャー陣営を支援する者であることは間違いない

……が、まずは対話からだ

「さて、まずは話をするか？サーヴァント。」

「そうだね…聞いてくれると助かるよ」

俺の手元には開戦前にバーサーカーから借りた火縄銃がある、俺でもサーヴァント相手に有効打を与えられる貴重な武器であり、火縄銃でありながらサーヴァントの武器だからか雨の中でも問題なく撃てる。

最悪話し合いが『もつれた』としても対処する手段としては充分だ  
そして何よりもー

「ー 『それ』でよく割り込む気になったな？」

「賭けとも言えない無茶をするのは趣味ではないが…そうも言っていない  
られないのでね」

フン…胡散臭い男だ…

「それで？話したいことと言うのはなんだ？」

右手に握る火縄銃に僅かに力が籠る

「それはー」

、

「ー」

…バカな

「バカげている、到底信じられん」

「しかし私がこうしてここに居ることがその証明とも言えるのでは無  
いかな？」

サーヴァントは勝ち誇ったかのように言う

そんな余裕は無いくせに。

「…だとしても、だ。俺達は聖杯を諦める訳にはいかん」

祖国、アメリカの永遠の繁栄…その願いを諦めるなんていうのは俺



に『死ぬ』と言うことと同義だ

お前の言うことが真実だったとしても俺は従う気は無い、そう言いかけた言葉はサーヴァントの予想外の発言によって遮られた

「ただでとは言わないさ…ウルフルズリーダーの所在を教える、というのはどうだろうか？米陸軍将校、クライム・アルバート？」

「…」

俺のことを…！コイツ何者だ…？

）

同時刻、日本…アメリカワシントンD.C. 行きの飛行機内にて…

「それで？その『獣』とやらはお前がそこまで警戒する程のものなのか？英雄王ギルガメッシュ」

つい先ほど、窓側の座席に座った聖職者… 言峰綺礼が言う

「ああ、今はなりを潜めているようだが…もし覚醒したとなればそこらの英霊雑種にはいささか手に余る、我自ら出向き、滅ぼす他あるまいて」  
「ふむ、そうなのか…」

『獣』とやらの気配が分からない綺礼にも、うすうす事の重大さには気が付いていた。

「あら？…こんにちは！帰郷される方ですか？日本は良い国でしたか？」

1人の女性客がギルガメッシュに声を掛けてくる

「……………失せよ雑種、不敬であろうが。」

睨みを効かせ、不機嫌そうに席に座り直すギルガメッシュとその睨みに怯えて凄まじい早足で離れていく乗客。

ふむ…

その気になればバーサーカーと戦った時のように宝具：ヴィマーナにでも乗って飛行機よりもずっと早く目的地へと着ける：今のようにならぬに一般人に話しかけられる、というのも無いだろう。それを捻じ曲げてわざわざ『飛行機とやらを手配しろ』と言ってきたのは：その『獣』とやらに存在を察知されるのを防ぐためだと推測できる

「……だとして……」

必然的にその『獣』の漠然とした脅威度が脳内で組み上がる

「……」

『もう間もなく離陸いたします、荷物など落とされぬよう今一度ご確認下さい』

「……」

綺礼にもギルガメツシュにも、その表情に余裕は無い。

『獣』がどういふものかよく知っているギルガメツシュとギルガメツシュがどう言った人物かある程度知っている綺礼：周りの乗客が若干感じ取れる程の緊張感を纏った2人を乗せた飛行機は、今離陸した

## 第9話 痛恨『騎』

G地区 とあるオフィスビル最上階にて…

「ここだな…」

両手にはめた白手袋を再度確認し、会場へ入る…もちろん令呪を隠すためだ、当然だがこの白手袋には魔術的気配の隠蔽も含めている

学校の体育館より少し小さめなその会場には、ここが元々オフィスビルだということ忘れさせるような空間となっていた。…具体的にはホテルや式場のよういくつかの円形テーブルと椅子が並べられ、最奥には壇が構えてある

まだ午前6時前だというのに随分人が多い…流石は大手警備会社『ゼロリスク』主催のパーティーだったところか…

あのウルフルズを相手に戦い続けているのは伊達ではないらしい…私の個人的な意見としてはいい加減警備会社から民間軍事企業に変更するべきだと思うのだがね。

「ふむ」

人が多いのは好都合だ、ランサーに持たせたノートをアーチャーのマスターが受け取ったのならそろそろ彼女もこの会場に来るからだろう

このような場所でひっそりと会う分には人は多ければ多いほどいい。

「おや？ああっ！もしかやフリーレンさんでは!?!」

会場の奥にある壇上から雪のように白い長髪を靡かせた青年が駆け降りてくる

「いかにも私がフリーレンだが…キミは…?」

歳をとつても記憶力に曇りは無い、彼とは初対面なのだが…？

(む！此奴、何故主人殿の名を知っている!?…もしや敵？なれば！)

よさんかライダー！退がっておれ！

むう、申し訳ありません主人殿…と空気が抜けたようにライダーが  
眩く

今にも実体化して目の前の青年の首を落とそうとするライダーを  
慌てて止める

目的を忘れるなライダー、私達はアーチャーのマスターと接触し情  
報交換、ひいては同盟を結びにきたのだ。

だからこそマスター達が引き下がる朝方からの時間を選んだ、戦う  
つもりが無いのなら夜間はさけるべきだからな

「ああすみません！私<sup>わたくし</sup>、この度このパーティーの主催者兼、司会者を  
務めさせていただいているステイブン・ヘロイドと申します！フー  
レンさんの試合、全部見させていただきましたよ！いやあく、あの  
凄まじい拳法！ほれほれしました！」

「ああ…そういうことか」

私はとある『拳法家』に憧れ、世界中を旅して武術の心得がありそ  
うな者から手当たり次第に試合を申し込んだ時期があった…今にし  
て思えば我ながらなんと自分勝手よな…

「しかしそんな昔の事に目を向けてくれている若者がいるとは、私も  
まだまだ捨てたものではないらしい」

ツール家の代表としてここへの入場を申し込んだため、当時は断られ  
ると思っていた…いくらツール家の当主がまだ幼いミラ様とはいえ、  
使用人を代表にするなど普通はしないからだ、しかし通ったというこ  
とは――

「フーレン・アジャイルという名前を聞いた時は驚きましたよ！まさ  
か僕…あ、いや私が開いたパーティーに貴方が来てくださるとは！」

私個人としてはこのような未来ある若者が私のような老ぼれに目を向けてくれるという事実を嬉しく思うが…今だけは素直に喜ぶことができなかった

なるべく注目されたくはなかったが今ので会場の注目が少し集まってしまったからだ。

『是非楽しんでいって下さい！』と言ってステイブンは壇上の方へ戻って行き、近くの女性スタッフからマイクを受け取る

『ええー、皆様！此度は朝から私どもに貴重な時間を割いていただき、ありがとうございます！』

舞台上の司会者ステイブンの声がフロア中のスピーカーから響き、会場中の視線が壇上に集まる

『皆様に集まっていたのはお送りした招待状にも記載しました通り…言ってみればガス抜きでございます。』

ご存知かと思われませんがこのところA病院や市内で起こっている爆破事件…

あのテロとも言える極めて悪質な事件のせいで市民の皆様には大きな不安感を持っている方が多いのではないのでしょうか』

「…」

私はそれがマスター同士の争いで起こったことだと知っている、ランスターのマスターはその1つ目で重傷を負い、2つ目で殺されたのだ

『我々も調査を進めておりますが件のウルフルズくだんに動きは無く、第三勢力によるものではないかと推測されますが調査は難航…犯人も手段も不明という芳しく無い状況となっています』

「…」

その言葉に少しだけ疑問を覚える

果たして本当にそうだろうか？…いや、ゼロリスクを疑っているわけでは無いが、今回の被害者がランサーのマスターだったと知っている私にとって今回の爆破事件はウルフルズの誰か：具体的には言えばマスターになったウルフルズメンバーの誰かだと思案する

『ですのでせんえつ僭越ながら、私共から！我々ゼロリスクの下で働いてくださっている社員及び、支援してくださっている方々へ感謝の気持ちを込めてパーティーを開かせていただくことになりました！

：根本的な解決にはなんの関係も無く、不謹慎だという意見もありましょう。

ですがそれを押しして私はこの企画を立ち上げました！

非難も苦情も覚悟の上！どうか今日だけは全てを忘れ、この時間をお楽しみください！警備会社ゼロリスク主催パーティー、朝の部を！ここに開催します！』

ペこりと司会者が頭を下げ、直後に四方八方から拍手の音が鳴り響く中、私の考えはあと一步のところまで纏まらずにいた

手段を選ばん排除方法：だが結果としてマスター、サーヴァント共々正体を明かすことなく敵マスターを排除したその手方は見事という他ならないが、それを普通の魔術師が実行できるかと聞かれると疑問が残る。

こんなやり方を平然とやってのける者がいるとすれば『魔術師殺し』か、もしくは『ウルフルズ』の戦闘部隊のような無慈悲集団の誰かだろう

「…」

そしてそのマスターが仲間にも秘匿しているとすればウルフルズ

にも動きが無いのは必然…1番の気がかりは――

そいつはどうやって団長…リーダーであるザイルを出し抜いたのだ…？

(主人殿！小耳に挟みたいことが一つあるのですが…)

どうしたライダー？

声の質から、あまり良い報告ではなさそうだな…

(付近の倉庫街から戦いの気配を感じました！)

…！

倉庫街…？なんということだ、恐らく片方はアーチャー陣営だろうがよりによつてこのような時間帯に仕掛けてくる陣営がいるとは…  
雨が降っていてまだ暗いとはいえ、今はもう明るくなっていく時間帯だ

倉庫街はこの窓から僅かに見える場所であるため、さりげなくの窓の方へ行き、意識を集中させる

「…」

人避けと秘匿の結界か？だが、ううむ…

結界の貼り方が…本当に隠す気があるのか？と言いたくなるほど大雑把、穴だらけなものなのだ、あれでは一般人ならば近付くことは無いだろうが魔術師に対しては『是非見に来てください』と言っているようなもの…

それが狙いか？とも勘ぐったが…それが確信と取れる証拠はいまのところ持ち合わせていない

しかしどうするか…

あそこでアーチャーが交戦中なのはほぼ間違いないだろう、だが助けに行くという選択肢はまだ取れない

トロイアの英雄が命をかけて繋いだ線ではあるが…そうだとして

もアーチャーの正体についての情報が一切無かったことが気になる。  
「迂闊には動けんな…」

「あのー…」

「む、へロイドさんか、どうされた？」

思案中でステイブンが近くに来ていることに気が付かなかった、慌てて彼の方へ振り返る

「呼び捨てで良いですよ！恐れ多いですし…」

「ふむ、ではへロイド君と呼んで良いかな？」

「ええ、どうぞお好きにお呼び下さい！…それでフリーレンさん、何か…その、パーティーはお気に召しませんでしたでしょうか…？ああいえ！出過ぎたマネをしました！すみません…！」

慌てる彼の左腕を掴み、宥める

「待ちなさい、まだ私は何も言っていないだろう？…それで、うむ、パーティーの方は私が慣れていないというだけでそちらに落ち度は無い、大丈夫だよ」

「氣を使つてくれてありがとう、と手を離してステイブンに礼を言う」

「そう、ですか？何やら真剣に倉庫街の方を見ていらしたので…何か気になることでも？」

「いや、ただなんとなく見ていただけさ、さて料理でも頂こうかな？」  
いくつかのテーブルに並べられた料理のうち『日本料理』と書かれたプレートが掛けてあるテーブルへ向か…おうとして彼に呼び止められた

「フリーレンさん、もし宜しければ屋上へ行きませんか？」

急遽ではありますがvip待遇の用意もさせています、と彼が言う  
「む」



屋上か…

恐らく…こういった場合は苦手なんじゃないか、と思つての言葉だろう。しかも彼の言葉から考えるに私の為だけに用意した物のようだ。

…アーチャーのマスターと密会するため、本当はこのフロアから動かない方がいいのだが自分を慕ってくれる若者の好意を無下には出さない

「ああ…是非行かせてもらいたい」

「おお！ありがとうございます！」

元気よく言うなり彼は何処かへ電話をかけ始める

もしもし？ああ僕だよ、今からお客様が来るから準備しておいてね！

「お待たせしました！行きましょう！」

元気よく、それでいて騒がしくならないように声をすぼめて会場から出るステイブン、私とライダー（霊体化）もそれに続く

（…主人殿、無理を承知で申し上げますが）

屋上への階段を登る途中、黙っていたライダーが真剣な声色で話しかけてきた

どうした？また戦闘か？

（いえ…その、先程の会場にあった…「チーズぴぎ」なるものを、後で食べても宜しいでしょうか…？）

「ずこっ

「フーレンさん？大丈夫ですか？」

「も、問題ない」

真剣な声色と話した内容が離れすぎて思わず階段でこけそうになつたが持ち直す

あ、ああ、だがここではダメだ、側からみればピザが浮いているよ

うに見えるからな…帰ったらミラの分も含めて作る、それまで我慢してくれ

(分かりました！)

そんな聖杯戦争を忘れさせるようなやり取りを終えて私達は屋上へ、相変わらず雨が降りしきっているが、一部天幕のような物が貼られていて雨を凌いでいる場所があるのが見えた

用意された場所というのは恐らくあの天幕だろう

「あいにくの天気ですが楽しむ分には問題ないかと！」

(主人殿)

分かっている、楽しんでる時間はない、理由を付けて早めに切り上げるさ…だがいきなり断るのも悪いだろう？

手渡された傘を差して天幕の方へ向かう

「こちらですー！」

と、傘も差さずに雨の中、彼は私を先導する

それを見て疑問に思い、聞いてみた

「君の分の傘は？」

「いえ！私には必要ありませんよ、片手が塞がってしまうのでね…」

——アサシン。」

ツ!?!?

最後の、爽やかな青年の面影が一瞬にして消えた一言、人の心など無いような低い声から発せられたその一言で、背筋に氷柱を入れられたような感覚に陥る

しまった——

「ライ——」

「撃て」

## 第10話 痛恨『殺』

G地区 オフィスビル屋上にて…

「狐もどきが！」

「タヌキに言われたくねーってんですよ！」

——今の彼女に普段の余裕は無かった

先程目が合った倉庫街のサーヴァントのことではない、原因はそれであるのだが、焦っていたのはもっと近くのことだった

く、よりによってワタクシがこのようなミスを…！

『撃て』

その一言で、私は引き金に掛けた指の力を込め、撃発。それで敵サーヴァントの注意を引く…それだけでよかった、のに——

普通こんなとこまで追ってきますかホント…呆れた執念というか…ああもう！

一瞬、一瞬気を取られてしまった。それによりリスク無しで勝利できる絶好の機会を逃してしまった結果、起こるはずのなかった戦闘が進行している

「いい加減駆除されてくださいませ！」

右手に握ったショットガンから、マシンガンのようなありえない連射速度で散弾をばら撒いて敵サーヴァントと間合いを維持しつつ、グレネードを投擲する

「小細工を！」

敵サーヴァントが散弾を弾き、グレネードを両断し、こちらの眼前に迫った頃にはショットガンの再装填が完了、再びショットガンとグレネードで間合いを取る…という教材のようなイタチごっこが続い

ていた

弾薬、爆薬は半永久的に尽きないとはいえ『今の』霊基では罫が開かないですねえ…しかしどこかしらにグランドクラスが来ているとなると下手にあの姿を出す訳にも行きませんし…

宝具を使ったところでこのサーヴァントの真名から考えればミスイルからミスイルに飛び移って近付いてくることも充分考えられる

っ…忌々しい！

目の前の狸でも異世界からの来訪者でも無く、下らないミスをした自分自身に苛立つコヤンスカヤ、その表情には普段の彼女からは考えられない焦りの感情が浮き上がっていた

一方そのころ、ザイルの方は…とてもコヤンスカヤ側の戦況を気にできるほど、余裕は無かった

コヤンスカヤと敵サーヴァントは互いに譲らず撃ち合っているよ  
うだが…クソツ

「ぎっ…！」

スコーピオンサブマシンガンの種類の1つ、軽量化と折り畳みストックにより取り回しやすさと精密さを両立した使いやすい銃の連射のような速度で繰り出され続ける打撃の嵐。

顎、首、みぞおち、脇下、膝といった急所狙いのそれらは一撃でも当たれば致命傷となり得るもの。死なないにしても戦闘行為に致命的な支障が出るのは間違いない

ザイルはひたすらそれをコンバットナイフ一本と義手で捌き続けるという荒技を繰り返していた

厄介だ…！

作戦では否幻想弾2連射にコヤンスカヤの近距離狙撃を上乗せして速攻でマスターを排除するという計画だったが：どういう訳かコヤンスカヤの狙撃が遅れ、否幻想弾は2発ともマスターに防がれてしまった

起きたことはもう覆らん、コヤンスカヤには後で事情を聞くとして今この状況をなんとかしなければならぬ。

せめてホルスターのデザートイーグルか懐の、もう一本のコンバットナイフを出したいところだが：

「今——」

心臓を狙った掌打を回避し、牽制のナイフを振るう

この老人から一瞬でも目を逸らせば終わりだ：！

やれやれ：

サーヴァントが居ることは分かっていた。

マスターを特定できたのはついさつき、こいつが倉庫街の方を見下ろしていた時だ。

それがまさかフリーレン・アジャイルとは：

——フリーレン・アジャイル——

表向きはツール家という一般の金持ちに仕える使用人兼用心棒。

今年の末に65歳となる

出場した武術大会等でほぼ優勝、準優勝を飾っており、その一切無駄のない動きは年齢を感じさせない、世界的にも有名な人間だ。だが

……ここから先は切嗣からの情報ではなく教会の、代行者の知人から、酒の肴に聞かされたものだ（知人と言っても散々殺し合って結局決着が付かなかっただけだが）

50年ほど前、詳しい場所は知らんが日本の山奥に住む、とある少年が秘匿されるべき魔術の何かを見てしまったらしい。

当然のように教会は代行者を差し向け、少年を殺そうとした。

だが最初に派遣された代行者は返り討ちに遭い死亡、続けて派遣した2人目は重症を負って帰還。最後は治療を終えた2人目と新しく派遣された2人の代行者、計3人を組ませるといふ暴挙とも言える行動に出た聖堂教会だったが3人全員がやはり死亡している

その後しばらく身を潜めていた少年は何を思ったのかふらりと教会を訪れてこう言ったらしい

『僕はただ、師の技を、人生を、思いを、色々な人に知って欲しいだけ。師に誓ってここで知った神秘を口外しないと約束する。必要なら君らの都合の良い場所にでも引越そう』

だから僕に、世界中の人と関わることを許してくれ。と…

結局少年は教会の監視下に入り、戸籍や名前も変更。当時教会の一部構成員が住んでいた家に使用人として住み込みで働き始めたと言う。その少年の今の名前が――

「フリーレン…アジャイル…!」

やれやれ、面倒なことになったな…そもそもとしてマスター候補にすら上がっていないなかったコイツがどうやって聖杯戦争に参加できたんだ…?

突破口が見出せず、焦りと苛つきを覚えていたザイルとコヤンスカヤ。だが焦っているのは彼らだけではなく――

く

「はあっ!!」

微量ながら魔力を込めて突き出した拳がステーブーン…目の前の、右腕が義手の男の頬を掠める

「チィッ!」

義手の男はナイフを持ち直し、突き出した私の左腕を串刺し…いや、斬り飛ばそうと振るってくるのを空いた右手で妨害する。するとその妨害を分かっていたかのように私の足を踏み砕かんと間合いを詰めてくる。

近付いてくるのであれば対処はできる、はつきり言って近接戦闘にのみ絞れば私の瞬間戦闘力はサーヴァントであるライダーのそれを上回ることは実証済みだ。

が、しかし、ここぞという好機が訪れる瞬間振った拳は虚しく空を切るのみ、義手の男の…もはや予知能力を疑えるような戦闘能力にフリーレンは密かに冷や汗を流した

ここまでやって攻めきれんとは…!

50年前、師より賜った八極拳の極意…かつて目の当たりにした師匠の技には遠く及ばないとはいえ、1日たりとも鍛錬を怠らなかつたこの拳に曇りは無い。

間違いない昨日よりも磨きのかかったそれが、全くと言って良いほどこの男に当たらないのだ

ナイフのせいで思ったように打ち込めていないというのもあるだろうが、それを差し引いても義手の男の対応力が高い。

一応、大きな反撃を許さず攻撃し続けることができているのは有利な点だが、それも長く続かないだろう

「ふっ…ふっ…」

『一撃、それで事足りる』

そう、鍛錬のたびに口にしていた師の言葉通り、この拳は初撃で終わらせることが前提となっている暗殺拳…故に持久戦には向かないのだ

結局『気』を上手く扱うことができなかつた私はそれを魔力で代用しているが、私の魔術適性及び魔術回路は非常に弱い上に今はライダーというサーヴァントがいる…今の私は残り少ない燃料のレーシングカーを出力全開で動かしているようなものだ、老いという壁もある私に時間は無い

「せああああつ!!」

「く、おおお!」

ナイフと拳が空を斬<sup>切</sup>り続ける

だめだ、やはり攻めきれん!かくなる上は…

50年前、師が見せてくれた光景が脳裏によぎる

あの、師を英雄たらしめる奥義…私も使えない訳では無い。あれならば――

「…」

だがそれを使うと言う事は50年前の誓いを破る事になる。

誓いに魔術的束縛は無いが、どちらにせよ使えばただでは済まないだろう

「ッ!!」

く…!?

ヒュツ、とナイフの切先が僅かに腕を掠める

私が遅くなったのか、向こうが慣れたのかは分からないが…もう時間が無いのは火を見るよりも明らかだった。

そしてその事実が、私の背中を押した…!



「」

私は、決断した。

…ミラよ、血の繋がりが無いにも関わらず私を祖父として呼んでくれてありがとう、もうボール遊びは出来なくなるかもしれないが…まあ部屋で一緒にお茶を飲むくらいはできるだろう。

「…!?!」

ズシヤツ、と右手から聞こえる不快な音、そして義手の男が声にならない驚愕の声を上げる。その隙を突き、男の義手接合部目掛けて衝撃。機能不全を誘発させる。

「主人殿っ!?!」

「騒ぐな!」

ライダーを一蹴し、ふと手元を見る

右手は…もう使い物にならない、分かってはいたが…

ナイフが深々と手の平から甲へ貫通し、直後に先とはまた違った不快な音を立てて中指と薬指の間から真つ二つに裂け、血が噴き出す

だが、そんな些事など構わない。少しの間この男の動きを止めればいい

まだ動く3本の指で男の拳を捕らえ、私が唯一使える術式を50年ぶりに展開する

「術式展開…：魔術回路偽造…」

牛若丸よ、常時の呼び名はライダーだったとはいえ、私だけでなくミラにも名を明かして接してくれたこと、私を主と呼んで付き従ってくれた事に感謝する。

「…ッ!! コヤンスカヤ!! どんな手段を使っても構わん! コイツを吹き飛ばせ、早く!」

これから使う技の気配を感じ取ったのだろう、義手の男が叫ぶ

だが此処まで来て邪魔されてなるものか

「ッ! 『霊裳重光』——『令呪を持って命ずる! 牛若丸! 宝具解放! 敵サーヴァントを止めろ!』」

一画目の令呪が消え、ライダーの動きがほんの一瞬痺れたように固まる

「なっ…!? 主人殿! 今そんなことをすれば主人殿が——ううっ!?——」

『遮那王、流離譚…』  
しやなおう りゆうりたん

「令呪を…!」

「神経系偽造、筋組織偽造、骨組織偽造、血管系偽造、血液偽造、リンパ腺偽造、臓器偽造——」

「くっ! 『レオレオ! 防御機能全開!!』」

「偽造完了確認、令呪解放…!」

申し訳ありません師匠…私は禁を破ります。全て私が未熟だった故、弁明の余地はありません。…お許しください。

二画目の令呪が消え、膨大な魔力が身体へと入ってくる。それはさながら、全身の穴という穴から溶岩が流し込まれるような感覚、身体が爆散するのではないかと誤認するほどの…だが——  
「があっ!」

怯む事なくコンクリートの地を踏み鳴らし、体内に押し込めた令呪の魔力を全身から解き放つ

アサシンも、そのマスターも…!

長く生きて経験から来る直感か、武術家としてそのような何かを感じ取ったのか、本人すらそれは理解できていなかったが：確信はあった

貴様らはここで、殺しておかねばならん存在だ！

解き放った魔力がドーム状に広がり、半径数mを満たす

「かつ…!?!」

範囲内にいた義手の男はもちろん、雨粒も、血の雫も、空気までもが、広がる魔力の塊に飲まれた瞬間、時間が停止したかのように固まる、そして――

「七孔噴血 撒きて死ぬ」

残った全ての力を左腕に回し、その硬直した身体の心の臓めがけて

『『にのうちいらす無二打』』

――一撃、打ち込んだ――

## 第11話 求める声／避けたい手段

???にて…

「…」

喧騒から離れ、彼は1人考える。正体不明の人物が自分を必要とした意図を。

「…やはり無理か」

何度か試しているものの、どうやっても『その場所』に行く事が出来ない

誰かが邪魔をしている、そう考えるほか無いが…

情報が足りていない、いくら彼でも0からたどり着くことはできない、故に彼は考える。

その『誰か』が他の誰でも無く、自分を必要とした意図を、それを妨害しようとする第三者の正体を…

結局、今のままではそれが答えに行き着くことは無いだろう、分かったことと言えば1つだけ。

「君がどこの誰かは知らないが…どうやら私は余程信頼されているようだね?」

キセルをふかしながら、彼は1人呟いた。

↳

G地区 オフィスビル屋上にて…

「『八艘跳』!!…っは!主人殿っ!」

「ぐうう…!マスター!!」

ライダーの宝具の一撃を展開しかけていた『タマモ戦車』<sup>タンク</sup>を盾にして強引に防ぎ、ホルスターに手を伸ばす

あれはマズい！

かつて異聞帯の1つで感じたものと似た気配

流星にあの衛士長のような脅威は無い、サーヴァントならば軽度のダメージを負うくらいなので問題視する必要はないが――

生身の人間がアレを食らったら間違いなく助からない！

「ッ！」

ハンドガンを敵マスターに向けて撃ち込む、が――遅かった

「があっ！」

時間が止まった――

いや、正確には限定されたその場所だけ、固定されたと言うべき現象。

「七孔噴血 撒きて死ぬ」

銃弾はもちろん、降り注ぐ雨粒すら固定されたその極めて狭い空間の中、老人の放った掌打は、

『無二打』にのうちにらす

ワタクシのマスターを吹き飛ばした

「が、は…あ”っ…!!」

まるでトラックに轢かれた野良犬の様に彼の身体が宙を舞う  
胃の中の物と血液が入り混じった液体が喉の奥から溢れ出し、ラン  
サーの横薙ぎでも傷1つ付かなかった義手が粉々に砕け散る。

「マスター!!」

「ぐっぷっ…、ッ…!!!」

(目を閉じろ!!!)

「…!」

突然送られてきた念話でマスターが何をしようとしているのかを瞬時に理解、目を閉じてマスターの元へと走る

「ふっ…、くー!」ブンツ

直後炸裂するスタングレネード

そして、ぐらりとよろめいたものの受け身をとって着地するマスター

「ヒュー…ヒュー…コヤンスカヤ、そこに落ちたナイフを寄越せ! 奴らはここで始末する!」

逃げるのでは? と言いついそうになるのを抑え、コンバットナイフを拾って投げ渡す

…有事の際、特にこのような状況で命令にいちいち質問を挟むような部下がいたら自分でも腹が立つ

「おのれ…小細工を!」

「…!」カチャ

視力を取り戻したライダーがマスターの首を飛ばさんと刀を構える

だが己への注意が外れたその瞬間を逃すほどコヤンスカヤは甘くは無い

マスターはここで彼らを始末すると言った、ならば――

「それを実現可能なレベルにするのがワタクシの仕事!」

ライダーの刀をハンドガンで弾いて乱し、そのまま接近して踏みつけるように2発跳び蹴りを浴びせる

「くっ!? これしき――」

「鈍いですねえ！」

2 撃目の反動を利用して後方に飛びつつハンドガン撃つ

反撃を許さない3連撃、スピードを重視した蹴りとハンドガン1発ではダメーজなど有って無いようなものではあったが、屋上の端にいたライダーをここから突き落とすには充分だった

「さて…」

不意打ちで稼いだ5秒足らずの僅かな時間、コヤンスカヤは打開策を思案——いや、打開策は既にある。

しかしその手段は彼女にとってかなり抵抗のあるものであり、『それ』を発動させつつも内心かなり躊躇っていた

突き落としたは良いものも、すぐに戻ってくるのは明白…マスターの動きもかなり重いですし状況は悪いですねえ…

ですが、敵マスターも技の反動や片腕を失ったこともあって戦況は互角。例え応急的処置でも、もしマスターを治療することができれば後は勝手に勝負が付くのは間違いないでしょう

「ハア…」

大きなため息を吐きながら魔力を集中させる

別に躊躇うほどのコストがあるわけではないし、彼女の場合真名が看破される心配もない、ただ——気に食わないのである

本来ならどうひっくり返ったってコレ使うなんてありませんが…マスターが負傷した原因を作ったのはワタクシなのもまた事実。避けたい手段ではありますが致し方ないでしょう

コヤンスカヤの魔力の質と現代に適していた服装がみるみるうちに変化していく、そして——

「コホン…きつ、マスター？受け取ってくださいまし♡」

しやん…という鈴の音が鳴り終わるのと、ザイルがフリーレンの首筋を切り裂いたのはほぼ同時だった

く

数十秒前

「ヒュー…ヒュー…コヤンスカヤ、そこに落ちたナイフを寄越せ！奴らはここで始末する！」

コヤンスカヤからコンバットナイフを受け取り、先の閃光手榴弾の影響で目が眩んでいるライダーのマスターへ接近、喉元を狙ってナイフを振り抜く！

「ぬ…！」

老人は見えていないハズの斬撃を片手で受け流し、反撃の構えを取る

「コイツ…！」

これも拳法の類か!?目を閉じたまま防いで――

ド、ドクツ…

「あうぐツ…!?ツ…!!」

不規則になった心臓の鼓動が嫌に大きく聞こえ、身体の内側から感じる全身串刺しにされるような痛みが膨れ上がってゆく

揺らぎ暗くなる視界、消えそうな意識の綱を握りしめるようにナイフを握る

もはや喋る気力さえも戦闘に回し、グラつく脳を回転させて的確な位置にナイフを振るう

「…！」

目は眩んで見えず、右手は裂け、無理矢理魔術回路として代用した



身体は摩耗し、もはや老人の身体は満身創痍——だが届かない  
冗談じゃない……!

戦況だけ見れば即座に退くべきだった、だが今は退けない理由が多すぎる

ウルフルズのカモフラージュとして使用していたゼロリスクという隠れ蓑の露呈、ライダーの刀をすり抜けた否幻想弾、狙撃という戦法……どれをとっても相手からすれば脅威でしかない

特にゼロリスクの露呈は最悪だ、隠れ蓑として最も大きなアレが知れ渡ればもう聖杯戦争どころではなくなる

《全世界が敵に回る》

つまりここで退いても先は無い、なんとしてもここで殺さなくてはならない

「……ああ、クソ」

が、しかし身体のダメージが酷い、このままここに留まって戦っても今の俺にコイツは殺せない、それどころか返り討ちに遭うだろう

「……んぐっ……!」

溺れかねない程の血が喉の奥から溢れ、ポチャポチャと生々しい音を立てて足下を汚していく

「………仕方、ない」

……対処は後で考えよう、コヤンスカヤに撤退の指示、を

本能だろうか、頭が事実を認識するより先に身体が動いていた

強くも無く弱くも無く、地を蹴ってナイフを振るう

「な、に?」

ばつさりと裂かれた首元を抑えて狼狽える老人の目には、先程までそこにいた呼吸の乱れた死にかけの男は映っていない

全快というわけではないが…ああ、身体が軽くなっている

「——ん」

しやん…とどこからか聞こえた鈴の音、

それは不思議ととても小さな音にも関わらず、降りしきる雨音にかき消される事なくその場にいた全員の耳に届いていた

「…お前か」

ふと、音の方を見る

青い巫女服のようなものを着たコヤンスカヤが立っていた

「…」

俺でも分かる程の魔力の質と戦闘スタイルの変化、ここまで出し渋ったのを見るに…考えていたことは俺と同じか

やれやれ、聞くことが増えたな…

そんなことを思いながらデザートイーグルを取り出し、弾を確認する

問題無いな、ん…？

「主人殿オツ！」

と、どうやらコヤンスカヤが突き落としていたらしいライダーが鬼の形相でビルを駆け上がった

「コヤンスカヤ」

「ええ、もちろん♪」

直後、バチンと不透明な紫色の球体がライダーを包み込み、動きを止める

「こ、れは…呪術、の…きさ、ま…」

「さっ、これで彼女はもうなーんにも出来ません、あとはお任せしても？」

「ああ」

…ライダーはもう放置でよさそうだ

「…」

この雨でも洗い流せない程の血溜まりの上で必死に立ち上がろうとしている老人に銃口を向ける

…このまま放っておいても死ぬだろうが念には念だ

「悪く思うな」

引き金を引き、終わらせる

「主人殿っ?!?よ、よくも…!」

「コヤンスカヤ、やれるなら今すぐとどめを刺せ、生かしておく理由は無い」

「かしこまりました♡ではそういうことなのです。」

そしてコヤンスカヤが指を鳴らしたかと思えば球体の中にいきなり炎が出現し――

「ううっ?!?うわあああああっ?!?!ああ、あ…」

悲鳴ごとライダーを焼き尽くした

やれやれ…最初から使っておけばいいものを…

しかし今は後回しだ、先にパーティー会場の方のフォローを入れなければならぬ

取り出した通信機でバルンの端末を呼び出す

『…はい、認識n04です』

「俺だ、ゼロリスク開催パーティーだが問題が起きた。現在の作業を中断し、何人か連れて会場に向かえ、また追って指示する。」

『問題…う…大丈夫なんです——いえ、終わった後で聞かせていただきます。すぐに向かいます』

「頼むぞ…ふー…」

通信機を切り、どしやりと座り込む

…また身体の内側が痛くなってきたな、さっきのは一時的なものか？

「コヤンスカヤ、誰にも見られることなく俺を連れてアジトに戻ることは可能か？」

「ええ、造作ありません…ですがここの後始末はどうされますか？」  
「バルンにやらせる、問題ない…今は早く戻って医療スタッフの元へ行く、さっきの1撃によるダメージが身体のだこまで響いているか未知数だからな」

「かしこまりました！」

「ゴホツ…ハァー、やれやれ」

緊張の糸が切れてそのまま背中から倒れ込む

勝った方がいいが…こっちのダメージも酷いもんだ、ルーチンワークのゼロリスクパーティがこんなことになるとはな…

こうして俺は出発から1時間も経たずアジトへと戻ることになった…

くライダー敗退く

く

ザイル達が去った数分後、同場所にて

「ありや、一足遅かったか？できれば生で見たかったんだけどなあ」

「あはは、いくらザイル君ラブなマスターでも眠気のせいでちよっと動きが悪くなつて——え!?ちよっとコレ…」

「どしたのキャスター…げ！」

キャスターが見ている方にさつと目をやると

「ああ…私の作品がこんな姿に…」

キャスターの付けてる義手が粉々…ではなく、キャスターの付けてる物にソックリの義手があることか粉々とかいう、見るも無惨な形で散乱していた

「まー、サーヴァントとかと戦う機会があれば遅かれ早かれこうなつてたとは思うけどここまで粉々になるとはねえ」

ということは今ザイルは片腕無くしちやつてるのか

粉々になった義手を見たキャスターは思ったよりも落ち込んでいる…まあ丹精込めて作った物が自分の知らないところで粉々になっていたらへこみもするか

「もう！人がせつかくこだわってこだわり抜いた作品を！彼にもう少し丁寧に扱うように言っておくれよマスター！」

「あー、うん、言っとくー」

言ったところで彼はそういう使い方やめないし…キャスターには悪いけどテキトーに返させてもらおう

「…キミ、言う気ないでしょ？」

「彘！なんで分かったの？」

「やっぱりそうだったんだね!？」

!!!ハメられた!？」

「マスター！こうなつたらザイル君が無茶苦茶した責任とつてもらおうよー」

「わ、私関係ないじゃん!？」

「ついでにいつかの仕返しもしてやる！お尻を出したまえ!!」

「話聞いてないし！待って!?!いくら筋力の無いキャスタークラスでも

その力で叩かれたら人間ただじゃ済まな——アバピョー!!??」

後のバルンがまとめた報告書の一部には、『屋上からおかしな話し声が聞こえたが確認しても異常は見受けられなかった』という記載があったという：

## 第12話 幕間 フーレン・アジヤイル

ツール家の屋敷、庭にて…

「ずあつー！」

街路樹より一回り小さな木に昨日よりも磨きのかかった掌打を叩き込む

木といっても大人が金属バットで数回殴れば折れてしまいそうな木だが傷は付いていない、彼の放った一撃により打ち込まれた衝撃は木を傷つける事なく幹から根へ、根から地面へと逃がれ、大地を揺らす

「…ふむ、今日はよく揺れる」

衝撃を『気』に見立てた八極拳の鍛錬だ、実際にこのような鍛錬があつたのかは知らないが…私にはこれが一番合っている

「じいやー！鍛錬はもう終わったのか!？」

屋敷の中からミラが走ってくるのが見える

「ああ、終わったよ」

私が師から教わった練習方法は1日1撃、木を傷つける事なく掌打を打ち込む…というもの

故にすぐ終わるが、その1回分にその日の鍛錬が全て詰まっているので初めの頃は打つだけで神経がすり減ったものだ

「なーじいや、ミラにも八極拳教えてよー」

「こればかりは何度頼まれても無理だ、諦めなさい」

ぶーたれるミラの頭を撫でて、ふといつも持ち歩いているはずの緑色のボールがこの子の手に無いことに気付いた

「そういえばミラ、もしかして何か遊ぶ以外に用があったんじゃないか?」

ボールを使うにしろ使わないにしろ、遊ぶ時は必ずボールを持っているのがミラだからだ

「あつ! そうなんだ! 今神父様が来ててじいやを呼んできてつて、今玄関に——じいや?」

「…ああ、ありがとうミラ、すぐに出るよ」

神父様、か…

「…ミラ、少し待っててくれ」

「うん? うん、分かった!」

暖かな日差し of 差す庭にミラを待たせ、屋敷に入って玄関に向かう

「…」

玄関に近づくに連れて足取りが重くなる

…日本で聖杯戦争があったのは知っている、そして終わって殆ど時間も経っていないこの時期に教会が人が寄越すというと——

「今も昔もあの教会は変わらん」

どう考えても良い話ではない、早々に引き取ってもらおう

開けたく無い心境を押し潰して扉を開け、外に出る

「…おや、神父様に教徒の方々お揃いで…? 教会を空けてまでいらっしやつてこんな老いぼれに何の用かな?」

「回りくどいのは性に合いません、単刀直入にいますよフーレンさん」

先頭に立った神父が言う

「聖杯戦争に参加していただきたく、お迎えにあがりました」

「開口一番それかね、断ると言ったら?」



「申し訳ありませんが断らせません」

彼の言葉に思わず頭をかかえる

…全く、舐められたものだ

「もはや剥がれた化けの皮を被り直すこともしなくなつたか、エナ・アルバート…君の祖父とは確かに教会の監視下に入るといふ約定を交わしたが服従するなどと言つた覚えはないぞ？」

言葉だけでなく、50年前の約束は書類にも残っている。もちろん見返したところで服従、もしくはそれに準ずる言葉は書かれていないし、浮かび上がってもこない

だが怯むことなく神父は言葉が続ける

「応じて頂けないのであれば代行者を差し向けることも厭いません、触媒はこちらで用意しました。サーヴァントを召喚し、聖杯戦争への参加を。」

「断る、老い先短い人生を馬鹿げた殺し合いで縮めたくはないのでね、第一に代行者を差し向けられること自体が疑わしい」

そう言うとき神父はため息を吐いてそれを否定した

「実際に、こうして連れてきていますよ？」

即座に神父の後ろの教徒から放たれる強烈な殺気、そしてそれと共に繰り出される打撃の1撃を見てから受け流し、扉をノックするよりも軽い力でその教徒の胸を叩く

「…!?かっ…!…ッ…!!」

寸分変わらず打ち込んだ衝撃は肺を麻痺させ、呼吸を止められた教徒はその場に崩れ落ちる——が、手加減したこともあつてかすぐに立ち直る

ふむ、代行者だったか…

「次は完璧に止めよう、それでも良いというならば向かって来なさい」  
力まず、だが決して殺気は抑えず、神父含めた教徒達を睨みつける

「師から賜った八極拳の真髄、文字通り死ぬ程見せてくれようか？」  
鈍器を叩き付けたような殺意の嵐を浴びせられた代行者は少なからずたじろいでいたが、その中で神父だけが動じることなく変わらぬ口調で語りかけてきていた

「確かに神に仕える者としては下の下ともいえる手段ですが…聖杯が現れるとあつては教会としても動かない訳にはいかないのです、一応保険としてキャスターのマスターもこちらに付けていますが…あのマスターは様々な意味で3流もいいところ、貴方のような殺し慣れている人間が適格なのですよ」

「…私の知ったことでは無い、参加はしな——」

「代行者を差し向ける対象は、何も貴方だけとは言つてませんよ？」

「――」

瞬間、

ガンッ！

「いきなり殴りかかってくるとは…怖いですよフーレンさん？」

「黙れ」

ビリビリと鉄を殴りつけた反動が拳を伝う

なんだこれは…盾か？ いったいいつから持っていた…？

いや盾だけでは無い、左手に構えた真つ赤な盾とは別に彼の右手には刃渡り70センチはある盾と同じ真つ赤な剣（つるぎ）が握られていて、盾の表面と剣の柄にそれぞれ龍のような絵が彫られている

…？この剣以前見たような——今はそんなことどうでもいい、重要なのは——

ギリ…と自分の歯軋り音がやけに大きく聞こえ、脳裏にミラの顔が過ぎる

「貴様…それでも神父か？」

「一応は、ですね？まあそんなことをすればもはやこちらもただでは済みませんが…それ程までに切迫しているとお考え下さい」

…

ただ代行者と戦うだけなら負けはしないだろう、だが暗殺者の如く四六時中ミラを狙われては流石に守り切れない

「冬木の聖杯戦争で優秀な魔術師の大半は死亡してしまいましたからね…1年未満という異常な間隔スパンも相まって今回の参加者の殆どは3流以下…大した脅威にはなりません、あなたなら間違いなく勝てるでしょう」

「…」

…選択の余地無し、か

「…分かった」

そう答えると剣と盾が消え、また神父の顔がただの不快な笑顔からニンマリとこの上なく不快な笑顔に変わるのが見なくても分かった

「ありがとうございます、ではこれを」

「これは？」

神父が差し出したのは布に包まれた細い棒状の何かだった、形から推測するに筒のようなものに見える

「触媒です、霊脈の位置はまた後ほど連絡させていただきます」

最初と同じ笑顔に戻った神父はペこりと一礼をし、教徒達を引き連れて去っていくのを——私は引き留めた

「…待て」

「おや？如何されましたか？」

どうしてもこの男に聞きたいことがあったのだ

「…そこまでして何故聖杯を求める？いくら聖堂教会でも最初からここまで無茶はしないだろう

それを押してここに来たということはこの行動は貴様の独断によるものだ、違うか？」

「そうだ、聖堂教会はあくまで裁定者<sup>ルーラー</sup>の立場…こんなことが知れたら奴もただでは済まない

「それに、だ」

何故聖杯を求めるのか？その質問をしてもう一つの疑問が生まれた

「何故私にやらせる？ここまで派手にやるくらいならひっそりと自分が参加すればいいだけの話ではないのか？私が勝ったところで聖杯は貴様を認めはしないと思うが」

「これだ、聖杯を求めるというのなら他人任せにする時点で間違っている、だから質問した——だが

「何故だ？答えろエナ」

「…そんなことですか、簡単ですよフーレンさん」

振り返って笑う彼の口から出た言葉は耳を疑うものだった

「私は聖杯なんて欲しくないからですよ」

「…なに？」

「そもそもとして聖杯を渡して欲しいなんて言っていないと思うんですがね？と頭をかきながら神父は言う

「どう言う意味かな？」

「今回の聖杯戦争には『異物』が混じっています、本来聖杯なんて誰の手に渡っても私には関係ありませんがその『異物』だけは例外です、絶対に聖杯を渡すわけにはいきません」

しゅいん、と電子的な音を立て神父の手に先の剣が現れる

『異物』がいくつあるか、女神——いえ神はお答えになりませんが、しかし『異物』である以上は倒すべき『悪』であり『敵』です、ご安心下さいフリーレンさん」

淡い緑色に発光する赤色の剣を振りかざし、神父は言った

「私は世界を救う『勇者』ですので」

「…そうかい」

そこで今度こそ神父は教徒達と共に去っていった

…私には神父が言っていることは殆ど理解出来なかったが——

「…私とキャスターのマスターは囷か」

恐らく何らかの形で神父も参戦してくる、という事実はなんとなく理解できた

信用できぬ奴ではあるが…もし『異物』とやらの正体が50年前の『化物』のような存在ならば共闘も考えなければならんか…今、できることをしておくかな

神父達の姿が完全に見えなくなったのを確認し、触媒を包んでいる布を解いて中身を確認する

これは——

「…笛？」

）

3日後、自室にて…

「精度は…お世辞にも良いとは言えんな」

教会から送られてきた使い魔のカラスをぼんやりと見ながら一人  
呟く

…まあマスターが揃った時、教会から知らせを受け取るためだけの

使い魔だ、精度を求める必要は無い、か

ふと、窓から庭の方を見る

「すごいすごい！」

「ふふん、凄いでしょう！」

会って1日も経っていないのにライダーとミラはまるで昔からの友人のように遊んでいる、幸い屋敷の庭は四方を高い塀に囲まれている、ライダーが実体化していても何も問題はない

：歴史に名を残した英雄に失礼かもしれないが、孫がもう1人増えた気分だ

実際のところ、ミラと一緒になつて子供の様に遊んでいるライダー

：牛若丸に彼の心は助けられていた

もし召喚した時点で牛若丸が英雄らしい態度や振る舞いであったのなら、彼はきつとサーヴァントに仕えていたかもしれない：それくらいに英雄を、英霊という存在を認識していた

「ライダー！私もやりたい！」

「いいですよ！じゃあまずは1枚から挑戦してみましょう！」

「む…」

皿回しをしている牛若丸とそれを憧れの目で見るミラ

皿回しと殺しの技では大きく違うが：その構図はふと50年前を思い出させた

『師匠！やっぱり師匠のパンチは最強です！』

『また来たのか、麓の教会に行くようにとあれほど：第一に弟子とした記憶は無い』

「どのような形となっても、人を魅了して止まないのは英雄共通なの

「だな…む？」

山登りの様子を映していたテレビから嫌なアラーム音がし、画面が切り替わる

『速報です、F地区〇〇ブロックの路地裏にて爆発が発生。付近にいる方はただちにその場を離れ自宅、もしくは付近の指定避難所へ避難するようにお願いします。テロの可能性もあり非常に危険です、繰り返しします。ただちに避難して下さい』

「…」

そのニュースの内容に彼の表情は険しいものへと変わる

…遠くは無いな

しばらく考え、やがて席を立つ

まだ報告書の記入は終わっていないが…なに、どうせ提出先はあの教会だ、別に構わんだろう

ペンを置き、庭へと向かう

聖杯戦争のような殺し合いで無くとも生きていく以上は死ぬ危険がある、そう頭が認識してからの行動は早かった

「あ、じいやー！」

「主人殿！業務が終わられたのですね！」

出迎えてくれる2人、その2人に自分でも分かるくらい自信に満ちた表情で答える

「ふ、実は全く終わっていない」

「えー！」

「だが仕事なら夜でもできるだろう、私も息抜きがしたくてね…仲間に入れてくれないか？」

年甲斐もなく、久しぶりに遊びたくなった。何せ明日無事か分から

ないこの命だ、今を楽しんでおきたい

「もちろん！」

降り注ぐ暖かな日差しの下、広い庭を走る

鍛えているとは言え年齢もあつて20分も持たなかったが…その時の私はとても幸せだったと思う

「聖杯戦争、か」

それから少しの間、私は…いや、私達は聖杯戦争のことを忘れて過ごしていた。別に教会の意に背いてやろうなんて思っていない、聖杯を渡さなければいいのだからこちらから攻め込む必要は無い

…だが事はそう上手くも行かないようでその2日後、とある来訪者が運命の針を動かし始める

「やー、こんにちは？おじいさん、多分マスターだよね？」

「…ライダー」

「…ッ」

咄嗟に臨戦態勢に入る私達を見て目の前の男は慌てて静止しようとする

「待て待て待ってくれ、オジサン戦いに来たんじゃないんだ、交渉しに来たんだよ！」

「…交渉すると言うのに名も名乗らない者の戯言など信用できるとでも？」

ライダーが刀を抜きつつ言い放つ

「あーそりゃそうだ、うん。オジサンはランサー、真名をヘクトール…んでその証拠としてこの槍、どう？信じてくれた？」



」

」

G地区 とあるオフィスビル前にて…

「…ここが密会場所か」

断るつもりだった、災害の獣なんて言われたところで私にはそれが  
真実かどうか分からない、だが――

「ゆくぞライダー」

「はっ…」

英雄が命を掛けてまで伝えに来た話を、私はどうやっても否定する  
ことができず、今ここにいる

『近々ゼロリスクっていう団体がパーティ開くみたいでね、そこなら  
人に紛れてこっそり会うこともできるんじゃないかってオジサン  
思ってたね』

「…」

令呪隠蔽の白手袋を確認し、建物に入る

…もう、後には退けそうにない





ため息を吐きながらベッドから身を起こす

悪夢はよく見るが：今回は群を抜いて不快な夢だな：

どこが、と聞かれても既に記憶は朧げで答えられないが：

無意識に握っていたコルトパイソンを置いて状況を確認する

昨日は確か——

「失礼します」 コンコン

「入れ」

ノック音に答えると聞き覚えのある声がしてコヤンスカヤが入ってきた

ああ、そういえば手当てさせるために一時的に令呪の命令を解除したんだっとな

格好はあの時のような巫女服ではなく、白い：キャビンアテンダント？が着ているような格好をしていて、手元には3・4個果物の盛り付けられた皿が持たれていた

そして：俺が驚いたのは彼女の表情だった。召喚時からこれまで見せていた勝ち気で余裕な表情は消え、戦地に赴く兵隊のように真面目な顔をしていた

「：コヤン 「申し訳ありませんでしたマスター！」

理由を聞くよりも早くコヤンスカヤが深々と頭を下げ謝罪の言葉を述べる

コヤンスカヤと知り合ってそう長いわけでは無いが：それにしてもコイツがこんなことをすること自体ありえないことであるのは俺にも分かる

それであっけにとられてしまい、我に返ったのはその5秒後

「：…なんのつもりだ？」

ようやく出たその言葉でコヤンスカヤが顔を上げて話し始める

「今回の一件…被害が拡大したのはワタクシの不手際に他なりません、リスク無く勝利できる戦闘でワタクシはマスターと組織を危険に晒しました、これはその謝罪です」

必要とあればいかなる処分も受けます、とコヤンスカヤは再び頭を下げる

「…」  
なるほど、そういうことか

確かにあの時はコヤンスカヤの失態でフーレンを殺し損ね、窮地に陥ったんだっとな

だがあれは既に終わったこと…今更処分もクソも無い、むしろ引きずられて仕事や戦闘に支障をきたすことの方が危惧すべきことだろう

「…2度目さえ無ければもういい、その話は忘れろ」

ということであらうに話を切り上げる

それでこちらの意図を察したのかコヤンスカヤも顔を上げ、その事についてはそれ以上語ることはなかった

「ありがとうございますごいますマスター♡それで…調子はいかがですか？」

「もう問題ない、手当てでご苦労だった」

…正直なところ気になる点はいくつもある、まずコヤンスカヤがミスをした原因。

サーヴァントとしての格はまだ測れないがただの仕事人として見るのなら超一級とっていいだろう、そのコヤンスカヤがなんの外的理由も無くミスをしたというのは考えづらい

次にあの巫女服時の魔力…アレは明らかにコヤンスカヤ自身の物ではない、奴の能力値、スキルを確認すれば何か分かるかもしれないが…

…やれやれ

マスターとなった者はサーヴァントの能力値を自由に閲覧することが出来る、これは自分のサーヴァントに限らず隠蔽されない限りは敵サーヴァントの能力値も見ることが出来る（最も戦闘中にそんな余裕は無いが）

——が

俺は敢えてコヤンスカヤの能力値やスキルを見ていない、当初は1人で戦うつもりだったからな…

はつきり言ってる俺は対サーヴァント&マスター戦を軽く見ていた、マスターさえ潰せば何も問題ないと

だが今回の件でその認識は甘かったと痛感した、現に戦闘になった時俺は苦戦してフリーレンを即座に殺せなかった、諸刃の剣の可能性はまだあるがやはりサーヴァントは必要なのだろう

「コヤンスカヤ、話がある」その椅子にでも座れ

「はい、なんなりと〜」

椅子に座り、手元を見ることなく器用にリングの皮を剥きながらコヤンスカヤは答える

随分と切り替えが早いな…まあ助かるが

「召喚時に俺1人で戦うと言ったが…その発言を取り消させてもらおう  
コヤンスカヤ、俺が聖杯戦争を勝ち抜くにはサーヴァント<sup>前</sup>の力が必要だ、そこでサーヴァントとしての性能をマスターとして確認させてもらいたい…構わないか？」

「もちろん構いません…ん？え、まさか確認してなかったんですか？  
召喚してからずっと？」

まあなど返した時に、マジで言ってるんですか…と聞こえたが無視し

て彼女の目を見つめる

「あら、まあ！そんなに見つめないでくださいましマスター♡ワタクシが美女である以上仕方のない事ですがそう見つめられると「フザける事まで許した覚えは無い」

やれやれ、これさえ無ければな…

そんなことを思いつつ、視覚化された情報に目を通す

一応切嗣から確認方法は聞いていたからスムーズに確認できた

筋力 C

耐久 EX

俊敏 B

魔力 EX

幸運 A

宝具 A

…かなり高水準だな

（『万能』秘書ですので♡力仕事以外であればどのようなことでも♡）

念話で頼む、と言うまでもなくコヤンスカヤの声が頭に直接届く

このCやらEXやら付いているのは強さを表すランクという認識でいいのか？

（はい！スキルの方にもついていきますのでスキルとまとめて御説明します）

分かった、じゃあスキルの確認を…

「…？」

随分と多いな…？

騎乗 B

単独行動 EX

単独顕現 EX

変化 A

女神変性(銃) B

イノベーター・バニー A

殺戮技巧(人) A

「スキルはこれで全部か、騎乗や単独行動は知っているが分からないものが圧倒的に多いな…1つ1つ確認するか」

「コヤンスカヤ」

「…スキルに関する詳細、でございますね？」

「一通り果物の皮を剥き終わったコヤンスカヤが分かっていたように言う」

「話が早くて助かる、悪いが俺はマスターとしては未熟でスキルに関する知識はほぼ無い…1つ1つ説明をしてくれ」

(かしこまりました♡では順番にご説明させていただきますね♪)

(ええーまずスキルについて説明する前にランクについて説明させていただけますと、スキルや能力値にはAからEの間で評価付けがされておられAが高くEが低いものとなっております、そしてAからEの間でランク付けが難しいもの、不可能なものは評価企画外としてEXのランク付けがされます)

「マスター？口を開けてくださいまし♪」

「…と、念話を送りながら喋るといふ地味に器用なマネでおかしなことを要求してくるコヤンスカヤ」

「…何故だ？」

「いえ、片腕ですし？食事をするのも苦勞するでしょう？」

「そう言っただけで1口サイズに切られたリンゴを爪楊枝に刺し、ニッコロ??という擬音が浮かび上がってきそうな笑顔でそれを差し出すコヤンスカヤ」



「皿を寄越せ」

ぐるりとコヤンスカヤと向き合うようにベツトから起き上がり、皿と爪楊枝をひったくって一蹴する

(おおよ、なにもひったくらくらなくても…ワタクシ良かれと思つて…)

リンゴおいしい、ありがとう、だからスキル説明を再開しろ

もうまともに指摘するのも面倒になってきたがスキルについては聞いておかないと困るので俺はリンゴを食べながら続きを促す

(うう、かしこまりました…では少し長くなりますがスキルの詳細について御説明させていただきます、疑問点が有ればその都度。)

ああ、分かった

(まず騎乗スキルです、主にセイバーやライダーが所持していますね、まあアサシンのワタクシも持っているように特定のクラス以外持ちえない、というわけではありませんが。

これは騎乗と表現されてはいますが単に馬を乗りこなせるスキル、という訳ではなく動物はもちろん魔獣、車や船…果てはヘリや戦闘機に至る乗り物全般を指しています

ワタクシの騎乗スキルはBランクですので大抵のものならなんでも自在に乗りこなせますね、流石に魔獣や聖獣となるとBでは足りませんが…まあそのような機会が来ることは無いでしょうし問題にはならないでしょう)

なるほど乗り物ならば全てスキルの範囲内ということか

コヤンスカヤ用のバイクを用意してみるか…

(続いて単独行動スキルです、主にアーチャーやアサシンが所持しています、

こちらはサーヴァントが単独行動可能な時間を延長するスキルです、単独行動が可能になるスキルという訳ではないのでご注意ください  
いませ

マスターとサーヴァントの距離が大きく離れてパスが届かなくなったり、なんらかの理由でマスターが死亡、または瀕死の状態となり魔力供給が絶たれた場合、通常であればサーヴァントは自身の霊基を維持することが出来ず1時間程で消滅しますが単独行動持ちはランクによりその消滅までの時間に猶予ができます

——が、ワタクシの単独行動スキルは規格外のEXランクですのでえ：魔力供給ナシで文字通り永遠に現界していることが出来ます  
！

長時間に及ぶ作戦行動もなんのその！ご指示1つで潜入でも工作でもなんでもござれ、でございます♡)

なるほどな、言い換えればサーヴァント単独で好き勝手に動けるスキルでもあるのか、令呪の使用は正解だった訳だ

(ワタクシとしては令呪以前にマスターの意に反するような行動をするつもりは無いのですが：まあいずれ行動で信頼を勝ち取るとしましょう)

そうしてくれ、次を頼む

(はい♪では単独顕現スキルについてです、こちらは：まあワタクシ以外に持っている者はそうそう居ないでしょう、こちらは言わば転移スキル：テレポルト能力とでもお考え下さい♪)

—転移か：対象範囲はお前だけか？

(いえ？一応人1人連れて移動するくらいなら問題ありません、実際にオフィスビルからマスターをここにお連れしたのもこのスキルによるものですし)

なるほど便利だが…転移先の状況は転移前に確認できるのか？

(うーんそれを言われると痛いですね、基本的には間違いなく安全という場所にあたりをつけて転移するので…ただまあランクは規格外のEXですのでその気になれば世界の果てでも転移できますよ?)

やれやれ、状況が確認できないことを差し引いても反則に近いな、だが乱用は控えるべきか…

魔術的痕跡は残るのか？

(いえ、これは魔術ではなく技巧スキルですのでさっぱり残りません、ご安心下さいませ♡)

…ならいいが

と、次のスキルを聞こうとして端末が鳴る

この鳴り方は…部下からの緊急連絡…?それも基地内から…

「一時中断だコヤンスカヤ…俺だ、何事だ」

『ボス！侵入者！侵入者です！2人組の女が正面入口から！真っ直ぐそちらに向かっています！既に警備隊が半壊状態に…!』

「ッ…!?!」

コヤンスカヤの驚愕の表情を見ながら端末越しに詳細を要求する

コヤンスカヤのこの顔…警戒はしていたが全く気付かなかった、という意味で間違い無いだろう、とすると相手は——

「特徴は？時間が惜しい、最も目につくところだけでいい」

『は、はい！1人は白衣を纏った女で、もう1人は…ええ、と…その、どこかで見たとような顔を…』

「白衣、だど？」

もう1人は検討も付かないがもしそうだとしたら——

「…道を開けてその2人組から離れる、俺が対処する」

『は…？は、分かりました！』

端末を切り、まだ果物が残っている皿をベッド横の机に置く

「まだ何も感じない…!?マスター、お下がりでください！」

「いらん、これは敵じゃない」

「…へ？」

やれやれ…どうとう直接来やがった

「とりあえずドアの前から離れろ、理由はすぐに分かる」

「か、かしこまりました…」

ドンドンドン！

やつほーザイル！久しぶり〜！えへへ、来ちゃった★

ねーねー、ここ開けて！

うーんマスター、やつぱり事前に何か一言言っておいたほうが良かったんじゃない？

女性と思わしき2人組の会話がドアの向こうから聞こえる

「おや、この声は…」

だめだめ！ザイルは照れ屋だから、私に来るって知ったら隠れちゃうよ！

よーし！『開かぬなら、ブチ抜いてやれ、ほととぎす』バーンナツクラア！

相変わらず狂った女だ

ただのパンチでドアを破壊してくるとは…やれやれ

…関係ないが、正直コイツが居たからコヤンスカヤのよく分からん絡みもスルーできていたというのはある、少なくともコヤンスカヤの

方がフザけ具合はマシだからな…

「マスター？聞こえてますよ？」

「事実だろうアサシン…それで？何をしに来た？」

「まあまあ待つて！お互い初めて見る顔もあるしジコシヨーカイから始めよう！キャスター？真名教えちゃっていいからね！」言わなくても見た目で多分バレるし

「うん？うん、分かったよ！それじゃお先にどうぞマスター？」

ノーアの横に居る女…初対面のハズだが…この顔、既視感が…？

俺の思案をよそにふふん、と胸を張って自己紹介を始める2人

「私はノーア！世界一の科学者であり超<sup>スーパー</sup>一級魔術師！ノーア・クランツェル！船旅を愛するザイルの妻！ハイ次ダヴィンチちゃん！」

「こちらこちら！言っちゃわないでおくれよ…ま、いいか！こんにちは、アサシンとそのマスターのザイルくん！」

私はレオナルド・ダヴィンチ！クラスキャスター、芸術家であり…天才さー！」

…予想はできていたが、やれやれ

「面倒だな…」

かなり本気で、そう一言呟いた

## 第14話 開発者

ウルフルズアジト ザイルの寝室にて…

「やれやれ、余計な被害を出しやがってクソ女」

「ひ、ひどい！私ザイルが心配でここまで来たのに！」

ウルウルと金色の目を滲ませるノーアをコヤンスカヤに用意させた縄で雁字搦めにして部屋の隅に放る

キヤスターとコヤンスカヤの冷めた視線を感じるが知ったことではない

「それで？もう一度聞くが何をしに来た？」

「んもー、照れるのは分かるけどこういうプレイは私あんまり好きじゃないっていうか——」

…話していてここまでストレスの溜まる女は他にいないだろう

「…アサシン」

「え？アツハイ、なんででしょう？」

「火炎放射器かバーナーを用意しろ、焼いて処分する」

「ちよ、本気ですか？いやまあ用意できますけども」

目を丸くしながらどこからともなくバーナーを取り出すコヤンスカヤ

苦笑いのキヤスターと本気にしてないノーアを無視し、コヤンスカヤからバーナーをひったくる

「マジで燃やすんですか？」

「んなわけナイナイ！ザイルは素直になれないだけであつぶなあ!!?」

バーナーから発射された火炎放射はノーアが1秒前までいた場所を包み込んだ、ちなみに当のノーアは体をくねらせて跳ね上がり、炎は奴の銀のショートヘアーを掠めただけだった

芋虫みたいな格好で避けられるとは思わなかったな

「…避けるな」チツ

「んにやろ…ふんぬっ！」パーン！

瞬間、ノアが首からかけていた白いキューブのようなアクセサリーが光り、縄が弾け飛ぶ

魔術礼装か…

「うーんこの照れ屋さんめ！ダヴィンチちゃん、このままだと私いつか燃やされちゃうからあなたから用件話してくれない？」というかなんで助けてくれなかったのよ？

「はいはい、確かに彼女を燃やされるのは困るし…話を聞いて貰えないかなザイルくん？」だってキミ燃やされても仕方ないこととしてなかったかい？

「…いいだろう、なんだ？」

とりあえずノアよりはまともそうなのでキャスターの話を聞いてみることにする…

「え？なんでずっと前から知り合いの私はダメで初対面のダヴィンチちゃんにはそんなフレンドリーなの？」

「話というのはなんだ、レオナルド・ダヴィンチ」

「無視されたー！」

「ワタクシ、こんなのと比較されてたんですか…そうですか…」

2人を可能な限り視界に入れないように注意しながらキャスター…ダヴィンチに話を聞く

「うんうん、率直に言うかね？キミの右腕を作りに来たのさ！」

「右腕？…あんたが、製作者なのか？」

「そのとおり！というかホントはマスターと一緒に義手の整備をしに来るつもりだったんだけど…派手に壊したよね？キミ」

「ああ、壊れた」

壊した、か…まさか見られてたのか？そんな気配は無かったと思うが…もし見られていたならば――

「何をどうやったたらあんな壊し方出来るのか分からないけど…今のままじゃ不便だろう？どうかな、私にキミの新しい義手を作らせてくれないかい？」

「…あなたがそれを作ることになるのメリットがあるんだ」

「うーん…ただ私が前より良いものを作りたいって言うのもあるけど…1番はマスターの頼みだから、かな？前の義手を作った時だってそうさ、こうして直接会ってお話するのは初めてだけど私頑張ってたんだぜ？」

……………前の義手、か

「…キヤスターのサーヴァントが作ってくれると言うのなら心強い、頼んでも良いか？」

「もつちろんさ！そのために来たんだからね！…ただ1つ間違えないで欲しいんだけどキヤスターのサーヴァントが作るから、ではなく万能の人『レオナルド・ダヴィンチ』が手掛けた作品だから良い物が造れるということをお忘れしないでくれよ？」

天才肌が面倒な奴だというのは共通らしい、などと思いつつも領いて返答を返す

「ああ、分かった」

…ん

ふと、部屋を見回して気付く

やれやれ、令呪の設定を戻し忘れていた

いつの間にか、ノーアもコヤンスカヤも居なくなっていた



アジトの鋳物工場より少し離れたコンテナ置き場にて…

マスターとキヤスターを2人きりにしてしまいました…ま、あのレオナルド・ダヴィンチなら大丈夫でしょう、もちろんあちらは記憶なんてないでしょうしクラスも違いますが…今はそれよりも――

ずりずりと片手で引きずっていたキヤスターのマスター…ノーアを転がすように地面に置く

「で？ぶつちやけ何者です？アナタ」

「え？天才だけどなにか？」

ダヴィンチちゃん程じゃないけどね！とケラケラ笑うノーアにコヤンスカヤは警戒を緩めない

「いけしやあしやあとまあ…」

「まあまあ！いいじゃないそんなことは！それよりもっと楽しい話しようよ！そーだコヤスちゃん尻尾触らせて〜」あ、名前は盗聴してたから知ってるよ〜

ぬへへ、と汚い笑いを吐き出しながらワタクシの尻尾に手を伸ばすノーアを払い除ける――と同時にショットガンを展開、ノーアの顔に銃口を押し付ける

「残念ながら、アナタが放った偵察機は一機を除いて全てのワタクシが破壊させていただいていますので、アナタがワタクシの名前を知っているのはありえないかと」

余談ですが一機というのはワタクシが作ったシチューをマスターが食べている時にマスターが撃ち壊した物ですね

「それともう一つ…マスターはもちろんダヴィンチさんも気付いてい

なかったようですがさつき使ったそのキューブは…」

「あー…やっぱり分かる？すんごい観察眼だね、うん。想像してる通りだよ、まー時が来ればイヤでも知ることになるから！」

「…ワタクシが言うのも何ですが食えない女とか言われませんか？」

「どーだろ？これはダヴィンチちゃんにも言っていないくらいだしそもそもここまで踏み込んできたのはコヤスちゃんが初めてだからね…それよりも今は、さ？」

ぺっぺ、と口に入った砂利を吐きながら立ち上がるノア

自然と、私達が視線を向ける方向は同じだった

「…ええ、そうですね」

一見何もないところへショットガンを向ける

「おーい、バレてるぞー？」

ノアの気の抜けた声に反応するように現れる軍服の男、その右手には令呪が刻まれていた

「…何故分かった？」

目の前に現れた、視線だけで人を殺せそうな男の質問にノアは愉快そうに、コヤンスカヤは若干呆れたように言葉を返す

「だったからかな？」

「殺気出し過ぎ」

「でしたので」

そしてそれをきっかけに3つの人影が姿を表した

「あーやっぱり兄さんは殺気立ちしすぎなんだよ、ね？バーサーカーもそう思うだろう？」

「敵を前にしたのなら殺気が強すぎるなんてことはありえねえ、見つかるうが見つかからまいが斬って進むだけだ」

「…バーサーカーに意見を求めた私、いや僕の間違いだったよ」

やけに子供っぽい神父と洋装に身を包んだ強面の男…それらがそんな言い合いをしている中、コヤンスカヤの興味はずっと後方で黙っているイギリス人の探偵へと向いていた

「…ふむ」

計4人、内2人は微弱とはいえサーヴァント特有の神秘の気配がしていますね…しかし令呪を見るにマスターはあの軍人だけ、そこまで警戒する必要もないでしょう。

ですがあの探偵だけは警戒しなければなりませんね、『あちら』で駆除したと思っていましたのにどうやって回避したのか、そもそもどうやって追ってきたのか未知数ですし…

さて、どうしましょう？

数の差などワタクシにはあつて無いようなものですが探偵とキヤスターのマスターという不確定要素がここで大きいですね

「よーし！んじや逃げようかコヤスちゃん！」むんず

「え？」

出方を伺うワタクシの思考を一瞬にして消しとばし、ノーアに手を引かれる

な、なにしてんですかこの人は!?!しかも地味に力強いですし！

「ちよつとなんですか——」

「え、だってあのままじゃ巻き添えくらうし」

…！

たった今ワタクシがいたところ、そのすぐ後ろのコンテナの上、そこに彼女は（彼と呼ぶべきかもしれませんが）既にいた

「東方の三博士、北欧の大神、知恵の果実……」

そんなバカな、と……そう思わずにはいられなかった

サーヴァントの気配は無かった……令呪の瞬間移動？いえ、でしたら令呪発動の気配があるハズ……

「我が叡智、我が万能は、あらゆる叡智を凌駕する」

「チイツ！バーサーカー！」

「分かってるッ！」

「いきなり宝具か！」

「……………」

『ウオモ・ウニヴェルサーレ万能の人』！』

「うつひやあ！さすがダヴィンチちゃん！相変わらずハンパない！」

ダヴィンチの腕から雫のように落ちた魔力の玉が炸裂し、衝撃波で周囲のコンテナが吹き飛んでいく中で平然と不動でガッツポーズをとるノーア

ああまったく、好き放題やって……！

関係無いですが彼女がガッツポーズを取った時に肘がワタクシの腋に当たりました。ええ、まったく関係ありませんが！

「ケホッ、ノーアさん、でしたっけ？この際言いますけどアナタの頭、バグり散らしてません？」

こんなことを言っても何も生み出さないが悪態を付かずにはいられなかった

顔を合わせて10秒もせずマスターが彼女を燃やそうとした理由

が今分かりました、これはストレス溜まりますねえ…！

「まあまあ！周囲を振り回すのは天才のサガだから…そこは許して、ね？」

「は…：？」

てへへ、と頭をかきながら笑うノーアを見て、そう重くない決断をする

ふふ、ホントにもう、神経を逆撫でするのがお得意のようで…ええ、記念すべきこちらでの最初の住人はマスターにしようと考えていましたがやめにしましょう

どうやらこの人間は中途半端に力を持ったために『自分は強い』と思いついてるようですし？誰かがその思い込みを指摘して、分からせてあげなければ。

ここはやはりマスターとの契約終了後、真つつつ先に愛玩の檻にブチ込んでたつぷりとお世話して、舐めて、可愛がって、退化させてあげるとしましょうか…ええ、ワタクシ楽しみで活力が湧いてきましたよ？

「さ、コヤスちゃん？イヤかもしれないけどここは私とタツグで――

…？嬉しそうだけど何か良いことあった？」

「いいえ？まだ何も、それよりも敵に集中しましょうノーアさん♡」

ニツコリと営業スマイルでノーアさんに返答を返し、NFF印の大型バイクを展開させる

さて、切り替えて…：宝具前に一瞬見えましたがマスターはダヴィンチさんの近くにいるようですし暫くは大丈夫でしょう、水を刺されても面白くありませんしサクツとあの探偵を駆除しに行くと思いますかねえ？

「うっわ凄いや！どっから出したの？」

「企業秘密です??」

さ、ワタクシはこれで対処に向かいますが…相乗りされます?」

「いいの!?!乗せて乗せて〜!」

キヤツキヤと騒ぎ立てるノアを後ろに乗せ、エンジンをかける

「いやー、タダで乗せてもらって悪いね!」

「いーえいえ!お構いなく!」

後でたっぷり支払ってもらいますので♡

未だ土煙が収まらない中、関係無しにアクセル全開で気配の方へと向かう

彼の霊基は目視で分かるほどボロボロで崩壊寸前…ライダー戦の借りもありますしい?こちらもこちらでたくっぷり仕返しさせていただくとしましよう♡

## 第15話 愛国者／影月の破片

コンテナ置き場北部にて…

『ウオモ・ウニヴァエルサーレ万能の人！』

中央部から聞こえるデカイ声と爆発音をコンテナとコンテナの比較的小さな隙間で聞きながら静かに対物ライフルを微調整する

ダヴィンチから敵位置の情報は義手を介して既に受け取っている、あの位置から宝具を放てば奴らを分断できる…かもしれない

分断できれば儲けもの、できなければ次を考えるだけだ、さて…

新調したばかりの——いや、ダヴィンチが予め造っていた義手の手の平を閉じたり開いたりして動作を確認しつつ敵の動きを伺う

（余談だがこれには『ダヴィンチちゃんアーム改2号機 拡張カスタムタイプ++』という長つたらしい名前がある…が、覚える必要は特に無い）

…ん

「ダヴィンチ、そこから見えるか？」

『見えてるよ！2人こっちに來たね、どう？いけそう？』

ライフルのスコープを覗き込み、たった今送られてきた情報を元に索敵する…と、あまりにもあつきり見つけた

洋装のサーヴァントに…隣の軍服がマスターか？随分と不用心——ん…？

ふとその男に既視感を覚え、スコープの倍率を上げて顔を確認する

「——やれやれ…またお前か？クライム」

まあお前の弟が教会にいる時点で予想はしていたがな

『ザイルくん？』

「…狙撃は無理だ、場所を変える」

『はいはい！』

面倒だな…

——クライム・アルバート——

通称『勇者』

年齢は…俺とほぼ同じの20代前半だったか？

その歳で陸軍少将という地位を持ちながら常に誰よりも前線に出て国に仇なすものと戦う男

国を愛し、国民を愛し、それを汚し傷付ける外敵を憎悪する…つまりウルフルズのような犯罪組織が大嫌いなワケだ

実際に対テロ特別捜査本部？だったかの最高責任者でもある

そして捜査本部と名目上はなっているが実態は犯罪組織へ激しい怒りを燃やす戦闘集団だ、はつきりいって下手な魔術師やサーヴァントよりも相手にしたくない連中だな

「やれやれ…」

対物ライフルを折り畳みながらその場を離れ、適当な隠れ場所を探しながらどうすべきか考える

奴の事だ、魔術に関する適性や能力は俺以下だろうが陸軍将校だけあって銃火器の扱い、地形の利用、戦況判断、どれをとっても俺より上だろう

義手のバフで近接戦闘はこっちに分があるだろうが…

特に狙撃に関しては効かないことは過去、奴を暗殺しようとして何度も防がれたせいで身に染みてよく知っている

本能で行う危機回避能力というか…俺が病院でランサーの一撃を避けた時のような直感というのか、どうもクライムはその能力がズバ抜けて高いらしく、こちらが弾丸を撃つてから避けるというもはや人



間かどうか疑うマネを平気でやってくるのだ

「ダヴィンチ、奴らは今何をしている?」

『彼らは…え、ウソ!?見失った!?!』

「だろうな、さて…」

さっきあっさり見つけられたのは奴がそう見せていたからに過ぎない

『自分を囿にしてこっちの居場所を探る』という無茶な作戦だったのだろう、正直なところ初見じゃ思いとどまれたかどうか怪しい、もし撃つていれば——瞬時に奴のサーヴァントが俺をバラバラにしたに違いない

『索敵する、少し時間をちょうだい!』

「索敵はしなくていい、霊体化して気配を消せ」

『えーと…理由、聞いてもいい?』

「クライムは待ちの戦法を好む、自分を囿に相手を釣って痕跡を残させそれを追う…痕跡を残すな、先に痺れを切らして動いた方が死ぬ」

取り回しのしづらい対物ライフルを背負い、対神秘改造とは別のコルトパイソンを取り出す

『なるほどね、じゃあ…私ができることはあるかい?』

「ノーアと情報交換をしてくれ、向こうの状況も知りたい」

『りょーかーい』

義手からしていた小さな陽気な声が消え、あたりに静寂が訪れる

それにしてもノーアの契約しているサーヴァントだけあつて協力的だ、義手の件もあるしありがたい

「…?」

だが不思議とダヴィンチが俺のサーヴァントだったらという考え

は浮かんでこなかった、というよりダヴィンチが自分のサーヴァントで無くて良かったとすら思っている始末だ、理由は分からない

何故だ…？

理由も無いのに結論が先に出てきたことなど初めてだった

…後でたつぷり考えるところ、今は――

カンツ、コロソ

!!

金属音を聞いたのとほぼ同時に、音の原因を拾って三段積みになっているコンテナの裏へ投げる

手榴弾か、どこからだ？

向こう側で炸裂した手榴弾の音を聞きつつ周囲を警戒する

「ダヴィンチ、かなり早い通信再開だ」

『はいよー』

ここはマズいな、狭すぎてライフルも構えられない、移動したいが進めるのは状況の分からない前とさっきまで居た狙撃ポイントのある後ろだが――

カンツ、キンツ

また手榴だ――いや、これは違うな

背後に落ちる手榴弾に似た何かの方へ跳ね、コンテナの隙間から飛び出すと同時に反射でそこに居た人物にコルトパイソンを撃つ

音が軽い、ただのこけおどしだ

「ぬあッ!？」

頭部を狙って撃ち込んだ銃弾は避けられたものの、奴までの距離は7メートル弱…近付きさえすればほぼ殴り勝ちできる

敵サーヴァントが来る前に終わらせる…!

「ダヴィンチ！バフを回せ！」  
『了解っ！』

常時掛かっている義手の強化に加えダヴィンチからの魔力により  
走力、筋力、動体視力がさらに強化される

5メートル：

この速度と距離なら詰みだ、距離は取らせない

やれやれ、もうお前の顔も部隊も見飽きた、沢山だ、いい加減死ね

——が、距離があと3メートルとなったところで予想外のことが起  
こる

「舐めるなッ！」

…!?

銃を構えたクライムが逆に向かってきたのだ

しかし予想外とはいえこれは好都合であり、素早く迎撃態勢に切り  
替える

お前が攻めに回るとはな、だがバフの掛かっている今なら火縄銃程  
度当たったところで——火縄銃？

「…ッ!?!?」

背中に氷水を流されたような感覚を感じ、携行していた地雷を真下  
に叩きつける

衝撃感知の地雷だ、そんな使い方をすれば当然——

「がっ…!」

至近距離で発生した爆風を義手の護りで強引に軽減、衝撃を利用し  
て飛び退く

そして…直後その判断が正しかったと思いきらされた

…！やれやれ、コンテナが木っ端微塵とはな

鋼鉄のコンテナが豆腐のように吹き飛び、破片が散らばる

日本でかつて使われていたとされる火縄銃…言わば時代遅れの銃兵器がここまで破壊力を持つている訳が無い、とするとサーヴァントのバフかもしくは――

「サーヴァントから直接武器を借りたか…」

それがあの火縄銃だとするのならかなりまずい状況だ、奴の射撃スキルを考えれば…敵サーヴァントが1人増えたようなものだ、飛び道具な分フーレンよりも厄介な敵だろう

当然即座に退却だ、こんなのとまともに戦ってられない

「逃がさんぞッ！出てこいバーサーカー！！退路を塞げ！」

「ああー！」

しかしこつちが退くことを予期していたのか3段積みのコンテナが次々と落ちてきて、あつという間に道を塞いでしまう

「…やれやれ」

いくらサーヴァントとはいえ瞬時にこんな命令をされて動けるとは思えない、つまり…最初に手榴弾を投げた時点でこつちの動きを讀んでたってことか

さつき強引にでも接近していれば、と思ったところでもはや後の祭りだ

「…」

手に持ったコルトパイソンの残弾は確認するまでもない、何発残っているかがこの状況では意味が無い

ダヴィンチは今どこだ？…後方約30メートルの高台だが付近に別のサーヴァントの気配がしている、援護は期待できないな

「…」

…まるで打開策が思いつかない、ダヴィンチに呼びかけるにせよ令呪でコヤンスカヤを呼ぶにせよ、それを見たクライム達が動き出す方がどう考えても速い

「ようやく、ようやく追い詰めたぞザイル!!散々アメリカの、国民の平和を踏み躪ってくれたな!?!」

ここは時間を稼ぐしかないな

他にできることはない、適当な話題を作りつつ打開策を模索する

「言い掛かりだな、俺はただ自分のやりたいようにやっただけだ、金を持っていてるだけで偉いと思ひ込んでるアホはどうも気に食わないからな」

「黙れ!そんなどうでもいいことを言っているんじゃない!!貴様のせいでどれだけ罪のない人々が死んでいると思っている!?!」

ズキン

コイツ…ただ適当に喋るだけの時間稼ぎのつもりだったが胸糞悪くて仕方がない、罪のない人間?笑わせるな

『『平和』だの『正義』だの、夢を見すぎたバカが。寝言を言うな』  
「な、なんだと!?!」

ズキン

「罪のない人間なんていない、お前らクソ共は存在しているだけで罪まみれだ」

怒りと苛立ちが混ざった黒い何かが俺の内側で再燃し始め、その炎が揺れるたびに鈍い痛みが額に響く

「お前のその平和は誰にとっての平和だ?お前の正義は、お前が守りたいと思っっている人間一人残らず、正義として認めているのか?」

ズキッ

「何をワケの分からないことを…！貴様が、貴様という癌が！人々を腐らせている最も大きな要因だろうが!!」

「最初から腐ったクソ以下の人間共がこれよりどうやって腐ると言うんだ!」

な、なんだ…？なんで俺は叫んでいる…？

俺自身、何故怒りが込み上げて来るのか理解出来なかった、確かに俺は人という生き物を自分勝手な奴らだと思っているが所詮はその程度の、さして関心を持つようなことではないハズだ

——にもかかわらず言いようのないドス黒い怒りが俺の内側で際限なく増殖して燃えてゆき、そのせいなのか額から微量の血が滴り始めた

「クソ以下は貴様だ、ザイル！その自己至上主義が貴様の本性！それを知ったからこそ、俺はここで貴様を殺す！バーサーカーツ！」

「…やるのか？」

「ああ手を貸せ！確実に殺すツ！」

「！」

背後の気配が動いた…！まずいな、ダヴィンチもこつちに移動してはいるが…

『レオレオ！防御機能最大!』

とりあえず初撃は義手でなんとか防ぐしかない、閃光弾と爆薬で目眩しして令呪を切って——

ガクン…

いきなり、本当にいきなり、この場面で最悪な感覚が右肩から伝

わって来た

おい、まさか――

だらりと義手が垂れ下がり、握っていた閃光弾が地面に転がる

「ッ…!?!」

バカな、こんな――

「ハアアアアア!!」

先程と同一人物か疑うような、まるで鬼神でも憑依したような気迫のクライムが迫る

「…っ!」

間一髪奴の銃撃を回避し、動く左腕を奴の首に絡ませて投げ倒すが…もはやただの悪足掻きだった

「いいんだな、マスター?」

丁寧に研磨されたであろう日本刀が首筋に触れると同時に、厳格そうな声が背後から聞こえる

「ああ! 殺せっ!」

「分かった」

ひたりと首に触れていた冷たい感触が消え、鋭く、鋭利な感触へと変わる

「――」

ああ、クソ

――終わりだ――

## 第16話 殺戮技巧（人）／対話

ダヴィンチの宝具発動直後、コンテナ置き場南部にて…

「おっ？コヤスちゃん、あれ！」

「ええ、お待ちかねだったようですねえ」

所狭しと並ぶコンテナ群を避けながらバイクを走らせ数十秒、途中から移動しなくなった2つの気配に追い付いた場所はコンテナ置き場から少し外れた区画の、見通しの良い駐車場だった

そして、広場の中央には――

「来たね、諸悪の根源…女神に選ばれし勇者として！引導を渡すツ！えーと…ルーラー？援護は任せたよ！」

「…ああ、任せてくれたまえ」

厨二病をかなり変な方向に拗らせたであろう神父と、カルデア側だったサーヴァント…ルーラー『シャーロック・ホームズ』が迎撃する気マンマンで鎮座していた

「うっわ！あの神父自分を勇者とか…ちよつと引くわー」

「うーん？アナタよりはマトモに見えますけど？」

なんだとー!?と騒ぎ立てるノーアさんを見無視してバイクを格納し、代わりにセミオートショットガンを展開させる

「のぎゃあ!?いたーい！まだ降りてないのに消さないでよ！」おしり打った…

さて…ガン無視退去しかけとはいえ英霊というものは消滅するその瞬間まで気を抜けないもの、加えて彼の目的も未だ不鮮明…

ワタクシに勝てないのは分かりきっているでしょうし…そもそもとして倒せたところで意味は無いことも理解しているでしょう



その彼がわざわざここまで追ってきた…何を企んでいるんですかねえ？

「どこを見てる！お前の相手はこの僕だ！」

電子音と共に神父の手元に如何にも場違いな剣と盾が現れる

「ええ、ええ、騒がなくてもキチンと相手しますよ？ノアさん、援護は要らないので邪魔だけはしないでくださいませね？」

「え、私の評価低くない？」

このパツパラパーもといノアさん、高評価を得られる場面があったとお思いで…？まあほっとけばいいでしょう

やいのやいのと騒ぎ立てる神父とノアを他所に、ホームズとコヤンスカヤの間で奇妙な緊張が走る

「…」

折角拾った命をただ玉砕するためだけに使うのはありえませんかよねえ、ということとは神父は囀…いいえ、ワタクシの出方を伺うための捨て駒でしょうか？追い詰められたら手段を選ばなくなるのはお変わりないようです

とすればあまり派手には戦うのは悪手でしょう、グランドクラスが何処かに召喚された気配は確かにありましたし…それとホームズさんが繋がっていると考えればこの玉砕も充分、意味のある死として納得がつかます

「ま、これくらいなら手加減どころかおままごとで終わりそうな気はしますけど♡」

「ふんっ、今にその余裕たつぷりの表情を真っ青にしてやるさ！ルーラー、開戦だ!!」

「ああ…初歩的なことだ、友よ」

一つ、また一つと、どこからともなく巨大な懐中電灯の光のようなものがコヤンスカヤに降り注いでいく

おっと、常時解放型の宝具を真名解放…戦闘面での強化目的ですか、本気で玉碎する気ですな彼。

『エレメンタリー…マイ・ディア』

『明かす者』としての概念が神父を強化させていき、引き換えに宝具を解放したホームズの霊基崩壊が目に見えて加速していく

…なんにせよのんびりする時間はありません、長々やって無駄にグランドクラスへヒントを与えるようなことは避けたいですし…マスターの状況も気になります

『最小限度の手数で』『それでいて速やかに』

このような仕事こそワタクシの腕の見せどころ、なのですが肝心のアピールする相手<sup>マスター</sup>が不在なのが残念ですな…まあ契約<sup>聖杯戦争</sup>が終わるまでまだ猶予はありそうですしそれについてはまたの機会に

「ねー、コヤスちゃん？一人でやる気？」

「はい？まあそうですね、アナタは見ているだけで良いですので」

やんわりと断ったものの、どうもノーアは納得していないらしく、うーんうーんと唸っている

コヤンスカヤがノーアと知り合って殆ど時間は経っていないものの、唸っている彼女を見れば後の展開は予想が付いた

駄々をこねそうな予感がしますねえ…どう切り返し――

ズガン

一歩下がり、振り下ろされた剣を避ける

「来ないのならこっちから行くぞ!？」

「来た後で言いますか？しかしまあ感謝はしておきましょう」

神父の空気を読まない勇者心？で駄々をこねるノーアを相手にせず済みましたし♡

「お前に感謝される覚えはない！覚悟しろ!!」

剣を振りかざし斬りかかってくる神父をかわしつつちらりとノーアの方へ目を向ける

…予想通りですが何か始める気ですね、あのパツパラパーさんは。

ノーアの首に掛かっているキューブのペンダントが輝くと同時に地面が——いや、空間が何かに侵食されていく…

見覚えの無いものではあったが知識としては知っているもの。

——固有結界

これは…うわあ、敵に回したら面倒なタイプですね…まだ詳細は分かりませんが。

「そつちはそつちで戦ってて、私はホームズの相手してるからさ」

「はいはい、分かりましたよ」

まあ外との繋がりが遮断されたのは素直にありがたいですね

中の風景は…うん？これ木造建築物の…何か、でしょうか？やはり見たことはないですね…

「…決戦場を作ったってこと？」

「いえ、全く関係な——」

「いいとも！上等だツ!!」

こつちの話も聞かずに飛びかかってくる神父を避けつつ、中距離からショットガンを撃って牽制する

「話を聞かない人ですねえ…」 呆

というかこちらに現界してからというもの、話を聞かない人結構多い気がするんですが？

「逃がすかッ！ 『雷光一閃』ッ!!」

「厨二病もここまでこじらせると——ッ!?!」

大きく離れた場所からの薙ぎ払い、神父が魔術を行使した気配は無く、詠唱にも神秘は無いただの格好付け

そこまで見抜いているからこそ、雷鳴と共に剣から放たれた稲妻は衝撃だった

あつ…ぶな！なんですか今の？魔術の気配も無し、詠唱も意味のないものということは…つまりあの剣は軽く振っただけで雷が出る剣ということなので？

「…ふむ」

試しに武器をRPGに切り替え、発射。

「護れ！ 『水天』ッ！」

突如として剣から現れた水の壁がロケット弾を防ぎ、疑念が確信へと変化する

アレ、間違いなく人間が作ったものじゃありませんね？そんな大層なものを何故こんなのが持っているのか疑問は消えませんが…まあ腐らせておく理由はありません、回収させていただきますでしょう

「では行きます♡」

RPGをアサルトライフルに切り換え、さらに麻酔銃を展開。バンバン飛ばされる稲妻を避けながら左手でアサルトライフルを撃つて煙幕を張り、互いの視界がゼロになったと同時に結界内の壁を蹴って跳躍。

「小賢しいッ！」

予想通り剣で煙を振り払った神父が再び、投げつけるように稲妻を撃つてくる——が、本来他にいるであろう所持者の意思はそこに無く、神秘を宿していたであろう稲妻はもはやただの雷…ただの電気に成り下がっている

——ただの電気を逸らすだけならライフルだけで充分！です♡

「そーれ☆」

右から左へ流すように撃たれたライフルの銃弾へ雷が吸い寄せられ、あらぬ方向へと飛んで行き結界へと叩きつけられる

「な…！どうやって!?!」

分かりやすく動揺している神父へ向けて麻醉銃で銃撃、頭部には当たらなかつたものの、麻醉針は確かに神父の左腕に突き刺さっていた「ウツ!?!く、う…勇者のぼくに、こんあ、小細工…!」

ハイこれでおしまい、後は剣を回収した後にサクツと死んでもらいます♡

興味と警戒の両方の念を抱きつつササツと剣を回収する

「さぞ名のある神の剣なんでしょうが…使い手がコレでは真価を發揮できる訳がありません」

まあお陰で特に問題も無く回収できたのでよし、ですね!あ、盾の方はただのゴミですね、残念。

「あつ…く、返せ…!わた、私、僕の、勇者の剣…!」

「ふむ…」

手に取ってみるものの、分かるのは僅かながらの神性を浴びた翡翠色の歪な形をした剣ということだけ

何なのでしょうかこの剣…イヤ々な感じの神性を帯びているのは分かりますがそれ以外が全くもって謎ですね…

「村正さんが居れば何か分かったかもしれませんが…」

製造元も輸入先も不明となると商品としては扱えませんね…残念ながら。

「この、化け狐…！待て…！」

——ハア

「ふざけ——え？」

「さつきから喧しいんですよアナタ、自覚しています？」

悪足掻きの体当たりを軽くないなし、ダーツを投げるようにナイフを投擲、神父の膝を割る

「~~~~ツツ!!??ウツ、あ”…!!」

「んくつ…と、まあ少しならいいでしょう」

両腕を上げて軽く伸びをし、霊体化していた耳と尻尾を解く

やはりこちらの方がしつくり来ますね、仕事や遊戯にさしたる影響は無いにしても気持ちという点ではこれが1番です♡

正直なところ、ここ最近仕事ばかりで息抜き出来ませんでしたし？  
ここらでひと息…

「さて、普段ならたつぷり可愛がつてポイですが…生憎と時間は有限、手っ取り早く行きましょう」

パチンと指を鳴らし、とある動物を何匹か召喚する…ちなみに指を鳴らす意味は特に無い

「な、なんだ？なんだそれは…？」

「あのー、流石に見て分かりませんか？犬ですよ、愛らしいでしょう？」

街中でも飼われているのをよく見るダックスフンドが8匹、もちろん全て普通の子犬ですが——

▽ 殺戮技巧（人）

ピクン、と子犬達の気配が変わる

「はい！スキル1つでこの通り♡ たった今から人間は獣アナタ 彼らを『分からせる立場』からあ…『分からせられる立場』に変わりました♪」  
「…!? な、なにをする、つもりだ…!? や、やめろ！」

8匹の子犬が神父を取り囲み、じりじりと距離を詰めていく

本来自分以外に付与するようなスキルでは無いですが…取得した時に苦労した甲斐があったというもの！ええ、この立場が逆転する様は何度見ても飽きませんねえ

「来るな、来るな…！」

割れた膝と麻酔で寝返りすら打てなくなった神父と獣彼らの距離がどんどん縮まってゆき、そして――

ぞぶり

「ひぎゃっ…!?」

神父の視覚外から近付いていた子犬がその無防備な脇腹に食い付き、肉を噛みちぎる

最初の1匹が食らい付いたことで他の子犬達もそれに釣られ、我先にと神父の身体へと群がり、地を、身体を、牙を汚していく

「やえ、やめっ…痛い！痛いいたい！いいいいああああ!!」

肉を食いちぎる音と咀嚼音に『神父だったもの』の悲鳴が次第にかき消されていくのを見て、コヤンスカヤは静かにため息を付いた

「うーん、時間が無いからと言って簡略化したのはダメですねえ…楽しいことは楽しいですがイマイチ不完全燃焼…」

イヤですわ…召喚されるまで暫くお休みしていたとはいえ、息抜き  
の加減も忘れかけてます…ここはひとつ、マスターに休暇の申請をお願いするとしてみましょう

「もしもーし、ノーアさん？終わりましたので開けてくださいまし〜」  
「はいよー」

単独顕現で抜けようかとも思いましたがそれこそビーストの証ですし結界内での使用は控えた方がいいでしょう

あっさりと開いた固有結界から外へ出ると絶賛戦闘中のノーアさんとホームズさんが真つ先に入ってきた

弱っているとはいえナチュラルにサーヴァントと戦えてるこの人もこの人ですね…はあ、報告書がどんどん厚くなりそうです

「やあコヤスちや…うっわ!?なにそれグロイ!!…ま、いいか！出てきたばかりで悪いんだけどダヴィンチちゃんから連絡！ザイル君が押され気味だから助けに行つてあげて！」

「マスターが？…分かりました、しかしアナタはどうするおつもりで？」

「だいじょぶだいじょぶ！勝てるから！」あ！ザイルに私のこと、よろしく言っておいておくれよ？『ノーア大活躍！』ってね！

ホームズさんに関してまだ謎はありますが…マスターのピンチとあれば致し方ありませんか

むふー、と笑うノーアにはお願いしますね〜と定時退社する会社員のように手を振つてその場を任せる

まあ、信用してもいいでしょう…何かあればマスターに上げる報告書に追加すればいいですし。

「…コヤンスカヤ…」

「あら、お久しぶりですホームズさん！積もる話もあるかと思いがワタクシ、ちよーつとばかりお仕事が詰まっちゃって…お話はまたの機会に…またの機会があれば、ですがね？」



こつちに来た時と同じバイクを展開させ、エンジン起動！その場を離れマスターの元へ：もちろん、ごめんあそばせ〜♡と投げキッスするの忘れない

欲を言えばもう少し具体的に仕返ししたかったです：それはあくまで私情、まずはお仕事です☆

）

コヤスちゃんが行ったのを確認し、結界を張り直す

「ほいほいほいと：全国の探偵が大好きな密室かんせい！んじや続きと行く？ホームズさんよう？」

「：ミス・クラントツエル、キミは：何者だ？」

もう4回目になる質問に少々飽きつつも同じ答えを返す

「だからただの天才だって、ダヴィンチちゃんには敵わないけどヒヤッフウ!？」

どこにそんな力が残っていたのか、風のように距離を詰めて来たホームズの突きを身体を捻って避ける

あ、やべ、背中からイヤな感触ががが

「オーいてえ：おたく、紳士じゃなかったっけ？いきなりレディの胸に手を伸ばすのはアレじゃない？」

「：もう時間が無いのでね、キミの正体だけでもはつきりさせたかったが：納得してくれないようならば先にこつちを話そう」

「手を出す前に言いなさいな：犯罪者一歩手前だよソレ」

ホントに余裕無いんだね

「コヤンスカヤとそのマスターに今後一切関わってはいけない、アレは——」

「人類悪でしょ？愛玩の獣、NFFサービス、知ってる知ってる！まあ私の知ってるコヤスちゃんとビミョーに違うけどだいたい同じだし

「……何さ、豆鉄砲撃ったハトみたいな顔をして？」

にしてもメツチャ驚いてるな……こんな顔のホームズはレアかもしれない

「そこまで分かっている……キミは、なんなんだ……？異星の神の使者か？コヤンスカヤの部下か？」

「質問ばかりの名探偵、すつごくレアです。なので私も少しお答えしましょうか」

少しネタばらししていいかな？まあいいよね、どうせこの結界の外からは誰も干渉できないし

「私はとある英霊が憑いたデミ・サーヴァントであり、ザイルの味方で、ザイルの敵は私の敵……かな？」

「――」

うお、流石名探偵……霊基崩壊寸前でこの情報の波に対してなんか考え始めた……あ、なんかヤバそうな気配する……この状況で能力使いたく無いしダヴィンチちゃん呼ぼっと

「令呪を持つて命ずるよ！ダヴィンチちゃん！こつちに来て！」

1画目の令呪が消え、よく知る人物が現れる――と同時に

「……ッ！」

「え」

あ、ヤバい！この探偵、推理の邪魔になると判断してダヴィンチちゃんをブツ殺すつもりだ！

「そうはさせるか！くらえ！」

そしてごめんダヴィンチちゃん！

小細工をさせてもらった、仕方なかったとはいえダヴィンチちゃんには悪い事をしたなあ

霊核を完全に砕かれ、声も上げずに消滅していくホームズ…綺麗さっぱり消え去った後、残ったのは私の張った結界と――

「えーと…ダヴィンチちゃん？」

「……………あれ？今…あ、マスター？もしかして令呪を使ったかい？」

「まあね、ただ令呪の使用は余計だったみたい！向こうはどう？」

「アサシンがザイル君を助けに来たからあちらはもう大丈夫！ただ『ダヴィンチちゃんアーム改2号機 拡張カスタムタイプ++』に不具合があつたみたいで…整備しに行きたいんだけどいいかな？」

…うん、問題無いね！ハアア…良かったあ…

「ダヴィンチちゃんの作つた義手が…？珍しいこともあるもんだね、アレでしょ？『弘法の川流れ』」

「ちがうよー、もー！」

内心胸を撫で下ろしつつ、軽口を叩きながら結界の外へ

おっと、もちろん式号機の如くグチャグチャになっている神父さんは隠してますとも！

「さーてとーじゃあ行こうか！」

キラリと光るペンダントのキューブを握りしめ、私達はコヤスちゃんのところへ向かうのだった…

## 第17話 志

コンテナ置き場北部にて…

「…何か来るぞ！」

「分かってるッ！警戒しろ！」

バーサーカーにザイルを拘束させ、一旦周囲を警戒する

先まで無かった僅かな音、それが耳に届いたからだ

サーヴァント…は違うな、サーヴァントにしては気配が無い上に遅い、とするとウルフルズの仲間か？だとすればザイルはまだ殺せない…いくらこっちにバーサーカーがいるとはいえ——いや、バーサーカーだからこそ慎重にならなければならない

ザイルの持つ異常なカリスマ性に惹きつけられる者は少なくない…そのザイルを殺した後速やかに離脱できなければ怒り狂ったウルフルズ団員…つまりアメリカ国民と俺が殺し合いをする事になる可能性がある。

「…」

それだけはダメだ！何人居るか分からない敵対勢力を全て殺さずに無力化という芸当はスタミナの無いバーサーカーはもちろん俺でも難しい、結果ザイルを殺した後安全に離脱するための退路確保が必要だ

「さあ…何人来るか…」

エナから一切連絡が無いのも気になる、あの剣がある以上戦えはするだろうがあいつ自身の実践経験が少なすぎる、連れてくるべきでは無かったのかもしれない…

「ザイルから絶対に目を離すなよバーサーカー…今まで何度追い詰め

られても悉く打開してきた男だ」

「ああ…」

近付いてくる『何か』の音、なんとなく聞こえるだけだったそれが次第に鮮明に聞こえ始める

この音は…バイクか？それも大型だ、一台だけだが…

「…?」

こういう時に戦場で培った経験…感覚は役に立つ、どうやっているのか？そう聞かれると答えにくいが案外こういうカンが外れた事は殆ど無い、そのカンによれば接近してきているのはバイク一台のみ

囷にしては雑すぎる、だが他に気配は無い…

…よし

「バーサーカー、もういい！今度こそ殺せ！」

音から察するにあと6〜7秒でバイクが来る、それを待つ必要は無い！

「くっ!?アサシ——」

「遅え！」

悪足掻きの令呪を切ろうとするザイルだが間違はなくバーサー

カーが首を吹き飛ばす方が早い！

地獄で詫びろ…！この国と国民全てに——

「…む!?」

バーサーカーが剣を振り下ろす寸前、コンテナの影からバイクが突っ込んで来るのが見えた、だが——肝心の運転手が乗っていないかった

バイクだけ…!?

俺だけではない、恐らく気を取られたのはバーサーカーも同じだろう

そしてその直後、バーサーカーのすぐ隣に出現する気配

やられた、そう思った時にはもう遅い

「はぁーい！ギリギリのところまで残念でした♡」

ライダースーツを着た、狐のような耳と尻尾を生やした女サーヴァント。

それはなんの前兆も無く現れて…そして煙のように消えた、ザイルを…連れて――

「なッ…!?!」

あまりに突然すぎたその事態に、突っ込んで来た無人バイクへの対処が遅れてしまったが――

「セエア!!」

即座に反応したバーサーカーがバイクを真っ二つにしたことで事なきを得た

「チッ、これは追えないな…おいマスター？」

ガンッ

「フーツ、フーツ…ザイル…:…:ザイル…!!」

行き場の無い怒りと苛立ち、コンテナを殴りつけたところで意味は無い、殴りつけた右手の皮は擦りむけて血が出るが怒りのあまり彼は気付かない

また…またしても…くそ！

「マスター」

「うるさいー！」

くそ、くそ！少し考えれば分かったはずだ！ザイルと契約している『獣』が気配を消せる能力を持っているという可能性があることくら

い！

「探偵め…獣の相手は任せてくれなんてテキトーなことを言いやがって…」

思えば俺たちは利用されたのだろう、ザイルの所在を何故奴が知っていたのかは分からないがそれに気を取られてそれ以外の追求を忘れてしまっていた

「ホームズと連絡が付かない…いや、最初から連携する気は無かったのか」

「おいマスター…」

「分かっている、エナと合流しよう」

奴も気になるがエナが先だ、どうも不安感が拭いきれない…

「行くぞ」

エナと合流したのち、バイクの残骸を調査しよう

端末からエナに（無断で付けた）発信機の信号を頼りに、俺達はそこへと向かった…

）

「

——おい

なんだこれは？

信号を頼りにたどり着いた駐車場、そこには敵の姿も探偵の姿も無く、あるのは戦場でも見たことが無いほどグチャグチャにされた肉の塊1つだけ

…その肉塊から信号が発信されていると気付くまで少し時間がかかった、かけたという表現が正しいか

「――エナ？」

もしエナが気付き、発信機を外せば通知が来るようにしてある、その通知は来ていないということはエナは発信機を外していない

「は、はは…」

じゃあ…何か？目の前の、獣の食い散らかしたような、人型に似た肉塊がエナとでも？

――

「ツ…！のツ…くそつたれがアアアア!!!」

この、こんな…

「畜生…ツ！」

そこが身体の中の部位だったのかもはや分からなくなった肉塊を抱き上げる

「エナ…うう、あ…」

これまで散々ザイル…ウルフルズとは戦い続けてきた、その過程で俺の部下も大勢死んだ、何人も何人も…

俺と同じ、犯罪組織を許せないという志を持った者達

「…」

親友を失った青年は、まあアイツ馬鹿だからいつかこうなるんじゃないかと思つてたよと笑つた

夫を失った婦人は、あの人の決めたことですからと子供をあやしなから言つた

息子を失った老人は、あなたの元で戦えてあいつも本望でしょうと頭をかいた



誰も俺を責めなかった、だから戦い続けた

「…」

何が最高のアメリカ軍人だ、何が国の勇者だ、家族1人守れないで…何が――

「おいマスター、立て、帰るぞ」

崩れ落ちそうになった俺の身体が強引に引っ張り上げる

「は…？…おい？」

「少し周囲を調べてみた…戦闘の形跡が全く無いというわけじゃねえが殆ど無い、恐らく戦いにすらならなかったんだろぅな」

淡々と言葉を続けるバーサーカーに俺の情報処理能力は追いつかない

「お前の弟が持っていたあの嫌な感じの剣が無いのも気になる、すぐに戻って対策を考えるぞ…災厄の獣とザイル以外にも厄介なのがいるかもしれない、あの手の連中に時間をやるわけにはいかない」

「は、離せ！お前、お前！…ふざけてるのか…!?!」

バーサーカーの手を振り払い彼の顔を睨む

「何もふざけていない、とりあえず適当な部下を呼んで死体を処理させた方がいい、目に付く」

「ツツ!!」

振りかぶる拳、それをあっさりとバーサーカーは受け止める

当然と言えば当然だ、人間如きの打撃がサーヴァント相手に通用するわけが無い

――それが俺の怒りを加速させる

「マスター、気持ちは分かるが――」

「気安く言うなツ!!俺はお前からサーヴァントみたいに聖杯以外どうで

もいなんて割り切れるクソじゃないんだよ!!」

「――」

ほんの一瞬、流れる静寂をすかさずバーサーカーが破る

「――クライム」

「なんだ――ガツ!？」

ゴギリ…と嫌な音と感触が肩から伝わる

腕が折れ――いや、外されたのか？

「バーサーカー…!」

「いい機会だから言っておく、俺は聖杯なんていう与太話は信じていない」

「は?」

「俺が召喚に応じたのはな、お前の志に惹かれたからだ」

…?」

「…なんの話だ?」

言っている意味が分からない、だがバーサーカーは構わず話し続ける

「ザイルという男を殺す、何故そこまでお前が奴に執着してるか知らんが…これまで何があってもその志が折れることは無かったんだろ?」

「当たり前だ!」

奴こそ異端…国の、いやこの世界の癌細胞だ、絶対に殺さなくてはならない

「なら立て、ぐずっているヒマは無い」

「だ、だからといってエナをこのまま野ざらしにしろと言うのかお前は!？」

「そうだ」

くッ

「ふざけ——『うるせえ!』」

…!?

召喚してから一度も見たことの無かった彼の怒鳴り声、少し面食らってしまい、言葉を飲み込む

「お前1人でここまで来たわけじゃ無いだろう、そしてその過程で何人も死んできたのも知っている」

「何故それを知って、いや、知っているなら尚——」

「お前が立ち止まったら、お前が戦うことを一瞬でも放棄したら、お前を信じて死んだ連中の思いは、無念は誰が持っていく?」

…!

「殺したい相手がいた…というわけじゃないが生前、俺もお前のような折れない志を持ってお前のように部下と共に戦場を走った、その途中で同志が何人も死んだ」

「…」

「だから俺は死んだ奴の分まで走った、死んだ奴の分まで銃を撃った、死んだ奴の分まで刀を振った」

「お前…」

「死んだらそれまでだ、何も出来ない…なら生きている奴が、死んだ奴の代わりに前へ進まなくちゃならねえ」

——前へ、進む…

「弟を弔うのは全て終わった後だ、今は獣と、それ以外の脅威への対策を練るぞ」

「…」

無茶苦茶を言っている、そんなことを本気で思えるとは流石バー

サーカー…いや、コイツは最初からこういう奴だったのだろう、英霊  
になってまでそんな志を貫き通せるというのはもはや呪いではない  
かと疑うレベルだ

——だが

「ああ、そうだな」

それで納得している俺も非人間であり、狂っているのだろう

「…わかりやあいい。肩、戻すぞ」

「手短にな…グッ…！」

外されていた右肩が戻される

「随分と…慣れた手つきだな」

「まあな」

軽く肩を回しつつエナの遺体に背を向ける

「…」

埋葬くらいはしていいんじゃないかと一瞬思ったが…今は聖杯戦  
争真っ只中、彼の言い分も分かる

「許せエナ…帰るぞバーサーカー」

「了解だ、マスター」

そして俺は、バーサーカー…土方歳三と共に、その場を後にした

）

…ありや？逃げちゃった

クライム達がいた場所から200メートルほど離れた場所に建て  
られたビルの上で、白衣の女性…ノーアは握りしめていたキューブの  
ペンダントを離す

「引っ掛かってくれると思ったんだけど意外と冷静なんだ？ま、いい

や！ザイルにとって邪魔なのは間違い無いし、また次の機会で殺  
そーつと！」

今頃ダヴィンチちゃんがザイルの義手の整備をしている頃だ  
「私も帰るかな〜」

のんびりとあくびをしながら彼女もまた、その場を後にした…

## 第18話 休暇 『前』

ウルフルズアジト、ザイルの自室にて

「ああ、いいぞ」

予想外の言葉に思わず隠していた耳が立つ

「え？あの…ホントにいいんですか？令呪の命令に背きますけど？」

「許可なら出す、好きにしろ」

「あつさりとまあ…でしたらここはお言葉に甘えてリフレッシュさせていただきますね、ありがとうございますマスター♡」

召喚時の令呪はなんだったのかと言いたくなるあつさりした返答に戸惑いつつも休暇を喜ぶコヤンスカヤ

「ああ、だが聖杯戦争中だということとは忘れるな」

それさえ守れば俺が言うことは無い、とワタクシと目を合わせることも無く端末を弄り続けるマスター

「ええ、それはもちろん！」

なーんだ、意外とあつさり通りましたね休暇申請。まさか申請したその日に取れるとは…

そんなことを思いつつ部屋の外へ

「さてと」

それじゃあ、ま…着替えてから手頃な玩具でも探しに行きましょうか♡

「…」

いえ、そうですね…

脳裏に過ぎる、別の娯楽

ええ、こちらの方が面白そうです♡

多少迷ったものの、急遽休日の過ごし方を変え、彼女は来た道を戻ることにした

）

「…」

時計が午前9時を回りはじめたころ、武器の整備や部下からの報告を確認し終えた俺は特にやることも無くベッドに腰掛ける

やれやれ…

昨日ダヴィンチが整備したばかりの義手とコヤンスカヤが持ち帰った『戦利品』を交互に見ながらため息を吐く

ダヴィンチ曰く、義手にも俺にも異常は見つからず何故義手が動作不良が起こったのか説明できなかつたそうだ

だが…俺はこの動作不良が何故起こったのか知っている

「…」

初めて見るこの剣も、俺は知っている

「やれやれ…」

何故知っているのか分からないし分かりたくもない、考えるだけで頭が痛む

今は…少し休もう

コヤンスカヤに今日一日休暇を出したのはアイツが真面目(?)に働いていたのもあるが、しばらく休みたかつたからというのもあった

「こういう時は寝るに限——

「マスターあく♪」

「………なんだ」

うるさいのが戻ってきた、そしてかなり面倒なことになる予感がする……

「マスターもたまには息抜きしましょう！さ、さー！」

「仕事が残っている」

「休むことも仕事の内ですよ！それに本日の業務は既に終わらせていらっしやいますし良いではありませんか！」

…やれやれ

サーヴァントの立場とは別に秘書として定着し始めたコイツにはこの手の嘘は通じないらしい

「以前シチューを作らせていただいた時から薄々感じておりましたがマスターは娯楽というものに関わろうとしなかつたのではありませんか？」

「何が言いたい……？」

「まー、何事も経験だと言うことです、知って尚必要ないと判断すれば以降行かなくていいだけですし？」

「……」

面倒くさい……そう思ったもの——

「……分かった」

俺はどうにもコヤンスカヤの押しを断ることが出来なかつた、別行動することに躊躇を覚えたからではないが……不思議と断れなかつたのだ

「ありがとうございますごいますマスター♡それではエントランスでお待ちしておりますね♪」



「ああ…」

…支度するか

く

「やれやれ…」

「おや、サボるかと思いましたが意外と身だしなみはしっかりしてるんですねえ…相変わらず着こなしのレパトリー少なすぎでパツとしませんか」

「こんなもの着ればいいだろう」

俺はいつも外出時に使っている服装、つまりアンペルド・ローラーとしての服装に着替えてきた、白いジーンズに灰色の長袖シャツの簡単なものだ

ダサいかどうかは知らないが目立つよりいい

そしてコヤンスカヤの方は…

「ああ、これは通販で購入させていただきました♪」  
「…そうか」

仕事中の服装とガラリと変わり、白いビジネススーツ（もつとちやんとした名前があるのだろうが知らん）では無かった

ベージュのトップスにネイビーブルーのフレアスカートを身につけ、赤いパンプスを履き、白いハンドバッグを肩にかけている

が、挑発的な格好（とメガネ）だけは変わらないらしい、あえて小さいサイズを選んだのか身体の、上半身のラインの強調がかなり強く、特に胸部は普段通りの痴女具合である

…余談だがこう服の名前がポンポン出てくるのはコヤンスカヤの通販使用履歴をバルンから聞いているおかげだ

「…やれやれ」

それにしても…コイツよりもこんなのでファンクラブなんぞを作っている部<sup>馬鹿</sup>下達の方に呆れが行く

「さて！これから休日を楽しむワケですがまずマスター…いいえ、ザイルさん！」

「外でザイルと呼ぶな、名前を呼ぶならアンペルドと呼べ」

外出用の名前だ、幸いなことに顔や声の誤魔化しは義手でなんとでもなるので小細工するのは名前だけでいい

「ではアンペルドさん、まずはそのダツサイ服装をなんとかしに行きましよう！」

「なんとかって…何をするつもりだ？」

「それはもちろん！シヨツピング、です♪」

断るべきだったか…

…そう思ったが既に遅いらしい

く

街のとある洋服屋にて…

「…はあ」

結局コヤンスカヤに引き摺られてやってきた洋服屋で俺は尋問と言っても過言では無い何かを受けていた

「イージーパンツに合いそうなもの…ま、男性はあまり派手なもの合いませんしシンプルに行きましょう」幸い普通の人間に義手は見えていないようですし。

慣れた手つきでいくつか服を手に取り、コヤンスカヤがこちらに戻ってくる

「アンペルドさん、白と灰色！どちらにされます？」

「そんなものどっちでも」どちらにされます？」

「……………灰色」

「かしこまりましたあゝ♡」

店に入ってからずっとこんな感じだ

これじゃ銃撃ってる方が楽じゃないのか…？やれやれ、アジトに帰りたいな…

「ではアンペルドさん、これ持って試着室へGOです！」

「…」

言われるまま服を受け取り試着室へ向かう

緑と灰色のラインが交互に入ったボーダーTシャツに青いイー  
ジーパンツと、白いワイシャツ…いや、カラーシャツと書いてあるな  
「色の付いてない、白一色でどこが『カラー』シャツなんだ…いやそん  
なことを疑問に思う必要は無い」

スニーカーを脱いで試着室に入り、さっさと着替える

「…」

着替えたが…こういう普段着ない服は落ち着かないな…

「アンペルドさん？終わりましたー？」

「ああ…」

試着室のカーテンを開けるとすぐ目の前にコヤンスカヤが立っ  
ており、まじまじと何かを確認し始め…

「ええ、ええー！だいぶマシになったのではないのでしょうか！少なくとも  
もダサさ具合は減ったかと♡」

「そうだな」（ヤケクソ）

服に関して理解することを諦め、再び試着室へ。

元の服に着替えている間にコヤンスカヤが呼んだ店員で会計を済ませて店を出る…前に。

「せっかく買ったのに着ないだなんてもったいないでしょう?」

…というあまりにもしつこい要求(?)から今日1日、先の購入した服で過ごすことに。着替えは試着室を使った

↳

街 大通りにて…

「さてと!では改めて…どこへ行きましょうか?」

「アジ「アジト以外で」

…

やれやれ、どうしろと言うんだ…

「まあ今まで娯楽に関わろうとしなかったのならどこに何かあるのかもよく分かっていると思いますし…特別にワタクシがエスコートして差し上げますので、ご心配なく♡」本来女性がエスコートするのは有り得ないんですよ?

「分かった…もうそれでいい」

こつちが折れて了承すると同時に、ナチュラルに腕を絡ませて歩き出すコヤンスカヤ

コイツは…一体何がしたいんだ…?

ここまで来ると呆れを通り越して若干不気味に思えてくる…

「では…少し遅めではありますが朝食を摂りに行きましょう、付近の飲食店を探しますので少々お待ちを…」

バッグからスマートフォン(おそらくバルンあたりに買いに行かせたもの)を取り出し何かを調べ始めるコヤンスカヤに俺はもう考える

ことをやめた

「…はあ」

長い一日になりそうだな

## 第18話 休暇 『中』

9時45分 街のとあるスイーツ専門店にて…

「……………」もぐもぐ

喫茶店で朝食を摂った後、面白そうという理由でマスターをここに連れてきたはいいですが…

「……………」もぐもぐもぐ

「あー、アンペルドさん？」

「もぐ…なんだ？」

ワタクシの声掛けでストロベリーパフェを食べる手を止めるマスター。

いやコレ面白いというかホラーでは？誰かを殺す時と同じ無表情カでパフェにがつついてるギャングのボスとかホラーですよね？

「えっと…パフェ、気に入られました？」

「…ああ、思ったよりも美味い」

そう答えると再びパフェを食べ始め、あっという間に食べ切ってしまうマスター

ワタクシはというと注文したのが小さなアイス1つだけだったのでマスターより食べるのが遅くなる、ということにはならなかったのが幸いですか…下手したら2つ目注文しそうですし

エスコートすると言った以上、ワタクシが振り回されるなんてことはあってはなりません、のちの楽しみも半減する可能性がありますしここらが引き時でしょう

「美味しいパフェも食べたことですし次の場所、行ってみましょう♡」

スマホを取り出し、手頃な施設を探してみる…  
ふむ、なるほど…

「それで…次はどこだ？」

「そうですねえ…映画館はどうでしょう？」

く

11時40分 映画館付近の公園にて…

「くっ…うつ…！クスクス…！」

「はあ…まだ笑ってるのかお前は」

あの後近くの映画館へ入り、適当に選んだ映画をマスターと2人で鑑賞しに行ったまでは良かったですが――

「く、くっ…あははは！もーダメですホント！我慢のっ、限界ではははははは!!!」

「やれやれ…」

結論から言って止めるべきでした、映画前半は特になんともありませんでしたが…後半！後半がもう…ホント！笑い堪えすぎて霊基削れましたよ多分！

なんですか!?! たった1時間半で全人類が自業自得で滅びるとか！唯一残念なのはあの映画の以前の時間軸に当たる作品を見ていなかったことですかね？

「ははっ、なんでしたっけ？魂の補完？資金と権力を持ち、神を見つけただけで選ばれたとか思い込んだ老人達、それが神と同じ高みへ登ろうとして、最後の最後でたった1人の子供のワガママで！うっくく、くっ！」

人間の分際で高みへと至ろうとあれこれやってみたいたいですが結

局補完はされず！挙げ句の果てに子供2人を残して全人類が絶滅！  
なんて綺麗な最期なんでしょう！

「あ、アンペ、あははっ！アンペルド、さん！ちよ、ちよつと肩を借りてもいいですか！笑えて、力が！」

「はあ…ホラ、掴まれ」

マスターに引き摺られ、近くのベンチへ一緒に腰掛ける

「あー、はー…だいぶ落ち着いて来ました、ありがとうございます♡」  
呼吸を整えながらマスターに感謝をしつつ、スマホを開く

「やれやれ、馬鹿みたいにゲラゲラ笑いやがって」やかましかつたぞ  
「いやーんコヤンスカヤ、反省しますのでえ…どうかお許しくださ〜い♡」

改めてマスターに感謝と謝罪（笑）をしつつ、スマホで次の目的地を探す

そういえばそろそろお昼ですねえ…戻って何か作っても良いですが折角の休み、朝食のようにどこかへ食べに行きましょうか？

「アンペルドさんアンペルドさん！次、このお店と…こつちのお店！どちらにしますっ？」

右腕を絡ませ、押し倒す勢いで身体を密着させながらマスターにスマホの画面を微妙な角度で見せる

「…鬱陶しい、それに胸が邪魔で見えん、離れろ」

「まあまあ、そう言わずに♡」

「…フザけるのも大概に「あああっ!!」

ん？

外野から上がる聞き覚えのある悲鳴に近い声に、ふとそちらの方を向くと…

「な、な！」



「アレツ、そこにいらっしやるのは…」

「なにザイルとらぶらぶしてるの!?この泥棒猫ーツ!!」

顔を真っ赤にして猛ダツシユしてくるノーアさんの姿があった

く

12時00分 L地区 大通りにて…

「やれやれ、やかましいのが増えた」

聖杯戦争中だという認識がコイツらには無いらしい、ナチュラルに合流してきやがって…

「…いや、そうか」

そういえばダヴィンチとノーアは今回の聖杯戦争参加者じゃない可能性が高いんだっただか…義手の製作時期から考えるに少なくとも5年以上前からダヴィンチは現界していたことになる

「認識が無いのは俺の方が、やれやれ…ダヴィンチ、この角か?」

「いや、目的地はもう一つ向こうの角だね、そこを曲がればすぐさー!」  
3人の中で1番まともなダヴィンチと会話をしてやかましさをなんとか誤魔化しながら歩いてゆく

「ドロボー猫!ドロボー猫!!」

「猫ではありませーん、ワタクシはキュートでラブリーでS・P・Yなバニー…兎ですの♡」

「うーん、狐じゃないの…?」

やいのやいのと言い争う2人(十ダヴィンチ)別に騒ぎたいなら騒げばいいがコヤンスカヤが俺の腕を離そうとしないのでやかましい口論がすぐ近くで繰り広げられている、とつとどこか落ち着ける場所に行きたい…ダヴィンチ曰く、今から行く場所なら落ち着けるらし

いが…

「…」

正直コヤンスカヤにノーアにダヴィンチ、これだけ居て落ち着ける場所なんて世界のどこにもなさそうなんだが…？

「お、ここだよアンペルドくん！」

「そうか」

騒ぎ立てる2人を取り合えず連れ、俺はその店へと入った

）

カラオケ店内、104号室にて…

「時代的に仕方ないけどこのままじゃ歌える曲あんまり無いからなあ…よし、曲追加完了！歌うよー、めっちゃ歌うよー！」あ、ザイルお酒飲む？

「…いらん」それとザイルと呼ぶな

よく分からん機器を勝手に店の機械に繋ぎ、マイクを手取るノーア

…どうやらカラオケというのは歌を歌う施設らしい

「んじや私からね！『one last Kiss』行ってみよう！」

「頑張つて〜」

「わー頑張つてくださいーい」（棒）

ノリノリで歌い始めるノーアを無視し、端末を開く

…特に異常の報告は上がっていないな

もう〜いっぱいあーるけーど〜♪

……………やれやれ

「んじや次！ダヴィンチちゃんコレ歌って〜」

「どれどれ…？『色彩』？聞いたことない曲だなあ…マイナーな曲かい？」

「うーん？それはちよつと私からは言えないというかなんというか…まあ歌ってみてよ、きつとしつくりくるから！」

「アンペルドさんアンペルドさん」ヒソヒソ

「なんだ」

まあここで耳打ちする時点で何を考えているかは分かるが

「テキトーに隙を見て抜け出しません？折角の休みが『こんなの』で台無しなんてワタクシ嫌ですわ」

相変わらず自由な奴だな、だがそれには同意だ

「…そうだな」

欲を言えばアジトで1人、眠り続けるのが理想かもしれないが…

「とつとと出て行こう」

「ええ、ええ！そうしましょう！」

パフェの時のような当たりがあるかもしれない、そう思いコヤンスカヤの提案に乗ることにした

「さてさて、いつ抜け出すかですが…」

…？別に機会を伺う必要は無いんじゃないのか？

「コヤンスカヤ、今すぐ出るぞ」

「はい？…はい！かしこまりましたあ〜♡」

コヤンスカヤは一瞬首を傾げたものの、すぐにこっちの意図を汲み取ったらしく俺の手を握る

『単独顕現 EX』

「さよならくまで、あなくたのそぼくに居——ん？あれ、ザイル君達は？」それにしてもこの曲歌いやすいねく

「ピよ？ぎやあああ!?やられた!!!」

く

12時30分 街、とある飲食店付近の路地裏にて…

「…便利だな」

「でしょう？…それにしてもアナタの方から単独顕現使用を促すとは予想外でした」それも戦闘でも無いのに

「乱用しなければただただ便利なワープだからな」  
使わない手はないだろう

「そうですねくでは気を取り直して！先から目をつけていた飲食店の付近に転移しましたのでこのまま食べに行きませんか？」

昼食か…

「ああ、そうするとしよう」

そう言って路地裏から出ようとしてコヤンスカヤに引き止められたのと、俺の顔が映り込んだ窓ガラスを見たのはほぼ同時で——間髪入れずコヤンスカヤが性格の悪さが滲み出たような笑みで言った

「おやあ？ザイルさん、アナタみたいな人でも笑うんですねえ」

「……………」

窓ガラスに映る俺の顔、笑顔というには無表情過ぎるが…だが確かに口元は緩んでいた——ように見える

『ぐすつ…えぐ…うう、□□□あ…』

『ほらほら泣かない！笑顔笑顔！ガーツと笑顔！ホラ笑えーい！』

『わ、わっ!?!わあはははは!くすぐったいよ!』

「……………」

この、記憶…は…

「おっとついザイルさんと…失礼しましたアンペルドさん!…アンペルドさん?」

—— 記憶 ——

小さな少女の記憶

それはとても暖かくて、優しくて、この地獄の炎のように燃える心も癒してしまえそうな記憶<sup>モノ</sup>

だから『彼』は『彼女』の記憶を捨てた、そんなものは邪魔でしか無いから。

だから『彼』は一度『彼女』の全てを殺し、新しい名前を付けた、新しい記憶を作った、新しい在り方を選んだ。

『彼』は『彼女』の「許そうとする心」が許せなかった、だから——

!

いつの間にか、周囲は『あの場所』へと変わっていた  
ここ、は…!?

『ほら、立てる? □□□』

地に座り込む少女に差し伸べられる別の少女の手  
…やめろ

『彼女』が、その手を握ろうと——  
やめろ!

いつの間にか手に握っていた既視感のある翡翠色の剣で少女と少女<sup>彼女</sup>、2人の胴体を  
をいっぺんに貫く

人の形をしている筈のそれらは剣が刺さっても血を流すことは無

く、液体のように溶け、消えてゆく

眠っていてくれ…永遠に…

「アンペルドさん！」

「っ…なんだ？」

自分の身体を揺すられたところでようやくコヤンスカヤの呼びかけに気付く

「大丈夫ですか？いきなりフリーズして…そんなに自分の笑顔が衝撃だったの？」

「まあそんなところだ、ここ何年も笑顔とは無縁だったからな、あんなのでも衝撃だ」

ぼやきつつ、コヤンスカヤを連れて大通りの方へ

も  
そうだな、認める。寝ているよりかは楽しいな、こういう過ごし方

決して言葉に出す事は無かったが、それは紛れもなく男の本心であつた

「これ以上昼が過ぎる前に昼食にする、行くぞ」

「ええ、ええ！参りましょう！」ここは確か日本の海鮮料理を扱っている飲食店だそうですよ！

「そうか」

…そういえば、俺はさつき何を考えていたんだ…？

路地裏から出た時には既に『彼女』も『少女』も、男の中からは消えていた

## 第18話 休暇 『終』

21時00分 T地区 高層ビル最上階（51階）の高級レストランにて…

あれからコヤンスカヤと一緒にいくつか回った。

ブティック、本屋、ホームセンター等…そして――

「では休暇のシメに、こちらのレストランでお食事して帰りましょうかアンペルドさん♡」費用はこちらで用意しましたのでご安心を♪

昼間と違い今はお互いスーツを着ている、コヤンスカヤ曰く店に合った服装が必要らしい

それがここか…

天井がやや高く、その天井と床を繋ぐ外壁部分に当たるビルの側面は全面ガラス張りで、そこから見える夜景は狙撃のために高層ビルに登った時に見るものとはまた別の見え方がした

席に座るといくつか料理が運ばれてきた、コヤンスカヤがあらかじめ手配していたのだろう

ワインの入ったグラスを取るとコヤンスカヤもそれに合わせ対面の席に座ってグラスを手に取り――

「では…かんぱーい♡」

「…？それはなんだ？」

「えっ？」

グラスを突き出す動作の意図が分からずについ声に出たが…コヤンスカヤは信じられないと言った表情でこっちを見ている

やれやれ、なにか地雷を踏んだらしいな

「ええ…そこからですか？いえ、あなたの娯楽に対する無知っぷりは理解しているつもりでしたが…人類共通であろうこれをワタクシが知っていてアナタが知らないと言うのは…」

まあいいでしょう、と言つて俺に軽く説明をするコヤンスカヤ

く

…なるほどな

「そうか、分かった」

カランと一歩遅れてコヤンスカヤのグラスにこっちのグラスを当てる

「ええ、そうです…それにしても今日一日でザイルさんも随分変わりましたねえ」

「…ザイルと呼ぶな」

「まあまあ、フロアにはワタクシ達だけですし良いではありませんか♡」

やれやれ…

周囲を警戒しつつ、肉料理をフォークで切り分けて食べる

「…」

美味いな…

「それでザイルさん、どうでしたか？今日一日遊んで過ごしてみて？」

まるで悪戯する子供のような表情で彼女が言う

「そうだな、楽しかったと思った」

「小学生の読者感想文みたいですねえ、まあ楽しかったのならそれは何より、ワタクシも計画した甲斐があったというものです♡」

グラスを揺らしながら笑みを向けてくるコヤンスカヤ

…しかしコイツは――

「…俺からも一つ聞きたい」



「はい、なんなりと！」

「お前は楽しかったのか？」

楽しいという感情は伝わってきた、だがそれとは別に彼女から僅かに滲み出ていた感情——憎悪

「もちろんですわ♡折角頂いた休暇、楽しまなければ失礼に当たりますし？」

「…そうか」

理由は知らんがコイツの憎悪は普通じゃない、かなり器用に隠しているせいで気付いたのは昼食後あたりだったが…

「うーん、美味し♡」

「ああ」

…まあいいだろう

少なくとも俺に対してその憎悪がまともに向いていないことは確かだ、今は静観しておくか…

く

22時00分

「ごちそうさまでした！」

「…」

食事にここまで時間をかけたのも初めてだな

「ではこちらへどうぞザイルさん♡」

「…？何処に行くつもりだ？」

ここへ来た時とは別のエレベーターに乗り、上へと昇っていく

「せっかく高層ビル最上階に居るんですから、夜景を楽しんで帰るのも一興でしょっ？」

「そうか」

エレベーターを出て、屋上へ

「で？今度はここで何をするんだ？」

夜景を楽しむとか言っていたが…夜景ならついさつき食事しながら充分見た。

「うーん調子狂いますねえ、正直特に何もする事はないと言うか…」  
やれやれ…

「何も無いのなら帰るぞ」

「まあまあ、少しお話しでもしましよ？さ、こちらに」

「…」

仕方なく手招きするコヤンスカヤの元へ

「そうですねえ…そういうえば聞いてませんでした、ザイルさんが聖杯にかける願いとかが聞いてもいいですか？」

「無いな」

聖杯、あらゆる願いを叶える願望機…そんなあるかどうかも分からないあやふやなものにかける願いなんて無い、俺はあくまで切嗣の――

「ハイ！嘘ですね、ソレ」

「――何故そう思う？」

思い起こしてみるが特にこれといった願いは無い、的外れもいいとこだ

が、確信をもって言い切る彼女にふと興味が湧いた

「理由はあなたの組織です」

俺の組織…ウルフルズが？

「こう見えてワタクシ、とある企業の代表だったので分かるんですが

…目的や願いの無い人間は基本的に誰かの上には立てません、まあつまりそういうことで！」

やれやれ…

「そういうことで、で済ませるな。説明しろ」

「うーん娯楽だけでなく自分自身に対しても鈍いようですねえ、ではこちらからお一つ質問を…ザイルさん、アナタはなんのためにウルフルズを立ち上げたので？」

「ウルフルズを立ち上げた理由？それは——」

…

それは——

「それ、は…」

——何故だ？

ズキン

「…！」

額、が、痛む…

「おっと…どうやらタブーのご様子、これは失礼いたしました」

この話はしばらくは忘れましょう、と彼女は笑う

「…」

——同じだ、朝の時と…思い出そうとすると額が痛くなる

「そういう、お前はどうかなんだ？聖杯にかける願いは？」

「ワタクシですか？うーん…特に無いですね??」

「そうか」

特に根掘り葉掘り聞く事でも無い、会話はそこで——

「待つて待つて、普通そこは食い下がるとこでは？」  
「興味無い」

これ以上話す事もない、そろそろアジトに戻りたいのだが

「そんなあく食い下がってくださいまし、さーさー」

…ぐいぐいとコヤンスカヤが腕を引っ張ってくる

「はあ…お前の願いは？」

「特にございませぬ☆」

やれやれ

「——ですがまあ聖杯は大きなリソースです、かける願いはありませんが回収したいとは考えていますね」

「そうか」

役目を終えれば消えるのがサーヴァント…それが聖杯戦争後のことを考えているということは…願いは受肉か？

…いや、そもそもリソース云々が嘘の可能性もあるが…答えは出ないな

「日付が変わるまであと2時間も無い、そろそろアジトに戻るぞ」

「いやーんコヤンスカヤ、もっとお話ししたいですう」

「微塵も思っただけに、無駄に時間を使わせるな」

ん？

懐の端末が鳴り響く

…バルンだな

「静かにしろコヤンスカヤ…俺だ、どうした？」

『ボス！あの、今どちらに？』

…そういえば行き先を言っていなかったな

「T地区の1番高いビル、その屋上だ…何かあったのか？」

『いえ、その、アジトのどこにも居らず、出撃の知らせも来ていなかったもので…』

「言っていないかったな、悪かった」

あいつが心配するのも無理はない、俺は今日初めて休日を取って過ごしたんだ

『いえ滅相も…ですがウルフルズにはボスが必要です、なるべく早く戻って来て頂けませんか？』

「ああ、30分以内に戻る」

通信を切り、深呼吸をする

明日からは、また殺し合いか

「帰るぞ、コヤンスカヤ」

「はいただきます♡」

やれやれ、だがたまにはこういう過ごし方もいい

ボタンを押してエレベーターを呼ぶ

「とりあえず戻ったら…そうだな、ノーアのせいで有耶無耶になっていたスキルの確認をしたい、構わないな？」

「かしこまりました！お茶でも飲みながらゆっくり御説明させて頂きますね！」

ライダー戦の時に発動しかけていたようだが宝具の詳細も知りた  
い…一瞬だったが俺の見間違いで無ければ戦車のようにも…

ピン、とエレベーターが来たことを機械音が告げる

「ん？」

誰か乗っている…

「こんばんは」

「こんばんは〜♪」

エレベーターに乗っていた少女、いや女性へコヤンスカヤが礼を返

す

俺は――

ズキン

また、痛みが…

「アンペルドさん？どうかされ――」令呪を持って命ずる」  
ツ…よりによって――！

「ツ！」パチン

コヤンスカヤの指鳴らし1つで、俺とコヤンスカヤの服装が戦闘服へと変わる

だが、だめだ――

「だめだアサシン…転移だ！」

この女は――

「役目を、果たして!!」

女の手の甲、3本の矢が重なったような令呪の1つが消え、これまでと比べ物にならない威圧感が場を支配する

「まさかこれは――」

「…我が矢の届かぬ獣はあらし」

女のサーヴァントであろう大男が、迷う事なく腕の弓矢を引き絞り

『オリオン・オルコス』っ!!

「グランドの…!?ひぎっ…!?

グギャアアアアツッ!!??

——彼女を貫いた

「コヤンスカヤっ!!」

蒼い雷のような無数の矢がコヤンスカヤを打ち上げ、その身を切り裂いてゆく

「グギギ…ぐはあっ!」

あれは…

コヤンスカヤの背から伸びる9本の…尾? 尾なのか? アレは…いやそんなことはどうでもいい! 今は彼女を助けるしかない!

大男の宝具であろう矢が彼女の尾を一本ずつ削り、えぐり飛ばしていつている…全ての尾が無くなったらどうなるか、想像するまでもない

今! コヤンスカヤを失う訳にはいかない!

マスターの女は逃げたのかその場には既に居なかった、いやきつと居なくて良かったんだ

「ツッ」パシッ

戦闘服と同時に展開された無反動砲を構える

こんなものサーヴァントには効かないだろうが集中を乱すには充分だ…!

大男ではなく、大男の足元へ無反動砲を向ける

足場を崩されれば宝具の維持は難しいハズだ、元は大男も動けていない!

「させないっ!」

「なっ!?!」

女の声と共にどん、と衝撃が来て体制が崩れる  
…見間違いでは無かった

「彼の、邪魔はさせない!」

「――」

冗談じゃ、ない

ズキツ、ミシツ…

これまでと比較にならない痛みが額に走る

冗談じゃない、ぞ…:よりによって――

「よりによって!お前が俺の邪魔をするのか!?!影月 遥!!!」

目の前にいたのは…『ザイル』という男を殺す力を持った女性少女だった



## 番外 いまさらキャラ設定集&お詫び

① ザイル・ニッカー

髪 銀髪 三つ編み

目の色 赤

年齢 22歳

身長 175cm

体重 62kg (義手の重さ含まず)

普段着 カスタム戦闘服一式

戦闘時 普段着と同じ

その他 彼の戦闘服はオリーブドラブ戦闘服一式をベースに(主に後述のノアが)魔改造したものをいくつか着回している

右腕を失っており、義手を装着している

(義手制作者 ダヴィンチ)

本作の主人公の1人であり、今回の聖杯戦争のマスターの1人、使役サーヴァントはコヤンスカヤ(アサシン)

マスターとしての知識は最低限あるが適性は無く、本来マスターに選ばれるような人間ではない

### 戦闘スタイル

近距離戦では銃弾、爆弾、閃光弾を撒きつつ、隙を見てナイフ等で接近戦を仕掛けるといふもの、遠距離戦においてはアンチマテリアルライフルを使った狙撃を好む

また、予備動作無しでの動作が可能であり、相対している敵は『動いた』という事実を認識することが遅れ、結果正面から不意打ちができるという能力も持っている(これは義手のバフ等は関係ない、彼本来の身体能力の1つ)

対サーヴァントorマスター戦においては上記の戦闘スタイルに否幻想弾の使用が加わる

サーヴァントとの関係

コヤンスカヤを『得体の知れない何か』と捉えて警戒を怠らない一方、『様々な仕事がこなせる万能秘書』という代えの効かない人材としても見ており、仕事面に関しては全幅の信頼を置いている

聖杯に対する願い

『彼』は無いと言っているがそれは『彼女』がストッパーになって気付かないだけで願いはある。もしそのストッパーが無くなり、願いが叶えば恐らく『彼』は：

② バルン・ファクター

髪 黒髪 角刈り

目の色 黒

年齢 26歳

身長 183cm

体重 76kg

普段着 スポーツTシャツ+パンツ

戦闘時 スプリッター戦闘服一式（仕事時と同様）

その他 ザイルの物と違い彼の戦闘服は特に調整、改造されたものでは無く、米軍のものをそのまま量産したもの1つだが、敵味方識別のため両肩に狼のワッペンが付いている（偽造対策としていくつか種類があり、日によって色や形を僅かに変えている）

ザイルが最も信頼しているウルフルズ幹部であり、ザイル不在時は（大抵指示を残して出て行くので殆どないが）彼が実質的なボスとなっている

人物

人当たりも良く、ザイルを除いて誰に対しても同じ態度で接する人当たりのいい青年。基本的に真面目ではあるのだがザイルに内緒でコヤンスカヤファンクラブを作るなど女性に対してはやや弱い：ようにも見える

好青年である彼が何故犯罪組織に身を置いているのかという理由は現時点では不明。

③ ノーア・克蘭ツェル

髪 灰に近い銀髪 ショート

目の色 金

年齢 ? 歳

身長 160 cm

体重 48 kg

普段着 きつたない白衣＋ジャージ

戦闘時 綺麗な白衣＋ジャージ

マスターの1人、使役サーヴァントはレオナルド・ダ・ヴィンチ（キャスター）

普段のあたおか頭おかしい の略具合のせいで目立たないがマスターとしての知識や適性は共に高く、特に知識に関しては群を抜いている

魔術師として文句無しな上に現代兵器に精通した科学者でもあるため見かけより隙が無い

聖杯戦争においてマジメに戦えば最も勝ち残る可能性のある人物なのだが：

また、ザイルに魔術の知識を教えたのは切嗣であるが彼女もザイルに魔術師としての手ほどきをしていたようで、否幻想弾の運用や対神秘兵器の手入れ方法は全て彼女がザイルに教えたものである

人物

自称、ダヴィンチちゃんの天才ちから力を5分の1くらいにした天才ザイル以外の人はあまり関わろうとせず、とある美術館の地下を勝手に改造、増築して研究施設兼隠れ家として引き籠もっている

楽しいことは積極的に、楽しくないことは徹底的に避けるというわがままな子供がそのまま大人になったような性格。

ダヴィンチとザイルが好き、どれくらいかと言うと尾けまわすぐら  
いには好きで、特にザイルは大好き（ダヴィンチがザイルの義手を作  
ることになったのも彼女がしつこくお願いしたから）

#### 戦闘スタイル

直接戦うのはあまり得意じゃないと本人は言うものの、実際のところ  
単独でサーヴァントと渡り合える実力は持っているなど軽く人間  
をやめているような節がある。（彼女に憑依？したサーヴァントの影  
響と思われるがダヴィンチが気付いていないためサーヴァントの気  
配は無い模様）

基本的には強力な障壁を張りつつ瞬間強化、緊急回避などでダヴィ  
ンチを援護するスタイル

#### サーヴァントとの関係

ダヴィンチを楽しいお話相手であると同時に天才の自分がどう  
ひっくり返っても勝てない大天才だと尊敬しており、あまりサーヴァ  
ントとして見ている様子は無い

聖杯に対する願い  
無し

#### ④ フーレン・アジャイル

髪 白髪 短髪

目の色 黒

年齢 64歳

身長 184cm

体重 79kg

普段着 デニムジャケット＋ジーンズ

戦闘時 カッターシャツ＋ストラックス

（ザイルとの戦闘時はパーティ用のフルスーツを着用していた）

今回の聖杯戦争のマスターの1人、使役サーヴァントは牛若丸（ライダー）

マスターとしての適正や知識はザイル以下だが、とある事情により聖杯戦争及びサーヴァントに関する知識はある程度持っている

フーレン・アジャイルという名前は改名後の名であり、実は日本人で山育ち。50年前、山を駆け回っていた日常の中で聖杯戦争に巻き込まれ、ある拳法家の英霊との出会い、その英霊の在り方に感銘を受けて拳法を教わる。

聖杯戦争終結後、聖堂教会と取引しアメリカへ。教会の監視下であるツール家で使用人として働くこととなるが50年後の現在、選択の余地無く聖杯戦争への参加を迫られ、結果ザイルと衝突、命を落とすてしまう

## 人物

14歳まで山育ちだったため学校には行っておらず、人とも関わりが無かったため（50年の間色々勉強してきたとはいえ）若干のコミュニケーション障

しかし本人自身が様々な人と関わり、仲良くなりたいという願望があるため話す事ができれば彼の、強面な外見から来る寡黙な印象は大きく変わるだろう

後述のミラ・ツールを本当の孫のように可愛がっており、彼自身が子供の頃に山以外と関わる機会が殆ど無かったことから「私のように閉鎖的でなく、子供の内に様々なことを経験して欲しい」と思っているおじいちゃん。

## 戦闘スタイル

武器は持たず、八極拳という暗殺拳を用いて戦う

英霊から直々に手ほどきを受けたこと、そしてそれを再現しうる才能を持っていたことも相まって短時間、小細工無しの戦闘であれば全マスターの中で最強の実力を持っていた

サーヴァント戦においては牛若丸を援護するというより同じ場所

で共に戦うというもの、短時間しか全力を出せないとはいえ敵からしてみればサーヴァントが2騎になったようなものであり、大きな脅威である

#### サーヴァントとの関係

サーヴァントを英雄として尊敬している彼にとって牛若丸も召喚当時から例外なく敬うだけの対象だったが、自分だけでなくミラに対しても真名を明かして接したいという彼女の頼みを承諾後、ミラと一緒に過ごす牛若丸を見て尊敬に加え、感謝の念を抱いていたようだ

#### 聖杯に対する願い

師ともう一度会い、自分の腕前を見て、手合わせして欲しい

#### ⑤ ミラ・ツール

髪 栗色 ショート（伸ばし中）

目の色 蒼

年齢 5歳

身長 130cm

体重 18kg

普段着 オレンジのワンピース＋ズボン

フリーレンが仕えるツール家の若き当主…といってもツール家自体はただ裕福なだけの一般家庭なので当主だからといって特に責務に追われていたりはいらない

#### 人物

おしいちゃん  
フリーレンと遊ぶのが好きな女の子

聖杯戦争についてはよく分かっておらず、牛若丸のことは『色んな遊びを知っているすごい人！』という認識

服は自分で選ぶ

⑥ ルマス・プライマリ

髪 赤髪（地毛は黒髪） ロング

目の色 黒

年齢 19歳

身長 155cm

体重 56kg

普段着 時計塔の制服

戦闘時 普段着と同じ

（服と髪色は彼女の負けず嫌いな性格が関係しており、髪色は目立つために、制服は時計塔の誰が見ても時計塔の生徒だと分かるようにという考えが含まれている）

今回の聖杯戦争のマスターの1人、使役サーヴァントはヘクトール（ランサー）

マスターとしての適正や知識は中の上あたり。

ウェイバーが聖杯戦争を生き抜いたという事実に触発され、ヤケクソ気味に聖杯戦争への参加を決意。聖遺物：トロイアの大英雄ヘクトールが使っていたという鎧…の破片（盗品）を持ってアメリカへ行くのだが、彼女の負けず嫌いな性格をザイルに付け込まれてしまい、爆弾で両足を吹き飛ばされたのち頭を撃ち抜かれて命を落とす

人物

100年にも満たない弱小家系出身であるが家の歴史が長いだけで偉いと思っている腐敗した他の生徒よりは成績等で結果を出しており、その点は教師達から評価されていたが…

下克上が大好きな負けず嫌い…というより若干のサディスト。『自分は凄い』『自分より上は居ない』等思い込んでいるエリートが本来格下である者（つまり彼女自身）に実力差を分からせられ、プライドを踏み躪られる時の表情が好きというもの。これのせいで授業やレポートで出した成果は帳消しどころか最悪と言えるまで落ち込んでおり『いい加減にそういうのやめないと居場所が無くなるぞ…』と忠

告されたのがウェイバーと知り合った経緯。

そこから無意識的に彼に惹かれていき、最悪だった性格も少しずつ変わっていったのだが結局彼女がそれに気付いたのは…

#### 戦闘スタイル

サーヴァントと共にガンガン前線に出て援護するスタイル

手当てや身体能力強化の魔術も行使できるが彼女自身の戦闘経験が無すぎたため、それを発揮することは無かった

#### サーヴァントとの関係

マスターとサーヴァント、それ以上でもそれ以下でも無い

聖杯に対する願い

時計塔のエリート達を屈服させたい

#### ⑥ クライム・アルバート

髪 黒髪 オールバック

目の色 蒼

年齢 24歳

身長 180cm

体重 80kg

普段着 米軍の正式採用戦闘服（オリーブドラブ）

戦闘時 改造戦闘服

（正式戦闘服にセラミックプレートを無理矢理付けた防弾仕様のもの）

今回の聖杯戦争のマスターの1人、使役サーヴァントは土方歳三（バーサーカー）

マスターとしての適正や知識は参加者の中では最底辺であり、魔力供給も満足に行えないため、妹のエナが用意した魔力タンクを使用している（見た目的にはただの酸素ボンベであり戦闘前に1本消費す



る)

#### 人物

愛国者。国内外問わず最前線で問題に取り掛かろうとするため、国民からは『勇者』と呼ばれている

アメリカ、アメリカ国民、そして唯一の家族をなんとしても守ろうとしている反面、それに仇なす犯罪者、敵対者に対しては攻撃的。

ザイル率いる犯罪組織集団ウルフルズとは軍に入ってから以来散々戦い続けてきており、ザイルを『殺さなければならぬ相手』として。現ウルフルズ団員を『行き場を失った者が不幸にもザイルに唆されてしまった、救わなければならない者』として。彼は銃を取り毎日のように走っている

：皮肉にも対ウルフルズのその功績が無ければ彼の今の地位は無く、その経験が無ければ彼は今のような軍人つわものにはなっていなかっただろう

#### 戦闘スタイル

サーヴァントと共に前線へ出て、あらゆる手段を尽くして戦う戦闘狂。

敵サーヴァントや神秘による防御を行う敵マスターへの対策として土方歳三と武器を一部交換して戦っている(対ザイル、対遙で火縄銃の火力が高かったのはこのため)

#### サーヴァントとの関係

聖杯に目が眩み、願望機を手に入れるため死んだ後すら殺し合いをする者：というのが当初の認識だったが戦いを重ねるにつれてその認識は変わり、バーサーカーの折れない志に尊敬の念を。そして自分が目指すべき指針として捉えている

#### 聖杯に対する願い

犯罪者の居ないアメリカの永久的平和の維持

⑦ エナ・アルバート

髪 金髪（地毛は黒）

目の色 蒼

年齢 21歳

身長 130cm

体重 29kg

普段着 神父服

戦闘時 竜のマークをあしらった神父服

今回の聖杯戦争で監督役を務めていた女性（後述の理由により男装しており、兄のクライムからも男扱いされていた）

誰もが勇者と呼んで尊敬する兄に憧れるも、病気により成長が止まってしまい、軍人としての道を断念。そんな中自分が聖堂教会の家系であることを偶然知り、聖職者としての道を進み始め、陰ながら兄の手助けをしていた（彼が若くして陸軍将校まで登り詰められたのも彼女の手助けが一部関係している）

グランドクラス召喚の気配を察知し、50年前から自宅にこっそりと保管されていた神剣を持ち出して活動を始める。

が、その後ホームズに様子見の駒として利用され、最期はコヤンスカヤに剣を奪われた挙句、彼女の呼び出した仔犬達に全身を喰らい尽くされて死亡した

## 人物

兄と同じく国と国民を守り、犯罪者や犯罪組織を敵視している：が、そこには特に憎しみも愛国心もなく、ひとえに『兄のようにかっこよくなりたい』『兄の役に立ちたい』という2つの思いから来ている

また、このことから『勇者』というものに強い執着を持っており、わざわざ重いコストを引いてまで神秘対策をした盾を用意したり、竜の紋章を付けたたり、剣を赤色にしたり、慣れない口調で喋ったりと、自分自身を彼女の知りうる『勇者』へひたすら近付かせようとしていた

(男装していたのもこのため)

### 戦闘スタイル

遠距離では剣を振りかざして剣先から雷を弾丸のように撃ちつつ、中距離では剣から水流の壁を出して視界を遮り、敵を一刀両断する：つもりだったが剣本来の持ち主でないこと、そもそも剣が完全な状態では無かったこと(そもそも完全な状態では彼女が制御するなどとても無理な話だったのだが。)

そしてコヤンスカヤが相手だったということもあり、殆ど戦いにすらならなかった

### ⑧ 影月 遥

髪 黒髪、毛先のみ水色 セミロング

目の色 赤

年齢 23歳

身長 155cm

体重 42kg

普段着 黒タートルネック+チェック柄のロングスカート

戦闘時 黒タートルネック+ジーンズ+魔術礼装として加工したコート

たコート

今回の聖杯戦争のマスターの1人、使役サーヴァントはオリオン(グラントアーチャー)

マスターとしての適正は可もなく不可もなし、知識は平均より少しだけ上。

幼少期にマトン家という下級魔術師の家系に養子として預けられ、現在は影月 遥ではなくハル・マトンという名前に改名されているが：

### 人物

幼さが抜けない女性<sup>少女</sup>、童顔ということもあり時々子供扱いをされる

『殺される可能性がある』ということとは認識しているもののマスターになった経緯や彼女自身の子供っぽい性格もあり、『殺し合いをする』という感覚があまり無い

基本的にのんびりとした少女で怒ることも殆ど無いが…いじめ、迫害、差別等を目にすると激怒し、暴力事案を起こしてしまうことも。

#### 戦闘スタイル

敵サーヴァントへオリオンをぶつけ、自身は中距離から飛び道具で敵マスターの相手をする、よくある魔術師の戦法。

魔術との関わりはあまり無く、戦闘とも縁が無い…筈なのだが何故か戦闘センスが高く、その戦闘力は現役軍人のクライムに迫るものだった

サーヴァントへの援護はそこそこできる程度。

#### サーヴァントとの関係

初恋。今のところ友達以上、恋人未満（と、彼女は思っている）オリオンが対ビーストのカウンターとして…グランドクラスとして召喚された事実はよく分かっていないものの『彼にしか果たせない使命がある』という事実だけは理解しており、持てる力全てを持って彼の手助けをしようとする。

#### 聖杯に対する願い

妹：影月 彼方かなたと再会し、彼女を守ること。

#### お詫び

ええー… 第16話 殺戮技巧（人）／対話 の後書きに書いてあるノアに憑いたオリ鯖ですが…ハイ。めでたく実装されてオリ鯖では無くなりました！

…もうこの時点でバレルようなものなんで言うかどうか迷いましたがオリ鯖って言っちゃったのはアレですし…

第19話 幕間 影月 遙 (3)

???にて

∴

「泣いている

子供のようにわんわんと泣いている誰かが駆け寄ってくるのが見える…

「……!」  
そのまま彼女は私を抱き上げ、いつそう大きな声で泣き始めた

「……」  
——そんなのダメだ

右手で彼女の頬を撫でる  
私を抱きしめる彼女はあの子では無いけれど、泣いてる方が良い人  
なんて誰もいない

泣かないで

そう言おうとして声が出ない事に気付く

ああ…そうか

よく見れば自分の意思で動かしていたと思っていた血まみれの手  
は自分の手で無く、私の意思とも関係が無かった

「この夢は——」

∴

ランサー敗退の翌日

R地区 とある一軒家 リビング

「んがっ…?」

窓の外から聞こえる雨の音で目が覚める

「いててて…」

………お尻がいたい

それはそうだ、同じ椅子に座って延々と武器の残骸とにらめっこしていちやお尻も痛くなるだろう。

先日ルマスのいた病室から回収した武器、多分銃だったものの解析中…に寝落ちして今に至る

「…これじゃあホテルでやってても似たような手応えだったかも、結果論だけど。」

あのビジネスホテルでやっても進展しないと踏んで取り敢えず家で作業しているけど…損傷が激しくてロクに進まないまま寝落ちしてしまった

コンコン

ん?

「おーい、マスター?入るぞ?」

「いいよー…」

若干ふらつきながらイスから立ち上がる

あー…頭も痛い…

「マスター、根を詰めすぎだぜ…メシもロクに食ってないだろ?ホラ、簡単な物だが取り敢えず作った、これでも食って一休みしろ」

「うん、ありがとうアーチャー」

アーチャーの持っている井には下から順に白米、千切りキャベツ、豚肉がもつさりと乗った如何にも男飯な食事が盛り付けられていた。

「マスターが買い溜めしていた食材をいくつか使わせてもらった。…今の今まで狩った獣の肉を焼いてたくらいで料理なんざしたこと無

かったからそんなものになっちまった。悪りいな」

「そんなことないよ。ありがとうアーチャー、美味しそうだよ！」

一見雑に作ったように見えるが井が持ちやすいように少し小さめの物を選んであったり、肉も私が食べやすいように結構細かく刻んでから焼かれているのが分かる

それが豚肉に必要なのかと聞かれると…まあそうなんだけど。

私の予想だが、狩りでその日の食事を用意してきた彼にとって肉は硬いというイメージでも付いているのかもしれない

箸と一緒に受け取り食べ始める

「…うん…うん、美味しい。」

しかしおいしかったのは間違いない。男飯らしさと言えばいいか、味付け等の痕跡や味は殆ど無かったがこれはこれで新鮮で美味しい。

うん、元気が出た。

…欲を言えば、この朝とも夜とも取れない時間に合ったものが食べたかったけど。

「もぐっ…うん、ごちそうさまでした、美味しかった。ありがとう」

食器を下げ、取り敢えず台所にあるステンレスの桶にそれを突っ込む

後で洗おうと

「そいつは良かった！…んでようマスター、その武器の方は何か分かったか？」

「なんにも、ここまで調べて神秘の痕跡が無いってことは普通の銃？なんだろうけど…」

それにしても何か引つかかる、ランサーには戦闘による傷は無かった。そしてルマスさんはランサーが健在している中で頭を撃ち抜かれて死んだ…

「…」

——やっぱり何かある

アーチャーも言っただけどただの銃に彼が遅れを取るとは思えない  
い  
なんなんだろう、この銃は…

「…もう少し調べる」

「おいおいマスター、いい加減に休めよ、昨日の夜…いや今日か？とにかく言っただろ？」

「…」

まだ休めない、まだ何も分かっていない…せめて何か、手がかりになりそうな情報でも…

「ハル？入るわよ」

「あっ…!?姉さ——」

こちらの返答も聞かず義姉…トール・マトンが部屋に入ってくる

あ、あれ…？まだ帰ってこない筈なのに…

『まだ帰ってこない筈なのに』って？」

「あ、いや…」

バレてる…！

「アーチャーが呼びに来たのよ、いくら言ってもアンタが休まないから説得してくれ、って」

そうなの？と視線でアーチャーに質問する

……………どうやらそうらしい

「アンタねえ…そりや確かに言っただわよ？やるからには勝ちなさいって、でもねハル？それは急ぐ理由にはならないわよ」

「そうだぜマス——いや、ハル」

「2人とも…」



…でも

「で、でも何かしてないと——」それにライダーのマスターとの密会が…

「はいはいはい！現時点でアンタに何を言っても無駄だったのが分かったわ！というわけで実力行使ね。」まずは風呂に放り込むわよ

え？

「あの、姉さん…？なんで私の服を掴んでるの…？」

「ん？そりゃアンタ——こうするためよ!!」ガバツ  
!!??

言うが速いかぺいぺいつと衣服を剥がし身ぐるみに来た！

「や、うっわ!」

もちろん全力で抵抗！しかしなんと卑怯なことか、姉さんの腕力が普通じゃない！

「服脱がせるためだけに身体能力強化使う!?変態！脳筋！」

「知的でしょう!?おらっ、脱げ！」

「ま、待って!!今はダメっ！」

もしかしたら首が折れるかもしれないとは一瞬思ったものの、ぐいつ！と姉さんの顔を理由に向ける

「ちよ、姉を殺す気…ん？」

姉さんもそれで気付いたらしい、彼女の視線の先…ものすつごい爽やかな顔をしたアーチャーに——

「…うん？ああ、俺のことは気にせずドーズ続けてくれ」俺は今空気だから。

「」

ヒュオツ…

「ね、姉さん…?」

「お…?」

目を疑うようなスピードでアーチャーの背後に回り込んだ姉さんがそのまま飛び上がり――

「待って、待ってくれ今回流石に俺は悪くな」

「出て行けエエーッ!!!」

「理不尽なアアアア!?!」

ドロップキックでアーチャーを窓から外へ吹き飛ばした!

「わああっ!?!オリオン!!」

彼の体躯も相まって窓ガラスどころか周りの壁も少し削れてしまった

パラパラと壁の破片を散らしながら姉さんがゆっくり振り返る

「ハル」

街灯から発するオレンジ色の光と、雨の雫が重なり、姉さんがオーラを纏っているように見える

ビクッ

こ、怖い!

「…お風呂入って、パジャマ着替えて、おやすみする?」

「ハイ、シマス、オヤスマシマス、オネエサマ」

嫌とは言わせないオーラを纏った姉さんに説得され、ライダーのマスターと密会するまでの数時間、休むことになった…

## 第20話 救済

T地区 高層ビル屋上にて…

「よりによつて！お前が俺の邪魔をするのか!?影月 遙!!!」

——え？

この人、なんで私の本名を…？

諸事情で私の名前はハル・マトンになってる、改名する前の名前があることを知ってる人はいても本名を知っている人なんて…だがそんなことを考えている余裕は無いらしい

「…ツ？いや知らない、俺は知らない…！お前、お前！邪魔をするなアツ！」

「うわっ!？」

怒りの感情をあらわにした男が銃を撃つ

1発目は避けた、2発目もなんとか避けた、3発目は腕を掠っただけで済んだ

「あぶなかった…」チラッ

…一瞬後方を確認する

土砂降りの雨を逆再生させたように、空へ降り続けるオリオンの矢。

「ギギギギ、あ、アア”ア”…!」

「おらあああああつ!!」

その矢の一本一本が、獣の尾を一本ずつ確実に射殺していつている…直感だけどあの尾が全部無くなればきつと——  
残り7本…!

「クソ！」 チャキキ…  
またミサイル――

「っガンドー！」  
ダメージは無かったがガンドの衝撃で狙いが狂い、ミサイルはあらぬ方へと飛んでいく

「ガキが！」  
男が今度はこちらの足元へ砲を向ける

やるしか、ない！

「っ！身体機能強化…！視神経、右脚部筋肉…腸腰筋、臀筋群強化！」  
「今すぐ消えろ!!」

撃ち込まれたミサイルを視力で捉え――

「たあーっ!!」  
力の限り明後日の方向へ蹴飛ばした

「…!?!」  
かなり驚いてる…今だ！

「強化解除！」  
ほんの瞬きほどの一瞬男の動きが止まった、それを見てとり一気に距離を詰める

残り6本

関節技、投げ、ガンド、なんでもいい！時間を稼いで  
ボギツ…

「っッ！ガンドっ！」

右足のどこかの骨が折れた…けど！  
止まれるか…！

残った左足で前へ踏み切り、男の顔面目掛けてガンドを撃つ  
「はっ、この——あぐっ!?!」

ガンドでフラついた男へそのまま体当たりして突き飛ばす

「なっ!マスター!?!」

「構わないで!人類を、世界を守るんでしょ!?!」

作戦通りに私が逃げなかったのに気づいたオリオンが叫び、それ以上  
上の大声で言葉を返す

残り5本

「人類を、守るだと…?お前は、本気で言っているのか…!?!」

ふらりと立ち上がり、信じられないといった様子で男が言う

「その通りだよ…!獣のマスター!」

「ふざけるなア!」

いつの間にか額から血を流していた男が立ち上がろうとしていた  
私の無防備な脇腹を蹴り上げる

「ウツ…!」

宙を舞う自分の身体、それがすぐさまコンクリートへと叩き付けら  
れる

「ハルっ!!」

「集中…してっ…!」

凄まじい吐き気と身体の中から感じるむせ返るような血の匂い

でも、まだ…私は、

「人間を守る価値がどこにある!英雄ごっこか!?!笑わせるな!」

「げほっ…あな、たに、何があったかは知らない、でも、価値はあるよ  
…」

彼の言葉から感じられる人への果てしない憎悪、それが分からない

わけじゃない

…あの子と、同じかもしれない

「あなたはきつと、誰にも理解されなのまま、ここまで来たんだ…だから気付かなかっただけなんだ」

残り4本

「黙れ…！」

砕けた右足と肋骨の痛みを堪えて立ち上がり、霞む瞳で彼を見る

「あなたのような人を、1人、知ってる…だから——」

「知ったような口を…！…！?うぐあつあああ…頭が、頭が…!!」

交通事故にでもあったように、男の額から血が流れ、顔の右半分が血まみれになっていく

「もしかしたら、私なら、理解できるかもしれない、だから——」

ダンッ

瞬間右側の視界が狭くなり、代わりに顔面に激痛が走って世界が傾く

「クソッ、てめえ…！」

アーチャーの手が今にも止まりそうになるのが見え、倒れたまま反射で右手を掲げる

「重ねて令呪をもって命ずる…！オリオン、なんとしても獣を倒して！」

残り3本

2つ目の令呪が消え、サーヴァントへの縛りが強くなる

「お前死ぬ気か!?!」

そんなつもりは無い、よ

「しゃべるな…その目で、俺を、見るな…!」 チャキッ  
彼が背を向ける、手にはあの砲が――

「ガンド!」

男ではなく砲を狙って弾き落とす

「このっ…!!」

こっちに…!

「ガンド――ひ、ぎゅっ…!」

ドグツと目の前で炸裂する暴力の衝撃とそれによる痛み

血で若干紅色に染まった鋼鉄の義手が額から上を鷲掴みにしてく  
る

「今すぐ!サーヴァントを自害させろ!女!」

憎悪よりも、敵意よりも、怯えの感情で満たされた彼の声。

「いやだ!」

「!?!」

それに対して声だけで相手を吹き飛ばす意気で言い返す

「あなたのような弱い心に、私は負けない」

ミシミシと音を立てて鋼鉄の爪が食い込んでいく

――でも

「もう一度、言うよ!あなたは弱い!」

「ガキが…!殺せないとも思っているのか!!」

直後お腹へ突き立てられるナイフ

とても痛いけどこれではまだ死なない

「げぼっ…それ、が…答え、でしょ?」

「なに…!?!」

血が喉の奥から溢れてくる

…喋れなくなる、前に

「そのナイフ、で私の、心臓でも首でも…突き…刺せば…即死、なのに」

「こ…のっ!」

「あなた、は、まだ…何かを迷ってる」

——どうしよう、死ぬ気なんて全然無いのに

「それを、私に教えてよ」

身体感覚が無くなってきた

「私なら、きっと——」

血に塗れて暗くなっていく視界と意識の中で最後に見えたのは、紫色の刃物とその下から流れる雫、オリオン彼の背中、そして——

おつきさま…?」

く

「はっ、はあっ、はっ…」

俺は、何をしている!?!そもそも、俺は、なんなんだ!?!

目の前でズタズタした女には既に意識は無く、恐らくもう死んでい  
る、きっと死んでいる

そうだ、まだ確定じゃない、ならザイルがやることは1つだ

コルトパイソンを無防備になっている女の頭に押し当てる

…その暫定的な死を確定させ、落とした無反動砲を拾い、奴の足場  
を崩す

なんてことはない、それだけのはずなのに



この少女が、いや女が喋るたびに、俺を見るたびに俺の中の何かが否定されていく、居場所を無くしていく

「俺は——」  
銃が、撃てない

「——『アルテミス・アグノス月女神の無垢な愛』」

!?

すぐ背後から聞こえるサーヴァントの声

二重令呪の縛りをどうやって!? まずい——

「レオレ「うるせえ!どきやがれっ!!」

残り2本

「…ッ!!」

大黒柱のような豪腕に吹き飛ばされ、ゴチャグチャツ…と骨の他に何か潰れた感触が内部から響く

そして今の衝撃のせいかな、額から何かはずるりと落ちる

「いや、それより、も」

骨だか皮だか分からないがそんなことを気にしている余裕は無い

数メートル先、とても生きているように見えないほどボロボロになったコヤンスカヤの元へ走る

「逃げるぞ…」

コヤンスカヤ担ぎ上げ、まだ生きていることを確認すると同時に、すぐ近くの地面、爆風のギリギリ届かないところへ再装填した無反動砲を撃ち込んで穴を開ける

「ここままでやって逃げられると思うなよ…!」

穴を跨いで向こう側にいる敵サーヴァントが逃走の意思に気付き、  
弓矢を引き絞る

「ッ……」

弓矢が放たれるよりも先に閃光弾を乱暴に投げ付け、咄嗟に思い付いた言葉を言う

「今日は、退く……次はマスター共々息の根を止めてやる」

「くそっ！待ちやがれ……ちくしょう！」

そして身体に残った全ての力を振り絞って光が完全に消える前に穴へ降り……ずに、すぐ後ろのエレベーター、その裏にあたる隙間へ逃げ込む

「……………」

「~~~~~!」

……どうやら追撃は諦めたらしく、敵サーヴァントの気配が離れていった

よし……

「令呪で命ずる……コヤンスカヤ、自身の傷を治せ」

2画目の令呪が消え、魔力の塊が彼女へ流れ込む

「う……」

……1つじゃとても足りないな

手元の、3画目の令呪に視線を落とす

迷う必要は無い

「重ねて令呪で命ずる、自身の傷を治せ」

最後の令呪の魔力が2画目と同じように彼女へと流れていく

「……ゴホッ……ぐ、何が……？」

意識は戻った、あと少し

「噛め」

「…」

担ぎ上げていて顔は見えないが気配で察しはつく

「血から魔力を補給して例のスキル単独頭現を使え、俺はもう動けん」

「……………」ぞぷっ…

「ッ…」

迷っていたようだがそれもほんの一瞬で、すぐに彼女の牙が首筋へ突き立てられる

「…少し眠る、後のことは任せるぞ」

「……………ぷは…分かりました、ザイルさん」

…影月 遥とそのサーヴァントか

「…」

やれやれ…ここまで来ると…愉快だな

## 第21話 異次元からの贈り物／善と悪

ウルフルズアジト ザイルの自室にて…

ベッドの上で寝息を立てるボロボロの男、それを1人テキパキと看病するコヤンスカヤ

「…これで頭部以外はひとまず良いでしょう」

日付は変わり午前2時、ザイルさんの治療を終えて付近の椅子に腰掛け、尾を実体化させる

…やはりそこまで甘くはない、か

2つの令呪とマスターの血液から摂取した魔力で外傷はかろうじて治ったものの霊基出力は大幅に低下しており、身体が重いのがはっきりと分かる

さらに――

やっぱり復活しませんよねえ、はあ…

何度実体化させても現れる尾は2本のみ。

長い時間と労力をかけ、必死に蓄えた9本の尾…その内の7本があの数分で跡形も無く消し飛んだ事実のコヤンスカヤといえども頭を抱えずにはいられなかった

仕方なかったとはいえ第8の尾の損失がかなり痛い…とはいえあの宝具を前に残った2本で稼げる時間なんてほぼ無かったですよ  
初めから第8を盾にしていれば他に残った尾もあったかもしれない  
せんがもはやあとの祭り…

「――許さぬ」

あのサーヴァントに対して内側で煮えたぎっていた感情が外側へと漏れ出す

「冠位とはいえたかだかサーヴァント一騎、それも小娘1人に気を取

られて攻撃をやめるような小心者がこの妾に——」

と、そこまで呟いて我に返る

「…まだザイルさんの安全が確保できていませんわコヤンスカヤ、愚痴は彼が無事に起きてから。」

血が滲んできたタオルを取り替え、新品のタオルを同じように彼の額に巻く

骨は折れてない場所を探した方が早く、内臓も大きなダメージを受けていたが不幸中の幸いか、重傷なのは間違いないものすごくさま命に関わりがあるようなものでは無かった、ダメージから察するにあのアーチャーに殴られたわけではない様子。（義手の護りも作動していませんでしたし敵マスターあたりでしょう）

それよりも問題なのは——

「やはりただの傷では無いですね」

彼の額の傷からの出血が止まらない…

もちろんいくつか止血方法を試した、場所が場所だけにやれることは多くは無かったが思い付く限りは試した

皮肉だが、今まで散々人間を捌ってきたことがある彼女にとって人体構造への理解は決して低いものではない

その彼女が正しいと思った方法で止血できなかつたということは普通の傷では無いのだろう

「…これは流石にまずい」

『どのような相手であれ受けた恩は必ず返す』がモットーであり、完璧にそれを守ってきた彼女にとって今の状況は非常にまずいものであった

彼が令呪を捨ててまでワタクシを助けた動機は全く分かりませんが…いいえ、動機どうこう以前に救われたのは事実。

このまま行けば彼は出血多量で1時間と保たない

プライドにかけて彼を死なせるわけにはいきませんが、他者社の力を借りるのは不本意ですが他に適任者は居ないでしょう

彼の懐から端末を取り出し、あの女性へと電話をかける

もちろん携帯電話はコヤンスカヤも持ってはいるがこっちの方が  
確実だと彼女は判断していた

『やつほーザイル！電話ありが…ん？んん？…さてはオメー、ザイル  
じゃないな？』

コール音がする前に出たノーマに若干引きながらも用件を伝える

「…時間があまり無いので単刀直入に言います、戦闘によりザイルさんが呪いを受けて瀕死の状態となっています」

呪いというのはでまかせだが医術的根拠が証明できない以上こう  
言うのが手っ取り早い

『その声はコヤスちや——ギャー！——いったい!!…つてええ!?マジで  
!!??』

電話の向こうで数えるのも面倒な爆発音を立てながら食い入るよ  
うに質問してくるノーマ

また何かロクでも無いことを…しかし今は気にしている余裕はあ  
りません

「…外から干渉するのが難しいため、彼の内側からそれを解く必要が  
ありますがワタクシにはその手段がありません…アナタ方なら、何か  
手段を知っているかと。」

『うんうん、なるほどね…よっし、ダヴィンチちゃん！遠隔で例のプロ  
グラム起動させて！』

電話の向こうで声がして、その直後ザイルさんの義手から蒼い光が

漏れ出した

よくもまああつさりと…

『とりあえずそこで光ってる義手に触って！あとは説明を受けてなんとかしてちよーだい、私も今ちよつとというかかなり忙し——え？ウツソ、もうそれぶつ放すとか何考え』ブツツ

…切れましたね

向こうでも何かがあつたようだが優先すべきはこっち。

「…」

念のためある程度銃火器を携行し、彼の義手へと触れ——

「…!?」

直後、視界が暗転した

）

にて…

「…?」

薄暗い森…いや、山の中。さつきここに着いた気がすれば結構前からここにいた気もする、朝なのか昼なのか夜なのかもはつきりしない…

「ここは——」

「いえーいー！こんにちワン！」

…ハア

聞き違いしようなない喧しい声の方へと振り向く

「…ノーアさん？」

「わっははは！残念だが私はノーアではない！聞いて驚け、私は——」  
「とつとと説明してくれませんか？」

こんなのと付き合っていた時間がいくらあっても足りないので彼女の足元をハンドガンで数回撃って続きを促す

「キミ結構ヒドいね…まあいいや、私の名前は魔二まにゆ・或子あるこ！これを使つた人に対してシステムの説明をするようにプログラムされた電子人格さー！」ヨロシク！

「はあ…」

なんとまあ…ハイ。気にしないでおきましようか…

「さ、何でも聞いてくれ！…といっても私はキミが誰かは知らないしどんな目的でこのシステムを使ったのかも知らないからあくまでもこのシステムに関する質問だけにしてね！」

ふむ…

では手っ取り早くいくつか質問させてもらいますか

「…今ワタクシ達がいるこの空間はなんですか？」

「レオナルド・ダ・ヴィンチちゃんが作った『ダヴィンチちゃんアーム改2号機 拡張カスタムタイプ++』を今付けている生物の心象風景、その中さ」

なるほど…しかし見渡す限り木しかないこの風景が…？

「これをプログラムしたのはダヴィンチさんですか？」

「もちろん…！と言いたいけどイチから作ったのとは違うかな、メンタルケアを目的として作られたとある医療ソフトウェアをノーアがメインに改造、改変して義手に搭載したものだよ…！何故か大元の製作者である人物の情報が入力されていないから誰がオリジナルを作ったのかは分からないんだ、ごめんね」

ノーアさんのことです、知らなかったというよりあえて入力しなかった、というほうがしつくり来ますね…

「…今ザイルさんに起こっているあの出血はなんですか？」

「ちよつとちよつと、さつき言ったように私はキミたちのことを知らないって言わなかった？」

「ええ、ですがアナタは医療ソフトウェアであると同時にザイル・ニツ



カーのためだけに作られた義手でもある…彼女のことです、彼を調べる機能くらいは付けているのではありませんか？」

そう言うとノーア…いえ、マニュアルプログラムは照れ臭そうに頭をかきながら笑った

「いやあ敵わないな、キミの言う通りだよ。私にはその機能があり、そして今丁度検査結果が出た。出血は外的要因でなく内側…つまり彼自身によるものだ」治すためにここに来た判断は合っているよ

…やはりそうですか

「なるほど、聞きたいことはだいたい聞けました、ありがとうございます」

「お？…これだけでいいの？」

あれっ、と困惑した顔でノーアの姿をしたプログラムが首を傾げる

「ええ、システムについてはもう大丈夫ですよ——あとは彼女に聞きます」

「彼女？…それって…」

トンツ…

「へ、あ、ウツ、ソ……」

頭から両断され真っ二つとなったマニュアルプログラム、その身体が粒子となつて消えてゆく

「…これはまた物騒ですねえ」

「ふ、ふふ、折角来た初めての客人、それがそんな機械と喋ってばかりで少々焦れておつた、まあ許せ」

心底愉快そうに頬を緩め、巫女装束に身を包んだ女性がそこに居た今の1撃はこの方が…？というかこの人、アーチャーのマスターに似ている…？

あの時は顔をしっかりと見ると余裕は無かったので細部は分からないが…少なくとも無関係とは言えないぐらい似ているのは間違いない（身長はこっちの方が結構高いですが）

「それで？どちら様でしょうか？」

警戒は解かず、しかし緊張と殺気は抑え、笑顔で質問する

「む…余か？余は…うむ、そうさなあ…お前を導きに来た案内人だ」  
それだけ知ってくれば良い、と笑う巫女

「…そう、ですか」

要警戒ですね…

「そう身構えずとも良い、別にそなたを取って食うわけではない」

こちらが警戒の念を強めたのを見透かしたように笑う

「さて余もそなたに聞きたいことがあるのだが…うむ、先にこやつらを片付けよう、大きな害になる訳ではないが…少々不愉快だ」

「ええ…」

まるで見計ったかのように出現した、無数の人型をした真っ暗のなにかがワタクシ達を取り囲んでいる

この感じは…

「…」チツ

彼らの質を見抜いた瞬間、コヤンスカヤは無意識に舌打ちしていた  
ああ、これですか

敵意は無く、それとは別に感じる感情、ここが普通の世界では無いからか、それは手に取るようにはつきりと伝わってきた

《差別》

《侮蔑》

《迫害》

…上げ出したらキリが無さそうなそれらは最終的に必ずそこへ辿り着く

《娯楽》そして《愉悦》に。

「…またこの手の集団ですか、全く人間というものは」チャキツ  
その人型の一体へとハンドガンを向ける

「ふふ、ふ、今この場。彼らは言わば『善』であり、そして余とそなたが『悪』である」

翡翠色の目を細め、巫女は口角をさらに吊り上げて笑う。神父が持っていたあの剣を振りかざしながら。

「さて客人よ、余にはそう見えるわけだが…果たしてそなたにはどのようなに見えるか、教えてくれぬか?」

「回りくどい方ですねえ、まあ…いいですよ?」

——不愉快な影達との戦いが始まった

## 第22話 影月

ザイルの心象世界にて…

「っ…！」  
ドンツドンツ

1発1殺、2丁の大口径のリボルバーで『影』達の頭を撃ち抜いていく

5発装填×2の計10発を撃ち切り、

すぐさま別のハンドガン<sup>2</sup>に入れ替えて間髪入れず撃つ

そしてその16発の弾丸を撃ち切れば後は同じ、再展開して使用前の状態となった先のリボルバーへと持ち替え、また撃つ

…余談だが換装する際、一瞬隙が出来るもののライダーとの戦闘時と違い、換装する余裕は充分なためこのような戦法を彼女は取っている

影達は数こそ多いものの攻撃方法は非常に単純かつ貧弱で、物を拾って投げつける、棒で殴りかかる、掴みかかってくる等対処しやすいものばかり。

オリオンの宝具、『我が矢<sup>オ</sup>の届かぬ獣<sup>リ</sup>はあらし<sup>オン</sup>』によって弱体化しているとはいえこんなものに遅れを取るほどコヤンスカヤは弱っていない

…だからこそコヤンスカヤは静かに眉をひそめた

『殺戮技巧(人)』…コヤンスカヤが望んで手に入れたスキルの1つで、効果は主に2つ。

1. その時代に存在する人類の兵器を自在に使えること
2. 人類<sup>人間</sup>を攻撃する際、あらゆる攻撃に特効<sup>ボーナス</sup>が付くこと

1つ目に関しては問題無い、こうして戦えている以上兵器の行使、

換装については問題無い、だが――

「特效が効かない…」

2つ目、人類に対しての特效効果が発動しないのだ

1つ目の効果と合わせれば頭部を撃ち抜いた時点で首から上が吹き飛んでもおかしくないはずですが…

この空間がワタクシの能力を抑制している訳では無い、目の前の影達も同様…だとすれば考えられるのはただ1つ

「――人間ではない？」

しかし影達から感じられる気配は紛れもなく人間のもの、例えどんな姿形になろうとコヤンスカヤにとって間違えようのない人類嫌いなの気配、不純物が混ざっているようにも感じない

「ふふ、ふ、そう難しく考えるな客人、いずれ分かる」

こちらの困惑を察したように巫女が笑う

「…それはご丁寧にもどうも」

この巫女も巫女で見た目通りの性質生物ではないですね？

彼女の気配、コヤンスカヤにとって縁深いものではないが理解できる気配

――なんでこんなのが出てくるんですかねえ？

「余については終わった後で聞くがよい。さて…そろそろ仕舞いとするか」

巫女が手をかざし、ふわりと刀が宙に浮く

…つと

危険を察し、その場を飛び退いて巫女から距離を取る

――そこからはあつという間だった

「そろ」

巫女が横に、縦に、斜めに手を振る

すると刀はまるで巫女の手の平から紐で繋がっているかのごとく縦横無尽に辺りを薙ぎ払い始め、影達を蹂躪していく。そして――

「終わりか」

結局10数秒で殆どを巫女が掃討し、辺りが静かになる……といったも影達は最初から一切声をあげませんでした。

「……そーゆーのあるんでしたら最初からやっていただけませんか？」

これでは完全に弾丸を無駄にしただけである、もちろん彼女にとつて弾薬など文字通り無尽蔵に出せるが無駄にしている理由にはならない

「まあそう言うな、余とて客人に無駄骨を折らせたつもりは無いですぞ？」

くっ、くっ……と巫女が笑い、彼女の手の平の上で刀が消える

「ではゆこうか客人」

この先に今の影らが人間で無い理由がある……そう言つて巫女は森の奥へと歩いていく

「案内人さん？ワタクシはあくまでもザイルさんの出血を治しに……呪いを解きにここへ来ているということをおきます」

ここに來てから大体10分……まだ余裕があるがだからと喋りつづけている暇は無い

「無論だとも、余とて奴が死ぬのは好ましくない、心配しなくてもすぐに終わる……ほれ、余の他にもう1人案内人が来たぞ」

もう1人……？あ。

闇の奥からこちらへ歩いてくる人影、それは――

「やれやれこうなつたか」

ザイル・ニツカーその人だった

「ザイルさん！」

「……？誰だお前は？」

「え？」

「■■■■にて…」

「ここですか？」

「ふ、ふふ…そうだ、ここだ」

「…チツ」

ザイルさんと合流後、生い茂る木々をかき分けた先  
森の一部を切り取ったような草原の広場へとたどり着いた

太陽が登っている…

心象世界なら何が起きても不思議では無いと頭では分かっているものの、実際にこうして自分以外の世界に足を踏み入れたことが無く、故にこの世界の出来事は色々な意味でコヤンスカヤの興味を誘った

そして原っぱの中央に集まっているあの子供達は…

「客人、そろそろ来るぞ」

…ん？

たんつ、とワタクシの真横を1人の少女が横切った

」

心地よい春風が吹くその場所で今日もまた少女の戦いが始まる。

「たあーっ！」

掛け声と共に木の棒が振り下ろされ、ごちんと少年の頭にぶつかる

「いってー！」

「うわっ！ 飼い主だ！ 飼い主が来たぞ！」

「やっつける！」

存在に気付いた児童達が少女へと標的を変える

少女1人に対して相手は男子児童6人、女子児童3人。

「あ、うっ……！」

あつという間に取り囲まれた少女に浴びせられる、9分の1の罪の意識から生まれた9倍の暴力

男子達のそれは、はたく等といった生優しいものではなく、子供の無邪気さからくる一切の容赦がない嵐。

痣<sup>あざ</sup>や出血は当たり前、酷い時は骨にヒビが入った事もあった

そしてそれを見て残りの女子達がクスクスと笑う

彼らが大人であったならば暴行罪で懲役は間違い無く、殺人未遂もありえるような暴力に少女は地へと伏せる

…どれくらい経っただろうか、遠くから駆けてくる男子が言った

「おい、餌とって来てやったぞ！」

「お、優しいなお前。食べさせてやろうぜ！」

いつの間はどこかへ言っていたのか、単に後から来たのか考える余裕は少女には無かった

その少年の手にはカマキリが数匹握られていて、包囲していた児童の数人がそれを見てまた笑う

——だが己への注意が外れた瞬間を少女は見逃さなかった

「っ……の……せいっ!!」

右斜め前にいた男子の股間を力の限り殴り付ける

「っ……!!??」

声もあげれずに地へ転がる男子。



そこにできた包囲の隙から外へ飛び出し、すぐさま振り返って左側の男子の鳩尾みぞおちを蹴る

「ぎゃうー！」

「飼い主が怒った！飼い主が暴れてる！」

「飼い主もばけものだった！」

「殺せ！殺せ！！」

4人の男子が最初のように彼女を包囲しようとする

「…っ！」

股間を抑えて悶える男子の靴を左手で剥ぎ取り、掴みかかって来た男子の顎目掛けて右腕で思いつきり膝打ちを繰り出す

「あぐおっ…！」

そして今度は向かって左側、手前の男子に距離を詰め、左手の靴で薙ぎ払うように顔面を引つ叩く

「った!？」

「捕まえるー！」

カマキリを持ったまま後ろに回り込む男子と、正面で野球ボールより一回り大きな石を持って振りかぶる男子。

迷わず背後の男子へ飛びかかり、カマキリを奪って男子の口元へ叩きつける

「うわあ!?!汚ね!!？」

それを払おうとする男子の左手小指をガツチリと掴んで引つ張り、立っている場所を入れ替える

「ぎゃっ！」

…と同時に正面にいた男子の投げた石がカマキリを持っていた男子の後頭部に石が直撃し、ばたりと倒れる

「た、たける！」

「はっ、はっ…」

そして正面の男子の顔面目掛けて――

「ま、待って！おれ、いや僕が悪かった！許――」

「どりやあつ!!」

「がふあつ!?!」

靴を投げつけた

「終わり?…あ」

「こ、こんの…!」

最初に股間を殴りつけた男子が怒りの形相でゆっくり起き上がる  
…が

「うるさい寝てろ！」

「ぎやあああ！」

今度は完璧に股間を蹴り上げ、少女の戦いはひとまず終わった

「はっ、はあつ…貴女達も、やる…?」

10歳にも満たない少女から向けられる異常な程の殺気に、放心していた女子達が一斉に喚き出す

「ひ、ヒイツ!?きやあああ!!」

「おとうきーんっ!!」

「ばけもの！アンタもばけものよ！」

「はっ…おととい、来なさい…さてと」

我先にと逃げ出す女子達を尻目に、うづくまって震えている少女の  
元へ。

「ホラ、帰るよ彼方」

「お姉ちゃん…?あ…酷いケガ…!」

涙目になっていつそう震える少女の妹、えいづき影月 かなた 彼方

「また、私のせいで…」

「あなたの所為とはまた違うでしょ？あー、あー、あー！泣かない泣かない」

妹に大きなケガが無いのを確認し、ひとまず安堵する

「ぐすっ…えぐっ…うう、はるかぁ…」

「ほらほら泣かない！笑顔笑顔！ガーツと笑顔！ホラ笑えーい！」

じれったくなつた少女が妹の脇をひたすらくすぐる

「わ、わっ?!わあはははは！くすぐりたいよ！」

ひとしきり2人で笑い、その後――

「つと、イタタタ…」

「お、お姉ちゃん大丈夫…?」

「うーん流石にちよつと今日は無茶しすぎたかな…」

もう帰ろうか、そう言つて少女が立ち上がり、手を差し伸べる

「ほら、立てる?かなた」

「…うん」

彼方が手を伸ばし、姉の手を掴もうとして――

ダンツ

「え、ちょ、ザイルさん!」

それまで静観していたザイルが突如飛び出した、手にはあの刀があつて――

「があっ!!」

そのまま2人の少女を貫いた

ザザツ…

ノイズ音がして世界が暗転していく…

…

「あ!? アイツらまたあの子を…!」

手頃な木の枝を拾い、草原へと飛び出す彼方の姉、

1番近い男子へ最短で近付き――

「たあーっ!」

木の枝を思いつき振り下ろした

…ハア

「そういうことですか」

それを見てワタクシは静かにため息をついた

## 第23話 ねがいごとは

ザイルの心象世界にて…

——お姉ちゃんは強い

私が見てきた世界は孤児院とこの山だけで決して広くは無いか  
れど、その中でお姉ちゃんは変わらず、誰よりも強かった

——いつも私を助けてくれた

——いつも守ってくれた

——いつも、私に代わって傷付いていた

「…」

いつも彼女が言っていた言葉が頭を過ぎる

『少しはやり返しなよ？私だっていつでも守れる訳じゃないんだし  
さ』

——そんなことは分かってる、けど。

以前、首を絞めてこようとする子供がいた。もちろんすぐに苦しく  
なってその子供の腕を引き剥がそうとした

「う…」

あの時間いた悲鳴がまだ頭に残っている

私が右手でその子供の腕を掴んだ瞬間、まるで豆腐を握り潰すよう  
に子供の腕が引きちぎれた

5歳でも分かる異常…自分がまともな人間でないのは明らかだつ  
た、その後しばらく私は”居ないもの”として扱われたが——

『ばけもの』

誰かが言ったその一言で私へ向けられる認識は『気味が悪い奴』か  
ら『ばけもの』へと変わり、以前以上の迫害が始まった

でも、仕方ない

ばけものと言われることも、彼らから迫害を受けることも仕方ない  
私がばけものなのは私自身がよく知っているし、彼らは自身の行動  
が悪いことだと…いや、彼らにとつての正しさがそれなのだろう

私とお姉ちゃん以外のみんなにとつての正しき。  
悪意が無いと分かってしまった以上、彼らに憎しみを向けるべきで  
は無いんだ

「——本当にそうか？」

「お兄、ちゃん」

銀の長髪を三つ編みでまとめた目つきの怖い男性がいつのまにか  
横に立っていた

彼は…嫌な事があった時や辛い事があった時だけに私の前へ現れ  
る人。

私の妄想が生み出した家族<sup>兄</sup>、ザイル・ニツカー。

「憎んでいいはずだ、彼方はもう充分耐えた、お前ならあいつらなんか  
簡単に——」

「だめだよ」

私以外、誰も認識出来ない兄へ返答を返す

憎くないと言えば嘘になる、けど彼らはただそれが当たり前だと信  
じてるだけなんだ、普通の人間として生まれて…育っただけなんだ  
「…10分後か、明日か、10年後かは分からん、だがいつか後悔する  
ぞ」

苦虫を噛み潰したような表情で消えていく兄は最後に言った

「許すな、絶対に…」

——そして

『いい、彼方？私ね、遠くに行かなくちや行けなくなったの』

一つ目の後悔が、その1週間後に来た

『とりあえず彼方を虐めてる奴らをフルボッコにしてしばらくは手が出せないようにするから…その間に強くなって欲しいの、私が居なくてもいいように。』

「——え？」

お姉ちゃんは強い、今まで助けてくれた時…一度だつてやり返さずに私を彼らの手の届かないところへ連れてつてくれた

「ま、待つてよ、戦うの…？」

『そ！足腰立たないくらいボッコボコにする！』

「——」

遙が傷付く以上に私が恐れていたこと

そうはさせたくないと内緒で彼らと戦ったけど、立ち向かおうとするたびにあの子供の悲鳴が頭に——

『あ！？アイツらまたあの子を…！』

向こうから走つてくる遙を見て身体の痛みなんか吹き飛んだ  
待つて…！

声にならない静止は当然届くこともなく、遙は彼らを1人ずつ薙ぎ倒していく

『ばけもの！アンタもばけものよ！』

ツ…！！

あ、ああ…そんな…！

ゆらりと取り巻きの女子を睨みつけた遙に発せられた一言。

1番避けたかったことが起きてしまった

私のせいで、大好きなお姉ちゃんも『ばけもの』にしてしまった  
「ホラ、帰るよ彼方」

いつもと変わらない調子の声を聞いて咄嗟に顔を伏せて、あたかも何も見ていないように振る舞った

そんなことをしても何も意味は無いのに。

「お姉ちゃん…う…あ…酷いケガ…！」

違う、ケガだけじゃない

「また、私のせいで…」

謝る事は他にもあるはずなのに、涙がそれを邪魔する

「あなたの所為とはまた違うでしょ？あー、あー、あー！泣かない泣かない」

「ぐすつ…えぐつ…うう、はるかあ…」

「ほらほら泣かない！笑顔笑顔！ガーツと笑顔！ホラ笑えーい！」

いつもみたくにくすぐって強引に笑わせてくるお姉ちゃんは――

「わ、わっ!?!わあははははは！くすぐったいよ！」

明日の今頃にはもう居ない

でも一緒に居られなくなったことよりも、遥をばけものにしてしまったことの方がショックが大きかったのを覚えてる

『そうしよげるな、必ず迎えにくるから！』

その翌日、見送りの時間。黒光りする車に乗り込む遥がそう言ったのを信じて、孤児院の自分の部屋にもどった

く

唯一の話し相手を失って1ヶ月、ふと山の麓にあたる場所でケガをした大きな犬を見つけた

親指くらいの太さの枝が左後ろ足の腿に深々と突き刺さっていてとても痛そうだった

「ググルルル…」



「怖がらないで、食べたりしないから」

足に異物が突き刺されたことは時々あったからその犬の気持ちは文字通り痛い程分かった

だから放っておけなかったんだ

差し伸べた手は当然のように噛み付かれて痛かったけど、その程度の痛みは当時の私には大して意味は無かった

「ワグツ…!?ギャンー!キヤイン!!」

弾かれたように噛み付くのをやめる犬

何故やめたのかは分からなかったけどお陰で手が届いた

「我慢してね、んっ…!」

犬の足から枝を抜き取り、左腕の包帯を取って枝を抜き取った所に巻く

幸い左腕の骨折はもう治りかけてたから外しても問題は無いだろう

「よしよし、いい(こいいい)…!」

全く抵抗しなくなった犬を抱いて木によりかかる

時々不安そうに鳴くものの、その度に頭を撫でていたらいつの間にか犬も私も眠ってしまったていた

く

「バフツ…ウオンー!」

「ん…?」

どれくらい経っただろうか、顔を滑る生暖かい感触で目が覚める

「もう夕方…」

さつきまで昼前だったのにもう日が沈みそうになっている

「ウオンー!」

「ああ…起こしてくれただ、ありがとう」

私が起き上がると犬は嬉しそうに周りをくるくると回り出し、巻き方が悪かったのか包帯がずれ落ちた

…あれ？

「あなたケガは？」

「ワフツ？」

ふと見ると枝が刺さって出血していた足のケガが完全に治っていた

眠る前、犬がケガをしていたのは間違いない、実際に包帯に血が付いている

実はこの時、無意識に魔力を犬に流して手当てをしていたのだが当時の私には知るよしも無かった

く

その日以降、孤児院で朝食を取ってからというものすぐに山へ行っ  
た

『おい待てよ！ばけもの！』

『…』

彼らが追いかけてくるけど、山に行くまでにはとても広くて深い森が広がっていて、振り切るには充分だった

『おはようウルフ！』

『オンツ！』

犬は山に入ってすぐその挟まった獣道の入り口でいつも待っていてくれた

ちなみにウルフというのは犬の名前だ

『あなたは狼みたいに大きくてかっこいいから…うん、ウルフ…ウル

フって呼ぶね!』

『ウオフ?』

外国の言葉で狼という意味らしい

こうして私は毎日毎日同じ時間、同じ場所に行ってウルフと会い、そこから山の色んなところに行った

『ウルフ、競争しよう!』

『ワ”ンツ』

山の高いところへ駆け上って雲の海を見に行つたし…

『えいえいつ!水攻撃〜!』

『ワウツ…!?!』ぶぶぶぶぶぶ

川遊びもした

『ワグ…』ずりずり

『え?えつ!?!ウルフそれ鹿?!』

『オンツ!』

どこで狩ってきたのかウルフが鹿を引きずってきたこともあった

『ガツガツ…』フリフリ…

『もぐもぐ…美味しいね、ウルフ』

ウルフと一緒に食べた鹿の生肉が孤児院で食べていたドロドロのご飯よりもずっと美味しかったのを覚えている

遙が居なくなってから起きてる間殆ど泣いていた私はウルフと遊ぶようになってから笑う時間の方が増えていた

でも——彼らはそれが気に食わなかったらしい

その日の朝は少し寒くて、トイレに行ってから山に行くつもりだった

…用を済ませて個室から出ると出入口で彼らが不機嫌そうに突っ

立っていた

『お前さあ、いつつも山に何しに行ってるの?』

『…何も、散歩だよ』

直後頭部に来る鈍い衝撃

すぐそこにあつたトイレの清掃道具で殴られたらしい

『散歩だけな訳ねーだろ、いつもいつも楽しそうに山行ってるしき…アレか?他のばけものと集まって作戦会議でもしてるんだろ?』

『人間達を皆殺しに〜!とか?何企んでるか俺たちに聞かせろよ、なあ?』

『…ッ!』

頭から少し血が出ているのも構わず、出入口とは反対側の窓へ走る窓枠に手がかかり、そこから外へ――

グシャツ

『ひぎやあうつ…!?!』

瞬間、何かが私の右目を潰した。残った左目で外を見ると入り口の男子といつも一緒にいる取り巻きが得意げに箒を持っていた

『逃げると読んであらかじめ指示しといたぞ!』

『すげえ!ばけものの目を潰した!大軍師じゃんお前!』

焼けるような目の痛みにうずくまる

骨が折れたり斬りつけられたことはあつたけど目を潰されることは今まで無く、ただ痛みに悶えるしか無かった

『これでも言わないってことは相当隠しておきたい秘密なんだろうな』

『どんな秘密だろうと関係ない!孤児院の平和のために俺達は戦うぞ!』

ゴトリ…

——その時間こえた重たい音

『な…』

先頭の男子が持っているもの、それは孤児院長が薪割りに使っている斧だった

『重たっ…おい、お前らも待て！みんなではけものにトドメを刺すんだ！』

2. 3人がかりで振り上げられたその斧を見て初めて死の恐怖が襲ってきた

あんなものの振り下ろされたら痛いじゃ済まない…！

『いや、やだっ…！許して…！』

何を言っても彼らはニヤニヤしたまま、ゆっくり距離を詰めてくる

窓から逃げようにも——

『おらっ！』

『ッ…!!』

バシンという衝撃と共に弾き返される

死にたくない…死ぬのはイヤだ…

二つ目の後悔——ここで私は間違いを犯した

『たすけて…！助けてウルフ!!』

『ガウルルルッ!!』

『うわっ!!なんだ!!』

飛矢のように飛び込んで来たウルフが男子の1人に飛びかかった

『野犬だ!!?ぎやっ!!』

私に1番近かった男子の腕に噛み付き、そのまま肉を噛みちぎった  
『うわあああああ!!?痛い痛い!!』

床へ転がって暴れる男子を踏み付け、次に近い男子へとウルフが飛びかかる

『こ、こいつ！』

『ウルフ！』

今度は肩へ噛み付き、床へ薙ぎ倒すウルフ。だが――

『これでもくらえ！』

『ギャンツ！』

私の目を潰した男子がウルフ目掛けて窓から石を投げつけた

野球ボールくらいある石は頭に命中し、ウルフはぐつたりと倒れる

『ウルフ!!』

『今だ！起き上がる前にトドメを刺すんだ！』

『こ、こんな傷へつちやらだ！』

『ばけものの手先をぶつ殺せ！』

『や、やめ、て…』

ビクンビクンと痙攣するウルフを目の前の■■■■達は清掃道具で殴り続ける

『よし！これで終わりだ！』

血と尿に塗れ、呼吸のおかしくなったウルフを前に■■■■達が斧を振り上げる

『みんなの力を合わせて平和を守るんだ！』

『やめ――』

ズシャツ

――斧が、振り下ろされた

『――』

『手先はやつつけたぞ、後は親玉だけだ！』

『覚悟しろばけもの！』

うるふ

言っただろう、後悔すると

あに、の、こえがきこえた

早くお前があいつらを殺しておけばこうはならなかっただろうな

でも、■■■■■たちは、わるいことだって、わからなかった

そうだ、だからこうなった

人間は強い動物じゃない、自己を保つために自分より弱く、都合のいい悪に飢えている…そしてそれがたまたまお前だった

止めさせるなら人間全てを殺し尽くすか…もしくは人間という生き物を根底から作り直すくらいやらないと無理だろうな

兄の声と私の意思がドロドロに混ざり合っていく…

…それと分かりきっているだろうが俺はお前の妄想の産物だ、つまりお前は心のどこかであいつらを殺そうとしてたんだよ

ああ…そうか

『そうだったんだね、あなたたちは…』

この時、私の中の、人として必要な何かが砕けた

わたしきめたよ、おにいちゃん

…皆殺しにする決心でも着いたか？

『あなたたちは■■■も■■■だ』

『うん？なに言ってるんだお前？』

『それならしかたないよ、だって■■■け■■■なんだから』

それもあるけどね、わたしみんなをたすけたいの  
…？…？…？という意味だ？

『■■■のだから、わからなかったんだよね』

『なに訳の分からないことを　グチャツ』

花を摘むように手前の男子の首を引き抜き、横の男子へ投げつけて  
頭を割り、逃げようとしたもう1人のお腹を左手で貫く

わたしのゆめ、いまできたゆめはね――

『へ、は…!?お、おい…』

『あなたたちはにんげんというなまえをしただけ■■■、でもあんしん  
して』

最後の1人、怯えるその子の頬を両手で優しく包み、囁く

『いつかかならず、ちゃんとした”にんげん”につくりなおしてあげ  
るから、だからそれまで』

――おやすみなさい



## 第24話 2つの願い、〇つの器

□□□の心象世界にて…

「場所が変わった…?」

変化の瞬間を認識できなかった…これもこの世界特有のものですかね?

目の前にはまあまあ大きな孤児院のような建物と、周囲に広がる森、遠方には大きな山が見える

ザイルさんの姿も案内人の姿も無し、ですか

「ん…」

ぴちやぴちやと、水溜まりを歩いているような足音が綺麗な扉の向こうから聴こえてくる

音の方からは人間の気配は一切しない…が、感じる濃密な血の匂いは孤児院の中で何が起こっているのか察するに充分だった

…かちやり

扉が開く

教会から出てきた1人の子ども

彼女は全身血塗れだったが、所々赤黒く変色した血痕はその殆どが返り血だと丁寧に教えてくれていた

左目の少し上にあたる額と右目の2箇所からは変色していない、物が映り込みそうな程綺麗な赤が流れ落ちている

困ったように目に入りそうなところだけ腕で拭う彼女は…少なくともコヤンスカヤの目には人として映らなかった

「あれ…?もしかしてコヤンスカヤ…?」

「ええ、あなたのサーヴァント……タマモヴィツチ・コヤンスカヤですよ」

意外そうにこちらを認識する彼女を誘って手を握る

「……少し歩きましょうか」

「うん」

扉の隙間から一瞬見えた殺戮を尻目に、孤児院の敷地内から出ようとしなかった影月 彼方を連れ出した

く

振り返っても森しか見えなくなったころ、彼方が口を開いた

「そういえば……私の願いつて言ってなかったよね」

横を歩く少女に先程見た血塗れの怪物の面影はなく、何処にでも居そうな年頃の女の子が恥ずかしそうに目を逸らしていた

願い……？ああ、聖杯にかける願いですか

……ただしそれはあくまでも外見に限った話、目や額の傷も消えていたが彼女の本質を否定する材料にはならない

「確かに、ザイルさんの願いもアナタの願いもワタクシはまだ知りません」

「……私とお兄ちゃんザイルをそれぞれ1人の人物として見てくれるんだね」

「ええ、まあ」

クラスはアサシンとなつてはいるがコヤンスカヤも一応玉藻の前という自身の元となったオリジナルが居る、契約以前に思うところはあったのだろう

大別すればある意味彼女もアルター同エゴ類……いえ、影月 彼方が本来の姿であるならばザイルさんこそが別側面なのでしょう

後でお兄ちゃんも呼ぶねと言って彼女は自分の願いについて話出した

「私はね、神様になりたいんだ」

「…へえ、そうなんですか？」

あまりにもまつすぐに言う彼方にコヤンスカヤから笑みが漏れる

「笑わないでよ」

「ふふ、すみません」

いつの時代も人間達の誰かが必ず手を伸ばす願い。

浅ましく単純な、昔から成長しない人間を体現した願いの1つ。

もちろんその手の人間は大抵ロクな結末にならないので爆笑ものなのは違い無いがコヤンスカヤが笑う理由は別にあった

「ですがアナタの願いはそれではないでしょう？」

「…分かるんだ」

どこを見るわけでもなくぽやんと視線を泳がせながら彼女は言う

…これまで神に手を伸ばそうとした人間は数えきれない程いましたがその大半は『神』という理解できない力——いえ、理解できない強大な力を『神』もしくは『災厄』と認識し、自分らにとって都合の良い『神』を…その本質を理解しないまま我が物としようとしていました

殆どの人間達にとって神へ手を伸ばす行為はそれ自体が目的であり、終着点だった…しかし彼女は先を見ている。神になった先を。

「今度は笑わないでね」

すう…と深呼吸から少しの沈黙が流れる

木の葉が揺れる音すらなく続く静寂は体感よりずっと短かったと後になって思う。

「——ばけものをにんげんに作り直して…みんなが笑って暮らせる世

界をつくること、それが私の願い」

まるで年頃の女の子が好きで異性を打ち明けるような告白で、それが彼女の異質さを目立たせていた

化物を人間に……？……もしや彼女にとつては——

同時にコヤンスカヤもとある疑問点に関して納得がいった

ここに来て最初に戦った影達は紛れもなく人間でした、しかし人間特効とも言える『殺戮技巧（人）』が全く効かなかった……おそらくこの空間に限り『人間が人間としてカウント<sup>認め</sup>られていない』ということでは無いでしょうか？

「うん、合ってるよ。私の世界に居る人間は2人だけ」

もはや当たり前のように彼女はこちらの心を読んで返答を返してくる

「1人はもちろん私のお姉ちゃん……影月 遥。もう1人は——来た」

昼間だというのに奥が全く見えない闇の森から聴こえて来る所々重なった足音。草と土を踏みしめて彼らは姿を現した

「やれやれ彼方<sup>俺</sup>め、勝手に連れていきやがって」

「無意識だよ、ごめんお兄<sup>私</sup>ちゃん」

そんな不思議なやりとりの最中、彼の後ろにあの案内人が居ることに気付いた

「アナタは……」

「余のことは気にしなくて良い、今の余はただの案内人……何も言うことは無い」

ニタニタと気味悪く笑う案内人。あの剣は持っていないかった

「……ここなら自分の願<sup>気持</sup>いがはっきり分かる」

どこから取り出したのか身の丈程もある彼専用対物ライフルに弾

を込めながら言う

「――全ての人間を殺し、掃討すること……それが俺の願望――いや、ザイルが1人の人間として立っている理由だ」

「んくっ……」

彼方とは違った単略的で雑な願望に思わず吹き出しそうになるがなんとか堪える

その程度の殺意だけで人格1つ形成させるとは……余程ヒマだったのか、或いは相当に狭い世界しか知らなかったようですねえ？ま、それ言ったら彼方さんもなんですが。

「……正直こうなるのはもつと先だと思っていたんだがそうも言ったられないらしい」

「うん」

迷うことなく銃口を影月 彼方へと向け、また彼女もいつの間にかその手に握っていたあの剣を構える

「ん？まさかお2人は今から殺し合いでも始まるので？」

まー誰がどう見てもその通りなんです。

「見て分かるだろう、丁度いいからコヤンスカヤ……だったか？お前も俺か彼方に手を貸せ、どちらかが死ななきや外の奴は死ぬ」

ドンツ

直後飛び退くザイルと一步遅れて彼の立っていた場所に突き刺さるあの剣

「やれやれ、話をしている最中だ」

「私が話すことはもう何も無いから、だからもう消えて？ね？」

剣を引き抜き、彼方がザイルと対峙する

「んー」

このままほつといっても終わりそうな気はしますが…だからと言ってどちらか片方が消えるというのもよろしくありません。

「案内人さん？外の出血を止めるにはどちらか消えなければならぬというの本当で？」

「む？ああそうさな、本来はあの男の自我の方が強いのだが何かが原因で彼の方が男の自我を上回ろうとしている、その結果が外の異変だからなあ」

つまり外の出血は2つの人格による肉体の奪い合いで起こっている訳ですか…

…

…ぷっ

「っあっはははははー！」

以前映画を見に行った時のような笑いがお腹の底から湧き上がり、お2人がそれを過言そうに見つめてくる

いえまあこれはワタクシだから思い付けただけであって仕方ないと言えは仕方ないのですが。

「いえ、お2人が殺し合わずに済む方法があるんですがねえ？」

「本当（か）!？」

弾かれたように叫ぶ2人に若干引きつつもとりあえず説明する

うっわ、食い付きっぷりがハンパじゃないですねコレ…ま、その方がやり甲斐はありますが♡

「まあまあ、順を追って説明致します…ところで皆様はサーヴァントには7つの基本クラスの他にエクストラクラスと呼ばれるものがあるのをご存知ですか？」

それがなんの関係がある？とザイルがこちらを睨み、彼方は頭を

捻ってなにかを考えている

…面倒なんで答え言いますかね

「色々ありますよ? 『復讐者』や『役を羽織る者』 『降臨者』あと——」

『別側面』…とか」

## 第25話 NFFサービス、一部営業再開

ザイル／影月 彼方の心象世界にて…

「いきなり何の話だ？」

半ばイラついたように聞き返してくるザイル

「こう見えてワタクシ、受けた恩は忘れませんので♡」

「…言葉が足りない、説明しろ」

「そうだよ、それじゃ全く分からな——」

「彼方が分かる必要は無い」

矛先が戻ったのか彼は喋る隙すら与えず対物ライフルを影月 彼方へ向けて連射していく

「うわっ!？」

驚いていたもののすぐに立て直してブンブンと剣を振り自分との殺し合いを始める彼方にコヤンスカヤはため息をつく

「もー、殺し合わずに済むと言ってなのに短気ですねえ」

おまけに非生産的…自分同士で殺し合うとかギャグにもならない骨折り行動ですよ？

「結論を言え、お前は何をしようとしている？」

「え？それはもちろん、お2人が殺し合わずに済む道の開拓ですが？」

「結論になっていない」

殺し合いの手を止めることなくザイルが言う

「…ホントにそんな方法あるの？」

食い気味だった彼方も若干の不信感を募らせているがお構いなしに言葉を続ける

「ええ、ザイルさんと彼方さんが殺し合っている理由はこの世界身体の主



導権をどちらが握るのか、という理由でほぼほぼ間違いないでしょう？」

「…そうだ、今までは俺の方が強く、こうして自分と争うのはもつと先になるハズだったが影月 遙の出現でそうも行かなくなった」

まーそんなところですよねえ

「ワタクシならそれを解決することができます♡お2人が殺し合うよりも有益な結果を残して、ね」

ただ実行するには彼方さんの協力が必要ですが、と付け加えて彼女の方を見る

「焦らさないでよ、それで？私がどうすればお兄ちゃんと殺し合いしなくて済むの？」

「具体的に言うと…彼方さんの人格にはもうしばらく身を潜めて欲しいのですよ」

このまま彼らが殺し合いを続ければ外の、ザイルでも彼方でも無い人間が死んでしまうだけ

「察するにザイルさんは彼方さんの人格を今まで無理矢理抑えつけていたのでしようが…ここは穏便に話し合いで退いていただけませんか？」

「…難しいな、私もお兄ちゃんもこの場では人格であって物事を記憶できる生物じゃない、ここで退いたところでそう遠くないうちにまた殺し合いが始まる」

ええもちろん、ただ先延ばしにするというわけではありません

「48時間です」

「え？」

「48時間…2日時間を下さればこの問題はワタクシ、コヤンスカヤが解決致しましょう♡」

交渉において期限設定は重要である、いつ終わるか分からないもの

より決められた期限を設定し、それに納得できるだけの信用があれば契約は圧倒的に結びやすい

そして交渉するにあたってその期限は短ければ短いほど相手を納得させやすい

コヤンスカヤ自身やザイルの身体的状況、彼方の信用を得られる範囲、敵マスターの数、ここ以外で対処すべき問題、不確定要素に対応できる余裕等を考えた上で練り出した数字…

少々ハードスケジュールにはなりますがワタクシなら充分実現可能、妥当なところでしよう

「如何ですか？」

「コヤンスカヤが外から私を消さないという保証は？」

「後から形成されたザイルさんの人格ならともかく元からある人格をどうこうする都合の良い方法はありませんし…そもワタクシにとつては貴女も恩返しの対象です、恩を仇で返すような仕打ちなんて出来ませんよ」

「…私はあなたに何かした記憶は無いよ」

「ええ、貴女は何もしていない」

今の状況を引き起こしたのはグラウンドアーチャー戦が原因と見て間違いありません、ということはあの時点で彼女の人格も表に出かかっていたと見るべきでしょう

「ワタクシにザイルさんが全令呪を切って自身の血液を差し出した時、貴女は彼を止めなかつた…：そうでしょう？」

「まあ…そうだけど」

バツが悪そうに目を逸らす彼方

もちろん彼女には同情なんて感情は無かつたでしょう、ザイルさんの単調な願いならともかく、人類の再構成なんて彼女1人でどうか

できるものではない…身体を勝ち取った後でワタクシを利用するために彼を見逃したと言ったあたりでしようね

ま、ワタクシとしては同情なんていう生ゴミ同然の感情よりそちらの方がずっと良いですが。こちらでも信用できますし♪

「繰り返し言いますがワタクシ、受けた恩は忘れませんので。必ず2日以内に貴女の元へ戻るとお約束しますわ♡」

「…でも、うーん」

いつの間にか彼女らの殺し合いの手は止まっていた

もう一押し必要でしょうか？いえ、これ以上言うのと逆に不信感を買いますし時間の問題——

「く、ふふ、ふふふ…実に愉快、客人よ」

それまで蚊帳の外だった案内人が口を開く

「おや？貴女は話に入ってこないと思っていましたか」

「ふふ…そう言うな、客人がどうするか気になったまです、余は決めたぞ彼方よ」

「今考えてるからちよつと静かに——」

「2日後、この時間になって尚変化が無かった時、余はお前に付こう」

「！」

案内人の発言に硬直する2人

彼方に付く、というのは身体の奪い合いに案内人も参加する、という意味で間違いないでしょうが…2人のフリーズっぷりを見るにこれまで案内人は一切動いていなかったのでしょうか

「分かった、しばらく私は引つ込むことにする」

案内人の助力が響いたのか彼方はあっさり身を引き、煙のように姿を消した

「さて、そういうことですのでザイルさんも」

「…信用するぞ」

そう一言、感情を見せないままザイルも同様に姿を消す

…ひと段落つきましたか

「ふう、ありがとうございます、お陰で滞りなく進みました」

「ただの気まぐれよ」

「図らずも案内人が最後の一押しをしてくれた、後はここから出るだけ——」

「おおそうだ客人よ、先の戦いでそなたには何が見えたか聞かせてくれ」

「あーそんな話もしましたねえ」

とはいえ彼女にとってアレは別段考え込むようなことではない

強いて言うならば——

「…あの場に善も悪もありません、自然界と同じく単純に『多く群れているから』群れの中で最も弱い者を切り捨て、生き残っている

そして人間もその自然界の一部、おかしい点も思う点もありませんわ」

「ふむ、そうか」

言葉を返しつつマニュアルプログラムから受け取っていた退避プログラムを起動させる

ん…

「いえ、一点訂正しましょう」

「？」

退避が完了する数秒前、コヤンスカヤは一つだけ自然界において当てはまらない人間の特性を思い出した

「自然界において強さとは生き残り、子孫を残し、繁栄すること…この世界に生きる生物全てに当てはまるその常識だけは人間に当てはま

りません。

先導する人間やその群れを構成する人間の性質によって強さと正義の形は常に変化し、枝分かれしていく…

共通しているのは最終的に必ず自然界にとって不要な形として残るということです」

だからこそワタクシは人類を愛いたぶるすることが大好きなのですよ♡

「ふふ、ふ、善も悪も無いと言った上で正義を語るか」

「ええ、正義と並ぶものは正義だけですし？」

どうやら案内人には返答を気に入ってもらえたようですね

プログラムが完全に起動し視界が白くなっていく

「では失礼いたします、案内ありがとうございます♡」

「良い良い、余も久方に楽しかった」

また2日後に、と案内人と言葉を交わし、ワタクシは心象世界を後にした――

く

ザイルの私室にて…

「っと」

ぺいっと投げ出される感覚、それと同時に身体のバランスを戻して着地する

…さてはノーアさん、出てくる時のこと考えてませんでしたねコレ。

「コヤンスカヤ」

服の埃を払っている途中で聞き慣れた声が背後から聞こえる

「はくい♡あなたのサーヴァント、コヤンスカヤです♡」

「やれやれ…」

ベッドから上体を起こして頭部に巻いたタオルを気怠そうに取るザイル

タオルにべつとり血が付いてはいるものの、額からの出血は既に収まっていた

「色々と言いたいことはあるがまずは礼を言わせてくれ、全令呪を使いまスター権限を失って尚ああして助けに来てくれたこと…感謝する。」

あの場じゃザイルも彼方も極端に言えば思想が形を持ったただの人格：<sup>エゴ</sup>

殺し合いを続ければ肝心の肉体が死ぬかもしれないという事実を受け止められていなかったからな」

割と素直に感謝を述べるザイルに少しだけ驚いたものの、コヤンスカヤに優越感は無。彼女はただ自分のルールに従っただけだ

「それに関してはお互いサマということだ。」

動機がどうあれワタクシは貴方<sup>貴女</sup>に救われた…それのお返しですよ」  
そもそもワタクシは令呪が無くなればハイさよならの薄っぺらい契約なんてした覚えはありませんし。

「そうか」

そう呟いて起きあがろうとするザイルさんを慌てて静止させる

「お待ちください！…確かに窮地は脱しましたがグラウンドアーチャー戦の負傷は決して軽くありません！」

慌てて止めたせいでミシツとか聴こえた気はしますがここは必要経費で。

「痛ッ…だがモタモタしてはいられない、今から2日以内に何か仕掛けるんだらう、俺の身体<sup>人格</sup>も掛かっている」

「その通りです…なので今日から1日はザイルさんの療養に当て、残る1日で障害を取り除きます」

「なに…？」

「これを。」

ポケットから一枚の写真を取り出して彼に渡す

「これは…？空母…いや戦艦か？それにしては…」

「ワタクシの所有する兵器の1つでこの世界には無い技術で建造されています」

内部には様々な設備があり、もちろん医療設備もございます」

彼の手を取り、単独顕現使用準備に入る

唯一の懸念は獣の証とも言える単独顕現レが使えるかどうかでしたが数回ならなんとか行けそうですね

「今からこの船へザイルさんを護送、船のリソースを医療機関へ集中させて1日で貴方を戦えるだけの状態に治します！」

一応鹵獲してから一通り設備の使い心地は試しました、1日あれば万全とは行かなくとも充分回復はできる…

「確かにこれじゃ戦えないな、分かった…だがその1日、お前はどのようなつもりだ？」

同意を求める前に彼が口を挟む

「情報収集及び工作ですね…そのためには最初の令呪の命令により許可が必要となつていますがよろしいでしょうか？」

「令呪が無いのに律儀なもんだな

…いいだろう、現時刻を持って単独行動禁止の命令を解除する」好きにしろ

「ありがとうございますザイルさん♡さて、では行きましようか」

さア、タイトなスケジュールになりそうですが…あの頃のように1人で張り切って行きましようか！





## 第26話 最後の陣営／イレギュラー

時間は巻き戻りザイルがコヤンスカヤに魔力供給を行っている頃  
T地区 大通りにて：

緊張感に包まれたT地区、多くの市民が我先にとその地区から脱出しようとする中で唯一地区中央部へと向かっていく1台の軍用4輪駆動車があつた

「土方、後部座席に無線機：でかいラジオみたいなやつがある、取ってくれ！」

「こいつか、ほらよ」

短く札を言つて彼から無線機を受け取り、運転しながら番号を入力する

………起動よし

「アルファチーム各員に通達、T地区への介入は市民の避難を最優先にしろ！」

避難指示を任務にベータチームがこちらに向かっている、到着次第任務を引き継ぎ半数はベータチームの支援に回れ！

もう半分はテロ犯行現場と思しきアルゴスタワーへ前進して周囲を調査！どんな些細なことでもいい、異変を感じたらすぐに報告しろ！アウト！」

投げるように受話器を戻してアクセルを更に踏み込む

「クソ、どうなってる？」

数十分前、アルゴスタワー最上階にて原因不明の爆発が発生した。

こここのところ狭い範囲で同様の事件が発生していたため上層部は複数の部隊を一带に配備、警戒していた

表向きはテロ鎮圧、だがこれは十中八九テロではない

「居るんだな？土方！」

「居るといふより居たと言った方が正しいな、もうタワーの方向から魔力は感じない」既に終わっていると思うぞ

「…だか行かないという選択肢は無い」

さっきまで俺も感じていた魔力：質なんて分からなかったが土方が言うには倉庫街で戦ったアーチャーと同じものらしい

そしてあの探偵の情報が正しいのであればアーチャーは災害の獣を殺すためだけに呼び出された存在…

戦闘時に俺と土方が優勢だったのもアーチャーが獣以外に本気を出し切れなかったからという線が濃厚だろう

「タワーが見えたぞ！」

そのアーチャーがこれまでと比べ物にならない魔力を解放していた、ほぼ間違いなくアサシンとザイルがタワーに立ち寄っている！

終わっているならそれはそれでいい、死体を確認できれば俺の戦いはひとまず終わる…だが――

その時、上空を見ていた土方が叫んだ

「つ！クライム待て！アーチャーだ！」

「なに!？」

ブレーキペダルを蹴り壊す勢いで車を急停止させて外へ

「アーチャーから情報を聞き出す！奴を止めろ！」これを使い！

「了解だ！」

拡声器を投げ渡し、周囲を警戒する

アーチャーが居るといふことはザイルとビーストは殺ったのか…

？今は多少のリスクを冒してでも情報が欲しい

『止まれグラントアーチャー！』

土方が後方のマンション屋上の方へと飛んでいった数秒後、拡声器

を通じて彼の声が大通りに響き渡る

：間に合ったか、それにしてもあつさり止まったな  
かなりの速度で離れていた回路パスの反応が停止、彼とは違う魔力反応  
を引き連れて戻ってきた

予想通り土方の横には倉庫街で戦ったあの大男が居た、予想外だったのは――

「よくやったバーサー……おい待て、何があった!?!」

「話は後だ!・コイツを病院に放り込むぞ!」

ズタズタの少女がアーチャーの腕に抱えられていたことだ

右足はおかしな方向に曲がり、腹部と潰された右目からおびただしい量の出血……とても生きてるようには見えなかった

少女の腕に触れて脈を確認する

生きている……だが脈がかなり弱い、体温も低いな

「……」

目の前の少女と背後に見えるアルゴスタワーを交互に見る

――俺は……

「つバーサーカー!・さつき通った曲がり角に病院があった筈だ!・そこへ向かうぞ!」

「了解だ!!」

一度は殺そうとした相手とはいえ明確な敵が分かった以上見捨てる選択肢は無い、少なくとも今は戦う理由はない筈だ

「アーチャー!・バーサーカーに付いていけ!」俺もすぐに向かう!

「わ、分かった!」

避難してもう誰も残って無いかもしれんが命を繋ぎ止めるくらいの医療知識は俺にもある、そこでとりあえず峠を越そう

「今は魔力消費については気にしなくていい、担いで病院に向かって

くれ！」

「任せとけ！」

バーサーカーに担がれる直前、車から無線機とアサルトライフルを引っ張り出してから俺たちは病院へと向かった

——だが

「おいふざけるなよ!？」

病院の前まで来て…いきなりだった

まるで隕石でも落ちたような凄まじい爆発音がして町中が暗黒に包まれた

発電所が落ちたのか!?

「暗い…何も見えねえ」

今はもうすぐ日付が変わるような時刻…とてもじゃないが迂闊に動けない

だがこのままじゃ彼女は死ぬ——

「迷っている余裕は無い、病院なら予備の発電機くらいある筈だ!探すぞー!」

アサルトライフルのライトを点灯させ、次に予備の電池が手元にあることを確認する

問題なし!

「行くぞ——」  
「待ってください!」

「!」

土方でもアーチャーの声でも無い誰かの声が俺の足を止める

「アーチャーは彼女を守れ!バーサーカー、戦闘態勢!」

避難指示は既に出ていた、加えてこの付近はタワーから近い…こんなところに一般人が現れるのはありえない!

アサルトライフルを土方へ投げ渡し、火縄銃を構える

「誰だお前は！答えろッ！」

「…貴方と同じく、ザイルとコヤンスカヤ…つまりビーストを倒そうと志す人間。」

そして、その少女の救出に来た者。俺は…セイバーのマスターです」

）

T地区 高層ビル（アルゴスタワー）にて…

「…良かったのか？」

「どのみちあのままじゃ彼女は死んでいた、他に手は無かつただろう」  
無人化した真つ暗なアルゴスタワーの階段をライトで照らしながら登っていく

アーチャーもついて行ったしアルファチームから何人か見張りを付けた、何かあれば連絡が来るだろう

「階段が終わってるな、ここが最上階か？」

「いや、まだ屋上がある。上がれるところを探すぞ」

最上階のレストランらしき場所へたどり着き、屋上への道を探す

エレベーターはあるが階段が無いな…他に道は無いのか？

そう思っていると土方から念話で通信が入った

（クライム、上がれそうなどころを見つけた、来てくれ！）

ああ、すぐ行く

）

「いいか、打ち上げるぞ？」

「ああ頼む」

レストランの中央…月明かりが差し込む穴の空いた天井目掛け、土方の手の平を足場にジャンプして屋上へ

チアガールとかがやっている協力大ジャンプの簡易版と言ったところか

「…酷い有様だな」

屋上に出て最初に出た言葉がそれだった、続くように土方も下から上がってくる

「…少しすればセイバー陣営も来るだろう、彼らが来るまでひとまず俺たちでここを調べるぞ」

「了解だ、マスター」

さて、調べると言ったものの実際のところ去り際にグランドアーチャー：オリオンとセイバーのマスターからいくつか聞いてはいる

まあ名前等は知ったところでどうということはないのだが…

「災害の獣、コヤンスカヤか…」

トドメこそ差し損ねたもののアーチャーの宝具には獣に対する強力な特効があるらしい、今頃死にかけているか…回復できたとしても能力に大きな制限がかかっている筈だ

しかし弱体化しているとはいえサーヴァント、それも災害なんて呼び名のある大物だ、とてもじゃないが情報無しで殴り勝ち出来るほど甘くは無いだろう

何か情報があればいいんだか…

「アーチャーのマスター…ハル・マトンだったか？よくこれで死ななかつたもんだ」

見かけによらず骨のあるガキだな。と固まって変色した大きな血溜まりを見下ろしながらバーサーカーが呟く

「なんだ、勧誘でもする気か？」

「あ？女子供は守るもんだ、新撰組にはいらねえ」

「そうか、ならいい」

土方は使えるものはなんでも使うと口で言っているが一線は決して超えない

「…」

サーヴァント召喚前、エナの言っていた言葉が脳裏をよぎる

『兄さんいい？サーヴァントには確かに強い弱いはあるけど一番大事なのはサーヴァントとマスターの相性なんだ、聖杯戦争は個人の戦いじゃない…サーヴァントとの二人三脚で戦っているという事実は常に覚えておいてね』

そういう意味では俺は良いサーヴァントを引き当てたと言うべきだろう、考え方や戦闘スタイル等俺にあっているし俺もまた彼と連携が取り易い

これで燃費の悪いバーサーカーの現界でなければ完璧だったが…無いものねだりをしていても仕方ないだろう

魔力タンクのストゥックは既に半分を切っている…そろそろ決着を付けなくちゃならない

「クライム、これを見てくれ」

と、何か見つけたのか土方がこちらへ戻ってきた

あの手に持っているのは――

「なんだそれは？…折れたナイフか？」

彼が差し出したのは刀身が紫、刃が黒で稲妻のような形をしたナイフ？の残骸だった

「分からん、だが戦場でこんな色物のナイフを意味もなく持ち歩くとは思えねえし異質であることは変わらないからな」

「…それもそうだ、とりあえず分析用に持ち帰る。ご苦労だった」

止血用の布で残骸を包み調査を再開する

他には何か…うん？

ピツピツピツと小さく、そして規則性に鳴る通信機の受話器を取る

「こちらアルファ1」

『こちらアルファ8、発電所の調査が終わりました』

随分と早いな

「状況は？」

『…見たまま報告します』

? どういう——

…

「——もう一度言え」

自分の耳を疑った、確認するように再度報告を促す

『はい、T地区を含めたこちら一帯の電力をまかなっているV地区にあるセラク発電所が…その、周囲一帯諸共消し飛びました…』

さっきの爆発音はやはり発電所…しかし妙だ、残っているサーヴァントは俺の陣営を除き先程確認したセイバーとアーチャー、まだ生死不明だがアサシンの3騎だけ。

ランサーライダーキャスターは既に脱落しているとエナは言っていた、しかし発電所一帯を丸ごと吹っ飛ばせる兵器が俺の情報網に引つかからない筈は無い

『…隊長?』

「いやなんでも無い、報告ご苦労だった」

通信を切り思考を走らせる

サーヴァントの作業なのは間違いない、とすると——

「探偵以外のイレギュラーが居るのか…?」



## 第27話 大天才の下準備／天才の情報収集（？）

時は更に巻き戻り、コヤンスカヤが休暇と称してザイルを連れ出そうとしている頃：

F地区 ナショナルギャラリー美術館 地下研究施設 ダヴィンチ専用礼装保管室

彼女は——うん、よく眠ってる

ソファの上でだらしなく涎をたらして寝ている友人を扉の隙間から見ながら彼女は残りの情報を機械へと打ち込んでいく

画面の隅に表示されるAIの2文字と入力された情報を再確認し

「…………よし、あと必要なのは時間だけだ」次いつてみよう！

なんとか彼女達が動き出す前までには形になりそうだと胸を撫で下ろす

「ええと、ここの棚をガコツと…」

ひと段落つけて席を立ち、隠し棚を開けて綺麗に整頓されたいくつかの礼装を手取る

ノーアちゃんの『いつか使えるかも』ルールでいるものもいらぬものもコツコツと集めてきた礼装…まさかこんな形で役に立つとはねえ

とはいえこれらの礼装が本来の用途に使われることはない、いくら彼女が天才であろうとこんな使い方は予想外だっただろう

「うっ、起動可能量ギリギリ？使える礼装はこれで全部だし…ささつと済ませるしかないなあ」

彼女の左腕によく似たデザインのアタッシユケースに棚の礼装を全て押し込み、折り畳んでそのまま左腕に格納。

「あとは召喚陣か」

保管庫を出てノーアちゃんを起こさないように居住スペースから外へ出る

「……………」コツ、コツ…

地下研究施設（とノーアが勝手に名付けたただの隠れ家）の廊下を1人、歩いて行く

5分歩いて2つの隠し扉をくぐり、3つの扉開錠キー使い、最後に1つ。ダヴィンチとノーアにしか反応しない魔力認証を解除して目的の部屋に入る

「…まだ起動中だね」

やや広い空間、その中心に通常のサーヴァント召喚に当てはまらない特別な召喚陣、既に使用後のそれは今も尚爛々と輝き、呼び出されたグランドクラスのサーヴァントへ魔力を送っている

決戦魔術、降霊儀式・英霊召喚――

聖杯戦争のために格落ちさせたものではない、本来の召喚陣。例えば最高位のキャスターだとしても再現、発動させるのは容易ではないが彼女は自身の宝具リソースの大半を投入、無理矢理起動させていた

…ここでやってたのはあくまで下準備、グランドクラスが現界しやすい環境を作っていただけであつたため、彼女<sup>彼</sup>とノーアの2人でもなんとか用意できたというのもある

「おつとつと…ふう、流石にちよつと辛いな」

自分の宝具『万能の人』を歯車の一つとして組み込んでいるせいか凄まじい力で魔力が吸い出されようとしているのが分かる、ちよつと強く作りすぎたかな…

フラつく足を抑えながら召喚陣の中央へ

お供物のように置いてあるダヴィンチちゃんアーム…ダヴィンチが現界時最初に付けていた腕を回収する

ま、回収したからつてすぐオリオンの霊基出力に変化があるってワケじゃないししばらくは大丈夫！

あとは普段通り、各地を見回るとしようかな？

…

…

ナショナルギャラリー美術館 地下研究施設 居住スペース（リビング）

「あ？！セイバーらしきサーヴァントを見つけた？」

睡魔に圧殺されそうな目をこじ開け、ベッド代わりのソファから起き上がる

「消去法でセイバーかもつてだけ、刀も持ってたし…とりあえず見ておくれよ」

くるんと半回転しながらイスごと移動してパソコンを指し示すダヴィンチちゃん

えーと現時点で判明しているのはランサーのヘクトール、グラウンドアーチャーのオリオン、ライダーの牛若丸、キャスターのキルケー、アサシンのコヤスちゃん、バーサーカーの副長だから…あー、まあセイバーしか残ってないね

どれどれ…？…！？

ガターン！

「ノーアちゃん!？」

パソコンに表示された画像を見て精神に衝撃が走り、次にお尻に衝撃が走る

「あごっ！いった！お尻打ったし…」

「大丈夫かい？いったい何に驚いたのさ…？」

「ん？いや、ね？メツチャ可愛かったからさ、これで戦うの？ってカンジで」

苦しい言い訳をなんとか平静を装って吐く

ごめんダヴィンチちゃん、でもこればかりはね…

パソコンの画面に映るサーヴァントと思しき女性をもう一度見る

「…」

赤と青を基礎色にした着物とも旅装束とも言えそうな服、桃色の長髪は風車のような形をした黒くてお洒落な髪留めでまとめてあり、華の模様が特徴的な帯が巻かれた腰回りにさされた4本の剣…一言で言ってさすらいの剣士という言葉が似合いそうな彼女は画面の向こうのリビングで幸せそうにうどんをすすっていた

…恐らくこの世界で私以外に彼女の名を認識できる人はいないだろう

「…これどこの映像？」

「うん？V地区の中央部から…やや北西の民家だね、住民も一緒にみた

い  
…行くの？」

「面白そうだからね」

「りよーかーい、私はちよつと作りたいものがあるから先に言ってるひと段落したらすぐに行くよ

「はいよー」

一旦ダヴィンチと別れ、部屋から地下通路へと出る

——なんで武蔵ちゃんが？

午前9時、いつもならまだ眠気が抜けない時間のハズだがその事実

に私の目はこれまでに無いくらい冴えていた

セイバーの英霊として宮本武蔵が召喚されるのは普通にあり得る事だ、だがあれは――

「彼女、そもそもカルデア召喚式でさえまともに召喚できるか怪しい英霊<sup>ヒト</sup>じゃなかったっけ？」

記憶が正しければ彼女は剪定事象によって消された世界の宮本武蔵：聖杯戦争にて男の武蔵が召喚されることはあっても彼女は絶対にありえない

「――まさか」

頭によぎる1つの可能性、否定したいがこれよりも有力な予測はいくら探しても出てこない  
私以外にもいるの…？

「――つとフリーズしてる場合じゃナイナイ、とつとと行こうか」

く

V地区 住宅街にて…

で、来てみたはいいけど――

「収獲全くナシ！」

聞き込みとかしてたら通報されかけるし…私ってそんなにヤバそうに見えるワケ？

今日はちゃんと聞き込み系の格好…つまり普段着の白衣ではなく、どこからどう見ても一般市民Aのはず――

「居ました！」

むむっ？

声の方を見ると結構な数の警官…じゃないね、服が違う

「アレは確かニップル社社長の私設――」

「ノーアさんですね？」同行お願いします」

「……」  
「やらかした！長いこと引きこもってたから忘れてたけど私有名なじゃん！」

ここに来て間も無い頃、スマートフォンという便利なものは無かった——いや、私以外持つてなかった。だからダヴィンチちゃんに頼んで私のスマホから逆に設計図を作成、ニップル社に投げ込んで世の中に広めたんだけど——

「おっふ!?」

地味にこざかしい回避スキルを見せつけて突き出されたスタンガンを避ける

「わあー遠慮ナシにスタンガンを振りかざす私設部隊の方々！いやあのうん、本来はあなた方の雇い主が何年か後に開発すること知ってるけどさあ、スマホが無いのはキツイんだよ！」

最初はのらりくらりと連行をかわしていたものの2、3年経ったあたりからこういうことが増えてきていた、が！スタンガンなんて使ってくるのはこれが初めてだ！

「……は奥の手！」

ボコつてもいいけど彼らは悪く無いので奥の手を使うことにした

「……むむむ」

「ダヴィンチちゃん…ダヴィンチちゃん…」

ノーア は ところを込めて 祈った !…なんちゃって

「呼んだかい？」

陽気な声と同時にパチンと私を魔力が包む

「…!?あ、あの、隊長…確保対象が…き、消えました…?」

目の前の私を見失ってオロオロしている方々の横をすり抜けてよく知る魔力反応の方へ

「ダヴィンチちゃんありがとう〜」

「んもー、世話がやけるんだから」このこの〜

もふもふがしがしと頭を撫でられて思わず顔がにやける

「それでどうだった？何か情報はあったかい？」

「なーんにも、多分セイバーのマスターが魔力で根回し的なことをしてるんじゃない？」

武蔵ちゃんと契約できるようなマスターならそういう情報封鎖はしつかりやってるだろう…ん？

歩きながらふと頭に浮かんだ1つの疑問

ダヴィンチちゃんはどうかやって武蔵ちゃんを見つけたんだらう…？

珍しく頭を使いそうになったが次の瞬間、それは吹き飛んだ

「アンペルドさんアンペルドさん！次、このお店と…こつちのお店！

どちらにしますっ？」

…？このミコミムーヴな声は——

「…鬱陶しい、それに胸が邪魔で見えん、離れろ」

!!!そしてこのイケメンヴォイスは！

「ザイ——ル？」

声のする方向、公園のベンチに視線を向けるとそこにはザイルと…彼にもたれかかるようにして密着しまくっているコヤスちゃんが—

「あ、あ、」

「まあまあ、そう言わずに♡」

「…フザけるのも大概に「あああっ!!」

思わず出た悲鳴に近い声にコヤスちゃんはこっちを見てザイルと  
いうと物凄く嫌そうな顔をして空を見ているがこの時、ノーアにとっ  
てそんなことはどうでもよかった

「な、な!」

「アレツ、そこにいらっしやるのは…」

「なにザイルとらぶらぶしてるの!?!この泥棒猫ーツ!!」



## 第28話 停電裏の激突

V地区 とある公園にて…

で、アツサリ撒かれたワケですが。

ダヴィンチの協力をもらい、なんとかザイルと一緒にカラオケに行ったノーアだったが歌い始めて間もなくコヤスちゃんがザイルを連れて消えてしまった

そしてしれつとカラオケ代押し付けてきたし…いや、そういうえば2人とも歌ってなかったな

ベンチでぼやあと座りながらそんなことを考える

武蔵ちゃんとそのマスターはもちろん、考えることとこやるべきこととはたくさんある、けど――

「キミは時々私にもよく分からない行動をとる時があるね？でもそういうの、キライじゃないよ」ふふん

ダヴィンチちゃんを膝枕しながら彼女の瞳を見つめる

うっわ、綺麗…

2人で何時間もぶっ通しで歌い倒した後、そこからは全部ダヴィンチちゃんとデートだった、焼肉行ったりザイル探したり映画見たりザイル探したり…で、太陽も完全に沈み切ったこの時間、私達は公園に  
来ている

そしてさらに言うとながお願いして膝枕をさせてもらってる、うん。難しいことは後でいいかな、眼福眼福

「もし、そこのお方」

…と、その時間を妨害しようとする影がひとつ

はー！誰やねんこの至福の時間を邪魔する奴、は…

声の方を見ようと顔を上げて：フリーズした

「幸福な時間を邪魔するつもりは無かったが中々終わらないのでね、少し話をさせてもらいたいのだが」

「らっ…!？」

ラスプーチ…!?!?…じゃない？ああ、なーんだ！ただの外道麻婆か、そうかそうか

目の前に佇む神父がちゃんと言峰綺礼であることに胸を撫で下ろ…せるわけないだろ！

おかしいでしょ！なんでコイツがここにいるの!?!いや待て！今はzeroの後だから神父が来ているとすると――

「――」

ヤバイ、とにかくヤバイ、特に歴史オタなワケじゃないけど英雄王と私がカチ合うのがヤバイのは分かる！

と、とにかくどうにかして帰ってもらおうor撒かないと！

「…?マスター、知り合いなのかい?」

ダヴィンチちゃんが聞いてくる、違和感を覚えたのは彼女も同じのように名前呼びも伏せてくれてるね

マスター呼びは仕方ないと割り切って返答を返す(モナリザが歩いてるようなもんだから魔術師なら1発でマスターだって分かるし)

「知り合いじゃないけど無関係ではないかな、お兄さん多分代行者だよな?まさか私を殺しに来た的な?」

「ほう…?…こうもあっさり見抜くとは、マスターに選ばれただけはあ  
る」

見抜いたというか知ってたただけなんだけどなあ。

「で、そこんどこどうなの?もしそうなら全力で抵抗するけど?」

しかしまあ抵抗しようがしまいが私は絶対死なないけどね?

「とんでもない、殺すつもりなら話なんてしないとも。」

そもそもサーヴァントを膝の上に侍らせてご満悦のマスターなど生きていても死んでいても何も変わりはない」

「へー、うん？」

あれ？もしかしてちよつと馬鹿にされてる？

ブツ飛ばしたいのを抑えて笑顔で対応、流石にここで手を出したら参戦はしなくとも英雄王は出てくるだろうし

「じゃ用件は何さ？人の時間使わせるってことは結構大事な用件なんだよね？」

「その通りだとも、しかしこのような公共の場所で話す様なことでは無い」

場所を変えるよう神父に促されて取り敢えず了承する

なんてったって裏には英雄王がいるし神父だって油断ならない強さだ、先手を取られたら多分負ける

私は不死身だけどダヴィンチちゃんは不死身じゃないからね

「んじゃ場所は私が決めるけどいい？」

「構わないよ」

意外とあっさり頷く神父と一緒に取り敢えずセラク発電所の方へ電話しつつ、どうやって逃れるか考えることにした…

↳

V地区 セラク発電所 見学受付カウンターにて…

「げ!?!いらっしやいませー!」

「なんちゆう挨拶してんの…まーいいや、ちよつと内緒話するから奥の区画使わせてもらうよ」

あからさまに嫌な顔で対応する受付の人に手を振りながら作業員専用の扉を通って奥へ

「この責任者の口座にいくらか振り込んで一部の区画を貸切にし  
てある、もちろん発電自体に影響が出るから本当に一部だけだけど。  
「…この場所選択は魔術師でありながら科学者という歪な経歴故か  
?」

「いや、適当」

「というのは嘘で理由はある。こここの発電施設は火力発電を主にし  
ている、だからサーヴァントがちよつと暴れただけで施設内部は火の  
海になるか消し飛ぶかするだろう」

「私やダヴィンチちゃん、神父はそういうところに配慮した戦い方が  
できるけど英雄王がそんな気遣いをするとは思えない、もちろん私も  
ただじゃ済まないけどどうせ治るしダヴィンチちゃんには爆発なん  
て効かない、吹き飛ぶのは神父だけだ」

「ダヴィンチちゃん、お互い離れないようにしとこうね?」

「うん?うん、おっけー」

「zero後の英雄王が神父を殺すのは考えづらい、後は隙を見てこ  
こから逃げ出すだけ…」

「場所を提供してくれたことに感謝する」

「そういうのいいから、何が目的かどつとと言わんかい」

「しかしこの神父…こうして目の前に居ても何を考えているか全く  
分からないのが不気味だ…」

「一体なんの話かと身構えていたが——結果から言っただ話があるの  
は神父では無かった」

「フン、こうして見ると本当に奇妙な女よな?」

「!!」

「後ろから感じる凄まじい威圧感と威厳しかない声」

「ふ、不意打ちが過ぎる…」

「緊張で固まった身体をなんとか動かして振り向く——」

り、リアル英雄王…!

予想通りというか必然というかそこに居たのは英雄王、火力発電に必要な燃料を貯めておく巨大なタンクの上で腕を組んで私達を見下ろしていた

「対処すべきは獣だけと思っておったが…おい雑種、貴様人間にしては随分と若作りだな?」

「え? いやあの、言ってることが意味不明なんですが?」

ヤバい、もしかしくなくてもバレてる! つかなんで分かるんですか!

「茶番は要らん。魂の形が歪すぎて1発で分かるわ、たわけが」

なるほどタマシイね! いや落ち着け、いくら英雄王と言えどこちらの核までには届いていない…と思う

ダヴィンチちゃん、戦闘準備!

(正直彼と戦うのはオススメできないよ? まだ真名は分からないけど  
—) 分かってるよ、ギルガメツシュ王とまともに戦うなんてとんでもない、隙を見て逃げよう!

念話で真名を言った時一瞬ダヴィンチちゃんが驚いたように見えたがすぐに持ち直して警戒を強め、私も例のペンダントを握り締めていつ戦闘に入ってもいいように身構える

「まあ良い、我もそれを確認しに来たわけではない」

そう言って英雄王の視線が私のペンダントへと移る

「聞くことは1つだ、雑種…それをどこで手に入れた?」

う、やっぱりこの話題になった!

嘘言ったら王の財宝で蜂の巣にされるのは目に見えてるし…  
ゲート・オブ・バビロン  
しやーないか

「…50年前に持ち主から譲ってもらった」

ただそれだけだ、詳細を言っていないだけで嘘は入っていない

「ほう？これは異な事よ、貴様のような小娘に私の財宝をくれてやった覚えは無いが？」

「え？」

…うん？なんか会話がおかしかったような——あ。

やらかした失敗に気付き、全身から熱が引く感覚

で、この時ダヴィンチちゃんめっちゃ心配そうな顔してたから余程今の私は酷い顔をしてたんだろうね

今の今まで当たり前のように使っていたから忘れていた、ペンダントに使っているリソースに聖杯が含まれていることを——

「どちらにせよ私の庭に貴様のような異物は要らん」  
パチン

という指パチンと共に英雄王の背後に浮き出る無数の光の波紋。それが見えると同時にペンダントの魔力を起動させる

やば、間に合うか!?

「——『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』」

「おわあああ!!」

降り注ぐ宝具の雨を障壁を張って間一髪防ぐ

「ダヴィンチちゃん！大丈夫!?!」

「へーき！ありがとうノーアちゃん」

うわ、ヤケクソで張ったけど『王の財宝』を完全に防げるって何気にヤバい力してるな

「…？ギルガメッシュ、お前の宝具を防いだ今の障壁は…？」

あ、麻婆！逃げたと思ってたけどちょっと居るね

「ただの障壁や結界では無い『対終末防衛』もしくは『対粛清防衛』と言う、かつて我が不老不死を求めて旅をしていた時に見た事が——い

や、奴に見せてもらった」

それをあろうことか歪なりとも『不死性』を手に入れた異物が扱うなど不敬すぎて笑えてくるわ、と英雄王は微塵も笑わず吐き捨てる

「く……」

「お前は下がっている言峰、巻き添えを食うぞ？」

外道麻婆を下がらせた……マジの戦闘体制に入るつもりですかこの人！

少しでも動きを見せればまた宝具を撃つてきてもおかしくない一触即発の状況、鋭い緊張感が支配するその空気を破壊したのは私のスマホだった

電話……？こんな時に誰——ザイルだ!!

「ちよっ！ノーアちゃん!」

冷静に考えれば自殺行為以外の何物でもないのだがこれは私の性格だからどうしようもない

「やつほーザイル！電話ありが……ん？んん？……さてはオメー、ザイルじゃないな？」

空気というか、カンというか……今ザイルの携帯を持っている人物がザイルではないという妙な確信があった

『……時間があまり無いので単刀直入に言います、戦闘によりザイルさんが呪いを受けて瀕死の状態となっています』

このタママ族な声は……

「その声はコヤスちゃ——」  
ザクツ

う？

不快な音と感触に目を向ければ眼下には深々と足の甲に突き刺さ

る宝剣が――

「よそ見とは随分と余裕があるな？ 雑種」

「ギャー！ いったい！！…つてええ!? マジで?!?」

再び降り注ぐ宝具の雨を障壁で防ぐ

「マスター！」

「大丈夫！ 大丈夫だから私の後ろに！」

あからさまに危険な空気だがそれでも私は会話をやめない、何せあのザイルがピンチなのだ、電話を切るわけにはいかない

『…外から干渉するのが難しいため、彼の内側からそれを解く必要がありませんがワタクシにはその手段がありません…アナタ方なら、何か手段を知っているかと。』

内側から解く方法…んじゃアレだ、暇つぶしで作ったエセ五停心観プログラム使うか。

ザイルのことになると周りが見えなくなるとダヴィンチからよく言われているノーアだったが流石にこの状況でも一筋なのはその場に居る全員が異常と感じ取っただろう、例えザイルの存在を知らない英雄王や言峰にも。

「うんうん、なるほどね…よっし、ダヴィンチちゃん！ 遠隔で例のプログラム起動させて！」

「キミ本当に一筋だね…よし起動おっけー！」

障壁の裏で小さくガッツポーズをして起動させたことをコヤスちゃんに伝える

「とりあえずそこで光ってる義手に触って！ あとは説明を受けてなんとかしてちょうだい、私も今ちよつとというかかなり忙し――え？」

場の空気が、また変わった

「――もう一つ、確認することが増えた」



英雄王が呟いた直後に辺りに吹き荒ぶ神秘の風：嵐といえいいのか、ノアにはそれを表現する力を持っていなかった

そんな馬鹿な…：彼がこんな場所で呼び出すなんてありえない

「ウトナピシユティムが貴様のような雑種にそれを託したのかどうか…：知るにはこれしかなかろう、許せ『エア』よ」  
「ウツソ、もうそれぶつ放すとか何考えてるの!？」

動揺のあまりスマホが手から滑り落ちる

「光栄に思うがいい！そして歓喜し、這いつくばって感謝せよ！雑種ごときが我が至宝をその身に受けられる事!! 貴様如きに力を貸した英雄に!!」

「ヤバイヤバイヤバイ！ダヴィンチちゃん！」

「っ…：4秒防いで！あとは私がなんとかしよう！」

4秒…：本人なら余裕だろうけど！

「来るよ！」

「『エヌマ・エリシユ』！」

…その日、街から灯りが消えた

## 第29話 実らない恋

R地区 マトン宅にて…

「停電なんてツいてないわね…」

明かりのつかない家の中で眠たい目を擦りながら手探りで懐中電灯を探す遥の義姉のツール・マトン、暗くて見えづらいその表情には隠す気の無い苛立ちが浮かび上がっている

停電か爆発音かどっちかにしなさいよ…

眠くて判断力が鈍っていた彼女が『魔術で適当に明かりをつければ良いのでは?』と気付いたのは10分かけて懐中電灯を探し当てた直後だった

「ああ…ホント最悪——ん?」

ドンドンと何かを叩く音が聞こえて反射的にそちらにライトを向ける

玄関…誰か来たの?

こんな時間に?と思ったものの今は停電真っ只中、救助隊とか消防隊とかが見回っているのだろうと勝手に納得して扉の方へ

ドンドン

「はいはい今開けますよ〜」

だが、

「停電の見回り?ウチは特に問題無いから——え?」

扉の向こうに立っていたのは救助隊でも消防隊でも無かった

「」

↳

J地区 米陸軍駐屯地 医療棟にて…

：  
規則的な機械音で目が覚め、最初に見たのは白い壁。  
それが壁でなく天井だと気付くのに少し時間がかかった

「……………生きてる」

身体は痛いっちや痛いけど命の危険を感じるような痛みじゃ——  
みしっ

「~~~~っ!?!?」

起きあがろうとほんの少し力を入れた瞬間、電流でも流されたような痛みが走りベッドの上を転げ回る

「ちやつ、ちよ、痛い痛い痛い!」

が、そんな激しい動きをすれば痛みが強くなるのは当然なので無理矢理にでも我慢する他無かったのだが。

「死ぬかと思った…」

かろうじて動かしても痛みが無い手で額の汗を慎重に拭う  
多分病院、だよねココ…

あやふやな記憶をなんとか呼び起こして何があったか再確認する  
……そういえば

「私死にかけて——あ」

ふと感じた気配、その方向を見ても誰もいないが遥には存在を察知  
できた

「オリオン?」

「!……………よう、ハル」

気まずそうに姿を現すオリオン、そこに普段の陽気な彼は居なかつ  
た

「…」

「…」

重たい空気に流れる静寂、不気味なほど静まり返った病室には私とオリオンの2人だけ

何か、話さないと――

「身体の具合はどうだ？」

「えっ？え、うん、メチャクチャ痛いけど死ぬようなカンジじゃない、かな？」

「…そうか」

「あ、その、そうだ！オリオンが病院ここまで運んでくれたんだよね？」

途切れそうだった会話を強引に繋げてお礼を言う、その時は自分から会話を始めるのがとても難しいように感じたから

「俺だけじゃねえ、バーサーカーのマスターとセイバーのマスターが協力してくれたおかげだ」

「あつ、そうか！そうなんだ！じゃあまたあとでお礼を言つて「マスター」

真面目――悲痛とも取れる表情をしたオリオンが真っ直ぐに私の顔、そして1画だけ残っている令呪を順に見つめる

「――」

なに？と聞き返すことができない、本能で『聞きたくない言葉』が来ると遥は理解してしまった

「あの、あのさ！ウチの近くに凄い美味しいケーキ屋があるんだ！」

言わせたくない、聞きたくない、そんな思いからどうでもいい話を即興で作って引つ張り出していくが全て無意味だった

「今度…一緒に」

彼の顔を直視できない、見れば見るほど舌が回らなくなっていく

「マスター」

「……………なに？オリオン」

目線を合わせては逸らしていた彼だったが最後はしっかりと遙の目を見据えて言った

「契約を切ってくれ」

」

予想はできていたというのにいざこうして言葉にされると何を思えば良いのか遙には理解できなかった

「え、えと……」

「これ以上、巻き込みたくない」

短く、はつきりと言い切る彼の言葉には私を気遣う気持ちが目に見えるほど込められていて、

「…そっか」

そしてそれは英雄が一般人を気遣うものと同じものだった

まあ…いつかこうなるんじゃないかとは思っていたけど

特に秀でた面の無い魔術師がいきなりグランドクラスのサーヴァントと契約したところで上手くいくわけが無い

「うん、分かった…令呪を持って、命ずる」

軽度の痛みを無視し、令呪が刻まれた右手を掲げて彼に最後の命令する

「今から少し…話をしよう？」

最後の令呪が消える、遙とオリオンの間にあった繋がりパスが消える

「おう、いいぜ」

彼がこの場から消えれば私が彼と出会うことはもう無くなるだろう、つまりこれが最後の会話。

最後だから、そう思うと言いつづらかったことも意外とスラスラ言葉

が出てきた

「オリオンはさ、楽しかった？」

「ん、あーと…デートのことか？」

「契約してからのこと全部かな」

サーヴァントは遊ぶために現界するのではない、それがグランドク  
ラスとなれば尚更だが遥にとってこの質問はとても大事なものだっ  
た

「おう！楽しかったぜ！」

お前の姉ちゃんに蹴られた時とかはサーヴァントなのに死が頭に  
よぎったりしてヤバかった時もあるけどな！と人差し指で鼻をすす  
りながら彼は笑う

「じゃーさ…ナンパとかも楽しんでた？」

「ぶっ…！」

不意打ちだったのか鼻から変な咳みみたいな音がして少しだけ笑え  
たのは秘密ね

「…見てた？何回くらい？」

「それ聞いている時点で告白してるようなもんじゃん！あはははっ！」

割と契約初期から彼のナンパ癖は知っていたけど特に怒りとかの  
感情は一度も浮かんではこなかった、なぜなら――

「別になんとも思っていないよ？だってオリオン、誰に対しても本気  
じゃなかったし」

小さい頃から僅かな表情や仕草から他人の考えを読み取っていた  
私だから分かる、彼は召喚当時から本気で女性と付き合いたいと思っ  
たことは無かったんだ

最初から…何百年も何千年も前から彼の意中の女性は1人だけ、そ  
れも女神なんだから私が入り込む余地なんて無い

あの時無茶をしたのは苦しんでたビーストのマスターが妹に似て

いたというのもあったけど、彼の役に立って振り向かせたかったという思いもあった

結果として足引つ張っただけだけど。

…こうして思い起こしてみると私も大概だね!?

自分のメンヘラ化に若干凹みつつも1番聞きたかったことを聞いてみる

「ねえオリオン」

「なんだ？」

「アルテミス様ってどんな神様？」

「いきなりだな!? つーか知ってたのか…んーとな…」

良い言葉が見つからないのか私を氣遣っているのか、顎に指を当てて考え込むオリオンに一言。

「そんな難しく考えないで一言でホラ! 令呪を持って命ずる! 遠慮も躊躇もナシ!」

「令呪もう無えじゃん! …まあシンプルに言うなら——」

素早いツツコミを入れたのち、恥ずかしそうに言った

「アルテミスは…『いい女』だな、これ以上短くするってなるとちよつと難しいぜ」

「ええ…」

私はてつきりこうこうこういう神様で〇〇を司る神で〜という返答を予想していたが予想斜め上の発言に少々面喰らってしまう

「後にも先にもアイツよりいい女は出てこねえだろうな、俺はそう思ってる」

「それは…神様だから？」

「いや? 女神だから好きになったのとは違うが…いやまあアイツが狩猟の神やってたから出会いがあったのはそうなんだが好きになった理由とはまた違う」

…うーん？

「…よく分かんないや」

「まあこんなフワフワした説明で理解しろって言う方がアレだしな」  
理解できるところは少なかつたものの、できたところもあつた

「本当に魅力的な神様ヒトなんだね」

「おう」

恋人の話をする彼は本当に嬉しそうで、褒めると自分のことのように照れて頭をかく様子はアルテミスという神様——いや、アルテミスという女性がいかに魅力的かを物語っていた

それを知つた私が言うことは1つだけだ

「…そこまで胸を張れる恋人が居るなら浮気なんてしちやダメでしよ、オリオンのバーカ」

「ぐ、返す言葉も無え…」

ま、その浮気癖のお陰でデートができたりしたワケだから悪い事ばかりじゃ無いけどそれを言ったらアルテミス様が怒りそうだからやめておこう

「私が言いたいののはこれで全部、聞いてくれてありがとう」

「いや、これくらいはな？そっちこそ話してくれてサンキューな…その、色々すまなかつた」

「反省してるならヨシ！でもアルテミス様が悲しむから2度としちやダメだよ…」

「ああ、覚えとく」

もう——私から話すことは何も無い

「…オリオン」

「どうした、ハル」

後は見送るだけだ



「——気を付けてね」アルテミス様によるしく

「おう」

扉から去っていくその後ろ姿を、私は見えなくなった後もしばらく見つめていた

「…」

どれくらい経ったか、私の意識はドタバタとした足音で引き戻された

この落ち着きのない足音は…

直後扉を破壊する勢いで開いた義姉、トール・マトンが入ってきた  
「ハルっ!! アンタ相当ムチャをしたって——ハル?」

「お姉ちゃん? よくここが分かっ——」アンタ…なんで泣いてるの?」

「——え?」

堪えていられていた涙は、とうの昔に溢れ出していた

く

J地区 とあるビルの屋上

明かりの消えた街、本来もつと暗い筈だが彼のいるその場所だけは不自然に明るい月の光で明瞭に照らされていた

「…いつもみたいに殴ったりチョークスリーパー決めたりしねえの?」

「やったところでなんにも意味ないじゃない、ダーリンのばか」

マスターと決別したサーヴァントは自分以外誰もいないはずの屋上で、それでもたしかに存在する誰かと会話する

「反省してる?」

「してるさ、今回は…色々と堪えた」

今まで色々と浮気してきたが最終的に自分が酷い目に遭えばうや

むやに出来ていたので、自分以外が傷付くという経験が殆ど無かった彼には今回の一件は堪えたらしい

「そう…ハルちゃんが笑顔で見送ってくれてたから今はそれで許してあげる。霊基の調子はどう？」

「冠位の資格は完全に消えた、一応冠位相当の魔力は残っちゃいるが…その魔力も減り続けてるな」

対獣の切り札『我が矢の届かぬ獣はあらし』は撃ててあと一回きり、それも冠位相当の魔力が維持できるまで…それ以降は恐らく決定打にはならないだろう

「…行くか」

決戦の時はすぐ近くに。

### 第30話 檻の中で

ザイルが治療を受け始めてから約10時間後…  
???にて…

「ハア…そろそろ説明してくれ」

不機嫌そうにあらぬ方向へ言葉を投げるザイル

ザイルが立っている場所…そこは彼の知るワシントンD.C.の街並みで、大通りのど真ん中…しかし街は彼の記憶と細部違う点が多く、また人の気配が無かった

「…やれやれ、居るのは知っている、とつとと出てこいコヤンスカヤ」  
「いきなり変な空間に放り出されたんですからもっと狼狽えてくれないのでは？」まービビリ散らかされても困りますが。

取り回しのしづらいサイズのアタッシュケースを抱え、彼の前に降り立つ

「身体の具合はいかがですか？」

「特に異常は…待て、何をした？」

即座の察知、ええ！そうではなくては！

「どこにも負傷が無いのは何故だ、俺がカプセルに入っていたのは長く見積もっても10時間と少し…その間治療できたのはせいぜい3.4割だろうか？それに俺の右腕が生身になっているのは…」

「時間も治癒段階も概ねその通りです、今の貴方は生身ではない精神体…ここはワタクシの作り出した心象世界の1つである『愛玩の檻』…そこにザイルさんの精神だけを招待しておりますわ♡」精神体なので義手は無くても大丈夫…というか単にワタクシが弾いたんです  
が

「心象世界…お前の？」

「ええ」

ケースを開き、いくつかの銃火器を取り出して1個ずつ彼に投げ渡す

「リボルバー？…SSA（シングルアクションアーミー）か」よくこんな古くさいものを2丁も持っていたな

「あとこれを」

「おい、そのサイズを投げるな…！やれやれ、アンチマテリアルライフルM82…俺が普段使いしてるライフルのカスタム元か」

あとコンバットナイフとかも初期装備でオマケしてあげましょう

♡

「何をするつもりかい加減に言え」

「何って…演習ですよ？あ、バックルやホルスターを忘れてました、どうぞ」

「は？」

首を傾げつつもテキパキと銃火器を装備するザイルを見ながらコヤンスカヤ自身も軽い下準備をする

「言ったでしょう？『1日で貴方を戦えるだけの状態にする』と…ただ中途半端に傷を治しただけで戦えるだけの状態になったとは言いません」

良い機会ですし言っておきましょう

「ハッキリ言いますがザイルさんはアナタや周囲が思っているほど強くありません、それは単純にダヴィンチさんの義手とノーアさんの兵器があまりにも優秀すぎたからです」

「なに…？」

そう、彼はあまり強くない、ダヴィンチさんの義手で身体能力は向上していかつ彼に最もフィットしたノーアさんの作った銃…

ライダーのマスター相手に見せた妙な歩法を差し引いても彼の素

の戦闘スペックが大して高くないんですよねえ

「そうですね、分かりやすく言うとなればザイルさんはこれまで…ナイフ一本持った熟練兵を倒すために遠距離からミサイルを撃ち込んできたようなもの」

もちろん人間を基準とするならば頭ひとつ抜けた強さですが…サーヴァントのメカを使っている今の強さというのは物足りません「ぶっちゃけて言えば義手のデタラメなスペックに慢心して向上心が欠けちゃってます、ですのでえ…♡」

渡した装備類をザイルが身につけ終わったと同時にサバイバルナイフとトカレフを展開、手元に武器の重量を感じながら姿勢を下げて地を蹴る

「コヤン——ぐっ!？」

喉元を狙ったサバイバルナイフの一撃はそれよりも一回り大きなコンバットナイフによつて防がれた

「良い反応です♡ですが——」

アスファルトを削り取る勢いの足払いがザイルの足に命中する

「その後がお粗末ですね？」

支えを失って倒れ込むザイルが地面に伏せるよりも早く、SSAを持った方の手首に向けてサバイバルナイフを投擲し、片腕を潰してそのまま後退。

「シヨット♪」

「クソ——」

起き上がりに合わせ、心臓に狙いを定め2発トカレフを打ち込む、ザイルはそれをナイフで叩き落とそうとしたが——

バスバスッ

「な……！」

ナイフはどちらの弾丸にも擦る事すらなく、正確に心臓を撃ち抜いた

「義手の持ち込みは許可しておりませんので強化等もございませぬ、  
とうか普通の人間がナイフで銃弾を叩き落とすとか無理ですから  
ね？」

まずはそのズレた認識を直すところから始めなくてはなりません

「コヤン、スカヤ……」

「そして急所を攻撃された人間は死ぬ、これも常識……ライダー戦のよ  
うな無茶はまともな人間にできません」

血を吐いて崩れ落ちるザイルの元へ歩み寄り、しゃがみこんで彼の  
頬に手を触れる

「期限まであと37時間48分と20秒……その内の24時間、丸1日  
を使ってザイルさんを義手や専用銃器ナシでも戦えるようにします  
……ああ、この空間では死んだとしてもすぐ生き返るのでリスボーンするご安心くださ  
いませ♡」

「……」

ナイフを抜き取り、ささつと血を拭き取ってナイフをしまう

「あ、それと現在のワタクシのスペックですが一応『人類が到達できる  
領域』ですので死ぬ気で頑張れば勝てるかもしれませんよ？笑」

ここにいるワタクシは急遽作った分身のようなもの……今頃大元、本  
体の方のワタクシは明日に向けて外で準備していることでしょう

「その時に調整して人間レベルに落ち込むように分身を作ってこちら  
に招いたのですが——ザイルさん？」

……あら

話すのに夢中で既に1人目の彼がこと切れていることによく  
気付いた

早速1度目のgame overですねえ、ですがコンテニューボタンを押す権利が失われることは無いので問題ないでしょう  
「…ふふふ」

最もここは演習場では無い、ワタクシの作り出した愛玩の檻：死ぬば死ぬほど、その者の魂精神には無条件で獣：動物に対する理由の無い恐怖が侵食していく…

「まともな人間なら1回死ぬだけで動物を直視できなくなり、2回死ぬば匂いだけで発狂するレベルですが…」

——おっと

ガンツ

考えるよりも早く本能が反応し、路上駐車されていたトラックに身を隠す

「ええ、ええ！やはりワタクシの契約者たるもの、それくらいでなくては！」

意気揚々とセミオートライフル、ドラグノフ狙撃銃を展開しつつ煙幕手榴弾を投げ、移動する

狙撃戦：撃ち合うのも良いですがここはワタクシらしくエレガントに行きましょう♡

「やれやれ…」

煙の中、一瞬見えたコヤンスカヤの不敵な笑い、そして残ったままの自分の死体：それらを見た生き返ったばかりの男は一言

「…悪趣味な女だ」

そう呟いた

第31話 幕間 影月 遙(2)

???にて…

「あーもう！運命なんてバツカみたい！いい？彼方」

「な、なに？」

運命は常に変化する、しかし一生の内得られる幸福感というものは絶対量が定まっており、変化しない

また、絶対量が決まっていると言ったがそれは全人類1人1人に差があり、遺伝もしない。親の絶対量が少なかったからといってその子供がそうとは限らない、逆もまた然り。しかし――

何事も例外は存在し、彼女達もその部類。

「私があなたを迎えにくる時、とびつきりカツコよくて私のこと全部受け入れてくれる彼氏つれて帰ってくるから！」

「え、でも…影月家の人はみんな自分だけじゃ相手を見つけれないって…そ、それに全部なんて無理だよ…」

影月家という家系に限りそれは遺伝する、絶対量を著しく下げながら。

「はいはい、無理なんて損にしかならない台詞を吐かないの！…必ず戻ってくるから、それまで1人で頑張るのよ」

「うん…我慢する、できるよ…」ウルフが一緒だから…

我慢することより殴り返す根性を付けて欲しかったけどなあ

残念そうに言いながら少女は妹を1人残し、迎いの軽自動車の後部座席へと乗り込む

…人間が一生で得られる幸福感の量は変わらない、変えられる点があるとするば『どこで絶対量を使い切るか』だろう



車が動き出す。見知った景色と人を置き去りにして。

結果として、約束は果たせなかった

く

ザイルがコヤンスカヤを召喚する少し前

F地区 ナシヨナル・ギャラリー―美術館にて…

特に何かを見るわけでもなくフラフラと美術館内を歩く少女、影月遥。

「ふわあ…今日はそんなに人居ないな…」

遥は勉強の合間、休憩がてらこの美術館に来ることが多いが別に美術品に関心は無い、理由は単純に――

「静かでいいね…」

その独り言に返事が返ってこないことに満足しつつ、今日もまた館内を一周して外へ

図書館でもあれば良いのだが軽く行ける距離にはこの美術館しか無かったのだ

「…ヨシ、んじゃ勉強しに帰ろうかな」

余談だが幼い頃から学校には行っていないため、今彼女が勉強している工程は昨日ようやく高校生レベルへと入った

「んもー、こんなところ住んでるとゴミ出しも面倒だなあ」

…?

ふと耳に届いた軽薄そうな声に視線を向ける

「…うん!?!」

美術館の裏へ続く、車1台なんとか通れそうな通路。美術館側に窓

も扉も無いのは来るたびに目に入るから知っている。その壁から  
ニユツ、と汚い白衣の女性がゴミ袋を持って出てきたのを遥は見た

「へっへーい、近道近道♪」

その女性はこちらに目もくれず裏手にあるゴミ集積場の方へと  
走って行った

え、え？

女性が出てきたところ慌てて調べに行く遥

もしかして幽霊？でもゴミ捨てに行く幽霊なんているわけないし  
…うん、やっぱり壁しかない

とりあえず手当たり次第に壁をペタペタしてみる…

「…」

…

「…?」

…

「特になにも——わっ!?!」

見た目は壁なのに、そこだけ霧のように手がすり抜けて転がり落ち  
る

「おわーっ、と!」

が、なんとか受け身を取って着地!

護身術とはまた違うけど小さい時、彼方を護るためにたまたま旅行  
で来ていたおじいちゃんに習った太極拳モドキが地味に役に立った  
!

「それはさておきここは…」

…車庫?にしては微妙に広いし…足元のこの落書きは一体…?  
あっ

現状を把握できない彼女の目に映る、この空間で最も存在感を放つ  
物体

機械の…腕？

義手にしては大きな機械の手の方へと、手を伸ばした時――

「イッ！」

火傷した時のような感覚、直後――

「…ん？召喚されたのか？なんかにしては変な――あ、お嬢ちゃんもしかしてマスター？」

「へ？」

ガタイの良い…という言葉では表せないほどの大男が目の前に立っていた

でっか！腕とか私の胴体と対して変わらないんじゃない？…というかマスター？マスターって言った？

「お、令呪もパスもあるな！んじや間違いないねえ、お前が俺のマスターだ！俺はオリオン！色々と超越したギリシヤのアーチャーだ、よろしくな！ええと…」

「エツ、あ、ハル！名前はハル・マトン、だよ？」

ぎこちない自己紹介になってしまったものの、彼は嫌な顔ひとつせずバシバシと肩を叩いて笑う

ちよ、地味に痛い！

「そっか、よろしくな！ハル」

「よろしく…？」

訳もわからないが、とりあえずこのままここにいるわけにもいかないので入ってきたところからよじ登って外へ出て、家に向かう

…帰った瞬間、家にいた義姉ちゃんが実体化したオリオンを見て喚きまくったのは言うまでもない

…

「…あのー、ダヴィンチちゃん？」

「なんだい、ノーア」

…

「…怒ってる？」

「うん」

たはは、と乾いた笑いを吐きながら視線を逸らすノーア

そしてノーアが勝手にショートカットとして作った通路と召喚済みの陣を交互に見てため息をつくダヴィンチ

この日から、部屋には鍵が増えたという…

く

R地区 とあるカフェにて…

『…というわけで急遽予定を変更して演習場に留まることを決定した米軍の英雄、クライム・アルバート将校へ突撃取材を行いました』

作り笑いが見え見えなニュースキャスターから映像が切り替わり、演習場の入口らしき場所で取材陣を鬱陶しそうに払いのける軍服の男が映し出された

『何故急に留まると決めたのですか!?!』

『軍事機密です』

『ウルフルズについて掴んだことはありませんか!?!』

『軍事機密です』

『わざわざ自分で日本食店に行き沢庵を大量に購入したとのことですが沢庵が好きなんですか!?!』

『軍じ——ハア…通してください!』

…

「パパラッチってどーでもいいことで騒ぐんだね…」

グビグビと作法なんてカケラも無い動作でアイスココアを飲みながら店のテレビに向かって呟く

「な、なあーハル?」

「なーにオリオン?」

元気無いな…：やっぱりカフェじゃだめだった?でもここよりオシャレな場所にしようと思うとお小遣いオーバーするし…

「デートにや向かなかったかな…」

「でっ…俺より気が早——でもない!落ち着かねえし移動しようぜ!」

落ち着かないってなんで——あ

ふと周りを見回すと店内にいた人達に一齐に目を逸らされる…いや、正確にはオリオンから目を逸らしている。つまりはまあみんなオリオンを見てましたってことで…

「あ」

ナチュラルに会話してたから忘れてたけどオリオンの格好、半裸じゃん!

「…」

「…」

…

「服、買いに行こうか…」それまで霊体化してて

「ずっと霊体化するのが一番いいと思うが…」

く

F地区 とある洋服店前にて…

「似合ってる(と思う)よ!オリオン!」

「お礼とかいうよりも先に俺のサイズがあつたことに驚きを隠せないぜ…」ありがとな

正直あると思っていなかったが意外と彼のサイズに合う服は見つかった、水色の半袖Tシャツに…スキニー? って名前の…半ズボンみたいなやつ。(色は…なんていうのか…砂浜色?) あと服屋なのに何故かスニーカーも置いてあつてそれも買った、というか彼女らが買ってくれた

…分かりにくいがおリオンが先程『ありがとな』とお礼を言ったのは遙に対してでは無い

「俺はなーんにもしてないさ、礼ならマスターに言ってくれ」

「…まさかこんな序盤で他マスター&サーヴァントとWデートすることになるとは思ってたわよ」

掴みどころなく笑うランサーのサーヴァント、ヘクトールと困惑しながら苦笑するそのマスター、ルマス・プライマリ

彼女らと会った切っ掛けは単純、オリオン(霊体化)と一緒に服屋まで歩くその道中――

『よ。そこの嬢ちゃん、カッコいい男連れてるじゃない、彼氏かい?』

『…? えーと失礼ですがどちらさま…?』

『どうしたハル――ん? あ! ヘクトール!』

『え、知り合いなの? ランサー』

…と、そういう訳である

「じゃあ貴女聖杯戦争知らないの!」

「えつと…一応知ってはいるけど…その、細かいルールとか教えてくれると嬉しいな…」

向こうにとってはどうか分からないが少なくともこの遭遇は遙にとって幸運だった、何せオリオンと契約した(できた)にもかかわらず殆ど無知のマスターなのだ、勝ちだけにこだわるマスターなら真つ

先に彼女は狙われていただろう

「しようがないわね、良く聞くのよ?」

だが幸いにもルマスという魔術師もまた無知だった、知識としては知っていてもその状況がどれだけ千載一遇のチャンスだったかを理解できる経験が無かったのだ

そして――

「同盟?」

「そう!お互いギリシヤ神話のサーヴァントを使役し、かつこうしてどのおマスターよりも早く出会ったのよ?きつとこれも何かの縁よ!」

「うーん…どうしよ?」

正直同盟を組む事自体は大歓迎だ、私は聖杯戦争に対してあまりにも無知だし…

だがマスターとサーヴァントは二人三脚、そんな大事なことを私の一存で決めるわけにはいかない

「オリオンはどう思う――オリオン?」

「あっさりナンパが成功して浮かれてたのか知らないけど今のお前さん普通のサーヴァントじゃないからね?」

「あー…なんか違う感じはしてたんだがまさかグランドでの、それもマスターありでの召喚なんて今まで無かったからな…」

私とルマスさんを背にヒソヒソと何かを話している2人

もー、私たちそっちのけで何を話してるの…?

「オリオン!」

「のわっ!?あつ、ああ、どうした?」

「同盟!私は良いと思うけどオリオンは?」

「うん、あー、同盟ね？うん、良いんじゃないか？」互いに真名割れるし。

…ならいつか

「同盟の条件は？」

「この2組以外の陣営が全て敗退するまで互いへの攻撃禁止！シンプルでしょ？」複雑にすると面倒だし

「それもそうだけど自分のサーヴァントに確認はしたの？話し合ってからの方が良いと思うけど…」

「…？方針を決めるのはマスターでしょ？」

「うーん…」

どうやら彼女と私にはサーヴァントとの関係に対する認識が違うらしい

「…」

オリオンとルマスさんを交互に見ながら少しだけ考える

一緒になって戦う、とかはなさそうだから誰かを殺す危険は今のところなさそうだし…少なくともオリオンはランサー…ヘクトールさんのことは顔見知りであり、信用しているみたいだし良いかな？

「…その条件なら私は良いよ、オリオンは？」

「…ってことはどこかにビーストが来てるってことだよな…」

「ほぼ間違い無いでしょ。マスターにもちゃんと伝えておきな、仮に聖杯が欲しいだけだったとしても彼女には伝える義務があると俺は思うぞ」

まーたヒソヒソ話してる…

「しかしそれはなあ…「オリオンっ！」

「どわあっ!？」

「この2組以外の陣営が全て敗退するまで互いへの攻撃禁止、この条件で同盟を組むけどオリオンは賛成？反対？」



「賛成!!」超早口

食い気味に答えたオリオンに少しだけビクつきながらも、私はルマスさんと同盟を結ぶこととなった

「ありがとう!改めて…ランサーのマスター、ルマス・プライマリ!よろしく!」

「アーチャーのマスター、えっと…ハル・マトン。それじゃあまあ…よろしく?」

「んじや早速私の隠れ家に案内するわ!後で貴女のも見せてね!」

「隠れ家って言えるものじゃ無いけどね」あはは…

この後は互いに隠れ家の確認、そしてルマスに連れられて遥達は教会へ参加表明しに行った

あの子供神父やたら私の方見てきたけど顔に何かついてたのかな…?

そんなこともありながら遥とルマスは改めて同盟を結ぶのだった

…本来聖杯戦争で同盟を結ぶとなれば魔術的拘束力のある書面や術式等で契約するマスターが殆どだが…互いの無知が災いし、やったのはせいぜい握手程度であった、繋がりもない為遥がルマスの異常を感じ取ったのは事の起こった後。

翌日、遥の隠れ家であるビジネスホテルにて…

「のわ!?窓から入ってくるな…!?マスター!来てくれ、早く!!」

明らかに常時の様子では無いオリオンに慌ててトイレから手も洗わずに飛び出すと――

「な、なにこれ!?何があったの!?!」

「後で話す!嬢ちゃん頼む!マスターを助けてくれ!!」

両足が無くなって血塗れになったルマスさんがヘクトールさんに

抱えられていた

## 第32話 覚醒

愛玩の檻にて…

ダンダンダンツ

「ツグ…！」

「ええと、今何回目でしたっけ？」

まともに残っている建築物など殆ど無い、いわば崩壊した街…と言われても納得してしまえるような光景をさらに破壊しながら殺し合う2つの影

「もうすぐ3桁でしょうか…でもその甲斐あってようやく銃の扱いが様になってきましたねえ？」

事業や商品についてプレゼンするのは得意ですがそれは誰かに物を教える、とはまた別のスキル…

「——まだ立ち回りがちょっとだけ甘いですが♡」

硫酸を詰め込んだグレネードランチャー弾をアンダーバレルへ装填し、今にも崩れそうな鉄骨の根本へカービンライフル（H&K H K416）を連射して撃ち落とし、退路を塞ぐ

「ゼエツ…ゼエツ…ク…！」

「はいそっ！」

反対方向へ逃れようとする彼の進路へ硫酸弾を撃ち込み、彼の左半身を焼く

「あ…!?…ッ!!」

命中を確認し、距離を縮めながらカービンライフルからサバイバルナイフへと変更

こういう先生系はワタクシの分野ではありませんが…ザイルさんが本気で人類を根絶やしにするというのなら普通の人類だけでなく、

サーヴァントや魔術師も相手にしていくことになります。

しかしそれを目指す上で今の彼の戦闘スキルは致命的です、その時はダヴィンチさんの義手のバフも無くなるでしょうし

「オ、オオおおあ!!!」

ザイルは焼けた左手から持ち替えることなくリボルバーを構えるも、一瞬姿勢を下げてから繰り出されたコヤンスカヤの蹴りがそれを吹き飛ばす

そして――

グスツッ……

「あ”……”」

「はい、これで通算……いくつでしたっけ?……あ、137回目?もうけっこー死んでますねえ♡」

深々と腹部に突き刺さったサバイバルナイフからじんわりと赤い染みが広がっていく様子と周囲に散乱する彼の死体を恍惚とした表情で見渡しながらナイフを抜く

「さてザイルさん、今回の反省点はどこに――」

「ぐ、あ”ア”、あ……」

「……ってもう喋れる程の理性が残ってませんか」

まあこんだけ死んでて今まで持っただけで充分化け物なんですけど

「残り時間は30分と少しですが……獣堕ちの方が少しだけ早かったですかねえ」

ホントーに残念ですが彼の身柄はワタクシが預かって――

「ガアッ!」

……!?

彼の首に突き刺さるナイフ、だがそれはコヤンスカヤの持っているサバイバルナイフではなく、ザイルの持つコンバットナイフだった

「自分の首を…!?」「ハッ…やれやれ」

!!後ろに――

ボンッ

押し当てられた鉄の感触、反射で無理矢理避けると同時に対物ライフル、M82の銃弾が目のすぐ横を掠める

「ゼエッ！ゼエ…！しッ…こい、な…」

「ちよ、演技ですかさっきの？化け物も大概じゃありません？」ワタクシは大歓迎ですが。

ていうか自分にトドメを刺してリスポーン早めるとか、さらっとムチャクチャしてますし…

とはいえ流石の彼も息が上がってきている

この世界において肉体的疲労は存在しない、あるのは死ぬたびに侵食する恐怖、それによる精神の消耗

意思というか執念というか…

「…義手の、補助が無くなって、初めて…痛感した…そして、今理解した――俺の取り柄は戦闘能力でも、対魔術師の知識でも、無い…報復心から来る、執念、だけだ」

「へえ…？」

心なしか――いえ間違い無い…

愛玩の檻から染み込む恐怖に彼の精神は擦り切れる寸前。コヤンスカヤの目から見てそれは間違い無く、ザイル自身もそれには気が付いている

――だというのに

檻に招く前…ザイルにも彼方にもなりきれていなかったあの人間はここにいない

彼の精神だけを招いた結果でしょうか？まあそれも要因の一つで

はありましようが…

「ふふっ」

2丁のサブマシンガン（スコープオン）を展開し、左右から薙ぎ払うように前方に掃射、ザイルの逃げ道を塞ぐ——が。

「ッ…!!」

彼は銃弾を受けるのも構わず強引に距離を縮め、ナイフを振るう

「つと?!」

「ハ、ア!!」

間一髪、首筋狙いの一撃は回避したが彼の猛攻は止まらない

「逃がすか…!」

…!

リボルバーの発射音と右脹脛に感じる痛み。

撃たれた——

演習という名の虐殺の、お決まりだった流れがそこで変わった

「ゴホッ…く、ッッ!」

胸から血を流して崩れ落ちるザイルだったが、倒れ込む前にリボルバーの銃口を自身の頭部に押し付け——

ダンッ

自ら138回目の命を絶つ

「ちよ——」

「ルウアアア”ア!!」

瞬き程の合間も無く真横から振られるナイフ、それをコヤンスカヤは避けきれず——左目を失った

「くつ…と、ホント、ムチャクチャしやがりますねえ…!」

外の本体から分けられた分身とはいえ彼女は正真正銘、コヤンスカ

ヤ。普段の彼女なら『たかが人間に』ここまでされては黙っていられないだろう、しかし――

「ふ、うふふふ…」

彼女はそんな屈辱も忘れる程に、笑いが込み上げて来ていた

――見たい

「恐怖ゴとときに、止まっている暇は無い…!」

コンバットナイフとサバイバルナイフが相手の喉元をかき切ろうとして何度もぶつかり、わずかに火花が散る

檻の恐怖すら跳ね除ける彼の、人間への殺意、報復心…

「ふっふふ！人間如きが生意気言うではありませんか!!」

コンバットナイフをすり抜け、コヤンスカヤのサバイバルナイフが彼の手首に深々と突き刺さる

それが彼の生きる意味、人間を殺し尽くすことが彼の生きる理由

「うぐっ!!」

ほんの一瞬丸腰になった彼の頭の後ろに両手を回し、

「っしょっつ」

水道の蛇口を捻るように首を折る

「ふー、久しぶりにこんな技使いましたボウンツ

…まつたく、ホントにもう。

首のねじ曲がった死体の影から響く対物ライフル(M82)の発射音、そしてコヤンスカヤの腹部に広がる赤い染み

もし彼が人類を殺し尽くす、という悲願を達成した時…彼は何を理由

に？何を動機に？何を求めて生きていくのでしょうか？

ぐらりとバランスを失う身体へ、死体の影から現れた140人目の彼は眉一つ動かさずライフルの銃口をこちらへ向ける

「お前のおかげで俺は俺としてなり得そうだ、感謝する」

嫌味や嫌悪など微塵も無く、ただ感謝の感情だけが伝わってくる

何を今更感謝など、それをするのはこちらの方ですわ

契約当初は暇潰しのオモチャとしか見ていなかったマスター、グランドアーチャーとの戦いで恩を返すべき相手になった人間、そして今

全てを終わらせた後の貴方はきつと自身の意味を無くして絶望するのでしよう、泣き喚くのか気が狂うのか抜け殻になるのかは分かりませんが…

見たい、愛玩の檻の恐怖にも屈しなかった意思が自分自身の矛盾によって崩れ落ちるその様を。

「で、殺<sup>勝</sup>せば即戻れる、という認識でいいんだな？」

「ええもちろん！ワタクシはこの空間の鍵でありただの分身…本体にはなんら影響は<sup>ご</sup>ざいません♡」ささ、サクツと殺<sup>つ</sup>ちやって下さい

♪

それも1度や2度じゃ満足できそうもない、何度も見てみたい。お気に入り映画を巻き戻すように、ビデオカメラに残した思い出のように、何度も見てみたい

「…なら良い、外でまた会おう。それとこんなマネはこれっきりだ」分身でもお前を殺すのは気が引けるからな

そんなことを言っておきながら引き金に掛かる力、それがなんの躊



躊躇いも無い事が彼の性格を表しているようで、また自分に向けられた信頼の形の1つに見えた

胸に風穴が空き、分身としての存在を保てなくなっていく

——ああ、そうでした

最後に1つ、分身としてやらねばならないことが増えた

——よし、あとは本体が回収するでしょう

感情の保存、本体がここで何があったのか知るための記録。消え去る数秒前、分身の彼女は驚くべき速さでそれを空間に保存した

「ふふ…では…また後で」

「…ああ」

ね、ザイルさん…このワタクシは分身ですので本体を無視して言い切るのは気が引けますが…それでも言わせてもらいます

NFFサービス代表として、女として、神として、宣言します。

「もう絶対に手放逃しませんからね…♡」

コヤンスカヤが所持する戦艦内、医療施設にて…

「やれやれ、終わりか」

「ええ、終わりです。」まさかホントに勝つとは思ってませんでした。

カプセル越しにコヤンスカヤが呆れたように言う

…こいつはちゃんと本体だな

「戻ってきていたのか」

「ええ、ついさつき。…傷の具合はどうですか？」

「多少痛みはあるが無視しても問題無いレベルだ、身体の稼働に異常は無い」そっちはどうだ？

「準備は済ませました、あとは殴り込むだけですよザイルさん♪」  
「そうか…いや、待て」

そういえば何をするのかまだ聞いていないという事実を思い出し、  
問い詰める

残り12時間と少しで影月 彼方の問題を解決するワケだが一体  
どうするつもりだ…？

「それは移動しながらおいおいと、情報収集や仕込みをやったとはい  
え残り12時間で目的の敵と会敵しなければ全てパーなので。」ま、ワ  
タクシ達が街に出れば向こうからやってくるとは思いますが。

向こうから…？

「では隣の更衣室に新しい装備を用意しておきましたのでお使い下さ  
い♪」ワタクシはちよつと檻に用があるので…

すぐ戻りますね♪と言って消えるコヤンスカヤ

…ここに突っ立っていても仕方ない、更衣室で支度するか

決戦の時はすぐ近くに。

### 第33話 嵐の前の静けさ

Ｌ地区 スイーツ専門店にて…

「ん〜美味♪」シヤクシヤク

「ああ、美味しいな」ガツガツガツガツ

時計は午後3時ちょうど。愛玩の檻から出て1時間弱、俺はコヤンスカヤと共に以前来たスイーツ専門店に来ていた

「で？ただスイーツ食いにきただけじゃないだろ」ガツガツガツガツ  
「相変わらず食いつぶりいいですねえ…ま、普通に話すことでも無いですし」

（ここからは念話で話すぞ致しましょうか）  
分かった

無くなったストロベリーパフェの2杯目を注文しつつ、コヤンスカヤの話に意識を集中する

（…まさかパフェが生きがいとか言い出しませんかよね…？）

「はっ」

どういう、意味だ？

（失礼、こちらの話ですわ。ええー、今からやることですが…ぶっちゃけ夜中になるまでやることはありません）

これ以上勿体ぶらなくていい、残る時間で何をやる？

いい加減に教える、と手元のフォークを軽く指で弾いて彼女に催促する

（まー言っちゃあゴリラ…グラントアーチャーを排除します。…あ、グラントクラスについての説明は必要ですか？）

頼む

グランドクラス：大層な名前から大きな障害になりそうなのは目に見えるがその詳細を全くと言っていいほど俺は知らない

(かしくまりました！まずグランドクラスのサーヴァントを説明するにあたって通常のサーヴァントについての説明をさせていただきま  
す

ここで言う通常のサーヴァントとは個人に召喚され、万能の願望機である聖杯を勝ち取るためにマスターと共に聖杯戦争で戦う英霊を指しますが厳密にはこれが基礎ではありません)

「お待たせしました、ストームストロベリーです！」

「置いていてくれ」

「そんなに食べると豚に：アナタはなりませんね」

「ああ」

どうせ人類を滅ぼしたら食えなくなるんだ、今のうちに食っておく。で、続きは？

(スイーツの何がアナタをそこまで：コホン、英霊というものは個人に召喚できるようなものではなくこれまで戦ってきたサーヴァントは皆、個人が制御できるように型落ちした者です。)

型落ちしていない原型：つまりグランドクラスは決戦魔術『降霊儀式・英霊召喚』というものによって抑止力に召喚されます。

まー条件さえ整っていれば人為的に呼び出せるという例外はありますが)

抑止力？

(ええと人間を護るアラヤと世界を護ろうとするガイアというものがありました：ここを説明すると日が暮れてしまいますので人類or世界の滅亡を阻止しようとするこの星の意思だとお考えください)

星：地球が生きていますか？

流石にバカらしくなりパフエを食べる手が止まるが『概ね正解ですね』と真剣な表情をするコヤンスカヤを見て無理矢理納得する

(で、ここからが本題ですがグランドクラスが召喚される条件として『人類or世界の滅亡が迫っている』ことが挙げられます。

今回の場合は滅亡の危険のある…いいえ、ほっとけば滅亡確定の災害、ビーストを排除するためにあのゴリラが召喚されました)

「…」

パフエはまだ4分の1も食べていなかったが彼女の話聞くうちに自然と手が止まる

「…やれやれ」

召喚された時から世界を滅ぼす気だった、ということか？

(失礼な！ワタクシ、世界を滅ぼす気なんてサラサラありません！ただちよーつとだけ人類の皆様『で』遊びたいだけでしてえ…ああ、そういうえばこちらの名で名乗ったことはありませんでしたね)

「敏腕美人秘書タマモヴィッチ・コヤンスカヤ改め、どこまで行っても人類の敵、人類悪ビーストIV。愛玩の獣です♪以後、お見知り置きを」

ギシツ：

…っ！

そう言つてニンマリと微笑んだ彼女に一瞬見えたもの。人で言う白目の部分は真っ黒に塗りつぶされ、ナイフで縦に裂いたような金色の瞳が2つ、その黒の中で不気味に浮かびあがって俺を見た

檻の中で感じた侵食していく恐怖とは違う、それはまるで『得体の

知らない何か』から必死に逃げて個室に入り、唯一の扉に何重もの鍵をかけて閉じこもった後、不意に背中から首元へぬるりと手を回されたような悪寒。

「っ……………喋るな」

それを強引に振り払い、舌打ちして誤魔化しながら彼女を黙らせる（おおっとこれは失礼いたしました！ですが自己紹介くらいキチンと声に出して行いたかったものでして、お許しください！ご主人様♡）

「やれやれ…」

趣味の悪さはここから来てるのか——いや、お前の話はもういい、グランドクラスについての説明を再開しろ

（そのように♪…えー基本的に派遣されたグランドクラス、冠位サーヴァントは絶対に問題を解決できる数値で現界します）

解決できる数値…どういう意味だ？

言葉の意味が理解できず、パフェを食べながら説明を促す

（よーするに問題に対して最も適任な人材<sup>英霊</sup>を抑止力が選別して送り込んでくるってわけです。

今回で言うところのゴリラ…オリオンは伝承によれば生前『我が矢に仕留められない獣は無い』と豪語しており、またそれに見合った英雄でした

もちろんワタクシは獣として分類されますし、なによりワタクシの形成元の1つである玉藻の前は破魔の矢で討たれた伝承が残っています。

ええ、控えめに言って相性サイアクです

結果としてワタクシはあの夜彼の矢…おそらく対獣に特化した宝具を受けて大幅に弱体化し、今もなおそれが癒えていません）

「やれやれ…」

再びパフエを食べる手が止まる

確かに相性が悪い、英霊にとって伝承が能力の全て。長所にも短所にもなりえることは以前切嗣から聞いていたからそちらの方には驚きはしない、驚いたのはむしろこつち——

玉藻の前が元…つまり玉藻の前本人では無いがそれに近い存在、か。

正直バイクに乗って銃火器を振り回すコイツのどこに大妖怪の要素があるのかと聞きたいがそれを質問するのは今じゃなくていい、続きを促すべきだが…

「…しかし」

「ザイルさん？」

俺でも知っている大妖怪の玉藻御前、中国では妲妃とも呼ばれ、恐れられた超大物…それを元にして何故ここまでピンク一色にフザけ倒した性格破綻者が出来上がったんだ…？

「あはは、それ以上バカなこと考えるおつもりなら蜂の巣になるか愛玩動物になるか選んでもらわないといけなくなりますけどどうされます？」

「分かった、分かったからやめろ…やれやれ」

続きを頼む、と残り少ないパフエをかきこみながら言う

(…ま、いいでしょう。で、今回の目的はあのゴリラを消してワタクシの弱体化を解くこと、これになります)

おいコヤンスカヤ——

(分かっています、約束の時間は明日の午前2時ごろ…それまでにワタクシの権能を全て取り戻せば彼方さんの問題は解決できます)

ぶつちやけ万全の状態ならあの場で解決もできたんですが。と新

しく注文したであろうコーヒーを飲みながら彼女は言う

「…そうか」

「ならいい、で?どうやって戦う?」

「これを」

チャリ:とコヤンスカヤから渡された3つのアンプル、どうやら刺すだけで簡単に注射が行える新型の注射器らしい

「なんだこれは?」

(中にはサソリの毒がウンザリするほど詰まっていますのでウツカリ割らないようお気をつけを。早い話があのごりら、弱点の一つがそれです。

ワタクシも同じものを持ってますので隙を見て打ち込めれば大幅な弱体化は間違い無い、と思っただけでしょう。

もちろんサーヴァント相手なのでそんな隙は多いとは言えませんがワタクシの存在によりザイルさんがノーマークになる瞬間がどこかで必ず来ます)

…分かった

(恐らく冠位の資格はもう持ち合わせていないでしょうが脅威の存在であることには変わりありません…ま、逆に言えば――)

「それさえ消えればもう人類は終わりも同然ですけど♡」

「……だどいいがな」

「さ、マジメな話はここまでにして!夜まで時間がありますしい…デートでもしません?」

「やれやれ、こんな時にコイツは…」

「夜どこに行けばいいの把握しているのか?」

「W地区の中央公園、午前0時ちょうど…となっておりますわ」

「分かった」



…いや、いいか。仕事抜きでコヤンスカヤと過ごすのも悪くないだろう

自分自身心境の変化に驚きながらも、それを受け入れて席を立つ  
「決戦前の最後の息抜きだ。…映画でも観に行くか？」

「おお：娯楽の『ご』の字も無かったザイルさんが：ちよつと気持ち悪いですけど映画を観に行くのには賛成です！行きましょう♡」

嬉しそうにコヤンスカヤが指を鳴らし、即座に俺と彼女の服が休暇の時に着ていた服に切り替わる

「行くぞ」

「はいただきます♡」

その後は日が落ちるまで彼女と休暇の時のような時間を過ごすことになった、もちろん映画館以外にも様々なところを回ったが——  
やれやれ：映画はともかく、服屋はもう行きたくないな…

時間は流れ午後10時過ぎ…

J地区 米陸軍駐屯地 中央司令室にて…

陸軍駐屯地中央司令室…同建物にある対テロ特別捜査本部とは違い、普段静かなことが当たり前の室内は誰が何を言っているのか聞き取れないほど慌ただしくなっていた。

…そしてそれは停電によるものだけでは無かった

「クライム隊長ダメです、見つかりません！」

「捜索隊をもっと出せ！絶対に見つける！」

…くそ、甘かった！まさかあの傷で出て行くとは…！

——集中治療室にて寝たきりだったハル・マトンが失踪したのであ

る

## 第34話 全てを賭けた1戦

午後11時

J地区 米陸軍駐屯地 中央司令室にて…

「トール・マトンは!?」

最後にハル・マトンと話していたのは彼女だ、話を聞ければ――

「それが…停電の影響で電話回線がまだ混線しており連絡が付きません!」

「っの…!こんな時に!」

「まずい、まずいぞ!」

グランドアーチャー、オリオンがハル・マトンと契約を切ったのはオリオン本人から聞いていた、故にもう彼女は狙われないと人員を減らしたのが仇になったらしい

「クライム隊長!B地区にて避難所の人員が不足しているという報告が!」

「クライムさん!G地区及びL地区の病院で人手不足との報告が!捜索隊から2隊分、回させてください!」

「ぐ…!」

「どうする?どうすればいい!」

オリオンとの契約は切れているがザイルはそれを知らない、見つければ間違いなく殺される!これ以上、奴に殺戮を許す訳には行かない!

しかし停電によって混乱している市民を蔑ろにもできん、かくなる上は――

「…っ!捜索隊から3割、停電対応に回せ!捜索の指揮は俺が現場でやる!」

「了解!」

「停電対応の指揮はセイーン！お前が取れ！ここは任せるぞ！」

「セイーン准尉、了解。」

ええい、時間が惜しい！

机に立てかけてあった装備一式を引つ掴み、窓から飛び降りる

「!?クライムさん！ここは5階——「土方!!」

「もつと早く言いやがれ！」

アサルトライフルのサスペンダーを装着しつつ、土方の力を借りて着地。そのまま正門へ走る

「この際魔力消費に構うな！セイバーのマスターを探し接触次第報告しろ！俺は一番近い捜索隊の指揮を取りに行く！」

「分かった！」

なんとしてもザイルより先に見つけなければ……！

基地を飛び出し、大通りへ出る——その瞬間

「…っ!?クライム!!」

っ!!

咄嗟に急停止すると同時に魔力砲という呼び方が最も合っている光の玉が2メートル前の地面を抉り取り、爆発する

この…衝撃、覚えが——

「無事か!？」

「負傷は無い！それよりも——」

俺と土方の視線の先、見覚えのある2つの人影がふわりと降りてくる

「…本当にやるんだね、ノーアちゃん？」

「もち、ろん…ゼエ…ゼエ…悪い、けど！ザイルの邪魔はさせないよ！」

コンテナ置き場で一度会った2人。キャスターは以前見た時と様

子は変わらないものの、そのマスターの様子がおかしい

「…随分と分厚い皮を被っていたらしいな」

かろうじて人の形を保っているものの、身体の所々が欠損していたり胸部は抉れ、腹部には穴が空いたり人間として考えるなら生きている訳が無い状態だった。

「一瞬とはいえ…はっ…はっ…き、流石に乖離剣の直撃はマズかった…」 どうしよう、中々再生しない…

僅かずつ、だが遠目でも分かる程に、彼女の身体が再生している…  
まともな陣営じゃないかも、か…お前の言った通りだ、エナ！

だが彼女の正体がなんだろうと俺には関係ない！

「土方！」

「使え！」

交差するように互いに自分の武器を投げ渡し、戦闘態勢に入る

「まともに殺し合っている余裕は無い！撃退して先へ進むッ！」

「ああー！」

「行くよ、ダヴィンチちゃん！王様が来る前に終わらせる！」

「……………うん、分かった」

クライム&土方、キャスター陣営と交戦開始

）

同時刻

W地区 中央公園にて…

「ここが中央公園か…公園というかただの広場だな」

小学校のグラウンド程ある敷地、その中心に広がる大きな池と外柵沿いに立ち並ぶ木々…本来老若男女が訪れ、のんびりした時間でも過

ごすのだろうが停電中な上、時間が時間な為かこの場に俺とコヤンスカヤ以外の人影は無い

彼女が言うにはそろそろアーチャーが現れるそうだが…

「…」

「…？どうされましたかザイルさん？」

…これは聞いておくべきだろう

「アーチャーのマスターの対策は練っているのか？」

重要なことだ。少なくとも今の俺は影月 遙に対して特別な感情は無い。だがあの時、奴が目の前に現れただけで俺は戦闘を続行するだけで精一杯、トドメも刺せなかった

「…正直また目の前に現れたら俺は戦える自信が無い」

弱気になることなど今まで一度も無かったザイルであったが原因を自覚出来てない以上仕方ないことだろう。だがそう呟く彼に対してコヤンスカヤは特に悩む様子もなく言った

「彼女がアーチャーと共闘することはもうありません、ご心配無く♪」

「そうなのか？」

確信的に言い切るあたり、何か細工をしたと想像できるが…まあコヤンスカヤが言うなら間違い無いだろう

「あら…？」

「どうした？」

ふと何かに気付いたのか横を歩いていたらコヤンスカヤが首を傾げる

アーチャーが現れたのか？

「いえ、外からの情報を読んでいたのですがバースカーとそのマスターが戦闘に入ったようです、ですが今はワタクシ達に関係無いので

とりあえずこの時間を楽しみましょう」

「ああ、そうし——いや、楽しい時間は終わりらしい」

魔力よりも先に感覚器へと届いた異常な重圧に、視線は前方へと戻る

「…ですね」はあ、空気の読めないゴリラですねえ？

ドズン

20メートル程前、轟音と共に空から降ってきた1つの影  
改めて、その巨軀に2度、目を向ける

2メートルをゆうに超える巨軀に俺の胴回りほどありそうな手足、  
見ていると名状し難い感覚を感じる弓、そして全身から放たれる『絶  
対に殺す』と言っているようなオーラ。

それを直接向けられたのは俺で無いにも関わらず感じる威圧感  
生前アーチャーも人間だったということに疑問を持たせる

——が、萎縮している場合ではない

「…よお、また会ったな？」

そう言うが早いか彼の弓から2本、剛速の矢が飛んでくる

回避しつつコヤンスカヤはライフルを展開しつつ後退、俺は真横に  
飛んで避けてオートマチックのマグナム…デザートイーグルを構え  
る

やれやれ、いきなりだな

今の矢は2本とも俺を狙ったものではなく、避けるのはそう難しく  
は無かったがもし狙われたらひとたまりもないだろう

「マスターは不在らしいが、さて…」

マグナムに加え手元には閃光弾4個に元から持っていたマグナム  
の弾が20発、そしてコヤンスカヤが用意した『NFF』という文字

が彫られた回転弾倉式のグレネードランチャー、アーウエン37とそれに対応した炸裂弾が装填弾含め16発、そして昼間受け取ったサソリの毒入りのアンプルが3つ。

はつきり言つてかなり心許ない、ライダー戦とは違いマスターを殺せば終わる戦いで無い上にサーヴァントの格が今までで最強だ

(じゃーザイルさん♪フオロー、お願いしますね♡)

だと言うのにコヤンスカヤは余裕の表情でバイクを展開、アーチャーから距離を取りつつ弾丸、爆弾を撒きまくる

「…よし」

信用するぞ…!

コヤンスカヤを追おうと早速俺に背を向けるアーチャー目掛け、挨拶代わりに炸裂弾を撃ち込む

「ぬあ!？」

が、無防備な背中に直撃したはずの炸裂弾は彼を少しよろけさせただけでダメージが入っているようには見えない、サーヴァント相手に現代兵器が干渉できただけでも凄いことだが…

「…まったく!後でたつぷり相手してやらあ!首洗って待ってやがれ!」

そう吐き捨て、彼女のバイクを追っていくアーチャー

やはり無駄か

(ザイルさん違います!弓です!弓を装備した腕を狙って下さい!)

弓?…!…!そうか!

「分かった『レオレオ!動体視力及び両腕力強化!』」

コヤンスカヤからグレネードランチャーと一緒に受け取っていたミニカーのようなバイクを放り投げ大型バイクを展開、アーチャーの



後を追う

瞬き程の一瞬で3人全員が中央公園を飛び出し、人のいなくなったゴーストタウンでのチェイスが始まった

「つの、チヨロチヨロしやがつて！」

視界が霞みそうな風圧の中、彼の弓が一瞬光る

…!

攻撃のため一瞬速度を緩めたアーチャーに並び、左手に構えた弓目掛けて炸裂弾を撃ち込む

「うおっ!？」

ダメージは無かったものの、放った矢はあらぬ方向へと飛んでいき、付近の建築物を抉り取った

(冠位の資格もマスターも失った今、彼は普通よりメツチャ魔力持つてるだけの型落ち英霊です！その調子で攻撃を！)

いずれガス欠を起こします！と念話で高らかに言うコヤンスカヤだがこっちはたまったものではない

「邪魔すんな!!」

っ!?!クソ!

象を1発で殴り殺せそうな棍棒のフルスイングが迫り、回避する為にはバイクを捨てるしか無かった

自らの足で走る英霊を小回りの効かないバイクで追いかけるのだ、反転されればこっちが危機に晒される

まずい！空中で身動きが――

「とおーっ！」

迫る2発目の殴打はバイクごと突っ込んできたコヤンスカヤによって妨害され、命からがら着地する

俺は助かったがコヤンスカヤと奴の距離が近すぎ——いや

「終わりだ！」

「つと!？」

「ここだ！」

『オリオン・オルコ「ウリイヤア!!!」』

全身の力を込めてサソリ毒のアンプルをアーチャーの腕に突き刺した

「んなもん——!?!」

通常のサーヴァントはおろか、魔術師にすら通用しそうに無い毒だが、それを入れられた彼の顔色がみるみる変わっていく

「てめえ……!?!……ぐ、あ……!?!」

効いたのか!

(まだです!)

「ぬ……!?!う、おおおおお!!」

再び迫る棍棒打撃、だが先程の一撃と違い明らかな失速が見えた

「ッ!!」

ドンツ

掬い上げるように振られた棍棒を身を振って避け、続けて放たれる2発目をマグナムの反動を利用して後方へ跳躍、回避する

「逃がすか!」

が、ここでアーチャーは初めてザイルを脅威と認識したらしく、矛先を変えて彼へ向けて弓を構える

——しかしその弓から矢が放たれることは無かった

しゅん…

聞き覚えのある鈴の音が暗黒の街に静かに響く

「…?」

「今の音は…」

ライダー戦の時と同じ――

『出雲に神在り 審美確かに 魂に伊吹を』

一帯の空気が変わる、周囲は暗いままにも関わらず何もかもが鮮明に見える

あれは…!

アーチャーの後ろ…後方約30メートル程の場所にあるアパートの屋上に彼女は居た。あの時と同じように服装は青い巫女服のようなものを身につけ、今回は空飛ぶ鏡(?)を自身の周りに侍らせている

『山河水天に天照す 是自在にして禊の証』

ゴツゴツのアスファルトだったハズの地面には巨大な鏡と見間違えそうな水が見渡す限り広がっており、周囲には8つの鳥居(?)が俺とアーチャーを取り囲み、一定の距離を保って回っている

おいコヤンスカヤ!

何かやる気らしいがコヤンスカヤの様子が目に見えておかしい、明らかに無理をしている!

(詠唱中は動けません!死ぬ気であるゴリラの足止めを!)

やれやれ、カンタンに言ってくれるな!

「クソツタレ!ここにきて宝具かよ!」

と、そこでコヤンスカヤに反応したアーチャーが再びこつちに背中を見せる

もう一本…!

2本目のアンブルを取り出しつつ閃光手榴弾を投擲、弓に手を掛け

るアーチャーの背後から思いっきりアンプルを突き立て――

「そう何度もくろうかよー!」

巨体に見合わぬ動きでアンプルを避けたアーチャーが、小さい家なら一撃で粉々になりそうな回し蹴りを放つ

「しっ!?!」

避けられない――

ゴシヤツ…

「う”あ”っ…!!?!」

アンプルが碎ける音、そして身体中から不快な音を響かせながら路上駐車されていたトラックに叩きつけられる

ぐ、そ…!!

「身体、が…」

「もう部外者とは見なさねえ、そこでくたばってろ!」

揺らぐ視界の中、アーチャーが遠ざかっていく…

コヤンスカヤの方に…!!

『名を玉藻鎮石 神宝宇迦之鏡也』

「射角は捉えた! 我が矢の届かぬ獣はあらし!」

『水天日光天照八野鎮石』

ドクン

!!!

詠唱が終わると同時にぱしん、と鏡が水面に叩きつけられた瞬間。俺の身体がハネ上がった

「ッ!!」

トラックにめり込んだ身体を強引に振って脱出し、アーチャー目掛

けてグレネードランチャーを撃つ！

「っ?!? テメエどうやって…?!?」

詳しいことは分からない、恐らくコヤンスカヤの宝具の影響だろう。死んでもおかしくなかった傷は全て完治、その上まともな魔術回路が無い俺にも分かるほど身体に魔力が満ちていた

これなら行ける！

『レオレオ！全ての身体強化全開！』

「のっ…野郎！」

今まで聞いたことがないような音…まるで金属を高速で擦り合わせたような高音が義手から響く、理由はもちろん無茶な使い方をしているからに他ならない。普段なら俺の身体が持たないだろうが――

（元は…死者すら蘇らせる宝具です…このまま、挟み撃ちに…!）  
分かってる！

コヤンスカヤがこっちに向かって確認しつつ、3本目のアンプルとグレネードランチャーを構え、走る。

「うおおおおああああ!!!」

「がああああああ!!!」

放たれる矢を避け、棍棒をかわし、その剛腕から放たれる殴打を炸裂弾で跳ね返して――

「お前は！いい加減――」

「ここで退場してくださいしー！」

前方から俺、後方からコヤンスカヤが、ほぼ同時にアーチャーの胴体にアンプルを突き刺した

「ぬ…ぐ、ああ…!!!」

崩れ落ちるアーチャーを見ながら後退、コヤンスカヤも距離を取つ

たらしい

「今度こそ――」

「――れるか」

「ちよ、ちよつと冗談ですか!?!」

「コイツまだ…!」

「構えろ!」

「終われるかああアア!!」

もはやどつちが獣か分からないような形相で突進してくるアーチャーをギリギリで回避する

「おい!こいつはサソリの毒に弱いんじや無かったのか!?!」

「間違いなく、効いてます!このまま自滅するまで…耐え…!」グラッ  
「コヤンスカヤ!」

強化を足に集中し、ぐらりと揺れる彼女の身体を咄嗟に抱きかかえる

やはり相当無茶をしていたらしい

「ゴホッ…!ゼエ、ゼエッ!うおりゃあ!!」

「くそつたれが!」

苦し紛れに閃光手榴弾をアーチャーに投げつけ数秒稼ぐがそれまで。耐久勝負は俺たちの負けだ

「魔力供給だ、血を吸って転移しろ!どこでもいい!これ以上は戦えない!」

アーチャーのバックには信じがたいが女神が憑いているらしい、俺たちが離脱すれば解毒される危険があるがそんなことを言っている場合ではない

「…期待、してたのですが、時間切れのよう…転移、します…!」

「…!?くっ、そ…!待て…!」

こちらの逃走の意思を感じ取ったのだろう、数撃ちやあたるとでも言ったように当たりを付けて矢を放ち始める

急げ！

(分かってますよ……準備OKです！)

よし、ひとまず体制を立て直す！

『トライスター！身の程知らずの――』

「――」

は？

全く予想していなかった声、俺たちが気付かなかったのか彼女が隠蔽をしていたのかは分からない、だが確かにそこにいた  
とうに限界を迎えているハズの身体を酷使し、月女神の力を纏った人間が、黄金の弓をこちらへ向けて引き絞っている

見間違えるハズがない、彼女は――

「遥!?!」

『プリモアモーレ  
少女の愛矢!』

第35話 幕間 影月 遥（1）

18年前

???にて：

「…」

お前のせいで。

どうして戻ってきたの。

消えてしまえ。

死んでしまえ。

ああ、また――

お願いだから消えて。

お願いだから死んで。

消えて、消えてよ、消えろ。

死んで、死んでよ、死ね。

何度も聞いた母親の声、その心無い言葉は私に向けられたものではないにも関わらず――いや、自分に向けられたものではないからこそ、痛いほど心に突き刺さる

「やめてー!」

靴も脱がずドタドタと居間へ向かい、耳を塞いでうずくまっている  
彼方を抱きしめる

「う、あ…?…遥?…帰ってたの…?…」

フラフラと虚ろな目で母親…影月<sup>えいづき</sup> 此方<sup>こなた</sup>が『おかえり』と力無く言

う



「お母さん！どうして彼方を虐めるの!?彼方はなにも悪いことしてないのに！」

…お母さんは私には優しくかった、いや——彼方以外の全てに優しくかった

「それは、だって…彼方は遥と違って人間じゃないのよ…！化け物じゃない！」

「それは目の色が赤いから!?近所の男の子に怪我させたから!?喋らないから!?そんなの私だって同じだよ、私も目が赤だし、それにそういうことする時あるもん！」

妹を抱きしめる両腕からは抑えようの無い震え…怯え、畏怖の感情が伝わってくる

妹が何をしたというのか、私には優しくして彼方には辛く当たるその理由が分からない

「っ…お母さんは、少し休むわ…」

もうずつと着替えていないワンピースの生地を握りしめ、苦虫を噛み潰したような表情でお母さんは部屋を出てすぐそこにある洗面所に姿を消した

「…お母さん」

母親の嘔吐する声音が廊下を介して耳に届く

…また掃除しなきゃ

気を持ち直して妹の顔を見る

「彼方、大丈夫？」

「う、うん…へいき…どこもケガしてないから…」

当然『平気』なんて言える様子ではなく、私は涙でぐしゃぐしゃになった彼女の顔をハンカチで拭きながら彼女が眠ってしまうまで、ずつと背中をさすっていた

「…寝たかな？…うん、よしよし…」

母が彼方を嫌っているのは見ての通りだが…だからといって彼方が母に直接的な傷害…暴力を加えることは一度として無かった。それだけはまだ救いだったが…同時に違和感でもあった

「お母さん…」

以前から感じていた母親の違和感。母親の彼方の嫌いっぷりはおよそ普通ではない、顔を見ただけでさつきのようなことが毎度のように起きる。——にも関わらず母は手を上げようとはしない、振りかぶることはあつてもすぐに引つ込める

もちろん彼方が少しでも傷付かないのであれば遥にとつて喜ばしいことなのだが普段あそこまで言葉で憎しみをぶつけている母親が握った拳をあつさり戻すのが不思議だった

——そう、この時はまだ『お母さんも流石にそれは堪えてくれてる』と思うだけだった。

く

ある夜のこと…

ん…

ふわりと身体が持ち上げられる感覚、と思つたらすぐに降ろされる眠りたい身体と脳を無理矢理覚醒させ、目を開ける。すると飛び込んできたのは——

え…!?

「…けほっ……あ…」

「はっ、はあっ…！もう、限界…！今、ここで、死んでちょうだい…！」

普段の虚ろな表情とは違う、生気のもつた顔の母親が寝ている彼方の首を絞めている。彼方も何故か抵抗していない

それを理解した瞬間、眠気も完全に吹っ飛び、私は飛び起きた  
止めないと――

「お母「ひっ!?!」

声をかけるよりも早くお母さんの手が彼方から離れる

「…お母さん?」

月明かりで照らされた母親の目にはハッキリと恐怖の色が浮かんでおり、震える身体を押さえつけながら後退りし始めた

「いや…!嘘よ、うそ!殺す気なんて無かったの!だ、だってほら!途中で止めたじゃない!」

涙を流しながらまるで見えない何かに懇願するように叫び出す母親

まさか――

「彼方っ!!」

最悪の事態が頭をよぎる

それだけは――

「彼方!彼方大丈夫!?!」

「……………」コク

仰向けになったまま頷く妹を見てひとまず安堵する

生きてた!良かった…

「は、遙!?!何してるの!?!逃げなさいっ!」

と、そこでようやく母親が遙が起きているのに気付いたらしい

「お母さん…!自分が何をしようとしたか分かってるの!?!」

この時は母親が何に怯えているかよりも、彼方を殺そうとしたことに対する怒りの感情の方が上回っていた。

「お母さんは遙を守ろうと――ヒイツ!?!や、やめて…!もうしないか

ら……！」

家具につまづくいて転ぶのも構わず後退りを続ける母親、その視線の先は目の前で横たわっている彼方——ではなく、その少し上を向いている

「お母さん一体何を「この蛇が見えないの!?!早く逃げなさい!山から離れてどこか遠くに——あ……や、め……来ないで、許して……ごめんなさい、ごめんなさい!ごめんなさい!!」

見えない何かに怯える母親に遥はなんと声をかければいいのか考えていたが数秒もしないうちに耳をつく音がして我に帰る

「いやあああつ!ザイルつ!たすけてザイルつ!!」

あの痩せ細った身体のどこにそんな力があつたのか、母親は体当たりで縁側のガラス戸を突き破り、腕や足を破片で切りながら外へと飛び出して行ってしまった

いくら彼方を殺そうとしたとはいえ実の母親、探しに行こうかと思つたが彼方を置いていくわけにも行かない

しばらく悩み、とりあえず明るくなってから教会や学校に掛け合つて一緒に探してもらおう、と結論を出した

「ごめんね彼方……怖かったよね?次はちゃんと守るから……今は目を閉じて、ね?」

「……………うん」

まだ僅かに震える彼方の頭を撫でながら布団を被せる

何があつても……私はあなたの味方だから……

子供の自分が情けなかった、近くに居ながらできることと言えばこうして頭を撫でたり一緒に遊ぶくらいしかできない自分が。

「早く……もつと大きくなつて彼方を守るように——っ!誰!」

背後に感じた気配、一瞬お母さんが帰ってきたと思つたけど私より

後ろに家の出入口は無い

「…?」

振り返ってもそこには壁があるだけ、見える限り何も無いし誰もいない。——けど

「ふふふ」

たしかに私はその声を聴いた

「じつに ゆかい」

私の知らない声を。

…

…そこからはどうやって朝まで過ごしたか覚えていない。

眠ってしまったのか、朝まで起きていたのか、気付いたら外は明るくなっていた

お母さんは…あれ以来帰ってきていない、帰れない。わざわざ禁足地まで搜索してくれた教会の人達は言葉を濁していたけれど、その対応はお母さんがどうなったのか理解するには充分すぎた

「…」

その日、私と彼方は互いに唯一の家族になった。

）

時間は移り変わりオリオンとの契約解消直後…

J地区 米陸軍駐屯地 医療棟にて…

「落ち着いた?」

「まあ…うん、なんとか」

拭いても拭いても溢れていた涙がようやく収まり、気分も落ち着いてきた

ならばヨシ!と笑うお姉ちゃんだったがその表情にはどこかぎこちなさが浮き出ているように見える

「…何かあったの?」

「何かあったの?…つてそりやそうでしょ!妹が死にかけたんだよ!!」  
がおお、と怒るツールに悪いと思いつつも言葉も言葉を遮つてもう一度質問する

「それ以外に、さ?…何かあったんでしょ?」

そう言う彼女は一瞬黙り込み、

「…分かる?」

そう短く呟いた

「なんとなく」

「うん…うん、そっか」

頷きながらもまだ迷っているのか目をつぶって唸るツールだったがやがて決心したように口を開いた

「…さつきね、家に魔術師が来たの、多分聖杯戦争関係者。」

「え!大丈夫だったの?」

「それは大丈夫、参加者じゃ無かったから」

…?…教会の人なら教会の人だと言うだろうし…じゃあその人は一体…?

「その人が教えてくれたの、遥がここに居ること、死にかけたこと、そして——このままじゃグランドアーチャー…オリオンが災害の獣に殺されるってことも。」イチから全部ね

っ！

「グランドアーチャーという単語に一瞬困惑するも、直後の言葉に思考がそこに集中する」

「オリオンが…殺される？」

「ビースト…人類悪コヤンスカヤは犯罪組織集団ウルフルズリーダーのザイル・ニツカーと共謀してオリオンを殺す気よ、カウンターで本来絶対に勝てるハズのグランドクラスがビーストに敗北するようになることがあれば世界は間違いなく終わるわ」

「ま、待ってよ！そんないきなり色々言われても！グランドクラスって何!？」

「彼には使命がある、それは分かってたんでしょ?…早い話彼は、彼だけは聖杯を勝ち取る為ではなく世界を護る為に召喚されたの」

「オリオンの、使命…」

「たしかにそれは分かっていたつもりだった、でも——」

「ビルの屋上でオリオンの宝具によってズタズタになっていた女性を思い浮かべる」

「だとするとあの人がコヤンスカヤ…?耳と尻尾以外は どう見ても普通だったけど彼女が世界を滅ぼすの…?」

「回りくどいのは嫌いだから単刀直入に言うわね、遥」

「う、うん」

「あなたの中には月女神アルテミス力が残置されているの、その力を使って不意を突けば今のコヤンスカヤなら間違いなく倒せる、幸いビーストがどこで仕掛けるかも分かっているからあとは力だけ。だから——その力を私にちょうだい」

「え?えつと…」

…とりあえず情報を整理しよう

「そんな細かいことまでその魔術師が…？一体誰なの？」

「ごめんね、いくら遥でもそれは言えない約束なの。『情報を提供する代わりに正体について絶対に口外しないこと』それが魔術師の出した条件」

破ったら私が死ぬのよ、ごめんね？と頭をかくツールに遥も追及をやめて次の質問を投げる

「月女神アルテミス様の力が残置されているっていうのは？」

「…これも聞いた話だけど遥、あなた死んでもおかしくない重症だったってこの人の誰かに言われなかった？」

「それは、言われたけど…」

やってきた医師、看護師が口を揃えて『奇跡』とか『生きているのが不思議だ』とか言ってた記憶がある

「死んでもおかしくない、じゃないの。死んでなきやおかしい状態だったのよ」

「え」

それって…

「ここに魔術に精通した人間が居なかったから誰も気付かなかったみたいだけど…今のあなたは神の気配…神性を纏ってる」あまり強くは無いけどね

「…」

神の気配、と言われてもよく分からないけど確かに自分の中に自分以外の温かい何かがあるのが集中すると感じ取れた

「その力を私に譲って欲しい、そうしたら後は私がビーストを倒す。それで全部終わりよ」

「…譲るって、どうやって？」

「力を形にして身体から取り出して私に打ち込む、多分金の…いえ、銀



の弓矢として出てくると思うわ」

「…」

「酷かもしれないけど時間が無いの、今ここで月女神の力を抽出する。心の準備はいい?」

「待って」

ベッド横から顔を覗き込むお姉ちゃんに私は最後の疑問をぶつけた

「もし月女神の力を使ったら…どうなるの?」

「……………さあ? 神様の力なんて使ったことが無いから分から「ちゃん」と答えて」

目を逸らそうとするトールの頬を痛みの響く両手でがっしりと掴む

「……………祝福も受けてない、寵愛もされてない人間が使ったら…間違いなく死ぬわね」

「…っ! 最初から死ぬ気だったの!」

「私だって死にたく無いわよ!! でも他に方法が無いのっ!」

限界が来たように怒鳴るトール、その目は涙で潤んでいた  
「じよっ…」

冗談じゃない…! これ以上家族を失ってたまるもんか!!

「あるよ、方法…祝福されてればいいんでしょ!」

それならお姉ちゃんよりも私が――

「その身体で何が出来たのよ? あなたには妹を助けるっていう目的があるでしょ! 世界なんでもの背負う必要は無いのよ!」

「そんなのお姉ちゃんだって同じ――ゴホッ! えっ ほっ…!」

興奮しすぎたせいか身体の痛みが増し、喉の奥から血が溢れ出る

「ああもう！言わんこつちや無い！誰か呼んでくるから大人しくしてなさい！」

「…」

「聴こえた!?もうっ！」

「…うん」

来た時と同じようにドタドタと音を立てて病室から出て行くお姉ちゃんを尻目に身体へ力を込める

「…ッ」

…もの凄く痛い、けど――

「はっ、はあっ…く…い…」

動ける

身体に付いている医療機器(?)を外し、お姉ちゃんが置いていったコートを羽織り、ベッド下の自分の靴を履く

「…オ里昂」

行かないと…

満身創痍の身体を引きずり、窓に手をかける

ここが1階で良かったと思いつつながら窓枠を乗り越える

ドサッ

「~~~~ッ!!!」

着地に失敗して全身に激痛が走る

――痛みなんかどうだっていい、立ち上がる。立ち上がれ、立ち上がらないと…！

「…う？」

コートの中からこぼれ落ちた1枚の紙、そこには綺麗な文字でこう書かれていた

『明日の午前0時0分 W地区 中央公園』

この場所に…ビーストが…！

紙を握りしめ、立ち上がり、歩き出す、フラフラと頼りなく。それでも確実に前へと。

「はっ、はっ…」  
時間までほぼ丸一日あるとは言えこの身体じゃ移動に時間がかかる

…急ごう

### 第36話 身の程知らずの少女の愛矢

G 地区 路地裏にて…

グ…!

痛む身体を動かし、路地裏に逃げ込む

「はっ…はあっ! あ” …!」

黒ずんだ壁に背中を預け、大通りの様子を伺う

「何か変わったことは?」

「特に報告すべきことは何も…強いて言えば明かりが欲しいですね」

軍人：恐らくクライム・アルバートの部下であろう2人組が懐中電灯を持って何かを話している

「停電とはな…まあそれは置いとけ、司令部からの情報だ、ハル・マトンという例の傷病者が病棟を脱走したらしい、治療もロクに済んでおらず危険な状態という

わざわざ封鎖中のこちらに来るとは思えないが基地は目と鼻の先だ、一応覚えておいてくれ」

「了解です、班長」

「…」

基地を出てからまだ30分も経っていないというのに脱走したことを感づかれたらしい

いや当然かな…お姉ちゃんが居たし…

…そろそろ移動しないと――

「ん? アナタそこで何をしているんですか?」

っ!

さつき会話していた人達とは別の人の声に振り返る

「ここは封鎖中で…うん!?!キミもしかしてハル・マトンか!?!」  
「まずい!逃げないと…!」

「無茶な力を込め、貫くような痛みも熱さを堪えて走り出す  
「待ってくれ!」」

「が、瀕死の一般人が鍛え抜かれた健康な軍人から逃げられるような  
道理は無い」

「離してください!私には、やらなきゃいけないことが…!」

「腕が碎け散りそうなのも構わずデタラメに振り回す」

「暴れないでください!これ以上無理をしたら本当に——」

バシッ

「う…!?!」

「私を掴んでいた力が急に抜けて目の前の彼は崩れ落ちた、どうやら  
気絶したらしい」

「でも腕が当たったとかそういう訳じゃない、彼を気絶させたのは…」

「はあ…ボロボロですね、影月 遥さん?」

「するりと現れたのは白いロングコートを羽織った女性だった、暗さと  
フードで顔は見えないが声の感じからかなりの美人であることが  
伺える」

「あなた、は?」

「…情報提供者とだけ言っておきます、それ以上の詮索は無用です」

「無愛想にそう言うとな彼女は懐から錠剤のような物を取り出し、遥に  
差し出した」

「一時的に痛みを抑え込む薬です、とはいえダメージ自体を無かった  
ことにするわけではありませんので身体の管理は今以上に気をつけ  
てくださいね」

「あ、ありがとう…んぐ」

？  
ということはこの人がお姉ちゃんの言つてた情報提供者なのかな

もらった錠剤を飲むと身体を焼き尽くす勢いだつた痛みが急速に  
落ち着いていき、筋肉痛とさして変わらなくなつていた

「礼はいりません、こちらとしてはコヤンスカヤを排除してもらうま  
で倒れられては困りますので。動けますか？」

「うん、大丈夫、です」

足回りに不快感を覚えるほどの違和感を感じるものの、痛みが無い  
というだけで歩き易さはかなり変わる

…行けそうだ

「大丈夫そうですね、目的地まで護衛します」

こうして私は謎の女性に連れられ、闇に包まれた街をゆくことと  
なつた…

く

W地区 とある民家にて…

そして着いた先は小綺麗な一軒家、生活感からつい最近まで誰かが  
使っていたことが分かるが今は空き家のようだ

「ここがあなたの家？」

「隠れ家の1つです、とりあえずソファかベッド…どこでも良いので  
横になって下さい」コートはこちらに。

言われるがままコートを預け、奥の寝室に入つてベッドに寝転がる  
…もう薬の効果が切れてきたのか身体が若干痛くなつてきた

「具合はどうですか？」

「薬が切れてきたみたいでちよつと辛いかな…」

「乱用すれば効かなくなります、我慢してください」代わりにこちらを

どうぞ

薬の代わりに貰った栄養剤のジュースを一口含む

うええ、苦い…

「しかしこうして見ても未だに信じられない、貴女からは確かに月女神アルテミスの神性を感じます。」

顎に手を当てて首を傾げる女性からは疑問や不明瞭な情報から来る違和感、不快感よりも興味をそそるような感情が感じ取れた

正直なところ、オリオンと契約したとはいえ何故月女神アルテミス様が私を守ろうとしていたかは分からない、私もそれには興味があるけど…

今はそれどころでは無い、と考えを振り払う

「何故そうなったのか探るには時間がありません、どちらにせよ我々は貴女に宿るその力に頼る他無いのです」

「…?」

我々…?

「コホン、私がこちらに居られるのもあまり長くはありません、手短かに説明と物資の配布を行います」

自分自身を急かすように武器や薬といった物資をコートの内側から取り出し、近くのテーブルに並べていく女性

…素朴な疑問なんだけど、どっから出してるの…?

最初に貰った薬と同じ物（2錠）に赤いフレームのシンプルなメガネ、小さな何かのリモコン、そして明らかにコートの内側に収まりきらないような大きさの黄金の弓が床に並ぶ

「薬については仮眠の前に1錠、狙撃前に1錠飲んでください」

「分かった」

「こちらのメガネは視覚補助、遙さんは片目がありませんので奥行きを感じ取ることが難しい状態…狙撃においてそれは致命的ですのでそれを補助するものを配布させていただきます」掛ければ勝手に発動するのでご心配無く

：ベッドの上からよく見てみるとメガネにはフレイムだけでレンズは入っておらず、パツと見た感じは伊達メガネだが魔力を感じるあたり礼装の類だろう

「こちらのリモコンは押した使用者の身体や魔力、気配や殺気などを外部から完全に遮断させるものです。

しかし効果はもって10秒強な上に使い捨て…使用は慎重にお願いします、内部から外の状況はしっかり見れますのでそこはご安心ください」

確実に不意を突けと言わんばかりだ、見た目はただのおもちゃだが中に魔力が詰まっているのが分かる、これも礼装らしい

「最後にこちら、黄金の弓です」

「そのまんまだね」

「重量軽減以外の魔術的細工はされていませんが月女神アルテミス之力を行使するのなら金か銀の弓が最も適しているでしょう」

そっか、確かアルテミス様って金の弓矢を持ってて…あれ？銀の弓矢だっけ？

若干記憶があやふやな私をよそに女性は説明を続ける

「今のあなたならこれに少し魔力を込めるだけで月女神の力を矢として放つことができるでしょう、これで私からの説明は終わりです。…そして最後に1つだけ質問させて下さい」

無愛想だった表情が見かけは変わらずに真剣な、緊張を持ったものに変わる

：表情はフードで見えないままだけどそれは分かった



「…月女神アルテミスの矢を放てばほぼ間違いなくあなたは死にます、魔力行使に身体が耐えきれないか…それよりも早く月女神の呪いによって自壊するでしょう」

人間が神の力を行使するとはそういうことです、と付け加え少し間を置いて彼女は言った

「それでも…あなたは射ちますか？まだ大人になったばかりで人生がこれからだというあなたの全てを…捨てるつもりはありますか？」

明確な言葉は出てこなかったが『嫌ならやめても良い』と女性は私に言っているのは間違い無かった

…正直、彼方という心残りはある、けど――

「あの子がまだどこかで生きているのなら、私が命を投げ出して世界を救う道理は充分あるよ…射つ、絶対に」

「……………決断、ありがとうございます、我々はあなたに救われました」  
深々と頭を下げる女性に『まだ救ってないよ』と愛想笑いをし、大きく深呼吸する

「時間までまだ余裕があります、今のうちに仮眠を取っておくと良いでしょう」

「うん、そうする」

貰った薬を1錠飲み、目を瞑る

「あなたの戦いに同行できないことをお許してください、私は…そろそろ行かなくてはなりません」

「――あの」

フードを深く被り直し、玄関へと向かう女性を私は咄嗟に引き留めていた

「はい、なんででしょうか？」

彼女は詮索無用と言っていたけど、こうしてこの人と会話するのは

これが最後の気がし、意を決して私は聞いた  
「…あなたは誰？」

正直回答拒否されるかはぐらかされるかのどちらかだと思っ  
たものの、答えは案外あっさりと返ってきた

「…私は…かつてザイル・ニツカーの部下だった女。…それだけです」  
彼女はそれ以上話すことは無いと踵を返し、玄関から出て行った

）

「ん…」

窓から差し込む月明かりに目が覚める

時間は…23時28分、目覚まし時計が鳴る寸前に目が覚めたら  
しい

時計の電源を切り、痛む身体を起こして手探りでテーブルの上の物  
資を取る

黄金の弓って言っていたから重いのを想像していたけどそんなこ  
と無かったな…

思い出してみると重量軽減の魔術がどうとかって言ってたから多  
分それだろう

納得して人生初となる眼鏡を掛け、貰ったリモコンと薬をコート  
のポケットに入れる

「おお、すごい…」

月明かりの差す場所以外何も見えなかったが眼鏡を掛けた途端に  
一気に視界がクリーンになる

「うん、行けそうだ」

あとはビーストが現れるのを待って――

ドズン

「!」

そう遠く無い場所から聞こえた何かが落ちる音、それを聴くと同時に私は直感で魔術を行使していた

「聴力強化…」

静かに魔術を起動させて耳をすませる

…

『よお、また会ったな?』

「あつ!」

オリオン!

まず聴こえたのは何度も聞いたオリオンの声、直後風を切るように何かが彼から飛んでゆく音が2つ

間違いなく戦ってる!オリオンの他に…足音が2種類。

『マスターは不在らしいが、さて…』

と、思う間もなく聴こえるオリオンとは別の声

ビーストのマスター、ザイル・ニツカーで間違いない

じゃあ爆発音に近い方がビースト、コヤンスカヤか…

だとするとモタモタしてはられない、今爆発音に混じってバイクのエンジン音が聴こえた

「逃がすもんか…!」

強化魔術を解除し、私は隠れ家を飛び出した

「ギッ…!」

軋む身体に鞭打つように最後の薬を飲み、走る

魔力反応が近付いてくる…大通りか!

おおよそまともなバイクには出せない速度で街を移動する魔力反応を感知しつつ近くの5階立てマンションへ飛び込み、階段を駆け上がる

早く屋上に…！ツ？

ドクン

「え”ぼっ…う…あく…っ!!」

強い吐き気がして屋上まであと1階分というところで転倒する

薬のお陰か痛みは無かったものの、凄まじい不快感が胃から逆流してくる

「足が…！」

手に力が入らず足も重い。痛みは無いのに動かない身体。そして自分でも生きているのが不思議と思える量の吐血。

あと少し、なの、に…！

「げほっ、う…？」

壁で囲まれた非常階段、その外部から感じる異常な質、量の魔力。そしてそれはオリオンのものでは無かった

『水天日光天照八野鎮石』

耳に染みる鈴の音と女性の声、そして弱っていくオリオンの魔力反応

…それが引き金となったのか、ほんの僅か、足に力がこもる

「~~~~~！」

吐血とは別に血が出るほど歯を食いしばり、屋上の扉へと手をかける

「ふっ…ふっ…オリオン…！」

爆発音で早る気持ちを抑え屋上から身を乗り出して見えたもの。

「お前は！いい加減——」

「……で退場してくださいませ……」

ザイルとビーストに前後から挟撃され、何かで刺されたオリオンの姿が飛びこんできた

——まずい

何をされたのか分からないが彼の魔力が大きく乱れている、退去にはまだならないだろうがここまで弱体化した彼を2人が見逃すはずが無い

「——」

…射つなら、今しかない

ポケットの中のスイッチを押し、黄金の弓をゆっくりと構えて魔力を込める

「…世界のため、彼のため、そして——ただ1人の家族妹のため…月女神アルテミス様、あなたの力をお借りします」  
ギシッ

込めた魔力は自分でも何故そうなったのか分からないまま、黄金の1本の矢を形成し弓に添えられた右手へと収まる

よし…！

矢を引き絞り、ビーストへと狙いを定める

…どうやらオリオンとの戦闘はビースト側もただでは済まなかつたらしく、逃走の意思を感じ取れた

「やせる、か…！」

ここで逃せば次は無いだろう、なんとしてもここで——

ずるっ…

「——え」

最初に異常を感じたのは右腕だった、薬の効果なのか最初から痛みなんて無かったのかは分からないが分かるうとする余裕も無かった

——二の腕の肉の一部がずるりと腐り落ちた

「ま、さか…あ ああアアア” ア”あ ア”ア …!?”」

怪我がどうこうとかそういう問題じゃない、右手からまるで毒でも回っているかのように人の形が保てなくなっていく

「これ、わ…つき、めがみの…」

まるで月に照らされたように真っ白になっていく右腕、それが、その『月明かり』が腕を登って身体を侵食していく

あたまがいたい

いまなにをしてたんだっけ

わたし、なんでここにいるんだっけ

わたし、わたし わたし は

狂気と呼ばれるものに沈んでいく心、精神

——でも

「——れるか」

「あ…」

それを引き止める、彼の声

「終われるかああアア!!」

——ああ、そうだよね

祝福呪いに侵され崩れ掛けた身体を持ち直し、弓を持つ左手に、矢を引き

絞る右手に、力を込める

このまま終わることなんて出来るわけが無い

強い光、閃光弾の類が下の方で弾けて目が眩む——しかしそんなことはもう関係無かった

アルテミス様、勝手に力を使つてごめんなさい。あと嫉妬とかもしてました、ごめんなさい。でも——

「ビーストは私が倒す。私の、全てをかけて。だから今、今この時だけ、力を使わせてください」

矢の光が増してゆく——

狙いもしつかりとビーストを捉えている

「ツ……く……えコヤンスカヤ!!」

月明かりがついに私の全身を照らし尽くし弓の影から新しい弓、銀の弓が現れ、重なり、1つになる

スポットライトと誤認しそうな程の月の光が降り注ぎ、直後限界を迎えた偽造礼装が砕け散って光が散らばる

『トライスター！ プリモアモーレ身の程知らずの少女の愛矢！』

「遙!?!」

蒼く、白く、輝く黄金の弓矢が放たれる

月明かりを帯びて、宙を裂いて、黄金の矢は当たるべき者へ一直線に——

「  
」

——射った

閃光弾の影響で視力はまだ戻っていないが当たったのは間違い無い

い  
終わりだ、これで全部終わり——

「——まったく、あれだけお膳立てしたというのに来るのが遅いんですよアナタ」

…ッ??  
!!??

視覚を封じられた彼女に届いたあり得ない声、この場に女性は私を除けば1人しかいない

「な、んで…」

コヤンスカヤの、声がする、の？

「ご自分で確認されては？…遙さん♡」無事ですかザイルさん？

摩耗した身体に無理矢理魔力を流し、視力を強制的に戻す

「——」  
自分の目が信じられなかった、確かにビーストを狙ったのに  
う、そ

「…………ハル、お前…………アルテミスの、力を…」

私が放った黄金の矢は、オリオンの霊核<sup>胸</sup>を完全に貫いていて——

「お、オリオ…あつ、あ…そ、そんな!?!」  
なんで、こんな——

ばしやりと地面に張られた鏡のような水面に彼の巨体が倒れ、動かなくなる

目を離したら消えてしまいそうな弱々しい魔力反応に私はマンシヨンから彼の元へ飛び降りていた



ぐしゃ

着地の瞬間右足から聴こえる嫌な音と崩れるバランス、それでも構わず這って彼の元へ向かう

ありえない、こんなこと……矢が曲がりでもしない限り——

「やれやれ、これがお前がしていた準備か？」

「あ、分かります？説明の手間が省けて助かりますわ♡」

ッ！

「コヤン……スカヤ……！彼に何をしたの!？」

会話する2人に割って入り揺らぐ意識を覚醒させながら怒鳴る

「グランドアーチャーには何もしておりませんが？ワタクシが細工したのはアナタ自身ですよ遥さん♪」

「ふざけ、ないですよー！」

こっちはビルの屋上以外で彼女と会敵した覚えは無い、彼女がアサシンクラスでも自分自身に細工されれば気付かないハズが無い

「はい？全くふざけておりませんが？だいいち遥さん、つい最近ワタクシと既に会っていますよ？」

「は……？」

意味が分からない、その内情を感じ取ったのかコヤンスカヤが心底愉快そうに口元を歪め、水面を這う私に近付いてくる

「遥さんには妹を助けるといふ目的があるのにお姉さんの言う事も聞かずに病院を飛び出し、情報提供者としか名乗らない不審な女の口車に乗ってここまで来たではありませんか、そう——お2人はこんな姿でしたっけ？」

しゃがみこみ、ニンマリと恐怖を煽る笑顔で私の顔を覗き込むコヤンスカヤの姿がお姉ちゃんへと変わり直後フードの……情報提供者の女性へと変わり、そして元の姿へ戻る

あ…!?

「アナタのお姉さんとして病室で、情報提供者として隠れ家であれば警告して差し上げたのに…ま、そのおかげでワタクシ達は助かりましたが。」

唇が触れそうなほど近い距離でコヤンスカヤは私の頬を優しく撫でる。…まるで賢い犬を褒めるように。

「…お姉ちゃん、は？」

「トール・マトンですか？邪魔されても面倒なので殺しましたがそれが何か？」

…ツ！

スツと立ち上がりそう吐き捨てる彼女に対して生まれた憎しみが弓を持つ腕を振り上げる、が。

ぼとりと水を吸った粘土細工のように肘から先が崩れ、弓と腕が水面に落ちて波紋を作る

「ああ、別に魴って殺したりはしてないのでご安心を！ドアを開けていただいたところを撃つただけですから♡」

「あ、ああ…!」

利用されたと気付くと同時に脳裏に浮かぶ私のものでは無い記憶

『おい…泣くなよ、アル…テミス』

『イヤ！嫌！ダーリン死んじゃだめ！どうしてこんな…！あうっ…えぐっ…!』

そう、か、確か神話じゃオリオンとアルテミス様は…

「さ、グラントアーチャーは排除しましたしすぐにワタクシの権能も戻る事でしょう、ひとまず艦に戻りましょうかザイルさん♡」

「随分上機嫌だな…まあいい、影月 彼方との約束は任せるぞ」

ッ!?今…!

「いま、なんて——「お姉ちゃん」

ザイルが、犯罪組織集団のリーダーであるはずの彼が、大量殺戮者であるはずの彼が、まるで家族と会話するかのような穏やかな表情で私を見つめて『お姉ちゃん』と呼ぶ

頭の理解が追いつかない、何故ここで彼方の名前が出てくるのか、何故彼が私を『お姉ちゃん』と呼ぶのか

「――」

いや、分かっている。私をそう呼ぶのは1人しか居ない、でも認めたく無かった

「お姉ちゃんは私<sup>俺</sup>だけじゃなく目に見える全ての人間のために戦ったのを今知った、もう充分だよ。

もう充分人の為に、世界の為に戦った。

これ以上傷付かなくていいの。

だからもう——全てを忘れて眠ってくれ、後のことは俺<sup>私</sup>が全部やるから」

そ、んな…そんなに人間が憎かったの…? 無関係の人まで大勢殺してしまうほどに…

去ろうとする彼<sup>彼女</sup>の背中に崩れかけの右手を伸ばす

——せっかく、会えたのに——

しかしその声も、伸ばした手も間に割って入ったコヤンスカヤがニンマリと笑って遮った

「ま、そう言う事です。生まれ変わったら約束を守れる人間になれると良いですね♪約束も、家族も、恋人も、何一つとして守れない哀れなお姉さん♡」

去り際に投げキッスをしてコヤンスカヤはザイル——いや、私の妹  
…影月 彼方と共に何処かへ行った、行ってしまった

「かなた……私、は……」

場に残ったのは消滅を待つサーヴァントと死を待つ女性<sup>少女</sup>、後にはも  
う——何も残されていない

## 第37話 私の親友

J地区 とある工事現場にて…

「…」

数時間前英雄王に言われた台詞がいまだに頭の中で反響している

『お前は誰でも良かったのだ』

『くはは！我は少しだけ貴様を好きになつたぞ！』

『見ていて飽きんだ、その手の欲望はな』

『聖杯の泥？反転？たわけ！例え表面がどう変わろうと貴様の本質は変わるまい、ただ表現の仕方が少しばかり変わったにすぎん』

はあ…

「そこをどけえっ！」

「うっさい！」

胸に詰まったモヤモヤと飛んでくる銃弾を吹き飛ばすように魔弾を撃つ

「…ツの…！くそつたれ！不死身かコイツは!？」

火縄銃を手にコンクリートの地を駆けながら悪態をつく男、クライム・アルバート。もはや作業と化した彼の足止めをしながらもう一度自分を振り返る

…不死身、か

正直なところ不死身、不老不死といった『終わりが無い』恐ろしさはここに来る前YouTubeで散々見てきたから理解しているつもりだった

「…」

しかしだからと言って50年前…彼女あの子に自身を噛ませ、泥を帯びて

人を捨てたことを私は後悔していない。だってそのおかげでダヴィンチちゃんはどこにいる

あはは…こうして思い返すと私も結構こじらせてるなあ

「ダヴィンチちゃん援護お願い！」

「分かった！」

それに元の私はこんなに明るい性格じゃなかったと思うんだけど…50年って長いなあ、来たばかりの時は割と覚えてたけど…自分自身のこと、今はもう思い出せないや

「…まあ」

それ以外の事は割と覚えてるもんだからあんまり気にならないけども、今はきつと楽しいし。

…こつちに来る前の事は誰にも言っていない。ザイルにも、ダヴィンチちゃんにも。まあ忘れてるから打ち明けるも何も無いんだけどね

かつての私を証明するものと言えばこのスマホと…サーヴァントとしてのダヴィンチちゃんだけ。

「それっ！」

ダヴィンチちゃんが雨のように魔弾を降らせてバーサーカーへと叩きつける、が。

「…ツオオオオオ!!!」

まるでダメーシなど無いように私目掛けて突進してくる副長に思い切り殴り飛ばされ――

「クライム、今だ！」

「ッ！」

地面に激突するよりも早くクライムの火縄銃から放たれた弾丸が私の頭を吹き飛ばす

うええ…気分わる…

そう悪態をつきながらも吹き飛んだ頭部が数秒で再生を終え、元に戻る

「ノーアちゃん…!」

「大丈夫大丈夫!だってホラ、不死身だし?」

心配するダヴィンチちゃんを宥めるつもりで言ったけどどうやら彼女が心配しているのは別のことだったらしい

「もう、やめようよ?彼らと戦ったって意味無いよ?それに英雄王がここに来るかもしれない、早くここから離れた方がいい」

「意味はあるよ、今ザイルがオリオンと決着を付けようとしてる、それまでここを動かなければいいんだ」

倒すとかならともかく逃げるだけなら例えギルガメッシュが相手であろうと私ならできる

「ダヴィンチちゃんっ、バフお願い!!」

「…!」

渋々援護してくれた彼女の魔力を右手に纏わせつつ中距離にいた副長目掛けてステップ、瞬間移動の如く距離を詰めて彼の腹部に掌打を食らわせる

「がああああっ!?!」

彼の身体は大砲の弾のように道路を挟んで向かい側にある米陸軍駐屯地の正門まで吹き飛び、静かな街にけたたましい音を立てて鋼鉄の門をブチ破る

「土か——「次」

地を蹴っつてもう一度ステップ、バーサーカーのマスターと鼻が触れ合う程の距離まで急接近。

ゴッ

「才あつ…!?!」

振り上げた肘で彼の顎を強打し、意識を失いかけたその身体を思い切り蹴り飛ばした

蹴り上げた身体は山なりに低く飛んでいき、工事現場と駐屯地の間にある道路へと叩きつけられる

「…うん、これでいい」

あれで起き上がれるとすれば何処ぞの戦闘民族くらいだろう、とひとまず胸を撫で下ろす

アーチャーとの決着もそろそろつきそうだしあっちに行ってみるかな…?」

「…ね、ノーアちゃん。一つ聞いてもいいかな?」

ふと、不意にダヴィンチちゃんが聞いてくる

「ん? いいよ、なに?」

「何か…私に打ち明けたいこととか無いかな?」

「」

打ち明けたいこと――

「――うーん、特にないかな?」

「そう…うん、分かった」

そう言っではいるものの、彼女自身が納得していないらしい

表情の僅かな変化と硬直、生前のレオナルド・ダ・ヴィンチがどのような人間だったか殆ど知らないがサーヴァントである彼女との付き合いは長い、それくらいは分かる

そして、私に分かったということは彼女にも私のことが少なからず分かったかもしれない

「…」



「…」

嫌では無いが苦手な沈黙、誰かに叱られた時のような沈黙と云えばいいのか

…むず痒いなあ

——どうしよう、打ち明けるべきかな…でも——ぬ!?

「わ!?!」

本能でダヴィンチちゃんの手を引っ張る。——とその直後、たつた今ダヴィンチちゃんが居た場所をナイフのような手刀が貫いていた「ダヴィンチちゃんに2回も不意打ちとはいいい度胸だね!?!このゲド—マーボー!」

相変わらずの外道神父、言峰綺礼が少しだけ困惑の表情を浮かべて立っていた

「…これが1回目のはずだが…いやしかし今の防ぎ方はまるで一度目撃して知っていたかのような…」

王様は付近には居ないようだけど神父が出てきた時点でロクなことにならないのは明白だ

「で?何しにきたの?聞いてからボコるから言ってみなさい」

「サーヴァントを片付けて2人きりで話が出たかったのだが…まあ構わんだろう。用があるのはキミだ、クランツェル」

「え」

私?

「サーヴァントキャスター、レオナルド・ダヴィンチ、できれば席を外して貰えないか?なに、あなたのマスターを害するようなことはしないやい」

「殺そうとした相手に対して肝が据わってるねキミ、まあノーアちゃんが良いなら「英雄王ギルガメッシュは今どこ?」

承諾しかけるダヴィンチちゃんの言葉を押しかけて質問を投げつける

「英雄王ならばしばらくはここには来ない、K地区の鋳物工場の方へ向かった」どうも私は足手まといになるようですね

K地区 鋳物工場？ウルフルズのアジトだけど今そこにザイルは居ないし…

一瞬騙しかと思ったが意識を集中すれば確かに偉そうな魔力がアジトの方向から感じて取れる、間違いなく英雄王だ

「…いいよ、ダヴィンチちゃんはここで待ってて」

「おっけー！」

仕方なくダヴィンチちゃんを待たせて神父と一緒に工事現場の裏手へ

…これくらい離ればいいか

「それで？私は今にも貴方の顔面にドロップキックをカマしたくてたまらないワケだけど何が聞きたいの？」

「それは怖いな、手短に済ませるとしよう」

煽るように愛想笑いをする神父に若干イラつきながらも内心油断していた、どうせなんで不死身か、とかいつから生きているのか、とかその辺りだろうと。

「キミはレオナルド・ダヴィンチとはどういった関係なのかね？」

「フア？」

予想外の恋バナみたいな質問に間抜けな声が吹き出す

いやいやいや待って待って！この外道がそんな質問をするわけがない！何が裏がある、ここは…

「マスターとサーヴァント時々、生徒と先生」そんだけ。

「ほう？教師を膝枕をする生徒とはな、その凶太さは尊敬に値するよ」

ぬぐつ…そういえば見られてたんだつた

「それで？茶々を入れにきただけ？もう殴つていい？」

「待ちたまえ、質問はまだある。…キミは聖杯に何を願う？」

あー、その手の質問ね。神父の場合何を願うかじゃなくて願いがあるかどうか、だし…とつとと『つまらない』つて言ってもらえればいいけど…

「聖杯？いりません、願い？ありません、神父？殴りたいですねえ、他に質問は？」

これは本心だ、私の願いは50年前に既に叶っている。今更願うものなんて無い

「だろうな、恐らくキミの願いは50年前の聖杯戦争で既に叶っているのだろう、そこで提案するが私と共に来る気は無いか？」もちろんサーヴァントも一緒に。

「ええ…」

私を連れてつたところでコイツにどんなメリットがあるつての…？うん？

ふと頭を過ぎる疑問、違和感。

何か、見落としているような…

「聖杯の泥によって永らえている生身の者は今のところ私とキミの他には居ない。なに、ただの仲間意識さ」

「さつきから似合わない台詞ばかり吐いてるなあ…普段の外道つぷりは何処行つたのさ」

ここまで来ると普段にも増して不気味である、何かしら企んでいるのではと…いや、普段から何かしら企んでいるから程度が低いことを願うだけなんだけど

「ならばその期待に応えらるつしょうか○○○○○○？」  
「はっ。」

今なんて――

「キミは生前の記憶を一部喪失したと思い込んでいるようだがそれは間違いだ、こうして説明している私自身も信じ難いがキミは…これが2回目の人生だろうか？」

…っ

「…なんの話かサツパリピーマンなんだけど？」

「同じ泥を被った者の仲じゃないか、恥ずかしがることは無い」

後ろで手を組み、微笑む外道神父

英雄王の入れ知恵？でも英雄王でもここまで踏み込んできた訳じゃないし発電所の一件じゃそこまで察した気配は――あ

「待って」

「ふむ、何かな？」

違和感の正体、疑問。

『恐らくキミの願いは50年前の聖杯戦争で既に叶っている』

『こうして説明している私自身も信じ難いが』

50年前の聖杯戦争とはある事情により極秘事項だ、当時監督役を勤めていたハヴェルカ・アルバート以外に教会側で全てを掌握している者は居ない、それ以外で当時の状況を知り、かつ生き残っているのは私とイギリスの王子様、あと拳法家のおじいちゃ――あ、彼はザイルに殺されたからこの2人だけか

そして私自身も信じ難いという言葉から事実を又聞きしたのも間違いない、王子様から教会に接触があったという話は聞いてないし私も聞かれていない、だとすると誰が――

「誰からそれを聞いたの？」

「キミ自身さ、○木 ○○…言っただろう、同じ泥を被った者の仲だ。」

記憶共有くらいできるとも」

!!!

うわあ…！やりやがったなコイツ!!

手間は掛かった上にまだ不鮮明なところはあるがね、と外道神父が私の顔を見て微笑む

…彼が微笑むということは余程酷い顔をしていたのだろう

まずい…！

不鮮明な部分…抑止力が介入するレベルの記憶は見えていないようだがもしそれ以外の記憶、私が今どう思っているかの記憶は見たのだろうか？いや見たとしか思えない、でなければここまで愉悦顔をする理由が無い

「令呪！キヤスター、その場で待機！」

『え？ちよつと——』

胴体を真つ二つにするつもりで放った回し蹴り、避けられても構わず2発、3発と距離を詰めて打つ

「キミはザイル・ニッカーなどどうでも良いのだろうか？キミが彼に惹かれると思いついて入っているのは彼が世界を変えるに足る力を持っているのでは、と期待しているだけだ」

「ちよ、ちよつといい加減黙ってくれない!？」

魔弾と格闘の合わせ技を食らわせようとするが簡単に避けられる攻撃する気が無いのか殺気は無い

「つのお…！」

こう避けるに徹せられると攻撃が当たらない、そしてそれが益々自分をイラ立たせる

「友人、親友と思っておきながらそれを確かめることもない、50年もの間1回たりとも。降って沸いた知識を己の物のように振る舞って

騙し続けた」

「そろそろ黙らないとマジでぶつ殺すよ!？」

「まともに戦ったところで殺せないのはキミ自身がよく分かっているだろう?」

ぐ……!

「死ぬ事も無く、これから永久に怯え続けるかね?それも良いだろう、最も事実を知った彼……いや彼女?がなんと言うか……流石に同情するよ、ああ本当だとも」

もうあーだこーだ考えてられない、今すぐ黙らせなければ

「そこでーつ聞きたいのだが……キミは生前、レオナルド・ダヴィンチの何にそこまで惹きつけられたのか私に話してくれないかね?迷える少女よ」

「やっかましいっ!」

特大の魔弾を思い切り地面に叩きつけて自分諸共神父を吹き飛ばす——つもりだったが

「おっと」

腕を掴まれて不発に終わる

くっそ、殴りたい、この笑顔……!

「誰も見た事のない物を創る……それは本当に才のある者にしかできない事、そしてキミはただ運が良かっただけの凡人だ。」

人理に刻まれ、人理を守るために存在する英霊に好かれたいがために人理を崩壊させかねない男に手を貸す様は誰が見ても破綻していると嫌でも分かる」

「く、の!離してよ!」

両手を掴まれ、身動きが取れないながらもメチャクチャに暴れるが、いくら私でも代行者に押さえつけられては引き剥がせない

「だが死ねない以上、キミは嘘を吐き続けるしかない。時代が場所が周囲が変わろうとも…そうだろう?」

「…:そろそろ気は済まないの…?」

「ふむ、確かにそろそろ引き時ではあるか、後は2人でゆつくりと話したまえ」

え…!?

ふと顔を上げると目の前にはさつき令呪で命令したはずのダヴィンチちゃんが立っていた、目は私と合わさずあらぬ方向を向いている…私の腕を掴んでいた神父は何処かへと消えた

なんで――

「…仕組みさえ分かれば令呪の縛りをすり抜けるのはそう難しいことじゃないよ」

「…聞いてたの?」

「うん、ざっくりとね」

「そう、なんだ」

終わった、終わっちゃった。彼女との関係が、楽しいだけだった関係が。

打ちひしがれていた私をよそにダヴィンチちゃんが口を開く

「…実を言おうとね、ノーアちゃん。…知ってたんだ、結構前から」

――え?

「具体的にはホームズを退去させたあたりかな?キミ、あの時一瞬だけ私に記憶を写したでしょ?」

「あ…」

あ、ヤバい！この探偵、推理の邪魔になると判断してダヴィンチちゃんをブツ殺すつもりだ！

「そうはさせるか！くらえ！」

私自身にひっそりと掛けていた対肅清防御を一瞬、ほんの一瞬だけ解き、ダヴィンチちゃんと記憶を共有させる

「あれ？ホームズ？」

「っ…!？」

ダヴィンチの霊核を狙っていた手刀がビデオを一時停止したかのように固まる。

私はその隙を逃さず――

「ふんっ！」

――渾身の力で彼の霊核を砕いた

「っ！」

そして即座にパスを通じて記憶を回収し、プロテクト対肅清防御をかけ直す

「えーと…ダヴィンチちゃん？」

「……………あれ？今…あ、マスター？もしかして令呪を使ったかい？」

「やっぱりそうなんだ、うん。色々納得できたよ」

「な、んで…いや、そもそも記憶は回収したのになんでホームズを知ってるの…？」

「バックアップさ、記憶が移された瞬間コピーして保存したんだ」  
な……！

あの瞬間、ダヴィンチちゃんに記憶を写したのは精々長く見積もつ



て5秒強だ、そこからコピーするなんて――

「普通ならコピーは無理だ、けど私ならできる。なぜなら私が…天才だからね！」

ふふんと得意げに笑うダヴィンチだったがすぐに元の真面目な表情に戻る

「…キミがここに来る前の記憶も見た。いや、読んだと言うのかな？正直現実味が湧かなくてね、今でもフィクションか何かだと錯覚しちゃうだよ」

砂の上にもかかわらずコツコツと綺麗な音を立ててダヴィンチちゃんがこつちに歩いてくる

「――」

声が出ない、緊張のせいか諦めているせいか、もう分からない

「…○○ちゃん」

「だ、ダヴィンチちゃ「どっせい!!」

!!??

シリアスな空気と最もかけ離れた黄金のハリセンが私の脳天を直撃する

「いだあっ!?!」

「全く…神霊に立ち向かう勇氣はあるのに告白する勇氣は無いなんて変わってるなあキミは。」

あ、でもそれだけ私に魅了されていたってことでもあるのかな？むふふ、それなら仕方ないね〜

「…!?!…う…う…?」

痛い頭を抑えて何を考えたらいいか考える

えっと、あの…

「…確かにキミは私のマスターとしてはやや格不足かもね」

「…！うん…」

「この世界の核に迫るような記録を持ち合わせていたとしてもキミはただの女の子だ、いつかこうなることはキミ自身分かっていたかもしれないね」

…やっぱり私じゃ——

「でも」

？

「サーヴァントとかマスターとかの関係以前に、キミは私の友達だよ？」

「え？」

トモダチ？友達って言うとは——

「えええっ!？」

あえ？あの、はい!？」

「なんだい、不満？」

「いや、あのっ…とんでもございせん、その…えっと…」

不意打ちが過ぎて言語が崩壊し始める、だが不思議とこっちの喋りの方が私に合っているような気がした

「わ、私…天才でも何でもない…ただの女の子だよ？友達って言うていいの…?？」

「もー！キミは私を何だと思ってるんだい？天才かどうかで友人を作ろうとしたら私永久に一人ぼっちになっちゃうよ!？」

だって私と並び立てる天才なんてこれまでもこれからも存在しないし？と戯けた様子で彼女は言う

「あはは…ダヴィンチちゃんらしいや」

心が軽くなっていく、50年溜まり続けた罪の意識が消えてゆく

「つまらない」

ん!?

その時外野から聞こえた空気を読まない声で私は振り返る

「うえっ、外道神父!」

いつの間にか外道神父が戻ってきていたらしい

「…稀代の天才、レオナルド・ダヴィンチ。キミは凡人と関わる事を避けていると思っていたが。」

ため息をつきながら言う神父だが私と神父の間にダヴィンチちゃん割って入る

「生前はね、そういうこともあったよ?…でもいくら天才だって人並みの感情はある。」

微笑みながら振り返る彼女は偽りの天才である…ノーマ・克蘭ツェルではなく、私自身をしっかりと見据え、そしてすぐに神父へと振り返って言った

「50年間変わらず好意を寄せてくれる女の子だよ?それはそれで才能の1つじゃないかな?」

…!

「…天才の理屈は理解し難いな」

「だろうね、天才の考えはいつだって理解されない事が殆どだ、だから凡人の神父キミにも分かるように言い直そう」

「あ…」

前に立つダヴィンチちゃんのその背中。可愛いとか美しいとか思ったことはあったけど、今日初めて別の感想が頭に浮かんだ

「京子ちゃんは私の親友だ、侮辱するなら許さない」

かっこいいな、と…

## 第38話 女神との雑談

???にて

「」

ぼんやりと見上げた夜空に浮かぶ星々

既にまともな思考を放棄していた私は『手を伸ばせば届きそうだよ』という台詞を最初に考えたのは誰なのか、なんてどうでもいいことを考えていた

「…かなた」

だが思考を放棄して尚、影月 遙という少女性は妹の事を忘れられないらしい

頭を撫でられる心地良さに身を任せ、目を閉じてこれまでを振り返る

…私は妹を救えなかった

どうして私がオリオンと契約できたのか今なら分かる。

ビーストを倒す為の切り札がオリオンだったならそのマスターであるあの子を止められる可能性が世界で1番高いのは私だから。

——まあ、結局止められなかったけどさ

彼方はビーストと消え、義姉ちゃんは殺された。そして私とオリオンも…

「…神様って、死後の世界にいるのかな」

「え？まー居る神ヒトはいるだろうけど殆ど居ないわよ？」

もしアルテミス様に会ったらちゃんと謝って——まって？

明らかに知人では無い声が上の方から聴こえてきたのは幻聴では無いよね？

それに心なしか後頭部に感じる柔らかい感触はどう考えてもコン

クリートでないのも間違いないよね？というかそもそも誰が頭撫でてるの？

恐る恐る目を開けてみる…

「おー起きたー！おはよーハルちゃん！」

「ぐぴゃっ!？」

ぬっ、と顔を覗き込む女性にびっくりして間抜けな声が吹き出し、女性の膝の上から転がり落ちる

…どうやら私はずっと目の前の女性に膝枕されていたらしい

「あー…ぐめんぐめん、脅かすつもりは無かったの！」

目の前の——明らかに人間とは違う気配を纏う女性はその雰囲気似合わない陽気な口調で心配そうに声をかけてくる

「…」

改めて目の前の女性の姿を見る

真夜中の海を月明かりで照らしたような銀と空色の長い髪、整った顔立ちから覗く、見ていると（何故か）安心する青い瞳、大胆に胸元を解放したワンピース…に似た真つ白な服は足元に近付くにつれて夕焼けのように橙色へなっており、どこを見ても普通の人間には見えなかった

…が、不思議と遥には彼女に対する不安や恐怖といった感情は浮かんでこなかった。

綺麗な人…でもヘンだな、初対面のはずなのに彼女を知っているような気がするし…

「…この声…誰だっけ？」

見覚えのある顔、聴き覚えのある声に首を傾げていると女性の方から動いた、というか——

「それじゃ、改めて…ハルちゃんありがとー！」

「え、あの——ぬぎやーっ?!?!」

——飛びかかってきた

問答無用と言わんばかりに抱きついてくる…というかベアハッグしてくる謎の女性に混乱する頭、ないすばでいによって塞がれる酸素の通り道

「むぐ!? んんんんーっ!!!」

「お、おいアルテミス」

「うんうんよしよし! もうね、祝福しちゃう! 加護も霊基もあげちゃう! ハルちゃんすぐく頑張ったし!」

…何か言っているらしいがいきなり呼吸を封じられた人間にそこまで気にするほどの余裕は当然無い

「とりあえず今度は手加減無しで祝福して…あと——うん? 何かしらコレ…」

「おいアルテミスって!」

「ん…ぐ」

ま、まさか女性の胸で窒息して死ぬの? 私? え、本当に…?

「ンモー! ダーリンだったら! 呼んでくれるのは嬉しいけど今はハルちゃんを治さなきゃでしょ!」

「あー…そのハルだが…そろそろ離してやらないと窒息死するぞ?」  
「え?」

「ムキユ…」

「わっ! ああっ! ごめーん!」

そこでようやく解放され、酸欠状態の身体へゆっくりと酸素を取り込む

「死ぬかと思った!!!」

っていうかアルテミス? さっきアルテミスって言ったの…!?

「ごめんね？ちよつと焦りすぎたわ…」

「ったく、折角駆けつけたのにトドメ刺してどうすんだよ？しかも死因がオツパイって…いや、なんか良いなその死因。」

さつきまで世界を賭けた戦いをしていたとは思えないふざけた発言に思わずオリオンの顔を引っ叩こうと手を振り上げる——よりも早く、

「ダ〜リン？今はふざけてる場合じゃないわよね？」

「おい待て、ちよつとしたジョークだ、な？落ち着け、落ち——ぎいへええ!?ギブギブギブ!!」

アルテミスと呼ばれた女性は瞬間移動の如くオリオンの背後に回り込み、そのままチョークスリーパーをキメる

…笑顔だけど目が、目のハイライトが消えていてかなりホラーだ、それに腕は私とそう大差なさそうなのに絡めたオリオンの首からミシツとかメキツとかヤバい音してるし

というか情報量が多すぎる、辺りの景色はどう見ても一面の海でワシントンD・C.の大通りじゃないしオリオンはピンピンしてるし目の前の謎の女性は謎…だし

…アルテミスって呼ばれてたけどまさかこんなハイテンションガールが本人じゃないよね？

「あ、あの〜？」

「あ！ハルちゃん、丁度いいからよく見ててね！ダーリンが浮気した時の扱い方、教えちゃうワ♪」

「お、おい！無垢な少女をそっちに引き摺り込むじゃねえ！それに今は浮気してな—— あっ きゃん」

「あ わわわ…！」

ゴキヤツていった！今ゴキヤツて音がした!!!

恐怖を連想させる笑顔に今すぐ逃げ出したかったけど悲しきかな、人間はビビると身体が動かなくなるみたい

…と、オリオンをオトした女性は何事も無かったかのように最初の、幼い子供のような笑顔に戻り、話し始める

「と、まあもう分かると思うけど改めて自己紹介するわね、私はアルテミス！ギリシヤ神話でよく聞く月女神アルテミスね！」

「え、あ、どうも…ハル・マトン——いえ、影月 遥です」  
「やっぱりアルテミス様なんですか…そうなんですか…」

「もー！敬語とか要らないわよ？気軽にアルテミスちゃんって呼んで」  
♪

「え、えつと…アルテミス、ちゃん？」

「なーにー？」ニコニコ

「…うん」

…調子が狂う！

目の前の女性が神であることに疑いは無い、何せ私自身ついさつきまで月女神の権能カを使ってたんだ、その力と同質の気配を感じればそれは本人で間違い無い、んだけど…

このままでは対話どころでは無いため、強引に話のベクトルを変えてみる

「と、とりあえず今いる場所とかアルテミスさま…ちゃんのこととか色々聞いても良い、かな？」

敬語は使わせないと言わんばかりのハッピーな圧にしどろもどろになりながらも聞いてみる

「うんうん、元々そのつもりだし一個ずつ説明しようか！」

なんでも聞いて！と、ダウンしたオリオンを背もたれにしてアルテ



ミス様が微笑む

「え、えつとじやあまず今の状況を教えて欲しい、この場所は…？私とオリオンは…どうなったの？ビーストと彼方は…？」

「うん、まずこの空間は私とオリオン<sup>ダーリン</sup>の心象風景、ホントは私達以外ゼツタイ入れないけどハルちゃんは特別ね♪

2個目、本物のハルちゃんとダーリン…つまりここにいる精神体のみの存在ではない、外にいる2人は…今死にかけてる。

ダーリンはサソリの毒が周ってる上に霊核が完全に砕けちゃったし、ハルちゃんの身体は私の権能を使った反動で崩れ落ちる寸前よ」

「…っ」

やっぱりオリオンは私のせいで…

「こーら、そんなカオしちやダメ！元を正せばダーリンが浮気性な上にカツコ良すぎるのがゼーんぶ悪いんだから！」

こつちの考えを見透かしてプリプリ怒るアルテミス様にまたしても調子を狂わせられながら、続きを促す

「最後、ハルちゃんの妹とビーストは…少なくとも探知できる範囲にはもう居ないわ」

「何処に向かったとかは…？」

「それが彼女達痕跡も完全に消して移動してるみたいでね…」

これでも狩猟の女神なのにごめんなさい、としよぼくれるアルテミス様を慌てて宥める

「ありがと、それじゃあ私からも1つ質問したいんだけどいいかしら？」

「…？知ってる限りなんでも答えるよ？」

あ、なんでもって言ったけどもちろん限度はあるけど…

「——蛇の神様に心当たりはあるかしら？」

「へび?」

蛇って言うとアレだよな?爬虫類の。

「そう、例えば蛇神の神社に熱心に通ってるとか…」

「うーん?特に覚えは無いけど…どうして?」

正直神様自体今日まで信じていなかったから覚えも何も無いんだけど…

「さつき気付いたんだけどハルちゃん、ギリシヤの神もちよつと引くレベルで呪われてるわ、うん」

「え、ええっ!?!」

呪われてる!?

寝耳に水とはこの事だ、少なくとも私は蛇を虐めた覚えは無いしそもそも動物を虐めたことも無い…まあ自分より小さい子<sup>人間</sup>を痛めつけちゃったことはあるけど

「呪われてる、って言うより祝福されてる——つまりなにかしら蛇にまつわる神に物凄く好かれてる」

好かれる理由は分からないけどそれなら別に良いのでは?と思つたのを先読みするようにアルテミス様が言葉を続ける

「それが善性の神ならいいんだけど…いえ、善性でもダメ。コレ好意の度が過ぎてて危険域ね」

「うおっ…マジかよハル?お前どこで神を誘惑したんだ?神の絡んだ恋愛はロクなことになら——」

「ダーリン、おはよう!」

「ぐえええーっ!!」

復活したオリオンにすかさずチョークスリーパーをキメる女神…うん頭が慣れた、と思ひ込むことにしてもう一度記憶を辿ってみる

…やっぱり蛇に特別優しくしたり祀ったりした覚えは無い、好意が

振り切れた神様の危険性はオリオンが身をもって(?)証明してくれ  
たし:

だとしたらかなりマズいのでは?曲解かもしれないがようするに  
身に覚えのない神様からヤンデレじみた好意を向けられている、とい  
うことになる

「オリオンとアルテミスちゃんは相思相愛だから今の程度で済んでる  
(?) んだろうけど…」

だが蛇神に身に覚えが無くとも呪いと言われれば納得できること  
は多い、色々とあるけど一言に言って:私は運がない、例えば——ん  
?

「お、お前、涼しいカオでコイツに爆弾を投げ込んでんじやねえよ…」  
「え——むぎゆ」

「やっぱりそう見える?もー!ハルちゃんったらもー♪嬉しい!ね  
?・ダーリン♡」

当然のように再び封じられる気道。精神体なのに呼吸は必要なの  
不思議ね。

また窒息するところだったが今度はオリオンに助けられて事なき  
を得る

「ごめんごめん!話が進まなくなっちゃうから結論から言う私の  
権能<sup>ちから</sup>でハルちゃんにくつついてる蛇神<sup>呪</sup>との縁<sup>い</sup>を切ることにしたの!」  
あつさりすぎていて凄さはいまひとつ分らなかったものの、オ  
リオンの驚愕の表情から察するにかなり凄いきらしい

「ソレ、呪いの対象だけじゃなくてその周囲の人間も巻き込むタイプ  
の強烈なヤツ。ハルちゃんは何故かケロっとしてるけどかなり危険  
なものよ、ここはこれまでのお礼代わりに私、張り切るから!」  
「張り切るって…」

意味がわからなかったが直後異変<sup>意味</sup>に気付いた

むふー！とガッツポーズをするアルテミス様の身体が足元から消え始めていて――

「へ、えっ!?何をやってるんですか!?イテっ!」

「ごちーん!と漫画のような音を立てて頭部にヒットするアルテミス様のゲンコツ!

地味に痛い!

「敬語は無し!おっけー?」

「は、へい…」

無理矢理訂正したせいで意味のダサイ返事が出てしまったが正直何が起こっているのか説明してほしい、目の前の気配も消え始めてるし…

「代わりに説明するとアルテミスは自分の霊基…自分を構成する魔力とか権能<sup>能力</sup>をお前に丸ごと送り込んで

まあ祝福<sup>呪い</sup>でズタズタになったハルの身体を治し、かつ得体の知れない呪いを上書きして消すにはそれしかないだろうな」

「ないだろうな、って…!」

消えていく彼女の身体を見ればそれがどれ程のリスクの高い行動か分かる、生き残るべきは私じゃないはずだ

「お願い!治せるのならオリオンを治して!私にはもう何もできない…!」

「…私も出来る事なら2人とも治してあげたいけど…ダーリンの場合は呪いじゃなく霊核の損傷だから私にはちょっと難しいの」

「だからってどうしてアルテミス様が私の身代わりになるような…!オリオンもどうして止めないの!?!この世のなによりも大切な恋人でしよ?」

彼女を説得するようにオリオンに当たる、が。

「んー？あー無理無理。コイツは言い出したら俺の言う事でも聞かないからな」

いつもの陽気な口調でそう返してくる

「な、んで：私はただの人間だよ：！それも、アルテミス様の力を勝手に使った挙句、また恋人を殺させてしまった、どうしようもない女だよ：どうして——」

「嬉しかったから！」

——え？

アルテミス様の声の調子が、ほんの少しだけ変わる。その声と今にも消えそうな身体から、きつと座つて喋るだけでも辛いのだろう。それでも彼女は笑顔で語る

「私ね、まだギリシャでバリバリの現役だった時、よく色んな人とか物を祝福してたの。だから祝福することには慣れてたんだけどね？」

今にも落ちてきそうな星空を見上げ、一呼吸してから言う

「——あの頃の私とダーリンを祝福してくれた人／神は：結局一人も居なかった。

でもハルちゃんは顔も知らない私の話をダーリンから聞いて、応援してくれた。

それも私の愛の形を疑似展開できるくらいダーリンに好意を向けてたハルちゃんがね？助ける理由はそれで充分！」

宝具の名前はちよつと変わってたけどね？と月のように白くて綺麗な、消えかけた手で私の頭を撫でながら彼女は言う

：オリオンの言った『女神だから好きになったんじゃない』という一言が記憶をよぎる

目の前の彼女は月女神アルテミスでありながら、ちつとも神様らし

くなくて、言う事やる事も神どころか人としてもどうなの？と、この短時間過ぎただけで思うことはあつた

神としての自分は持ち出さず、ただ一人の恋する女性として笑い、感謝の言葉を述べる彼女の姿は——オリオンのあの一言に対する疑問を吹き飛ばすには充分だった

——確かにこれはどうひっくり返ったって勝てないや

「ハルちゃんやっとなった♪」

「ふえっ!？」

指摘されるのと水面に映った自分の顔を見て気付いたのはほぼ同時で、何故か恥ずかしくなって顔を手の平で隠す

「ふふふ、ダーリンのマスターが女性なの最初はちよつとイヤだったけど…うん！貴女がマスターで良かった！ね、ダーリン♡」

「…へへっ、そうだな——ゲ？」

もはやお馴染みとなった女神のチョークスリーパーがするりとオリオンの首に絡む

「ダーリン今浮気した」

「オイオイオイオイ!!今そういう場面空じゃ無かつただろ!?理不じ——ペギヤツ！」

もうダウン何度目か分からないオリオンを見ながら、ふと辺りの景色が不自然に光り始めているのに気付く

「あつ、そろそろ時間みたい！」

時間、というのは恐らくここに留まれる時間のことだろう、アルテミス様だけでなく、オリオンの身体も消え始めている

「ハルちゃんの呪いも…うん！しっかり私の加護で上書きできた！これで大丈夫！」

「…なあ、ギリシヤと違うのは分かるが何かの拍子で他の女神に呪わ

れたりしねえよな?」

「え」

しれつと怖い言葉が聞こえた気がする!?

「いや冗談だ、アルテミスが霊基を渡してる以上大丈夫だろ。」

女神を呪えるヤツなんか居ないしな」多分

冗談混じりに笑うオリオン、その身体がアルテミス様に連れられてふわりと浮かんでいく

「あ…」

私の身体も光り始めてる…

「そろそろお別れね、お話できて楽しかったわ♪」

「…うん、私も!」

女神と対話したというより恋愛における先輩と話した気分だったけど。

「私はこれ以上ハルちゃんの助けにはなれないけど…貴女を助けてくれる英霊は居るわ、具体的にはギリシャ出身のね!」

もし困ったらギリシャに来て!必ず力になる人が来てくれるから!

月女神の私が保証しちゃう!

あとはえつと…あー!そうそう!ダーリンをよろしくね!」

じゃあねー??と緊張感の欠片も無く消えていく2人と焼きついたカメラのように白くなっていく視界に、

「…っオリオン!アルテミスちゃん!ありがとう!」

私は感謝の気持ちを込めて精一杯手を振ったのだった

↳

W地区 大通りにて…





### 第39話 セイバー陣営

コヤンスカヤの戦艦内にて…

「…全く、よくもまあこんなことを思いつくもんだ」

コヤンスカヤに渡された資料と端末を交互に見ながら称賛の意味を込めてため息をつく

「こう見えてワタクシもアルターエゴですので？自身の概念の応用など霊基が戻れば容易いのです♡」

きゃーん♡と尻尾と身体をくねらせながら自慢げに言う彼女の姿ははつきりいつて気持ち悪い…というか不気味である

「霊基が順調に戻ってきて気分が良いのは分かるがそのフザけたダンスをやめろ」敵と間違えて撃ちそうだ

「申し訳ありませーん♡」

…やれやれ

「まー、霊基が戻ってテンションが上がっている、というのもあります…正直要因はもう一つの方でしてえ…」

もう一つ？…ああ

「彼方のことか？」

「ええ、正直今から楽しみで堪りません♪」

「まあなんでもいい、時が来た時に動いてくれればな」

端末から一つの映像をピックアップして閲覧する

…そこにはアジトにある俺の部屋の映像が流れており、部屋の3分の2を占拠する大きさのカプセルが乱雑に置かれている

形を見るに俺が使った医療施設のカプセルと同じに見えるが…

違いはその中身、俺の時と違うのは中身が水（奴の用意した物だ、ただの水では無いだろうが）で満たされていて、その閉鎖空間にて幽閉されるように少女と翡翠の剣が沈められている

客観的に彼方<sup>俺</sup>を見たのは初めてだな…自分で言うのもなんだが遥にそっくりだ

もつとも当の影月 遥は23歳で端末の向こうの彼方<sup>俺</sup>は精々4歳から歳といったところだが。

「あとは覚醒まで待てば彼女との契約は完了、ザイルさんも彼方さんも1人の人間として…いやまあ彼方さんを人間とカウントしていいのはイマイチ疑問ですがそれはそれで。」

今更だが何故彼方のカプセルを艦内に入れなかったのかは聞かなかった、聞くまでもなく彼方の存在が物語っていた

「…やれやれ」

神秘に疎い俺でも分かる——彼方<sup>あれ</sup>は厄災だ

「さて、とりあえず急ぎの用事は無くなりましたが…この後はいかがされます?」

一息ついでに艦内のカジノルームにでもどうですか?と満面の笑みで提案してくるコヤンスカヤに若干の不吉さを感じながら誘いを断って自分の端末を開く

「現時点で潰れたと判明している陣営はランサー、アーチャー、ライダーの3つか?」

「4つですね、ノーアさんが本来のキャスター陣営をかなり早い段階で駆除していらしたので…ついでに言えばイレギュラーではありませんがルーラーのサーヴァントも1騎、退去しています」

ルーラー?…ああ、報告にあった探偵か

「5騎のサーヴァントが退去しているにも関わらず未だ聖杯は現れな

い、そもそも聖杯は器であつて聖杯戦争で勝ち取るのはその器の中身だ、器自体は最初からどこかにある」

——にも関わらず聖杯戦争開始前に切嗣から送られてきた、聖杯が成り得る条件を満たした霊脈…その全てをコヤンスカヤに確認させたが聖杯は確認できなかった

「とすれば…」

もはや考えられる場所は1つしかない

「聖杯の確認、また状況を見て器の一時回収に出る、行くぞ」  
「かしこまりました♡ではでは、早速——」

…?

「待て」

「どうされました?」

単独頭現発動直前、頭痛のように頭に引つかかった疑問

「影月 彼方は俺の中から完全に離脱したんだな?」

「え?ええ、それはもう、ハイ。」

「いつの時点で?」

「へ?」

そのタイミングによっては…

「よく聞けコヤンスカヤ、直感だが——」

く

W地区 大通りにて

「つと」

お世辞にも上手とは言えない弓矢の連射を叩き落としながら距離を詰める

「だあああっ!」

「ハル落ち着け！闇雲に撃ったって無駄だ！」

先の戦闘：グラウンドアーチャーであるオリオンとそのマスター、影月 遙との戦いを終え、ザイルと共に艦内へ戻ったハズのコヤンスカヤは30分もしないうちにその場へと戻ってきていた

『影月 遙が生きている——かもしれない』

彼女の契約者パートナーが漏らしたその一言の真相を確かめる為である

「…まさか本当に復活してるとは思いませんでした」

(やっぱりそうか、やれやれ…)

彼方が邪魔をしてこない時点で気付くべきだった、とウンザリしたような彼の声が念話で届く

「宝具撃った時を思い出せ！5本連射するより1本に意識を込めろ！」

「…っ！はああっ！」

かつて人間だった少女の手元から放たれる蒼い弓矢  
おっと、これはまだ落とせませんねえ

瞬き程の時間の中で意識を切り替えて迎撃の体制から回避へ

(それで？状況は？)

んー、そうですね…

追い越すように遙の側面へ回り込む

「っ」

首元へ薙ぐように放った手刀を右腕で防御する遙、だがそれはあくまで『手刀』を防ぐという意識での防御。

霊基の調子も完全とは言えませんが8割弱戻ってきていますし…

パシッ

腕が触れ合うまでコンマ数秒といったところでコヤンスカヤの手の平に展開されたサバイバルナイフが――

ゾバツ

薄っぺらい防御をした遥の右手首を切り落とした

「ハル――！」「ツ……！！うりいやああ！！」

「おっ！ととと?！」

右手を失ったにも関わらず寸分も怯むことなく放たれる超至近距離からの連射。

元々争いごとに向いているような人物ではないことを聞いて知ってるが故に少しだけ驚いたものの、すぐさま取り直して彼に伝える

このまま続ければ終わりますね、いかがされますか？ザイルさん

(…遥と決着をつけてくれ、それと――)

それと？

(――できることなら殺すな、殺さず再起不能にできれば1番いい)

ホーント『お姉ちゃん』には甘々ですねえ？ええ、ええ！お任せくださいませ♡

なんとでも言え、とヤケクソ気味な声を聞き流して戦況をもう一度確認する

霊基は8割……いえ、既に9割強戻ってきている、ここまで戻ったなら女神モドキを1人無力化するなど容易い

「とりあえず意味不明な方向で弱体化したアナタはあっちへ行つててくださいませ♡」

一般的な人間の頭がある位置よりも少しだけ上、しがみつくように少女の頭の上に乗っているクマのぬいぐるみを空手家が使うような上段回し蹴りで吹き飛ばす

…魔力反応とかで分かってはいましたが元がグラウンドアーチャーとは思えませんねえ

「オリオっ——」他人の心配しているヒマは無いと思いますよ?」

——固有結界展開、愛玩の檻——

ザイルの鍛錬に使ったものと同じモノ…違いは結界の主である彼女の霊基状態が万全に近いということ。

遙とコヤンスカヤを残して世界が塗り変わる。静かな真つ暗闇の街から透くような青空の下へ曝け出される灰色の大地が現れる、そして——

「うっ…!?か、はっ…!」

…まあ、こうなりますよねえ

アサシンのサーヴァントとしてではない、明確に人類の敵としての姿。

視線、匂い、動作、感情、ありとあらゆるものが『人間を殺すもの』としての概念を纏う者と目を合わせた少女は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる

——だが

「ウ ウ”ウ”ウ”あ…!」

「へえ」

この姿を見て尚立ち上がろうとしますが、これは嬉しい誤算です、立ってくれたほうが——

金色白面——とは違う伝承に囚われない新しき獣は4本の足でゆっくりと被食者へ歩み寄り、その巨大な口を開く

一息で噛み砕けますから

ヒトにとって硫酸にも匹敵する獣の唾液を垂らしながらその小枝のような華奢な身体を獣の顎が覆っていき、そのまま足の先まで噛み

砕い――

「今すぐ攻撃を中止して結界を解け」

「…？」

ふと聞こえたザイルの声に辺りを見回す

今のは念話ではありませんね、ザイルさん？

予定では彼は別行動で聖杯の確認しに行く、という手筈ですが…

「結界のすぐ外にいる、とにかく今すぐ攻撃を中止しろ」

「…かしこまりました」

また情が湧いたのかと若干呆れつつも姿と周囲の環境を元へ戻す

そこで彼女は彼の言動が情では無いことを悟った

「…一体そちらで何が？」

「見ての通り遥にあれ以上の情が湧いたわけじゃない…湧いたのは横槍だったがな」

表情や顔色こそ常時と殆ど変わらないものの、彼の左腕が…肘から先が無くなっていた

「間に合った…アサシン、たった今お前のマスターに交換条件を提示させてもらった」

「おや、アナタは…」

仕事柄、一度見た顔や聴いた声は瞬時に覚えられるようにしている、それが最近会ったばかりの相手なら尚更だ

「切嗣から最優のクラスと聞いていたセイバー、そしてそれを使役できる程のマスターが何処かにいる、そう思っていた…やれやれ、見つからない訳だ」コヤンスカヤ、再処置を頼む

どこかにいるであろうセイバーを警戒しつつ、雑に処置された彼の左腕の包帯を取り、しっかりと応急処置する

「クライムに遥と続いて…今度はお前が邪魔しに来たか？バルン」

「…痛み分けです、ここは退いてください」

彼がギャングとしてウルフルズで最も信頼している——いや、信頼していた部下、バルン・ファクターが苦虫を噛み潰したような表情でこちらにトカレフを向ける

コヤンスカヤという例外を除けば本来聖杯戦争の場において銃なんて有って無いようなものだ、それが横にサーヴァントを侍らせたマスター相手なら尚更。

今あの銃は敵を殺すための物ではなく、自身の使役するサーヴァントへ戦闘開始を伝える鉄砲のようなものだ、引き金が引かれた瞬間どこからともなくセイバーが現れて戦いが始まるだろう

霊基が戻った今、戦って負けるなんて微塵も思っていないがそれでも油断は禁物であることをコヤンスカヤは忘れない

恐らくセイバーとバルンさんはワタクシが結界を貼ってザイルさんと分断されるまで待つていたのでしよう、とすると対ビーストに関してある程度知識はある、ということでしょうか…？

アジトで何度か見た『コヤンスカヤファンクラブ会長』なんてフザけた気配は目の前の青年からは微塵も感じない、もしや彼がウルフルズに入った動機は——

「…退くぞ」新しい腕が必要だ

「かしこまりました♡」

正直セイバーの顔くらいは拝みたかったがそれを察したように彼の念話が届く

（腕を落とされた瞬間セイバーが何かの名前を叫んでいた、恐らく宝具かそれに類する何かだろう、後で調べてくれ）

そのように、で…ええと…どうされます？当初の目的である聖杯の回収については？



(…決行する、飛んでくれ)

承りました♪それではピョンピョーン、と！

『単独顕現 EX』

、

「退いた、か？…ハア…ボスもコヤンスカヤも、なんて圧をかけてくるんだ…」

あれがつい最近まで仲間だった人間に向けることができるのは恐れ入る

バルン・ファクターの知るザイルはギャングのボスとして無慈悲ではあったが機械ではなかった

銃を取り、仲間を鼓舞し、アスファルトの大地を掛けて軍や警察を手玉にする『どんな場所に居ても説明ができるギャングの大作』であつた、だが――

「あれは…」

本当にザイル・ニツカーその人なのだろうか？

まだ中学校に通うような歳から彼を支え続けた者として、他の構成員が気付かないようなことも察することができる彼が感じ取ったモノ

…彼の中にあつた一握りの、最後の…優しさ？温かさ、ともいうものが完全に欠如してしまったように俺には見えただ

人間として必要なモノ、俺を見るルビーのように赤い眼は俺をどういった『存在』として認識していたのだろうか？

少なくとも仲間を見る眼で無かつたのは確かだ

「あの、貴方は…？」

「あつ？ああ！すまない、すぐに止血する！」

影月 遙の声で我に返り、急いで腰の救急バッグの中を弄る

「血は大丈夫、もう止めたから」手首は流石に生やせないけど

「え？あ…血が止まってる…」

一体どういう術を使ったのかは分からないが確かに切り落とされた彼女の右手首の出血は止まっていた

「マスター、無事か？」

「セイバーか、すまない…判断を誤った」

付近の建物から睨みを効かせていたセイバーが戻ってきた、肩には…なん、だ？テーパーパークのお土産屋とかで置いてそうな熊のぬいぐるみ？まあそれは置いておこう

「今更言っても遅いが…先の宝具は令呪を切るべきだった」

魔力のパスからこちらの存在が感づかれるのを恐れての措置だったが…結果としてザイルの左腕を切り落とすまでにしか至らなかった

「いや、マスターが令呪を切らなくて良かったと思う

…俺は初めはあの男を斬る為に呼ばれたと思っていたが違うようだしな」

令呪の温存は正しかった、と刀を収めながらセイバーは言う

「え？セイバー…さんは宝具使ったの？」

「そうなのか？その割には魔力とかまるで感じなかったが…」  
!?

「ぬいぐるみが喋っ…動いてる!？」

ぴよこぴよこと男性の声で喋りながら動くクマのぬいぐるみに驚きつつも『後で説明してもらおう』と言うセイバーの一言にとりあえず黙って続きを促す

「彼は…ザイル・ニツカーは人間だ、いや人間になった…と云えばいいか」

珍しく歯切れの悪いセイバーだったがやがて答えを見つけたように言葉を絞り出す

「俺が斬るべき存在は既にザイルの中に居ない…また探すしか無い」  
「…そうか」

バーサーカーのマスターから預かった手掛かり…稲妻のような歪な形をした紫のナイフ、に似た物を握りしめて空を見上げる

「もう聖杯戦争も終盤だ、探し出せるかどうか…」

「探し出すんだ、それしかない」

その『角』の主が現れた時、俺は必ずその場に居なければならぬ」

そうでなければ大勢の人間が死ぬことになる…そうはさせない、させるわけにはいかない、と低く、小さく、それでいて炎のような覚悟を宿した目でセイバーは言った

「なあ、そろそろ仲間に入れてくれないか？」俺もハルもイマイチお前らの目的が見えづらいんだ

ムスツとした声で文句を言うクマのぬいぐるみに意識を戻す

「…ああ、全て話すよ、そちらも知っていることは教えてほしい」情報交換だ

恐らく今は…いや、ザイルがコヤンスカヤを召喚したその時から、既に聖杯戦争は破綻していたのかもしれない

## 第40話 50年掛けた覚悟

F地区 ナショナル・ギャラリー美術館にて…

「いやー、思ったよりあつさり神父が引いて良かったね〜」

「いくら外道神父とはいえサーヴァント相手に正面から戦えるわけじゃないからね…」

ラスプーチン神父なら別だろうけど

今は…まだ2時？

思ったよりも時間の進みが遅いなんてことを考えながら無人の美術館を2人で歩く

「彼、来るかな？」

「来るよ…ザイルとコヤンスカヤならね」

美術館から秘密基地へと区画が変わる扉、見た目こそ壁に偽装されているが…

「——この偽造も凝ったセキュリティも…うん、もう必要無いよね？」

…ダヴィンチちゃん

「任せて」

彼女が杖を振るうと同時に端末へ表示されるたぐさんのunlockの文字

私とダヴィンチちゃんの拠点であり、家であった秘密基地は誰も拒むことなく全ての扉の鍵を静かに開ける

「ありがとう、しかしまーこれじゃもう『秘密』基地じゃないね？」

「京子ちゃん」

「な、なーに？ダヴィンチちゃん」

分かつてはいてもホントの名前を、それもダヴィンチ<sup>憧</sup>の<sup>れ</sup>存<sup>在</sup>にナチュラルに呼ばれると未だに緊張するなあ…

「…さっきの質問の答え、出た？」

『今日死ぬか、永遠に死ねないか』だっけ」

ダヴィンチちゃんも中々エグい選択出してくるよねえ…

…でも

「50年前、私は2度死んだ」

「…うん」

どんな風に死んだかは覚えてないが自殺でないことだけは確かだ

『ああ、こんなアツサリ死ぬんだ』とか思ってた記憶はボンヤリあるからね

でも死んだあとは、子供がイメージするような天国や地獄に私は居なかった

…ある意味天国も地獄もあったけどね？

く

『やあやあやあ！召喚に応じたよ！クラスキヤスター、真名を——』

『ダヴィンチ、ちゃん…!?す、凄い！本物…！本物だ！ね、ねえ！触ってもいい!?ねえ!』

『ちよ、ちよつと!?落ち着いてって!』

く

『噛んで、アーチャー』

『は、はあ!?てめえ…！ザコの上にバカなのかよ!?アタシに噛まれるってことがどういうことか、分かって言ってるのかよ!?傷だって治るわけじゃ…!』

『聖杯まで、走ることができればいい、今のこの手足じゃこうして貴女のところまで這っていくのが精一杯だったし…それに——』

『ダヴィンチ、ちゃんは、私の憧れで、恩人。まあ恩人なの、本人は知らない、けど』

『お前…』

『もしかしたら…後悔する日が来るかもしれない、来ないかもしれない、けど…今やらないと、私も、貴女も、ダヴィンチちゃんも、後悔しながら死ぬことになるのは間違い無いの、だから…お願い』

↳

「二度目はまだ私が根暗だった時、弟以外に話し相手が居なくてさ、思い返すと大したことでも無いのに、あの時は死んじやおうかとも思ってたし」

ま、ダヴィンチちゃんのおかげで思いとどまれたけどね！

歩く、元々私とダヴィンチちゃん以外誰も居ない無人の基地の階段を、下へ下へと降りていく

「二度目は…そういえば二度目もまだ根暗だったなあ、あの時は無我夢中で確証も無いのに無茶苦茶して、死んだ」

…そういえばあれ以来彼女とは会っていない、彼女はセイバーと違ってサーヴァントじゃなかったからきつと生きているとは思わけど

「で、死んでさらに無茶苦茶して切り抜けて…あと王子様に不死のお裾分けをしたっけ」

彼は…まあニュースとか見る限り国に戻らないで駆け落ちコースに行ったのは間違い無いね、ハッピーな暮らししてるのかなあ

「…ね、ダヴィンチちゃん」

「なんだい？」

階段を降りきり、目の前の重そうな扉を開く  
グランドアーチャーの召喚部屋だったそこには既に召喚陣は無く、  
あるのは煌々と輝く金色の杯——聖杯

「先に言っておくともう悔いは無い、とか充分楽しんだ、とか言うつもりは無いよ、やりたい事もいっぱいあるし知らないことも沢山あると思う」

「…うん」

端末から音がし、画面に映像が映し出される

…映っているのはザイルとコヤンスカヤ、その2人。

魔力反応を見るに単独顕現で美術館の前にワープしてきたね、多分

「でも、責任は取らないとアイタツ!」

懐かしくて嬉しい、それでいてメチャクチャ痛い金のハリセンが頭を直撃する

「最後までいい本音を語りなよ? キミと私の仲だろう?」

「イタタ…うん、ごめん」

ホントの気持ちは——

「ダヴィンチちゃんが居ないと気がどうにかなると思うんだよね、私、不老不死の恐怖は知ってるから、だから端的に言っ…楽になりたい、かな?」

「うん、よく言えたね! 偉いぞー」わしゃわしゃ

他人に合わせて、誰かに合わせて、ご機嫌を取って、好かれることは無くともせめて嫌われないようにしていた鈴木 京子。その彼女から珍しく出た本音、ワガママを彼女は普段の調子と変わらずに褒める

前の聖杯戦争が終わった時、彼の——グランドライダーの提案を：あ、グランドでの召喚じゃなかったつけ、とにかく彼の提案を拒否した時点で、いつかこういう日が来るとは思っていた  
「それが今日来た、うん、それだけだ」

部屋の外から足音が聞こえる、聴き慣れないヒールの足音と、良く知っている半長靴の足音

「行こう、ダヴィンチちゃん」

「いいとも、任せておきたまえー！」

ペンダントを握る手のひらに力が籠る

50年掛けてようやく出来た覚悟、今ここでぶつけよう

召喚部屋の扉がゆっくりと開いた——

く

「思った通り、ここか」

「そのようですね、ついでに言えばあのゴリラを召喚したのもこの部屋のようです」

まさか人為的に呼んでたとは、と部屋を見回しながら彼女が言う

「久しぶり、ザイル」

「：言うほど久しいか？ノーア」

「こんばんは、コヤンスカヤ」

「ええ、こんばんは、ダヴィンチさん♡」

軽く挨拶を済ませた場に流れる静寂、それを否定するかのよう  
に爛々と光る聖杯を背にノーアが静かに話し始めた

「ザイル、左腕はどうしたの？」



「失くした、だが別に義手を作ってもらいにきたわけじゃない」

「…聖杯？」

「ああ」

返答を聞いたノーアは少しだけ困ったような——いや、困ったフリをして、再度口を開く

「願ひ聞いてもいい？」

「願ひは無い、強いて言うなら人類を滅ぼした後、パフエを作ってくれる奴が欲しい、それくらいだ」

うっわあ、他にキメ台詞無かったんですか…？と背後から聞こえる声を見殺ししつつホルスターのホルトパイソンへ手を伸ばす

「え、パフエ？あははっ、ザイルも変わったんだね！

…私の願ひはね、実は既に叶ってるんだ」

「そうか」

西部劇のガンマンのような早撃ちでノーアの眉間と心臓を1発ずつ撃つ——が

防がれた…？これは——

「キャスター、じゃないな？」

「私はなーんにもしてないよ？それよりも彼女の話を聞いてあげなよ」

「…」

聖杯と同じように輝く正六面体の防壁がノーアとキャスターを包み込む

「ホントの私は根暗でさ、想像つかないだろうけどどこに來る前は話し相手は弟しか居なかったんだ」ダヴィンチちゃん、お願い

話しつつキャスターになんらかの指示をしたノーアだがコヤンスカヤが動く気配は無い

おいコヤンスカヤ？

(ご心配無く、どこから引つ張って来たか分かりませんがノーアさんとキャスターを包むあの防壁は『対終末防御』です)

なんだそれは？

(ようするに世界の終わりにも抗える超<sup>スーパー</sup>防護壁ですよ、現段階でワタクシ達は彼女らに手出しはできませんが強すぎて彼女らも防壁を解かない限りは我々に手出しできません)

そうか？

「宝具『万能<sup>ウオモ・ウニヴェルサル</sup>の人』真開放…データ読み取り開始…」

…宝具開放とか言っているが？

(ええ、準備が整い次第撃ってくるでしょう、ですのでその発射の瞬間…防壁が外れた瞬間を狙います)

防壁は強力だがノーア自身が元の使い手では無く、オンかオフの2つしか使えないというのがコヤンスカヤの見解らしい

(ダヴィンチさんの防壁が無くなれば必然的にノーアさんと聖杯の防護壁も無くなるでしょう、何をするつもりかは知りませんが…魔力が重すぎます、ワタクシの方が早く動ける)

「…だどいいが」

「50年前、まず私の身体は生き返って…そこからダヴィンチちゃんと会って鈴木 京子は本当に生き返った

ザイルに対する恋心は偽物だったけど、楽しく無かったわけじゃ無い、ザイルにも感謝してる」

「復元開始『空家<sup>エンブテイー・ハウス</sup>の冒険』起動準備…燃料礼装変換開始」

…転移の準備をしろ、コイツらは俺やお前の知らない手段を何か持っている

(え、しかし聖杯は…?)

後でいい

頭に『?』を浮かべたコヤンスカヤだったが彼女は理由を聞くことなく言う通りしてくれた

(いつでも飛べます、行き先は…?)

すぐ戻ってくるからどこでもいいが…少なくとも今この場で対城宝具が発動しても問題無い距離は取れ、いいな?

「ま、だからどうしたってワケじゃ無いけどさ」

「魔力充填104%突破…霊基再構成、宝具再構成開始…」

(あの姿は…)

どうした?

キャスターの方を見ていたコヤンスカヤが何かに気付いたらしい

(ザイルさんの言った通りここは退いた方が良さそうですね)

横目でキャスターを見ると――

なんだあれは…?

何度か見ていたキャスターのサーヴァント、レオナルド・ダヴィンチはそこには居なかった

…赤と青を基礎色にした着物とも旅装束とも言えそうな服、桃色の長髪を風車のような形をした黒い髪留めでまとめ、華の模様が特徴的な帯が巻かれた腰回りにさされた4本の鞘と、彼女の手握られる一本の剣

セイバーのサーヴァントが、防壁の中に立っている

「こうして一人で喋ってるのもさ、ケジメのつもりなんだよ?ザイルからしたらよく分からない話を長々とされてイライラしてるだろうしダヴィンチちゃんも同じ内容聞いてて飽きてるかもしれないけどそこはまあ許してね?」

「剣轟抜刀——」

やれやれ…コヤンスカヤ

(ええ、ここまでですね)

『単独顕現 EX』

「ザイル、ダヴィンチちゃん…今までありがとう！  
とーつても楽しかったよ！」

『伊舎那…大天象！』

く

数十分前…

「京子ちゃん、キミ…死にたいんだろ？」

「いきなりそんな言葉が飛び出すなんて思ってなくてフリーズ中々…  
どうしたの?..」

普段のダヴィンチからは想像も付かないような過激な発言にやや

面食らう鈴木 京子

「この前秘密基地でキャッチしたセイバーの映像、覚えてる？」

「え?覚えてるよ」

武蔵ちゃんのことだよな?

「ごめんよ、実はアレ私の自作自演なんだ」

「へー…」

…

…

「…ええ!?!」

つてことはダヴィンチちゃんが作った映像!?

「宮本武蔵が女だなんてちよつと驚いてね：気になってバックアップのキミの記録を読み進めたら知らないことだらけでホーントびっくり：と話がそれた、でさ？京子ちゃん」

「なーに？」

「キミが私に隠れて：不死の苦しみに悶えていたのも記録で見ただ」

「：……うん」

「やっぱり知られてたかー：ホームズの時にゼーんぶ共有してたしね…」

「宮本武蔵を見つけた時、京子ちゃんは死ぬために彼女を探しに行つたんじゃないのかい？：だから私が着いて行こうとしなくても、何も言わなかった」

「：うん」

全くもってその通りだ。流石に黙って死ぬつもりはなかったにせよ、対因果宝具を持つ彼女なら私の不死の因果も断ち切ってくれると、期待はあった

そのために交渉にいくつもりだったけど：ダヴィンチちゃんには気付かれていたらしい

責められると思って身構えていたが：かけられた言葉は全く違うモノだった

「使えるよ、対因果宝具」

「：え？」

「霊基が消滅する直前、彼は私を『カルデアのレオナルド・ダヴィンチ』と間違えて自身の力の一部を譲り渡した、損傷は激しいけどグラウンドアーチャー召喚に割いていたりソースを戻した私本来の宝具なら復元、発動はできる」

「そこから今まで集めた礼装を全部使い捨てて、私の霊基と宝具を一瞬だけセイバーのサーヴァント、宮本武蔵に書き換える」

「ダヴィンチ、ちゃん？」

「ごめんよ京子ちゃん、でも私はサーヴァント…人理を守るために存在する英霊だ、ザイルとコヤンスカヤを野放しには出来ない。…例えそれで自分が消滅するとしてもね」

あつけにとられる私のために、徐々にゆっくりとなつていく彼女の  
口調

「再現した対因果宝具で秘密基地地下の聖杯を斬る、壊すだけじゃ冬木市の二の舞だ、必ずセイバーの宝具でなくちゃならない

使えば私は消滅するだろう…つまり後にも先にもただ一回きりの対因果宝具だ、その上でキミに…キミの口から改めて聞きたい。」

「今日死ぬか、永遠に死ねないか、キミはどうしたい？」

）

「…ふー、50年前京子ちゃんに召喚された時はこんな結末になるなんて思ってたな」

膨大な魔力充填により吹き飛んだ天井から夜空を見上げて彼女は  
笑う

「聖杯は…うん、大丈夫そうだね」

京子の立っていた場所にはもう誰もおらず、ただ輝く聖杯が鎮座するだけだがその聖杯の中身は確かに斬られていた

…具体的に言えば中に溜まっていた魔力の半分が杯から抜け出て

いた

ノアのペンダントに聖杯を使っけていて幸いだった、お陰で魔力を逃がす場所として最適だったし

その肝心のペンダントは宝具使用時にどこかに吹き飛んでしまっただけだ……

「私に分からないんだ、ザイルくんにもコヤンスカヤにも分かるはずがないさ」

珍しく自分に言い聞かせるように呟き、最後の力で自身の霊基をレオナルド・ダヴィンチへと戻す

うん、やはり最後！私は私としてでなくちゃね！

いつ見ても惚れ惚れする自分の姿モナ・リザにうつとりしながら目を閉じる

「さてと……それじゃあ、次呼ばれるまで……ひと、眠り……か、な……」

ねえ京子ちゃん、キミにとつてこの50年は長かったかい？短かったかい？

私？ふふん、私はね――

くノア・クラントツエル死亡く

くキャスター、レオナルド・ダヴィンチ 消滅く

く

H地区 ツール家の屋敷 庭にて

使用人の大半も眠りにつく深夜、広い庭に小さな人影があった

「……………」

「あ……あっ!?!お嬢様！またベッドを抜け出して……!」

まだお休みの時間ですよ。さ、お部屋に戻りましょう」

使用人の1人が私を抱き抱えようとするのを身を振って振り解く

「ミラお嬢様——」「じいやとライダーがまだ帰ってきてない、帰ってくるまで待つてる」

普段持ち歩いているボールとランタンを持って木に背中を預けて座り込む

かつてフーレン・アジャイルが鍛錬に使っていた木に。

「みんなは寝てていいよ、2人が帰ってきたら私が迎えるから」

「っ…お言葉ですがお嬢様、フーレンさんとライダー様はもう——」

「うるさい!!」

聞きたくない、知りたくない、認めたくない

「あっち行ってよ！話しかけないでよ！じいやは…ライダーは…また遊びに戻ってくるもん…!」

「お体に障ります、今日はもう——」

その時——

「キヤツ!?!」

「お嬢様っ…!…今のはなんだ!?!」

そう遠くない場所から聞こえた凄まじい爆発音と揺れる大地。

平和ボケした市民だろうとその音だけで鉄筋コンクリートの建物が一つ丸々吹き飛んでもおかしくないと直感できる程の。

「お嬢様はここに！ガラスが割れて降ってくるかもしれない！庭の中央は安全ですのでそこでお待ちを！…おい！みんな起きろ！非常事態だ！」

屋敷の方へ駆けていく彼を呆然と見ていた私だったけど、頭のとっぺんにぶつかる衝撃に地面を転がる



「痛ったあい！もう！なんなの…？」

なんとか落ち着いて、痛みの原因を拾い上げる  
これは――

「キューブ型の…ペンダント？」

## 中章 準備期間

### 第41話 聖杯戦争終結／目覚めた厄災

コヤンスカヤの戦艦内、医療施設にて

「聖杯戦争が終結したと言うのにまさか対因果宝具とはやってくれま  
すねえ」

「ツッ、と吹っ飛んだ美術館から回収した聖杯を指でなぞりながら  
面白くなさそうにナース服を身に付けた彼女は尻尾を振る

「聖杯は回収できたんだろう、何か不都合があったのか？」

「聖杯はあくまで入れ物、願望機として機能させるには杯に詰まった  
魔力が必要です、しかしここに入っている魔力は精々サーヴァント3  
騎分…これではとても使えません」

「弾丸の入ってないライフルに何の価値があるのですか、と影月 遥  
の右手が入ったホルマリンカップセルでお手玉するコヤンスカヤ

やれやれ

「元々使う予定の無かった物だ、別に良い

それよりもそんなもの何に使うつもりだ？飾るなんてフザけたこ  
とを言い出すつもりじゃないだろうか？」

「え？飾る？いやですわ、ワタクシそのような趣味はあるにはありま  
すがそんなつもりじゃございませんわ♡」

あるのか…？

「まあまあ！遥さん、バルンさんに続いて争う気配が微塵も無かった  
ノアさんとも戦ったんです、ホラ？なんかこう…全てが敵？」

「いよいよもって人類の敵になり始めたザイルさんに役立つアイテ  
ムだということは保証しますわ♡」

「遥の右手がどう役に立つのかは知らん、それより先に俺の左手の替えを用意してくれると助かるんだがな？」

「おーっとつと、そうでした！というかダヴィンチさんが退去したので右腕の替えも必要になりますし…しばらく安静、ですね！」

「…そうだな」

現状残っているサーヴァントはセイバーとバーサーカーのみ、そして放っておけば魔力消費の激しいバーサーカーは勝手に消えるだろう

バーサーカーの性格は知らんがクライムの性格はよく知っている、市民を犠牲にサーヴァントの魔力を集めるなんてマネ、奴には出来ない

そうなれば人類皆殺しの前準備として対処すべき大きな問題は3つだけだ

セイバー及び影月 遥との決着、対因果宝具で斬られた聖杯の片割れの搜索、そして――

「影月 彼方、か」

6騎のサーヴァントが退場し、歪な形とはいえ顕現を果たした聖杯

…  
事実上聖杯戦争は終了したがやるべき事はまだ残っている

↳

D地区 工業地帯にて

「今度は…右ね？」

キューブのペンダントを首にかけた少女が、まるで見えない『何か』が横にいるかのように言葉を投げ、歩く

正確にはペンダントとして見えてはいるのだが誰もペンダントが少女に語り掛けているなんて思わないだろう

みんなに黙って出てきちゃった：帰ったらちゃんとごめんなさいしなくちゃ

使用人<sup>彼ら</sup>の目を盗んで屋敷を出るのは彼女にとってそう難しいことではなかった。

聖杯戦争が始まる前、出掛けるフリーレンに付いてまわっていたし、牛若丸から脱出術(?)もいくつか教わっていたからだ

「暗いなあ…ライト持ってきてよかった」

とはいえ外に出る時は必ず隣にフリーレンがおり、昼間でもあった

：屋敷のあるH地区から出た事の無い彼女が大人でも眠りにつく割合が多いような時間帯に1人でコンテナ置き場を歩いている

トドメに、彼女は知らないがここにある殆どのコンテナはレオナルド・ダヴィンチの宝具によってメチャクチャに吹き飛ばされており、コンテナ置き場とは名ばかりの廃墟だ、そんな場所を歩いていて不安にならないはずがない

「オバケ、居るのかな…居ないよね、うん」

牛若姉<sup>ねえ</sup>やじいやがここに居たらきつと『出てもやつつけなければいい』って言うってくれる…そうだ、やつつけければいい

牛若丸から貰ったタヌキの尻尾アクセサリー(?)をぎゅつと握り、震えそうな身体を抑えて更に奥へ歩く

1分程歩いただろうか、ふとペンダントの声が変わった

「コンテナに向かって直進するの…?」

ペンダントの言う通りにするなら目の前の、道を塞ぐように置いてあるコンテナを突っ切らなければならぬ、回り込もうと別の道を探そうとするミラだったが

「…え？このコンテナがゴールなの？」

ペンダントがそれを否定するように身体を引っ張ってくるので目的地？のコンテナペタペタと触ってみる、すると…

「あれ!？」

い、今コンテナをすり抜けた!？」

初めから何も無かったかのように硬そうなコンテナの側面をすり抜けて中へと入る

「なにこれ?！」

アニメでしか見たことのないような、宙に浮かび上がる電子的な文字と数字

これ漢字っていうんだっけ?…読めないや

唯一読める数字の方は26・23・08と表示されており1番右の数字が1秒ごとに1ずつ減っていつていた

何かの残り時間かな?あつ、ペンダントが…

ふよふよとひとりでに首から浮き上がったペンダントが数字の方へと漂っていき、その直後――

ピピピピピピピッ

「キャッ!?わ、わっ!わあっ!！」

けたたましい音を立てて減っていく数字と目が眩むほど光るペンダント

ど、ど、どうしよう!?!ぜんぜん止まらないよ!?!

どうしていいか分からないまま、凄まじい速度で減っていく数字にパニックになった私は無我夢中でコンテナから飛び出し、息を切らすことすら忘れて走った

（  
）  
鋳物工場 従業員用更衣室にて

「はっ、はっ…よ、よく考えたら数字が減ってるだけ！怖がる理由なんて無いじゃん！」

…落ち着いてきたところで先の場所にペンダントを置いてきてしまったことに気付いた

取りに行かなきゃ、とライトを付け直す…

「…」

…出口、どこ？

バンツ！

「ヒイツ!?…銃の、音？」

恐怖を煽るように鳴り響く銃声から逃れるために更衣室のロッカーへその小さな身体を押し込み、ライトを消す

…最初の銃声を皮切りに次々と聞こえてくる銃声、その他には複数人の怒号のようなものも聴こえてくる

「なんだ、なんなんだよコイツは!?ボスは!?バルンさんは!？」

「畜生！畜生！畜生！」

「じいや…牛若姉ねえ…」

震えの収まらない身体で牛若丸アクセサリーの贈りものを抱いて耳を塞ぐ

怖い、怖い、怖い…！

だが誰にも見つからないようにロッカーの中で息を潜めてほんの数分後

「…」

音が…止まった？

嘘のように静寂を取り戻した環境に困惑しつつもロッカーの外へ

…なんだかヘンな臭いがする

鼻につくようなイヤな匂いを我慢し、長い廊下へ出る

「…」

屋敷に居れば良かったと思いつつながら、窓すらない閉鎖的な屋内を1つのライトを頼りに進んでいく

…匂いが強くなってきた

「うう、本当にイヤな匂い…」

「おはよー！」

!!??

「きゃあああああつ!？」

「ごめんなさい！今は『こんばんは』だよね？」

真つ白になりかけた意識を引き留めたのは私とそう歳の離れていなさそうな女の子の声だった

「へ？」

「あ、違う違う、驚かせてごめんなさい、だね」これ落としたよ

「ありがとう…」

落としたライトを女の子から受け取り、電源を入れる

…あれ？

スイッチのツマミに指を引っ掛けてカチカチと動かすが明かりが付く気配が無い

まさか…

「壊れた？」

「どうしたの？」

「…ライトが壊れちゃった」

どうしよう、何にも見えないや

「…？ライトが壊れると困るの？」

せめて窓とかあれば…そう思っていたところ、何で困っているのか  
分からないと言った様子で女の子が聞いてきた

「だってこれじゃなんにも見えないよ、出口も道も分からないのに

「私、出口知ってるよ」

！

「ホント!？」

「うん！案内してあげるよ、来て！」

こちらの手を引く彼女に身を任せ、明かりのない通路を迷いなく歩  
いていく

それもかなりの速さで

「も、もうちょっとゆっくり歩いてよ」

これじゃあつまづいちやうよ

「？足元を見て歩けば——ああそうか、あなたには暗くて見えないん  
だね」

ごめんね、と歩く速度をゆっくりにする女の子

「2階は明るかったからまずはそこまで行こう」

「うん…」

相変わらずヒドイ匂いは収まらない、それどころかドンドン強く  
なっている

それでも迷いなく進んでいく彼女を信じ、私もそのまま着いていく



「あ」

彼女に続いて廊下の曲がり角を曲がると汚い蛍光灯に照らされた階段が見えた

いや、それ、よりも――

「階段を登ってすぐのところの外に出る扉があるの、そこに…ええと？ひ、つね？階段っていうのがあるんだ」そこから出られるよ

「」

「?どうしたの?」

――赤と、死

蛍光灯に照らされた階段、そこには『それら』が広がっていた

匂いの、元は

「大丈夫だよ、ちゃんと死んでるから」

「待って!何を――ひっ!?!」

少なくとも4つはある人間の死体の方へ女の子は平然と歩いていく、さも当たり前のように

そして光の元に晒された女の子の姿が…

私とそう歳が変わらなさそうな女の子は産まれたての赤ん坊のように剥き出しになった素肌を赤と黒の返り血でぐちゃぐちゃに汚して、ぱつと見はちゃんと服を着ているように見えた

「こうすれば安心かな」

花を摘むように次々と死体から頭を引き抜き、4・5歳の少女には不自然な程長い水色の髪を素肌と同じように真っ赤に染めていく

「ホラ、これくらいすれば起き上がるかも、なんて怖がらなくても大丈夫でしょ?」

…そしてどれだけ返り血を浴びても何も変わることも無い、稲妻の

ような歪な形をした紫色の鋭利な角

「ヒトじゃ、ない…」

「ん…」

ふと漏らした、漏らしてしまった言葉に女の子化け物がこつちを見た  
「ふふ、そうだね、ここに人間は居ない」

ヒタヒタと、化け物がこつちに歩いてくる

「ひ、や…」

化け物が蛍光灯から離れることにその身体が見えなくなっていく、  
次第に2つの赤い瞳だけが暗闇に浮かび上がっていく

「この世界はばけものだらけ、人間はお兄ちゃんとお姉ちゃんの2人  
だけ」

——身体が動かない

「みんなみんな人間に似てるけど人間じゃない、しかも自分をばけもの  
のだと気付いているばけものは多分誰もいない」

——ころされる

「歳が近いしもしかしたら、と思ったけどあなたも自分をばけものだと  
気付いてないばけものだ、最初は逃がしてあげようと思ったけど  
ね」

「 やっぱり だめ 」

血液しかついていない化け物の手の平がゆっくり、ゆっくりと顔を  
這っていく

「ア…」

「何年、何十年、何百年かかってても、いつか私が必ず『人間』に作り直  
してあげるから、だからそれまで——」

ダンツ

…っ！

屋内に響く銃声に身体が弾かれる

あれだけ怖くてイヤだった銃の音にその瞬間だけ感謝をし、臆げな記憶を頼りにひたすら走る

「ツの…バケモンが！」

「銃弾…う、あれ、ウルフルズ？まだ残ってたんだ…ねえ、他に残ってる団員はいるのかな？私に教えて？」

「あいつらの仇だ…！」 チャキツ

えーと…？あの筒みたいなのはなんだっけ？たしかお兄ちゃんも使ってたような気がする…

確か…ろけ？ろけ…ええと…

「ああ！思い出した！『ろけつとらんちやー』だ！」

「フツ飛べ!!!」

く

「きゃあああっ?!はっ、はっ…！」

耳を裂くような爆発音と地震のように揺れる屋内で、死に物狂いで出口を探す

もちろん明かりは無く、手探りだったがそんなことを気にしている余裕は無い

…  
ここがロッカーの部屋、だよ…確かこっちは行ってなかったから

「…！明かりだ！」

最初に居たコンテナ置き場に面した場所とは違う場所らしい、たった1つの窓越しに街灯とそれに照らされた道路が見える

「早くここから——」ガタツ

——え

窓に鍵はかかってない、多分建て付けが悪いのだろう。勢いを付ければ少しずつは開いている

「〜!!」

窓を割ろうとも思ったが鋳物工場は5歳の少女に合わせた造りにはなっていない

——その時

!!音が…

後ろから聴こえていた爆発音と銃声がぱたりと止み、その代わりに言わんばかりにヒタヒタと足音が近付いてくる

こつちに来てる…!

はやく、はやく、はやく…!

「ここから、出——」 追いついた

耳元で、声、が

「大丈夫、あなたは何も悪くない、誰も悪くない、私を虐めてた彼らも、ウルフルズも、米軍も、魔術師も、サーヴァントも、誰もね」

家族を気遣うように化け物が私を後ろから抱き締める、敵意も殺意も無く、優しく。

「何も気に病まなくていいよ、ほら目を閉じて?おやすみなさ——キヤツ」

「わあああああっ!」

身体を締め千切られるという思い込みから喉の奥から悲鳴が飛び出す、その直後付近の違和感に気付いた

…？

転ぶ化け物とそれを見下ろす私の他にもう一つの気配が私のすぐ横にあることに

「やあれやれ…目覚めたはいいが酷い有様だ、せめてサーヴァントの身体か槍が手元に残っていれば良かったんだが…なんとかならなかったかい？天才AIサンよ」

子供の声…男の子だ

『我慢しておくれよ、この短時間でホムンクルスを作るのだってかなり無茶をしたんだ』

こっちは女の人の声だ、多分私よりもずっと大人の。

気配は1つだが話し声は2つ、声が聞こえる場所に向かって質問してみる

「そこにいるのは…だれですか？」

「ん、オジサンかい？オジサンはランサー…じゃなかった、さつき目覚めたばかりのホムンクルスさ」

…まあ今はノンビリ自己紹介してる場合じゃなさそうだし逃げようか！」

## 第42話 友誼の証明

数日前

ナシヨナル・ギャラリー美術館 地下秘密基地にて…

「——というわけで頼むよ、キャスター」

「うん、任せて」

自身のマスター、ルマス・プライマリが入院している病院と病室を彼女に伝え、仕事帰りのサラリーマンのようにソファに持たれかかる

ライダー陣営との交渉、その帰り道にキャスター陣営を…いや、正確に言えばキャスターだけと接触できたのは幸運だった

「…ここに来てビーストかあ、グランドクラスとは会ったの?」

「おー、会ったよ? 浮気性などところを除けば頼りになるやつさ」

なにそれー? と笑うキャスター…ダヴィンチだったがその表情には余裕が無い

「下の召喚陣が作動してたからまさかとは思ったけど…そうか、そうなんだ」

「間違いなくこの聖杯戦争で最高の戦力だよ、しかしまあビースト側が黙ってやられるとも思えない」

生前から忘れたことのない教訓の一つ。『常に最悪の状況を想定すること』

守りが得意な理由の一つでもある。

もしここで敵が現れたら? もし物資支援が届かなかったら? 生前からそういう想定をするのが日常茶飯事だった、そして今回の場合は…

——もし、オリオンが負けたら?

「彼が万が一負けることも考えて手は打っておきたい、アンタの技術

はビーストと戦う上で強力な武器になると俺は思ってる」

「おお…ギリシヤの大英雄にそう言ってもらえて嬉しいね！」

チラチラと自身のマスターが起きないか確認しつつ小声で喜ぶそぶりを見せるダヴィンチ

「確かにビーストが関わっている以上この先何が起こっても不思議じゃない、こちらでもバックアップの1つか2つ取っておくことにするよ」

「助かるよ、それじゃ伝えるべきことは伝えたし先の短いオジサンは帰るとするかな」

礼を言っつてその場を去ろうとして——ダヴィンチに呼び止められる

「なんだい?」

「いや、代わりと言っつてはなんだけどき?…ホムンクルスの素材を分けてくれないかな?」

「ホムン…なんだつて?」

）

時は戻りへクトール（ホムンクルス）覚醒直後

鋳物工場 従業員用駐車場にて…

「あら?先客が居たのかい、もしかして王様も手伝ってくれるクチですかい?」

頭部以外の全身を黄金の鎧で身を包み、あからさまに不機嫌そうな表情で腕を組んでコンテナの上から鋳物工場を見下ろすサーヴァントへ声をかける

「…英霊ですらない雑種もどきが、失せよ」

魔眼を持つているのかと誤解しそうな程の威圧、だが彼は全く怯むことなく言葉を続ける

「いやー、でも俺だけじゃアレは止められそうにないですし…助力願えませんかね、ギルガメツシユ王」

初対面であるにも関わらず真名を1発で言い当てたことに一瞬眉をひそめた英雄王だったが、その非協力的な姿勢が変わることは無く  
「我自らが手を下すべきは1つのみ、あの害獣は貴様ら雑種には荷が重かろうとわざわざ足を運んだ。その上でさらに助力を求めると？」

彼の気配が明確に変わる、これ以上はこちらの身が危ないと直感が告げていた

「失せよ、これ以上我の手を煩わせるな」

「…了解しましたよ」

それじゃあ、まア1人で張り切りますか

…

「…くだらん」

この手で裁くと決めていたノーア・クランツェルが何故か契約していた英霊に殺害されて、少々虫の居所が悪かった英雄王は小さく呟いた

「神に魅入られ、狂った結果がアレか？」

「フン、見るに耐えんわ」

↳

鋳物工場 溶鋳炉区画にて



「ふわー…寝起きに隠れんぼは嫌だなあ、ちゃんと痛くないようにするって約束するから出てきてよ?」

化け物が私達を探してる、チラリと見えた姿は最初と違い裸ではなく、両裾が破れたジャージとブカブカのカッターシャツを着ていた。きつと殺した人から取ったんだろう

さつきから化け物はカンが良いというレベルでなく、この暗闇の中かなり正確に彼女達を追ってきていた

怖い…

「心配しなさんなって、倒すのも止めるのもムリだが守ることはできるさ」

こちらの不安を察したようにホムンクルスと名乗った少年は私の頭を撫でる

…?

へんな感じ…

私よりちよつとお兄さんぐらいの歳にしか見えない彼の手は何故だかとても頼もしく、誰かに似ている気がした、それはまるで…

「あ、あれ?」

そういえばこの子、どこかで会ったことがあるような――

「彼女生身だしあわよくば溶鉱炉にでも突き落とそうかと思ったけど突き落としたところで多分ケロツと這い上がってくるし、そもそもその溶鉱炉が無いしどうしようかな?ダヴィンチ」

『とりあえず外へ出て身を隠そう、現時点で彼女をどうこうできる力は私達には無いからね』

また女性の声だ、というか――

「喋ってたら見つかったちゃうよ…!」

「あー大丈夫大丈夫、天才芸術家サンがオジサン好みの小細工してくれてるからね!

んじや移動するからナビゲートよろしく頼むよ」

言っていることは殆ど意味不明だがどうやらこれくらいの話し声ならば化け物には聞こえないようだ

女性はどこから喋ってるんだろう？

そんな疑問をよそに少年は私を連れて暗い屋内を迷うことなく歩いていく

『次右で〜制御室みたいなのが見えるから〜一旦出て回り込んで〜』

それにしても広い建物だ、まるでテレビで見た秘密基地のように入り組んでいて中々外に出れない

とはいえ迷いなく手を引く彼と遠ざかっていく化け物気配から恐怖心はある程度薄れてきていた

「？」

目が慣れてきたのか、うつすらと通路の端に何か見える

『電子ロックがかかっている、解除するからちよっと待ってて』

あの細長いのは……？

「あいよ…ん、嬢ちゃん？」

ギャブツ

「いっ!?!」

気になって伸ばした左手に噛み付く『何か』

これは…蛇?!?なんでこんなところに――

慌てて引き剥がそうとするも直後にそんなことはどうでもよくなった

ぺたぺたぺたっ

それまでフラフラと彷徨っていた化け物の気配と足音がいきなりこちらへ方向を定めて向かってきたからだ

『ロック解除!走るんだ!』

「言われなくても逃げるさ!!」

私の手に噛み付いた蛇を払い除けながら、破ったのか開けたのか分からないような勢いで彼はドアを蹴り飛ばし、文字通り死に物狂いで走る。

…!来てる!

後ろの気配は離れるどころかしつかり近付いてきている

「できりやあこんなもの使いたくないんだがそうも言つてられんなつと!」

走りながら背後の気配に向かってfrisbeeのように彼が何かを投げる

一体何なのかと理解するよりも早く耳を塞ぎたくなる爆発音が響く

「やつこさん、どう?」

『ピンピンしてる!』

ああそうかい!とヤケクソ気味に言った彼が次に取り出したのはまたもやfrisbee爆弾、だがさっきのものよりもやや大きいように見える

「じゃあ閉じ込めてみるかな!」

背後の闇では無く天井へ投げつけ、さらに走る

「うわああつ!」

2秒前まで私達がいた場所の天井が崩れ落ち、通路が塞がる――が

「つたく!足止めにもならないねえ!」

ダンパーが激突したような音と瓦礫が崩れる音が後ろから聴こえる!

『でも出口はすぐそこだ!こらえるんだ!』

外に出ればいくらでも攪乱する方法はある、女性のその言葉を希望

にがむしやらに前へ…!

ぴと

っ…!?

今、真後ろに——!

「追いつかれ「みんなそこをどいてっ!」

いきなり聞こえた少女とも女性とも聞き取れる声と前から差し込む強烈な光、それにイチ早く反応した彼が混乱する私を抱き抱えて突き倒す形で出入口から外に出る、そして——

『トライスター! プリモアモール身の程知らずの少女の愛矢!』

外にいた女性、片腕を失くしている彼女は、どうやったのか弓を引き絞り、青い稲妻の様な弓矢を出入口目掛けて撃ち込んだ

直後、まるでネズミの巣に爆弾を投げ込んだように建物が消し飛び、瓦礫が舞う

「うおっと!?!危ない危ない…ダヴィンチ、今のが援軍かい?」

「いや違う!流石の私も神霊の知り合いは居ないよ!?!」

「でしょーね!俺のカン違いでなけりやあ、ありやギリシヤの神の誰か…うん?」

彼が何かに気付いたのか土煙の一点を見つめている

…?何かこつちに来て…え、熊のぬいぐるみ?

「よお、お互い変わり果てた姿だな?」

煙の向こうから現れたフレンドリーなぬいぐるみが彼に話しかける

「…まさかお前、オリオンか?」

「まあな、ここは俺達に任せて一旦逃げろ！」

後でいくらでも説明してやる！と捲し立て、この殺伐とした空間に似合わないぬいぐるみが弓の女性の方へ駆けていく、更には――

「予測よりかなり覚醒が早いですねえ」

「やれやれ…そんなこと見たら分かる」

「え…」

その2人組は何の前触れも無くいきなり目の前に現れ、一瞬こつちを見たもののすぐに崩壊した建物の方へと視線を戻し、歩いていく…

「…救援が誰なのか、言わなかった理由はこれかいダヴィンチ？」

『分かっているさ、でも彼女が無作為に暴れ出すのを力で止めるのはほぼ不可能だ』

「いやいや！気にしなさんなって、確かに俺たちには止められないしこの方法なら共倒れも狙えるかもしれない。いいと思うよ俺は？――ただまあ、先に伝えたいは欲しかったなア」

口調は柔らかかなままだったが私には分かった、いや彼の今の顔を見れば誰でも分かる

怒っている、物凄く。

「つと、立ち話をしてる場合じゃないしここを離れよう、どこか良い場所はあるか？」

だがそれもほんの一瞬、すぐに掴みどころのない表情に戻り、ダヴィンチと呼んだ誰かに質問する

『ナシヨナル・ギャラリー』という美術館跡地に向かって！そこで待つてるからね！』

「はいよ、んじや悪いけどもうちよつと付き合ってくれるかい？嬢ちゃん」

…

「…………ミラ」

「ん？」

「私の名前、ミラ・ツール。」

「そうか、俺はヘクトール、ホムンクルスのヘクトールだ。」

「もう少しよろしくな？…ミラちゃん」

## 第43話 再会の姉妹

コヤンスカヤの戦艦内 カジノルーム ポーカーテーブルにて…

「…」

テーブルの上に積まれた、ゲーム開始時からあった紫色のチップ30枚とコヤンスカヤから勝ち取った桃色の9枚のチップの計39枚から12枚を摘み取り、それをさらに4枚ずつ分け、その内の1塊(4枚)をテーブルの中央に置く

賭け金チップ3枚で始まったゲームは進めるごとに賭け金は倍になつていき、三回戦目で早くも<sup>12枚</sup>2桁へと突入していた

「ではカードをどうぞ！」

このまま勝てれば次のゲームは賭け金が24枚になりコヤンスカヤのチップが足りなくなつて、俺の勝ちになるだろう。

…このまま勝てれば、な

新調した桃色の左腕<sup>義手</sup>で、今配られたばかりの5枚のカードを手にする

種類は左から順に

♠の2、♣の2、♠のK、◇の9、♣の6。

そしてその5枚とバニーガールの格好をした<sup>コヤンスカヤ</sup>ディーラーを交互に見ながら思考を巡らす

…悪くは無いな

「コールド」

2つ目のチップの塊をテーブルの中央へ差し出し、カード交換の意思を伝える

「かしこまりました〜それで何枚交換されます?」

「……」

「………2枚交換だ」

「そのように♡」

◇の9と♣の6のカードを<sup>コヤンスカヤ</sup>ディーラーへ手渡し、新しく2枚のカードを受け取る

さて中身は――

「…」

◇の2と♡のKか、これで同じ数字が3枚と2枚できたから…

◇2 ♠2 ♣2 ♡K ♠K

『フルハウス』という役になる、確かまあ強い役のハズだ

自分の役を確認し終え、続いて<sup>コヤンスカヤ</sup>ディーラーの様子を伺う

「いやーん、そんなに見つめられたらワタクシ照れてしまいますう♡」

…読めないな

いつも通りにフザけ倒したその様子からは彼女が一体どんなカードを引いたのかは分からない、だが――

「さてお客様、<sup>C.o.i.e</sup>乗るか or <sup>f.o.l.d</sup>降りるか？どうされます？」

1回戦目、2回戦目と変わらぬ口調で彼女はこちらの意思を聞いてくる

…表情から考えは読めないがコヤンスカヤの性格は知っている

「――勝負はしない、降りる」

3つ目のチップの塊を自分の山に戻し、カードをオープンする

「アラまあ、しかし決めるのはプレイヤー様ですのでここは仕切り直しということ♪」

とおーっても残念ですう…とコヤンスカヤは兎の耳（本物かどうか分からん）をへたらせ、片手で最初の<sup>8枚</sup>参加料を回収しながら、もう片



方の手で持っていたカードをテーブルにヒラリとバラ撒いた  
…思った通りだ

♡ 7 ♦ 7 ♠ 7 J ♣ 1

「ジョーカー込みの『フォーカード』…やれやれ、食えない女だ」

強さとしては上から数えた方が早い役、もちろんフルハウスよりも強い役だ

「それはお互いサマということ♡」

初見で引き際を正確に見抜いたのはザイルさんが初めてですよ？」

「お褒めに預かり光栄だな、じゃあ期待に応えてギャンブルはここま  
でだ」

少々名残惜しそうな顔をしながらも淡々とカードを片付けていく  
コヤンスカヤ

それを見ながらふと右腕、ダヴィンチの作った黒鉄の義手に目を落  
とす

今はまだなんとも無いが…早いうちに取り替えた方が良いだろう  
な

「右腕は用意できそうか？」

「それは…現状では難しいですね

切り落とされたザイルさんの左手首を元に作った義手左手とは違い、そ  
ちらは中身が完全に未知ですので…全く新しい義手を用意するに  
しても一度ダヴィンチさんの義手を外して色々測る必要があります」

だろうな

「ですが一度外したら——」

「再びくつつけられる保障が無い、か？」

「そうですね」

やるとすれば全て終わった後、か

今更だがこの義手右手はかなり高性能だ、擬似魔術回路の他には例えば  
…触覚、物を触れた時に生身と変わらないような感覚を伝えてくれる  
あと以前にも使ったが通信機器としても使える、しかも機械に魔術  
を混ぜるような使い方のお陰か盗聴、傍受、探知が一切不可。  
他にも色々あるがキリがないので割愛する。

…やれやれ

以前『愛玩の檻』でコヤンスカヤから言われた言葉が頭に浮かぶ  
頼りすぎていたな、これは

「おいコヤンスカヤ」

「はい、なんなりと〜」

もう少し鍛錬するべきだろう

「もう一度『檻』を出せるか？鍛錬したい」

「おや？おーやおや？良いんですか？」

妖艶な笑みを浮かべ、誘惑でもするように尻尾を揺らす彼女は目に見えて機嫌が良さそうに見える

「ああ、千切れた『尻尾』もいくつか戻ったようだからな、俺に合った  
練習相手くらい用意できるだろ？」

それを聞いた彼女の表情が一瞬固まる

「…いつ尻尾についてお気付きに？」

「ポーカーを始める30分前、お前が鼻歌を歌いながら尻尾の手入れ  
をしている時だ。」

…やれやれ、浮かれ過ぎだ」

こちらが見ていた事に気付かない、というだけで彼女がいかに気を  
抜いていたのか分かる。手入れの最中ずっと頬が緩んでいたしな

「う…申し訳ありません、ザイルさん」

「ここはお前の戦艦だ、敵が居ないと分かりきっていたのかもしれん

が…

…いや、いい、特に問題があったわけじゃないしな」

欠伸をしつつ左手首の動作確認をしながら、そういえば檻の中で左腕はどうなるんだろうか？なんて考えていたが、それを引き戻すようにあわわわした彼女が詰め寄ってくる

「あの一、聞かないんですか？『その尻尾は結局なんだ一？』とか『なんでそんなに嬉しそうなんだ一？』とか」

…やれやれ

休暇の夜にも似たようなことがあったな、と2度目の欠伸をしなが  
ら思う

「今はプライベ<sup>屈</sup>ート<sup>ネ</sup>に踏み込めるような契約はしていないからな、セ  
クハラでギヤーギヤー騒がれたら面倒ってことだ」

ははっ、と乾いた笑いに彼女が目丸くする

「え、あのザイルさんが冗談を言った上に乾いてるとはいえ笑いを…  
？あの、あの…え？…気でも狂いましたか…？」

「そうかもしれないな、ああ…忘れる」

相変わらずクチの減らない奴だが俺自身、それが殆ど気にならない  
程自分の変化には驚いていた

「…かしこまりました、ひとまず『愛玩の檻』の展開準備をしてきます」  
「分かった」

喜びと困惑が入り混ざったようにフラフラと尻尾を揺らし、彼女の  
姿が消える

準備が出来ればまた連絡が来るだろう

「さて、確かドリンクバーがあったな」

基本的にただ黙々と『目的』を作り、そこへカーナビの着いた車の  
ように無機質に向かっていたのが俺だった、寄り道<sup>娯</sup>なんて考えもしな

かった

だが今は――

「…」ぐびっ

少し、楽しいな

(ザイルさん！)

「どうした？」

いきなり届いた念話のせいで一瞬俺の考えていることが伝わったのかと少しだけ警戒したものの、どうやら違うらしい

(彼方さんが覚醒しました！)

「分かった」

もう覚醒したのか？ 予測よりも随分と早いな

と、その直後鳴るはずのない音が義手から聞こえてくる

ピピピピッ

呼び出し音…

「相手は――！…！」

…何故こうも面倒事が増えるんだ？

く

K地区 鋳物工場跡地にて…

「やれやれ…」

ダヴィンチを騙って俺の義手にわざわざ連絡をよこしてきたのが誰なのか知りたかったが…そんなものは後でいい

今すぐ艦内の部屋に戻りたいがそれも言ってもらえないようだ

最悪な気分のまま、今もなお崩れ続けているかつてのアジトへ歩を進める

…念のためにいっておくがアジトにもウルフルズにも団員にも未

練なんてものは無い、むしろ吹き飛んで精々しているくらいだ

問題は――

「ついさつき会ったばかりだぞ？勘弁してくれ…」

土煙をかき分けて『問題』と対面する

「や、やっぱり彼方が2人??？」なんで…？

「あつ、お兄ちゃん！」

「――ハア」

また面倒なことになったな

まずは私俺…いや彼方と思われる少女の姿が目に入った、嫌が応にも。

俺と言う抑制装置が無くなった影響か彼女の姿は以前心象風景で見た姿よりも異質なものになっていた

言われなければ分からないほど色彩の割合が少なかった黒髪は余す所なく透き通った空色に染まっており、子供に見合わない長髪を押しつけるように額――右目の少し上から歪な形をした紫色の角の様なものが突き立っている

またその角の影響か正常な左目とは違い右目には白目の部分がないつだかのコヤンスカヤのように真っ黒になっていてその中に光を失った赤い瞳が生氣なく張り付いているように見える

服装は、いや服装と呼ぶのも微妙な布切れはおそらく残留団員から奪ったものを血で貼りつけたのだろう、パツと見た感じカッターシャツとジャージズボンだがところどころ破れている場所を補うように他種類の衣服がくつつけられている

そしてその手の中には貯水槽に沈められていた剣が以前には無かった勾玉をいくつかぶら下げて蘭々と輝いていた

そしてこっちは――

：

以前はしつかり見ていなかったが遥も遥でおかしい

服装こそ普通なもの肌が異常に白く、纏う気配も彼方とはまた違う非人間らしさといふべきものを纏っている

「…全身グチャグチャになっても、呪いで身体が崩れかけても、変わり果てた妹に絶望しても、腕を斬り落とされても、獣に精神を磨り潰されても、まだ立つてくる、まだ諦めない、まだ――その手を差し伸べようとしてくる。」

やれやれ、姉さんはある意味クライムより強いな」

「彼方…？」

「確かに血は繋がっているし俺自身でもあるがややこしいな…俺は彼方じゃなくザイルだ、影月 彼方はその剣持ったバケモンのことにしておけ」

呼応して「そうだよー」と気の抜けた返答を返す俺に俺はいつでもライフル弾を撃ち込めるように構える

お前に落ち度は無いし頼んでおいて言うのも心が痛むが――とんでないものを作ってくれたなコヤンスカヤ？

サーヴァントとは全く違うドス黒い神秘の気配、注意深く感じ取らなければ神秘の気配であることすら分からない異質なもの。

(正直ワタクシも切り離れた時に力の6割強ほど彼方さん側に行くと思ってたんですがガツツリ10割行くとは…)

貴方彼女愛されてますねえ？とクスクス笑う声を聞き流しつつ彼女らの出方を伺う

さてどうするか？

当初は影月 彼方を言いくるめて回収し、即座に撤退しつつコヤンスカヤに先の通信の発信源を特定させて排除、又は監視をさせること

だった、が。

「ようハル！あいつらは避難させたぜ！」

「ありがとう！」

影月 遙が出てきたことでそうも行かなくなった、やや不安だが交渉しにいくとしよう

「調子はどうだ、彼方」

「すごくスッキリした気分！」

「…ホントに彼方なの？」

えっへへへと笑いかける彼方の顔を見てやや緊張が解けたのか遙が呟く

「そうだよ？影月 彼方！私、わた、わ、はっ、く…ぐじゅっ！」

血塗れの身体に似合わない鼻水が年相応(?)の汚いくしやみでべったりと彼方自身の顔に張り付く

「うええ…」

「…やれやれ」

俺の元となった人格であり、少女。

彼方からザイルに変化するその時まで俺は表に出ない人格として静かに彼女を、いや彼女達を見てきたが…

「あ、ああもう！ホラ顔拭いてあげるから」

「ずびっ、ありがとう」

「…」

——影月 遙、影月 彼方、そして俺ザイル・ニツカー

こうして3人揃い、見比べて確信した俺は思わず頭を抱えた

何も変わっていない、何も成長していない姿に。

人から受けた理不尽を怒りに変えて、人類を殺す形を取ったザイル

ヒトから受けた理不尽を憐れみに変えて、人類を人として認識することをやめた彼方

そして、人類も俺たちもまとめてハッピーエンドに向かうことができるかと未だに考えているクソみたいな自己犠牲精神を抱えた遥

ああ――

「吐き気がする」

「吐き気？お兄ちゃん大丈夫？」

「…ただの比喩だ、それよりも帰るぞ」ここに用はない

これ以上の面倒事はごめんだ

「うん！」

予想に反して彼方はすんなりこちらの指示に従ってくれた、ように見えた

「…オイ、その尻尾はなんだ」

「…？ただの尻尾だけど？」

彼方の背中だか尻だかからにゆるりと生えた、長さ1メートル強はある紫色の尻尾

別に尻尾が生えていることに対して驚きは無い

気付いていないフリなのかそれが当たり前なのか、尻尾の先が遥の右手首に絡みついている。彼方は何も言わなかったが『お姉ちゃんも連れて行く』とその態度が物語っていた

…そしてどうやら遥も着いてくる気らしい

(連れて行くんですか？)

冗談じゃない、絶対にごめんだ

「遥を離せ、バカなことやってないで来い」

「やだ」

…



俺のオリジナルはこんなクソガキだったか…？  
後ろから笑いを堪えたコヤンスカヤの声が聞こえる  
うるさい黙れ

「お姉ちゃんをこんな化け物だらけのところに置いていけない、なによりも——家族に置いていかれる辛さはお兄ちゃんも分かるでしょ？」

それは…

「——ああ、知っている。だがダメだ」  
頷きたくなるのを堪えて返答を返す

「心配しなくても遥はお前が化け物だと呼んでいるヤツらよりよっぽど化け物だ、俺たちと違って味方は沢山いるだろうし死にはしない——  
—彼方？」

「お兄ちゃん」  
殺気。それまで微塵も感じなかった怒りともいえる感情かドス黒い神秘を纏って放たれる

『蛇神の重圧』

「グ…!？」

なんだ、この——  
まるでタールの海に放り込まれたように身体が重い！

「お姉ちゃんは化け物じゃない」

焦りすぎたか…!

自分自身のことだ、姉のことを化け物にしてしまった後悔は知っていたハズなのに

「いくらお兄ちゃんでも、それは許さない」お姉ちゃんは少し離れてて

義手に負荷がかかるがそんなことを言っている余裕はないらしい

「…っ『レオレオ！環境適応強化！』」

地面に押しつけられるような重圧は幾分マシになったが身体はまだまだ重い

おいコヤンスカヤ、動けるか？

（伊達にビーストやってませんよ？こちらは問題ありませんが本当に戦うおつもりで？）

…ああそうだ、手を貸せ！

（かしこまりました！…ハードな仕事内容になりそうですねえ）

冷や汗をかきながらも余裕の表情を崩さないコヤンスカヤにアイキヤツチをして戦闘態勢へと入る

「早速だけど案内人さん、力を借りるね？

——恐れよ」

開戦と同時に身を隠す。狙撃、不意打ちを中心に立ち回る。間違っても正面から戦おうなんて思うなよ？

（言われなくたってそんなバカなマネしませんって！）

「敬え 崇めよ」

しゅん…

「人智の及ばぬ力をここに」

しゅん…

「神威抜刀——」

## 第44話 カミ

K地区 鋳物工場跡地にて…

「  
」  
あの子は、普通の子供だった  
他の誰かよりも少し外見が違うだけの普通の子、その筈だったの  
に。

「 神劍 草那芸之大刀 」

ヒトならざる力を振りかざす妹の後ろ姿を呆然と見つめながら私  
は私自身に問いかける

『いったいどこで間違えたのか』

外見の変化ではないし神の力でも無い、そんなものがあるうがなか  
ろうが彼女が私の妹であることに変わりはない

——でも

私は見た、見てしまった。

彼方が楽しそうに、嬉しそうに、人を殺しているのを。

しかもその相手はみんな彼方にとってなんの関係も無いのは殺さ  
れた人達の会話で理解している

「ふうっ、じゃあお姉ちゃん！すぐ終わるからちよつと待っててね！」

「ま、待って…」

私のか細い静止は届くことなく彼方という、かつて人間だった少女  
は肌の色に似合わない紫の尾を振りながら駆けていく

戻ってきて

「彼方——」

今ここで止めなくちゃいけない  
無防備な妹の背へ月女神の弓を向ける

セイバーさん達はまだ来ていない、私が…私がやるしか――

『お姉ちゃん』

「…っ」

標準が定まらない。それは司令塔であるオリオンが不在であるのも要因の一つだろうがそれが全てで無いのは明白だった

理屈は分からないがザイル・ニツカーの正体も彼方なのは間違いない、それが理由か彼方はザイルを殺そうとはしなかった、でも

：彼がたった一言、私を『化け物』と言った瞬間、彼方は豹変した  
姉を侮辱した者は例え自分自身であろうと容赦をしない、それほどまでに彼女にとって遥という家族の存在は大きかった

その彼女を、私は裏切るの…？

彼方だと分からなかったさっきの一撃とは訳が違う

おもちゃの鉄砲ですら当たると確信できる程の無防備な背中は、  
きつと私以外に向けられることは無い

「私――「撃ってもいいよ」

――え？

いつの間にか彼方の足が止まっていた、顔はこっちに向いてないけど…とても優しい表情をしているのが声から分かる

「お姉ちゃんは優しいからきつと私以外も助けようとする、その結果私を殺そうとするなら、それでもいいよ」

「殺そうなんて、そんなこと――」

そんな、こと

「お姉ちゃんが人間だと思ってる生き物を本気で守るつもりなら私を殺すしか無い、それはお姉ちゃんも分かっているでしょ」

「それは…」

いくら無防備とはいえ神の気配を匂わせる彼方を止めるには全力で攻撃するしかない、その結果彼方が死ぬこともあり得たが私はその可能性を見ようとしなかった

「大丈夫、そうして悩んでくれただけで私は嬉しいよ

それにもし悩まなかったとしても私はお姉ちゃんの味方だからね——永遠に。」

またあとでね、と振り返った彼女は血塗れの顔に太陽のように明るい笑顔を一瞬見せて再び駆けていく

——撃てない

「撃てないよ…」

「イテテ、よーやく戻ってこれた…お前の妹家族以外にや容赦ねえな！

むぎゅっ、ハル？」

縫るようにオリオンを抱きしめる

「オリオン…ねえ、私、どうしたらいい…？」

自分同士で争う彼方を前に、私は何もできなかった

く

「あれで本気じゃないだと？」

隣地区の建築物が見える限り消し飛んだのを尻目に瓦礫の影から影へ移動しながらボヤク

(劣化しているとはいえ神の剣ですからねえ、彼方さん自身も持て余してるんですよ

真価を發揮したらどうなるかわタクシにも予想が付きませんし)

「……ハア」

こんなバカな戦いをしているヒマは無いんだがな

(同感ですわ、それに今は静観しているようですが——)

…ああ

右腕義手の規則的な警告音がさつきから体内に響いている、1つはこの重圧に対応できなくなる時間が近づいているという警告、もう一つは：  
サーヴァントアーチャー、英雄王ギルガメッシュ。

経緯は知らんがダヴィンチ、もしくはノーアは後方200メートル程で静観しているサーヴァントを知っていたらしく、近付くとご丁寧に『危険ですよ』と知らせるようにプログラムしていたらしい  
(彼と戦うのはもつと後、ひとまず彼方さんを落ち着けましょう)  
分かっている

工場地区から外れ、道路を挟んだ向こう側。寂れたマンションの階段を上がる

さてと

手には戦車の鉄板をもスポンジのようにブチ抜ける対物ライフル。マトモな方法で用意された兵器ではなく、側面にはNFFサービスのスレッカーが貼られている

まずは試しに1発：

コヤンスカヤが予め剣に付けていた発信機を頼りに壁越しで照準を定め、そして撃つ

ドゴオツ

およそスナイパーライフルの撃発音とは思えない音を撒き散らし、コンクリートの壁をコルク栓をくり抜いたように抉り取りながら目標へ向かって一直線で進む弾丸、しかし——

…当たりはしたが効いてないな

『霊核を正確に射抜けばサーヴァントだろうとイチコロです♡ま、生身の人間にとつて当てるまでが至難の技ですが。』

キレイに風穴の空いたコンクリートの壁を見れば艦内で聞いたその言葉に間違いが無いのは分かる、しかし防ぎすらしらないというのは

「お兄ちゃん 見いつけた」

フザけた速度で接近してくる彼方が穴から見える

やれやれ…

動きの一つ一つが戦車のように重いライフルの薬莖を排莖し、ヒトで無くなった瞳目掛けて弾丸を撃ち込む

「！」

しかし彼女が微動だにしていなくても関わらず1発目と同じように弾丸は防がれた、そしてその時一瞬見えた紫色に光る壁のような物はまるで――

鱗か？

彼方が来る――

「えい！」

まるで豆腐を刺すように突き出された剣が頬を掠めたのを認識しつつ、次の行動に移る――といっても動くのは俺じゃ無いが。

「ハイ、回収〜」

『単独顕現 EX』

…とまあコヤンスカヤに自分を回収させて距離を取る、それだけだフラフラとこちらを探している彼方をアパートの屋上から遠目に

見ながらコヤンスカヤから情報を聞き出す

「で、どう思う?」

「ん〜:英霊化してるワケでは無さそうです、単に案内人:~というか伊吹童子の力が前面に出てきてそれが彼方さんを守ってると言ったところでしようか」

「伊吹童子?」

初めて聞く名前に若干首をかしげたものの、俺の反応を分かっていたらしくすぐにそれが神の名前であることを教えてくれる

「そうか、それが分かればいい」

「使います?一応彼方さんは敵では無いのに」

「まあな」

確かに少々勿体無いが――

「敵より厄介だ、構いやしない」

…!彼方がこつちに気付いた、離れてる

(はいはい)

奴が自身の身丈の倍はある剣を構え、サーヴァントとそう差の無い速度でこつちに突進してくる

だがどれだけ速かろうと彼女のはなんの工夫も無い直進だ、それに向かってくれば対処はできる

俺はライフルからマグナムに銃を持ち替えて――

「少し頭を冷やすんだな」

「むぎやっ!?!」

特製の鉛玉:否幻想弾を撃ち込んだ

鱗の防護壁をすり抜けたのは予想外だったらしく、バランスを失った身体はその速度を持て余して派手にすっ転んだ

「――え、え?」



この至近距離なら防壁もクソも無いな

『レオレオ、打撃強化』

困惑し足元に転がる彼方を引つ張り上げるように立ち上がらせ、フ  
ラリとスキだらけになった顎を

「フツ！」

渾身の力でカチ上げた

「あ、あうう…」

…殺す気で殴ったつもりだったが意識すら失わないのか

しかし彼方は元人間、神の力を持っているとはいえ顎への一撃は流  
石に効いたらしく崩れ落ちたまま立ち上がる気配は無い

とりあえず暴れ出す心配は無さそうだ、艦に連れていくか

『レオレオ、強化解除』帰るぞコヤンスカヤ

引きずるような形で彼方の腕を持った瞬間――

ビキツ：

…おいおい

どうやら俺が思っている以上に彼方は人間から遠ざかっているら  
しい

音の発生源を見ると義手右腕の人差し指と中指部分にヒビが入ってい  
る

身代わりとして義手が砕けることはあつたが…こんなこと初めて  
だ

「あーあ、こんなに小さな子相手に大人気ないですねえ」

「言つてろ」とつとと帰るぞ

「ええ、かしこま――ザイルさんっ!!」

コヤンスカヤの叫びと彼方が動き出したのはほぼ同時、悪足掻きの  
ように振り回された剣の一太刀目はなんとか避けたものの返す刃が

迫ってくる

ツ…くそ

これは当たるか――

『 『

「う…おっ!?!」

避けられない筈の攻撃を避けた、理解できなかつたがそんなものは後で良いと強引に思考を押し戻し、距離を取ってマグナムを構える

…っ?一瞬コヤンスカヤの服装が変わったように見えたような――

――

(足場が悪すぎます!ここはワタクシが相手をするので一度地上へ!)

分かった!

恐らくまたコヤンスカヤに助けられたんだろうと結論付け、屋上から出る

「借りを返した後で本当に良かったです!

このじゃじゃ馬、少し躡けてあげましょう!」

## 第45話 兄妹(?) 喧嘩とその結末

K地区 鋳物工場跡地にて…

「ていー！」

「おっと」

ブンブンとおぎなりに振り回される剣を避けつつショットガン（イズマツシユ・サイガ12）を彼女の足首へ撃ち込む、が  
「うわあー！」

…やはり効きませんか

散弾は一つ残らず鱗の壁に弾かれて本体には届かない

一応怯むあたりあの鱗は防壁というより身体の一部に近いようです  
す

「まったく、どれだけ気に入られてるんだって話ですよねえ」

「この、このー！」

怯みから立ち直った彼方が再び剣を振りかざすが脳震盪が治っていないらしく攻撃の精度や速度はザイルと戦っていた時より大幅に落ちている

…弾丸を使うのもバカらしいですね

スローな斬撃を避け、剣を握る右手を思い切り蹴り上げる

剣は後で回収しましょう

（…凶器を落とすな）

どうやらザイルさんは既にアパートの下に出ていたらしく、文句を垂れる声が念話で届いてきた

こちらから短く謝罪をし、目の前の影月 彼方へ意識を戻す

「うう…ー！」

と、したところで彼方が逃走、思ったよりもダメージが大きかった

らしい

ザイルさんの方には行きそうに無いですが…どうします？

(追撃する、奴は俺にとって邪魔だ)

うーん、結局こうなるんですねえ

、

J地区 住宅街にて…

コヤンスカヤと共に彼方を追って住宅街へと入る

元アジトに設置されている発電機のおかげであの辺りはまだ明るかったがこちらは完全な暗闇、ゴーストタウンだ

「武器や身体の調子はどうですか？」

「問題無いが…さっきの打撃で右腕が損傷した、それに奴の脳震盪がいつ治るか分からない。その上で聞くがお前は戦いを長引かせた方がいいと言うのか？」

そしてそれを肯定する彼女の考え、今度ばかり全く検討がつかない。何を考えている？

「ザイルさんだって彼女を消すのは本心ではありませんでしょう？」

「それはそうだが…」

何か考えがあるのか？

「至極単純なことですよ、取り敢えず追いましょう」

暗視ゴーグル(NFFステッカー付き)を頼りに真つ暗な街を進んでいく

…言つとくが奴を消すのが本心じゃないとはいえ現状は居ても邪魔なだけだ、和解できないと分かれば俺は殺しにかかるぞ

(えーと…和解する努力はしてくださいね?)

善処するさ、心の中でそう呟いた時前方に例の神秘の気配があることに気付く、距離はまだ結構遠い

「鱗が出てくるかどうか分かりませんがとりあえずこれを。」

貫通力を高めた麻醉弾です。と明らかに麻醉弾に似合わない大きさの弾丸を渡してくるコヤンスカヤ

…麻醉弾にここまで貫通力は要らないと思うがまあいい

13ミリはあるソレをライフルに装填、弾丸の大きさが違うにも関わらず装填できたことに少しだけ驚きながら一番近い無人宅の屋根に登る

「お待ちください、あとコチラも！必要な時が来るので必ずザイルさんが使ってください」

そうして追いかけてきた彼女に手渡されたのは以前も見た注射器、作りはアーチャーに使った物と同じだが薬品の色が違う

(ではワタクシはワタクシで別の地点から援護致します、多分要らないとは思いますが♡)

『単独顕現 EX』

やれやれ…

ようやく静かになった空間で俺は一旦暗視ゴーグルを外し、先程ライフルへ付け替えたサーマルスコップを覗き込む

「…」

…あれか

サーマルによつて浮かび上がる人型のシルエット、ゆつくりと腰を下ろし、その頭部に狙いを定め…

「尻尾がある分、分かり易くて助かるな」

撃つ

「…!?〜!」

鱗の防壁が出てくることは無く、後頭部に麻酔弾が直撃し彼女の身体が倒れ伏せる

もう動かないか…?

しかしそう思ったのも束の間ですぐに立ち上がって走っていく

…コヤンスカヤ

(ええ、見えています。1発や2発撃っても昏倒させるのは難しそうですし気長に行きましょう)

やれやれ、面倒だな

〜

「かなり弱らせたと思ったんだが…アレで逃げるとはな」

左手の義手でアンチマテリアルライフルを支え、右手の義手で弾倉を込める

コヤンスカヤから預かった麻酔弾の内既に半数以上撃ち込んでいるが彼方の奴は未だに動いている

もし遥がここにいたら俺と彼方、どっちを助けるだろうか?

…考えるまでも無い、姉さんは常に弱い者を助けようとする。今の状況なら彼方を助けるだろうし逆に俺が窮地に陥れば俺を助けるだろう、それが姉さんの正義であり弱点だ

「…」

正義、か

俺は…世界で最も規模の大きい犯罪組織のリーダーというだけであって英雄でもなんでも無い、これからやろうとしていることに正義はあっても正しさは無い

「…いや、元リーダーか」

——聖杯は既に成った、既に聖杯戦争は終了した、つまりこれはただの殺し合い、ただ邪魔なものを排除しようとする戦い——

コヤンスカヤは和解できると言ったが無理な話だ、もちろん自分相手。和解自体はできるかもしれんが——影月 遥という大きな壁がある。

人類を皆殺しするにあたって遥が黙って見ているとは思えない、そして俺が一言彼女を侮辱しただけで彼方はあの有様だ

「…ク、クツ」

口から思わず笑いが溢れる

我ながらなんとも酷いな、とても俺と同一人物とは思えない

微塵も成長していない少女にとっては姉が全てであり、絶対的な正しきであり、正義。故にそれを汚すものに対して一切の容赦をしない  
こうして見るとクライムにも何処か通ずる物があるな？やれやれ  
…ああ、くだらない…唯一絶対の正しさなんてものは最初からこの世に存在しない、英雄だろうと悪魔だろうと持ちちゃいない、そのように出来ている…のだから。

人類個人個人が持つ正義を全て碎き唯一の正義として人間を殺す者になる。その為には当初は要らないと考えていた聖杯が必要だ  
(エラソーなこと言ってますけどようするに逆らう人間は皆殺し、逆らわない人間は時間をかけて罫り殺して意味ですよね?)  
…そうだな

考え事に割って入ってきたコヤンスカヤを押し退けライフルを握り直す

しかしまあ…彼方と分離前の俺に比べればよっぽど良い。あの頃は自分自身の目的を見出せなかった、だが今は違う。しっかりと目標

が目に見えている。

…だから俺は聖杯を取る。俺自身のために。

そういえば――

ふと、自分の願いについて彼女がどう思っているか聞いていなかったことに気が付いた

「…なあコヤンスカヤ、お前は どう思ってるんだ？」

「ええ、ええ、私は好きですよ？あなたのその考え方♡」

光の失われた黒い街に合わせた真つ黒なフルスーツの戦闘服を着込んだコヤンスカヤがセミオートスナイパーライフルのスコープを調整しながら声を上げずに笑う

聖杯に対するその願い。誰でも分かるような浅ましくて単純な、昔からまつつたたく成長していない人間を体現したその願い…ええ、とても♡

強大な力で潰し、支配する。その雑な手方はこれまで多くの権力者が辿ってきたものと大差無いもの。

そこまでなら彼女の、彼に対する評価は他の人間とさして変わらなかっただろう

だが他の人間と違う部分があった

彼には支配欲が無い、あるのは人間に対する憎悪。

人間全てが憎むべきもので無いということは彼も何処かで分かっているでしょう（ワタクシは全くそう思いませんが）

それでも憎むのはソレ以外の考えが生まれないから。

影月 彼方の中にあつた人間に対する怒りのみの感情が具現化したと言ってもいい存在の彼には憎む以外に何も知らないし知ること



もできない

故の皆殺し、そして支配…ふむ、支配欲が無い支配者とかタチ悪い  
ですなぁ♪

本当に愉快で、気を抜けば街中にその声が聞こえるくらい大爆笑し  
てしまいそうな彼の願い。

初めから終わりまで余すところ無く破綻したその願いの終着点、その  
終わりを見届けたい…

それがあの時、令呪が消えて尚彼との契約を続行した理由の1つで  
もある

もちろん命を救われた恩に報いるためでもありませんがね？

つまり彼の願い、それを知っているからこそまだ戦う、聖杯戦争が  
終了した今この時でも。

く

「ん…」

居たな…やれやれ、もう少し注意してればアツサリ終わっていたハ  
ズ——いや違うな。

神の力を持ち、身体が変質し始めているとはいえ否幻想弾が有効打  
となったのなら彼方はまだ人間だ

その人間の俺が対サーヴァントでここまで戦える方がおかしいの  
か、加えて戦っていた相手は『コヤンスカヤ』奴それも脳震盪を起こし  
たままで。

…手の届く近い高さに引きずり落とすただけでも良しと考えよう。  
ダメージが無かったらと思うとゾツとするな

スコープの倍率を上げ、確実に頭部に当たるよう微調整する

「――よし」

寝ろ

特に連携をとったつもりはなかったが彼方に麻醉弾を撃ち込んだのはコヤンスカヤとほぼ同時だった

流石に耐えきれなくなつたのかパタリと彼女の身体が倒れ込む

(上手く行つたようで何よりです、では――)

『単独顕現 EX』

「行きましようか」

「…ああ」

く

「う ぐう…!」

「呆れた、これだけ撃ち込んでまだ眠らないとは…ま、起こす手間は省けましたが」

「…」

コヤンスカヤに連れられ彼方の元に来たが――

「本当に言わせる気か?」

「もちろん!ザイルさんと彼方さん、性質は真反対ですがお姉さんを想う気持ちだけは変わりません」

「…」

気乗りしないが仕方ない、やらなきや永遠に進まなさそうだしな

「彼方」

「なに…?」

「…かった」

声が小さいですよ?ともはや煽りにしか聞こえない声を視線で黙らせ深呼吸して再度声を出す

「俺が悪かった、姉さんのことを化け物だと言ったことを謝る。姉さんにも後で謝っておく、だから落ち着け彼方。」

(なんとまあ…ヘツタクソな謝罪でまあ…まあ…)

「……」

…いい加減黙らないとダサイマフラーに加工してリサイクルシヨップに売り飛ばすぞ…?

生まれてこの方まともに謝罪なんてした事が無かったがこれで本当に和解できるのか…

出来なければ余計な時間消費と余計なストレスを溜めただけに――

「…お姉ちゃんがそれで許してくれるならいいよ」

と、こちらの想像とは裏腹にあっさりと敵意を無くした彼方に面食らいつつ懐の注射器を手取る

「よし、じゃあこれで和解だな？」

麻醉の作用を消す薬らしいから打つぞ」

「うん…え、注射?」

…やれやれ

注射にビビる神が何処にいる?と反撃の隙を与えず首元に注射器をブツ刺す

「うぎや——っ?!?!?」

「やかましい、ただの注射だ我慢しろ」

「いや、無表情でいきなり首に注射器刺されたら大人でも驚きますよ?」

「骨に阻害されず、かつ頭に近いほど早く効くと言ったのはお前だろう、目玉に刺さなかったただけ慈悲深いと思うぞ」

とまあ首元に刺した理由としてはこれが半分、もう半分は——単に

俺が彼方を嫌っているからというものだ

人類に対する憎悪とは違う嫌悪：元はといえばかつて影月 彼方自身の中にあつた『許容できない感情』を追い出した結果俺が生まれ  
たワケだ、互いに互いを好きにはなれない

…なれなくとも使えるならば使うがな

「酷いよお兄ちゃん！」

「酷くて結構、マトモに動けるようになったら遥に会いにいくぞ」

一応謝罪すると言つた以上離脱する前に遥には会わなくてはならない

…なのだが

「——やれやれ、コヤンスカヤ」

「ええ」

ポンポンツボンツ

気の抜けたような音と何かが落下してくる音を聴きながら慌てる  
ことなく暗視ゴーグルを付ける俺とコヤンスカヤ

そして飛来音の元を視認し俺がマグナムで4つ、コヤンスカヤがライフルで6つ撃ち落とす

今のは迫撃砲…ということとは

「各隊包囲陣形…！付近の隊と連携しつつ迫撃砲装填！及び補給物資<sup>武器類</sup>  
搬入を急げ！」

「またですか？」

「まただな」

「？…うわっ!？」

わざわざ持ってきたのか停電であることを忘れさせる程の明かり  
が住宅街を照らし出す

こちらを取り囲む気配を無視し、呆れつつ何度も聞いた怒鳴り声の方へ意識を集中する

逆光で見えないが誰なのかは見るまでもなく分かる

「ノアとの戦闘で重傷を負ったと聞いていたが元気そうじゃないか？」

…クライム」

「俺、が…銃を手放すと、すれば…死ぬ時か——

お前を！殺す時だけだ！ザイルツ!!」

まったく、往生際の悪い男だ

それにしても周囲に感じる気配の数…おそらく基地から相当数連れて来ているな

「どうやら奴はここで終わらせる気らしい」

「退去しかけのバーサーカーを見ればその動きも当然かと、どうします?」

バーサーカーが魔力不足で退去するまで隠れる手もありますが、というコヤンスカヤの提案を拒否し、ライフルの麻醉弾を実弾に装填し直す

「好都合だ、クライム達とはここで決着を付ける。コヤンスカヤ、お前はアーチャーを警戒しつつバーサーカーと交戦。俺に寄せ付けるな。…彼方」

「何?身体ならもうだいたい動けるよ!」

…よし

「戦闘が始まったらクライム以外の敵を殺せ、殺しまくれ。いいな?」  
「?はい」

俺と一度戦い始めれば奴もそう簡単に離脱はできない、これが奴の

最も嫌がるやり方だ

前方に現れる弱々しいサーヴァントの気配を感じとり、全員が戦闘体制に入る

——コヤンスカヤ

(はい、いかがされましたか?)

「…」

——彼方から目を離すな

もー分かつてますよ!

「…ならいい、行くぞ!」

「魔力タンクはもう無い…!ここで終わらせるぞ土方ツ!」

「ああ…!」

## 第46話 不碎の意思

J地区 住宅街にて…

「わあく…沢山連れて来たんだ、ねエ！」

「な、なんだこの子供!?!化け物か!?!」

「っ！土方！」

「分かってる！」

包囲網を敷く隊員の1人に触れかかった少女の手を土方がアサルトライフルで弾く

「角のガキには近付くな！中、遠距離から衝撃の強い弾丸を撃ち込んで遠ざけろ！」

「お前らの仕事はあくまで戦闘では無いことを忘れるな！」

ザイル達は俺と土方に任せろ！」

「…コヤンスカヤは数ブロック離れて戦闘準備、バーサーカーが追ってくるだろうから潰すまではこっちの援護はしなくて良い」

「かしこまりました！」

じゃあバーサーカー…新撰組の土方歳三さん、でしたっけ？場所を変えましょうか！」

アサシンとは思えない（アサシンと呼ぶのもおかしいかも知れないが）余裕たっぷりの発言に若干苛立ちを覚えながら土方に予備の弾薬パックをいくつか手渡す

「正念場だ土方、無茶をするなど言うつもりは無い！」

どんな卑怯な手を使っても構わん！あの女狐にこれ以上好き勝手にさせるな！」

「ああ任せろ！だがお前は無茶をするな。

お前は言わばここら一帯にいる米軍の核と言ってもいい人間だ、お

前がくたばるような事があれば——この隊、本当に全滅するぞ」

「——分かっている」

「ならいい……死ぬなよ、クライム」

「ああ」

そもそもこの作戦は全てが良い方向に転んだとしても俺も、土方もタダでは済まないし、何より——

「くそ、英霊くずれめ」

この作戦が終わったらブン殴ってやる、と拳を握りしめながらコヤンスカヤを追って光の届かない住宅街の奥へ消えていく土方を見送り、改めて俺の戦うべき敵へと意識を向ける

「やれやれ、仲間が大切なら置いてくるべきだったんじゃないか？」

「あいにく俺の部下はどうしても着いてくるって言って聞かない奴ばかりでな？部下のご機嫌取りをしていたお前とは違う！」

左手にマシンピストルのTEC—9、右手に土方の火縄銃を構えザイルと対面する

ズキン

「ッ……」

胸に走る鈍痛を抑え込み、銃口をザイルに向ける

(くっ、そ……あの科学者に蹴られたダメージが……！)

いや銃が握ればそれでいい、俺はまだ立っている！俺はまだ戦える！

「俺の相手はお前だ、ザイル！」

「誰も彼もロクに成長しないな、ここまで来ると笑えてくる」

妙なステッカーが貼られたトカレフにマガジンを叩き入れこちら同様戦闘体制に入るザイル



ザイルとの距離は約6.7メートル……ここから――

ザリ……

!!

ガンッ

本能の警告に従って振り上げたマシンピストルが首元を狙ったコンバットナイフの斬撃を防ぐ

コイツ今どうやって……!?

「……コンテナ置き場でも見せた覚えは無かったんだがな、やはりお前はここで殺すべきらしい」

「ぬかせッ!」

ナイフと銃による歪な鏢迫り合いを力技で押し返し、そのままマシンピストルを連射。

「芸の無い奴だ」

瞬間移動と言われても納得してしまえそうなザイルの動きに弾丸は掠めることもなく丸々1マガジンを空にする

普通の動きじゃない……速さじゃ、ない?

トッ

!!まずい――

大して強く蹴っていないであろう微かな足音を頼りに急所を守るが――

「……なるほどな、反応していたわけじゃなく咄嗟に急所を守っていただけか」

すぐに殺すつもりはないといわんばかりにマシンピストルを持つ腕へ深々とナイフが刺さっていた

「チィッ!うおおおおおっ!!」

自由に動かせる手で火縄銃を奴の心臓目掛けて撃つが、またしても

避けられる

「どうということだ…?!以前のザイルとは動きが…?」

それによく見れば動き以外にも差異があった

左腕が義手になっている。セイバーが斬ったものだろうか…：こんなにも早く義手を用意してくるといいうのもおかしい

ザイルの左肘から先はおよそ戦場に似つかわしくない桃色の義手が装着されており、手の甲…：指の付け根部分と言えはいいか？親指を除いた4箇所ガラス細工のような何かが取り付けてある

手に持っているハンドガンと背中に背負っている対物ライフルも今まで見たことの無いもの——ぬ?!」

バシッ

「どうした、考え事か？」

「答える必要は、無い！」

足払いに蹴りを打ち込んで相殺、そこから腕に刺さったナイフを投擲してそれがザイルへ届く前に火縄銃本体を叩き込む

「ツチ、野蛮人め」

『人』ですら無いお前に言う資格は無いッ！」

叩き込んだ火縄銃をそのまま掬い上げるように振り上げ、その勢いを利用して持ち替え、引き金を引く

片手でロクに踏ん張りもせず撃つため火縄銃は反動であらぬ方向へ転がっていったが弾丸は発射された

『レオレオ、打撃強化』

キャスターの腕に似た右腕で弾丸を叩き落とし、目を疑う速さでハンドガンを構えるザイルとそれに負けじとマガジンを装填し直しマシンピストルを向けるクライム

引き金を引いたのは同時でそれぞれから見て右に向かつて回避したのも同時、側から見れば円を描くように駆け抜けながら互いの左頬を互いの弾丸が掠めていく

あと少し――

『レオレオ！脚力強化!!』

ダンツ

こちらの弾丸が顔面を捉えかけた瞬間、奴の身体が影だけ残し真上に消える

跳んだ!?

それだけ認識し、咄嗟に飛び退いて弾丸をなんとか回避しようとするが――

バスツ

「ツ〜!!!」

足に1発…!

右足を撃たれたが痛みを感じているヒマは無いしここで転んだりすれば待っているのは死だけ、と思考を上塗りし反撃に出る

今のが6発目――トカレフ残弾数残り2!

火縄銃を拾う余裕は無い、奴の着地と同時に残弾を全て叩き込む!

4発残ったマシンピストルを構え前へ飛ぶように走っていく

もちろんザイルが黙って近付かせるワケが無く、真っ直ぐ走っていくクライムに向けてハンドガンを撃つ

着地した瞬間の僅かな隙をカバーするために放たれた牽制の2発。下がるか横に飛べば簡単に避けられる弾丸に微塵も速度を緩めるこ

となく突っ込む

まだ防がれる距離だ、あと少し近付かなくては――

「ぬ、ああっ！」

右脇腹と左手小指に走る鋭い痛み、ノアとの戦闘で改造戦闘服が破損し通常の戦闘服を着込んでいた彼にとって脇腹からの出血と千切れ飛んだ小指は決して軽いダメージでは無かった、だが――

2発……！トカレフ残弾数、無し！

痛みとして内側から湧き上がる警告を無視し、さらに駆ける

俺の方が早い！奴が着地するよりも、俺が近付くほうが早い！

着地の瞬間！ここだ――

ドゴオツ

数少ないチャンスに最後の4発を撃ち尽くすが轟音と共に一瞬浮き上がったザイルにそれが当たることは無く4発とも闇の街へ消えてゆく

背負っていたライフルを撃つたのか！

尋常ではない撃発音を立て、くるりと宙で1回転したザイルがその慣性を利用しカカト落としを繰り出してくる

避けられない……！

「なら――」

魔術で強化されているであろう一撃が身体に触れる直前、背負い投げの要領でその足を抱え込み、

「ウオリアアツ!!!」

そのまま全身を半回転させてジャイアントスイングのように投げ飛ばす

あと残ってる武器は……よし！

「地獄へ行けエツ！」

手品師の早業の如く手榴弾のピンを弾き抜き、飛んでいくザイル目掛けて投げる

…だが互いに人間が作った兵器を使う以上、思考は似かよるらしい  
ヒュッ

クソツタレ！

眼前に迫る投げたものとは別の手榴弾に空のマシンピストルを投げつけて止め、両腕を交差させて顔を守る

「ぐあああ…!!」

互いの近くで炸裂する手榴弾、少なくともクライムにとって予期せぬダメージであつたがそれでも彼が倒れることはなかった

「ゼエツ…！ゼエツ…！こ、の…」

まるで何事も無く煙の中から歩いてくるザイルにクライムは言わずにはいられない

「はっ…は、義手の強化に異常はないってのに、やれやれ…」  
そして過程は違うがザイルもまた同じだった

め！」

「二化け物

が。」

く

クライムとザイルがいる場所から数ブロック離れた場所にて、まるで戦争でも起こっているかと錯覚しそうな程の銃弾、爆弾、ミサイルの嵐が局地的に巻き起こる

事情を知らない者はそれが1対1の戦いである、ということをもまず

認識できないだろう

「ウツワあ…」

そしてその中心。まるで流れ作業のように雨あられと鉄の雨を降らせながら、呆れにも近い感情が思考となつて彼女の頭に走る

最初から最後まで見てたワケじゃありませんが彼、クライム・アルバートは少なくとも日常生活に支障が出るレベルの重傷だったはず。それがさも当然のように前線に出てくるとは…

「フツ!!」

「おつとつとー!」

ミサイルを叩き斬り、一気に距離を詰めようとしてくるバーサーカーへ余裕を持ってショットガンを撃ち込み、再び距離を取る

聖杯戦争にて召喚されるサーヴァントはマスターと波長の合う英霊が召喚される場合が多いですが彼の場合はそれが極端ですね

「マスターとサーヴァント揃って戦う事——いいえ、特攻が生き甲斐ですかアナタ達は?」

バーサーカーもですね。外見に異常は見られませんが魔力反応が弱々しい。

恐らく魔力供給不足による弱体化：しかしクライムさんに魔力欠乏症の兆候が見られないことからそもそも最初から魔力を送れていないのでしょう。

魔力のストックに準ずる何かを使い切った、と考えるべきですね

…マスターは魔術師の『魔』の字も無いような現役軍人でサーヴァントはクラススキル『狂化』によって能力を底上げした神秘の浅い侍(?)…よくもまあ( )まで生き残れたものです

「はいコヤーン、とっ」

たった1人に対してあまりにも過剰な数の榴弾が降り注ぐ  
刀で斬り払おうとするバーサーカー。

だが文字通り雨の如く降り注ぐそれらを刀で1つ2つ払ったところ  
で意味はなく――

「ぐ、あ――」

苦痛に歪む姿は弾幕に、身体の限界を知らせる声は爆撃音によって  
塗り潰されていく

念には念をということで多めに撃ち込んだものの、幻霊並みに弱つた  
霊基反応にコヤンスカヤは撃ちすぎた、と僅かに後悔した

終わりましたかね？ いかんせん魔力反応が小さすぎて目視でないと  
分からな――

「死ねッ!!」

「きやつ…！ちよっ!？」

『』

それは敵を嘲笑うためか、もしくは彼女の用心深さから出た結果か  
脳天から真つ二つにせんとする勢いで振り下ろされた刀はギリギリ  
彼女に当たる事無く、コンクリートの大地を叩き割っただけだった

あつ…ぶないですねえ!? 念のため礼装を起動しておいて良かった  
!  
あちらはザイルさんを彼方さんから守る時に使ってしまったが  
ごちらを残しておいたのはやはり正しかったようです

まあ今の一撃なら当たったところでもちよつと痛いくらいで済むの  
で当たってあげてもよかったんですが。

「ゼエ…ゼツ…ゼエツ…」

「アナタ生前からこうだったんですか？ だとしたらちよつと引きます

が。」

新撰組にて鬼の副長と言われた男、土方歳三。目に見える程弱った霊基を気力だけで押し留めて戦う彼の姿は異常以外の何物でも無かった

：例え神代の英雄でも限界を迎えて尚ここまで戦える英雄はそう居ないでしょうね、マジで人の皮を被った人外か何かでは？

「さてどうしますかねえ…」

無謀とも言える戦いにマスター共々戦っているのは勿論玉碎なんかでは無いだろう。

彼らの狙いは十中八九、影月 彼方の排除：対ワタクシと言えるグランドアーチャーは敗北しましたが対彼方としてのサーヴァントはまだ残っています、神霊として覚醒しきっていない今のうちに叩き潰す気でしよう

現に彼方さんは肉の匂いに釣られる獣のように人間の多い方向：つまりクライムさんの部下がいる方へと移動している、包囲する彼らを殺しながら。

「鱗の防壁を突破できるとは思えませんが楽観視する理由にはなりませんよね！とゆるワケで、」

ザイルさん！宝具解放許可をお願いします♡

く

コヤンスカヤと対峙するサーヴァント、たった1人の新撰組は満身創痕の身体を駆りながら考える

身体が重い、ダメージとは別に魔力供給が充分にできないだけここまで行動に支障が出るというのは正直予想外だった



ザイル・ニツカーがこつちに来ていないということはクライムはまだ生きているようだがあの怪我じゃそう長くは保たないだろう

何よりマズいのはクライム隊だ、影月 彼方の誘導自体は上手くいつてるが確認するまでも無く甚大な被害が出ている

空になったアサルトライフルの弾倉を装填し直し、異様な気配を纏わせるアサシンへ注意を戻す

「よくもまあ神代の英雄でも無いアナタのような英霊がここまでしつこい——失礼♡粘り強い方だとは思いませんでした。

敬意を表する…つもりは一切無く、単純に目障りですのでここにてお開きとしましょう♪」

おかしな魔力を纏った、小さな戦車(?)の模型のような物を放り投げるコヤンスカヤ

なんだ…?

地面に転がった模型から吹き上がる巨大な煙、その中から現れたのはコヤンスカヤと…

「さあさあーどうぞご覧下さい！これが人類皆様の努力の結果…愛らしい破壊の獣。」

おい、まさか——

見上げるような大きさの、戦車と呼ぶには歪な形をした兵器が煙の隙間からその姿を覗かせていた

これは——この標的は俺だけじゃ無い!

「精々逃げ惑って下さいませ♡『イズトウラセブ靈裳重光・79式擲禍大社』!」

先程までが茶番と言えるほどの鉄の暴風雨、砲門の1つが土方彼を、それ以外の全砲門があらゆる方向へとミサイルを連射。

当然だがコヤンスカヤが無駄撃ちなどする訳が無い。

ミサイルの殆どは数百m後方にて、死に物狂いで影月 彼方と戦っ

ているであろう仲間に向かって飛んでいく

「くっそ!?お前ら——」

耳をつん裂く爆撃音、持ち込んだであろう車両や兵器が宙を舞い、遠目であるがその中で確かに見える仲間の姿

「これはほんのぐい挨拶…さて次はもーっと派手に行きましょう♪」

もう温存している時間も余裕も無い!

クライム!聞こえるか!?令呪を——

キィ……ン

一瞬何もかもが静止したような、そんな感覚。そして——  
(令呪を持って命ずる!あのクソツタレを叩き潰せッ!)

「——ああ」

任せろ…!

特に令呪について取り決めをしていた訳では無いしこちらの状況を適時伝えていたわけでも無い、だが彼は応えた。こちらの望むタイミングで、寸分違わず。

「抜刀…突撃…!」

毛の先程も無く固められたその決断に呼応するかのように、土方歳三とコヤンスカヤの周囲を囲む超限定的な空間に鳴り響き始める怒号と飛び交う弾丸、怒号は彼のものでは無いし、弾丸はコヤンスカヤのものでは無い

それは狂信とも言える彼自身の心象が形となって滲み出たもの。

満身創痍の身体をまるで何事も無かったかのように——いや、事実として霊基崩壊の迫る彼の身体は、今この時だけ無傷にも等しい能力を持って地を駆ける

「そんな宝具でなんとかなるなら兵器もサーヴァントも要りませんよ？…発射♡」

「オオオオオオ!!!」

一瞬早く自分に向けて放たれた4発のミサイルを叩き落とし、続いて仲間を狙って放たれたミサイルを砲門ごと切り刻み、発射されたミサイルはアサルトライフルで撃ち落とす

だが無数のミサイルを刀1本とアサルトライフルで防ぐにはあまりにも物量が違いすぎた。故に――

「ぼぐっ…!!ぐ、ぐおおあああ!!!」

自身の身体をも使って防ぐ、かつて仲間新撰組を守った時と同じように、迷いなく。

全身挽肉にでもなったかのような痛みも今の彼には関係ない。ただ数十、数百発はあろうというミサイルを自身の身体さえも武器として使って防ぎ切り、コヤンスカヤを叩く、それだけ。

「…つんと、他に手は無かったんですか？…ま、無かったでしょうが。」  
「…ッ!!!」

ミサイルの爆撃はどれも致命傷だがどれだけダメージを受けようとも身体は動く、それは奇跡などではないし神に祝福されたという訳でも無い。

『最後の新撰組として、自分が倒れる訳には行かない』…宝具にまで昇華されるその意思のみで動かしている

「よく、見て、目に焼き付けろ!!!」

爆撃により砕け散ったアサルトライフルを捨て、ミサイルの層を突破し安全圏と彼女が数秒前まで思っていた戦車の上へ駆け上がる。今にも砕けてしまいそうな刀と、砕けることない意思をもって。

「俺が…!!」

「っ…小賢しいですわ!」

それまで遙か後方を狙っていた砲門が彼へ標準を変え、ミサイルを撃つ。

命中の確かな手応えと爆撃に一瞬で掻き消されたバーサーカーのうめき声に安堵した、してしまった彼女を――

新撰組 だツ!!」

弾幕の中から飛び出したサーヴァントが叩き斬った

## 第47話 無知な命、されど無価値にあらず

「  
彼、セイン・オールドルには尊敬する人間が居る

米軍内に存在する対テロ特別捜査本部：と名目上なっている『対ウルフルズ捜査本部』のトップ、クライム・アルバートである。彼にとって、かの勇者の存在は人生の大きな分岐点だった

父も母も軍役だった彼は軍に入り、腕を磨き続けた。その意義を見出せぬまま淡々と。

自分は何の為にここににいるのか？自分には本気で国民を守る気持ちがあるのか？そんなことを日常的に思いながら『何かを守る』という局面に遭遇しなかった彼はその疑問を常に先延ばしにしていた

だが軍を続ける以上必然と言うべきか、その場面はやってきたとある地区の、反政府軍討伐指令。

その意味を深く考えないまま彼は現地に赴き、銃を取る

だが木の的相手にしか弾丸を撃ったことの無い彼にとってそこはまさに地獄だった

倒れる仲間、吹き飛ぶヘルメット、鳴り止むことの無い爆発音、いつの間にか孤立している自分

『セイン隊長！！指示を下さいっ！セインさ——ぎゃっ！！』

そして何よりも——

『いやだ…いやだ…！』

彼には命を懸けて成すべきことが無かった。

額に押しつけられる赤熱した銃口、火傷したことすら気付かずにみつともなく命乞いをする

——まだ死にたく無い！

『!?』××××××××!!

×言葉の通じない敵兵は怒っているようだった、それもそうだ。彼らだつて仲間を殺されたのだ。

××でも俺は誰も殺してない

×基地の中では体力が有れば良かった、頭が良ければ良かった、銃を扱えれば良かった、仲間と仲が良ければ良かった。

——殺しにくる奴を殺さなければいけないことなんて、一度も無かった  
こうなると分かっていたら、逃げていたのに。

敵兵の引き金を引く指に力が入って——

ドンツ

『!?』

×!その敵兵は頭に風穴を開けて倒れた

××××××××!!  
『!?…××××××××』

×その異常事態に気付いた敵兵が集まってくるがすぐに1人目と同じようにバタバタと倒れていく

『これは、は』

『全く…戦闘経験の無い奴を送るとは本部は何を考えている?!』

自分の着ている軍服とほぼ同じ種類の米軍戦闘服を着用した、俺とは10代は歳が離れていそうな若い男が銃口から僅かに煙を上げるアサルトライフルを持って立っていた

『つと、今はそんな事を言っている場合じゃないか。』

クライム・アルバート曹長です、セイン上級曹長ですね? お怪我はありませんか?』

『——』

『——無さそうですね、後はこちらでやるので10メートル後ろの塹壕に避難をお願いします。』

：お前ら、間違っても殺すつもりでやるなよ！

彼らウルフルズはあくまでザイルの被害者だつてことを忘れるな！！』

『『了解！！』』

圧倒的だった、クライムと共に現れた彼の部隊は誰一人臆する事無く銃を構え、既に隊から残党へと変貌した敵兵達を薙ぎ倒していく

それも殺さずに。その事実は彼らの実力とこの仕事に対する熱意を知るには充分だった

……

その後、本部の手違いということで俺が地元の基地に戻されるまでそう時間はかからなかった、医療班はPTSD：つまりトラウマにやられてないか検査していたが俺の中に残っているのはあの惨状を完璧に上書きするクライム・アルバートの姿で——

く

J地区 住宅街 クライム隊 vs 影月 彼方の戦場にて

「やあああああっはははははっ！」

「…」

未だに死は恐ろしい、いや克服できる人間なんて居ないだろう

「こちらセイン、第4射軍迫撃砲射撃用意。」

だが克服は出来なくとも歯を食いしばり、堪えて進むことはできる。

俺には…いや、クライム隊の誰一人として、自分達が何と戦っているか完璧に理解しているものは居ない、サーヴァントだの神霊だの言

われたところでそれは既に理解の範疇から逸脱している

それでも戦える理由はただ一つ：『クライム・アルバートが戦っているから』だ。

「射撃と同時に現在地の迫撃砲は破棄、多段誘導携行ミサイルに装備を切り替えて撃ちなさい」

みんなが隊長に感謝している、みんなが隊長に憧れている、みんなが隊長の帰りを待っている…そしてみんな、ただ1人戦う貴方の力になれないことを悔いている。…いや、悔いていた。

その貴方がようやく俺たちを頼ってくれた。7割以上は間違いなく死ぬと、葛藤に苦しみながらもそれでも頼ってくれた。

「あなたがここらへんのリーダーかな？」

なら応える他ない、皆もう充分すぎるほど貴方から頂いた物があ  
る、これで返せるか分からないが俺たちの無知な命で世界が救えると  
貴方が言うのなら全力で使おう

「つかまえた」

「俺はここまで、ここからはアーチ中佐の指示で戦いなさい」

通信機がそれを持つ手ごと化け物に握りつぶされ、濃厚な死の匂い  
が眼前に迫る

「死ぬのは恐ろしい、けれど。」

「ふ」

最後に思い描くのが死ではなく、尊敬する貴方の姿ならその恐ろし  
さも半減するらしい

「後をお願いします、クライムさん」  
ポチャッ



同時刻 クライムvsザイルの戦場にて：

『……！』

通信機から次々と、否応にも聞こえて来る最悪の知らせに彼の握り拳は血が溢れる程力がこもっていた

「セイン、お前まで……！！うっ!!」

滑り込むように真下から振り上げられるナイフの一撃をなんとか身体をそらせて回避。顎の先から微量に滴る血液は戦い以外の何も考えるなど警告しているようで、死ねる実際にその通りだった

「心配しなくてもお前もすぐに会える、そう悲観するな」

「黙れ!!」

追い払うようにハンドガン（ベレッタ）で銃撃、そこからナイフを交えた格闘で応戦する

ビーストは倒せなくとも――

「お前だけはここで殺す!!」

『お前だけはここで殺す』……か？」

ザイル……！

「全く分かりやすいな、分かりやすすぎて――」

また瞬間移動――

「ウンザリだ。」

カッ

炸裂する閃光手榴弾に完全に虚を突かれ、ほんの一瞬無防備になつてしまう

万全ならば例え目が眩んでも対処できただろうが今の彼はその『万全』からはほど遠かった

バリ

「ぶっ…!？」

顔面に感じる衝撃と何かが割れるような音、そして

「なあクライム、フツ化水素酸つて物質を知ってるか？」

濡れた口元とそこから登る妙な煙、そしてザイルの言葉が結びつき  
最悪な事実が脳裏によぎる

「まあ…それがどういう物質かコヤンスカヤのように説明できるほど  
俺も詳しくない、知りたいならそういう方面に強い部下でも探して聞  
け——地獄でな」

瞬間——

「ウギイヤアあ” あ” アあっ!？」

爛れる顔面の皮膚、焼けつく舌、溶けていく歯、口内から噴き出る  
真っ赤な煙。

人体にとつて猛毒であるフツ化水素酸によつて発生したこの世の  
終わりかと思える激痛がクライムを襲う

「アの…カプセルの中身…フツ酸、とは…」

なんてことを思い付くんだ、コイツらは…！それよりもこれを何と  
かしないと本当に死ぬ…！

「グ…があっ!!」

痛みで砕けそうな理性を振り絞り、持っていたハンドガンで力の限  
り自分の腹を殴りつける

「…!?!何を——」

「グ、お…おええっ…!？」

夜食としてとつた携行食<sup>レーション</sup>が胃液と水分に塗れて喉の奥から沸き上

がり、口内を蹂躪していた猛毒を押し流しながら嘔吐物として地面に落ちる

「ぶ、ふう……！」

さらにその嘔吐物の一部を手で受け止め、洗顔するように口元をそれで拭う

まだかなり痛いが……さつきよりは、マシだ……！

「……パーッ」

そう呟くと彼の左腕の義手から破損した4つのカプセルが外れて地面に落ちる

「お前をひたすら戦わせるその意思、本当に胸クソ悪い。

自分を信じて疑わないその狂信とも言える正義、恐らく死んでも折れることはないんだろうな」

弾丸を再装填しながら、彼は心底うんざりとした表情で言葉を続ける

「ああ、お前の勝ちだ。俺にお前の正義は折ることはできない。

だから死ぬ。地獄でいくらでも正義に酔っていればいい。だからもう……さつきと死ぬ。」

「フーツ、フーツ……！」

体力も弾丸もロクに残っていない……令呪は既に残り1画だけ……

まだ、まだ……なのか……!?

く

同時刻 土方歳三 vs コヤンスカヤの戦場にて

「」

手応えはあった、だが

「大して効いちゃいねえか……！」

「命知らずな特攻も極まれば宝具ですか、全く忌々しい……」

右肩から左脇にかけて輪切りにする勢いで放った斬撃は殆ど効いておらず、またそれがビーストの権能や能力など関係ない、単純な力の差によるものなのは彼もすぐ理解した

ヘクトールの言った通り、霊基に差がありすぎる…！

何度もミサイルを打ち払い、その度に攻撃を浴びせるがコヤンスカヤにダメージは見受けられない

「それにしてもコーンな美女を迷いなく斬りにかかるとは、ワタクシは又聞きならぬ又見しただけなんでアレですがアナタそんな人でしたっけ？」

…

「…確かに中身がどうあれ美女を斬るのに思わないところがない訳じゃ無い」

「まあ♡」

「だがお前らはクライムの敵だ。」

それだけ知ってりや…斬るのに微塵も躊躇いは無え」

「ふーん、そうですか」

似た者同士ですねえと笑ってるのか呆れているのか分からない顔で戦車を再生、再起動させるコヤンスカヤ

まだ来るか…だがこれで俺が立っている間、ミサイルがあいつらのところに飛ぶ心配は無い

AIダヴィンチが立てた準備完了予測時間まであとどれくらいだろうか？

完了まで宝具が保つかどうか――

「――いや」

知ったことか、宝具があろうが無かろうがコイツは絶対に足止めを

ギシツ

「グ…お、おおあ…！」

身体か霊基か、あるいはその両方か、廃屋が軋むような不快な音が外にまで聴こえそうな程大きく響く

くそ、が…！

——生前の彼ならばまだ立ち上がっていただろう。だが今ここにいる彼はサーヴァントである。どれだけ強くともサーヴァントという枠組みから外れることはできない

バーサーカーとして現界した彼の身体は深刻な魔力不足により既に限界を迎えていた

「おっと、宝具の効果が無くなりました？…いえ、単に魔力不足で霊基にガタが来ただけですなコレ。

しかし脆いバーサーカークラスとは思えぬ耐久力…ええ、ちよつと気に入りました♡」

ぴよんぴよんと戦車から降りた獣はかがみ込み、倒れ伏す最後の新撰組の顔を悪戯っ子のような表情で見つめる

『『アルビオン』や『アフロディーテ』と比べるとものすつつごい見劣りしますがここまで強いなら商品兵器にしても良かったかもしれませんねえ、霊基が壊れてなければ完璧だったのですが無いものねだりをして無意味ですし…」

「があっ！」

もはや身体はどこに残っていたか自分でも分からない力で刀を振り抜く

「ぎゃーん♪暴力はんたい♡」

しかし渾身の力を込めたソレを、獣はまるで粉雪を払うように手の甲で弾き返し——

「あら、つい手元が（棒）」

「！」

ほとり、と眼前に落ちる桃色の手榴弾が反応する暇も無く炸裂するくそ――

もはや意思など関係なく反射でコヤンスカヤの首を掴み、諸共爆風を浴びせる

が、

「ゴホッ、な、に…？」

「おやおや、まあまあ…自爆対策、してないと思っただんですか？」

埃すら付いていないコヤンスカヤが余りにも弱々しく掴む彼の手をやりわりと退かす

「ぐ、グギ、ギ…」

痛みなんかどうでもいい、鉛のように身体が重いなら鉛を動かす気概で動かせ。

俺はまだ終わる訳には――

ざざっ

（あー、あっ！こちらダヴィンチ！土方くん、クライムくん、そして米軍のみんな！聞こえるかい？）

完了予定時刻から2分半ほど過ぎた時、突如頭に響く聞き覚えのある声

「よう、やくか」

「ん？何かおっしゃいました？」

（準備完了だ！逃げる準備しといてね！）

く

同時刻 米軍 vs 影月 彼方の戦場、その2ブロック隣の住宅街に

て…

「よし…！ザイルとコヤンスカヤから影月 彼方が充分に離れたよ！」

「あいよ、それじゃあまあ…やりますか。」

コヤンスカヤのサーヴァントとしての能力値、俊敏さからAIダヴィンチが計算した距離だ

もし彼女が異常を察知してから彼方の元へ駆け付けるといふのであれば単独顕現を使う以外に方法は無い

「宝具再現準備完了、投射用意。」

目が眩むほど明るい戦場の中で無知な兵士達を屠る少女に狙いを定め、かつてランサーとして現界していたホムンクルスは協力者の元、自身の切り札を発動させる

これは道だ。俺の宝具、米軍のトップであるクライムと新撰組 鬼の副長の土方歳三、敵味方の殆どが存在を認知していなかった神父隠し玉そして——何も知らないまま、それでも戦うと言ってくれたクライムの兵士達が作る道

「壊れず折れず曲がらず、我が槍はすべてを射貫く」

身体のスペックを度外視した強引な宝具発動。急遽用意した外付け魔力タンクから自身の許容量をゆうに超えた魔力を取り込み、大英雄の槍を顕現させ——

「行けエー！『不ドウリシ毀ンダの極ナ槍』！」

影月 彼方へ、全力で投擲。

「うわー！うわあ！なに、なに!?!」

サーヴァントの時と比べるとかなり破壊力は落ちてるが…ま、鱗の

防壁は壊したし充分でしょ

突然の横槍に慌てる少女を遠目で見ながら彼はその場に腰掛ける

「……ふいー……」

俺が作れる道はここまでだ、後は彼らを信じよう

）

同時刻 米軍 vs 影月 彼方の戦場にて…

「…」

ドウリンダナは影月 彼方にダメージこそ与えられなかったが鱗の防護壁を完全に破壊していたのをその場にいた彼と彼のマスターははつきりと感じ取った

(セイバー)

「——ああ」

米軍の部隊に紛れ込んでいた自分のマスター、バルン・ファクターの声を聞き、霊体化を解く

俺は冠位サーヴァントじゃないが…この瞬間のために呼び出された以上、在り方としては共通するものがある。

ざざっ

(魔力反応変化！コヤンスカヤが来るよ！)

まさかビーストが(神霊とはいえ)人間1人を助けに来るとはこの瞬間まで信じておらず若干面食らうセイバーだったがすぐに思考を戻し宝具解放へと入る

「獣の足止めは私に任せ、君は宝具に集中したまえ」

「そうさせてもらう」

神父であり代行者、言峰綺礼に礼を言い詠唱を開始…といっても俺



の場合魔術的意味ではなく自身を鼓舞する意味合いが強いが。

「金剛針、大金剛輪」

『単独顕現 EX』

「つとと、まさか鱗の防護壁を壊せるとは『金剛8式』」

出現場所を（何故か）完璧に読み切っていた神父の一撃がコヤンスカヤに入る

「へ——つてえ!?!なんなんですかもう!!」神父っていう生き物はホントにもう!

人間の放つ打撃がビースト相手にロクに通じないのは明白だが宝具発動までの時間稼ぎには充分だったようだ

「外獅子、内獅子」

——不思議なものだ

騎士王など人同士の戦いにおいて歴史を作った英雄とは違い、俺は<sup>魔性</sup>鬼を殺す、その事実のみで名が残った者。もちろん英霊になりえた要因は探せば他にもきつとある。頼光四天王の1人として鬼殺し以外何もしていなかったわけじゃない。

∴しかし大部分は鬼殺しの武士としての姿だろう。

「外縛、内縛」

神秘の薄れた現代において魔性の者はゼロではないが限りなくゼロに近い。

魔性を屠るという血生臭い長所が現代で役に立つことなど無いと思っていた

「智拳、日輪、隠形」

影月 彼方：呪われた——いや、望んで呪いを受けた一族、影月家の末裔。

何も知らぬまま鬼と化してしまったことに同情はする。だが迷いは無い

「——行くぞ」

彼女はかつて俺が斬った者達鬼と同じように、鬼として多数の命を奪っている。

——それならば、俺がやることは決まっている。

あの時、あの時代と同じように。そこに怒りや喜びといった感情は無い、鬼を殺すのに感情は必要ない。

（令呪を持って命ずる。鬼を斬れ、セイバー）

マスターが切った令呪の魔力を纏った彼は水溜りに落ちる水滴のように静かに、だがよく聞こえる……そんな足音を1つ立て、斬るべき者へと駆ける

「……？——あ」

未だ混乱している影月 彼方を完全に間合いに捉えた英霊、『渡辺綱』が腰の刀に手を掛け——

…せめて、安らかに。

『大江山 菩提鬼殺』

——斬った

## 第48話 幕間 クライム・アルバート（2）

時間は巻き戻りミラ・ツールが影月 彼方と遭遇している頃…

J地区 米陸軍駐屯地 医療棟にて…

『——以上が美術館についての報告となります、それと現地で2名民間人を保護しました』

「…分かった。保護、移送はナーガ兵士長に申し送りお前は持ち場に戻ってくれ」

『はっ！』

力無くベッドに横たわりながら通信機越しに部下の報告を聞き、状況を再確認する

発電所と同じように謎の爆発で消し飛んだF地区の美術館…自然な地下空間があった、という報告から察するにザイルかキャスターのマスター、どちらかの拠点だったのだろう。空間の広さや真名から考えればキャスター、レオナルド・ダヴィンチのものである可能性が高い

ザイルとキャスターのマスターは協力関係のハズだ、だとすると美術館を襲撃したのは誰だ？

「…」

俺だけが考えても答えは出ない、ザイルが裏切った可能性もあるがいくら奴でもキャスターのマスター程尽くしている人物を始末しようとするだろうか…？

「おいバーサーカー」

「なんだ」

聴き慣れた声ができるものの姿は無い、少しでも魔力を節約するため実体化を控えているのだろう

構わず質問を投げつける

「美術館の爆発についてどう思う？」

「…情報が少なすぎて結論を出すのは難しいな、だがザイル達にとってキャスター陣営は俺達の相手をするために使える駒だっただろう、それをいきなり始末に掛かるのは考えづらい」

まあそうだろうな

「…だがもしザイル達がキャスター陣営を手にかけてと仮定するならば答えは1つだ」

「それは？」

「ザイル達にとって看過できない何かがある美術館にあった…俺はその何か、『聖杯』だと睨んでいる」

聖杯だって？

ザイルのことばかり考えていて忘れていたがこれは聖杯戦争、ただ一つの願望機である聖杯を巡る戦いだ、たしかに戦争の最終目標である願望機を前にすればかつての協力者だろうとザイルに限らず魔術師は容赦しないだろう

「そんな物があれば、の話だが…ある前提で話をするぞ」

「いや待て！聖杯というものは6騎のサーヴァントを退去させなければ機能しないとエナは言っていた」

少なくともアサシン、セイバー、そしてお前、バーサーカーの3騎が健在している以上、願望機としては使えないはずだ！」

「そうだ、6騎のサーヴァントを退去させるという条件だ。聖杯戦争で呼び出されたサーヴァントとは言っていない、サーヴァントであれば良いんだ」

おかしな言い回しに一瞬混乱するクライム、だが以前接触してきたルーラーのサーヴァント、シャーロック・ホームズ。そしてエナが言っていたキャスター陣営についての違和感のことを思い出し、彼は

意味を理解した

「まさか…」

「バルンや遙、お前の弟の情報も含め整理する

アーチャー オリオン

ランサー ヘクトール

ライダー 牛若丸

ルーラー シャーロック・ホームズ

本来のキャスター 真名不明

…断定できないのも居るが退去しているのはこれで5騎だ」

「――」

そこに今のキャスターが加われれば…

「じゃあザイルは今、願望機を持っている…?」

「そうとも言えない、もし聖杯を手にしたならすぐにでも行動を起こすはずだ、それをしないのは願望機が正常に作動しないとか…ようは思いもよらぬ問題が発生したんだろう」

「その『思いもよらぬ問題』がああ爆発か?」

「仮定だ、決めつけるのは早い」

確かに聖杯を手に入れたと言うのなら行動を起こすだろう、なにやり俺を真っ先に始末しに来るのは明白だ

…しかしザイルがいつまでも手をこまねいているとも思えない

「出るぞバーサーカー、ザイルを探しに行く」

ベッドから立ち上がろうとしたところでバーサーカーが実体化、起き上がりかけた俺を押し戻す

「やめておけ、手がかりも無しにその身体で動くのは勇気じゃねえ、無謀だ」

お前は今影月 遙と同じ無茶をしようとしている。と諭され、仕方なく戻る

ならばせめて情報だけでも集めよう、バルン・ファクターに連絡を

ピリリリッ

通信?…バルンか、丁度いい

「自分一人で無茶はしないと誓う、霊体化しろバーサーカー」

「ああ、それでいい」

霊体化するバーサーカーを横目に、呼び出し音を鳴らす通信機のボタンを押して耳に当てる

「クライム・アルバートだ」

『バルンです、今いいですか?』

「大丈夫だ、こちらでも聞きたいことがあったからな」

心なしか声の感じが若干慌てている…?

『影月 遥を一度保護しました』

「!そうか」

これで捜索隊の人員を他に回すことができる

「ありがとう、助かつ『そしてその、また行方不明になりました』

「…」

…

「はあ!?!」

バルン・ファクターは俺の部下では無い、なので文句や指導をする権利は無いのだが俺は思わず声をあげていた…が、意外な来客により俺の意識はそのから外れることになる

「クライム」

「分かってる、すまないが掛け直す」

『え、ちよつと——』

通信機を置き、ベッドの淵に立てかけてある火縄銃を取る

「誰だ」

俺と実体化したバーサーカーの目線の先、扉の角から現れたのは：少年と青年、青年の方は俺の部下の1人、ナーガ兵士長だ

「待った！こつちに敵意は無い、俺はヘクトール！ただのホムンクルスさ！F地区の美術館でアンタの部下と会ってここに連れてきてもらった、少し話をしたい！」

「身体検査は問題ありません、不審な物、危険な物は持っていないでました！」

「構わない、お前は持ち場に戻れ」

食い気味にナーガ兵士長を戻らせ、火縄銃を構える

ヘクトール？ギリシヤの大英雄の名前だが…こんなのが？

「だから敵意は無いって——俺の部下に暗示を掛けておいて何を言出す？」

凶星らしく黙り込む少年に照準をしつかりと合わせて警戒する、バーサーカーは…

…？まあいいか

「やあれやれ、やっぱり俺に魔術師のマネごとは向かないなア、なんで分かった？」アンタは魔術に詳しいようには見えないが？

「保護した子供を避難所でなくわざわざ上官のところ连接到行く軍人などいない、子供相手に身体検査するような奴もな」

「ああ、そりゃごもつともだ。俺も甘いなコリヤ…だが敵意がないと言うのは本当だ、話がしたい。」

「…」

（俺は良いと思うぞ、目の前のガキはサーヴァントの気配が僅かにするが隠蔽の気配は無い、恐らくまともに戦うこともできないだろう）なるほど、戦意が無かったのはそういうことか

何かあっても俺なら対処できる、と言い切るバーサーカーに仕方なく話を聞くことにした

「いいだろう、だが訳の分からんまま良いように利用されるのはつい最近経験したばかりでな、知っている情報は全て開示してもらおうぞ」  
バーサーカーは霊体化している

「…当然か、あんまし時間が無いから聞きたい事はスピーディーに頼むぜ」

何様のつもりだとは思ったものの、飲み込んで話を促した

「セイバーが斬るべき相手について、彼らから聞いているか?…それがウルフルズアジトに現れた」

斬るべき相手: 『鬼』か? 最優のクラスであるセイバーが注視するほどの敵なら出現と同時に魔力ぐらい感知できても良いと思うが…  
とりあえず続きだ

「それで?」

「そしてその『神霊』とザイル・ニッカー及びビーストが接触した」

以前の探偵と似たようなことを口走る少年に覚える嫌悪感と僅かな疑問

…神霊? それにザイルだと?

「…『ビーストを倒したいがザイルと神霊が邪魔だ、だから相手をしろ』と?」

「いや違う、アーチャーでも敵わなかった以上ビーストを今すぐ仕留めるのは余程強烈な隠し玉でも無い限り無理だ」

奴さん達の会話や行動から察するに神霊はビースト側の可能性が高い、今はまだ内輪揉めしてるようだが本格的に手を組み始めたら手も足も出なくなる」

「…」



バーサーカーは何も言わない、恐らく話に出た神霊についてだろうが土方歳三は神代を生きた英雄じゃない。答えは出ないだろう  
「ザイルとビーストから神霊を遠ざけてセイバーに斬らせる、少々強引だが今潰すにはこれしか——なんだ!？」

その場にいた全員にのしかかる魔力：では無い重圧。そしてそれとは別に一瞬感じた視線のような不快感

何故そう思ったのかはわからない、だがこの視線の主は——

「蛇…?」

ウルフルズアジトの方向から聴こえた喧しい音を界に重圧も無くなったが確かにこれは只事ではない

「神霊と言っていたが…敵はサーヴァントか？」

それまで黙っていたバーサーカーが現れ、少年に質問する

「んー…いや、ありや生身に神がくつついてるってカンジだな、だから余計にタチが悪い

さつき言いかけたがザイルとビーストが邪魔できない位置まで神霊を誘い出してセイバーに斬らせる、そのためにアンタらの協力が必要だ」

「協力、ね…」

またこのパターンか、と呆れていたが横で立っているバーサーカーが顎に手を当てて考え込んでいるのがふと目に見えた、神霊についてこれ以上考えても無駄だと思うが…

「お前の言う『アンタら』というのは誰の事だ？」

「…鋭いな」

短く言葉を交わす2人に俺は何を言っているのか理解できなかつた

「お前らは一体何を言っている?」

「ま、遅かれ早かれ言わなきゃ駄目か、これを見てくれ」

少年が提示したのは手のひらサイズの小さな端末だった、俺は慣れないから使っていないがスマートフォンというやつだろう  
そしてその画面には――

「――なんだこれは？」

工場のような場所に映る大量の死体、しかもどれもこれも尋常じやない殺され方をしているのが一目で分かる

「コイツらウルフルズ団員か、惨い殺され方をしている…これが何か関係があるのか？」

「やったのは神霊だ、そして信頼できる技術者の解析によれば――ソイツはより人間が多い方に引き寄せられるらしい」

より人間が多い方に…――っ！

少年が言う『協力』の意味を理解すると同時に俺の手は火縄銃を掴み取っていた

「ふざけるな！」

コイツの、コイツの言っていることは――！

「怒るのは分かる、だが今すぐ打てる手はこれくらいしか…」

「勝手な事をペラペラと他人事のように言いやがって!!」

湧き上がる怒りの感情、今にも引き金を引きそうな指を残った理性でなんとか押し留める

「米軍…つまりクライムの部下を囿に神霊を引き摺り出す作戦か、人間に引き寄せられるのなら魔術師である必要は無いしな」

「黙ってるバーサーカー！」

腹が立つ程冷静なバーサーカーを一蹴し、少年を睨む

ふざけるな、ふざけるな…！

「他に方法があるはずだ！」

「ああ、時間をかけりや見つかるだろうさ。だが今打てるのはそれし

かない

「今やらなきや神霊は多分ここにも来るぞ」

付近の避難所にいる民間人を根絶やしにしてからな、と最早脅迫と言っても良い台詞を彼は付け足す

「——死んでくれと、そう言えと言うのか？」

俺が一言命令すればあいつらは間違はなく俺に着いてくる、だからこそ俺は聖杯戦争のことについて仲間に何も言っていない。俺が戦っていると知ればアイツらは俺が言わずとも俺の手伝いをしようとするだろう

影月 遥の搜索等頼ったこともあったがそれは聖杯戦争の、いや魔術師の外だ。

映像を見れば神霊とやらがどれだけ強くて残虐なのかは火を見るよりも明らかだ、そのの相手をさせると言うことは…

「…どけ、俺が神霊を殺しに行く」

「その身体で？いや身体なんて関係ない、あれは例えサーヴァントでも正面から戦って勝てる相手じゃない」

コイツ…！

「俺は部下に死んでくれと言うことなんざ出来ない

5秒以内に消えろ、さもなきや俺が消す」

引き金にかかる指に力がこもる

ああそうだ、俺がやればいい。これは普通の戦争じゃないんだ。最初から最後までマスターである俺が立っていれば——

「失礼します」

考え事でノックに気が付かなかったが扉の影から顔を見せた男を見て少しだけ驚いた

「アーチ中佐？ここで何をしている？持ち場に戻れ。…それとここで

見たことは口外するな、俺以外に知らなくて良いことだからな」

「知らなくて良いこと、というのは聖杯戦争のことですか？」

！

「それとも神霊のことですか？」

「…」

俺は話していない、バーサーカーも同様だろう。とすると――

「ヘクトール、貴様…」

「正直手段を選んでいる余裕は無くてな、ここの様子を中継させても  
らった」一応カメラは探しても無駄だと言っとく

ハア…

「…この事を知った人員はどれだけいる？」

「避難所に派遣された人員等を除く残留している各小隊長全員です」

つまりほぼ全隊か、やってくれるな

「アーチ、各部隊からこの馬鹿で無謀な作戦に参加したいという隊員  
が何人いるか調べ、早急に報告を」629名、内小隊長4名、班長3  
1名、隊員594名」

「…ああそうか」

ほぼ全隊だと？

「おいヘクトール、仮にお前の言う作戦で俺の部下が動いた場合何割  
生き残る？いや、何割死ぬんだ？」

もしコイツが名前の通りの人物でかつ敵がなんなのか知っている  
ならある程度の予測は立てるだろう

「中継は切るな、今ここでお前の予測を言え」

「……………上手くいって生き残るのは3割弱」

「で？上手いかなかったら全滅か？このクソツタレが。」

とてもこんな作戦には賛同できない、なんとかして今ここで隊員を

説得しなければならぬ

「隊員の反応が俺にも聴こえる様にできるか？いや、やれ」

「いっぺんには無理だ、600人以上の話聞いたら脳がパンクする」

「じゃあパンクしない程度に抑えろ、とつとつとやれ」

困った顔をしながらもOKだと指で表すヘクトールを見て俺は彼らと話を始める

「……こちら対テロ特別捜査部隊隊長のクライム・アルバート。

全残留隊員に告ぐ、聞いての通りこのクソツタレはお前らを捨て駒にして怪物を倒すつもりらしい、それも確実性なんざ無い作戦でな」

「おいおい、まだ作戦について何も——」うるさい黙れ。

……だがお前たちは軍に所属しているというだけのただの人間だ。聖杯戦争も魔術もお前らが踏み込むべき世界じゃ無い」

若干不機嫌そうなバーサーカーの顔が横目に映るがそんなこと知ったことでは無い

「俺は聖杯戦争に参加した、万能の願望機というあるかも分からないものに踊らされてな。その結果俺の妹が死んだ。

ただ死んだんじゃない、身体中を獣のような何かに喰らい尽くされて死んだ。

お前たちは国のためだの、俺のためだのを胸に秘め、銃と大義を抱えてこの馬鹿げた作戦に参加しようと考えているらしいがもう一度よく考えろ

……意味もわからないまま命賭けていいのか？自分の選択で自分の守るべき人間を危険に晒してもいいのか？

考えろ、お前たちはみんなただの軍人だ。大切な人間を守る為に災害や人間と戦う軍人だ。化け物と戦うべきじゃない」

：

何も聞こえない、僅かに息遣いが聴こえることから中継が切れているわけでは無さそうだ

「…発言の許可を」

「構わない、なんだ？」

口を開いたのは中継の向こう側の人間ではなくアーチだった

「…俺は、俺たちは弱いです。1人では戦えません

しかし仲間や貴方と一緒に戦えます」

…つたく

「それはお前が戦う理由にはならない、恩やら義やら感じているとしても命を捨てる理由にはならない、それどころかそれはただの侮辱だ」

「待てクライム、聞くんだ」

バーサーカー？

「俺は…国というものにあまり執着していません、こう言うのもなんですが隊長のように国を守ることにやり甲斐など感じた事はありません」

「…？」

「…俺には結婚して今年で10年の嫁が居ます、子供も2人居ます。俺は3人を養うためにこの仕事を続けています

銃を握るのは一重に仕事だからです」

アーチ以外誰も言葉を発することはない、皆次の言葉を待ち、静かに彼を見ている

「神霊、ビースト、そんな次元の話いきなり聞いたところで詳細を理解することはできません、でも分かることもありました」

「それは？」

「…戦う理由です、神霊を止めなければ避難所に居る俺の家族が殺されるでしょう。そんなことさせない、させたくないんです。」

クライムさんに恩は感じていますが、ですがそれとは別に俺は家族が大事なんです

国も他人もどうでもいい、家族を守るため貴方と共に戦わせて下さい」

お願いします、と深々と頭を下げるアーチ

それを皮切りとして隊員達の声が入れ替わり立ち替わり聞こえてくる

『マーピン兵士長です！俺も戦います！』

『ネリス1等兵、戦います！あんな惨く殺されるなんて許せない！』

『プーマ曹長、なんと言われようと出ます。処分は如何様にも。』

反応しきれないほど届く声に俺は最早どうしていいか分からなかった

「…もぅいい、中継を切れ」

経過したのは数秒か数十秒か、ようやく出た言葉はそれだけだった

「バーサーカーのマスター…」

「クライムだ、これからはそう呼べ。」

アーチ中佐、志願兵全員に伝来を。隊と装備を再編させろ、迅速にな。

作戦を確認次第各小隊長に俺から伝える、行け」

「…ハイッ！」

嬉しそうに病室から飛び出していくアーチ中佐、それを見届けて俺はただただ心が重かった

…クソ

説得できなかつた…

「感謝する、クライム」

「お前は戦闘に関すること以外もう喋るな。

…作戦を聞かせろ」

「…ああ、分かつた」

痛む身体を動かし、俺はベッドから立ち上がった



## 第49話 羊飼

J地区 住宅街 クライム隊vs影月 彼方の戦場にて…

『大江山 菩提鬼殺』

「う、うわああああ!？」

完璧だった

踏み込み、間合い、抜刀。

積み上げられた犠牲の上で繰り出された一振りは確実に鬼の首を捉えていた

——だが

『オシリスの塵』

「——あ、あ?」

「…!？」

首を切り裂く寸前で止められた剣。何故そうなったのか、何に防がれたのか

疑問はあったが何よりもまず優先すべきことがある

(なんだ、どうした?勝ったのか?)

仕留め損なった…!失敗だマスター!逃げろ!

↳

同時刻 クライムvsザイルの戦場にて…

「今出てきたのがセイバーか?…まさかとは思ったが宝具解放に魔力を消費しないとはな」

こんなサーヴァントも居るのか、と特に慌てる様子も無く弾丸を込め直すザイル

「神霊の気配が消えない：!?どういうことだ！」

セイバーのことを深く知っているわけじゃないが少なくとも奴は博打を打つタイプじゃない、確実に斬れるという確証が無ければ宝具は使わないだろう。

ならば何故――

「失敗した、それ以外に無いだろう?：敗走の準備でもするか?」

基本無表情なザイルが口元を歪め、心底愉快だと言わんばかりに呟く

「ほぎけー…ウツ、ぐあ…!」

焼けつき、軋み、足元から崩れ落ちる身体。例え勇者と呼ばれた男でも道具もなしに傷を治療する術は無い

痛みは我慢できる、だが動かない身体ものはどうしようもない、どれだけ意思が硬くとも0から引き出すことはできないのだから

「いい気味だな、お前のその姿が見ただけでもわざわざ茶番劇に付き合った甲斐はあった」ちよつと通信機借りるぞ

何を思ったかザイルは倒れ伏した俺から通信機を取り上げた

「なあクライム、音量を上げるにはどこを押せばいいんだ?」ボタンが無いぞ

「な、なにを、言ってるんだ…?」

砕けた口調のザイル。一見、勝ちを確信して敗者をひたすらに扱き下ろしているように見えるがこれまで散々ザイルと戦い続けてきたクライムにとってその光景は異常だった

ザイル・ニツカーは戦闘において敵を殺し、勝つ以外で気を割くことは無い。

怒りを露わにすることはあれど笑う事など無かった

…その彼が笑っている

「ザイルさんザイルさん、そのタイプの無線機はボタンで無くツマミです、ほらここにカチツと回せるツマミが。」

なんの予兆も無く現れるビースト。初めに包囲した時と服装が変わっており、傷を負っているようには見えない

「おい、いきなり出てくるな…影月 彼方とセイバーは？」

「彼方さんは鱗の防護壁を再展開、最初と同じく人間『で』遊んでいます。セイバーさんはそんな彼女を止めようと奮闘してますが…防護壁を突破する手段が無い以上無害でしょう」

会話から察するにセイバーの妨害をしたのはビーストラしい、直前までコイツの相手をしていたバーサーカーは敗北したわけじゃ無さそうだがギリギリ退去していないレベルだ

「あとな、お前こんな時にまで服に拘らなくても良いだろう」

「違いますう〜これは魔術礼装の1つでアトラス院が作った優秀な礼装なんですう〜」

相変わらずビーストに緊張感というものは無い、それ程までに力を持っているということか

「それに加えて影月 彼方だ。…いつそセイバーに殺させれば良かったんだが」

「うわあ自分の半身に対して酷い言い草ですねえ」

「やれやれ、アレの身体を用意した奴が何を言う？」

お前はクライムコイムの部下と遊んでろ」

俺はクライムと話がある、とビーストを追いやるザイル

「ま、待てー」

ふわりと尻尾を振りながら仲間の方へ消えていくビースト  
声をあげ、手を伸ばすが当然ビーストは止まらず、手も届かない

「まあ落ち着け、お前じゃ何もできない。」

…少し話でもしよう」

銃声、爆発音、駆動音、悲鳴、怒号、様々な音がザイルの持つ通信  
機から聞こえてくる中、彼はそう言った

「貴様と話すことは無い…！」

「だが今のお前に出来ることは会話くらいだろう、いいから付き合え」  
倒れ伏す俺と向き合うように腰を下ろし、銃を置くザイル。その異  
常な光景に対する疑問を怒りによって押し殺して彼を睨む

「そう睨むな、少し質問するだけだ

…何故ここに来た？」

「決まっている！ビーストと神霊を倒し、世界を救うためだ！」  
分かりきった事だ、コイツらは間違いなく人類にとって悪であり脅  
威になる存在だ、そして俺達以外に止められる奴が居ないのなら――

「あー…質問が悪いな、聞き直す。」

…何故俺と戦った？」

「それが俺の役割だからだ！」

「で、結果作戦は失敗し目的は果たせずお前の部下は全滅まっしぐら  
か」

呆れたようにため息を吐くザイルの言葉を力の限り否定する

「まだ終わっていない！」

「終わりたいくないの間違いだろ

…2つ目の質問だ、何故部下と共に神霊と戦わなかった？」

「俺の部下は優秀だ、だがお前と殺せるのは俺だけ――」

「ぶ、わはははっ!!」

「!?」

普段の奴から考えられない笑い声、本当にコイツはザイルなのかと疑いかけた時、彼は再び喋り出す

「なあクライム、もうやめたらどうだ?」

薄ら笑いのままこちらの顔を覗き込むザイルにクライムの中にあつた疑問と困惑は怒りへと変換される

「さつきから一体意味のわからないことをペラペラと…!何が言いたい!?言ってみろクソソツタレのテロリスト風情が!」

「自分を偽ることを、だ。…お前、国民もアメリカも弟も、もうどうでも良くなってるんじゃないか?」

「――」

「は?」

コイツは、コイツは何を言っている?俺がアメリカも国民も家族もどうでも良いと思っている、そう言ったのか?

「うん?どうしたコヤンスカヤ?」

…妹だろうと弟だろうとどっちだつていい、今は口を出すな」

その場に居ない自分のサーヴァントと会話するザイル、しかし俺の中で巡る今の言葉が外の情報の殆どをシャットアウトしていた

「話を戻そう、特にスパイとかに良くあるそうなんだが…素性や趣味、あるいは性格まで偽ったまま長い事暮らしていると本当にその通りになる、という事例があるらしい、心当たりは?」

「…あるわけ無いだろう」

そうだ、あるわけが無い!俺はザイルを殺す為に銃を取り、国と人を守るために戦っている!

「まあ自覚があつたらとつくに治っているだろうな」

お前も最初のうちは犯罪組織の核である俺を殺す、そう考えていただろう。

…今と違って恨みや憎しみは持っていなかっただろうがな」

未だにコイツの言っている事を理解できない、だが——凄く嫌な気分がする

そしてそれはコイツが憎いから、では無い

「じゃあここからは例え話をしよう。

国を守り、国民を守り、アメリカの平和のために犯罪組織と戦う1人の男。だがソイツは犯罪を憎みはすれどアメリカ人を憎むことが出来なかった」

マグナムリボルバーをクルクルと回しながら彼は語り続ける、哀れな何かを慰めるように。

「そんな中ソイツは戦っている犯罪組織のリーダーがアメリカ人で無いのを知り、そのリーダーを真っ先に倒すべきだと考えた。それはそうだ、頭さえ潰せばそこから下はなす術が無い」

「そうすれば自分と同じアメリカ人を傷付けずに済むと、それからソイツはそのリーダーを憎むようになった。

付け焼き刃の憎しみは剥がれる事なく『国民』<sup>アメリカ人</sup>を傷付けたくないという思いだけで鋭さを増していった」

「…黙れ」

それ以上は聞いてはいけない、そんな気がして僅かに出る声、だが当然それで奴が黙ることはなかった

「国籍なんて関係ない…いや、アメリカから犯罪を無くそうとするなら真っ先にアメリカ人に銃口を向ける事になる、ソイツはそれを避けるためにわざわざウルフルズ対策本部なんてものを立ち上げて自分はリーダー以外と戦わないようにした」

「国民と国のため、リーダーを憎むように自分自身を洗脳したソイツは無自覚のまま自分の部下をも洗脳していった」

…恐らくはリーダーのことをロクに知らないまま憎む奴もいただろうな」

「やめろ…！」

まるで身体の内側にヒビを入れられていくような感覚がする

「そして自分自身の狂信に洗脳され切ったソイツはいつの間にか国や国民を守ることもよりもリーダーを憎むことを優先し始めた」

『犯罪組織の撲滅』という尊い思想を掲げ、部下を洗脳しながらな」

それ以上、は

「クライム・アルバートは兵士として、指揮官として、最高の実力を持っていた。

魔術師としては3流以下であろうと培われた戦術眼は神秘の絡んだ戦闘でも充分通用する

お前の指揮なら、お前の部下も普段以上の実力を発揮しただろう。

死者が出るとしても神霊と俺、指揮官ナシでの戦闘でどちらの方が犠牲が大きいかは明白だ

…最初の質問に戻そうかクライム」

目の前の男はぐにやりと口角を上げ、さつきと同じ質問を口にする

「…何故わざわざ俺と戦った？」

「それは——」

「俺は神霊やコヤンスカヤとは違う、あくまで強いだけの普通の人間だ。数を力で凌駕することはできない、お前は神霊と戦う部下を指揮してこつちを部下に任せた方が良かったハズだろ？」

「——」

何も間違っていない、目の前の男の戦法は正しい。部下を率いてザ

イルと戦う術もあった。

だが俺はなんでそれをしなかった？その方が…その方が犠牲は少なく済んだのに。

「自分自身の洗脳によって我を見失った軍人か…なるほどな、バーサーカーのクラスを召喚したのも領ける」

「ち、違う、俺は…俺は国を、国民を守るために——」

ザザツ

更に通信機の音量を上げたのか、ザイルの持つ俺の無線機から聞こえてくる

何かが潰れる音や飛び散る音、そしてその音が聴こえて尚勝てるハズの無い敵へ向かっていく部下達の声

無謀なその行動を実行できるのは皆が等しく俺を信じているからに他ならない

「だがまあ例え付け焼き刃だろうとお前にとっての正義は俺を憎み、殺す事で完成されてしまった。それを否定することはお前自身の否定に他ならない

…なあ、もう良いだろクライム？」

彼の顔が近づく、間近で見るとその表情はどこかビーストの人を嘲笑う表情と共通するものがあつた

「認めろよ、お前は自分自身の狂信によって家族と大勢の部下を巻き込んで殺させた、と」

「ち——」

違う、そう否定する。しようとする。するつもりなのに、声が出ない

「いいさ、何と言おうとお前がこれまでしてきた事は変わらない



…以前コヤンスカヤに聞いたことがある、人間を動物に例えたら何になる？つてな」

立ち上がり、こちらを見ることもなく彼は語り続ける。心底愉快そうに。

「奴は物凄く嫌な顔をしながら答えた。『個体にもよりますが…大半は羊ではないでしょうか？』と」

「羊…？」

「そう、羊。お前の家族と部下が羊で…お前は羊飼いだ」

「羊つてのは面白い生き物でな？足元や先の風景よりも自分たちを導いてくれる先導者を見るんだ」

…この先に何かがあるのか？自分では何も考えない、思考は先導する奴に任せてただ進む、先導者がマトモな奴だったら良いんだが…この場合はなあ？」

身体の痛みを忘れる程の感情、後悔と悔しさがグルグルと回っていく…

「お前は俺を殺すか全ての羊を谷底へ放り込むまで止まらないだろう、だから今ここで最後の質問をする。

——まだ生きていたいのか？」

カチリ、と銃のハンマーが降ろされる音がやけに大きく聴こえてくる

「…」

俺が生きているのは間違っているのか、生き方が間違っているのか、結論が出る事は永遠に無いかもしれない。少なくとも俺だけじゃ答えは出ない

「——ない」

「ん？」

だが。

「俺は、死なない……！そしてこれ以上誰も死なせずにお前を殺す！」  
どれだけ間違えようと戦いを放棄することだけは出来ない、少なくとも今まで死んだ彼らは『今の俺』を信じて死んだのだから！

「誰も死なせず……できると思ってるのか？本気で？……まるでガキだなコリヤ」

「知るか……俺、俺の選択肢に、死を自ら選ぶようなものがある事は許されない！」

きつと俺は誰が見ても哀れに映るだろうし遺族が俺の本性を知れば激しく嫌悪するに違いない、俺は正しい理由の上で生きてていい理由はまだ見つけられない

……それでも。

「俺はクライム・アルバート！米陸軍対テロ特殊部隊に所属する軍人であり、バーサーカーを使役するマスターであり……お前を殺す男だ！！」

結局のところ俺の中の元の正義はグチャグチャでもう分からないが今の正義はこれだ、ならそれに従うだけだ

満身創痕の身体がゆっくりと動き出す、ガクガクと子鹿のように震えながらも、ゆっくりと

「クライム、お前は……」

「何が正しいか俺にはもう分からない！だが……俺に立ち止まることは許されない！放棄することは、許されない！」

銃を持つ右手に、立ち上がる両足に少しだけ力が戻ってくる

「……歪んでいようと正義は正義か、やはり俺には砕けないらしい」

「ザイル……ザイル……ッ！」

「砕けるようなら見逃してやったんだが……ダメか」

足が他を蹴ろうと一步踏み込む、敵を殺すために空の弾倉へ弾を込めようとてが動く

お前だけ、は！

「もういい、やはり俺にお前は倒せない——潰せ、コヤンスカヤ」

「はいはい♪」

『単独顕現 EX』

ゴシヤツ

「あ」

しかし立ち上がった途端、それはあまりにもあつさりと踏み潰された

「――」

結局のところ、俺はザイルの思い通りにはならなかった。ただ心が折れなかっただけ。

「…」

桃色の戦車によって踏み潰された自身の両足を呆然と見ながらも、身体は自然と手から零れ落ちた弾丸を拾おうともがいている

届く距離じゃないと僅かに残った意識が明確に知覚する中、最後に聞いた言葉は――

「――見ていて愉快ではあるが…お前らしくない最後だったな、クライム」

宿敵の、憐れむような言葉だった

## 第50話 NFFスペシャル

J地区 住宅街 クライム隊 vs 影月 彼方の戦場から少し離れた高台にて…

「ザイルさんに追い返されて泣く泣くこちらに来たワタクシですが…」

この距離なら必要無い…が覗き見の気分を楽しむためわざわざ双眼鏡を使い現地の様子を窺う

「んー…うわあ」

ハデにやってますねえ彼女。とゆーか米軍の皆様は…

眼鏡越しに見える赤、赤、赤、これを血祭りと言わず何と言うのか  
そしてただ両手と尻尾を振り回して雑に人間を屠る彼方には若干呆れてはいたものの、それ以上に彼女に対抗する米軍の動向は雑に殺す彼方と比較しても薄ら笑いも出ない程だった

勝てないと分かって戦う人間達、そもそも自分達が何と戦っているかすら理解せずバタバタ死んでいく様は普段なら嘲笑ものだがこの時ばかりはコヤンスカヤも笑わなかった

人間が未知の敵に対し、団結して戦うというのは理解できる。だがここまで大きな集団の中で誰一人として逃げようとしなない、誰も戦いを放棄しない

「同情なんてこれっぽっちもありませんが…この場で一番哀れなのは彼ら米軍なんでしょうねえ」

ザイルにも伝えたことだがクライム・アルバートとその部下は人間として、いや生物として持つていなくてはならない『生存本能』というものが欠落している。

軍の中で言わば麻薬のように浸透する彼の存在はそれに付き従う者達から恐怖心を除去、緩和させ戦わせる。

：利用して使い捨てる。最初から決め切っていたザイルよりも数  
百倍タチが悪い。何故ならクライム自身に自覚は無いのだから

「今頃これをネタに扱き下ろしまくってんでしようねえ、ザイルさんは。」

洗脳済みの人間を相手にしても面白くも無いですし下準備でもしておきますか」

クライムが倒されたあと彼が何をするのか大方予想が付いていた彼女はひっそりと自分の戦艦を呼び寄せる

「…」

英雄王なんてのが出てこなければ普通に回収、普通に離脱して終わりなんですがねえ

ステルス展開 魔力隠蔽 エクスカリバー砲発射用意 エネルギー  
充填開始

優勢とはいえ想定よりかなり早い影月 彼方の覚醒、さらに英雄王の出現という事態：勝負を焦るのは気が進まないもの、ここに来た本来の目的は彼方の回収及び聖杯の片割れの回収である。米軍及びバーサーカー陣営の壊滅はあくまでオマケだ、目的が達成可能な状況でのんびりする必要はない

：そもそもあの状態でクライム・アルバート達が向かってくる事自体が1番の想定外ですし。

相変わらず英雄王は静観したまま隣接地区でこちらの動向を探っているらしい

タマモタンクを2回も展開させて尚出てこないのはまだ自分が出

る幕では無いということでしょう、流石にワタクシ達が聖杯搜索したり、あとコレを見たら飛んでくると思いますが。

アーチャーの影響で弱体化していた霊基は完全に元通りになっているとはいえ復元できなかった尾もいくつかある、この状態で英雄王と正面から戦うのは得策ではない

…ここはザイルさんに相談しましょう

えー、ザイルさん？そちらの状況はいかがですか？

(ん、コヤンスカヤか？クライムが死んだ。…いやもうすぐ死ぬ

バーサーカーの安否は不明だがマスターがこれなら数分も保たないだろう

影月 遙と影月 彼方を回収して離脱する)

どうやら相談するまでも無かったらしい

かしこまりました！聖杯探索は次の機会に、ということ♪

半分は既に所持している以上急ぐ必要もない、ということだろう

(ああ、だが米軍残党はここで処理する。第2のクライムが出てこないとも限らない。

…とはいえ俺や彼方が残党処理にあまり力を入れすぎると遙が邪魔しにくる可能性が出てくる)

ふむふむ、というど？

そこから先は聞かなくても分かるが工作上、そして彼女の性格上、あえて続きを促した

(手段は問わない、連中が2度と向かってこれないようここら一帯の米軍にダメージを与えろ、遙は俺と彼方で抑える)

かしこまりました！業務内容、たしかに申し受けました♡終わり次

第回収に向かいますのでこの地区から早急な離脱をお願いしますね！

念話を切り、彼の端末に影月 遥の予測現在地を送信。続いて影月 彼方へ念話を繋ぐ

ええと、彼方さん？そろそろ退却していただけます？

(ええー？やだよ、まだ終わってないし)

そうですがアナタの戦い方だと効率が悪すぎて全滅させるまで時間がかかりすぎます、残りはワタクシがやっておくのでザイルさんと合流をお願いします

(でも…)

ザイルさんは既に遥さんを迎えに行きましたよ、アナタも迎えに行っっては

(行く！)

ブツツ

「え、ちよつと…」

あまりにも早い手の平返しに少々あつけに取られてしまうがすぐに気を取り直し、スキル発動準備へと入る

最早ギャグみたいなシスコンっぷり！ザイルさんが連れて行きたくない理由が少し分かったような気がしますねえ

と、勝手に納得していると端末からザイルさんの現在地を知らせる音が聞こえてきた、既に影月 遥を連れて隣の地区へ避難したらしく、メッセージが添えられている

「なになに…『退避は完了した。彼方のことは気にせずやれ。』」

…

「…ホント自分嫌いなことで。」

エクスカリバー砲 要求量のエネルギー充填完了 発射体制へ移行  
認証待機中

ふむ

砲台の準備も整った、敵の位置も確認済み

「——やりますか」

『NFFスペシャル A』

7つの異間帯で集めた7つの尾と特別な2つの尾。最終的にゴリラのせいで数は5本に減りはしましたが米軍を掃討するのくらいなら1本でお釣りが来ます、が。

「弱体化してから一度も使ってませんでしたし……ここは試運転と確認を兼ねて調整しつつ行きましよう！」

ブワリとそれまで不可視状態だった4本が具現化し最初の尻尾と合わせて5本となる

ヤガの尾、虎戦車の尾 カリの尾、アトランティス兵の尾、全て問題無し。展開数はどうしましょう？

どのような仕事も『楽しむ』ことを目標の一つにしているコヤンスカヤにとつてこの選択は迷うものだ、多すぎると無駄に魔力を消費した拳句、抵抗する間もなく押し潰してしまおうし逆に少なすぎれば残党を処理できない

ざっと見た感じ開戦当初の米軍の数は600前後、そこから彼方さんの雑な殺しとそれが行われた期間、タマモタンクによる爆撃も加味して残兵力は…

「230…いえ200…? ですが200以下は無いですね、ハイ。」

とりあえず4倍+αくらいの数で潰しますか

直前まで戦っていた化け物が急に消えて混乱状態にある米軍を囲むように使い魔を展開。ヤガとカリを300前後、虎戦車とアトラン



テイス兵を100前後ずつバラ撒き、そのまま包囲網を狭めていく  
「それでは米軍の皆様、頑張って抵抗しながら死んでくださいまし♡」

いずれ細かく、正確な数を展開できるように要鍛錬ですね!…さて  
あとは最後の後始末。恐らくこの辺りで――

『ゲートオブバビロン王の財宝』

ホラ来た

予想通りに降ってきた財宝の雨をフワリと避けて敵の位置を再確認する

…やはりというか必然というか、全身を黄金の鎧に包んだ最古の英雄が高台にてこちらを見下ろしていた

「オレ私の庭に!無粋な物を撒くなよ女狐っ!!」

「おやおや、最初からアナタが出張っていればこうはならなかったと思うんですが…今更出てきて庭を汚すな、とはそちらはどこの大富豪で?」

財宝の雨が暴風雨となつて加速する、こんなものを撃ち続けられたらいくら彼女でもひとたまりもないがあくまでも『撃ち続けられたら』である

…おおかたこの時代の人間だけでどうするか見届けてやる、とでも思ってるんでしょうが――

「アナタは王としての矜持も英雄としての誇りも全て捨てて最初から全力をもって参戦してくるべきでした。…主砲、標準固定」

認証受信 標準固定

もちろん彼がそんなこと出来るわけがないのは知っている、第7特異点の英雄王として現界した賢王ならやるかもしれないがここにいる彼は賢王ではない

「獣のくせに随分と饒舌よな…！よかろう、望み通り塵も残さぬ！」

ハア…ですから

ようやく本気になったであろう英雄王、闇の街を照らし尽くす程の金色の波紋が浮かび上がる、しかし――

「遅いと言ってるんですよ」

ステルス解除 エクスカリバー砲 発射

「な…!?聖剣…!?!」

呼び寄せた戦艦から放たれた聖剣の輝きが英雄王の無防備な背中へ叩きつけられる

「ぬ、ぐうっ!?ぐああああつ?!?!」

例え最古の英雄であろうと人類の脅威を打ち払えるような力を持った聖剣…の概念を組み込んだ決戦兵器を背後からブチ込まれてはタダでは済まない

「降り注ぐ聖なる光…な…んか神の裁きみたいですねえ、よく似合っていますよ♡」

唯一残念なのは魔力充填量ですね、現在の魔力では全体の40%も出せていません…まあこの時間で溜めれる量はこれが限界だったわけですが。

「お、おの、れ…!」

やはりトドメを刺すには至らなかつたらしいが相当なダメージを与えることができたようだ

「このまましっかりトドメを刺してもいいのですが――そうですね、今は結構気分が良いので見逃してあげますね!ではごきげんよう♡」

『単独顕現 EX』

視線だけで殺すつもりかと聞きたくなるような睨みに笑顔で応え、数回手を振ってからスキルを発動、ザイルの元へ

：ちなみに気分が良いから見逃す、というのは半分は嘘である。  
慢心極まっているとはいえ多くの人民に影響を与えられる『王』で  
すからねえ…このまま排除するには少し勿体ないですわ♡

↳

D地区 ウルフルズアジト跡地

「ただいま戻りました♪」

「…ここからじゃ何をしていたのかよく分からなかった、後で報告書  
をまとめろ」

勿論です！と最高の営業スマイルで応え、すぐに艦を地上へと呼び  
寄せる

「……………」

ふむ？

ザイルの横には顔を伏せてこちらを見ようとしないう影月 遙がい  
た。…無理矢理攫ってきたというわけでは無いらしく、またぬいぐる  
み化したアーチャーは近くには居なかった

その代わりと言っていいのか知らないが影月 彼方が自身の尻尾  
を遥の腕に絡み付け、犬のようにぐりぐりとしがみついている

まあいいでしょう、彼女らの処遇を決めるのはワタクシではありません  
せんし

そんなことを思っていると艦が跡地を踏み潰すように降りてきた

「コイツが今まで使っていた艦か？こうして見るとかなり大きいな…  
うるさい色をしているが。」

「ええまあ、本来もつと大勢の人間が乗る艦ですし

それとこの艦、最初は青と白の大人しい色でしたが持ち主と搭乗員  
の変更により、カラーはNFFサービス仕様の今の色となっていま

す」

地味にこの桃色への塗り替え作業が大変だったり…

「まあいい、とりあえず搭乗してここを離脱、これからどうするかじっくり決めよう。…とところでこの艦、名前はあるのか？」

もちろんありますとも、以前の持ち主達に敬意を払いつつつけた名前が。

「ええもちろん！」

『ストーム・ボーダー NFFスペシャル』

そうお呼びくださいませ♡」

## 第51話 ロンドンからの使者／ルマスの遺品

D地区 コンテナ置き場にて…

「まったく、好き勝手やりやがって」

たった今アメリカへと踏み込んだばかりの英霊は周囲の惨状を一通り見回したあと、抑えることなく一回舌打ちをする

(ランサー、分かっているとは思うが——)

「あ？ああ分かってる、俺の仕事は偵察と生き残ったマスターとサーヴァントにお前の伝言を伝えること、分かっているさ」

ビースト達に彼と彼のマスターの存在は認識されていない、言わばいつでも不意打ち可能なジョーカー枠である。ここで暴れて注意を引くわけにはいかない、だがあれでは…

「だがよ、このままじゃアメリカ軍もろとも全滅しちゃうぞ」

隣地区で戦闘中の米軍はコヤンスカヤの繰り出した異聞帯産の使い魔によって包囲攻撃を受けている。

あの数相手じゃ並の英霊が数騎居たところで防ぎ切るのは不可能に近い

「直接手を貸さないにしても出来ることはあるだろ？

…なんか知恵寄せよ」

(…うん、その通りだ。ついさっきJ地区の方にあぶれた使い魔が何体か移動していくのを探知した、駐屯地に米軍はほぼ残っていないはずなのに不可解な行動だ。

調べて欲しい)

「おいおい、基地よりも軍を守った方が良いんじゃないのか？」

現陸軍トップであるクライム・アルバート、及びウルフルズ幹部であるバルン・ファクターがそれぞれマスターであることは彼のマス

ターが既に確認済み。そして彼ら2人が現在窮地に陥っている米軍の中に居ることも。

(直接出向けばビーストに私達の存在が察知される

…それにその使い魔達の動きは無視してはいけないものだ)

無視してはいけないもの、って

「なんだよソレ? 根拠は?」

(無い、勘だ)

まったく、世界が変わってもアイツはアイツだな

「あー分かった、調べてくる。お前も何か探知したら教えてくれ」

あつさりと言い切る自身のマスターに頭を抱えながらも彼はすぐに持ち直し、くるりと手元の槍を1回転させ、折れるようにそう答え  
た

(うん、ありがとう)

ザイルとコヤンスカヤが見逃していた、いや誰にも存在を知られて  
いなかったサーヴァント。

察知されるのを避けるためずっとロンドンで身を潜めていた彼、ラ  
ンサーはマスターの命を受けて動き出した

そしてもう1騎の聖杯戦争とは関係のないサーヴァント、人理を護  
るための英霊——いや反英霊が米陸軍駐屯地にて召喚されようとし  
ていることはザイルやコヤンスカヤ、バルンはおろかランサーとその  
マスターでさえ知るよしも無いことだった

↳

J地区 米陸軍駐屯地 事務室にて…

「な、なにあれ…?」

無人の駐屯地という異様な場所、その一室にてミラ・ツールはソレ

を見た

あれは…人？獣？

明らかに普通じゃない影の塊みたいな奴らが駐屯地の中に入って来ていた、一見人型に見えたそいつらには獣のような耳と尻尾が生えていてさらに武装もしているようだ

ヘクトールを呼ばなきや…！

どう見たって救助隊に見えないソレらは引き寄せられるようにフラフラとこちらを指して歩いてきている

いざって時は連絡しな、と受け取った歪な携帯電話をバッグから取り出す

ええとダヴィンチちゃんうんたらかんたらって名前だったつけ…いや名前なんかどうでもいい、早く連絡を――

ダンッ

「びゃっ!?!」

室内に響く銃声、手の中で粉々になる携帯電話

外の奴らとは別の…!?!

事務室の出入り口から真っ黒ののっぺらぼうのような何か銃を構えてこつちを覗いている

「――」

殺される――

向けられる銃口から漂う死の気配、だが――

ザン

それを一瞬で吹き飛ばす存在がすぐに現れた

!!あの、女性は…!

服装はかなり変化しているものの、ミラはその女性を知っていた

「もしかしてあなたは…」

ひよいつ

え？

投げようとした質問が謎の浮遊感によって消え、直後彼女が一言

「——手を離すな」

その言葉を聞いたのと脇に抱えられたと認識したのは殆ど同時、そこから

タン

「ウワアーツ!?!」

一瞬で窓ガラスの1つを豆腐のように斬り刻み、ガラス片ひとつ触れることなく外へ。ちなみにここは5階だ

落ちていく感覚と前方180度から浴びせられる銃弾の雨。闇の空を埋め尽くさんとするそれらを彼女は刀1本で残らず叩き落とし着地と同時に水平へ跳躍、真っ黒の獣達をまるで刃の台風の如く斬り刻んでいく

今更だが手を離すなど言われたものの、こう脇にかかられては離すもなにもない。

仕方がないので簡易令呪とヘクトールが呼んでいた本と例のペンダントが入ったカバンを力一杯抱きかかえていた

そして——

「…塵殺完了」



そこから約1分後、集まってきた獣達を全て斬り伏せた彼女がガラ  
ス細工を扱うように優しく私の身体を降ろす

「…すごい」

暗くてよく見えなかったところもあつたがどう少なく見ても40  
匹は襲ってきていた、それを全部倒した上に彼女に疲れている様子は  
ない

「怪我は無いな?」

「うん、ありがとう牛若姉」あとその仮面かつこいいね

帰ってくると思っていた、そう伝えると彼女は困ったような、面倒  
くさそうな声で答える

「牛若…?ああ、我は義経ではない。ある意味では同一人物であるが  
源義経とは違うのだ」

「?」

声も外見も、以前私と遊んでくれた牛若丸と同じ女性は言いづらそ  
うに人違いだと告げる

いや、よく見ると外見は服装以外にも違いがある。…まず牛若丸は  
ここまで身長が高くなかった、

「牛若姉じゃないなら…あなたは誰、ですか?」

「…我は『怨』そして『斬』…源氏を殺す者。」

クラス・復讐者、アウエンジャ平景清である

挨拶が遅れた、まさか我にこのような機会が来るとは思っていなかつ  
たが…マスター主よ」

「…」

…私?

疑問符を浮かべて自分の顔を指さす私に肯定の頷きを挟む牛若…

ではなく景清姉が仮面を取り、こちらの目線に合わせるように膝をつ

く  
「主と人理を護るため、我が怨の炎ほむらを持って一切の敵を塵殺しよう、  
さあ…敵はどこだ」

「えっ…えつと…」

いきなりそんなことを聞かれても私に分かるわけがない。

そもそも今のこの状況だって分からないままだ、誰か説明して欲しい…

「その私も知らなくて」「下がれ、主」

またしても途中で遮られ、グイと彼女に引き寄せられる。こうして見るとやっぱり身長が高い

「…お前の言った通りだ、敵か味方が知らんがコイツは無視できねえな」

不意に目の前から聞こえる声にハツとする

いつからそこに居たんだろう？この距離だ、暗くて気付かなかつたということはあるまいと思っけど…？

「貴様が敵か？」

景清が剣を抜く

「そいつはお前の態度で変わると思っぜ？」

向こうも応えるように槍…みたいなものを構える

…

目の前から感じる強い殺気もそうだが何より声の正体が見えない、まるでやでもかかっているように姿が見えないのだ

直感だけど景清さんと同格かそれ以上の――

『…槍を納めてくれランサー、ここからは私が話をする』

どこからか分からない、その場に居ない4人目の声。とても落ち着

いたその声に目の前から飛んできていた殺気が消えてゆく

「…チツ、分かったよ」

『ありがとう。』

さて、訳あつて素性を明かせないが…私達は味方だ』

声だけで容姿端麗…ようするにイケメンだと分かるくらい綺麗な  
声が前の方のどこかから聞こえる

「…証拠は？」

警戒心を纏えない私に変わつて景清姉が立ち塞がる

『…ランサー』

「分かった、だが一瞬だけだ」 気付かれるからな

「何を——」

「…偽装解除」

↳

「——」

「偽装再展開、つと…これでいいか？」 便利な礼装だな

『うん、向こうに気づかれた様子は無い、充分だランサー』

まるつきり蚊帳の外の私はどうすればいいか分からずただただ景  
清姉の顔を見る

仮面で顔は分からないが何かを真剣に考えているようだ

「——確かにビーストやそのマスターが知ればお前を消しに来るのは  
間違いない、良いだろう。我はお前を信用する」

『！…そうか——「だが」』

刀を納めたものの、私を庇うように前へ出る景清姉の声はまだ刀を  
収めていないように鋭い

「我の今の主は彼女だ。貴様らを信用し、協力するかどうかは主が決める」

直後不意打ちにも程がある勢いで突き刺さる視線に若干たじろぐものの不思議と私の返答は決まっていた

「信じる」

気取った言葉が出てこず、短く簡潔な返答しか出なかったが彼らにはむしろそちらの方が良かったらしい

『…ありがとう』

「へえ即答か、悩まない奴は嫌いじゃないぜ」

『ええとランサー？私もあまり悩むタイプでは無いが…嫌いじゃない、というの…』

その、好きでもない、ということかい？』

「ちげーよ！変な解釈すんな！あとお前はもう少し悩んでから行動しろ！」

やいやいと騒ぐ彼らに少々肩透かしを食らいながらも聞くべきことを一つ一つ思い出し、姿の見えない彼へと質問を投げかける

「ただ私もマスターとかサーヴァントとかについて殆ど知らない、みんながいったい何と戦ってるのかも…だから教えて」

牛若姉やじいやは私の知らないところで戦って、そして戻ってこなかった。

恐らく使用人達も何も知らされていなかったのだろう、だがもうそんなのは嫌だ

「貴方達は…いや、今戦っている人達はなんのために、誰と戦ってるの？」

とても怖い、怖いけどもうこれ以上知らないままではいられない

『…うん、一つ一つ説明するよ。移動しながらでいいかい？』

「うん、あとこれからどうするかも教えて欲しい」  
もちろんだとも、と嬉しそうに応える彼の声と私、景清姉、ランサーの4人で移動開始。

『ランサー、運転の仕方は覚えてるかい？』

「ん？ああ、行けるぞ。ついでに鍵無しでエンジン掛ける方法もな」  
『良かった、調達を頼む。アヴェンジャーの存在もギリギリまで隠しておきたいからね。』

…さて、とりあえず私達の現時点での目的についてだ。

最優先するのは今コヤンスカヤの使い魔によって窮地に陥っている米軍、及び現地マスター2人とそのサーヴァントの救出にある

…あれは助けないと、この戦いは本当に詰んでしまう』

声は落ち着いているように聞こえるが僅かに焦りが混じっているのが分かる

事態は私が思っている以上に深刻らしい

『ここで会えて本当に良かった、ええと…』

「ミラだよ、ミラ・ツール。」

『ミラくん、そしてアヴェンジャー、しつこいようだがここで会えて本当に良かった』

…今世界の命運はキミ達に掛かっている。私やランサーにできることは少ないがやれることを全力でやるつもりだ』

そしてそんな重荷をキミのような小さな子に背負わせてしまったて申し訳ない、とも言う彼に『大丈夫』の意味を込めて頷く

ところでちゃんとこっちは見えてるのかな？相変わらず姿は無いけど…

その直後、不意に車のエンジン音が聴こえる

「おーい、エンジン掛かったぜ！」

ランサーが車の用意を終わらせたらしい

「…行こう、景清姉」

「ああ」

軍用ジープの運転席にランサー、後部座席に私と景清姉が乗車し車が動き出す

『さて着くまで少し時間がある。私に答えられることがあればなんでも答えよう』

「ありがとう！」

魔術師でないにもかかわらずサーヴァントと契約できてしまった彼女にとって彼のその言葉は渡に船だった

「それじゃあ「主、少し待て」

「景清姉？」

真横で座っていた景清がまたしても困ったような…気配？で話しかけてきた

…仮面はかっこいいけどそのせいで表情が分からないな

「その、だな？これは先に言っておきたい、主よ。」

「なあに？」

なんだか歯切れが悪い気がするがやがて押し出したように景清が  
呟く

「その、な？景清姉という呼び方はやめてくれないだろうか？」

「…？」

どうやら牛若丸とは違い、今の呼び方があまり好きじゃなかったらしい。

もちろん牛若丸をそう呼んでいたのは彼女も嬉しそうだったからであるが嫌ならそう呼ぶ意味もない

「分かった、ごめん姉ね<sup>ねえ</sup>」

「そっ！そうではなくて！」

「ぶっ…ははははははッ!!どこの英霊か知らないがアヴェンジャークラスがこんなガキ一人にフルボッコだなおい!?!はははははは!」

『ランサー!前!ちゃんとお前を見るんだ!』

「はは、うん?ウオあッ!?!」

∴結局ランサーが呼吸困難を起こし、そこから更に交通事故を起こしかねないため、景清の呼び名は当分の間アヴェンジャーとなった

## 第52話 過去からの援軍

J地区 住宅街にて…

「こいつら次から次へと！」

セイバーが鬼を仕留め損なつた直後、突如として鬼とビーストが消えた。

そしてすぐさまその代わりと言わんばかりに四方から押し寄せてきた謎の敵、敵、敵

人だか獣だか分からない兵士、あきらかにこの世の物ではない4足歩行の化物、悲惨なセンスをした戦車と様々でバラバラに襲いかかってくる

「まずい…！」

1体1体はサーヴァントクラスなら問題無いがとにかく数が多い  
米軍も兵士や化物相手になんとか戦っているが――

「クソ、また来やがった！」

「米軍は下がれ！頼むセイバー！」

「分かっている！」

時々出てくるこの筋肉質な兵隊が異常に強い…武器と呼べるものは棍棒くらいしか持っていないコイツらが4体…いや3体同時に来られるとセイバーでも手こずる強さ、といえばいいか

「そこをどけウルフルズ！」

「ッ！」

数発のミサイルが頬を掠め、肌を焼く

「マスター！」

「俺はいい！それよりもあいつらだ！」



ミサイルを食らった棍棒の兵隊は多少ダメージを受けたようだがすぐに向かってきた

「休ませるな！撃て！」

誰かも分からない号令により再び撃ち込まれるミサイル

…4発直撃させてようやくソイツは倒れ伏した

対戦車ミサイルを5発叩き込んでようやく1体…虎戦車でも2発で済むというのに！

「また来る…！限界だマスター！令呪を使え！ここを乗り切るにはそれしか無い！」

「ッ…」

それだけは駄目だ、確かに令呪なら俺とセイバーがここから逃げ出すのは難しくない、だが残った米軍はどうなる？

…間違いなく皆殺しだ、そしてクライム直下兵でもある彼らより強い軍はそうそういない

「それはできない！なんとか突破口を探すしかないんだ！

セイバーも分かっただろう！ビーストの持つ戦力が！

こう軽々と化物を量産されたらサーヴァントが何騎いても勝てない！」

ギャングも軍も、魔術師も一般人も関係ない、全ての力を合わせなければきつとビーストも…ザイルも止められない

「奴らもクライム隊を脅威と認識してるからこそ今叩き殺そうとしてるんだ！彼らを死なせては――

「避けてっ！」

「…!？」

戦場に似合わない少女の声、普通なら混乱するだろうが彼はその声

から瞬時に危険を感じ取った

ガンツ

「な、なんだアイツは！」

サーヴァントの気配を纏った二刀使いの女がいきなりセイバーに斬りかかっていた

「ぐ……まさか貴様は……」

「ふふ……ふふはははっ！そうか、そうか！聖杯と義経の遺品だけでどのように我を呼んだのか理解できなかつたが……そうか!!お前か！」

攻撃してくる使い魔を見ることがもなく斬り刻みながら嵐のように刀を振るう謎のサーヴァント

「アヴェンジャーやめて！彼は味方だよ！アヴェンジャーっ！」

アヴェンジャー、だつて？

「我が怨！我が思い！受けていただく！」

く

10分前 D地区 ウルフルズアジト跡地にて……

「え、20秒？」

『うん』

ランサーの運転する車を降りてすぐに投げつけられた衝撃の言葉  
車の中で最低限の戦闘、及び魔術に関する知識を与えられた彼女に  
はその意味が分かった

『ランサーが偽装を維持しつつ戦える時間、それが20秒だ』

……つまり？

「ふむ、我がマスターを抱えながら押し寄せる使い魔を薙ぎ倒し、かつ使い魔の魔力供給源となっている核を見つけて破壊する。援護できるのは20秒だけと来たか、随分と簡単そうだな?」

え

「アヴェンジャー、そんなこと出来るの!?!」

「…ただの皮肉だ、忘れる」

仮面越しにも分かる諦めに近い表情と気配、ランサーもやや不満気味だ

「なあマスター? やっぱこれは無茶だ。俺の宝具で使い魔をブチのめして探すしかねえ、あいつらがやられたら終わりつつたのはお前だぞ」

『その通りだ、だが生き残った彼らと私達が顔を合わせる時の切り札としてランサーの正体は絶対に知られてはならないんだ』

無茶振りとも言える彼の発言に誰も良い顔はしなかったが彼自身もそのような顔をしていないことは声で分かった

『セイバー陣営はまだ戦っているようだがバーサーカーとそのマスターは死にかけている、もう迷っている時間は無い』

「だがよ!」

…

「あ」

ふと頭によぎる1つの考えと音として出た声に視線が集まる

「どうした主」

「バーサーカーの位置は分かる?」

『うん? ああ、特定済みだよ。それが?』

…牛若姉やじいじならきつとこうした、と思う

「私の持つてるペンダント、聖杯が使われてるって言ったよね」

『そうだが…しかしこの状況を打開できるような魔力量が入っていないよ』

『…私を考えを聞いてほしい』

く

時は戻り現在

「どうすれば…ランサー！どうすればいいの!？」

「俺が知るか!!おい○○○○○○○○!」

『今考えてる…それと今は名前を呼ばないでくれ!』

…作戦はこうだった、まず使い魔の軍勢を倒すことを諦めてバーサーカーの元へと向かう

サーヴァントである以上十分な魔力さえあれば満身創痍であろうとすぐに傷を癒すことができる、聖杯として魔力量が少ないとはいえサーヴァント3騎分は入っているこれならば難しい話じゃない

アヴェンジャー、セイバー、そして復活したバーサーカーで包囲の最も薄い場所を集中攻撃し、外側から同じ場所へランサーも攻撃。包囲を打ち破って米軍と共に逃げる、というものだった

誤算だったのは――

「源氏、死に候え」

アヴェンジャーがセイバーとの間に何かしらの因縁があった、ということ

『…仕方ないか、ランサー!今から20秒以内に彼女を連れてバーサーカーの元へ行って戻れることはできるか?』かなり無茶だが…

「この状況で無理って言えるかよ、行くぞ!」

またしても抱えられ、バーサーカーの反応があつた場所へと向かう  
ランサー

「ん…のツ…いどきやがれエツ！」

地面を埋め尽くす使い魔達を槍で薙ぎ払いながらただひたすらに  
前へと彼は走るが、あまりの多さに速度が出ないらしい

「クソ！もう偽装も何も知つたことかよ！宝具で全部吹っ飛ばしてや  
る！いいなマスター!?!」

やはり無謀だつたらしくタイムリミットの20秒は目前に迫つて  
なお私達は目標地点に到達出来ずにいた

『だ、だが…』

ぐいつ

へ？

「いてっ！」

不意に足を引つ張られる感覚がして地面に落とされる

…!

四足歩行の化物が、地面に落ちた無防備な<sup>私</sup>子供の腹部を、正確には  
そこに掛かっているバッグを見ている。もちろん見ているだけで終  
わるわけは無く――

「ミラ!?!」

「きゃあああっ!?!」

ばかり

――ツ!?!

バッグのついでと言わんばかりに化物が身体にかぶり付いた  
バッグの中、のペンダント、に惹かれた…!?!

影塗れで見えなかったが化物にはしっかりとワニのように鋭い歯  
があるのが痛みで分かった

い、痛い…ランサー…アヴェンジャー…！  
ソイツは私に齧り付いたまま、のしのしとその場を離れ始める

「○○○○○○○○っ!!」

『っ…！分かった、偽装はもう気にしなくていい。無制限戦闘を許可する！彼女を助けてくれ!』

かなり渋っていたようだが背に腹は変えられない、と彼も決断したようだ

「やつとかよ！この野郎待ちやがれ！」

間に割って入り続ける使い魔達を薙ぎ倒しながらランサーがこっちに向かつてる、けど

「なんだコイツら急にこっちに!?!しかもこのデカイ連中、確かアトランティスの…!」

『異種の使い魔達が連携を…？まずい、逃げられる!』

使い魔の波に埋もれてランサーの姿が見えなくなり始める

誰、か…

「オラアッ!!」

「わあっ!?!」

蛙を轢き潰したみたいなき音を立てて化物が文字通り叩き潰される

…影の塊で無かつたらきつと私は失神していたに違いない

「マスター…ありやあ…」

『うん、驚いた。あれでどうやって現界しているんだ?』

追いついてきたランサーを「そんなことはどうでもいい」と一言で一蹴し、強面な顔からは想像できないほど優しく彼は私を抱き上げて一言

「——どいつも、こいつも、女子供を戦場に出してんじや、ねえぞ」

恐らく彼がそうなんだろう

「あなたが…バーサー、カー？」

）

同時刻

『アーチ中佐死亡！』

『デルタ隊消滅！』

『C防衛線決壊！』

「……………」

「……………」

「……………」

通信機から聞こえてくる声を頼りに重すぎる瞼を上げる

俺は…気を失っていたのか…？

「…俺、は」

轢き潰された両足には既に痛みは無く、静かに血の円を広げているだけ

出血が酷いのを見るに気絶していた時間はそう長くはないと死にかけの男は考えていた

：

俺はもう死ぬのだろう、諦めるとかそういう次元ではなく単純にもう生きていられるような状態じゃない

「……………」

だが今はまだ生きている、それなら俺にできることは――

「ゴボツ…ふ…」

焼け爛れた喉を通って血が吹き出る

足と同じように痛みは既に無かったが血で壊れないように無線機を手繰り寄せるのに少々時間がかかった

「…こちら、アルファ…いや、クライム、アルバートだ」

そう言った直後、まるで無線機が爆発するかのように届く希望を灯した無数の部下の声

よし、まだ全滅は、していない

「返答の、余裕はない。命令を出す」

…

「…お前、たちは」

俺にこんな命令を出す資格は無い、だが俺は負けた。負けてしまった。

ザイルに、ビーストに、そして自分自身の憎しみに。

せめて、お前たちは

ガッ

生き抜け———そう言おうとした瞬間、何かに首を掴まれる

「グ…」

あぶれた使い魔の一部が彼の元へ来たらしい

クソ：最後くらい、許し、やがれ

人だか獣だか分からない影の手がギリギリと首を締め上げる

既に呼吸は止まっていたがこう押さえ付けられては喋ることもできない

「う、うあ」

朦朧とした意識の中で不鮮明な影とは対象に影の持つ銃が鈍く光る



「……………」

獲物にトドメを刺そうと向けられる銃口

まだ、死なない…！部下を、仲間を死地に引きずり出した人間は、今死ぬわけにはいかない…！

芋虫のようにみっともなくもがく。何度か銃口が僅かにブレるものの、それもほんの僅か。ただ引き金が引かれるまでの時間が1秒にも満たないほど伸びただけ

「く、の…」

ブレようが無いように銃口が眉間に押しつけられる

——認めるか、終われるか

絶対に、諦めてたまるか

諦めるのは

「死んだ後、だな」

！

「ひじ、か…」

知っている声が影の頭を吹き飛ばした

「よく堪えた、お前のサーヴァントとして誇りに思う」

退去しかけの弱々しいサーヴァントは既にそこにはおらず、召喚当初の…いや、召喚当初よりも魔力で満ち溢れたサーヴァントが大きな旗を持ってそこに立っている

「バーサーカー…その魔力はどこから…？」

「安心しろ、誰も犠牲にしちやいなえよ」

これについては後で話す、と会話を切っつていつものように無愛想に答える

「ランサーのマスターは米軍を連れて残ったマスター、サーヴァントと共に離脱するように言ったが…逃げるつてのはやはり俺には合わねえ」

…？

ふと、周りにバーサーカー以外の気配があることに気付く

1人や2人じゃない…いつから居たんだけ？いや、それじゃない。見るべき点はそこじゃない

数十人はいる彼ら1人1人から感じる気配

まさか、いやそんなバカな

「これは誓いだ。同じ旗の下で、共に同じ時代、同じ戦場を駆け、同じ志を持った俺達の。」

彼が、手に持つ旗をコンクリートの大地へと打ち立てる

サーヴァントがサーヴァントを召喚するなんて…

「…そろそろお前も回復するはずだ、クライム」立て

「え？あ、ああっ？」

言われるがまま強引に立ち上がらせられ、いつの間にか両足が再生している事実には驚愕するがそんな間も無くバーサーカーが口を挟む

「驚くのは後だ。…コイツらを残らず叩き殺すぞ」

そう言っつて彼は俺の持っつていた予備の無線機を手に取り、もはや無線機なんていらぬのではなぬかと思えるような大声で叫んだ

「ここは新撰組が引き受けた！」

## 第53話 旗の下に

J地区 住宅街 米軍 vs NFFサービスの戦場にて…

「班長！彼らは一体…？」

「…私に分かるわけがないだろう」

突如現れた謎の剣士達、それがさつきまで我々米軍が苦戦していた化け物共を次々に斬り伏せている

「何者なんだ、いったい——」

「はい、お届け者物ですよーつと」

!?

「こいつ!?」待て、撃つな…：クライム隊長!？」

目の前に降り立った背広を着た男、どこか掴みどころのない表情の彼の脇にはよく知る軍人であり英雄であるクライム・アルバートが抱えられていた

「い、今どこから…」

「んじや、確かに送り届けたから。」

空から降ってきた。文字通りそう表現するしかない登場の仕方に困惑する兵達をよそに男が消える

「いったいこれは…」

「話は後だ！」

！

「隊長！」

「戦車とゴリラ兵は無視してザコを叩け！新撰組と共闘してこの死地に活路をこじ開けるツ！行くぞ!!」

「…ッ！」

了解!!

同時刻

「~~~~~!」

「?!!」

米軍を押し潰そうと狭まる包囲網の外側で、その包囲網を切り刻まんとする剣士が2人

その場に限っては2人しかいなかったがそれでも彼らが苦戦することは無い

「ねえ沖田ちゃん」

長身、細身、浅葱色の羽織を着た男性。新選組三番隊隊長、斎藤一が気怠そうに、だが剣筋を止めること無くもう1人の剣士へと話しかける

「あれ? 斎藤さんもこっちに来たんですね? ですが今忙しいですし後にしません?」

そしてそれを呆れ気味にやんわりと静止する白髪の少女、彼と同じ格好をした彼女こそ新撰組一番隊隊長、沖田総司。

「いやいや、確かに忙しい——けどっ!」

彼の背後に回り込んだ使い魔の不意打ち。が、驚愕しながらもそのまま斬り伏せ、次の敵へと太刀筋を動かす

「ほらもー言わんこつちやない、いいからとりあえず斬りましようよ」  
「じゃないと終わらないですよ? この数は。」

「分かってるよ、ただ…ね? 引越してみたいなノリで言うセリフじゃないと思うんだけどなあ」

「どうですかね? 刀以外運ばなくていい分引越しより楽じゃないで

すか？」

「……………それ、本気で言ってる？」

「いえ、冗談ですが。」

「…」汗

2人の間を漂う微妙な空気。戦場とは思えない空間を2人の刀が斬り裂いていき、みるみる包囲網を打ち崩していく

「まあ確かにそう長く現界できそうにないですし会話のキャッチボールくらいはします…よつと！」

会話はしつつ、しかし敵から意識を逸らすことなく彼女は応える

「ありがとね…沖田ちゃんさあ、現状どう思う？」

「え？うーん…多分世界の終わりじゃないですか？」

「じゃなきや隊士もこんなに集まりませんよ」

「だよねえ…」

### 『誠の旗』

新撰組副長、土方歳三が発動したこの宝具により極短時間のみの現界を果たした新撰組の隊士達。彼だけの宝具…というわけではなく、新撰組隊長格は全員この宝具を持っている(当宝具で召喚された者には無い)

また所持者全員が全く同じ効果を発揮する、というわけでもなく呼び出される隊士1人1人と所持者の相性も関係してくる。言ってみれば所持者と仲の悪い隊士は召喚に応じる事はないのだ

また今回、土方歳三の場合はかつて新撰組にて汚れ仕事…:具体的には尋問や裏工作などを主にやってきた隊士達が召喚される。:通常であれば

「副長のマスター運びながらちよつと見回してみたけど、うん。ほぼ全員来てるねコレは」

「ああやっぱり、1人1人が人理に刻まれた英雄でもありますからねえ…名前が残らないとしても世界の危機には敏感ってこと…ですっ!」

音なく走る斬撃がとうとう使い魔の包囲網に風穴を開け、上司のマスターであるクライム・アルバートと彼の部隊を視界に捉えた

「もう包囲網を崩したのか!?!」

完全に予想外の展開に驚愕する彼を見て外見相応の得意げな表情をする沖田総司

「…あ、あれ?」

が、喜んだのも束の間

「あー、早く来すぎてるね、まだ部隊がまとまって移動できる状態になつてないんだ」

再び包囲網を掛けようと群がる使い魔を斬り続けながら、急ぎすぎだよと彼が言う

「見ての通りまだ後続がいる!すまないが脱出路の維持を頼む!」

「はいはい、んじゃここは僕が引き受けますよ」

飛び交う銃声よりもさらに大きく響くクライムの声、彼女がそれに答えるよりも早くそれを止めた彼が前に出る

「斎藤さん?」

「…こつちに合流する前にアヴェンジャーとセイバーを見た。

2人とも人理側こちらだけど因縁があるのかあの中で殺し合いしてる

そつちを任せてもいいかい？」

「ええー？」

若干迷ったが『沖田ちゃんの場合、いつ終わるか分からない退路確保を続けるっていう耐久戦は苦手というかムリでしょ』というぐうの音も出ない正論に押され、その場を後にした

↳

同時刻

土方歳三サイド

「オオオツ…死ねエツ！」

アトランティス兵を蹴散らしながら随時マスターや周囲の状態を確認する

とりあえずクライムは本隊の方に合流したようだ、セイバーの方にも沖田が行った、後は――

「こいつらだけだ！」

剣、ライフル、体術、果ては敵の武器に至るまでありとあらゆるものを使って立ち塞がる敵を打ち倒していく

このまま押し切ってやる！

「バーサーカー！」

「ああ!? 女の方のランサーか、丁度いいお前も戦え！」

「……俺は『ただのランサー』だ、2度とそう呼ぶんじゃねえぞ。

マスターがお前に話があるらしいから聞け。」

はあ？

霧払いくらいはしてやる、と俺の背後をカバーするように戦い始めるランサー

そして俺とランサーを挟んで丁度真ん中の空間が喋り出した

「あと5分もあれば区切りもつきそうなんだが今じゃないとダメか!?!」

『ああダメだ、盗み聞きも覗き見も難しいこの混戦状態じゃないとね!』

…っ?

「いったい何だ?!」

『時計塔に来るんだ! ビーストを倒すために、貴方のマスターと私は会わなければならない!』

「時計塔? どの時計塔だ!?!」

『案内役も取り付けた! ここを切り抜けたら位置は彼から聞いてくれ!』 離脱するんだランサー!

「おい! 話はまだ——」

「了解だ!」

止める間もなく離れていくランサー

『ずっと、私達は待っているよ』

また会おう、という言葉最後に男の声も聞こえなくなる

ち、どいつもこいつも好き勝手やりやがる!

「副長! 今飛んで行ったのは…?」

「放っておけ! あと一息だ、続け!」

く

数十分後

NFFボーダー内にて…

「はっ、はっ、はっ…」

クソ…ふざけた女だとは思っていたが…やれ、やれ…

「あー? 流石のザイルさんも今のはキツかったようですねえ、大丈夫ですか?」



「問題ないが…やれやれ、お前がビーストと呼ばれる理由がこれか？」  
「正確には理由の1つですね、なんなら別方面の理由も見せて差し上げ——」

…急に耳を立てて固まって——

「どうしたコヤンスカヤ？」

「……米軍を包囲させていたNFFスペシャルが全滅しています」

NFFスペシャル？あの使い魔の軍勢のことか？

「未知のサーヴァントでも出てきたか？米軍はどうなった？」

「少なくとも1騎、我々の知らない英霊が出てきているのは確かなようです」

靈基反応からクラスは恐らくアヴェンジャーですね

米軍については…壊滅寸前ですが総崩れにはなっていないようです、既に殆どが撤退を始めています」しかしあの戦力差をどうやってひっくり返したのか…

……

「ええと他に残っているサーヴァントは…ザイルさん？」

壊滅寸前ということは残存兵力は1割か2割、多くても3割だろう。

どうやったのか分からないがあの数相手に総崩れにならなかったのなら間違いなくクライムも生きている

「でなきゃ米軍は全滅だろう？」

「もしもーし？ザイルさん？うわ、すっごい笑顔。」

ただの延命や遺言で米軍を保たせられる訳がない。クライムは、今も生きている！

「はは、最高だ。次は首を吹っ飛ばしてみるか？」

そのまま突撃してきたりしてな？あっはっは！」

「ああおいたわしや…ザイルさん、とうとう頭がおかしくなつてしまったのですね」よよよ…

「どこもおかしくないぞ、やれやれ…」

さて、これからどうするかな？

く

2時間後

J地区 米陸軍駐屯地 予備司令室にて…

「来たか、バルン」

「クライム、怪我は大丈夫なのか？」

「それについては大丈夫だ、それよりもセイバーは？」

「言われた通り駐屯地の外で待機させてるよ」

「よし」

あと来ていないのは…

「サーヴァントアヴェンジャー、主に代わり推参した」

「アヴェンジャー…！」

「そう警戒するな、というのも無理な話か。だが我は源氏でも無い者を主の命無く斬ることなどない」

これで一通り人類側の英霊、マスターは揃ったか？

『おーい！私を忘れないでくれよ』

いきなりアヴェンジャーの背後から聞こえてきた声に思わず銃を取りそうになるがなんとか抑える

「そういうえばお前らが居たな、レオナルド・ダヴィンチ

あのゲス野郎…ヘクトールはどこだ？」

『……………彼は自分の宝具を強引に使ったせいで、その…』

…

「分かった」

「待てバーサーカーのマスター」

我と源氏の戦闘に割って入って来た女の英霊が来ていない」

「女の英霊？」

「沖田のことだな、アイツらならもうとつくに退去した」ここにはもう居ない

「…？そうか」

よしそろそろ本題に入るとしよう

「バーサーカーのマスター、話に入る前にあと一つ聞きたい」

「クライムでいい、どうした？」

「そうか、ではクライム。主の容態について聞きたい」

ミラ・ツールか彼女は――

「出血が酷かったが命に別状は無い、いずれ目を覚ます」

「…そうか、礼を言う」

「………俺には、礼を言われる資格なんて無い」

「…？今なんて――」「クライム」

「分かっている土方、塞ぎ込むにはまだやるべき事が多すぎる」

頭痛にも似た感覚に一瞬こめかみを抑えたのち、改めてやるべきことについて思考を巡らす

「激戦の後にも関わらず集まってもらって悪いな

呼んだのは他でも無い、これからどうするかについてだ」

最終的にビーストとザイルを倒す、という大雑把な目標はあるものの現状では補足することすら困難な状況だ

故に一つ一つ地道に行くしかない

「ならばクライム、貴様から話すがいい。

隊の人間ではなくサーヴァントやマスターを呼んだということは我々に先に話すべきと判断した故だろうからな」

「そのとおりだ。…バルン、時計塔は知っているか？」

「時計塔？それはええと…ロンドンの時計塔のことか？」

あー…

「正直なところどういいうものでどんな場所か俺もよく分かっていないんだ」他に知ってる奴はいるか？

その問いにははいはい！と答えたのはAIダヴィンチ

『ロンドンの時計塔…魔術師の総本山とも言える言わば超一級の魔術師が集まる場所だね。詳しく説明すると日付が変わってしまうから詳細は省くけど』

「説明ありがとう、ざっくり言って俺はそこに行かなければならない世界を救うために、例のランサーのマスターと俺は会わなくてはいけないらしいからな」

「例のランサー…？誰だ？」ヘクトールは違うし…

そういえばセイバー陣営には面識が無かったか

「後で説明する。…ともかく俺は時計塔に行かなくちゃならない、相手の意図も目的も不明」

だがビーストと対立している以上、敵の敵は味方だろう。向こうが協力してくれるというなら是非会いに行きたい」

『でもそう上手くいくかな？』

少し調べただけで時計塔の魔術師はみんな良くも悪くも《魔術師》だ、サーヴァントと契約しているとはいえ魔術師ですら無い者を時計塔に入れるとは思えない

いや、下手すれば近付くことすら難しいだろう』

「ああ、そうらしいな。その点に関してもランサーのマスターから言

伝があつた。…案内役を取り付けた、と」入ってくれ

「どうやらあちらのランサーが離脱前に彼をこちらに送り届けてくれていたらしい

「肝心の本人が乗り気じゃないが…そこは運が悪かったと思って諦めてもらう他ない

「し、失礼します」

「少々情けない声と共に司令室のドアが開けられる

「…？子供か？」

「魔術師のようだが…」

「歳は関係ない、彼は過去に一度聖杯戦争を生き抜いたマスターの1人だ」前回の聖杯戦争ではライダー…征服王イスカンダルを従えたマスターだったらしい

「！」

『…なるほど、確かにキミなら適任だね』

「気は進まないかもしれないが自己紹介を頼むよ」

「…っ！ああ、ああ！分かったよもう！だけど自己紹介の前に一つだけ訂正させろ！

「僕はアイツの、征服王イスカンダルの臣下だ。」

「それを聞いた全員が首を傾げたものの、お構いなしに彼が自己紹介を始める

「ウェイバー…ベルベットだ、時計塔に案内するまでは協力してやるさ

「…はあ」

第54話 幕間 ビースト コヤンスカヤ（1）

時は巻き戻り米軍とNFFスペシャルが激突している頃  
???にて…

「  
暗い

手元すらロクに見えない暗闇の中、必死になって何かに…いや

「  
自分を呼ぶ誰かに手を伸ばす

——お前は誰だ？

誰か分からないのに、彼女が誰よりも大切な存在だと誰かが訴えている

伸ばした義手ではないズタズタの右手に見える使用済みの令呪跡、少なくとも俺の使っていた令呪とは形状が違う

「…?」  
俺？俺とは誰のこと？

ズキン

「…!?ガツ…ア…!?」

バラバラになりそうな身体の痛みと訳の分からない浮遊感の不意打ちが『私』を襲う

こ、これは

違う

暗いんじゃない、そう見えるのは、私が死にかけているからだ

「う…!?」

身体が動かない、大きなダメージで動かないのならまだ理解でき

る。だが――

身体が…!?

輪郭が不鮮明の真つ赤な尾が今にも私を取り込もうとしていた。既に下半身と左半身は沼に沈むように完全に尾の中へ取り込まれており、感覚は無い

「…っ!」

徐々に尾の中に引きずり込まれて行く

尾に近い場所から順に身体の感覚が痛みと共に消えてゆく――というのに意識だけは変わらず覚醒したままだ

『死ぬよりも恐ろしい何か』という理由の無い漠然とした恐怖に支配されそうな中、眼前の…私が手を伸ばそうとした少女が自身の身体より大きな盾を振りかざし、NFFスペシャルの使い魔を蹴散らしながら走ってくる

私を助けるために。

「だ、めだ」

掠れて潰れそうな喉から押し出した声

彼女が今ここに来てももうどうにもならない、なんとか彼女だけでも逃がさないとだめだ…!

おや?その状態でまだ他人を心配する余裕があるとは少々…いえ、かなり驚きました♡伊達に人類史を救ってませんねえ?

「う、ううっ…!」

別に脅された訳でも無いのにその声を聞いただけで臓器を鷲掴みにされたような恐怖が再燃する

それ、でも

「来ちゃ、だめ――」

「マシユっ！」

「——っ??」

黒鉄の義手、壊れかけているにも関わらず思い通りに動くソレは何もないマイルームの天井目掛けて手を伸ばしている

「……………夢にしては」

少々現実味が過ぎる。それに今俺が叫んだ名前…

「…」

…少なくとも俺にマシユなんて名前の知り合いはいない

夢の内容は既に臍げだが嘔吐するのではと思いついそうな気分の悪さはそれが悪夢であったことを証明するには充分すぎたし、覚えていることもあった

「途中で聞こえた声…あれは間違いなくコヤンスカヤだな」

ベッドから起き上がり、眠気覚ましの缶コーヒーを冷蔵庫から取る

「ぐびっ

やれやれ、不味い上に気分は最悪だ

ゴミ箱に缶を投げ込み、部屋を出る

奴は確か操舵室に居ると言っていたな

船の中とは思えないほど広い廊下を歩き、俺はコヤンスカヤの元へ向かった

↳

N F F ボーダー 操舵室にて

「コヤンスカヤ」

「おやザイルさん、彼方さん達と一緒にいると思っていましたか。」



「ん？ああ、あいつらなら姉妹仲良く夜のお昼寝中だろう」放っておけ  
「ふむ」

彼女らがいるであろう部屋のカメラ映像へと切り替える

「うーん…捕食でもするつもりなんですか？アレ」

船室の1つにて、シングルベッドの上でもぞもぞと動く影。ズームすると彼方が自分の尻尾を1回、2回、3回と遙の身体に巻きつけ、すやすやと眠っているのが見える

「どうだかな、ウツカリ喰ってから自殺でもしてくれればありがたいんだが」

…当たり前だが遙さんは寝ていない、あの状況で眠れる方がどうかしている

助けて、とカメラ越しに目で訴えかけているのが見て取れるが面白いから——いや、ザイルの命令で放っておくことにした

「でももしお姉さんが食べられそうになったらザイルさん助けに行くでしょう？」

「……………」

妙に長い沈黙と欠伸を挟み、彼は呟いた

「…さあな」

「ふーん…まあそれはそれとして、何かご用ですか？」

今のところザイルが仕事以外で彼女の元を訪ねてくることは無い。コヤンスカヤもそれを分かっていたため『今後の方針が決まったのでしょう』くらいにしか思っていなかった

「ああいや、今後の予定とかが決まったわけじゃない」

「では義手ですか？」

「それも違う。…用というのはお前自身だ」

…？

「ワタクシに？」

「アサシンのサーヴァントとしてではなく、またNFFサービス代表としてでも無い。」

「災厄の獣、ビーストとしてのお前に聞きたいことがある」

「――」  
へえ

「いつかはこういう日が来ると分かっていたがそれでも口元が緩んでしまう」

「――ま、別に良いですが…もっと先かと思ってましたよ」

「俺もそう思っていた、だが…ちよつと夢見が悪くてな」

「それにこの空間には俺とお前だけだ。いい機会だろう？お前の過去について聞きたい」

ふむ、なるほど

空席となつている沢山の椅子の1つに彼はアップルジュースを片手に腰掛けた

：関係ないが彼という存在自体は影月 彼方から生み出されたものであるため、趣味趣向は人間としての彼方にかなり近いもの…端的に言えば女性寄りの趣味になっていることが最近分かった

「また何かくだらないことを考えているのか？」

「いえとんでもございませぬわ。さーて、ワタクシの過去をお話する前に情報料のお話ですが…」

「…？無料タダだろ、俺はビーストとしてのお前に聞くといい、お前はそれを了承した、NFFサービスの絡んだ取引も商売も今はナシだ」

おやおや、全くザイルさんは…

「ちよーつと目を離れたスキに随分賢しくなりましたねえ、ですがまあそれを言われたらこちらの負けです、二言はありません。…お話

しましようか」長くなるのはお覚悟くださいませ♡

」

???にて…

「——で？なんだこれは？」

俺はコヤンスカヤにお前の過去について聞きたい、そう言ったハズで奴もそれを了承していたと思うが。

(ワタクシの過去をお話するにあたってこれが1番理解されやすいかと思ひまして？ええ。)

コヤンスカヤの声、そしてこの聴こえ方…愛玩の檻だろうか？

気付けば俺はどこかの施設のようなところに放り出されており、自身の身体にも異常が見受けられた、というのも——

「これが俺か？」

白いカッターシャツ…というのも違うか、制服のような白い質素な服を来た橙色の髪をした女性と呼ぶには少々幼い少女が無造作に置かれた鏡に映っている

(ええ、今ザイルさんにはその人間の人生を追体験させています

過去をお話する以上どうしても彼女と彼女の所属する組織について知っていたかなければなりませんので)

「…？」

この少女、マスターではあるようだが別段魔術師として優れているというわけでも無さそうだ、コイツとコヤンスカヤにどんな関係が…？

(丁度いい枠があるので後からお供致しますわ♡

『冬木』の攻略が終わり次第、ワタクシもそちらに♪

あ、グダリそうならカットしますからご安心くださいませ！)

「??」

まるで意味が分からないままどうすべきか考えていたがそうするまでも無かったようだ

「いきなり鏡をじっと見つめて…大丈夫かい？」もしかしてどこか具合が悪いとか…

男の声？

「…あの、誰ですか？貴方は？」

誰だお前は、とそう言おうとした。言ったハズの言葉は何故か多少丁寧な言葉へと置き換えられ喉から出る

男の正体よりも声の高さと勝手に変換された言葉の方に興味が行きそうになったがとりあえず眼前の男に意識を集中させる

「おいおいしっかりしてくれよ、今自己紹介したじゃないか？

…ボクはロマニ、ロマニ・アーキマン。

このカルデアの医療部門トップだよ、みんなからはDr. ロマンと呼ばれてる

改めて宜しく！藤丸立香ちゃん」

「…」

直感だが…長くなりそうだな、これは

## 第55話 幕間 ビースト コヤンスカヤ(2)

仮想カルデア 司令部にて…

「というわけでもう一度おさらいしよう、キミたちの目的は2つ。

特異点の調査及び修正、そして聖杯の調査だ」

炎上都市冬木から帰還…コヤンスカヤ風に言うなら攻略後、1日休  
眠を挟んだのちDr. ロマンから告げられたのはこれまでの生活か  
らは考えられないようなことばかりだった

特異点…そしてそれぞれの特異点に存在する聖杯、ね

色々と聞きたいことはあったがどうやらこの空間において本来の  
記録から逸脱し過ぎる行動は取れないようになっていているらしい

例えばビーストだの神霊だのの話をしようとするどブロックがか  
かるが誰かの趣味を聞いたり施設の場所を聞いたりすることは可能  
らしい

「とはいえ現地でサーヴァントを召喚できるかどうかも賭けになる、  
下手したらキミとマシユだけで進まなければならぬこともあるか  
もしれない

故にこちらも戦力を強化していかなくちやならない、2人ともつい  
てきてくれ」

ドクターに続きメガネのデミ・サーヴァント…マシユ・キリエライ  
トと共に司令部を出る

どうやら夢に見た大盾のサーヴァントと同一人物らしい、炎上都市  
で見た時と装備がかなり違うが…時系列に大きく差があるのかもし  
れないな

「さあ着いた、ここが召喚室だよ」

重い扉を開けて入ったのはなんとというか…電脳空間という呼び方

が1番近い場所だった。思いつく中で1番近いイメージであって電脳空間かと聞かれると違うと言えるが

床にはシール<sup>マ</sup>ダー<sup>シユ</sup>の盾が設置されており、その周囲は不思議な気配に包まれている

「リソース的に1騎呼ぶだけで精一杯だが君らを助けるサーヴァントが多いに越したことは無い、今回のレイシフトできる人数も丁度あと1人余裕があるからね」

さっ、呼んでくれ!と召喚を促すドクターの指示通り、手をかざして召喚の言霊(?)を唱え――

「……………」

「立香ちゃん?」

…一度は唱えてるはずなんだが…忘れた。

2人に聞こうとしたが声にならない、どうやらこの質問はルールに触れるらしい

どうすれば…うん?

「…!?ドクター!」

「何もしてないのに召喚が…?ダヴィンチ!」

狼狽えている2人をよそに俺は特に何も慌てることはなかった

姿はまだ見えないが気配で分かる、やれやれやつと知ってるのが来たか

「御用とあらば即参上くあなたの頼れる巫女狐、キャスター降臨つ、です!」

鏡の宝具を使った時のような巫女服に身を包んだコヤンスカヤが聞いてもいないのにくるんと回って自己紹介をする

…正直あのコヤンスカヤがこんなことしてるといっただけでちよつと面白いな

(先に言つときますけどこの空間内、ザイルさんの考え全部筒抜けですからね?)

明らかにイラついた声が聞こえるが面白かったので特に気にすることなく『ああそう』と心の中で返事をする

(たまたま彼女がここで召喚したのが玉藻御前だったので善意でサポートしに來れましたのに：ザイルさんはなんて恩知らずなのでしょう?)

悪かったさ、ここでもまともに質問できるのはお前だけだ。お前の過去とやらが分かるまでサポートを頼む

(おや：：てつきり『さつさと教えろ』みたいな言葉が飛んでくると思っていましたか。)

周り道こそ娯楽だと教えてくれたのは誰だった？別にいいだろう(うーん、なんでもかんでも娯楽に結びつけるのもどうかと：まあザイルさんが乗り気ならなによりで)

「玉藻の前：！?凄いで立香ちゃん！いきなり彼女のような超大物を呼び出すなんて！」

「やりましたね！先輩！：先輩？」

「え？あ、ごめんポーツとしちゃって！さ、頼りになる英霊も来てくれたしレイシフトの準備をお願い、ドクター！」

「え？あ、ああ、分かったよ！」

(ところで今思いついたんですが口調はそのままに立香さんの声からザイルさんの声に変えることができますけどどうします？もちろん録音アリで。)

「やめろ。：やめろ」

仕返しとばかりに一瞬変わる声、流石にこれ以上気持ち悪いのは嫌なのでとりあえずコヤンスカヤに謝罪した

「先輩？」

「ごめんごめん、独り言！じゃあ行こう！」

く

少々子供っぽい表現かもしれないが…そこからはまさに『大冒険』の3文字だった

く

- 第1特異点 オルレアン
- 第2特異点 セプテム
- 第3特異点 オケアノス
- 第4特異点 ロンドン
- 第5特異点 イ・プルーリバス・ウナム
- 第6特異点 キヤメロット
- 第7特異点 バビロニア

そして

「終わったのか？」

「ええ、辛く、苦しい戦い…冠位時間神殿ソロモンでの決戦は『彼女』にとって特に大切だった2人の犠牲によって幕を降ろしたのです！」

あ、マシユさんはスグ復活しましたねそうですね。

………やれやれ

周り道を拒まなかったこっちにも落ち度があるが…流石に長すぎる。お前の過去とやらはいつ分かる？

(まだまだーようやく折り返し地点といったところですよ？さ、次のシーンに飛ばしますね)



仮想ロシア異聞帯にて：

ようやくお前の姿が出始めたが：前半は結局何のためにあつたんだ？

（立香さんとカルデアについて理解していただくためですわ♡

今のワタクシを語るにあたり、彼女らの説明無しでは意味がありませんし）

これでも結構な大幅カットをしてるんですよ？とはコヤンスカヤの弁。

「…」  
クリプターに異星の神：やりたい放題だな

（さ、カドツクさんが待っています。張り切って行きましょう！）  
やれやれ…

「…」  
そこからの記録は7つの特異点修正以上の激戦だった  
異聞帯という世界、それを成立させている空想樹を伐採してその世界の住民ごと世界を殺す旅…

俺からしてみれば愉快以外の何者でもないが特に長所も無い『ただの少女』がこれを実行すると覚悟を決めていたとするならばソイツはもう『ただの少女』ではないだろう

「…」  
心なしか鏡に映る立香彼女の目つきも変わってきていた

ロシア異聞帯

北歐異聞帯

中国異聞帯  
インド異聞帯  
大西洋異聞帯  
ブリテン異聞帯  
南米異聞帯

これらの異聞帯に加え、平安京や北米に発生した特異点でも激戦を繰り広げた俺達…いや、彼女らカルデアはついに『異星の神』を打倒した

「…チ」

いい加減にしろ、流石に長いぞ

(もう終わりますよ、アップルジュースでも飲んで一息♡)

だが人理を脅かす危険のある敵は異星の神が最後ではなかった

…災厄の獣、ビーストIV。これまで『コヤンスカヤ』と名乗っていた獣は異星の神をも取り込み、いよいよもって人類に牙を剥き始めた  
もちろんそれを黙って見ている彼女らでは無い。ビーストIVを倒して人理の脅威を取り除くため、カルデアは最後の攻撃をかけることとなる

…決戦の場はロシア、ツングースカ川上流域。

空間の名は――

非霊長生存圏  
ツングースカ・サンクチュアリ

第56話 幕間 ビースト コヤンスカヤ(3)

仮想ロシア ツングースカ川上流域 殺戮領域にて…

「はっ、はあ…く…」

銃弾に貫かれた腹部を押さえながら、子鹿のように頼りない足で立ち上がる

——無謀だった

何度も窮地を切り抜けてきたカルデアではあったものの、これまでと違いこの空間の主はあらゆる場所で彼女らを見てきた

「流石は異星の神を倒したマスター！ええ、ええ！そう来なくては♡」  
パチン

ダンッ

「マスターー！」

どこから飛んでくるか分からない凶弾を本能で防ぎ、その大盾を構え直すマシユ

…この獣にはカルデア及びツングースカに現存する汎人類史側の全ての戦力と正面から戦ったとしても間違いなく勝てるという見込みがあつた、それで尚カルデアのマスターだけを分断させ、こうして追い詰めているのは目の前の死にかけの少女をそれほどまでに警戒している、ということに他ならない

(自然界で『油断』ほど恐ろしいものはありません。まあぶっちゃけた話どこぞのクソ坊主のように調子に乗って失敗とかゼツタイに嫌なのでえ)

「ここはやはり敬意を払うという意味も込めて全力で潰させて貰います♡」パチン

乾いた音と共に2人を取り囲むように出現するNFFスペシャルの使い魔達、その数はもはや出現だけで相手に絶望を与えることのできる『群』だった

「こゝ、こんなに沢山…!」

「ではマシユさんをテキトーにあしらいつつカルデアのマスター、藤丸立香さんをここに♡」

号令と共に使い魔達が一齐に襲い掛かる

マシユも自身のマスターを守ろうと死に物狂いで応戦する、が  
「あっ!?!」

シールダーの名に恥じない守りの堅さも単純な物量の前に押し流され、マスターの誘拐を許してしまった

「コヤン…スカヤ…!」

コヤンスカヤという絶望を前に未だ諦めない彼女はせめてもの抵抗と言わんばかりかこちらを睨み付ける

「もー、これから長い付き合いになるんですからそんなに睨まないでほしいですわ

ホントは取り込む前に色々とお話ししようと思っていたのですが  
――」

(分断が解けかかっていますし早めに動いた方がいいでしょう)

合流しようとしているのは太公望と…うわ、これもしかして伊吹童子ですか?!

ワタクシの感覚が狂ってなければ草薙を連発で叩き込んでいるようにも…)

「後でいくらでも時間はありますしここはササッと行きましょう」

使い魔から解放されて力無く横たわる彼女を9本目、最後の尾がガラス細工を扱うように優しく包み込む

「マスターっ！この…！どいてっ！！」

NFFスペシャルは既に攻撃をやめ、ただの奔流となってシールドを押し流す

足を止めて攻撃するよりもただの濁流となって押し出した方が時間稼ぎになると判断した獣は改めてこれまでのことを思い出していた

(ここまで来るのに長いような短かったような…こうして最後のピースをはめる瞬間というのは苦労しただけあって中々感慨深いですねえ)

「先輩っ!!やめて！やめて下さいコヤンスカヤ！どうか…！」

ここにきて何故通じると思ったのかわからない命乞いを無視し、尾への同化を始める

「ふむ」

狡猾な獣は悲願達成目前となった今でも警戒は怠っていない

マシユさんはもうこちらには来れませんし外のサーヴァント達がここに来るのに最短でもあと40秒、ストームボードーに動きは無し、空間内に新たなサーヴァント反応も無し、立香さんの魔術礼装もたった今剥奪した。

(これはひよっとしてもう…)

「だ、めだ」

何かの雑音と聞き捨てそうになる声が尾から聞こえる

(おや？その状態でまだ他人を心配する余裕があるとは少々…いえ、かなり驚きました♡伊達に人類史を救ってませんねえ?)

慢心しない、と誓った彼女もその他人を気遣う一言に思わず口元が緩む

だってそれは立香さん自身がここから逃れることを諦めたという

なによりの証拠だったから。自分は助からなくても大切なマシユさんだけは逃そうと…

「来ちゃ、だめ——」

(別にもう来てもワタクシは構いませんよ？先程も言ったように長い、とても長いお付き合いをするわけですし気の許せる相手が近くにいた方がよろしいでしょう？ね、立香さん♡)

「ツ…！マシユっ！」

トドメとして言い放ったのが効いたのかそれは相手を気遣ったものではなく、ただの生存本能…恐怖から逃れようとするただの叫び。それを最後にぷつりと藤丸立香という人間の人間らしい人生は幕を閉じた

「せ、先輩…そんな…」

「うふふふ…計画通りに進められると本当に気分が良いですねえ！」

(誕生日も兼ねて新しい姿でカルデアを相手にする、のもいいですが)

外からの攻撃によって崩れかけの結界を解き、NFFスペシャルも一度全て解除。雷の如く飛び込んでくるサーヴァント達を見ながら少しだけ考える

「マスター…どこ!?お姉さんがすぐ行くから！」

「……………今の結界の解け方、僕が解除した訳じゃ無いし彼女がこじ開けたという訳でも無い、中から開けられたと考えるのが自然でしょう」ダヴィンチさんはどう思います？

「キミの言う通り今のは不自然だった。…まさか、ね」

「おい、どういふことだ太公望？オレに分かるように説明しろ」

(ま、カルデアにトドメを刺すというならば獣よりもこの姿でお相手する方が面白いでしょう)

「マシユだ！おいみんな、マシユがいるぞ！マシユ大丈夫か!?なあマスターはどこだ？何があつたんだ？」

「ハベ、にゃんさん…先輩、は」

「皆さまが心配せずともこれこの通り、ちゃんとココに居ますよ？」

その一言にその場にいたマシユ以外の全てのサーヴァントがコヤンスカヤを見る

(あらあら、驚かれていますねえ)

「そこまで驚きますか？よく知っている顔でしょう？」

ついさつきまで人類最後のマスターとして立っていたハズの少女が妖艶な笑みを浮かべ、不自然な獣耳と尻尾をフワフワと振っている「え、なにアレ？なんでコヤンスカヤはマスターに化けてるの？」

「化けてるだけなら良かったけどあれは多分…」  
「できれば調べたくありませんでしたが調べました。」

…あそこに居るのは正真正銘、藤丸立香さんです。——すみません、やられました」

「その男が言った通り、あなた方のマスターはワタクシがありがたくださいましてしまいました♪いやー、ちよつと遅かったですねえ」

先程退去させたNFFFスペシャルを再展開、カルデア残党を排除するには明らかに過剰な数で包囲網を作る

「では再開するのでしょうか、キャスターの…太公望さんでしたっけ？また煙に撒かれても面倒なのでアナタのお相手はこのワタクシが。残りの方々は…まあとりあえず踏み潰されといてくださいませ♡」

——そこから始まったのは戦いではなく、ただ強者が弱者を屠るだけの『狩り』だった

「…はは、これは、ホントに参った。奥の手も、効果無し、と…は…」  
 「お、おい！太公望!」

「終わりですか、グランドキャスターも呆気ないものでまあ。」

倒れ伏し、幻のように消えていく男を見下ろしながら周囲の状況を  
 確認する

まだ頑張っているようですが既にまともに戦えているのは伊吹童子  
 さんと——…？伊吹童子さんだけ？

たんつ

おっと、上ですか

スピンスター・ハベトロット  
 「きみに紡ぐ刻の車輪！…っマシユ今だ！」

「バンカーボルト…！」

尾を狙って放たれた連携攻撃を軽くないなし、ロケット砲を展開

「っ！ハベにやんさん！私の後ろに！」

「ああ——これはちよつとダメそうだ、ごめんね？マシユ」

花嫁の守護者 EX

盾の上から強引に爆撃を喰らわせる

むう、マシユさんは仕留め損ないましたか

「はっ？…っ！よ、よくも…！」

「落ち着くんだマシユ…ここは逃げよう」ニキチツチと伊吹童子が  
 今退路を確保してる

「嫌です！マスターが、先輩が「彼女は生きてる！どういう理屈か分か  
 らないがまだバイタルは消えていない！ここは堪えるんだ！」

(ダヴィンチさんから至極最もな意見が出ましたが…)



「それを聞いたワタクシが彼女にトドメを刺すとは考えなかつたので  
しょうか？」

そう呟くが早いか、弾かれるようにマシユさんが1人で突っ込んで  
くる

(ホント愛されてますねえ貴女。)

「やめるんだっ！」

怒りと焦りに任せて振り下ろされた大盾を防ぐことも無く受け止  
め、今度はショットガンを展開。

『殺戮技巧 A』

無防備になった胴体目掛けてショットガン拡散銃を撃ち込んで吹き飛ばす

「マシユっ！」

(…今ので死なないとは)

「先輩…！ぐっ、倒れる…わけには…！必ず…助け出しますから…！」  
継るように彼女が立ち上がる

もはやそんな力は残っていないでしょうに

「立香ちゃん！返事をしてくれ！立香ちゃん！」

どうやらマシユさんを止めるのを諦めたのか、立香さんの方へ呼び  
かけ始めたダヴィンチさん、しかしそんなことしたところで——いや  
(…身動き1つ取れずとも応えようとはしますか、これは見上げた精神  
力♡)

「立——」

ズシン

特に小細工することもなく尾の1つを振り下ろし、押し潰す

「でも残念ながらこの通り、壊れかけの人形はカンタンに壊れてしま  
うのです、よよよ…」

「ダヴィンチちゃん…！あ、ああああっ!!」

(こちらこそそろそろ限界のようで。うーん殺すのもなんだか可哀想になつてきましたし連れて行きましょう)

「コホン…どうしたの？マシユ、私はここにいるよ?」

「せん、はい…?」

もはや正常な判断も難しい程に弱ったマシユさんを抱え、転移の体制に入る

(凄い速度で退路確保に回っていたお2人が戻ってきてますしとつとと行きましょう)

『単独顕現 EX』

ㄱ

ツングースカ川上流域から4万メートル上空、宇宙空間にて…

(とりあえずマシユさんはNFFスペシャルと一緒にストームボードーに放り込んでおきました、彼らなら例え敵に侵入されていようと死に物狂いで逃げようとするでしょうし大丈夫でしょう。——現地のお2人を見捨てて、ね

そしてやはり自分の領域に落とすのは少々躊躇してしまいます…それでもやるんですが)

「では参りましょうか。」

『ツングースカ・ナインドライブ  
雷天日光・禍音星落火流錘』

ㄱ

ストームボードー 管制室にて…

「えー、テストス、ただいまより当機は使用用途、目的、並びに搭乗員を変更いたしましたことをアナウンス致します♡」

文字通りの殺戮領域と化した管制室にてとびつきりの笑顔でマイ

クに向かうコヤンスカヤをボンヤリと見つめる

《…》

自分という意識はあるのに感覚が無い、身体が無い、何も残されていないはずなのに何故か聴力と視力だけは不自由無くここにある、誰にもどうにも遮断されることのない音と景色がかつて人間だった少女の心を抉っていく

《…》

「うふふふ…ご満足いただけましたか？立香<sup>ザイル</sup>さん♡」

「は、あ、っ…!?が…!」

気でも狂うのではと思うほど流れ込んでくる『藤丸立香』の感じた恐怖と無念が脳を焼く

まるで頭ん中にミキサ―突っ込まれたみたいだ…!

「はっ、はっ、はっ…」

クソ…ふざけた女だとは思っていたが…やれ、やれ…

ああ、本当にふざけている。世界を滅ぼしうる災厄？誰だそんなことを言ったのは、コイツは…この女は既に滅ぼした後の獣じゃないか

「あー？流石のザイルさんも今のはキツかったようですねえ、大丈夫ですか？」

「問題ないが…やれやれ、お前がビーストと呼ばれる理由がこれか？」  
やれやれ、全く…

頼りになる女だ。本当に、な

## 第57話 カルデア式英霊召喚

NFFボーダー 召喚室にて

「つまりお前が藤丸立香を吸収してカルデアを叩き潰した後、残党で遊ぶのも飽きてきた頃に気分転換で俺の召喚に応じた。というか勝手に来たのは分かったが…：肝心のお前自身の過去についての話はどこに行つた？」

「あれ？彼女に同期させた時点でワタクシにも同期したことになってますし既に分かつていらつしやるのでは？」

やれやれ…

「じゃあ、なんだ？アレをそのまま受け取るとつまりお前は…：ツングースカ大爆発によって死にまくって大量発生した動物達の亡霊、が玉藻御前に寄せ集まって出来た存在ってことか？」

正直自分でも何を言っているか理解できない、いったいどういう理屈が通ればそうなるんだ？

「なんか微妙に違いますが…：まあ概ねそんなところですよ」

「やれやれ…」

藤丸立香の思念に加え、(弱々しいとはいえ)何千何万という動物の思念をいきなり生身に叩き込まれて自分でも良く死ななかつたものだと思う。影月の家系がそういうことに強いのかコヤンスカヤが調整したかは知らんが

「で、何故召喚室に足を運んだのかそろそろお聞きしてもよろしいでしょうか？」

ああ、そうだったな

同期中に見た召喚室…とはやや雰囲気が違うもののシールドの盾や部屋の雰囲気そこまで差異は無い場所。ここにくる理由は一つしかない

「それに答える前に俺から質問させろ、お前が滅ぼした世界の人物はこっちの世界にも存在するのか？」

「え？ええ、事故死とかしてなければ大概居ますよ」中身は違いますが顔見知りの神父に会いましたし。

「そうか」

だとすると…厄介だな

「何を始めるんです？」

「サーヴァントを召喚して戦力強化を図る。お前のことを信用していないわけじゃ無いがこの先NFFスペシヤルだけに人間皆殺しの希望をかけるのは少々心もとないんでな」

どうやったのかまるで分からないが米軍は異界の怪物達相手に劣勢状態から勝利するという劇技をやったのけている。妥協も油断もしない方がいいだろうし、懸念事項は他にもある

「…使えるサーヴァントは多い方がいい、魔力もどうせボーダーから出るしな」

「まあワタクシは構いませんが触媒無しだとハズレ引く可能性もありますよ？召喚もそうポンポンできるものではありませんし？」

「…そうだな」

実際触媒なんて持ってない、どうしたものか…

プシュッ

「あつ、お兄ちゃん居た！コヤンスカヤも！2人で何やってるの？」

召喚室に入ってきたのはさっきまで昼寝をしていたはずの影月彼方だった。相変わらず影月 遙は彼女の尻尾にぐるぐる巻きにされて捕まっているが幸運なことに気絶しているらしい

そうだ、これでいい

「彼方、大事な話がある。姉さんを一度解放して座れ。」  
「…? いいよ!」

あつさりと姉さんを解放し、その場に座り込む彼方は今か今かと言葉を待っている

「コヤンスカヤ、合図したら召喚を始めろ」

「え、まさか」

「？」

苦笑いのコヤンスカヤを他所に影月 彼方の腕をむんず、と掴み――

「エ？」

召喚陣に投げ込んだ

「これが触媒だ。始めろ」

「ええー…まあやれと言われたらやりますけど」

「うわあ!?!何これ!」

狼狽えて逃げようとする彼方を陣の中央に押し込みながらサーヴァントが現れるのを待つ

「こんなんで良いんですかねえ」

「別に良いだろう、死ぬわけでもないだろうしな」

「いや場合によっては死にますけど。」

「…」

「…」

「ちよ、ちよっとお兄ちゃん何しようとしてるの?」

…

「…別に良いだろう」

「うっわあ無垢な自分に対してサイッテーです」あ、サーヴァントの気配がしますよー!――え、2つ?」

さて鬼が出るか蛇が出るか…少なくとも王とか騎士とかが出てこない確証が持てるというのは安心できるが…

「——我が名は茨木童子、大江山の——…？酒呑？もしや酒呑がいるのか？」

実体化するなりフラフラと周囲を見回す子供。その頭にはしつかりと2本の角が立っており人の英霊では無いことが見て取れる

「妥当というか当然というか…まあ今の彼方さんを放り込めばそりや出てきますよねえ」

「あたまがくらくらする…」

残念ながら彼方は死ななかつたが英霊召喚は出来たので良しとしよう

茨木童子、クラスはバーサーカーか。あともう1騎はなんだ？

「アサシン・パライ——むっ？」

「？」

現れた忍装束の少女が俺を見るなり、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして固まり、そして——

「おおーぎーいる殿！まさかあなたが喚んで下さるとは！拙者、感激でございるー！」

「はっ！」

初対面の相手に何を言い出すんだコイツは？いやしかしザイルと今…？

「ええと…お2人はお知り合いなので？」

「はい！」「知らん」

見事なまでにすれ違う会話に苦笑いのコヤンスカヤとシヨツク気味なアサシンのサーヴァント

面倒だが聞かないわけにもいかないなこれは。

「お前は俺のことを知っているみたいだがそれは見た目も名前もそっくりなだけの別人だ。」俺はお前のことを知らん

「うわあ、もしかしたら？とか微塵も考えず言い切りましたよこの人」  
彼女可哀想…

うるさい、黙ってろ

「だからまずお前自身について教えてくれ、お前はどんな英霊でザイルという男をどこで知ったのか、以前召喚された経緯、場所、全てな」  
「うむむ…どうやら本当に別人の様子、言われてみれば50年経ったにしてはお年を召しておられないでござるし…承知。

あなた様が今のお館様<sup>マスター</sup>であるのは相違無き事実、命とあらば全てお話致しまする」

「そうしてくれ。ところで茨木とか言ったバーサーカーはどこに行ってた？」

さつきから姿が見えないが…

「彼女でしたら彼方さんを見た瞬間、顔面蒼白で部屋を飛び出して行きました…」

やれやれ、戦力強化になるのかこれは？

「コヤンスカヤ、あと彼方、茨木童子を捕まえておけ。俺はコイツと話をする」

「はあい」

「かしこまりました！」

何故か微妙に嬉しそうな彼方を連れてコヤンスカヤが召喚室から出て行く

「さて、本来引き継ぐことのない英霊という存在が持ち込んだ記録とやらを聞かせてくれ」

さつきはああ言ったが彼方を触媒にして出てきた英霊が俺を知っ



ている時点でコイツの言うザイルと俺は絶対に無関係じゃないはずだ

「勿論でござる、少々長くなりますが…」

「長話ならもう耐性が付いた、構わない」

藤丸立香体験劇より長いとすればもはや何も言えないがな

「…？承知、ではまず50年前、拙者が伊吹山にて召喚されたところから語らせていただくでござる」

こつちとしてはコイツが役に立つサーヴァントならそれでいい、それでいいんだが…やはり気になる

「お館様？」

「続ける」

「はっ！」

コイツ、語尾がおかしくないか…？

）

同時刻

J地区 米陸軍駐屯地 医療棟 重傷者療養室にて…

ウルフルズとの抗争が起こった直後でもせいぜい全体の5分の1も埋まらなかつた重傷者専用区画は、先の戦闘に加えて逃げ遅れた市民も合わさり見渡す限りの怪我人で溢れかえっていた

処置室は勿論のこと、この療養室、仮眠室や補給倉庫など、空いている場所があればベッドを置くなどといった対応をしなければあつという間に屋外まで人が溢れてしまうだろう

「やめ、ろー離せー怪我人扱い…するな！」

既に目が回るような忙しさの中、それは軍人故かクライムというリーダーがいるからか、彼のような患者も出てくる

「脊椎砕けた人間が何を言ってる!?おい、もつと鎮静剤持ってこい!」  
これ以上暴れさせたらコイツ死ぬぞ!

「それがさっきの子に使ったのが最後で…!今セリム2等がB棟に取りに行ってます!」

「よりによつてこんなタイミングで切れるとは…!」

NFFスペシャルによる部隊への大打撃に加え、まだ街の電力が復旧しておらず基地の発電機は全てフル稼働。物資はともかく人手が圧倒的に足りない、麻痺一步手前のそんな中

「ゴホツ、く、クライム、さん…まだ俺は…」

「あまり無理をしない方がいい、クライム氏もそう望んでいるだろう」  
ただ1人だけ神父服に身を包んだ青年がそこにいた

「神父、様?この街の人じゃなさそう、だが」

「私は言峰綺礼、つい最近アメリカに来たばかりの神父だ

神父だが医療の知識も持ち合わせていてね、こうして手伝わせて貰っている」

相手が神父だからか彼も無理矢理押し退けるようなことはせず、少し落ち着いたらしいがそれでも熱は収まっていない

「頼む神父様、貴方から彼らに言ってくれ…!俺はまだ戦えるって…」  
「ふむ?…ところで何故そうまでして戦おうとするか聞かせてもらってもっ…」

「戦いが、終わっていない!それだけで充分だ!」

「今現在戦闘は無い上に今のキミではそもそも戦闘行為など無理だろう」

興奮する彼とは反対にどこまでも落ち着いたままの神父が言葉を紡ぐ

「——最も治したところで戦線復帰は絶望的だがね」

「——ッ!!」

涼しい顔で現実を突きつけるものの、彼が爆発するよりも早くさらにその先を神父が言う

「そこでここは私に一任してはくれないかね？」

「どういう…？」

「なに、先も言ったように私は医療の知識も持ち合わせている。

その上魔術師だ、悪いようにはしないと」

それを聞いた彼は空気のしぼんだ風船のように大人しくなってきた、やがて——

「…頼む神父様、俺を治してくれ」

「勿論だとも。今すぐには無理だが責任を持ってキミを治療する、約束しよう」

「…つありがとう、ごぎいます神父様、脊椎がダメになったって聞いて、もう戦えないんじゃないかって…!」

何度も感謝の言葉を並べながら彼は静かに意識を落とし、そのままベッドごと別の場所へ運ばれていく

「ありがとうございました」

「なに、これが仕事だ。それに彼の約束もある、後ほどもう一度彼のところを訪れるつもりだ、最も——」

(一度脊椎が砕けた身体で戦線復帰できるかは保障しないがね)

「神父様？」

「つまらない独り言だ、また力になれそうなのがあれば遠慮無く声をかけてもらいたい、私にできることなどそう多くは無いが…」

「とんでもない！大いに助かって——あ！今行きます！」

失礼しますと小走りに駆けていく看護婦を尻目に見回りを再開：

しようとして低い位置から声をかけられた

「よう」

「む?…:グランドアーチャー、オリオンか」

もうグランドのグの字も無えよ、と熊のぬいぐるみがびよんぴよん動きながら愛想笑いをする

「生き残ったマスター及びサーヴァントはクライム氏の元に集まってる」と聞いたが」

「今の俺がサーヴァント名乗ったらふざけるなって言われるのが目に見えてるし現にクライムから『まだ来なくていい』って言われてる

そういうアンタはどうなのよ?」

療養室から一旦外へ出て彼との会話を続ける

「クライム氏からこちらの支援をしてほしいと言われている

普段信仰心が無い人間として継ぐことのできる何かは常に求めるものだ」私のようなただの神父には出来ることは限られているからね

「…あんなサーヴァントと契約しといてただの神父は無理だろ」なにあのラスボスガキ大将?

「ふ、伝えておくとするよ」

「それはヤメテ!?多分ガチで殺されちゃうから!」

「それで…:影月 遙に着いていかなかったのは何故だ?見るに今のキミと影月 遙は一心同体と言ってもいい状態だと思っていたが」  
「着いていかなかったんじゃないやねえ、置いてかれた

2人1組のサーヴァントとしては俺の方が本体な上に殆ど無力なこの身体じゃ魔力消費なんて有って無いようなモンだ

加えてハルは生身の人間だからあっちも自然消滅の心配はねえ

危険なのに変わりは無いが少なくともすぐに殺されるようなことは無いだろう」

『お、おい！正気か!?全人類滅ぼそうとしてる奴だぞ!?!』

『でも私の家族だ！行かなきゃ、彼方が唯一心を許せる相手が私なら応えないといけない、応えたい。あの子にこれ以上そんなこととしてほしく無い』

『ハルっ!』

『恋とは全然違うけど、私は妹を…家族を愛してるから

…ごめんオリオン、行ってくる』

〽

「…ハル」

「…では私はそろそろ戻らせてもらおう、神父としての仕事は終わっていないのでね」

「ああ、引き止めて悪かった、じゃあな」

療養室に消える神父、そしてそれと入れ替わるように物陰から現れたのは――

「アーチャー」

「ん、鬼殺しのセイバーか。」

「頼光四天王が1人、真名は渡辺綱」

「ああサンキュ、こんな見てくれたがギリシヤの狩人、オリオンだ」よろしくな

「よろしく頼む。それと伝言を伝えに来た」

…?…俺に?!

「協力者と会うためにロンドンへ向かう、人員はクライム、バーサーカー、キャスター…のAI、そしてお前、アーチャーだ」準備してく

「え……」

今スグ？

今すぐだ

## 第58話 《降臨者》 コヤンスカヤ

日本 伊吹山の麓にて…

見渡す限り木々しか見えない場所の上空を一機の大型ヘリ、カーゴボブと呼ばれる乗り物が飛行する

着陸可能地点を探して数分程、やがてパイロットは開けた広場を見つけて着陸体制へと入る。

本来ヘリの着陸には誘導員がいるものだがここにそんな人間はいるわけが無いし彼女にも必要なかった

「…つと、目的地に到着いたしました♡」

「ああ」

プロペラから巻き上がる喧しい風の音を聞きながら外へと出る

「……………」

新しく召喚したアサシン、望月千代女によれば50年前にここで召喚され、影月 此方——つまり俺<sup>彼方</sup>と姉さんの母親に出会ったらしい

コヤンスカヤの事前調査によれば現在の伊吹山は人も動物も近寄らない異常地帯…たまに中へ入ろうとする奴が居るがそいつらさえも何者かが排除しているらしい

「お、お館様」

「分かっている、おい彼方」

「なに？」

やや怯えた声色でヘリの中から顔を覗かせるアサシンの手首には何度か見た紫色の尻尾がちよっかいをかけるように絡みついている（ややこしいので以後パライツと呼ぶ）

「そいつは大事な案内人だ、手を出すな。無視しろ」

「えー？」

まだパライソについてよく分かっていないがどういいうわけか彼方が近くに居ると異常に怯える上に彼方自身がそれを面白がっている、ように見える

仕方なくパライソの元へ

「…今尻尾を離すか小指をヘシ折られて痛みで離すのがいいか決める」

「え、分かったよ。指折られるのは今も痛いし」

とまあ、そんなことを言っている彼方の無防備な小指を掴み――

ボギツ

「エツ、ギャーツ?!?!なんで???'」

「気が変わって折らずに済ませるのをやめた、コレに懲りたらパライソに近付くな。お前は姉さんとくっついていればいい」

そうだろ、姉さん？

「…」

ヘリの中で借りてきた猫のように大人しい姉さんを見ながらパライソを連れ出す

来たは来たでダンマリか、こっちとしてもありがたいからそれでいいんだが

「――お館様は」

「うん?」

「姿は同じでも、ざいる殿とは違うでござるな」

「不満か?」

「いえ滅相もありませぬ、それよりもこうしてまた手を貸していただきかたじけない」

「…気にするな、いずれこんなことも忘れるくらい死物狂いで働いてもらう時が来る」



さして…

振り向けば「びっくりしたー」と小指の骨を再生させた彼方とコヤンスカヤがへりから降りてきていて、さらに――

「やれやれ、どこに行くつもりだ茨木童子?」

姉さんに化けた茨木童子の腕を掴む

「!!な、なぜ…?」

表情に余裕が無すぎだ、逆に言えばそれ以外では完璧といえる見事な変化でありコイツのメンタルが強ければ分からなかっただろうが

「それをお前に言う必要は無い」

逃げられても面倒だ、やはり伊吹山ハイキングにコイツは行けないな

「まあどうせこのまま戻るから関係ないが。コヤンスカヤ、終わったら連絡しろ」

「もちろんですわザイルさん♡では皆さま、参りましょう!」

「コヤンスカヤの道案内を頼むぞ、パライソ」

「はっ、はい!」

伊吹山の入口へ向かうコヤンスカヤ、上機嫌な彼方とやや怯え気味なパライソ、3人の背中を見送ってへりに乗り込む、と――

「姉さんも行くのか?」

「…うん」

「そうか、気を付けてな」

「……………うん」

顔を伏せていて表情の見えないまま姉さんとすれ違い、へり内部の座り心地最悪なイスに腰掛ける

「分かった、もう逃げぬ。だから手を離してくれ」

「それを聞いたのはこれで4回目だ、許可できないな」

それにその気になればこの程度の義手、簡単に壊せるだろう?」

出方を見るためにあえて何回か逃げる隙を与えてみたが分かったことが2つ

危機察知能力が今まで俺が会った誰よりも高いこと、そして鬼のくせに小心者であるためか強硬策に出る気配が無い…今のところは

「まあ強硬策に出るのは逃走経路だの隠れ家だのを見つけでもしない限りしないだろうがな」

「な、なんだ? なんなのだ貴様は? 心が読めるのか…!」

凶星か、やれやれ

「おいコヤンスカヤ」

「あー終わりました? じゃ上空のボーダー<sup>うえ</sup>まで戻りましょうか」

コックピットから顔を覗かせるパイロットスーツを着たコヤンスカヤに指示を出し、へりを飛ばす

…今さつき伊吹山へ登って行ったコヤンスカヤとは同一人物であり別人だ

「それにしても分裂出来るとは驚いた、スキルや戦闘能力は問題ないのか?」

「まあこれくらいならなんとも、ビーストとしての権能をバンバン使うというのは無理ですが」

「そうか」

ちなみに今ここでへりを操縦しているのがアサシン霊基のコヤンスカヤで下にいるのがフォーリナーという霊基のコヤンスカヤらしい

「ところでザイルさんは行かなくて良かったんですか?」

「俺は報告を聞くだけでいい、あんな場所には1秒だって居たくない

「からな」

「みるみる内に眼下の伊吹山が小さくなっていくのを見ながら返事を返す」

「ところで義手はどうなってる?」

「そろそろ右腕コイツも限界が近い、人工魔術回路の再現は不可能だとしても不備なく動かせる義手は欲しい」

「それでしたらあとはザイルさんの義手を外してサイズや相性を測るだけです」

「ボーダーに戻り次第、作業を頼む」

「もう、俺に魔術回路は必要無い」

「かしこまりました、それとワタクシからも相談事が2点ほど」

「相談事?」

「なんだ?」

「ザイルさんの礼装、否幻想弾ですが残り弾数はいくつですか?」

「残りは確か——」

「8発だ、それがどうかしたのか?」

「実はその礼装をもっと強力なものに加工できるかもしれない、1発お譲り頂けないかと」

「へえ…?」

「サーヴァント貫通よりも強力な効果が見込める、ということか?」

「もちろん結果が出次第、すぐに報告致しますわ」

「出発前、コヤンスカヤが彼方から採血をしていると姉さんが言っていた。そして忘れそうになるが俺のこの身体は元々は彼方の肉体が人格と共に変化したものだ。何か思いついたのかもしれないな」

「良いだろう、もう一つはなんだ?」

「ノーアさんについてです、実は——」

操縦桿の方へ向いたまま片手でひらりと彼女が見せたもの  
あれは確か…

「ノーアのスマホか？」

「はい、グランドアーチャー戦に向けて下準備をしている時にたまたま拾ったものです。

死んでいる以上もう脅威になることはありませんが彼女が何故ああなったのか？という点に個人的に興味があり解析を進めていますがプロテクトが異常に固く…」

成程、付き合いのある俺なら何か解除のヒントを持っているかもしれない、ということか

「義手換装までの暇つぶしにはなる、構わない」

「ありがとうございます♡」

…

「…さて」

向こう側は今何をしているんだろうな？

↳

同時刻

伊吹山 寂れた登山口にて…

とまあ、嫌がるザイルさんに変わりワタクシが文字通り身を削ってこちらに来たわけですが

「分かってはいましたがビビリっぷりが凄いですねえ」

影月 彼方の視界から少しでも外れたいのか物陰に隠れる小動物のようにピッタリと横にくっついてるアサシン、望月千代女

真名を知らなければすぐにでもポイしてましたが場所が場所な上に真横にいるのは（不完全とはいえ）神。流石に同情致しますわ

ちなみに当の彼方さんは彼女に目もくれず犬のよう遥さんにすり寄っている

まあなんであれ仕事はキツチリ終わらせるだけです

「次はどちらに？」

「え、ええと…あと一里程このまま直進でござる」

一里…3 km前後ですか、山奥なのは知ってましたが鬼以外と関わる気の無い一族だったんでしょうか？

いえ、だとすればザイルさんの記憶と矛盾します。彼の記憶には影月家以外の人間が何人もいました

ザイルさんの過去とは別に、50年前の痕跡も見つかるといいのですが

「!?敵でござるー！」

いきなり大声を上げたパライソさんに全員の視線が集まる

「敵?！」

間の抜けた表情の彼方へ、直後黒鍵が投げつけられる

「彼方っ！」

それを素手で弾き返しているあたり遥さんも大概ですね

「うーん?！」

この武器、確か代行者の…まさか敵ってコレですか？

ということは山に入ろうとする人間を排除しているのは聖堂教会ということになります…

どうも代行者本来の役割から外れているような気がしてならない  
少なくとも1箇所には構えて迎撃、なんてことをする人員では無かった  
たような――

そんなこちらの思案をよそに林の向こうから出てくる2つの人影、恐らくどちらも代行者だ

やはり代行者らしくない、基本単独行動の彼らが複数人で動くのは妙だ

門番が欲しいなら代行者よりもっと向いた魔術師や使い魔を配置すればいいハズです

2人の代行者とは全く関係のない方向から再び飛んでくる黒鍵を尻尾で軽くはたき落とす

「まあ考えるのはこのへんで。今は戦いましょう」

「承知」

「うん！今度は私がお姉ちゃんを守るね！」

「待って、私も戦う」アルテミスちゃんの力ならきつと殺さずに――

しかしコレは…ねえ？ぱつと見は我々4人と代行者4人の4V S 4ですが。

「私が戦うからお姉ちゃんは私の後ろに隠れてて！」

↑神霊伊吹童子に気に入られ、半ば神と化した人間

「彼方！私は大丈夫！大丈夫だからここは私に任せて、ね？」

↑ギリシヤの月女神の霊基を譲り受けて並の英霊以上の力を行使する人間

「誰であろうと敵ならば容赦はしないでござる、お覚悟！」

↑英霊

「で、ワタクシ」

↑世界を滅ぼしうる力を持った災厄の獣（実績アリ）

「……………」

……………まあサクつと行きましようか

## 第59話 故郷

伊吹山中腹の登山道にて…

まあ、はい、ええ。どうやら4人の中に1人埋葬機関の方が混ざっていたようですが、ええ。

「流石に相手が悪すぎましたねコレ」

戦闘開始と同時に雑に振り下ろされる草薙とカチ上げられる狐の尾、遙さんに至っては謎の光で精神汚染する始末。

そして望月さんと交戦中だった埋葬機関の方の元へワタクシと影月姉妹が真つ直ぐ向かっていったわけで…

「なんだ、全然大したことないね！お姉ちゃん怪我無い？」

「う、うん。でもやっぱり殺すのはダメだよ彼方」

「拙者、なんだか自信が無くなってきたでござる…」

いや、アナタ以外が化け物なだけなんであまりお気になさらず。

と、そんなこと言ったら草薙が飛んでくるので堪えましてもつと別の話題を出しましょう

「えーと不殺信念は別に否定しませんが少なくとも彼らは殺していないようですよ？」

「え？」

この代行者3人＋埋葬機関1人。

「死んでから結構な時間が経っています、白骨化していないのはそういう魔術で腐敗を堰き止めているのでしよう

我々の前に飛び出してきた彼らは既に死体だったんです」

『良かった〜』やら『残念だなあ』の声を聞き流しながら一つ一つ死体

を確認する

「しかし死因はなんでしよう？見たところ死んだままの状態で操り人形にされていたようですが」

「これはショック死でござるな」

と、同じく死体を調べていた望月さんが言う

「分かるんですか？」

「魔術の無い、純粋な人間によるものであれば大抵は分かるでござるよ

しかし時間が経っているせいでなんのショックかまでは分からぬでござるが」毒かもしれないし精神攻撃によるものかもしれない。

まあ後でたつぷり調べればいいでしょう

「ありがとうございます、では邪魔者も消えたことですし先へ進みましょうか」

く

伊吹山中腹 村跡地にて…

「こんなところに村が？」

林に囲まれた、外からではその存在が分かりづらい場所にて村——いや、かつて村だった場所を見て回る

「…誰も残ってはござらぬか

50年前は鬱陶しい程賑わっていたでござるが」

…？何故か望月さんが不機嫌になったような？

「わあ…！見て見てお姉ちゃん！あんまり変わってないよ！」

「うん、もしかしたら家も残ってるかも

ビースト、いえコヤンスカヤ」

「はい、なんでしよう？」



「——家を見に行きたい、私と彼方だけで」

「あー、どうぞ？ワタクシも少々用がありますので」

逃げたりしない、と言おうとした遥の言葉に被せて望月さんと共に村跡地中央へと向かう

「え、あ、ありがとう」

「行こうよー」

駆けていく2人を横目で見つっ、胸を撫で下ろす望月さんと村を歩

く  
「ふうむ、50年放置されていたにしては綺麗ですねえ」

「なにせ人間どころか如何なる動物も近づかぬ筈でござる故、荒らす者が居なかつたでござるよ」

なるほどなるほど、まあ空气中の魔力がここまで高いと寄り付く気も失せるでしょう

神代とまでは行かなくとも現代の日本でこれは異常ですし

「あつーあれでござる！あの家がざいる殿の家でござるー！」

「かしこまりました！早速入りましょうか♪」

ふむ？遙さん達は山の上の方へ駆けていきましたし…彼女達の家とザイルさんの家は別物、しかし同じ山の中にあると。

家の中はさまざまな場所から草が生え、室内であることを忘れさせてくれる状態であった、が逆に言えばそれだけ。

棚の中のお椀や陶器など草が生えないものは奇妙すぎるほどそのままに残っていた

「むっーコヤンスカヤ殿こちらにー！」

「はいはい、どうぞされました？…これは？」

彼女が差し出したのは1つの写真立て、その中には少年少女が計4

人写っている

そして――

「何故50年前の写真に色が？」

「そのあたりの記憶がやや曖昧でござるがたしか：天才を自称する発明家から色の付いた写真を撮れる撮影機を譲っていただいたと

それにしても懐かしいでござる」

「：ダヴィンチさんですか」

ということとは彼女は50年前この付近で召喚されたと、召喚したのはノーアさんはたまた別の誰か――いえ、あの仲良しっぷりを見るに途中で他マスターから奪ったとは考えづらいですね

思案しつつ写真に視線を戻す

「にしても驚きました、いやホント

確かにザイルさんソツクリですね」

写真にはどこかの神社をバックに4人の子供が並んでいて左から順に望月さん、ちっさいザイルさんに、これまた遙さんソツクリの：おそらく影月 此方さん、バーサーカークラス――清姫さんも居ますね

皆様眩しい笑顔なこと。

「とりあえず持つていきましよう、今更これが欲しい方はもうこの世に居なさそうですし」

遙さんが彼方さんに見せれば何か分かるかもしれませんね

「このまま調べてもいいですが写真以上の物がここで出てくるとは思えませんが、望月さん」

「ハハハハ」

「あーいえそういうのいいんで。このあたりに孤児院とかあったりし

「ません?」

記憶で見た通りならきつと近くに――

「む? ううむ、教会なら知っているのでござるが孤児院は…」

「多分ソレですソレ! 案内お願いできますか?」

「はあ、拙者は構いませぬが何故あのような何も無い場所に?」

「秘☆密 ですよ♪」

↳

村よりさらに山奥の寂れた孤児院前にて…

「教会が孤児院に…い、いや! それよりもこの場所は!」

「いったいここで何があったのでござるか!」

「記憶で見るのと生で見るのとは大分違いますねえ」

教会を元に改修された孤児院、外観に特に異常は無い。外観には抑え込みきれなくなつたのか単に最初から放置してたのか建物全体から感情を肌で感じる。これは『怒り』ですね

「は、入るおつもりですか!」

「外から見ていたって何も分からないでしょう? 怖いようでしたらここでお待ちくださいませ♡ワタクシは何があるのか調べて――おつと」

「え、うわっ!」

ぐいっ! と猫のように彼女の首根っこを引つ掴む

「ふふふ、我々以外にも客がいるではありませんか」

空を裂くように振り下ろされる、コヤンスカヤの身長と同じかそれ以上に長い刀。

もはや別の呼称が必要と言える大きさの武器獲物を持ち、門番のように立ちはだかる人間の女性みたいな何か

「警、コク、これより先、は侵入不可である。ある。スミヤカに、立ちさ  
さささ」

繰り返す繰り返す」

目の前の人に似た物体は無機質な合成音で構成された言葉で壊れ  
たように警告を繰り返す

ヒトの気配が無い、かといって魔性の類でもなく魔術で造られたホ  
ムンクルスでもない、というか彼女の千切れている右腕から見える  
弱々しい火花は――

「魔術ナシでオートマタ、いえロボットを作れる人間が50年前にい  
たとは少々驚きましたね

望月さんのお知り合いで？」

「拙者、確かにこれを知っているでござるが記憶がいささか不鮮明で  
確信が持てませぬ

面目もございませぬ」

「ふむ…」

赤髪のロボットは服と呼べるような物は身につけておらず、ただた  
だ女性の身体からシルエットだけをくり抜いて3Dプリンタで作つ  
たような灰色のボディ、かつてはそれも輝いていたのだろうが今はス  
クラップ同然に錆び付いており稼働するたびに不愉快な音が鳴って  
いる

50年前から目の前の物体が居たのは確かなようですがダヴィン  
チさんが造った、というわけでも無さそうですね？

もしこれが彼女の創作物であるのならこんなになるまで放置せず  
アメリカに連れてきていたはず

「まあそんなことはどうでもよろしい、とりあえずどいてくださいま  
す？」

「3回目ものの警告終了。こここ攻撃たいせいに」

不意打ちしてから攻撃態勢とか何言ってるんでしようこのスクラップ

ボギヤ

「ガガガっ?」

試しに胴体へ爪を突き立てみるとこれまた不快な音を立てて左腕がロボットの胴体を貫通した

錆びている錆びていない以前にそもそもその耐久力が低かったらしい

「そんなしよ 損傷大 イ大だだ、

戦闘 継続継続ふか、不可能。ふかの——」  
ぐしやり

「はいはい分かったから大人しく踏み潰されてゴミになってください、じゃあ早速孤児院の中に♡望月さんも、さあ」

「う、本当に入る気でござるか?」

彼方さんを前にした時と同じくらい怯え出すのを見るにこころも『怒り』以外に何かがある。伊吹童子や影月家に関する『何か』が「じゃあワタクシが調べてくるので望月さんはここで待機を。」

とりあえず彼方さん達に頼んで迎えに来させましょう」

「行く!行くでござる!行くでござるからアレを呼び寄せるのだけは!」  
どうか慈悲を!」

おお、効き目バツグン。ナビゲーターが居なくては時間がかかって面倒くさいですからねえ

以前は教会だったとしても建て替えたわけではなさそうなので案内役は充分務まるはず。もう少し働いてもらいましょう♡

同時刻 伊吹山中腹 影月家にて…

「村があんな状態だったのに…」

「ここは変わらないんだ」

10年前、私たちの家だった場所。

木造一戸建ての古いタイプの家、建てられた年代を考えれば当時の最新モデルであったのだが遥も彼方もその事実を知る由も無い

新品同然の扉を開けて中に入る

「…」

なんだろう、嫌な感じがする

「お姉ちゃん？」

彼方が心配そうに顔を覗き込んでくる

彼方は感じてない？でも…うーん？

「ああ！怖がらなくても大丈夫だよお姉ちゃん！案内人さん——

伊吹童子は優しいから！」

伊吹童子…って誰？——っ???

真横から感じる、気配と呼ぶには重すぎる重圧

私の中のアルテミスちゃんの霊基がけたたましい警鐘を鳴らしている

「ふふ 影月 彼方の中からよく見ていたが」

この声、聞き覚えが…！

「影月家の末裔、影月 此方から陽の力を継いで生まれた『贄巫女』の

1人……こうして話すのは初めてだな 影月 遥

「神霊 伊吹童子 である」

## 第60話　それまで透明だった○○

アメリカ　ワシントンD・C　J地区　米陸軍駐屯地　客室（バルンの部屋）にて…

『鬼巫女？あまり穏やかな名称じゃないね』

「…そうだな」

マスター  
バルンと2人、通信機（ダヴィンチちゃん特製通信機）越しに『鬼巫女』についての説明を続ける

向こう側で話を聞いているのはキャスターとクライムらしい

『鬼巫女』は平安時代、つまり俺や頼光様と同じ時代から居る巫女の名称の1つ。その巫女の一族の名前は影月えいづき

頼光四天王と同じように民を魔性から守っていた一族だ」

『ああ納得が行った、通りで影月　遥が強いわけだ

倉庫街で戦った時の戦闘技能は一般人の域をゆうに超えていたからな』

「生身で…？いや影月家は人相手には強くないはずだ、鬼には強いが。」

そういうことだったのかと呟くクライムの声を否定する

彼が言うのなら少なくとも軍の人間より強いと考えられるがもしそうだとすればそれは恐らくそれは影月家とは関係の無い、彼女自身の鍛錬の結果だろう

…もし影月家に対する周囲の見方が変わっていないとすれば何故鍛錬に励んだのかは予想が付くな

『何か言ったか？』

「いや、なんでもない、話を戻すと影月家は言わば…都市の外で刀を振るう源氏と言えればいいか



武士では無いがやっていることは俺達とそう変わらなかつた

源頼光率いる頼光四天王が都に居を構え、町を主として守る武士ならば影月家は山に居を構え、村や旅人を魔性から守る巫女だ」

『ふむふむ』

「人に対しては無力な巫女だが魔性に対しては強く、特に5代目鬼巫女である影月 線せんの強さはまさに鬼神

魔性だけという制約はあつたもののその強さは頼光様に近いものだつた

∴故に誰が呼び始めたか『鬼巫女』

『でも魔性、鬼を退治しているのに鬼呼ばわりなんてかわいいそうだね』

「鬼呼ばわりだけで終われば良かったんだがな」

『どうということだ?』

それだけで済めばよかつた、このような考え方は褒められるものではないが仮に影月家の巫女が敗北して魔性に喰われたとしても、ただ魔性を屠るだけの一族なら俺にはおろか、頼光様の耳にも届くことな  
くひつそりと滅んでいただろう

通信機越しても分かる興味深そうなダヴィンチに一つ一つ説明する

「影月家の巫女には一つだけ、決定的に人間と違う能力があつた。巫女の肉は——魔性の力を大きく強化してしまう」

肉だけではなく血や髪、爪、巫女のあらゆる部位は全て魔性の力を増幅させた

『諸刃の剣だな、大きく強化っていうのはどれくらいなんだ?』

「∴線殿がかつて守るはずの旅人を人質に取られ、小鬼に片目を喰われたことがあつた」

『その、鬼はどうなつたの?』

「…」

あれは――

「小鬼と呼ぶには強すぎる怪物だったらしい、たまたま付近に来ていて応戦に出た坂田金時――俺と同じ頼光四天王が手こずるくらいにな

な  
そしてその鬼を討った後、金時から頼光様に影月家のことが伝わった」

『鬼を超強化してしまう所在が安定しない巫女か、周りが鬼巫女をどう見ていたか予想がつく』

「お前が想像している通りだ、自分と同じ魔性を屠る者として頼光様は線殿に対して好意的だったが…周囲は彼女の血を恐れた」

当時の一般男性が数人集まれば退治できるレベルの鬼が目玉一つで四天王の1人が苦戦するような魔性に進化したのだ、無理もないだろう

「事実頼光様も影月家がこれ以上魔性と戦うことを止めようとしていた、当時戦い続けていた線殿には既に幼子が居たのもあるが…周囲を黙らせるのには戦いをやめさせるのが1番だったからな」

『源頼光は彼女を共に戦う武士ではなく、民として保護しようとしていた?』

「結局そうはならなかったがな

最終的には共に戦いたいと頑なに言う線殿に折れ、命令絶対服従を条件に頼光様の下に付くことになり、その戦いっぷりが知られるにつれて『鬼巫女』という二つ名も付いてきた」

そのあたりから線殿は山ではなく都の頼光様の家で過ごすことが増えたな

「しかし線殿が頼光様の下について半年も経たず事件が起きた

鬼——いや、何者かに夜襲を受けて線殿が左腕を失った」

『ちよつと待て、いくら寝込みを襲われたからといってその線つて巫女は魔性相手なら無敵じゃなかったのか？それに話を聞く限り源頼光と常に一緒に居たように聞こえる、腕を失ったというのは——』

彼の言いたいことは分かる

「ああ、だから何者かが、だ

その日は都から招集があり真夜中にも関わらず頼光様は居なかつたんだ」丁度その日”だけ”な

『……………まさか』

「俺含め誰もその場に居なかつたから断定はできない

だが魔性ではなく人間に殺されかけたのは間違いないだろうな」

「……」

バルンは何も喋らず、ただ黙って聞いている

確かに彼の家も（遠いとは言え）あながち影月家と無関係というわけではないしな

「後日、都のすぐ側に強大な鬼が現れたという通報があり、頼光様及び頼光四天王全員が集められた

当時の金時が言うには線殿の目玉を喰った鬼よりさらに手強い相手といった——

が流石に5対1だ、決着がつくまでそうは掛からず都にも人にも被害は出なかった…問題はこの後だ

都にて『強大な鬼が現れたのは鬼巫女が敗北し、その身の一部を喰われたから』という噂が出回り始めた」

『なに？』

『源頼光と肩を並べられる程の人間なら鬼に対する大きな抑止力にもなりえるだろう

重傷を負ったとしてもそれが口外されるようなことはありえない

鬼に付け入る隙を与えることになるからね。それでも尚そんな噂が出たと言うことは――』

噂の広まった速度は今思い返しても不自然な程速かった

それに殺した鬼の腹から線殿の腕と思しきものも見つかったがそれを知っていたのはあの場で戦った5人だけ、頼光様自身が外に漏れないよう厳重に隠したはずのその事実すら噂の一部になっていた

『そこらの賊ってわけでも無いんだな』

「都としても鬼を超強化できる無防備な人間を放置する訳には行かないと線殿にはすぐに出頭命令が下されたものの既に線殿の家からは彼女の姿は消えていた、事態を察して身を隠したのだろう

そこから線殿は『鬼に敗北したのではなく、鬼にその身を捧げて都に魔性を手引きした裏切り者』として指名手配された

——見つかったのは意外と早かった、伊吹山だ」

見つけたのはなんの因果か、頼光様で…またタイミングも行動も最悪だった

「線殿はやってはならないことをした、それほどまでに追い詰められていたのか最初からどこかで考えていたのかは今となってはもう分からないがそれが頼光様の逆鱗に触れた」

『何を――？』

「…影月 線は2人いた実子の内の1人を贄として殺し、さらに末代に至るまでその身を捧げることを誓って神カミの力を借り受けた

そしてその現場を、頼光様が見てしまった」

『ど、どういうことだ!?!』

頼光様は線殿が嵌められたことに気付いてから躍起になって彼女を探していた、誰よりも早く見つけて保護するべきだと。武士として

ではなく子を持つ友人として絶対に守りたいと仰っていた

「だからこそ許せなかったんだろう、子を犠牲にして神の力と融合した線殿に。」

激昂した頼光様が刀を抜き、戦いが始まった」

『もしかして…見てたのかい？』

「見ていた、ほんの少しだけだが線殿のもう一人の子供を保護した時にな

それから3日3晩山から戦いの音が鳴り止むことはなく、戦闘が熾烈を極めたことは直接見なくてもよく分かった」

『その後は？』

「3日後の夕方に満身創痍の頼光様が帰って来られて、ただ一言『殺せなかった』と」

『それは…どっちの意味で？』

「分からない、かつて友人だった人に対する情なのか力が足りなかったのかは定かじやないが都に影月 線の排除を報告して以降頼光様は線殿について触れなくなった」

当事者の頼光様が話さなかった以上、これよりも詳しく知る者が居るとすれば――



日本 伊吹山 影月家にて

「とまあ、このあたりまでが余が線から聞いた話だ

まあ以前の呼び名などどうでも良いであろう『贅巫女』よ」

「影月 線、それが私達の先祖？――影月家のルーツ？」

出会って反射で月女神の弓矢を叩き込んだことも忘れ、食い入るよ  
うに伊吹童子の話聞き、一つ一つ理解する――いや、理解しようと

努力する

アルテミスちゃんが言っていた蛇の神様のことについて、伊吹童子が彼方の背後にいることは鋳物工場での戦闘で薄々勘付いていた

『神剣 草那芸之大刀』

彼方から出たこの言葉と刀、そして蛇の神様と言えば該当するのは伊吹大明神、伊吹童子くらいしかない

…人の姿を取っていたことになによりも驚いたけど。

「じゃあ、伊吹童子…様から影月家に来た訳じゃなくて…私の先祖の影月 線つて人が影月家に招いたんだね」

「そうであるな。しかし…ふふ」

カミが私の顔を見て不敵に笑う

笑っているのに、真っ直ぐに私を見ているのに、まるで考えが読めない

殺気も悪意も感じないのに漠然とした、コヤンスカヤのとはまた別の恐怖が浸透してくる、まるで――

蛇に睨まれた蛙、と言おうとして直感で声を抑え込む

カミ――神様は人間とは違う。アルテミスちゃんの霊基を持っているから断片的とはいえ分かる

下手なことを言えば私はバラバラにされるか一息で吞まれて死――

「死なないよ」

「わっ、彼方?」

今の彼方は心配が伊吹童子とほぼ変わらないため、一瞬カミに話しかけられたと勘違いして変な声が出る

「彼女にはできないよ、私が生きている限りね」

「ああ、今の余にはできないぞ?ふふふ…」

「??」

「今の」 という単語に寒気を覚えたものの、どうやら私に危害を加えられないのは本当のようだ

「それにしても本当に不可思議だ、その瞳に線の面影が無ければ影月家所縁の人間だと気付かなかった」余は長い間存在しているが印が消えるのは初めてでな?

「そうなの伊吹童子?」

「ああ」

「…」

私達が同じ種類の動物それぞれを判別できないように神様も個人個人の人間を認識するのは困難らしい、だから神様は気に入った人間に印を付ける

その『印』は人間側が呼称する時『呪い』に変わる、アルテミスちゃんがか上書きして剥がしたのは恐らくこれなんじゃないだろうか

「まあそのような些事は良い、許す

折角こうして相目見えたのだ、先にあった出来事——50年前の話でも聞かせてやろう」

えっ…?」

「…それ伊吹童子が話したいだけじゃないの?」

ジト目に成りつつもちやつかり何処かから、明らかに普通では無いお酒の樽を持ってきた彼方が言う

あんなもの家にあつたの!」

「ああ話したい、そしてその代わりに影月 遥、そなたの話を聞きたい  
お前のここまでの一生、その中の喜び、怒り、悲しみ、なんでも良

い

お前に関わることならば」

影月 線と取引した名残か、元々そういうカミなのかは分からないが人よりずっと上の存在が交換条件を出してきたことと50年前という言葉に危うく頭がオーバーヒートしそうになるが根性で堪える

50年前の、出来事…

「お姉ちゃん？」

「…約束する前に一つ、一つだけ教えて欲しい」

「よい、許す」

…

「影月 此方、私達のお母さんがどうして死んだのかを知ってる？」

「ああ此方か！あれは彼方ほどは無くとも実に良き巫女であった」

——っ！

「余が喰らった、肉体も精神も余すところ無く全て、な」

「そう、なんだ」

落ち着け、落ち着け、伊吹童子の名前が頭の中で出てから心のどこかで分かっていたことだ

それでも

どうしてこんなことができるの？

どうして躊躇いも無く犠牲にできたの？

どうして影月家の人達は今まで贄巫女にされないといけなかったの？

カミに悪意も殺意もない、差し出されたから食べただけ



「お姉ちゃん？大丈夫？」

黒い渦のような何かが、これまで透明で私自身にも見えなかった渦が私の中に現れる

どうして——お母さんも私も彼方も、ここまで苦しまなくちやいけなかったの？

ああ、これじゃ彼方のこともザイルさんのことも、もう言えないよ

「ああ、うん、話すよ。私のこと」

「ふふ、良い。それで良い。では…そうだな、余の半身をこの地に封印した異郷の魔術師のことから話してやろう」

私の先祖であり、5代目鬼巫女。末代までカミに身を差し出してカミの力を欲した人間

「目覚めたばかりとはいえあのように一方的にねじ伏せられた時は—

ああ、愉快…本当に愉快だった、何せそれまで向かってくる者すらおらぬ始末であったからな」

私や彼方、お母さん、それよりずっと前から影月家の人達を苦しめてきた原因を作った人間

「どれもこれも、奴の繰り出す術は不可思議で、未知で溢れていた  
更には余が剣を抜いても仕留め切れず逃げおおせる程の。

ヒト、カミ、魔性、どれとも違う異郷の魔術師…ふふ！ああ！こうして語っているだけと言うのに！愉快！愉快！ふふふふふ！」

もはや伊吹童子の話もロクに耳に入っていない、これまで誰を憎めばいいのか理解できていなかった少女はソレを知り初めて『怒り』と『憎悪』の違いを理解した

……影月線

私はオマエを許さない

## 第61話 異郷の痕跡

伊吹山 山頂《跡地》にて…

「……………ええと？望月さん？」

「……」

いやそこにいることは知ってんですよ、並んで歩いてきましたし。ワタクシが聞きたいのはですね

「伊吹山山頂って…どこですか？」

「それは…ここでござる。その、筈で、ござる」

「……」

今のワタクシは誰が見ても『何言っただコイツ』みたいな顔をしていたんでしょう、望月さんの声がどんどん自信を無くしていきます

で、目の前に広がっているのは山の頂でもなく山道でもなく——クレーターな訳ですが

穴の中央は何か黒い靄のようなもので覆われており、ここからはよく見えない

「これは何が原因でできたんですか？」

「そ、それは…その…分からないでござる」

「…その様子だと忘れていたとかでなくそもそも知らないかもしれないかもしれませんねえ」

「面目ござらぬ、だが一つだけ分かっていることが「神霊伊吹童子がこのクレーターの中央に封印されている、ですか？」

その言葉に望月さんは声を上げずに頷く

ということはどこで伊吹童子を封印した『誰か』が取りこぼした分が彼方さんに憑いているということ？草薙を操れていたということを取りこぼしたと言える質量ではなさそうですが



「こちらフォーリナー、ええとザイルさんは近くに?…:…:そうですか、伊吹山を調べて分かったことがいくつかあります:…:え?」

向こうの状況を聞き、一瞬固まる

「ああ、威力偵察ですか。まあ確かに警戒しておくに越したことは無いですが」

部屋の真ん中でコヤンスカヤが携帯を片手に、なんとなく部屋を歩く

「ですが様子見とはいえ相手が相手です、何が起きても不思議ではありません、ここからはお互い更に更に事細かく情報を共有しましょう」元より自分自身ですし難しいことではないですが

「ではまた、くれぐれも彼に深追いしないよう伝えといて下さいまし」伝えるべき要件は伝え終え、携帯をしまう

自分との連絡手段にももちろん携帯電話の必要性など皆無だがザイルにも会話の内容を伝えるため、録音可能な機器を敢えて通している。まあ念じれば自分だけと会話できるのでザイルさんに『何の保証になるんだ?』って言われましたけど

「さて、とりあえず結構な量の情報は仕入れました、遥さん達の元に戻りましょうか」

手元の戦利品<sup>レ</sup>についてザイルさんにも話そうかと思いましたがあちらはあちらで忙しい様子、後にしましょう

「む、コヤンスカヤ殿、そちらのノートは?」

「ああコレ、ここに居たマスターの誰かが集めた『研究成果』のようです

内容は医学と拷問:ザイルさんは喜びそうですね」というかなんですかこの組み合わせ

そしてご丁寧に召喚したサーヴァントのことまで書いてあります  
クラスアサシンの記述：望月さんのマスターですか、てつきり影月  
此方がマスターだと思っただけです  
本を閉じて外に出る、と

「コヤンスカヤ殿」

「ええ、貴女もまあまあ愛されていますね」

先程まで気配しかなかった魔性類、端的に言っただけ鬼の群れがワタクシ達を取り囲んでいた

狙いは望月さんですか、ワタクシの方には見向きもしていません……いや、目を合わせられないのでしょうか、知性のない鬼の影とはいえ大自  
然の塊と殴り合うのは躊躇われるようです

「ではここで質問です、望月さん♡」

「む？」

「貴女が一度もワタクシから離れず進めばこの包囲網はモーゼの海割りのように開けるでしょう、この成れの果てさん達にワタクシまで攻撃する度胸はありませんから」

しかし今この地域には遙さん達も来ています、彼女らの安全を確保するという意味でワタクシは排除しておきたいんですが貴女は戦われますか？」

「当然！」

わあお即答、まあフォーリナーとして身体の勝手を知る良い機会なのでどっちだって良かったんですが

…遙さんも彼方さんが居るのでそもそも襲われないでしょうし

「では——行くぞ、木端共」

く

影月宅にて

「消えた…」

お酒を樽で呑みながら50年前について楽しそうに語っていた神霊伊吹童子は一通り話し合えると、満足したのかそのまま消えてしまった

うーん、まだ私のことについてあんまり話していなかったんだけど…

「気にしないでいいよ、彼女お酒が入ったらああなるから」

東から太陽が登ってくることに当然と言った表情で彼方が笑う

参ったなあ、影月 線のことと頭がいっぱいになって50年前のことについてあんまり聞いてなかった

「ぐびぐびぐび…お姉ちゃんも飲む？あつたまるよー」

「え？あ、じゃあ貰おうかな」

あげる、と差し出されたコップから中の液体をひと飲みする

…この時ちゃんと飲む前に中身を確認しておけばよかった

「ぐくつ…ングツ!？」

コップだったからお茶か何かだと勝手に思ったけど、これって—

「ね、あつたまるでしょ！伊吹童子のお酒！」

ドーンと身体の中で大噴火でも起こったような衝撃。

ちなみに私は今の今までお酒を飲んだことが無く、これが初飲酒だった

あの樽の中身は全部伊吹童子が飲んでたからもう無いかと思ってた！し、しかも！

「あ、これ、すっごくー！おいしいー！」

「でしょ！」

一口飲んだだけで口から幸せみたいな暖かさが広がっていくような…

「い、いやー！だめ！今はそんな場合じゃないわ！」

「なんで？」

「らって、私はここに戻ってきて、50年前のこととか調べないといけないと思ってるし」

「？でも働きっぱなしは身体に悪いし、それにそれなら伊吹童子からまた聞けばいいよ、お姉ちゃんが相手ならいくらでも話してくれる」

気のせいかなが傾いている気がする

「で、でもお」

「美味しいものを飲んで幸せになるのって何が悪いの？いいじゃん、たまにはぎー」

……

幸せになることの何が悪いのか、その言葉に私の欲は少し自由になった

そうだ、少しくらいなら…

「…じゃああと少し、一口だけ」

「分かった！はいどうぞ！」

コップを彼方に渡し、そして返ってきたコップを口元に。

あつたかあい、ぽかぽかする…

「あ、あとちよつとだけ」

「沢山あるから遠慮しなくて大丈夫だよ！」

彼方の輪郭が溶け始めたし家もゆらゆら揺れ出したけど、まあいいか

「はうう…本、ホント、ホンひよにおいしい…」



べつちやりと液体にでもなれそうな感覚をよそにいつの間にか3杯、4杯と飲み始めていく

おさけつてこんなに早く回るんだあ、じゃあきつと覚めるのも早いよねえ

酔いにより謎理論を打ち立てて更に飲む

「うー、彼方は優しいね、それに比べてオリオンは…」

そして――

（15分後）

「…何か弁明はありますか？」

「無いよ？」

発信機を頼りに遙さん達に合流したのはいいですがなんで彼女が酔い潰れているのか…

「うっ、うっ…オリオンのばか、ばかあ！浮気者！薄情者！イケメン！女たらし！ぐすつ、彼方あ…オリオンが、オリオンが…！アルテミスちゃんという神ヒトが居るのにオリオンが私に優しいのお…！」

「よしよし、泣かないで」なでなで

「…」

いやなんですかこの状況は、仮にも人類の敵陣営に連れられているという自覚あるんですかこの人

「その、コヤンスカヤ殿？この状況が理解できないのは拙者の持つ現代の知識が足りないということでござらうか？」

「心配せずともワタクシだって分かりませんよ、酔いが覚めるまで放つときましょ」

しかし彼女達だけで飲み始めるとは考えづらいですし…

「…」

チラリと無造作に置かれた樽を見る

空の樽から漂う酒類の香り…内側を見るにほぼ満タンまで入れられていた跡…

なんらかの形で伊吹童子がここに来ていた？酒を交えてということなら50年前に関する情報の一つや二つポロつと喋っててくれそうですねうですし聞いてみましょう

「ずっと…ぐう…」

「——酔いが覚めた後に。ということだとパートナー交代です

望月さんは遥さんの看病、彼方さんはワタクシと村の調査を」

「承知」

「ええー？」

「ええー？じゃないですよ、誰のせいですか誰の。十中八九貴女が薦めたんでしよう？行きますよ、まだ調べることは沢山あるんですから携帯電話を1つ置いていくので遥さんが目覚めたら教えてください」無理に起こさないで結構ですの

「はっー」

ぶーぶーと抗議する彼方さんを引きずって再度村へ向かう

「彼女にどんな酒を飲ませたんですか？女神の霊基を持った人間をあそこまでパーにできる酒というに限られますが」

「これだよ、コヤンスカヤも飲む？」

差し出されたのはなんの変哲もないコップ、匂いも特におかしいところはない

「ふむ…」ちよび

………これ人間が飲めるようなものではないでしょう、美味しいですけども。

「彼女、よく酔っ払うだけで済んだものですよ全く

神霊への捧げ物の品なんて色んな意味で人間には危険です、戻った

ら没収で」

そこから更に文句を言い始める彼方さんに多少面倒くさいとは思ったものの仕事は仕事。そう割り切って探索を再開するのだった

↳

「寝坊助さんですねえ、こう言ってはなんですけどザイルさんの方がモタついていて助かりました」

次の日まで彼女が起きることはなく、村の探索や封印の調査を夜通し行い、気付けば太陽が空高く登ったところによく連絡がきたが――

「…」

「もー貴女はなんなんですか、純情な中学生みたいに塞ぎ込んで」  
「ほっといて…」

こ綺麗な居間の真ん中でふて寝する遥さんと彼女の頭を撫でる望月さん

どうやら昨日の夜の記憶がすっかり残っているらしい

「別に言いふらすような人居ないでしょう、被害妄想ですよ」  
「?…なんの話?」

話の内容が分からなかったらしい彼方さんがひよっこり顔を出して話に割って入ってくる

望月さんビビりすぎです

「昨日の遥さんの言動ですよ」

「ああ! 『オリオンのばかあ!』とか言ってたやつね!」

「言わないでーっ!」

「は、遥殿! 少し落ち着い――ひやつ!」

畳の上でワニのように転がりまくる遙さん、巻き込まれて轢かれた望月さんを見ながらどうしたものかと考えていると

「やれやれ、何を…いや、本当に何をしているんだお前らは」特に姉さんとアサシン。

「おや」

「お館様！」

何度も聞いた呆れ声、声の方を見ると『ついさつきまで殺し合いをしていました』と言わんばかりのボロボロのザイルさんが

本人はそこまで負傷してませんが、いかんせん戦闘服が爆風でも受けたみたい…：実際受けてきたんでしょう。本当に殴り込んだようです。

「その様子だとそちらは大変だったようで、どうでした？」

「どうもこうも記録で見た以上だ。アレは本当に人間か？」

その気持ち、すつごくわかります。いやあ『異星の神』が目をつけるだけありますよ、ホント

「ところでもう一人のワタクシはいずこに？」

「消耗が激しかったらしくボーダーで休んでいる

…なるほど、あちらが消耗したからといってこっちの力が低下する、というわけではないんだな」

そりやそうでしょう、そんなことになったら分身した意味ありませんよ

「あー…と？なあザイルさんよ、そろそろ俺も自己紹介したいんだが  
いいかい？」

「ああ、いいぞ」

うん？

ふとザイルさんの後ろに人間が1人居ることに気づく  
気配が無かった：しかし魔術行使の様子は無し

「誰です？」

「：新しいお友達だ」

「いや、新しいも何もお前友達居ないだろ絶対。

とりあえず名乗らせてくれ」

ザイルさんの後ろから男が前に出てくる

——つて！

（記録見た上でスカウトしたんですか？彼は毒にしかありませんよ？）

「毒で結構、最初から最後まで毒として動いてもらう」

「ありやりや、これでも『狼男』つて呼ばれてたんだがシンプルに毒とは！

とうとう生き物ですら無くなっちゃった！」

まあいいさ、とギャングとチンピラの間みたいな格好をした男は  
ズレかけた眼鏡を指でそっと直して名乗った

「ベリル・ガットだ、職業は魔術師兼殺し屋！楽しくやろうぜ！」

## 第62話 人類の希望

時は遡り伊吹山にてコヤンスカヤ（降）、遙、彼方を降ろした直後  
NFFボーダー、操舵室にて：

「ボーダーのどこにへりを降ろすのかと思っただがへりポートすら要らないのか」相変わらず便利な能力だな

「それほどでも♡遙さん達が戻ってくるまで時間がかかるでしょうしカジノルームにでもいかがですか？」

「それもいいが遥と彼方が居なくなったこの時間を使ってやりたいことがある」

：

「あやつらはいったい何を話しておるのだ？」

操舵室で談笑する2人を扉の陰から見つめる人影が1つ

『人』ではないので人影というのもおかしな話だが。

「ええい、そんなことは重要ではない！」

操舵室から離れ、ザイルから押し付けられた部屋へと入り、頭を回す

茨木童子、かつて酒呑童子と共に平安時代を暴れ回っていた恐ろしい史実を持つ一面とは逆に彼女の中には『どうしたらこの異常な事態から逃げおおせられるか』ということだけが駆け巡っていた

ただサーヴァントとして召喚されただけなら良い、酒呑が居ない世など現界していたところで意味はない

問題なのは召喚された時点でこの身体が受肉されているということである

やったのは何故か酒呑の気配が僅かに漂うあの怪物：影月 彼方といったか？姉を名乗った遥という人間は奴を人扱いしていたがと

んでもない間違いだ、あれは災害が人の形を保っているに過ぎぬ。おまけに――

召喚直後、彼方に捕まった時の言葉が未だに頭の中で響いている

『別に逃げてもいいよ』

『必ず迎えにいくから』

奴は絶対に我を逃がすつもりは無いな、受肉させたのは我に『死の恐怖』を思い起こさせるためか

どこまでも追ってくるのは間違いないだろうが…だが逆にこれを利用できるのではなからうか？

彼女は鬼の頭領であったと同時に頼光とその四天王にも捕まらなかった『逃げ』の達人である。故に逃げ延びるために利用できそうな物、事象、生物はなんだろうと利用する

不幸中の幸いと言うべきか、影月 遙から我が召喚される前に何かあったのか聞いてはいる。彼方について教えてくれと言ったら聞いてもないことまで喋ってくれたわ

「……………綱」

よりによって何故貴様が。話を聞いた瞬間腑が裏返るのではないかという殺意が湧いてきたし今もそれは微塵も変わっていない、だが

もし綱をあゝの怪物にぶつけることができたら？

奴の強さは知っている。実際に遙の話ではあの女狐が邪魔をしていなければ彼方の首が飛んでいたというではないか

それに残っているサーヴァントは綱だけではない、最低でもあと2

騎

バーサーカーとアヴェンジャーだったか？

「気に食わぬ、気に食わぬが…」

仮に酒吞童子と命を秤に掛ければ間違いないく酒吞童子に傾くだろうが今秤にかけているのは酒吞ではなくプライドである。プライドと命をかけた結果傾くのは――

奴らは獣<sup>ビースト</sup>：女狐を後回しにしてでも彼方を殺そうとしていたのなら我が提案すれば必ず乗ってくるだろう

交渉は無い、協力も無い、そう。ただ利用してやるのだ

「ザイル達は彼方を御し切れてはいないようであるし彼方自身も酒呑のように賢くなかろう、加えてサーヴァントが1騎戦力として増えると思わせられればクライムとやらに取り入るのもそう難しくは無い潰し合わせて疲弊したところを一裂きしてくれるわ！」

前向きに考えれば今の我はサーヴァントではなく鬼としてこの世に生を持ち、顕現したのだ。酒吞が居ないのは悲しいことではあるがだからと言って拾った命を投げ捨てる理由にはならない

「せいぜい今のうちに笑っておくがいい影月 彼方、そして我を召喚したことを後悔しろ人間！」

他の人間共と纏めて恐怖の底に叩き落としてくれるわ！」  
「なるほど、素晴らしい考えだな」

そうだろう！そうだろう！…うん？

「やれやれ、ノックならしたぞ」

「!!!??」

いつのまにか私のベッドに腰掛けていたザイルがため息をつきなからはんだがんなるものをくるくると回し、こちらを見ていた  
「ぎ、ザイル、今のは…」



「ああ？言葉通りだ、俺にとつても影月 彼方は邪魔だ。潰したいなら好きにしろ、俺の邪魔さえしなければお前が何を企てようと構わない  
い

脱走するなり略奪するなり勝手にするがいい」

忍の方と違つてお前には元から期待していない、と吐き捨てる目の前の男の胴体を今すぐにちぎりとつてやろうかとも思ったが脱出のため、保身のために自分の身体を抑えこむ

「そ、そんなことより貴様。何の用があつてここに来たのだ？ただ世間話をするというわけではあるまい」

「そうだな、こつちもそんなくだらん時間を使いに来た訳じゃない。これからの行動についてだ」

この男…！

「我に期待していないのでは無かつたのか？」

まあな、と呟くザイルだったがすぐに言葉が続ける

「だがここに居る以上は『使える者』として働いてもらうぞ、遊ばせるために召喚したわけじゃないからな」

おのれ…だがここでこいつの身体を捻じ切つたところでどうにもならん

ここはしばらく従順にして機会を伺うとするか

「で？人間如きが我に何をさせるつもりか」

「やるのはお前だけじゃ無い、俺達3人だ」

？意味がわからん、ならば女狐1人にやらせればよいのではないか？

「考えていることはなんとなく分かる、だがこれに関しては使える戦力は全て使うべきだからな」

「勿体ぶらず教えろ、何をするつもりなのだ？」

「……………ロンドンだ」

「なに？」

「時計塔に殴り込んでとある人物に会いに行く

この目で直接見ておきたい」

↳

イギリス首都 ロンドン とある路地裏にて…

『単独顕現 EX』

「ここがロンドンか？」

「ええ、時計塔から少し離れては居ますが間違いない♡」

…次は飛行機でのんびりと来たいところだがここからの展開次第で旅行は諦めることになるかもしれないな

まだ昼時のロンドンに到着した俺達は改めて所持品と時計塔の位置を再確認し、一息入れる意味も兼ねて付近の喫茶店をスマホで探す  
「おい茨木童子、角は隠せないのか？」

「貴様は我を馬鹿にしているのか？酒呑ですら見抜けぬ変化を持つこの我を？」

やれやれ

「分かったからとつと人間らしい姿と言葉遣いにしろ

コヤンスカヤはもうやってる」

霊体化させればいいと思っていたがどうも受肉しているらしくコイツも霊体化が出来ないらしい、また受肉した原因は彼方だろうか詳しい方法はわかっていない

「ええい、我にいちいち命令するな！…ちよつと待て、女狐のそれは人間らしい姿なのか？」

「当たり前ですわ！あと女狐って呼ばないでくださいませまし！

ね、ザイルさん♡」

自信満々に『見てください！』と黒いハンチングを被り直す彼女の格好は：

「あー…」

白いブラウスをいつものように胸を強調する様に着て、ダイバースーツのようにピツチリと履かれたデニムパンツ、靴は白色の…多分ハイヒールだろうが靴として機能するか怪しいくらい面積が無くところどころ素足が見える

「おっと、忘れるところでした！」

いつの間につったのか、右下に金色の文字で『NFF』とデザインされた桃色の小さなシヨルダーバッグを亜空間から取り出して肩に掛け『どうですか?』とこちらの反応を待っている

あの痴女具合させ何とかすれば完璧なんだろうがあれもコヤンスカヤのポリシーなんだろう。…と半ば諦めることにしてゆつくり茨木童子の方に振り返る

「…とりあえず適当に行人の姿をコピーしておけ」

「う、うむ…」

「え、ザイルさん?これ割と時間かけて選んだんですけど何かコメントは無いんですか?」

やれやれ…

「(変装に)悪影響を及ぼす、何処か喫茶店でも入って待っている」  
「ええ〜」

これ以上あんな格好の奴を増やして目を引きたくないからな  
とりあえず茨木童子の手を引いて表通りの方へ

よし、ここからなら通行人がよく見える

それにしてもアメリカと比べて通行人が少ない気がするが…イギリスはこんなものなのか？

「誰でもいい、通行人の姿を写せ」

「あ、ああ…」

コヤンスカヤのテンションに充てられたのか少しだけ大人しくなった茨木童子

その姿が徐々に変わっていき――

変化の達人か、なるほど。騙されるワケだ

当然のように角が消え、紫色のワンピースを着た金髪の少女が現れる

もちろん茨木童子だ

「あとは喋り方だな？…コホン

どうかな？ザイルお兄さん？」

「な――き」

もはやスパイも真つ青の擬態変装に出てきた感想は――

「気持ち、悪いぞ…本当に。」

その一言だけだった

「ふ、この程度で顔色を変えらるとは。まだまだ鬼の恐ろしさを分かかっていなかったようだなあザイルよ？」

「もう今までの喋り方でいい、コヤンスカヤと合流するぞ」

頭を抱えつつ、コヤンスカヤから送られてきたマップ情報を頼りに俺達は喫茶店へと向かうのであった

く

とある喫茶店にて…

お昼時と言うのに店員以外誰も居ませんねえ、まあそちらの方が都合ですが

カラン

そんなことを思っていると店の扉が開いた

ザイルさんでしょうか？…おっと、これはこれは

予想外…どころでは無い客に一瞬面食らってしまう

入ってきたのはよく知っている人間、だがザイルでは無い。今入ってきた彼は1人だ

「失礼、そちらの綺麗なお姉さん、席をぐい一緒してもいいかな？」

テーブル席に腰掛け、ザイル達を待つコヤンスカヤにその男は微笑みながら、しかし警戒しながら話しかけてくる

「ええモチロン！どうぞキリシユタリアさん♡」

金色の、男に似合わない長髪を自身で踏まないように気をつけながら彼、キリシユタリア・ヴォーダイムが目の前に座る

異星の神に見出され人類クリプターの敵になり、そのリーダーとしてカルデアと激突した魔術師…もちろんそれはこことは別の並行世界の話であり彼自身『直接は』ワタクシのことを知らないハズでしょう

…というか髪が邪魔でしたら留めればいいのに、あのザイルさんだって三つ編みは最初からできてましたよ？

まるで今から王族パーティーにでも行くかのような真っ白のフルスーツを着た彼が値踏みをするようにこちらを見る

「…キミー人なのかい？」

「まさか、雇い主とその部下がもうすぐ来ますわ」

「そうなのか、いや丁度良かった。」

予定していた客人とは違うが私も君たちと会って話がしたかったんだ」

「そうは言いますが約1名、殺意を抑えきれない狂犬がいる中で話をするというのも、ねえ？どう思いますか？神霊カイニスさん？」

「黙れ」

それまで不可視だった槍が持ち主と共に音一つなく現れる、矛先は当然ワタクシ。

きやーん☆タマモこわーい♡というかやっぱり居たんですね！

チラツと霊基状態を確認しましたが彼女、カルデアで召喚されたカイニスさんですねえ。まあホームズさんがこつちに来ていた時点で不思議はありません、クリシュタリアさんがこちらに接触を図ったのも彼女の入れ知恵でしょう

「まーアナタがワタクシに敵意を向けるのは勝手ですがそろそろ槍を下ろしていただけません？」

誰にでも牙を剥くメス犬なんて飼い主の品を落とすだけですよ？」

「デメエ……いい度胸じゃねえか

望み通りその貧相な首を噛み砕いてやる……！」

文字通り飛びかかってきそうなカイニスを慣れない様子の彼が静止させる

「槍を下げるんだカイニス、今はまだその時じゃない

すまないね、コヤンスカヤ」

「いえいえ！」

相変わらず殺意マシマシですが流石に彼には従うんですねえ

「…彼から聞いたんだがキミは商人でもあるんだってね」

「ええ！民間軍事企業、Nine Fox Foundation…」

NFFサービス代表を務めさせていただいております！

銃器は勿論のこと、あらゆるニーズに対応できる素晴らしい会社ですよ！」今は市場から退いています。

カイニスさんのただでさえ悪い目つきがどんどん悪くなっています。が知ったことではありません〜ん♡

「うん、それを見込んで私はキミと取引がしたい」

「ええ、構いませんよ！」

「そうか、なら本題に入る前に…彼に謝ってくれ」

…

「ええと、なんですすつて？」

「彼は、カイニスは最高のサーヴァントだ。まだ契約して日は浅いがこれから彼以上のサーヴァントが現れることは無いと断言できる

私は彼と契約できたことに誇りを持っているし彼にも彼の誇りがある。それを傷付けたことに対する謝罪だ

…まさかとは思いますが、取引相手の誇りに泥を塗るのが企業理念というワケじゃ無いだろうか？」

「――」

ふむ、これは…一本取られました

「ええ、その通りです、謝罪致します

申し訳ありませんでしたカイニスさん」

席から立ち、彼女に――いや彼に頭を下げる

確かに少々大人気なかった

「……………チツ！次はねえぞ」

敵対しているとはいえ、誠意は伝わったのだろう。僅かに、本当に僅かに殺気が彼から消えた

「ありがとう、それじゃあコヤンスカヤの契約者が来たら商談を始め





## 第63話 取引終了

ロンドン 時計塔入口にて…

「ここが魔術教会の総本山か？」

どうも建っている場所に違和感があるような気がするが…イギリスの建築センスか？

「ええ、しかしこんな条件を飲んでくれるとは正直思っていませんでした」

相変わらず読めないですね、と横を歩くコヤンスカヤが呟く

…確かにな

時計塔にある自身の自室で話がしたい、というキシユタリアの提案に対し1つ条件を提示した

、

『互いにサーヴァントを連れて行かないこと』

もちろんこんな条件普通なら通る訳が無い、ここから少しずつ条件を変える予定だった

『…一っだけ条件を変えさせてくれ』

『なんだ』

『彼女、コヤンスカヤだけは例外として話に参加させて欲しい』

しかし彼の口から出てきたのはコヤンスカヤも連れて行くという意味不明なもの

もちろんこつちにとつてはメリットしかない。罨を疑ったが生半可なものでは足止めにもなりはしない、と条件緩和？を受けることに

『…カイニス、悪いが少し席を外してくれないか』  
『お前正気か?』

『正気だとも、そちらの鬼と外で待っていてくれ』

『…そういうことだ、待っているバーサーカー』  
『う、うむ』

、

「さ、こつちだ」

彼に続いて時計塔へと足を踏み込む

当初は茨木童子を囷に暴れさせ、忍び込む予定だったが…これはこれで好都合だ

時計塔に居た人間も最初は奇怪な目でこつちを見ていたが彼が一言『私の友人だ』と言っただけで奇怪な目は止み、蜘蛛の子を散らすように殆どが逃げていった

「…」

ふと足が止まる

「どうしたんだい?」

…やはりうまく進みすぎている

目の前の男に魔術行使の気配は無い、コヤンスカヤも沈黙を守っている以上それは間違いない

「いや、なんでもない」

再び足を進める

どういうことだ? 目の前の男は確かにキリシユタリアではあるが大西洋異聞隊で大神ゼウスと交友関係を築いた人間じゃない

オリユンポスやアトランティスで見せたデタラメな魔術はあの異聞隊あつてこそ、どれだけ優秀であろうとも単騎でビーストを相手にするなんてことができるのか？

答えはノー、だろう。もしそんなマネができるのであればとつくに封印指定を食らっているはずだ、その上でこの行動は…

「…ち」

分からない、何を考えている？キリシユタリア・ヴォーダイム…

思索しているうちに部屋の前に着く

キリシユタリアの部屋という訳ではなく、ただの客室のようだ

「どうぞ座ってくれ、今お茶を出すよ」

「ああ」

茨木童子を通して探知する限りランサーはこちらに来ていない、変わらずサーヴァントの気配も無し

時計塔の部屋にしては質素な内装…特徴の無い部屋の中に設置されたソファに座る

「どうぞ」

既に用意されていたであろうお茶の入ったカップが目の中のローテーブルの上に2つ置かれる

「おや、良い香りの…どこのお茶ですか？」

「うーん…すまないが人に頼んで用意してもらった物でね、美味しい以外自分でもよく分かっていないんだ」

フランクな口調にややペースを乱されそうになるが落ち着いてさらに思考を重ねる

「…」

ただのお茶だ、紅茶でもなくコーヒーでもない普通のお茶。細工無

し

(そこまでピリピリしなくても大丈夫そうですね？…今は)

…そうか

「今は、か」

誰にも聞こえないように言葉を漏らしつつ、とりあえず一口。

…美味しいな

「さて、改めて名乗らせていただくよ

私はキリシユタリア・ヴォーダイム。この時計塔で勉強に励むただの魔術師さ」

ただの魔術師ときたか、やれやれ…

「神霊をコキ使える魔術師をただのと言っただけか甚だ疑問だが今はいい、何を目的としてこんなフザけた提案に乗ったのか教えてもらおうか」

どうにもやりづらい、コヤンスカヤとはまた別の掴みどころの無さと言うものか？

コイツの意識は今はずきりと俺に向いているというのに、考えどころか感情も読めない

「災厄の獣コヤンスカヤ、そのマスターのザイル・ニツカーがどういった人物なのかを肌で感じに来た」

ゴネるかと思つた返答を、まるで自分で書いた台本を読むかのようにサラサラ出していく

目的はこつちと大差無いな、それにしてもコヤンスカヤに対する追及が無いということは――

「さらに正確に言うならキミの動機を聞きに来た、何を持って人間を憎むのか、滅ぼそうとするのかを」

恐らくランサーから何か聞いているんだろう、コヤンスカヤの情報は武器にはなりそうにない

が、今はキリシユタリア・ヴオーダイムという男のことを知る絶好の機会でもある

「教えてもいいがお前は何を差し出すんだ？商談がしたいと言いだしたのはお前だと聞いているが？」

「もちろん、タダで聞くつもりは無いよ」

そう言つて彼が懐から取り出したのは1つの金属片だった

どう見てもゴミにしか見えないソレからは俺でも分かるくらい喧しい神性が放たれている

この気配：姉さんから出てる気配にどこか似ている？

「カイニスが無理矢理こちらに持ち込んだ大西洋異聞隊の王『機神ゼウス』：その一部さ

私のことを話してもいいが、それが本当だと証明する手段を持ち合わせていなくてね」

これで代わりにならないかいと彼は神の一部を差し出してくる

「本気か？それこそ俺がいくら言葉を並べたところでそれが本当だと証明する手段は無いかもしれないぞ？」

「構わない、私はキミの言葉が聞きたいしそれに——キミは証明の手段を一部持つているんじゃないか？」

「…やれやれ」

これがただならぬ物というのは分かるが使えるかどうかは別問題だ、おいコヤンスカヤ

鉛玉飛び交う殺し合いの場に金の延べ棒があったって意味がない、それが意味ある物になるかどうかをコヤンスカヤに質問する

お前から見てコレは使えそうか？

(ただの燃料としてボーダーの動力部に放り込むだけでも充分なり  
ソースが期待できます、武器や義手への流用もできるかもしれません  
異聞隊から持ち込まれた、という点も加味すればある意味ドリーム  
マテリアルでしょう)

ふむ

(それに兵器としてワタクシがコピーしたアフロディーテ等と違い実  
物として目の前に存在しているのも大きいです、ワタクシがその場に  
居なくともザイルさんが不自由無く運用できます)

出来ることなら回収したいと言う彼女に賛同し、その破片を受け  
取った

「さて、何から話したらいいか」

「簡単さ、ザイル・ニツカーが望むもの…今のキミ自身の行動をするに  
あたった根源を教えてください。それはなんのためなのか」

いつかのコヤンスカヤと似たような質問、あの時はまともに答えら  
れなかったが今は違う

「憎いから、だな。ガキの頃からボロクソに攻撃してきた人間は許せ  
ないし、そいつら以外もどうしようもなく憎くて殺してやりたいから  
だった」

「…だった？」

「ああ」

疑問符を浮かべる彼に言葉を続ける

自分でも不思議なくらい言葉が出てきて驚いている、これが彼方で  
はないザイルとしての本音ということらしい

「人間を殺し尽くしたい願望は変わっていない、だがソレ以外の目標  
がコヤンスカヤのお陰で1つできた。『楽しむこと』だ」

映画を観るのは楽しいしパフェを食うのも楽しい、ボウリングもカラオケも。

日本でもアメリカでも俺1人では決して知る術も無かった娯楽の数々

「そうだな、簡潔にまとめるなら…『人間を殺しながら自分の人生を楽しむため』だ」

「なるほど」

意外とも予想通りとも取れる彼の表情。一見最初から変わってないように見えるその瞳の奥には密会前には無かった焰が付いたのを俺もコヤンスカヤも感じ取った

「…今からでも、止めるつもりは？」

「あると思うか？」

「無いだろうね、ここで止めるくらいなら彼女もここまでキミに尽くしたりしない」

直後彼の雰囲気は更に変わった、明確に敵だと判断したらしい

いずれにせよ人類皆殺しにあたってキリシユタリア・ヴォーダイムとの激突が避けられないことはもう間違いない、カイニスが出てきたのは想定外だったが存在を確認できただけで良しとしよう

「その通りだ、ところでコヤンスカヤもお前に聞きたいことがあるらしいんだがコイツとの質疑応答もこの会談の内に含まれているのか？」

「そのつもりだ、私に答えられることなら答えよう」

そう言われて視線のスポットを当てられるコヤンスカヤはやや困惑しているようだった

(おっと、ザイルさん?)

ゼウスだかの破片を見た瞬間、何か考え…予想や推測か何か出ただ

ろう。いい機会だ、質問しておけ

(ふむ、確かにありますよ。聞いておきたいこと、それでしたらここは是非甘えさせてもらいますわ)

「ではキリシユタリアさん、ワタクシからも一つ」

「構わないよ、なんだい？」

(いくら彼でも存在しない証拠は用意できません、空回りならそれで良いんですが)

なんの話だ？

「機神ゼウスの破片はあとどれだけ残ってますか？」

「…残っているのはキミらに渡したそれだけさ」

ほんの一瞬、それもほんの僅か。だがさつきまでと声の高さが違った

今のは…

(もう少し掘り下げていきます)

分かった、好きにやれ

「どうでしょう？もしそうだとすれば色々と辻褄が合うんですがねえ」

「そうとはどういうことだい？」

「ワタクシがザイルさんと共に駆け抜けた聖杯戦争にはギリシャ出身サーヴァントが多かったんです。剛腕の狩人 オリオン、トロイアの英雄 ヘクトール、オケアノスの魔女 キルケー」

キルケー？

(ノーアさんが今回の聖杯戦争に紛れるため真つ先に排除したキャスターです、彼女のスマートフォン記録により分かりました)

もつともまだ10%も解析できていませんが。と零しながら彼女



はさらに言葉が続ける

「もちろんこれだけでは偶然と言われれば否定する材料はありません、問題なのは日時です

…彼らは全員今より10日前の全く同じ時間に召喚されていることが分かりました」

「…」

そんな話は聞いていない、ということとは恐らくカマを掛けているのだろう。ここは静観しておいた方が良さそうだ

(カイニスさんに対するこっちのキリシユタリアさんの態度、物腰からざっくりと予測した数字です、仮に最初から関連性が無くとも事実確認の手段は彼らにありません)

「こちらを」

コヤンスカヤが彼に差し出したのは数枚の写真だった、写っているのは——姉さん？

「…彼女は」

「更には擬似的にとはいえ、彼女…影月 遥という人間を依代に月女神まで降りてくる始末。

擬似サーヴァントとして神を召喚するというのは本来、理論上は可能というだけで現代ではほぼ再現は不可能です

キリシユタリアさん、例えばそれがアナタでも。

それがロクな準備も無く、秀でた魔術の才能も無い彼女に降りているのは異常でしかありません」

コヤンスカヤ以外誰も喋らない、俺もキリシユタリアも彼女の話をただ静かに聞いている

「ここまでの点を踏まえてもう一度質問させていただきます」

答えにくいのであれば答えなくても結構ですよ一言添え、彼女はもう一度同じ質問を投げかけた

「ゼウスの残骸はあとどれくらい残ってます?」

キリシユタリアは答えない、顎に手を当て何か考え込んでいる

「…うん、そうだね」

——が、それも少しの時間、彼は俺の質問に答えた時と同じようにさらりと答えた

「機神ゼウスの破片が他にも存在したことは合っている、だがそれも数日前までの話さ。カイニスを持ち込んだ最高神の遺物は既に使い切っている」

まさかそんな遠い場所に影響が及んでいるとは思わなかったけどね、と付け足し紅茶を飲むキリシユタリア

「へえ、ちなみに何に使ったんですか?」

「…キミらを倒すための秘密兵器にさ」

「…やれやれ」

秘密兵器、と来たか。どう思う?」

(ぶつちやけ全く分かりません。ただのブラフな可能性もあります。

しかしワタクシの知る限り彼が雑な嘘を付くとは思えません…これ以上根掘り葉掘り聞いても無意味でしょうね)

「一応質問するがその秘密兵器の正体は?」

「流石に答えられないな、キミらがもう誰も殺さないと言えるなら明かしてもいいのだが」

なるほど、無理な話だ

「そりや答えるわけないでしょう」

「だから一応と付けていただろう。まあいい、これ以上無意味なのは分かった

「こつちから聞きたいことはこれで終わりだ、そつちからは？」  
「ならばあと一つ、ザイルに聞きたい」

ティーカップを手に取り、じつと空っぽのカップの中を見てから…  
そのままテーブルへ戻す。言葉の整理でもしたんだらうか

（案外『あれっ、もう無くなったの？』とか内心想ってたりしませんかね？）

「…」

やれやれ、目の前のコイツは別世界じゃ人類の敵筆頭でもあった程の男だぞ、ありえない。

「キミは私が証拠を求めたら何を提示するつもりだったんだい？」

コヤンスカヤとの下らない念話やりとりを遮るように最後の質問を投げてくる

証拠か

「日本、岐阜県もしくは滋賀県にある伊吹山の廃村、そこに証拠がある…とだけ言っておく。調べたいなら好きにしろ」

仮に今すぐ向かったとしても姉さんと鉢合わせになることは無いしな

「——日本か、うん。分かったよ、これでこちらからの質問も終わりだ」

「そうか、じゃあこれで商談は終わりだ」

有意義な時間だったよ、とティーカップを片付けるキリシユタリアの背中を見て…決心した

「ティーカップの片付けなんて後にしてランサーを呼べ

コヤンスカヤ、お前もバーサーカーにこつちへ来るよう伝えろ」

ああ、やっぱりこうなるんですね…とジト目で見てくるコヤンスカヤに催促し、バーサーカーへ連絡を入れさせる

「いいのかい？」

「不意打ちされる方が面倒だ、ただの天才なら交戦する気なんて無かったがお前は人類滅亡計画において間違いなく1番の障壁になり得る奴だと確信した。そうも言っつてられないらしい」

え、計画あったんですか？と小声で言ってくるコヤンスカヤ

ああ、あるとも。時間はかかるが確実なのがな

「…キリシユタリア・ヴォーダウム」

ザイルの手元にはN F F印のライフルが

キリシユタリアの元には高度な魔術で創られたであろう杖が

そしてその場に居ないはずの2騎のサーヴァントが2人に呼応し

コヤンスカヤからはそれまで微塵も感じなかったり火薬の香りが漂い始める

もうそこから先は何も言わずとも何が始まるのか誰もが理解していた

理解してはいたものの再認識のためか、あるいはただ言いたかっただけか

「お前はここで死んでおけ」

——その眩きと共に戦闘が始まった——

## 第64話 この身は全て、我がマスターと世界の為に

ロンドン 時計塔にて…

キリシユタリアの用意した小さな客室が吹き飛ぶと同時に始まった、人類の存亡を賭けているともいえる戦い

コヤンスカヤと共に銃を取ったまでは良かったもの——

「始めたのはいいが…どうしたものか」

「え？まさかもう詰んだとか仰ったりしませんよね？」

「…あいな」

魔弾を避け、弾丸を込め直し、戦闘を継続。

その最中で頭を悩ませる『要因』について目をやる

「オラツ！オラあ！おおおっ…！くたばりやがれエ!!」

「くあ…！おのれ…」

廊下と言うには広い通路を縦横無尽に駆け回る破壊の嵐、カイニスが繰り出す槍捌きに茨木童子は防戦一方なのは誰が見ても明らかだ

やはりバーサーカーだけじゃ手も足も出ないな

神霊カイニスは強敵だ。開幕と同時にタマモタンクを展開させてキリシユタリアへの盾にしつつ、全員でカイニスを叩き殺す作戦を立てていた

それに待ったをかけたのが他にもないコヤンスカヤである

「そろそろなんとかしろ、この状況下でいつもみたいに勿体ぶるな」

「むう…まあ確かに遊べる雰囲気では無いですよねえ

ではここらで1つポイっと」

コヤンスカヤは俺の標準装備と言っても過言ではない閃光手榴弾をベルトから引つ掴むと迷いなく投擲。そして——

「うおっ!？」

「落ち着けランサー！ただ光を発するだけの現代兵器だ！」

トンツ

「はい、お注射しますよ〜♡」

「触るな女狐！我に、なに、を——ツ!？」

強烈な光の中見えたのはグランドアーチャー戦と同じタイプの注射器を持ったコヤンスカヤ、そして

「な、なん、だ？これ、これ、は——

グ、グガガギアアア!!」

「な——」

なんだこのふぎけた魔力は…!？」

茨木童子から溢れる魔力がその勢いだけでさつきまでのカイニス以上の破壊の嵐を巻き起こしている

「魔力反応が一気に…！気をつけるカイニス！」

「うるせえ！んなモン分かって

「グリユア”ア”ア!!!」

紫の蒸気を全身から上げた茨木童子がカイニスを床へ叩きつけ、そのまま一つ下の階へと落ちていく

「がああ!？」

「カイニス!!」

「…1つどころじゃないな」

音を聞く限り数階分は叩き落としている

「むう、元がバーサーカーなせいか、はたまたワタクシのリサーチ不足のせいか、理性が見られませんねえ」

「コヤンスカヤ」

「超簡潔に言っただけ専用のスーパードーピングアイテムです、理屈は後ほど♡」

「いらん、大体想像つく」

「ですよー、じゃあとりあえず目の前の彼に集中しましょう」

「…やれやれ」

…伊吹童子が気にいるような血筋の人間、その血が鬼になんらかの影響を及ぼしてもおかしくない

彼方の身体の一部を使ったらしいな

とはいえ相手は神霊、勝つてくれればそれでいいがあんな暴走状態が長く続くとは思えない

「速攻でカタを付ける、奴の足場を削れ」

俺かコヤンスカヤ、先にチャンスが来た方が奴の頭を撃ち抜く」

「速攻と言った割には堅実ですねえ、お任せくださいませ♡」

く

くそ！キリシユタリアがヤバイ！

ギリシヤ異聞帯のあいつとこっちのキリシユタリアは違う、あの強さは異聞帯あってこそのもだった

もちろんこっちのキリシユタリアもタダモンじゃないがビーストが相手じゃ——

「どけつつつてんだよツツ!!」

トライデントを持ち直し、暴走状態のサーヴァントへ全力で投擲する。が

「ジッ、ジジジッ!!」

「このガキ——ガッ…!?!」

まともな生物が出すようなものではない声を上げながら槍を弾き飛ばし、速度を微塵も緩めず突進してきた茨木童子に顔面を殴り付けられる

「くっ…そがあ…！・テムエと遊んでるヒマはねえんだよ!!」

「ガアツ、ハアツ…！・ギギツ…!!」

槍を戻す時間が惜しい！

「ヴォラああ!!」

ダイヤでも割るつもりなのかと言われそうな殴打をお返しとばかりに叩き込む

「ギツ、ギアア！」

だが目の前の怪物は倒れないどころかさつきと少しも変わらない  
打撃を繰り返してくる始末

「う、おおおああああ!!」

「ガアアアアアア!!」

サーヴァント同士の息をつかせない殴打の応酬が、まるで数百個の削岩機を一齐に起動させたかのような重音と共に周囲を抉り取っていく

冗談じゃない、二度と死なせてたまるか！

「ギリシユタリアツ！」

く

「器用なヤツだな」

コヤンスカヤと波状攻撃をかけながらも未だに隙を見せないコイツに対して最初に出た感想がそれだった



自分自身だけでなく足場も守るように魔術を行使して立ち回っている、守りに力を割いているせいか攻めはそこまで強くないが守りの硬さが異常だ、この分を攻撃に回していたらと想定すると…

「攻撃範囲を広げろ、ここで終わらせるならこれ以上モタついてられない」

「こちらの足場も破壊される危険が生じますが」

「なら壁と天井を中心に破壊するよう爆撃しろ、多少こっちに被害が飛んできてもいい」

博打はしたくないが、どう転ぶにせよキシユタリアの『全力』を少しでも見ておく必要がある

『レオレオ、動体視力強化及び防壁レベル3展開』

コヤンスカヤの武装を考えれば最大のレベル5を展開したいがそれをやるともう義手が持たないだろう

爆撃をコヤンスカヤに任せ、2本のコンバットナイフを抜いて近距離戦に切り替える

当たり前だが魔術師は格闘戦術に疎い、身体強化によるフザけた怪力や切嗣のような高速化が使えたとしても技術だけはどうにもならない

右腕は…セーブしてはいるがもう限界だな、ダヴィンチの義手は文字通りこれが最後の仕事になるだろう

「君とは初対面のハズなんだが、容赦が無いな」

「このことは別の世界のお前を見てな、米軍が半壊した今残った希望脅威はお前だけだ」

ミサイルが周囲を瓦礫に変え、ガトリングガンの鉛玉が奴の足跡をなぞるように放たれる

そしてそれを防ぎながら足場を守り、さらに一つ一つのこちらの攻

撃に対して最適な防御をとってくるクリシユタリア

まともな格闘術のない、魔術だけでこの硬さか。クライムとは別の意味で人かどうか疑うレベルだ

「人類最後の希望は念入りに潰しておく必要がある」

「君は、勘違いしているようだが…私は人類最後の希望なんかじゃない」

…まだ何か隠し玉があるのか？

ビキツ…

「崩れますよー」

「分かってる」

両手のナイフを反動強化仕様のハンドキャノンハンドガンに持ち替え、発射位置を微調整して射撃。

バーサーカーめ、暴れ過ぎだ。おかげで助かったがな

1発ずつ発砲し、崩れてくる瓦礫を避けて1つ下の階へと着地する  
低空かつ3発という僅かな弾丸が続く間のみ、更に両手が塞がるという多数のデメリットがあるとはいえ空中を動けるといのは大きい

そして――

「つとー」

姿勢制御に一瞬気を取られたクリシユタリアの顔面へマグナムを撃ち込む

自由の効かない空中で判断が遅れたらしく、それまで1発も当たらなかった弾丸は奴の頬を掠めた

土壇場で軌道を逸らしたな、普段から戦闘行為をやっているわけでもないのによくやるものだ

「だがもう終わりだ」

「確かに誰でも希望になれるなんて思っていないさ、でも」

上階からコヤンスカヤが構える対戦車ライフルの銃口が真っ直ぐにキリシユタリアの頭部へと狙いを定める

「誰もが誰かの『希望』になれる可能性を持っている、それを否定しちゃいけない」

——っ!?

「待て!!」

「え?——っぶ!?!」

いきなり飛来した2メートルはありそうな人影がコヤンスカヤを吹き飛ばした

今のはモロに顔面を殴られたな

「…ち」

マグナムの反動を利用して上階へ戻る

やれやれ、どいつもこいつも次から次へと横槍を入れやがって

「生きてるか?」

「そんな当たり前のことを聞くためにわざわざ上に?」

それもそうだな

「質問を間違えた。何に殴られたか分かるか?」

「いえ、一瞬だったものでして…」

く…! それにしても乙女の顔面を躊躇無く殴るなんて!」

どこの誰か知りませんが高く付きますよ…! と妙な方向に怒りを燃やすコヤンスカヤをよそに警戒を強める

今のは間違いなくサーヴァントだった、どういうことだ? キリシユ

タリアが他に契約しているサーヴァントが居るといふことか？

それにしてはこんなギリギリになって駆けつけるのもおかしい話だが

「…いったい誰」ンンンン！罪なき人々を殺め、英霊とはいえ女兒を道具のように使い、更には我がマスターを殺して世界を滅ぼさんとする災厄の獣が言うに事欠いて『乙女』だなどと！冗談も度が過ぎれば失笑ものでございますぞ？タマモヴィツチ・コヤンスカヤ殿！」

「—————」

聞き覚えのある声に2人揃って絶句してしまう

ホームズやカイニスが来ていたのなら他にもいると考えるべきだ、あちらのカルデアが残した痕跡から3騎まではこちらに干渉してくる可能性があるとかヤンスカヤから聞いてはいたが…よりによってコイツか…？

「ンン、聞いていた通りの悪逆非道の数々！人理の守護者として、到底見過ごすことはできません！」

世界の危機にも関わらず姿を見せぬ安倍晴明に代わりツ！

正義のキャスター、真名を芦屋道満！

我が身の全てをマスターと世界のために捧げ、全身全霊を持って退治してくれましょうぞ!!」

カルデアめ、滅びた後だというのにやってくれる

「異星の神と取引してからカルデアを滅ぼすまですつとあんなのの近くで仕事していたのか？お前も大変だったらしいな」

「それマジで言ってます？クソ坊主の性格の悪さから考えればこんなのおままだとクラスですよ？」

気付かずに犬のクソの上でタップダンスをしたような表情のコヤ

ンスカヤがそう吐き捨てる

——やれやれ

「…俺が、悪かった」

「ええそうですね、クソ坊主の話題など面白くもなんともありません」

今度は念入りに切り刻んで獣のエサにします、と真顔で言い切る彼女に若干引きながらマグナムを再装填してからナイフに持ち替える

「奴が居る以上どんな小細工をしてきてもおかしくない

想定より早いがここからは撤退も視野に入れて戦う」

芦屋道満を俺に近付けるな、とだけ命令し下階から上がってきたキリシユタリアと対面した

）

「アレもお前のサーヴァントか？」

「そうだ、陰陽師の芦屋道満、彼も私が契約しているサーヴァントさ」

「よくアレを仲間にする気になったな」

「彼も優秀な英霊さ、しない選択は無いし…お互い様だろう？」

「やれやれ、全く」

戦りづらい男だ

）

「下総国と平安京でカルデアにボコられた挙句、いつのまにかカルデア側に寝返ったかと思えばまあ…何しにきたんです？」

タマモタンクで轢き潰したい衝動を抑えつつ、ミサイルやグレネードといった基本武装を展開、いつでも木っ端微塵にできる体制を整える

「ンン、下総国？平安京？一体なんのことやら…：そのような虚言で混乱を招こうだなどという獣の浅知恵、拙僧には通用しませぬぞ♡」  
「よくもまあぬけぬけと♪とぼけるなら靈基クラッスくらい弄つたらどうですか？」

確認するまでも無く彼の靈基はアルターエゴのまま、それに表情筋も引き攣っている

あの引き攣り方は隠す気が無い時のヤツですねえ

「てゆうかしつこいですよアナタ、探偵は元々そういう能力がありましたし神霊カイニスもまだ理解できますが…：なんですか？そんなに負けを認めるのが嫌で悪足掻きしにきたと？」

「——ンツ…ンン！まあ獣に会話のキャッチボールを求めるのも無理というもの！」

拙僧、キリシユタリア殿に召喚された正義のアルターエゴなれば「いやそういうの良いでリンボさんマジで何しに来たんですか、新手の粘着ヤロウですか？」

心なしか元からおかしかった表情筋がさらにおかしくなっている  
…：笑うところなんでしょうが全然笑えませんよホント。

「ンンン…：『ゴキブリだつてここまでしぶとくありませんよ？ああそういうえばリンボという名前、お気に入りでしたよねえ？心機一転という事で新しいニックネーム

『ゴキブリンボ』っていうのはどうでしょう♪」

ピキツ…

建築物が壊れる音とは別の音が聞こえた気がするが特に気にしないでおく

「ン——」「ああ！ダメです！これではゴキブリがあまりにも不憫です！彼らだって命があり、そのか弱き命で精一杯生き抜こうとしているのに！安倍晴明のかませとかいう居たかどうかも分からない人物の、そのまた影法師と一緒にするなんてワタクシ、どうかしてしまいましたわ！全国のごキブリさんに謝らないといけません！」

「——」「スケジュール帳に追加記入です、謝罪は大事ですしここはキチンとしなければいけません！」

：おや？時計塔にしては悪趣味な置物かと思ったら——  
道満さん居たんですか？w」

ドゴツ

直後、まるでナントカ道満の心境を表すように彼の背後の床が砕け、下階から見覚えのある英霊が飛び出してきた。

あ。ちなみに床が砕ける音の中、ワタクシの耳には確かにナントカ満さんの血管の切れる音が聴こえました♡

「ゼエツ！ゼエツ…！キリシユタリア！無事か!？」

「こっちは大丈夫だ！それよりも君の方がダメージが酷いこっちに來れるか？」

「——無事ならそれでいい！こっちはまだ取り込み中「ギャオオアガガがガ!!」

うつわ、茨木童子から昇ってる紫の蒸気——瘴気？とにかく後で要検査ですねアレ、どう見たつてマトモじゃありませんし。そしてそれを引き起こす影月家の血とは一体…

「まだくたばらねえのかコイツは!?!あ？道満居たのか。足引つ張んじゃねーぞ！」↑彼なりの鼓舞のつもり

「ンクっ…！」

吹き出しそうになるのを全力で堪える

流石に哀れになってきました——笑いつて堪えると倍増すると  
いう新しい発見が今——

プツチンツ

あつ、輪ゴムが切れたみたいなき音が今はつきりと…

「ンンン!!…ええ、良いでしょう良いでしょう!ここまでされて怒りに  
燃えぬ方がおかしいというもの!

勝<sup>世</sup>ち逃<sup>界</sup>げ<sup>と</sup>できた<sup>人々</sup>と思<sup>を</sup>い込<sup>脅</sup>んで<sup>かさ</sup>いる<sup>んと</sup>女<sup>す</sup>狐<sup>る</sup>を!全力で駆除してくれま  
しょう!雪辱<sup>世</sup>と怨<sup>の</sup>みを晴<sup>た</sup>らす<sup>め</sup>ため…!拙僧<sup>の</sup>の心は今、復讐<sup>正義</sup>の炎で熱く  
燃えたぎっております!」

メツチャ喋りますね

「まずはその減らず口から切り刻んでくれましょうや!!」

死ねエエエいつ!!



## 第65話 希望を担うもの

時計塔 上層 廊下にて…

コヤンスカヤvsリンボ

「まったく次から次へと」

ヒトの気配が無い廊下にバイクを走らせ、とりあえずクソ坊主から距離を取る

「ンンン！ 緩い、 緩い！ あまりにも緩い！ 獣らしく拾い食いでもして 霊基を崩されたので!？」

ふむ、やはり

キヤスターでもあるリンボさんが全力で追いかけてきているあたり、少なくとも魔術の射程距離は弱体化しているようです

「鏡と会話してらっしゃるところすみませんがワタクシには猫マツチヨと戯れている時間は無いんです」

アンタマテリアルライフルM82を展開、目視することなく標準を合わせて撃つ

「…外れましたか」

できればザイルさんが以前持っていたノーアさんのライフルをコピーしたかったんですが。性能が破格ですし。

余談だが彼女ノーアが作った兵器は何故か軒並みコピー出来なかった、作った当時何者であろうと元がヒトであり、この世界に住まう人類であつたのなら間違いなく使えるはずなのだが…

まあ、それは後で考えるとして――

バイクを乗り捨てて跳躍、呪詛で塗れた突きを避ける

床のバイクと自身に挟まれるような位置へ飛び込んできた道満、そ

の位置関係を瞬時に把握してスキルを発動、バイクを引き寄せる  
「ンン、逃げ足だけは——ンッ!？」

バイクにカチ上げられ、無防備に迫り上がった2メートルの巨体の首めがけてライフル弾を叩き込む

元の時点で鋼鉄の戦車に風穴を開ける威力を持った弾丸がコヤンスカヤのスキルによって更に強化された結果、命中した弾丸は豆腐を抉るように道満の首を吹き飛ばした

これで——

「死にました?」

「滅相もございませぬ!」

吹き飛んだ首がそう喋るが早いか、真横から飛んできた陰陽師とは思えない蹴りにこちらも蹴りを打ち込んで相殺

波一つない水面に鉄板を叩きつけたような乾いた音が周囲に響き、一つ一つが無駄に大きな窓ガラスがガタガタと振動する

「おっとつと」

衝撃を逃しつつ後退、マシンピストルスコーピオンを手に彼の出方を伺う

どこかで式神と入れ替わっていたらしいですね

弱体化してしようと小細工だけは1級というのは変わっていないようです

「霊基の差もありますし最悪時間をかければ殴り勝ちできそうな気がしますすが他の戦場場所が気になります」

早いところ駆除した方がいいですねえ

く

時計塔 下層 エントランスにて…

カイニスvs茨木童子

廃墟同然に荒れ果てたその空間を更に荒らしながら戦い続ける  
サーヴァントが2騎

「くっ、そっ…ガキがッ!!」

「ギギイツ!?!」

暴走状態のサーヴァントを渾身の力を込めて殴り倒し、槍を手元に  
呼び寄せる

「今度、こそ!これで終わりだ…!早くギリシユタリアのところへ—

「ガッ、ガオオオオアアア!!!」

「がっ…!」

背中から聞こえた怪物の咆哮と一瞬遅れてやってきた衝撃に吹っ  
飛ばされる

「フーツ!フーツ!フツ…!」

「クソ…ふざけんな!不死身か!?てめえは!!」

槍で瓦礫を払いのけてバーサーカーへ急接近、お返しと言わんばかりに吹き飛ばすが—

「グツギギツ!」

まだ立つてきやがる…!これじゃキリがねえ、宝具を使うか?

倒せなくともそう簡単に戦線復帰ができないくらい遠くへ吹き飛ばすことはできるかもしれない

いやダメだ!異聞帯の時とは違う、今のアイツはオレとアルターエ  
ゴの2騎と契約しているせいで既に魔力消耗が大きい、加えてアイツ  
だって戦闘中だ

そんな状態で宝具を使ったら…

絶対的な確信が彼にはあった。もし自分が手こずっていると  
キラシユタリア<sup>マ</sup>が知れば躊躇なく令呪を切りに来ると。

今の状態で宝具を使うには令呪に頼るしかねえが――

「ルガアツ!!」

「るっせえツ!!」

バーサーカーと打ち合いながら、数時間前キラシユタリアに言われ  
た言葉が脳裏を過ぎる

『もしビーストの陣営とここで戦うことになったとしても無理に倒そ  
うとしなくていい、何故なら――』

まだその時では無いのだから

↳

時計塔 中層 大廊下にて…

ザイルvsキラシユタリア

「ここも含めて…戦況は拮抗しているようだね」  
「やれやれ、とんでもないハンデ背負った状態で涼しく言ってくれる  
な」

予備動作を消し、滑るように接近してナイフを振る

カプセルのように奴の全身を守る魔術の防壁にナイフが突き刺さ  
る

これくらいの攻撃、本来は弾き返す代物だろうがNFFFボードーの  
ようなバックアップもなくサーヴァント2騎と契約状態にあるせい  
か魔力が不足して本来のスペックを發揮できていない、同様の理由で  
攻撃にも弱体化が見られる。これなら――

「俺一人でも勝機はある」

アサルトライフルのアンダーバレルとして取り付けられたグレネードランチャーを叩き込み、防壁を砕く

よし、コヤンスカヤの武器装備ならあの防壁はカンタンに砕けるらしい

先のナイフと同じ要領でもう一度接近し、ガラ空きになった胴体を殴り上げる

「…っ！」

吹き飛ばしはしたが手応えが違う、杖でガードしたか。

…まあ関係ないが

宙へと吹き飛ばしたキリシユタリアを蜂の巣にしようとライフルの銃口を向け――

ふわっ…

っ!! 魔力の流れ…!

『レオレオ! 防御機能強化!』…ぐう!』

さっきまでキリシユタリアが立っていた場所から無数の魔弾が形成され、叩き込まれる

最初に張ったこっちの防壁を貫通したのは想定内として、防御力を上げているというのに1発1発がここまで重いとはな…

「ふう、まさか今のを防がれるとは…君も、その義手を作った人物も相当優秀のようだ」

「煽りにしか聞こえないぞ、やれやれ」

今の攻撃、遠隔か? それならキリシユタリアに何かしらの動きがあるはずだ、ということは一――

「時限式か、顔に似合わず無茶をする奴だ」

「もう無茶をしないでどうにかできる領域じゃなさそうだったから

ね」

俺が接近してくるタイミングを見計らって仕掛けたんだろう、それも残り少ないハズの魔力を惜しみなく使って。でなければ義手の防御と防壁の上からここまで重い攻撃を出せるわけがない

結果だけを見れば読み合いを制したキリシユタリアだがほんの少しでも読み間違えれば大打撃を被っていたのは彼の方である、その事実を確認したザイルは小さなため息とほんの少しの汗を流した

『レオレオ、防御強化解除』

一瞬とはいえ博打にまで頼らざる得ない状況になったにも関わらず涼しい顔のままか。底が知れないな…このまま続けて倒せるか、どうか。

「…微妙だな」

コヤンスカヤ、そっちの状況はどうだ？

(このまま続ければ終わりそうですが腐っても元異星の神の使徒…

即決着、というワケにも行かなさそうです。こちらはもう少し時間がかかります)

「…そうか」

バーサーカーの方は聞いただけ無駄だろう、さて

(ザイルさん?)

——このまま小競り合いしていても仕方ないのも事実だ、仕掛けるぞ。

指定座標にタママタンクを出せ

警戒しつつスマホを取り出し自身の座標と指定座標を素早く入力しコヤンスカヤのスマホへ

(ふむ?かしこまりました!落石にご注意下さいませ♡)

こちらの意図を即座に汲み取ったらしい、話が早くて助かるな

「メールかい？」

「電話ならともかく生粋の魔術師がメールなんて知っていたことに少し驚いたがまあそんなところだ。悪いがそろそろ退場してもらおう」

直後キリシユタリアより5メートル程後方の天井が崩れ、見知った桃色の戦車が落ちてくる

魔力反応が感じ取れない？……この一瞬で偽装までやってくれたらしい

「!？」

キリシユタリアがタンクに気付いたが遅い

『レオレオ、防壁解除。打撃強化』

それまで守りに回っていた全ての強化を攻撃に回し、前へと走る  
左右は壁、後ろは天井が崩れ、その瓦礫と戦車によって床も抜ける  
ことは互いに想像が付く、とすれば奴に残された回避経路は――

「俺の方前方しか無いな」

「防御を……！」

「はあっ！」

走ってきたキリシユタリアを杖の上から渾身の力で殴り飛ばし、崩れ落ちる天井の下へと吹っ飛ばす

よし！

「轢き潰せ！コヤンスカヤ！」

「――つてますよ！」

何らかの方法で防いだとしても、その瞬間ライフル弾を頭部に撃ち込むだけだ

終われ！

ガンツ

だが期待とは裏腹に肉を轢き潰す音は聴こえない、そして戦車を防いだのはキリシユタリアでも無かった

「え、えっ?」

落ちてきたタマモタンクの動きが止まった、それどころか少し持ち上がったいて――

『怪力 B+』

「う、おおお…っ!!2…度も…!」

「カイニス!!」

「さっ…せるかよオツ!!」

サーヴァントとということを加味しても冗談みたいな怪力で受け止めたカイニスが、そのまま階下へタマモタンクを投げ飛ばした

「うっわ!?!力頼みにも程がありません!」

「タマモタンクは放棄!カイニスを足止めしろ!」

このチャンス逃したくはない!

否幻想弾が装填されたマグナムを抜く

間に合うか…!?

「お、おい人間!一体なんだ!?!これは何が起こっている!?!」

床を突き破り喚くように現れたのは茨木童子だった、理性は元に戻ったらしい

「今は説明している時間は――いや」

違う!



「危険なのが分からのか！今にも床や天井が崩れそうで、『レオレオ！筋力強化！』」

撃ちかけたマグナムをしまい、爆散寸前の義手で強化付与。茨木童子『のようなもの』へ全力で近付き

「な——「ツがあー！」

渾身の力を込めてその首を捻った

「ンン…いささか、躊躇が無さすぎるのでは？」

藤丸立花体験劇場にてイヤと言うほど聞いた声が茨木童子『のようなもの』から聞こえてくる

「茨木童子は俺のことを名前で呼ぶ、それに命令しない限り俺を助けてようとはしないんでな」

「左様で！拙僧、貴方の元に召喚されていればと今心より思っていました！」

捻れた首のまま、心にも無い言葉を並べる芦屋道満に背を向け、再びマグナムを抜いて走る

やれやれ

「悪いが願い下げだ、お前にコヤンスカヤの代わりは務まりそうにな

い」  
まだ位置が悪い、確実に狙える角度へ…！

「ンン…！全く！マスターとサーヴァント揃って…

コケにしてくれますねえ！」

ぺたっ

崩壊音にまじって聴こえたシールを貼ったような音が警告に変換

されて脳に届く

「!!」

義手右腕に、呪符——これが狙いか!

理解の及ばない真つ黒な呪いが義手を走って身体へ向かってくる

「ち——」

これは避けられないな

ボンツ

が、それを遮るように接合部が碎け義手が床へと落ちる

M82の撃発音?ということは

「すみません、こうするより他にありませんでした!」

「いや、カイニスを相手にしながらよくやってくれた」

お陰でこの瞬間は助かったが、片腕を失ったのはまずいな

「ンンンンン!雇い主に尻尾を振るのも一苦労のようですねエ?女狐  
!」

優勢と取るや否や…やれやれ、記録で見た通りだ

たな…」

「調子に乗り始め

ましたね」

「ンンツ!手負いのマスターを庇いながら戦われますか!元々豆粒ほどしか無いプライドを捨てて鼠のように逃げ出すか!見定めさせてもら

「グルル…!」

「あ」

「ン?」

階下から床をブチ抜いた見覚えのある鬼の手がガツシリと道満の足を掴み

「グルルア”ア”ア!!!」

「ンナンッ!?!」

コントのようにそのまま階下へ引きずり込んで、消えた。

「……………俺の召喚にアレでなくお前が応じてくれて本当に感謝している」

「あはは、感謝の気持ちは伝わってきますが比較対象が悲惨すぎてまっつったく嬉しくありませんね」

さて、フザけるのもこのくらいでやめておこう

無くなった右腕側をコヤンスカヤにカバーさせ、前方にマグナムを向ける

「キシシュタリア!大丈夫か!?!」

「君のお陰で、なんとか無事だ、追撃が来なかったのは、道満のお陰、かな?」

瓦礫の落下により発生した煙を掻き分け、ランサーのサーヴァントとそのマスターが姿を現す

∴

カイニス予想以上に茨木童子に手こずったらしく深手とはいかなくともかなりの消耗が見られる、キシシュタリアの方は外傷こそ殆ど無いものの息切れが激しい

絶好のチャンスであることには変わらない、しかし。

く∴右腕さえ健在なら∴

いくら消耗しているとはいえ片腕潰れた状態で相手にできるほど

キリシユタリア・ヴォーダームはカンタンな相手じゃない

それに消耗しているとはいっても奴はまだ令呪を3画とも持つている、中途半端に追い詰めれば最悪、芦屋道満とカイニスの宝具を同時に使わせることもあり得るだろう

「ザイルさん」

「分かっている」

博打をするのは娯楽施設でだけだ、これ以上戦い続けるのは得策じゃない

「流石にこれ以上は戦えないな、カイニス！道満！そろそろ逃げようか！」

「…!?!」

退くぞ、と言いかけた声はキリシユタリアの思わぬ言葉と令呪の光によって遮られた

「ンン？令呪による瞬間移動ですか」

「そうだ、逃走用の術式を！」

キリシユタリア、カイニス、道満が1箇所集まり、それぞれの魔力もその1箇所に集まっていく

「災厄の獣コヤンスカヤ、そしてそのマスターのザイル

次はこことは違う場所で会うことになるだろう

それまで変わらず君達が人類の敵であるのなら、私は！私達は！全力で君達を打ち砕く！」頼む道満！

「お任せあれ！」そおくれっ

吹雪のような符が視界を遮り、キリシユタリア達を隠す。そして――

「…逃げましたね」

「ああ」

さつきまでの混沌とした戦場が嘘のように静まり返り、聴こえてくるのは床や天井から崩れた小さな破片が落ちる音だけ

…やれやれ

追いますか、と言う彼女の質問をやんわりと静止し、ボロボロの床に腰を下ろす

「結局底が見えない男なのに変わり無し、か」

あの状況、ギリシユタリアもカイニスもまだまだ戦えただろう（道満は分らんが）むしろ義手を失ったことで俺の戦闘能力が落ち、結果的にコヤンスカヤも動き辛くなった

あつちにとつてまだ有利状況のままだったはずだ

「茨木童子の回収を、暴走させたからには落ち着かせる方法も分かっててやったんだよな？」

「それはもちろん、すぐに向かいますわ」

「そうしてくれ」

「…」

何故自分から退いた？あのまま続ければ逆にこつちを退かせられることは想像できるだろう、ここに残った俺達が空になった時計塔を吹き飛ばす可能性だって思い当たっただろうし——

『予定していた客人とは違うが』

「客人…」

コヤンスカヤが録音していた音声にはギリシユタリアの声で確かにそう記録されていた

秘密兵器、予定していた客人、カイニスだけでなく道満という隠し玉の露見、退避済みの魔術師、放棄された時計塔…

「やれやれ、厄介なことになりそうだな」

「戻りました！」

爽やかに戻ってきた彼女の腕には死んでいるんじゃないかと思うほど衰弱した茨木童子がおり、耳をすませてようやく寝息が聞こえるほどだった

「派手にやったな、とりあえず茨木童子は一足先にボーダーに置いて回復させる」置いてきたらすぐこっちへ戻ってこい

「おや、まだ一仕事あるご様子…かしこまりました、必要なものはございますか？」

「ああ、対城宝具に相当する火力を用意しろ  
時計塔を吹き飛ばせ」

お任せくださいと得意げな背中を見送り、ナイフを抜く

「そろそろ出てきたらどうだ、ベリル・ガット」

時計塔に入った時からずつと感じていた視線に向かってナイフを向け、名前を呼ぶ

「おいおいおい！まーバレてるとは思ってたけどよ、名前まで知られてるのはちよつと驚いたぜ？」

眼鏡をかけたギヤングのような格好をした男、こことは別の世界ではブリテン異聞帯を担当するクリプターとしてカルデアに立ちはだかった魔術師、ベリル・ガットが観念したように瓦礫の影から出てきた

邪魔してくる気配が無かったので放っておいたが、せめて何が目的かは知っておきたい

「で、何が狙いだ？まさか善に目覚め、正義の魔術師になった…というわけでもないだろう」

「なーんかオレ、メチャクチャ警戒されてないか？でも見ず知らずのアンタが警戒するほど殺した記憶も無いんだが…」

まあ面白そうだしいいか！ザイル、だったか？俺もお前の『人類滅亡隊』に1枚噛ませてくれよ！」

…

「…やれやれ」

そんなフザけた隊を結成した覚えはない

…

NFFボーダー 管制室にて…

エクスカリバー砲 要求量のエネルギー充填完了 発射体制へ移行  
認証待機中

「えー、目標は時計塔、最終認証入力！つと」

認証受信 標準固定

エクスカリバー砲 発射

過剰に輝く聖剣の光が収束、光線となって主砲から発射。何年、何十年とそこにあり続けていたであろう時計塔をあつさりとし消し飛ばした

「うおおう、俺が言うのもなんだが容赦ねえな！」

消し飛んだ時計塔を見て目を輝かせるベリルを無視し、缶コーヒーを飲む

「お掃除完了です！」

「ああ、ご苦労だった。義手の制作も引き続き頼むぞ」

「それはいいのですが…本当に連れてくおつもりですか？」毒にしかなりませんよ彼。

コヤンスカヤの言い分もよく分かる、ブリテン異聞帯の記録を見た後なら尚更な

「だが毒なら毒で使い道はある、今はこれでいい」

：それに奴には魔術師でありながら魔術師としての常識がいい意味で殆ど無い、キリシユタリアやクライム側に付かれても面倒だ」

奴は魔術師、一般人以前に殺し屋として特化している、人類根絶やしという俺の目的に沿った優秀な人材だ

「ま、信頼度で言えばあのクソ坊主より幾分マシですが仲間にするなら相応の覚悟と警戒を」

「分かっている、『今は』これでいい」

消し飛んだ時計塔を管制室から見下ろしながらコーヒを口に運ぶ

念のため妨害も警戒してたがそれも無い、キリシユタリアは本当に時計塔を放棄したようだ

「未だ腑に落ちない点はいくつかあるがここで考えていてもしょうがないだろう」姉さん達を迎えに行くぞ

「かしこまりました」

「お、他にもいるのか！行こうぜ！」

キリシユタリア・ヴォーダイム、そして何処かで絶対に生きていであろうクライム・アルバート

恐らく客人というのはお前なんだろう？クライム…

「やれやれ、楽しみが増えてきたな」

誰に当てたわけでもない皮肉を呟き、俺は空になった缶コーヒをゴミ箱へと投げ捨てた

く

同時刻 時計塔跡地地下 霊基アルビオンにて…



「うおつ、奴ら本当に時計塔を吹っ飛ばしやがった！」

「聖剣の概念を取り込んだ戦艦搭載型砲台か、厄介だね」

「キリシユタリアさん、今は…」

おつと、そうだった

眼帯をかけた魔術師の女性、オフエリアに諭され本題へ

幻獣種が闊歩するこの空間で誰かと密会するなんて思ってたみなかったな、なんて考えながらその相手へ一礼する

「魔術師、キリシユタリア・ヴォーダイム

そして彼が私のサーヴァント、ランサーの神霊カイニス」

「カイニスだ、あと芹屋道満つてのがいるがギリシャの神に劣らずクソ野郎だから近付ない方がいいと忠告しといてやる」

「…：そうか、俺は米陸軍中将クライム・アルバート。

こつちが俺のサーヴァント、バーサーカー土方歳三だ」

『『新撰組副長の』土方歳三だ

ところで…それが、そうなのか？」

背後で建造途中のそれを指差し、彼が言う

「——そうだ」

幻獣種達の目を欺きながらゆつくりと、それでも着実に出来上がっていつている

の  
神霊カイニスが持ち込んだゼウスの残骸を核に建造されているも

近い未来、人類の希望を担う船。

「ああ、これが『HOPEボーター』さ」

## 第66話 冬木市の調査

冬木市 とある埠頭にて…

長い船旅を終え、冬木市に降り立った魔術師が2人。

「…思ったより時間が掛かった、急ごう」

「まあ待ちなさいって、知識で知っていてもここは私達にとって未知の土地よ？ここは確実にゆっくり行きましょう！」

リラックスリラックス！と微塵も緊張感を漂わせない彼に釣られたか、自分も少しだけだが肩の力を抜くことができた

「そうかもしれないな、ゆっくりはできないがお陰で少し落ち着いた」

そういえば――

「彼女は…ミラ・ツールは？」

「ミラちゃんなら、ほらアレ」

彼が指差す方を見るとアヴェンジャーのサーヴァント、平景清に抱かれて眠っているマスター、ミラ・ツールが居た

あまりにも無防備で魔術師ですらないが様々な偶然が重なりマスターとして成り得たらしい

「…」

彼女は子供だ、無理もない…しかし上を目指す魔術師の身としてはやはり腹立たしい、とどこかで思ってしまうところはある。

彼女の境遇を考えれば筋違いどころか八つ当たりにも近いもの――いや、これを考えるのはよそう

なんとなく彼の視線が気になり、思考を強引に変えて彼女の方へ「アヴェンジャー、ここからは僕が彼女を連れて歩く。お前がここで実体化していると色々とマズいからな」

「何度も聞いた、分かっている」

アヴェンジャーという禍々しいクラスに似合わない、優しく丁寧な動作でミラをこちらに引き渡し、そのまま霊体化。

意外にもあつさり指示に従ってくれたことに驚きつつも、ここに来た目的を再確認する

「こうしてみると兄妹みたいねえ」

「どこをどう見たらそうなるんだ、そんなことよりここに来た目的をもう一度確認するぞ」

あれは確か…

||

『現状の戦力だけでコヤンスカヤとザイルの攻撃を受ければ今度こそアメリカの彼らは崩壊する、そしてそれは我々も同様だ』

時計塔の中の、どこにでもあるような空き教室で魔術師、キリシユタリア・ヴォーダイムの声が反復する

『私たちとクライム<sup>彼</sup>達<sup>ら</sup>が協力関係を築くのは大前提として、こちらも戦力を確保していききたいからね

そこで2人に冬木市及び伊吹山の調査を頼みたい

まず伊吹山については50年前、聖杯戦争が発生した可能性が示唆されているんだ』道満が察知してくれた

『シンシンン！拙僧が見つけた???どうにも嗅ぎ覚えのある気配です、ええ！』

うおっ…！

眼前に文字通りいきなり現れる大男に若干たじろぐものの、ラン

サーがすぐさまそれを蹴り飛ばす

『どけ』

『ンンン!』

『ありがとうカイニス、そしてすまないが少しだけ下がっていてくれ  
道満

…あとは冬木市だね、こちらについては近いうちに新しい聖杯が顕  
現するかもしれない、ということだけで充分かな』

『あと伊吹山での聖杯戦争を生き抜いたマスターがまだ日本のどこか  
に生き残っている可能性もある、前例がある以上気にはとめておいて  
くれ』

『分かったわ、任せて』

『…』

『アメリカからも1人マスターを派遣してくれるらしいがそのマス  
ターは未熟らしいから上手くフォローしてあげてくれ』

『…?分かった』

||

「すー…すー…」

「…」

だからってこれは未熟とかそういう次元ではないと思うが…

「とりあえず例の大災害の現場に行ってみましょ、間違はなく聖杯戦  
争が原因でしようし無駄足になることはまずないから」

「ああ、僕も賛成だ。行こう」

背中少女マスターをなるべく揺らさないように背負い直し、街へ  
と向かう

もしかすると戦力としてでは無く逃がす意味を込めてこの未熟な

マスターを派遣させたのだろうか？ そうだとすれば納得が行くが。

「…やっぱり分からない」

しかしそれとは別に全く理解できないこともある

キリシユタリアは何故僕らを選んだ？ それも選抜の速度から考えて大勢の中から吟味したわけでもなく、まるで最初から決めていたかのように僕らを名指しで選んだみたいだ、この理由はいつたい…？

「ちよつとカドック？ 大丈夫？」

「大丈夫だペペ、さあ行こう」

心配するようにこちらを覗く彼にお礼も含めて言葉を返し、僕らは冬木の街へと向かうのだった

）

同時刻 冬木市 とあるヒールショップにて…

「…やれやれ」

選択、この世の事象はあらゆる選択が積み重なって『今』を形作っている

それは自分自身の選択だけに留まらず、全くの他人の選択が影響することも多々ある。

例えば…もし切嗣が俺に聖杯戦争参加の依頼を持って来なければ、今の俺はここにないだろう

まあそれはいい、今は――

「きゃーん♡ 良いじゃないですか♪」

「……………」

どうして…こうなる？



特異点で見た

1番喧しかったからよく記憶に残っている

やや年齢に差異が見られるがテンションが高いのは変わらないよ  
うだ

「うーん、間違いなくお買い得なんですけどね…『お1人様1日1点限り』と大きく明記されては悩みます…」

「……………」

明日また来ればいいだろ、と言いつつ口を慌てて抑える

人類の脅威たるビーストが靴屋に張り付けになるなんて冗談でも  
笑えない

というかそろそろ嫌な予感がする、ここはさっさと退散した方がい  
いだろう

中世の王族が使うような豪華で真つ赤な扉を音なく開け、俺はその  
場を早足に立ち去った

「そーですよーアンペルドさんがワタクシのお金で買ってくださいれば  
2つ買えるではありませんか♪

アンペルドさ——あれ…?」

↳

冬木大橋にて…

「やれやれ、付き合っていられない」

追跡されないように僅かな魔力も完全に遮断してコヤンスカヤを  
撒き、橋を歩く

「そういうえば1人になるのも久しぶりだな」

心地よい風に、ふと独り言を零す

まあ、だからなんだという話だが。

「ダメだな、これは」

コヤンスカヤに習ってあらゆることに興味と疑問を持つこと。そうすれば娯楽が見つかる彼女が言っていたがこっちはまだ難しいらしい

とりあえず切嗣の家に急ごう

詳しい場所は知らないが【衛宮】という家があることだけは知っている、交番なり探して聞けば良いだろう

「……このあたりはなんともなさそうだな」

ここに来る前、例の『大災害』の現場へ立ち寄ったが酷い有様だった、流石に火の手や死体は無かったものの僅かに残る屍臭と建物の残骸がそこで何があったのかを大まかに教えてくれた

ただ聖杯に魔力を貯めただけでああなるとは思えないが……

「失礼、そこのお方」

「ん」

呼び止められた瞬間、俺は思考をザイル・ニツカーからアンペルド・

ローラーに切り替え、振り返る

「私ですか？」

「ええ、見たところ外国人の方のようですがパスポートはお持ちですか？」

そう言ってきたのは身長190cmはある警察官の女性だった

身長だけでなくその体躯も大きく、肩幅等いつか見たクライムのバーサーカーより大きい

「ええ、どうぞ」

用意していたパスポート(もちろん偽造)を黒髪の女性に手渡し、ア



ンペルドとしての笑顔を作る

「アンペルド・ローラー、さん、冬木市にはどのような用事で来たのかしら——ゴホン！どのような用事で？」

「古い友人に会いに来たんです、アメリカでの仕事がひと段落つきまして

冬木市に住んでいることは知っていますが詳しい住所までは……」

「なるほど、ご友人に会いに……」

それにしても本当にでかい女だ、確かブリテン異聞帯にこんなのが居たような気がするが——……？この女……

「いや、まさかな」

「どうかされましたか？」

「いえ、これからどこを探そうかと思いましたが」

魔力反応も隠蔽の気配も無い、別人だろう

「もしよければ私が力になりましょう」

差し出がましいかもしれませんが見知らぬ土地を隻腕で移動するのは体力を使うでしょうし」

「ありがたい、見ての通り満身創痍です。傷を癒してから来ようとも思ったのですが次の仕事がありましてやむなく……」

コヤンスカヤを呼ばなくていいのは素直に助かったな。ここは言葉に甘えてもいいだろう

「ちなみになんという名前の方でしょうか？」

「衛宮です、衛宮切嗣。彼どうしても会って話をしたくて」

「……衛宮さん、ですね」

……？

名前を聞いた途端警官の表情が曇った

「あの、どうかされました？顔色が悪いですが」

「彼の自宅は知っています、案内しましょう」

結局目的地に着くまで警官は言葉を濁したままだったが…いざ着いてみるとその意味が分かった

——やれやれ

「遅かったか」

く

衛宮家付近の通りにて

「♪」

スキップしそうな足取りを抑え、両腕に一つずつ掛けたヒールシヨップの紙袋を持ってザイルさんの元へ向かう

「お姉さんご機嫌だねえ、そんなにその靴が気に入ったの？」もぐもぐ

みかんを食べながらこちらを覗き込む人間、藤村 大河

「それはもう！コーデするのが楽しみです♡」

たまたまシフト交代だった彼女を賄賂みかんで買収し、ワタクシの買い物を一緒にしてもらってこの通り！ホクホクなのです！

「ところで藤村大先生？この靴を作ったという店長さんがどんな人か教えてくださりは——」

「おおっとーもぐもぐそればっかりはもぐもぐ何度聞かれても答えられないわねーもぐもぐいくらみかんを積まれようとーもぐもぐ」

むう、流石にダメですか。このクオリティでこの値段、経営者としても見習えそうなどころがあるかも、と思ったのですがこれは無理そうですね

「まあ2足も手に入ったのでヨシとしましょう！」

義手の電波を頼りに歩き続ける

「道案内ありがとうございます」

「これも警官の義務ですので気にすることはありませんわ」

おっと、今のはザイルさんの声ですね！全くもう、意図的に念話全部シャットアウトしているせいで少し時間がかかってしまいました

「うんっ？アレッ？もしかしてお姉さん士郎ん家に用事？」

「え？あーまあそうなりますね、ちよつと知人を回収しに」

そうなんだー、と頷くと共に衛宮邸の門をくぐる、その瞬間

ぬっ

「おっと」

「むぎやっ」

大きな人影が出てくるのを察知して一瞬後ろへあちら、藤村さんが盛大にコケてしまいました

「あつたた…さすがダイナマイト190cm…」

「も、申し訳ありませんわ！お怪我は？」

「心配無用！命があればパワーは無限なのよ！」

うっわ、色々とデカイ婦人警察ですねえ…警官服ギチギチですし。犯罪者逆が増えませんかコレ？

「そちらの方も！どうも失礼しま、し——な…!？」

おや？警官がフリーズして——

「おっはーっ!!」

「「ぎやーっ!？」」

「ギニャーっ!？」

警官とワタクシの間に稲妻の如く空から降ってきた青年が満面の笑みでフザけ倒した挨拶をする

もちろんこっちはたまったものではなくワタクシも警官も藤村さんも全員驚いてしまった

浮かれてました！まさか気付かないとは！…というか藤村さんギニャーってなんですかギニャーって。

「…おかしいな、初対面の人にはこうすれば絶対楽しんでもらえらるって友達に聞いたんだけどあまり嬉しくなかった？」

仕事帰りと言わんばかりに手提げ鞆を片手にスーツを着こなすイギリス人の青年は『なんで？』とでも言いたげに目を丸くしてこつちと警官を交互に見る

「誰よそんなこと言ったアンポンタンは!?!いきなり空から降ってきておっはーなんて私心臓飛び出しちゃうかと思っただからね!!」

「驚きましたわ、レガリオさん」

「ごめんね、でも君の姿が見えたから来たというのもあるよ、話したいこともあるし少し一緒に歩かない？」

「え、ええ…いいですわね、行きましょう。では失礼いたします」

ブーブー怒る藤村さんを見惚れるほど華麗にスルーし、警官と青年はそのまま出て行ってしまった

「ンモー！レガリオさんったら真昼間からイチャついちゃって！」

「いや真昼間って時間でもないでしょう」もうすぐ午後4時ですよ？

揚げ足を取られ、さらにブーブーと喚く藤村さんを引きずって衛宮邸の門をくぐった

く

衛宮邸 居間にて…

「親父の、知り合いだったんですね」

「そうですね、私も彼にはよく助けられました。…亡くなっていたのはとても残念ですが」

切嗣の養子だという千子村正：ではなく衛宮 士郎

どうやら彼の中で切嗣は魔法が使えるスーパーヒーローという存在だったらしい、まあコイツから見れば大災害の中で命を救ってくれた恩人だからな

「じゃあこの前無理してアメリカまで行って会った人っていうのも――」

「恐らく私のことでしょう、いきなりの来訪に少々面くらいましたが…死期を悟ってたんでしようね」

それにしても既に切嗣が死んでいるというのは予想外だった、あともう少し持つと思っていたが…

わざわざ冬木市まで来て彼に会おうとしたのは近い未来冬木市で行われる聖杯戦争、それがあと何年で始まるのか大まかな予想を聞くためだった

できればこの地域にはあまり関与したくなかったが…仕方ない、自分達で調査するしかなさそうだ

「しーろおー！帰ったわよー！」

「アンペルドきーん、居ますー？」

玄関から聞こえる聞き慣れた声に立ち上がる  
やれやれ、もう嗅ぎつけてきたとは恐れ入る

「藤姉と…誰の声だ？」

「私の連れの声ですね。」

彼が居ない以上私がここにいる意味も無いですしお暇させてもら

います」

お茶の礼を言い、去ろうとするも呼び止められ、足を止める

「親父は最後…貴方に何を頼んだんですか？」

「切嗣さんが君に何も言わなかったのなら私から君にこれ以上言えることはありません」

「…」

コヤンスカヤなら面白がつて断片的に悪質な言い方で教えたりするだろうが俺にそんな趣味はない

とはいえ片腕が義手、もう片腕はそもそも無い負傷した男の言葉を子供が納得するとも思えないので少し付け加えることにした

「そうですね、では貴方があと10年大人になったら全てお話します」  
「…分かった！あ、いや分かりました！」

ありがとうございます！と言った声を受け、玄関でノーアのスマホ弄っているコヤンスカヤと合流、そのまま衛宮邸を後にした

10年後、お前たちがまだ生きていたら、な

）

大空洞にて…

「この辺りでいいかな？ねえ、さっきの彼女…知り合いかい？」

「知り合い、という訳ではありませんが確かにわたくしは彼女を知っています。名は確かコヤンスカヤ、妖精園ではよくムリアン様と密会していたようですわ」

50年振りにマスターとサーヴァントとして話を続ける2人。

青年の眼に映る彼女は既に警官の服装ではなく、騎士の甲冑に身を包んでおり、髪型やその色も本来あるべき姿へと戻っている

「衛宮士郎さんを見た時と同じ衝撃が走って動揺してしまいました」  
まさか町でいきなり出くわすとは…

「なるほど。動揺したのはそれが理由だったんだね、ともあれ悟られなくてよかった」

しかし…まいった、彼女の反応から察するに伊吹童子よりも厄介なサーヴァントらしい

「レガリオさん」

「うん、分かっている。でも僕らだけじゃ無理だ、とりあえず50年来の知人に連絡を取ってみよう」

あの時は殺し合いをしていた僕らだが50年も経ったんだ、克蘭ツェルはもちろんのこと彼ももう僕らと戦う気なんてないだろう  
「克蘭ツェルの元にはダヴィンチが居るし、ニュースで見える限りフーレンさんも全く衰えていなさそうだ、ひとまず協力を仰ぐつもりだ」

一通り話し終え、出口の方へ向き直る

本来このような会話、マスターとサーヴァントなら念話で済ませてしまえばいいのだがそれをわざわざ言葉に出したという事実が示すのは――

「さあ、そろそろ出ていらしてはいかがですか？心配せずとも、いきなり斬ったりなどしませんわ」

威圧ではなく、保護しようとする感情の籠った声、そのおかげか魔術で隠れていた2人組――いや、3人組はあっさり出てきた

「自己紹介が必要だよな、僕はレガリオ・ハルトマン。ここにいる彼女…バーゲストと50年前から契約しているマスターだ

情報の交換をしたい」

## 第67話 人類を滅ぼすには

NFFボーダー 格納庫にて…

…

身体は大丈夫なの？と聞いてみる

返ってきた答えは『いいえ』

それもそうだ、あそこまで無茶をして平気な方がおかしいのだろう

「ん…」

『君は大丈夫なのかい？』と弱々しい声の質問が来る

…正直、分からない。どうしたら2人を説得できるのか、どうしたらこれ以上誰も傷付かずに済むのか、必死に考えている。

「分かってるよ、そんなことは」

そんな方法はない、分かっているも『既に見つけた解決法』から目を逸らすために今も考えている

工場跡地でも迫られた選択肢、彼方とザイルを…殺すこと

あの子を肯定するのなら、私は2人以外の全てを敵に回す事になる  
それに恐怖は無い、あるのは罪悪感。

私が2人の味方をする理由が『愛』にあるのなら、オリオンとアル  
テミスちゃんは何も言わないだろう、でも――

「それは愛じゃない、と思う」

大切だから

失いたくないから



だから守りたい

それはきつと、唯一無二の家族を愛する《影月 遥》という人間が  
自分自身のためにやることだ

なら、私の中にある家族への愛は何が正しいのだろうか？

「…そろそろ行くよ、きつと彼方が寂しがってる」

見送られて格納庫を後にする

ズキツ

既に無い筈の右手首が痛む

……………痛いな

「あっ！お姉ちゃん見つけた！」

「彼方？」

変わらぬ笑顔で曲がり角から彼方が走ってくる

「ベリルありがとう！」

「俺はただ船内の見取り図を読んで教えただけなんだが…」

ま、気にすんな」んじや俺はまたカジノルームにでも行くからな

「……………」

ベリル・ガット、ザイルが連れてきた仲間

人当たりは良さそうだが人間を見るや否や問答無用で殺そうとする  
彼方が彼に懐いているというのが少し気になる

「お姉ちゃん？」

「…うん、ここにいますよ」

紫の尾をゆらゆらと揺らしながら《？》マークを浮かべる彼方を

そつと抱き締める

確信は無い、でも私が決断しないとまた良くない事が起きる…そんな予感がある

——いや、どんな時もそうだ。決断を先延ばしにして結局決められなかった結末なんて、最初に提示されたどの選択肢よりも悲惨なものになることは分かりきっているのに

「お姉ちゃん？」

「…」

ああ…そうだ。もう崩壊点は過ぎている

私が選ばなかった結果が今を形作っているのならソレを覆すことなどもう出来はしない、時計の針は元には戻らない

「…」

彼方の頭を撫でる、自問自答を隠すように。

「…：…えへへ、お姉ちゃん大好き…♪」

この悲惨な現実をこれ以上悪化させないために、私は何を選べばいい？

大事な家族のために、何を捨てればいいのかだろうか？

↳

N F F ボーダー 廊下にて…

「うぐ…まだ目眩がする…」

こめかみを抑えながらフラフラと廊下を歩く少女、茨木童子

眼下に広がる冬木市を見下ろしながら、召喚当初から変わることなく逃走の計画を練る

このままここにおいても使い潰されるだけだ、例の注射は得体が知れ

ん

「身体の具合はどうでござるか、茨木童子殿」

「…貴様はいちいち天井から出てこんと気が済まんのか？」

霊体化を悪用し、天井から巫女服に身を包んだアサシン、望月千代女がくるりと降りて来る

む…？そうか、この小娘は忍と言っていたな

「我ら鬼から娯楽を奪えぬように貴様のそれも同類というわけか」

「いや、それは違うと思うでござるが…」

そういえばアサシンと一対一で話すのはこれが初めてだったな、丁度いい

このような機会は滅多に無い、と一分の希望をかけて彼女に探りを入れてみることにした

「ところで貴様、ザイルのことをどう思っている？」

「お館様を？仕えるべき我が主でござる」

「そういう意味ではない、人類を滅ぼそうとしている主人を英霊としてどう見ているのだ」

頼む…！

もしこちら側であるなら逃走経路は格段に増える、戦闘能力では奴らに劣るかもしれないが逃げるだけならこいつほど頼もしい奴はいないだろう

そう、期待をした上での質問だったが…

「確かに主の行いを良いこと、とは思ってござらん

主と関わりのない人間にしてみればある日突然踏み潰されるのは理不尽極まりないでござろう」

「なら…」

「しかし」

希望が付きかけた茨木童子の言葉を彼女が遮る

「拙者は忍、影を行くくノ一。ただ主の望むままに駆けるだけでござる」

「確かに奴は貴様を召喚したがそれだけで世界を敵に回すのか!？」

「茨木童子殿、さつきから貴女の様子はおかしい、もしや逃げるために拙者を懐柔しようと考えているのでござらぬか?」

「ぐ…」

焦りすぎてしまった…!どうする?ここで黙らせるか?

「拙者と違い影月家や主殿のことについて何も知らない以上、気持ちに分からない訳ではござらんが…影月 彼方がいる以上薦めはしないでござる」

「…」

予想に反した凜とした態度に狼狽える

彼方が恐ろしいのなら貴様は何故平然としていられる…?

「茨木童子殿、拙者は影月家の人間がどのような人生を歩んできたか、全てではないが知っている。拙者は主を止めるつもりは無い

どこの誰が何人敵になろうとも、拙者は最後まで主殿に着いてゆく、それだけでござる」

「ま、待て!何処に行くつもりだ貴様!」

「心配せずとも報告などしないししたところで何も変わらんでござる 主殿には『危害を加えてこない限り無干渉で良い』と仰せつかって いるでござるからな」

霊体化し、どこかへ去ろうとするアサシンだったがその歩みもすぐ止まった

「離れろと言っている」

「ええ〜？」

何故？と困惑する間も無く背後の通路から声がする

ザイル…！…は？

曲がり角の向こうから現れたのはザイルではあったが…  
何をやっておるんだこいつら？

明らかに機嫌の悪いザイルの左腕に自信の腕を絡ませ、耳と尻尾と  
身体を不気味にくねくね動かしているコヤンスカヤ

茨木童子だけでなく望月千代女も呆れ顔だがあいにくとツツコミ  
を入れる人材がいなかった

「いやーん、ザイルさんの天才的な作戦にタマモ、メロメロなんですう  
〜」

「それは馬鹿にしているのクケにしているのかどっちなんだ？」

「もちろん感謝しておりますわ！ああ…！なんてやりがいのある仕事  
をくれたんでしょう！ワタクシ感極まって——愛玩あいつしていいですか  
？」

「いらん、時間の無駄——ん？バーサーカーとパイソか丁度いい、こ  
のアホを引き剥がせ」香水臭くて敵わん

「は、はあ…承知。」

「何をやったらこうなるのだ？」

「俺が聞きたい、暇なら手伝え」

結局終始状況を理解できないままテンションのおかしいコヤンス  
カヤを2人がかりで引き剥がした

…余程香水の匂いが嫌だったのかザイルには真っ直ぐに礼を言わ  
れ、伊吹山から回収したという美味しい酒を貰って部屋に戻った

ぐび…

「…美味しいな、おそらく人が飲むようには作られてはおるまい。それにしても——」

何故あんなったのかという疑問。本来この状況であれば下手に首を突っ込まず逃げることだけ考えるのが正解のハズなのだが…

「…」

鬼の直感と言うべきか、彼女はその要因について知っておかなければならない気がしたのだ

逃げる前に少し調べてみるとしよう、逃走幫助でなければ今度こそアサシンを味方にできるかもしれん

まだ少し残っている酒瓶を置き、彼女は部屋を出た

↳

数十分前 マイルーム（ザイルの部屋）にて…

突如ザイルの部屋に呼ばれた2人のコヤンスカヤ、着くや否やフォーリナーの方の彼女を部屋の前に立たせて門番にし、アサシンの彼女だけを部屋へと招いたのだ

「これからの方針、ですか？」

ただでさえ広く、人が少ない船の中でここまで嚴重に人払いをして何の話をするのかと身構えていたコヤンスカヤだったが何の変哲もない…普段と変わらない話に首と耳を傾げる

「そう、人間を根絶やしにするための行動をそろそろ取っていく」

「ふむ？」

それくらいならここまで嚴重にする必要はないと思いますが…

「考えていることは分かる、たしかに少々過剰すぎたかもしれないがまだお前以外の誰にも知られるわけにはいかないんでな」

特に姉さんにはな、とため息をつきながら板チョコレートを齧るザイル

「前提として言っておくが俺は1人1人この手で殺していくつもりは無い、できればそうしたいがそんなものは理想論だ

殺せる時に大勢殺すのがベストであり手段は選ばない」

「それはまあそうですねえ」

砂浜で砂粒を数えるのは苦行以外の何者でもないですし

「そしてそのための作戦を以前から考えていた、実行に移すためにはお前の力が必要だ

手間も時間もかかる仕事になる」

「ほう？」

これまでで一番面倒な仕事をやってもらおう、と言い数枚の資料を手渡ししてくる

「1枚目のこれは…ロシア軍部の情報ですね」かなり大雑把ですが

「なんとかかき集めた情報だが恐らく役に立たないから無視していい、結論から言えばお前の仕事はロシア軍部に潜り込んでとある情報を手に入れることだ」

うーん？軍部から抜き取れる情報なんて手間の割にたかが知れてると思えますが…

「手に入れるのは——」

………

…おっと？

「まずロシア相手に吹っかけようってことですか？」

「まさか、欲しいのはその2つだけだ。それさえ手に入ればこっちが干渉することはない」

妙な言い回しに若干『?』気味のコヤンスカヤだったがその真意に気付いた瞬間、彼女は耳と尻尾をピンと立たせて喜ぶのだった  
確かにそれならザイルだけでも世界と戦える。いや、戦いにすらならないかもしれない

「うふ、ふふっ」

なんてことを思いつくんでしよう、この方は！仕事も楽しく、がワタクシのモットーの1つではありますが…なかなかどうして！仕事の方からワタクシを楽しませてくれるなんて！

「おい、顔が普段にも増して不気味だが」

「失礼！それで作戦開始はいつ頃に？」

「とりあえず右腕が出来上がるまでは待機だ、長丁場になるだろうし義手が出来上がり次第休暇を出す、作戦開始はその後だ」

ふむ、なるほど

「伝えるべきことは伝えた、急に呼び出して悪かったな」戻っていいぞ  
部屋から出て行くこうとするザイル、その腕に自身の腕を絡ませながら一緒に部屋の外へ

「やれやれ、どうした」

「いーえ？これから長丁場になるんでしようし、今のうちに愛玩するザイルさんとの時間を大事にしておこうかと♡」

「…離れる、邪魔だ」

「いやです♡」

「おいフォーリナーの…居ない？」

「あ、もう必要なさそうだったんで義手製作に戻ってもらいました」  
「……………」



頭を抱える彼にべったりくっついて着いていく

うふふふ！

あち·ら·に·いた·時·に·勝·るとも劣らない大きな仕事、それは決して直接人類を滅ぼしうるものでは無かったが逆にそれが彼女の仕事に対するやりがい・を刺激した

楽しい仕事になりそうですね♪

## 第68話 最後の機会

NFFボーダー 甲板にて…

日付が変わって2時間程経った頃だろうか、思考の読めない表情で星空を見上げるザイルの元に1人、訪れる人間がいた

「姉さん？」

「…うん」

彼の姉はそれ以上言葉を返すことなく彼のそばへと歩み、腰を下ろす

「…！冷たっ」

が、すぐに立ち上がる

こんな高度を飛んでいけば季節に関係なく金属は冷たくなるのかとその雰囲気に関係のない思考を少しだけしてザイルの方へと向き直る

「……………」

彼は何も言わない、ただじつと空を見つめている

「何をしてるの?」

「今はやる事が無いからな、見える星を数えている」

「…それ面白い?」

「いや、今のところ微塵も面白くない」

新しい娯楽を見つけるためにあらゆることに挑戦している、と彼は言うが全く成功していないらしい

「…」

2人のコヤンスカヤはどちらも居ない、彼方とベリルも眠ってる  
確証なんて無い、けどきつと――

(これが止められる最後のチャンス、なんだろう)

「なら少し話をしようよ、久しぶりに2人だけで」

「俺は影月 彼方じゃないぞ」

「うん。でも私の弟だ、いいでしょ」

「弟、か………ありがとな」

嘲笑や侮蔑といった負の感情が一切含まれていない彼の微笑み

性別、性格、環境が変わって尚彼方の面影が残るその表情は彼も間違ひなく自分の家族であるという認識を後押しした

「ザイルは今何が好き？趣味とかある？」

「そうだな…カラオケや映画鑑賞、1番楽しんでいるのはギャンブルだな」

へーギャンブル……って！

「だめだよ!!そんな危ない遊び!」

「ギャンブル…悪ってなあ…やれやれ、ここは日本じゃない

違法だからってやめるつもりも無いがな

だいたい引き際や止め時を見誤らず適度に楽しめば本来ギャンブルで破滅するなんてことはありえないんだ、姉さんが思っているような危険なものじゃない」

「そ、そうなの？」

なら……良いけど

「姉さんこそどうなんだ、聖杯戦争が始まる前まで危ないことはしてなかったのか？」

「え?!…してないよー」

本当か？と彼は疑惑の眼差しを向けながらリモコンのような物を取り出してボタンを押す

2つの椅子と1つのテーブル、さながらお茶会のようなセットも合わさった家具が甲板から出てくる

「立って話をするのもな、座ってくれ。…で、本当か？」

「本当だよー」

私はそんなことしてな――

「ノーアから地下秘密基地に忍び込んで召喚されたグランドアーチャーを強奪していった、と聞いているが」

「あ、あれは…その…」というかノーアって…？

………えーと

「ギャンブルなんかより危険な行動だな？他にもあるぞ？そのグランドアーチャーにサーヴァントとしてでなく恋人のようにべったりしていたとノーアから聞いている」

「え」

え誰!?なんでそんなことまで知ってるの!?

「姉さんがクズ男に引っかけかかってやり捨てられないか、気が気じゃなかった」

「オリオンはクズじゃないよ!」

「あー…すまない姉さん、嘘だ」

「…」

え

「推測して半ばヤマをかけた、忍び込む云々は知っていたがまさかサーヴァントに本気で恋するなんてなあ…」

まあ契約したサーヴァントとカラオケに行ってた俺が言えるようなことじゃないんだが」

まあ酒飲んだ後の惨状を見ればこつちも分かったもんだが、と彼は

板チョコを取り出す

「食べるか？」

「え、あ…じゃあ、うん…」

3／5程に折られた板チョコを受け取って食べる

…怒るタイミングをチョコのせいで完全に逃しちゃった

「アルゴスタワーと大通りのことについては本当に悪かったと思っ  
ている

2度も姉さんを苦しめるようなマネをした」

「あの時の…私のはいいよ」

「私のことは、か」

深いため息を1つ吐き、少しずつ食べていた板チョコを一気に頬張  
るザイル

「大通りで彼方も言っていたが…もうこれ以上『自分以外の誰か』の役  
に立とうとしなくていい」

もちろんこれには影月 彼方や俺のことも含まれてるぞ、と念押し  
してさらに言葉が続く

「いいじゃないか、自分のことが1番可愛いのはみんな同じだ

誰も責めやしないし、責められない

…姉さんに力を貸した2人のアーチャーならなんて言う？」

「でもっ…！虐殺なんて間違ってるよ!!これ、これを…！止めないで  
良い理由があつてたまるか!!」

「間違っている、つていうのは？」

「人を殺すことに決まってるでしょ!?!なんで…！理不尽な憎しみをぶ  
つけられる辛さを貴方は誰よりも知ってる筈なのに！」

「…姉さん、そろそろその考えをやめないか？」

「え——」

今までと打って変わって突き刺さる冷たい目、それは憐れむような呆れたような、諦めかけたもの。

「正しいこと正しくないこと、善い行いと悪い行い、そんなどこの誰が作ったかも分からない物差しを盾にしないでくれ

もう終わったんだ。絵本みたいな善悪で物事を決めるなんて段階は、とっくに終わっているんだ」

「ザ、イル」

「ああ、俺のやることは『悪』だろうさ、だからなんだ？悪いことだから止めましょうとでも言うのか？ふざけるな」

姉さんじゃなかったら有無を言わず殺している、とさつきまでホットココアだった冷たいココアを一息で飲み干す

「……………そうだな、分かった。決別は必要だ、構えてくれ姉さん」

「なにするつもり？」

いや、聞かなくても分かる

立ち上がる彼の手には拳銃が握られている——

「これが最初で最後だ、俺を：ザイル・ニツカーを止めろ、虐殺が許せないのならないならな

コヤンスカヤ、どうせ見てるんだろう？誰もここに入れるな」

『かしこまりましたー！』

「ま、待って——きやつ!？」

片手で投げ飛ばされて甲板を転がる

全然痛くない、手加減したの？

「手加減は最初の1発だけだ、俺は影月 遙を敵として打ち倒す覚悟を持って人類を根絶やしにする。だから姉さんも覚悟を見せてくれ！俺を止めると言うならば！」

ダンッ

「ぐー」

手加減しないと喋りつつも急所を外して撃たれた弾丸を黄金の弓を盾に弾く

「アルテミススの弓か、そういえばコヤンスカヤと戦った時は片手で弓を射っていたらしいがどうやったんだ？」

「……………」

「まあ知る必要も無いが」

また、分岐点。

私とザイル以外誰もいない甲板で響く発砲音と半長靴で甲板を駆ける高い音

その音がやけにゆっくりと聞こえる

選択の時だ、何度も何度もやってきて、その度に目を逸らしていた  
選択の時がまた――

「戦うのか戦わないのか、もしくは逃げるのか、何か取れる行動はある  
だろうか？ 選ぶんだ」

「……………」

ここで戦う？ ザイルは丸腰に近いし隻腕だ、もちろん隻腕なのは私も同じだけどアルテミスちゃんの力がある以上は有利だろう、問題なのは今の私にそれだけの覚悟が――

「戦う覚悟ができてない――いやできないのなら逃げろ『戦えない』と言ってくれてもいい、それでこの場の戦いは終わるんだ」

「…戦いたくない」

弓を構える、だが構えるだけ。矢も魔力も、何も出てこない

「っ…姉さん、今は考えを聞いている訳じゃ無い、姉さんは俺や彼方と戦えるのか戦えないのか、どっちなのか聞いてるんだ」

「なんで…家族同士でまでこんなことしなきゃダメなの？ザイル、もう止めて…うぐっ！」

桃色の義手が私の首に掴みかかり、そのまま冷たい甲板へと叩きつける

「なんなんだ…なんなんだ？逃げもしない、戦うこともしない、どちらにつきくこともなくただ『止めて』…いくらなんでも都合が良すぎるだろう！」

「ここまで来て…まだ迷うのか!？」

言われる前に既にその結論に達していた私は反論できなかった

都合が良いことは分かっているし私の中でまだ不鮮明になっているところもある

でもそんなの言い訳にならないことくらい目の前のザイルを見たら分かる

「姉さんはどうしたいんだ！そんなに見ず知らずの他人が大切ならどうしてアメリカで俺が連れ出そうとしたのを断らなかつた！」

「それは…」

「今こうして迷うくらいならどうして！迎えに来てくれなかつたんだ！」

「——あ」

『必ず戻ってくるから』

「俺は——おい後にしろコヤンスカヤ…なに？っ!!!」

胸ぐらを掴んでいた手を離し、かなり無茶な勢いで体を逸らすザイ



ル

一瞬早く動いたおかげで飛んできた草薙の剣がザイルを両断することは無かったが脇腹から僅かに出血しているのが見える

「やれやれ、我ながら寝付きの悪いクソガキだ」

「お兄ちゃん？ いったいなんのつもりなの？」

紫の尾をしならせ不機嫌顔でザイルを睨みつける彼方、遅れて草薙の剣が彼方の手に戻ってくる

「…ただの姉弟喧嘩だ、気にするな。俺ももう寝る」おいコヤンスカヤ「…？あ。」

ぺたん、と糸の切れた操り人形のように倒れ込む彼方、意識を失ったらしく背後には注射器を持ったコヤンスカヤの姿が。

「ふむ、耐性があるのは戦闘時だけだったのは幸いですね

彼方さんがこんなに早く来るとは…

ザイルさん怪我はありませんか？」

「無い、彼方の件は気にするな。下手に止めれば船が墜ちることもありえただろうしな」

むしろ最初から覗きに来ていたことの謝罪は無いのか、と半ば呆れたように彼が言う

「はてなんのこことやら♡それより…当たり前ですがここは冷えます、そろそろお休みになった方がよろしいかと、残業は無いに越したことはありませんわ」

「分かっている」

「ザ——」

彼方を担ぎ上げ甲板から去ろうとする彼を引き止めようとして…言葉が出なくなる

引き止めたとしてなんて言えば良い？あの背中になんて声をかけ

ればいい…？

「クライムのところに行くんだ姉さん、十中八九生きているだろうしな

連れてきたのは俺達だし意思が聞ければ今すぐにでも送らせる

戦意が無いことを伝えれば他の一般人と同じように守ってくれら  
だろう、いくら奴でも助けを求める一般人を尋問することは絶対にな  
い」

「……………」

「やれやれ…コヤンスカヤ、姉さんを頼む」俺はもう寝る

「かしこまりました！さ、遥さんこちらに」

答えることもなく言われるがままコヤンスカヤに連れられて艦内  
に戻る

「顔色が優れませんがお身体は大丈夫ですか？」

「…なんともないよ」

「———そうですか、何かあれば部屋の電話機を。1発で管制室に通知  
が行きますので」

何度見てもアルゴスタワーで殺し合いをしたとは思えない柔らかな  
態度に押されて部屋へ

「……………」

せめて、せめてどちらに付くのか決めなければならぬ

選ばなければならぬという分かりきった事実が頭の中で何度も  
何度も反復する

『姉さんはどうしたいんだ！』

「……………私は」

「ずいぶん悩んでるみたいだな、ハル」

へ!?

NFFボーダー　ザイルの部屋にて…

「どうぞ」

「これが新しい右腕か…良い出来だな」

桃色の義手を装着し、軽く肩を回すザイル

どうやら何も問題は無さそうですね

「もうすぐ、と言っていた割には時間がかかっていたが…機神の部品か？」

「ええ、ご想像の通りです。」

キリシユタリアさんから受け取ったゼウスの残骸を加工し、義手のパーツとして組み込みました。特に付与技能があるわけではありませんがこれまでの義手と比較して耐久性は大幅に向上しています」

やろうと思えば出来ましたはその手の物は流石に専門外ですし

専門外の小細工などするよりそのリソースで義手本体の耐久性を底上げした方が良い物が出来上がるだろう、コヤンスカヤのその考えの元作られた義手はザイルの期待に沿っていたようだ

「充分だ、明日の午前中でこの義手に身体を慣らしたら休暇を出す…つもりだが他に何かやるべき事がある、って顔をしてるな」

おお、鋭いことで。

「ええ、戦力増強目的で立ち寄りた場所が1つ」  
「どこだ」

「ギリシヤ、アルテミス神殿です」

## 第69話 自分勝手な

NFFボーダー 彼方の部屋にて…

「……………」

横で寝ている彼方を起こさないよう、時間をかけてそつと巻きついている尻尾を外して部屋の外へ出る

『愛とは何か?…さあ?』

廊下の窓の外には雲一つ無い夜空とどこか安心する神殿——アルテミス神殿が見えており、真夜中にも関わらず満月のおかげで遠くまで見通す事ができた

さっきの僅かな振動はやっぱり着陸した時のものらしく、その場所がギリシヤだというのも分かった

『いやふざけてるわけじゃないぞ、実際のところ自分以外の愛なんて俺には分からねえ』

恋人でなく家族としての愛なら尚更な』

神殿に歩いていくザイルとコヤンスカヤの背中を見ながら非常口らしき扉から外に出る

『結局のところ愛に間違った形なんて無いんだ』

例えば愛しているから離れようとする奴とか愛しているから殺そうとする奴とか…』

月明かりに照らされ少女<sup>女性</sup>は神殿へと歩いて行く  
その目に覚悟を宿して

『いや実際にそんな奴がいるかどうかは知らねーけどな』

ようするに愛に理屈なんて面倒なものはあんまり通用しねえんだ  
…で、ハルはどうしたいんだ?』

一歩また一歩と神殿と彼らに近付く度、少しだけそれらに背を向け  
たい衝動に駆られる

いや、実際にこれまでの彼女なら背を向けていた

『おーそうそうー!そういう自己中心的なのも愛でいいんじゃないか?  
良い良い、変なところでブレーキ掛けて後から後悔なんてするくら  
いなら多少テキトーになっていいんだぜ』

でももう先延ばしにはしない

『んーどうだろうな、正直ギリシヤだとそればかりってわけじゃ無  
いが珍しい話でも無かったしな…』

しかしまあ周囲からどれだけ狂って見えていようとハルが心の底  
から想う愛の形がそれなら俺は応援するぞ』

ぬいぐるみの狩人と格納庫に居た意外な助っ人に支えられ、前へと  
進む

「…オリオン」

「おう」

ありがとう

く

アルテミス神殿にて…

「神殿というからにはどんな建物かと思っていたが柱と屋根しか無い  
のか?」

「いや神殿ってそういうものですよ、人が住むように出来てるわけで

もないですし」とりあえず入りましょう

雲一つ無い夜空に浮かぶ満月が周囲を照らす

本来であれば星もよく見えるのだろうが月があまりに明るいせいか殆ど見えなくなっている

「別に急いでいるわけじゃ無いが10日以上も待つ必要があったのか？」

時期が悪い、と現地に到着したにもかかわらず月が満ちるまで地上に降りずボーダーで満月の日を待っていたわけだが

「言わんとしてることは分かります、確かに触媒としてコレがある以上はほぼ確定ですが…取れる手段を取らず【失敗しました】では笑えませんし？」

なにより仕事で手を抜くなんてワタクシのプライドが許しません」「それもそうか」

ホルマリン漬けにされた影月 遥の右手、それをカプセル越しに指でなぞりながら彼女は微笑む

「早速召喚しますが…予定通りマスター権限は保留しボーダーの魔力炉と接続が完了次第スリープモードでよろしかったですか？」

「構わない、なんにせよ仕掛けるのは当分先だからな」

サーヴァントを兵器として使用するため召喚時に狂化を付与させ、来るべき時に雑に暴れてもらう…これはそのための召喚である

「かしこまりました！」

「召喚にはどれくらい掛か「終わりました」

「…早いな」

「つい最近まで彼と契約していたマスターの手首ですからねえ、令呪が付いていた手ともなれば尚更」

ワシントンDCの大通りで感じたものと似た威圧感を見に纏い、感情の読めない表情でアーチャーのサーヴァントが顕現する

狂化の影響か意思疎通はできそうに無く、グラントクラス特有の高い霊基も持ち合わせていないようだが…並のサーヴァント以上の力があるのは間違いない

「はい！とゆうわけでバーサーク・オリオンの召喚に成功致しました♡」

「…狂化されているという割には大人しいな」

「そこは少し手を加えさせていただきました、普通に狂化させるよりやや強化度合は落ちますがこれくらいが丁度いいかと

それよりもザイルさんにお客様が見えてますよ」

…？

そう言つてキャビンアテンダントのように指し示す方向には――

「…姉さんか、彼方と眠っていると思つてたが」

「うん、でも目が覚めたから」

「…」

気配に迷いが無い、決断したのか？

「…悪いが、席を外してくれるかコヤンスカヤ」

「かしこまりました」

何かあればお呼びください、そう言つて単独顕現を発動させてコヤンスカヤは艦へ

「…どうするか、決まったのか？」

「うん」

短く短節な返事、何故だかどこか諦めたようにも聞こえた声に違和感を感じたものの真っ直ぐこっちの目を見据える遙に対し腿のホル

スターに手を伸ばす

艦ならともかく、これだけ離れていれば爆発でも起こさない限り彼方が出てくることはない

「私は、ザイルと彼方を止める、例え——殺してでも」

いつだかに見た黄金の弓を手に、力づくで押し出しされたようなその言葉

「…そうか」

オートマチックマグナムを抜き取り彼女に向ける

本音を言えば少しだけ期待していた、戦力云々という意味じゃない。できれば戦いたくないしできれば背中を押してほしかった

自分が間違ったことをしているとは思わないが止めようとする気持ちかわからないわけじゃない、だがそれでも

激鉄を引く音がやけに大きく聞こえる

姉さんが何も言わずに味方になってくれることに期待していた自分がいた、だからだろうか？

甲板で選択を迫ったのも今思えば焦っていたのかもな

が  
さて、問題は姉——いや遥が何故こんなにも早く出向いてきたかだ

10日前の様子を考えれば今回の行動は思い切りが良すぎる、誰かが背中を押したと考えるのが妥当だ。

コヤンスカヤは除外、彼方の言葉じゃ動かないだろうし違う、パライソは行けそうだがもし何かあれば俺に報告が来るだろうからこれも無いな

「思ったより決断が早かったな」

「私1人じゃなかったから」

茨木童子は…鬼に人の悩みは理解できないだろう、残るはベリルだ



が遙は目に見えるほど奴を警戒していたからこれも無いな、俺が把握している人物じゃないとすると――

「…やれやれ」

熊化オリオンだろうか？だがごちやごちや考えたところで事實は変わらない

決断は済ませた、辛くはあるが迷いは無い。今度は確実に遙を

この手で殺す

問題発生だコヤンスカヤ、遙が敵対した

(らしいですね、こちらもすぐ合流しますが…)

手は必要ですか？)

――いや

「俺がやる」

手元を狙って撃発しながら柱の陰へ

「うわー…っのー！」

銃のように乱れ撃たれる弓矢

もちろん1発でも当たればただじゃ済まないだろう

「随分器用なことをやるな」

右腕は隻腕のままだが何故か片手で弓を引いている

自分で言っていて意味不明だが実際に遙は矢の雨を放っている、しかも神殿には傷1つ付いていない

あれは女神アルテミスの方だとコヤンスカヤは言っていたが…どうりで1発1発が重いわけだ

アルテミス神殿…月女神の力を使うのにこれ以上良い立地は無いだろう

ま、これも遙は決断した理由の1つだろう。できるわけがないと思っていたが

柱から柱へ移動しつつマグナムを撃つ

左肩と耳に命中、そして今左足にも撃ち込んだ。神殿の中だが月明かりのおかげがよく見える

「最後に、理由を聞いておきたい」

攻撃が緩まった隙に更に撃ち込みそのまま予備動作を消して接近、彼女の首を掴んで床へと叩きつける

「…どうして人間側に付いたんだ？」

銃口を突き付けつつ周囲を警戒する

遙は彼方とは違うただの人間だ、いくら神殿だからといって女神の力を使いこなすなんて無理な話だろう

必ず協力者が出てくる筈だ、それを――

(ワタクシが排除する、と)

…聞いていたのか

(ええまあ、いつでも飛び出せますよ)

分かった

「――もう遅すぎたんだよ」

「うん？」

絞り出された小さな声、さつきも聞いた諦めたような声。

「家族を助けるには、私は選ぶのが遅すぎた」

「だから消去法で人間側に付くと？」

「全世界が敵になる、世界中から貴方と彼方が憎まれて、顔を知らない大勢の人間からも死を望まれる

そんなこと、私は嫌だよ」

「嫌だろうと概ね今遥が言った通りになりそうだがな」

引き金に指をかける

「そう、それが嫌なだけだった、突き詰めたら本当は知らない誰かなんてどうでも良かった」

ガン

「…!」

マグナムが弾かれた？だが魔術行使の気配はない

…魔力か？魔力だけで弾丸を？

「私は2人が人を傷付け、傷付けられるのを見たくない

人を憎んでほしくないし憎まれてほしくない」

「姉さん…?」

周囲の様子がおかしい——っ!?

「——さっき俺が撃った傷はどうした？」

傷が無い、それどころか服も直っている。初めからそんな傷なかったかのよう

だが遥は俺の質問に答えることはなく、ただ静かに涙を流しながら訴えるように俺を見ている

「だから、だから私が、2人を力づくで止めるの

2人が人間へ向ける殺意を私は否定できない、それとは別に私が！影月 遥が2人のそんな姿を見たくないから、最期を悲惨なものにしたいから、私が私のために止める！」

「…ッチ」

爆発するような魔力の衝撃波より一瞬早く飛び退き、対神秘マグナ

ムを抜く

まさか遙にこれを使うことになるとはな

額と心臓に1発ずつ撃ち込み、今度こそ終わりを確信していた

「な…!？」

だが

「——馬鹿な」

否幻想弾が、すり抜けた？

「黙って2人の味方しようとおもったんだけどダメだった

ごめんね？自分勝手なお姉ちゃんで」

「」

感じない

目の前の、影月 遙という人の形をしたものから、人間らしさをま  
るで感じない

目の色はいつもと変わらない、焦点もすっかり合っている。だがそ  
の瞳からはどこか狂気の色が滲み出ていて——

「アルテミスちゃんから預かった力は、私が愛した家族のために使う  
！」

何を差し出したとしてもこれ以上、2人に殺戮なんてさせない！」

サーヴァントの気配…!」

「…!戦闘だ、援護しろコヤンスカヤ!」パライソも茨木童子と一緒に  
来い!

「了解ですつ!」

(承知!)

まるで体験劇で感じたような凄まじい魔力濃度が神殿全体を包む

「霊脈への接続も無しになんという力技を…彼女あれで人間ですか

？」

「今は違うらしいな、構えろ」

2騎のサーヴァントが完全に召喚された

バーサーカーとアーチャー、どちらも体験劇での見覚えがあるサーヴァントだ

女神アルテミスの霊基で呼んだというならこいつらなのも納得だが…やれやれ、やってくれる

「ここは…アルテミス様の神殿か？」

しかし私の知る神殿とはいささか違うようだが…」

「聖杯によるものではなく個人に呼ばれたのは初めてだ

汝が私のマス——!!？」

この気配は…!まさか汝、いや貴女様は…!？」

「悪いけど説明してる時間は無いの!今は一緒に戦って!」

遥の気配を察知し始め、目に見えて狼狽えだす2騎のサーヴァントだったが遥はそれをあっさり一蹴し、こちらに向き直る

「もう説得はしない!ザイルも彼方もやりたいようにやればいい!

私は私のワガママでそれを打ち砕くから!行くよ!」

不自然に降り注ぐ月光の中、戦いが始まった

## 第70話 守護者

NFFボーダー 魔力炉管理室にて

「なんとか掠めとれる魔力はこれくらいか、あとはこの情報をダヴィンチに送って、と」

肉体に内蔵されていた通信機（もちろん完全秘匿可）を使って情報をダヴィンチへ

今現在この艦の持ち主：管理者の方のコヤンスカヤは居ない、今神殿に満ちているであろう魔力濃度を考えればこっちの異変を察知するなんてできやしないだろう

幸いフォーリナーにもバレてはいない

「なんだかなあ」

思えばマスター：あのお嬢ちゃんに召喚された時はこんなことになるなんて想像してなかった

《私はルマス・プライマリ！貴方のマスターよ！

分かってはいるけど一応聞いわね、あなたの真名は？》

「そっちの様子は？オリオン」

『超簡単に言えばここだけ神代だ、魔力濃度が尋常じゃないな  
ビースト達に気付いた様子はねえ、やるなら今しかないぞ』

「りょーかい、ダヴィンチ？魔力の方はどうだい？」

『……保って30秒だよ』

「充分だ、彼らにも伝えてくれ」

既に満身創痍の身体に鞭打って神殿へ

『…なあ』

ふと心配そうなオリオンの声が聞こえてくる

「ん？大丈夫大丈夫！生前の俺があキレウスの相手は何日トロイアを保たせたと思ってる？30秒なんて軽い軽い！」

んじゃ、やりますか

）

同時刻 アルテミス神殿周辺にて…

「——思えばお互い喧嘩なんてしたことなんて無かったな」

これを喧嘩と言うには少しおかしいがどちらにせよ本気で争うのが初めてなのは間違いない

アルゴスタワーの時のような茶番とは違う、争う2人が明確に殺意を持って武器を手にしている

降り注ぐ女神の矢を避けながら遙の右手側へひたすら回り込む

元から俺が持っている兵器は既に通用しなくなっており、代わりに振られているのは戦場に似合わない桃色のナイフ

もちろんNFFサービスのステッカー付き

「そう、かも、ね…！」

遙は遙でなんとか距離を取ろうとしているがこっちが連続で予備動作を消しながら接近しているためまともに標準を合わせることも出来ずに防戦に入ったまま

とはいえ弓矢1発1発が即死級の威力だ。距離を取られたらこっちが危険に晒される、なんとかここで倒し切りたいが…

アタランテはコヤンスカヤ、ペンテシレイアは茨木童子とパライソが抑えている

土地補正があるとはいえグランドクラスでもないアーチャーがコヤンスカヤを突破するのはほぼ無理だろう、能力面で2人を凌駕しているバーサーカーも絡め手を多用する彼女らに全力を出しきれてい

ない

「――！」

ひたすら距離を詰め続け、視界の外から打撃と斬撃を浴びせる  
遙も遙で器用に防いでいるがそれも追いつかなくなってきている  
3つの内の何処かが崩れた瞬間、フリーになった奴が速やかに他2  
つの戦場に介入して切り崩す、その段階まであと少し――やれやれ

また新しいサーヴァント反応だと…？

「今度は何をした？」

「…私は何もしてないよ」

――なに？

困惑する2人を押し退け更に召喚されるサーヴァント

しかも2騎：仕方ない、彼方の見張りはもういい

フォーリナーの方のコヤンスカヤも来い

(かしこまりました)

やれやれ、サーヴァントは本来こんな安売りセールスの如く出てくる  
ようなものじゃないハズだが

反応から見るにクラスはライダーとアーチャー、片方は神性を感じ  
るがそこまで強い反応は無い

ただの光だったそれは10メートル程先で人の形を取り実体化し  
た

奴らは確か――

「はい！サーヴァントアーチャー、パリスです！…？マスターはどこ  
にいるんでしょう？」

「…コレ、多分悠長に話してる場合じゃなさそうっすよ」



アーチャーの方はヘクトールの弟でありアキレウスを討った英雄、パリス

ライダーはマンドリカルド、ヘクトールの鎧と槍（剣？）を探す旅をしていた奴だったか

誰がどうやって等は潰した後で考える。問答は無用だ、轢き潰せ（承りました♡）

——と言ったもののコレが誰かの計算通りの召喚だとすればここで轢き潰せるとは思えない

寸分たりとも遥から目を背けることなく周囲への警戒を一層強める

ここだ、妨害してくるとすれば間違いなく今。

さあ、どう出る協力者？

召喚されたばかりのライダーとアーチャーに単独顕現で現れたコヤンスカヤ（降）の巨大な尾が迫る  
着弾まであと1秒未満——

『不<sup>ドゥ</sup>毀<sup>リン</sup>の極<sup>ダ</sup>槍<sup>ナ</sup>』！

「うわっぶ!?!」

「っ…」

強烈な衝撃破と共に尾が弾かれ、俺と遥も吹き飛ばされる

本当に、次から次へとまあ…

（ええ…死んでなかったんですか？）

「よお、また会ったな。といってもアンタとこの姿で会うのは初めてなワケだが」

身長に見合わない槍を打ち立てヘクトール：によく似た少年が言い放つ

「随分と愉快的な姿だなランサー、ヘクトール。」

：それにしてもアポロン神が少年趣味なのは知っていたが兄の方にまで手を出すとは思わなかったぞ」

「ん、ヘクトール：…え、っ!?ヘクトール!?あの!」

「兄さん!?あ、確かに面影が：…というか今の話本当ですかアポロン様!」

「いや、流石に今回の濡れ衣だよ、うん。でもこれはこれで：うーん」

アーチャーの頭の上でボフボフ動くぬいぐるみと少し横でライダーが何か喚いている

：あの神、正体不明の男の冗談を間に受けるくらいには信用が無いらしいな

「召喚早々悪いがふざけてる場合じゃない、分かるよなパリス?」

「…!はいっ!」

パンツ

と、彼の返事に呼応するように聞き慣れない音が響く

音の方角には明らかに自然現象ではない黄色の煙が立ち上っている

信号弾?古いんだか現代的なんだか…

発煙地点までだいたいどれくらいだ?

(3km弱ですね、これくらいなら信号弾要らなかったのでは…)

「今だ!」

直後さらに出現する2騎のサーヴァント反応

出現位置は真横？

いい加減にしろと言いたくなるのを抑えコヤンスカヤへ解析の指示を出す

とはいえこの2つの反応は覚えがある

神霊カイニスと…

「え。土方歳三さん？何故？」

バーサーカーを認識すると同時に自分でも不快なほど口元が吊り上がったのが分かった

バーサーカーが健在ということは――

「ザイルツ!!」

鈍器を叩きつけるように背後から振り下ろされるコンバットナイフ、ではなく日本刀をナイフでガードする

「くっ：はっはっは！やっぱり生きてたかクライム！」

「ツツ死ねえっ!!」

技のキレイなど微塵も無い力任せの薙ぎ払いをいなしつつ刀の上から思い切り前蹴りを叩き込む

カイニスと土方歳三が左右の戦場に合流した途端離れていく…目的は遥の回収か

事実アタラシテと思わしき魔力反応が遥を回収している

だがそれが目的にしたってこの地でこれだけギリシャサーヴァントがいれば遥1人逃がすくらい訳無いだろう、マスターが出てくる意味は薄い

「大方周囲の静止を振り切ってここに来たんじゃないのか？」

そろそろ学習したらどうだ」

「御託はもういいっ！」

ヘクトール以外の連中全ての反応が信号弾の方向に移動し始めた。別に遥を連れていくのは構わないがあの数 of サーフアントをみすみす逃すのは無い。

「時間切れだクライム！行くぞ！」

「くっ…!?くっぞ…!!」

割って入った土方歳三にあつという間に肩に担がれ、同じように信号弾の方へと走っていく

やれやれ、何しに来たんだ？

「すみませんアタランテさんを逃しました！」まさか令呪込みのカイニスさんが突っ込んでくるとは…

「構わない、戦闘はまだ継続できるか？」

「ええもちろん、追撃行きます？」

「ああ、だがフォーリナーの方は彼方のお守りに戻れ

まだ寝ぼけているようだがあと10秒もあれば戦艦を破壊して出てくるぞ」

(かしこまりました)

パライソ、茨木、お前たちもこっちに戻れ

「…?」

応答が無い…やれやれ

「追撃の範囲は？」

「範囲を絞る必要は無い。敵対者への無制限攻撃を許可する」遥ごと吹き飛ばせ

「了解です??じゃそういうことで——」おととと！そうは行きませんよつと」

かつてランサーだった男がコヤンスカヤの用意した砲門を叩き壊し、立ち塞がる

「どけ」

「それ言われて退く人いないでしょ」

…やれやれ

「捨て駒同然のお前と遊んでる時間は無い、さっさと叩き殺して——  
追うぞ」

く

合流地点にて…

「来た！来ました！」

雑木林の中、周囲とは明らかに合わない1台の装甲車、その搭乗口から上半身を乗り出した女性が叫ぶ

「光学迷彩及び魔力遮断展開開始！全員収容を確認次第離脱する！」

『いつでも行けるよ！乗ってくれ！』

急増で取り付けられたメガホンからダヴィンチの声が聞こえてくる

「ステルス張る前に追いつかれたら終わりだ！急げ！」

「ビーストは!?!」

「戦闘の気配はありますが動いていません！」

「…アイツ、神霊どころかもうサーヴァントでも無いくせに本当に止めやがった、やるじゃねえか」

「カイニス！」

「分かってる」

周囲の安全及び搭乗者の確認を行い自身も装甲車の中へ

「人間2名、サーヴァント7騎搭乗完了！いぞキリシユタリア！」

「よし、離脱する！」

）

「  
彼らが離脱し始めた、確実に逃げ切れるまであとどのくらいだろうか  
か

即死へと繋がりそうな攻撃だけを全力で回避し、ひたすら足元を  
狙って槍を振るう

既に倒すことは諦めた、そもそもサーヴァントの時ですら怪しいの  
に今の俺にコイツらを倒すだけの力は無い

だが足止めするとなれば話は別だ、追撃を考えているザイルにとつ  
て脚へのダメージは決して無視できるものじゃない

これが今一番、彼の嫌がる手だ

「…しつこいな」

「あいにくと、それが取り柄でね！」

バシユツ

後ろからミサイル…！

『トロイアの守護者 A』

「ぐっ…う…！」

スキルと根性で爆発を堪え、直後突っ込んでくるナイフの一撃を逸  
らす

流石に痛いが一発で消し飛ばなかったただけ充分だと捉えよう

戦い始めてからどれくらい経っただろうか？…15秒？今日は時

間の進み具合が遅いなア！

NFFボードアの魔力炉へのアクセス、戦闘が始まり本格的に魔力供給され始めてからボードアが不正アクセスに気付き、供給を切断するまでの時間

それが30秒、本来なら即弾かれるそうだが流石ダヴィンチと言ったところか

この全力が切れるまであと15秒、その15秒だけは絶対にコイツらを行かせはしない

例えばサーヴァントで無くなろうと、俺が《ヘクトール》であることに変わりはない。…ホムンクルスだからどうか細かいことは置いといてな

バツン

——ツ

ただの立ちくらみで片付けるには重すぎる重圧が身体全てにのしかかる

供給が切れた…アクセスに気付かれたか！

待っていたとばかりに首筋を裂こうと振り抜かれたナイフを槍で防御するが畳み掛けるように真横から撃ち込まれた弾丸により左腕を失った

腕が、腐り落ちた…！毒、いやこれは呪いの類——  
尋常じゃなく強い呪いの力、腕だけでなく身体全体が崩れそうになる

——それでも

「30秒、くらい 余裕って…言ったからにや、まだ倒れられないねえ…！」

残った魔力、体力、気力を全て槍持つ右腕へ

「もう動こうとするなランサー、お前のソレはもはや宝具と呼べるものですらない

今のドウリンダナなら俺でも防げる、やめておけ」

「ははは、打てる手が、残ってるのに…諦める奴は居ないだろ？」

とはいえザイルの言っていることは正しい、死にかけのホムンクルスが放てる破壊力なんてたかが知れてる

…それがどうした

「我が名はヘクトール、ギリシヤの英雄にしてトロイアの守護者

我が誇りにかけて仲間の元に行かせはしない」

正真正銘最後の一手、満身創痍の身体を支えて投擲体制へと入る

少々やりづらいが投擲方向確認終了、準備も整った

「——いくぞ」

あー…できることならマスターが生きてるうちこれくらい活躍したかったな

『不毀の極槍』！  
ドウリンダナ

俺が放った最後の一撃にコヤンスカヤもザイルも驚いていた、顔は見えないがそれは分かる

持てる全ての力を込めて半回転し、ドウリンダナを真後ろへとブン投げたからだ

そうだ、これでいい。これが最善で、コイツらにとっての最悪だ

コヤンスカヤは影月 遙の右手でサラツとオリオンを召喚していたが聖杯のバックアップも無しにそんなことができるというのは軽く反則の域に達している





## 第71話 ケガレ弾

ロシア海域上空

NFFボーダー ブリーフィングルームにて…

「来たぞ」 まったく、広い艦だ

「御足労頂きありがとうございますザイルさん♡

ロシア潜入任務のためお話の時間を前倒しにさせていただきますました

あ、何か飲まれます?」

「今はいい、本題を頼む」

否幻想弾のことだろうか?とあらかじめ持ってきていたであろうアップルジュースの缶を空け、綺麗に並べられた椅子の一つに彼が座る

「んー…まあ確かに1つはソレですね、そちらから話しましょう」

「…?」

若干首を傾げるザイルを他所に指を鳴らしてモニターの電源を付ける

ちなみに指を鳴らす必要は特にない

「アルテミス神殿でワタクシがヘクトールさんにブチ込んだ弾丸、覚えてます?」

「覚えている、弾丸に呪いか毒を込めた特殊弾のことだな、それがどうかしたのか?」

「これをご覧くださいませ♪」

新商品PRが如く改造済み否幻想弾がモニターへ映し出される

いえ如くというか実際そんな感じなのですが。

「順序が逆になってしまいましたでしたが否幻想弾の解析及び改良の結果、

否幻想弾の効力は大きく変化しました

まずサーヴァントを始めとする、ザイルさんが対神秘と呼んでいた効果は全て霧散。その引き換えとして弾丸に伊吹童子の力を纏わせることに成功したのです」

「…どういうことだ？」

「纏わせる、というより元々在ったはずの力を呼び戻したという方が正確でしょうか、次はこれをご覧ください」

再び意味なく指を鳴らして画面を切り替える

映し出されたのは彼方と遙が——いや彼方が一方的に遙に絡みついている写真である

「スライドショーにできるほど撮つてあるとは呆れたもんだ。で？これがなんだ」

「ふむ、ではもう一度最初から流しますので今度は彼方さんの手元に注目しつっこ覧ください」

「手元？……どの写真も遙に手で触れていない？」

…気付いたら幸いですね

「見ての通り彼方さんは一度としてその手で遙さんに触れていません

これには伊吹童子の逸話に関係しています」ハイ次の画像。

「伊吹童子に関する資料か、かなりの量を集めたな」

「いえ、この艦を頂いた時のデータベースをそのまま引つ張つてきただけの物なので。…で、えーとコレですね『ケガレの指先 A』」

『伊吹童子の指先が触れたものは不浄であり、神前や人の前に在ることを許されない』

「具体的に言うとな名の欠落とか死ですね、要するに並の人間、サーヴァントならちよつと触つただけで全身が穢れに吞まれて息絶えるか消滅します」

改めて説明してみると毒なんかよりよっぽどエグいですねえ

「改造否幻想弾：『ケガレ弾』とでも呼びましようか、元を辿れば彼方さんの指を元に作られた弾丸というだけあって加工法さえ分かれば改造は左程難しくありませんが——もちろんデメリットもあります」  
「…詳しく頼む」

「前提として当たり前ですがケガレ弾運用の際は伊吹童子のケガレを弾丸としてそのまま手元に持つておき、必要に応じて撃つということになりますがこの場合運用までの間ケガレに耐えうる銃と使い手が求められます

通常兵器はもちろんパーですしワタクシが提供する安定と信頼のNFFサービスの銃器でさえ専用の改造、補強をした上で1発装填かつ使い捨てでなんとか運用できるレベル…

また使用者についても元の持ち主であるザイルさんか彼方さん、耐性のある2人のワタクシに絞られます」

まあ使い手としてアサシンのワタクシとザイルさんがいればこちらはそのままで困ることは無いでしょうが

「しかし人間、英霊問わず簡単に有効打を撃てるというのは否幻想弾には無いメリットです

ここでワタクシから1つのプランを提示させていただきますと残った否幻想弾5発全てをこのケガレ弾へ改造することをオススメいたします」

「一度ケガレ弾に変換した弾丸を否幻想弾に戻すことは可能か？」

「ほぼ不可能ですね、一度呼び起こした伊吹童子のケガレを祓うのはワタクシといえど簡単ではありません」

「……………」

モニターに映されたケガレ弾を指示棒でペしペし叩いてアピール

するもザイルは乗り気では無さそうだった

慎重になるのもよく分かります、改造時点で8発あった否幻想弾も今は5発…

いきなりその全てを全く別の用途の弾丸として使うと言われれば普通は躊躇うでしょう

「ではここでもう一つの報告を。——貴方の魔術特性について」「…なんだって?」

しかしこの事実を聞けば彼もケガレ弾への改造を許すでしょう完全に覚醒すれば否幻想弾のメリットが無くなるんですから

…

その後 カジノバーにて…

「相変わらずお酒は飲まれないんですか?」

「飲めないことは無いが我慢して飲むものでもないしな、適当なフルーツジュースを頼む」

「かしこまりました!」

フォーリナーのコヤンスカヤがパタパタとドリンクを取りに行く後ろ姿を見ながら、何をするわけでもなくドリンクが運ばれて来るのを待つ

「否幻想弾…いやケガレ弾5発か、使い時を考えておかないとな」

特殊弾格納ケースの中にあるケガレ弾を転がしながら考える

…俺の魔術特性か、これまで魔術はダヴィンチの義手頼りで考えたことも無かった

『ダヴィンチさんの用意した義手はザイルさんに基礎魔術を授けましたが同時に貴方本来の魔術を殺し、封印していました。最も彼女らにその自覚は無かったと思います』

「…やれやれ」

「よっ、邪魔するぜ?」

「ベリルか」

——と、そんな1人の時間も束の間にベリル・ガットが隣に座った

「アサシンの方のコヤンスカヤはもう居ないのか?」

「既にロシアに降りた、1日2日で終わるような仕事じゃないから  
ボーダーにいるのは当分フォーリナーだけだな」

「お待たせしましたザイルさん、カルデアastroベリーです!」

「ああ」ぐび

…悪趣味な名前だが味は良い

「俺には無えの?」

「ありますとも、ベリルさんにはカクテルをどうぞ♪」

「お!サンキュー!」

カクテルは普通の名前なのか、やれやれ

「おお美味<sup>ウマ</sup>、にしても一気に人が減ったよなあ…ってまともな人間つ  
てカウントできるのは俺とお前くらいだから実質人は減ってないよ  
うなもんか」

「人でなしのお前が言っても説得力が無いな」

「うはは、ヒデエ言われようだ!」

ギリシヤで遙がクライム側に行ったのは想定内だったがまさか茨  
木童子まで向こう側に行くのは想定外だった。いや離脱事態予期し  
てはいたがこんなに早く踏み切るとはな

だからどうしたというわけでも無いがパライソはそれをかなり気  
にしているようで宥めるのに少し時間がかかった

「で、クライムとやらには逃げられたわけか?」

「まんまとな、魔術的防御で光学迷彩と魔力遮断をやった上最後の最後でヘクトールが無茶苦茶をしたせいでドウリンダナの回収に時間が割かれた」

トドメに槍自体は俺たちが見つけた頃にはすでに燃え滓になっていたという…

「お姉さんの足取りは掴めないのか？」

「ほぼほぼ米軍基地で間違いないが攻撃できるかどうかと言われれば話は変わって来る」

アルテミス神殿の時は4騎も新しいサーヴァントが出てきたから潰しに行こうとしたが今の米軍基地には未知数な戦力が多すぎる

「時計塔を消した以上ギリシユタリアも基地にいる可能性が高い

コヤンスカヤが言っていた黄金のサーヴァントの存在もある、無作為に攻撃を仕掛ければこつちがやられる

確かにクライム同様、姉さんとも決着をつけなきゃならないがその目標がゴールじゃないからな」

「こつちからどうすんだ？」

「遥が完全に向こうに付いた今これまでよりも慎重にならなくちゃならない、あちら側の戦力が上がっていること、こつちには彼方という爆弾がいることを考えてな」

コヤンスカヤの見立てでは10年かそこらで冬木市に聖杯が現れる、クライムは知らんがギリシユタリアがそれを無視するとは思えない、秘密兵器とやらのパーツに聖杯を使うということも考えられる

故に仕掛けるのは聖杯が現れる少し前、そこでクライムとギリシユタリアを筆頭とした『人類最後の戦力』を叩き殺す

「つまり暫く休みだ、まだ人類が残っているうちに世界を見て回ろうと思う」

コヤンスカヤ（殺）には少し悪いが。  
滝を見計らったようにコヤンスカヤがカウンター前へと歩いて来  
る

「ご注文はお決まりですか？」

「ああ、良い旅行プランを頼む」



## 第72話 50年前のセイバー

アメリカ ワシントンD・C.

J地区 米陸軍駐屯地 予備司令室にて…

ギリシヤにて影月 遙を強奪後した後、装甲車、潜水艦、列車などを乗り継いでひっそりと移動を繰り返しキシユタリアはクライム達と共にアメリカへとやってきていた

「ではマスターとセイバー、2人とも協力してくれるんだね」それは良いニュースだ

日本に派遣した魔術師の1人、カドツクより何重にも暗号のかかった通信機を通して報告を聞く

『ああ、ただ交換条件としてもう1人の騎士——いや元騎士には戦闘行動を始めとしたあらゆる危険行為を絶対にさせず、手厚く保護をする…という条件を出された

人間でない分下準備が必要そうだ』

「もちろん飲むとも、何か必要なものができたら報告を。すぐに用意する

今は少しでも戦力が欲しいからね、ガラティーンの使い手ともなれば尚更だ

よくやってくれたカドツク、ペペ」

妖精騎士バーゲスト…別世界に存在したというブリテン異聞帯で女王モルガンに仕えていたセイバー、か

本人はもちろんのこと彼女のマスター、そして元騎士という人物にも是非会って話をしてみたいな

『報告はあと2つ、冬木市の聖杯戦争についてだがアンタの見立て通り今までのような数百年単位の周期じゃなかった、15——いや早け

ればあと10年くらいで聖杯戦争が起きる』

「……分かった」

コヤンスカヤ達にとっても聖杯は無視できるものじゃないだろう、とはいえ今すぐ動き始めるというのも考えづらい

本格的に人類への攻撃を始めるとすれば徹底的な下準備の元、冬木市の聖杯起動に合わせてくるのが最も自然だ

今ホープポーター建造の指揮はオフエリアがとっている、場合によつては人員の補充、移動が必要かもしれないな

「ありがとう、これで我々に残された大体の時間は逆算できた

ホープポーターの完成を急ぐことにするよ」最後の報告を頼む

『ああ、それに関してはペペから話があるらしい、代わるぞ——

もしもし？音声感度良いかしら？』

「しっかりと聞こえているよペペ」

いつもと変わらぬ明るい口調だったが僅かに声色が低い、気がする『伊吹山のことなんだけど多分私達だけじゃ手に負えないかもしれない——』っていか絶対無理ね！ちよつと見に行つてみた感じもつと人数が必要よ』禁足地になつてたし

ちよつと、つて距離じゃないと思うんだがな……と電話口の向こうから聞こえるカドツクの声に同意する

確か日本列島の半分……3分の1くらいは移動しなければならなかったような……

「とりあえず動ける魔術師を連れて行く、2人は滋賀県へ向かつてくれ」私達もすぐ向かうよ

『分かったわ』

電話機を置いて軽く背伸びをする

「終わったか？」

「うん、魔術も使わず暗号化できる通信機があるとは思ってなかった、助かったよ」

「…で内容は？」

「伊吹山調査のため動けるサーヴアントとマスターが必要だ、あそこは我々が思っている以上に異界と化している可能性が高い」

「そうか、とはいえ俺がこれ以上基地こゝを空けるわけにはいかないしギルガメツシユがこちらの言うことを聞くとは思えん、バルンのセイバーはアヴェンジャーと相性が最悪だしな…」

「…ギリシヤから連れ帰ったサーヴアントを何人か連れて行きたい」

「分かった、移動手段を用意する。この程度しか力になれなくて済まないな」

「構わないさ、今でも十分に助かっている」

……カイニス

(おう)

「日本に行こう」

↳

2日後 日本 滋賀県

伊吹山の麓にて…

「山に來ると空気が綺麗とか澄んでいるとか言うがここはとてもそんなことを言える空気は漂ってないね」

報告から2日後、ようやく伊吹山にたどり着いた私達はカドツク達と合流した

少々過剰戦力では？とバルンに言われたが山から立ち上る気配のおかげでその判断が間違っていなかった、というのがよく分かる

同行してもらったのはカイニス、芦屋道満、アタランテ、ペンテシ

レイア、オリオン、影月 遥の6名だ

本当は影月 遥とオリオンを連れてくるつもりは無かったが彼女曰くつい最近コヤンスカヤ、ザイルと共に一度伊吹山に入っているらしく案内役を買って出てくれた

「…随分と大御所だな、キリシユタリア」

大勢のサーヴァントを見て目を丸くするカドツク  
うん、助っ人も一緒のようだ

「過剰戦力だったかな？」

「いや頼もしい、正直こんな山に入ろうとする時点で用心のしすぎ、なんてことはまず無さそうだからな」

「そうか、それなら良かった」

「…後ろの方々が例の助っ人かい？」

「ああ、自己紹介が先だな」頼む

カドツクに促され出てきたのは旧式のバトルドレスを着たイギリス人の青年と甲冑に身を包んだ女性だった

サーヴァントは甲冑の女性の方だろうがマスターと思われる人間の方の気配も普通ではなさそうだ

「初めまして、私はキリシユタリア・ヴォーダイム

時計塔、天体科に所属している——いや、していた魔術師だ」

「レガリオ・ハルトマンです、魔術師としては3流以下ですがサーヴァントは超1級であることは保証します」

「サーヴァントセイバー 妖精騎士ガウエイン。事情はゼムルプスから聞いています。借り物の剣ではありますが弱者を護るためなら私もマスターも力を貸す所存です」共に脅威を打ち払いましょう

「ありがとう、ところで連絡にあつた元騎士の方はここには居ないのかい？」

「彼女なら今頃キリシユタリアが乗ってきた装甲車の中だ、アヴェンジャーが護送してくれた」

「こんな危険な場所に連れてくるのは契約に引っかかるからな、と一通り説明してくれたカドックに礼を言う」

「カドック、ミラ・ツールは？」

「元騎士と一緒にだ、アヴェンジャーには2人と装甲車の護衛をやつてもらっている」

「…それよりも本当に入るのか、ここに？」

「もちろんだが流石に全員固まって動くのは非効率だ、いくつか班を分けて山に入る。班分けは——」

「

《A班》キリシユタリア、カイニス、芦屋道満

伊吹山 廃村にて…

「ンン？おやおやこれは…どうやら拙僧は50年遅かったようでございます」

「あ？…どういう意味だ道満」

「廃村に入るなり押し殺すように笑う芦屋道満に若干苛立ちを覚えるが即座にキリシユタリアが割つて入る」

「詳しい説明を頼む、道満」

「もちろんでございますとも！まずこの伊吹山は今やカミと呼ばれた存在モが存在して当たり前の時代と同じ魔力で満ちております」

「んなことは言われなくても分かっている」

「ただそこにいるだけでストレス溜まるっつのにイチイチ回りくどい言い方をするせいでそれが加速されてる、正直コイツとのコンビは今すぐ解消したい」

「その魔力に殆どを押し潰されて分からなくなっているのでしょうか  
…そこはこの拙僧がひと肌脱ぎましよう」

言うが早いかな悪趣味な式神を振り翳す道満

「おい——」

「構えるんだカイニス」

いたい

!!

まるで最初からそこにいたように、いや実際気付かないだけで居た  
んだろう

人：じゃねえな、怨霊の類か

「…この住民——にしては数が多いな」

なんで

ころさないで

だれか

「これこのように！彼らにこの地の魔力で活動できるよう細工させて  
いただきました！ンン、これで50年前ここで何があつたのか情報が  
出るかもしれませぬぞ？」

「へえ、で？どう見てもぱつと見で数えられる数じゃないんだが1人  
1人会話でもする気か？」

村の規模から推測した人口を超える数の怨霊がこの場の魔力を  
喰って実体化している

そして当然のようにやる気らしい

「ンン？情報は多いほうがよろしいかと！しかしここまで多いとは拙僧も予想外でして！」

どのクチが言いやがる

「ツチ、これだからテメエとのコンビがいつまで経っても解消されねえんだ！」

「すまない、だが彼の監視には非常時を除いて最高戦力を当てておくべきだと判断している。どうしてもというなら無理強いはできないが」

「そりゃ元はオレが言い出したことだ、気にしちやいねえよ」

「ンン、本当に気にしておられないのならイチイチ口を挟むのはおかしいのでは？」

「——」

「おや、カイニス殿？」

「——マジで黙ってる、な？…とりあえず掃除するぞキリシユタリア」  
「うん、流石にこの数を放ってはおけない、他の班に流れる前に数を減らす」

行けるか？」

「ああ！」

「」

《C班》ペペロンチーノ、ペンテシレイア、影月 遙、オリオン

伊吹山 山頂跡にて…

「なんだ、これは…？本当にここが山頂なのか？」

「ドス黒い噴火口みたいなもの…が1番近い表現かしら」

最もこれが普通の火山なら良かったのだけれど」

「——禁足地」

ふと呟いたその言葉に2人が振り返る

「肉を見せられて『これは肉です』って言われるくらい分かりやすい禁足地だな、どう見たってヤバいぜこれはよ」

「……………」

お母さんが帰ってこなかったあの日、捜索してくれた教会の人達は恐らくここでお母さんを見つけたんだ

あのクレーターの中心、で——

「…？あれ、中央に…」

突き刺さった草薙と…あれは、誰…？

ピリリリリッ

「ごめんなさい、ちょっと電話出るわね

——ペペロンチーノよ！…あらカドックどうしたの？…：…：…分かったわ、すぐに向かう」

みんなには見えてない…？

「どうした？」

「カドックのところで人手が必要らしいからひとまずここは後回し！

一旦彼の元へ向かいましょう！」

「なにかあったのか」

「ええ、ただハルちゃんはこの調査を頼んでもいいかしら」

「私に？」

「登山前にキリシユタリアが言ったようにこの山の中で長居するのは危険よ

ビーストや神霊でもない限りはね」

なるほど、私はアルテミスちゃんの霊基を持つてるから

実感はあまり無いが私は月女神の霊基を内包したことによりかな



り神霊寄りになっていると聞いた、私ならある程度大丈夫だと彼は判断したのだろう

「分かった、任せて」

「ありがとーでも無茶はしないで危なくなったらすぐ麓に行つて！  
さ、2人とも行くわよ！」

「む、待て！人数が偏りすぎだ、1人ハル様の元へ残るべきでは「いいんだペンテシレイア、ハルはお前が思っているよりずっと強い、だよなペペロンチーノ？」

「ええーじゃハルちゃん、女王様と熊の美男子借りてくわねー！」  
「うん、待ってる」

特に呼び止めることもなく3人を見送る

正直オリオンは残ってもよかつたと思っただけど…あ、そっかオリオンは元から神霊じゃなかつた！

「まあ…それはいいか」

クレーターを中心を見下ろす

…今は誰もいない、けど

あれは人間だった

「……………」

無意識か否か、私は一步クレーターへと踏み出した

く

「おいペペロンチーノ」

「はーいー！」

早足、というかハルが見えなくなつてから普通に走つて山頂から降りていく彼に気になっていたことを聞く

「カドックから何を聞いた？ただごとじゃないだろ、多分」  
「――」

今の伊吹山は居るだけで危険…それは分かっている、そしてカドックもそれを分かっているハズだ

キリシユタリアが班分けをしたのは短い時間でこの山を効率よく調査するため、人手が足りそうにないならカドック↓キリシユタリア↓ペロンチーノという順番で連絡網が回り人員入れ替え、差し出し等の指示があるだろう

だが実際にはカドックから直接連絡が来た、つまり…

「そうね、流石にハルちゃんには聞こえないだろうし言っておくわ  
影月家の屋敷を調べていたカドック達B班のところに――」

「おい、おいおいおい！冗談だろ、またかよ!?」  
「急ぐぞ！」

《B班》カドック、アタランテ、レガリオ、バーゲスト

伊吹山 影月家の屋敷跡にて…

「ぐ…うう…」

「もうそれ以上動くな！応急処置する！」

力無く横たわるアタランテを魔術で癒す

治癒魔術は得意じゃないが幸いここには腐るほどマナが漂っている、それを使って…！

彼女の折れた両足を治癒しつつ思考を巡らす

「どういうことだ？ 奴はつい最近ビーストと遙と一緒に伊吹山に来てたんじゃないのか？」

「やれやれ全く…人様の家を粉々にしやがって、まあいいんだが」  
ガウエインが吹き飛ばした屋敷の瓦礫を掻き分け、無傷の男が出てくる

「レガリオ、ガウエイン、2人とも奴が何をしたのか、見えたか？」

「…残念ながら」

「わたくし私にも分かりません、いったいどうやって…？」

今、奴の付近にビーストは居ない

理由は知らないが居るのは普通のサーヴァント1騎だけ、しかも霊体化を守ったまま出てきていない

奴は生身のままアタランテの足を折った、それは間違いない

銀髪三つ編み、トレンチコートを着た両腕が義手の男

「まだそんなつもりは無かったが…仕方ない、こうして遭遇した以上殺していくぞ」

「く…」

ビーストコヤンスカヤのマスター、ザイル・ニツカー…！

「なんでお前がここに居るんだ…!？」

## 第73話 魔術特性 現在

NFFボーダー カジノルームにて…

「ザイルさんの行動記録？」

カウンターでグラスを拭いていた時、ふらりとやってきたベリルにそんなことを聞かれた

「ああ、聖杯戦争が始まってからの物なら多分アンタが記録してるだろうと思っただけ、見せてくれないか？」

「ふむ」

それは合っている、ワタクシはビーストである前にザイルさん専属の秘書でもある、フォーリナー<sup>この霊基</sup>に分かれてからはその役割をアサシンのワタクシが行なっていました。が居ない以上必然的にその役目はワタクシになります

「うーん？」

別に見せることに関しては何も問題はない、ザイルさんからも『見たいのなら勝手に見ればいい』とこちらが申請する前から投げやり気味な許可をいただいている

驚いたのはむしろこっち。

「貴方も他人の過去とか興味あるんですねえ」

言うほど過去でも無いですが

「ザイルといいアンタといい会って殆ど経ってないよな？なのにオレへの評価どうなってるんだ？」

「んーそこはノーコメントで、部屋の端末からアクセスできるようにしておきますのでご自由に高覧くださいませ♡」

その言葉に彼も『まー見れりゃいいか』とカジノルームを後にする行きましたか、とりあえず残りのグラスを拭いておきましょう

「……………」フキフキ

「……………」キュツキュツ

「……………」暇ですねえ」

遙さんも茨木さんも離反しましたしザイルさんは試運転のため伊吹山へ、望月さんもそれに着いて行った

彼方さんがいる以上ワタクシまでここを離れるわけにはいきませんし…

暇なうちに休んでおけばいい、とよく聞かすが『休み』と『暇』ではまるで意味が違ってくる

特に疲れてもいないのに休むことがストレスに感じる方はきつとワタクシだけではないでしょう

アサシンのワタクシが少々羨ましいです

クラス、特性等を考えてあちらがロシアでの任務に就くのは理解できてるんですがこちらがここまで暇になるとは思ってませんでした

「はあ…」

『回収を頼む』というその一言を今か今かと待ちながらグラスを拭く伊吹山の魔力濃度、密度が高すぎて山の状況がまるで分かりませんし…

ザイルさん、早く帰ってきてくれませんかねえ

）

《B班》カドック、アタランテ、レガリオ、バーゲスト

伊吹山 影月家の屋敷跡にて…

「はあぁーっ!!」

「つと、なんだやつぱり日本で会った警察官はお前だったのか  
妖精騎士ガウエイン、いやバーゲストと呼べばいいか？  
やれやれ、異世界の厄災が日本の秩序を守っていたとはな」  
大地を削る勢いで振られるガラティーンを避けるザイル

だめだ、分からない！周囲の魔力濃度が高すぎて魔術を使っている  
かどうかの判断も難しい

こんな時に限ってキリシユタリアと連絡が取れない、妨害はされて  
おらずコール音は鳴っているが：

レガリオが直接呼びに行った今、少しでも早くアタランテの足を治  
し、ザイルの謎を解かなければならない

考えろ、何故奴はサーヴァントの攻撃を回避できる？いや、本当に  
回避しているのか？

アタランテがやられた直後奴は屋敷ごとガラティーンの衝撃を受  
けた筈だ

今のところガウエインの攻撃を全て避け切っているように見える  
が最初の一撃は間違いなく直撃している

——にもかかわらず奴にはかすり傷一つ無い

「ガラティーンを上回る神秘で防御している…？バカな、だとすると  
相当な対魔力が…それにそれだところまで回避に徹する理由になら  
ない」

宝具では無かったが屋敷とその背後の深林まで消しとばした彼女  
の一撃は殆ど全力だろう、それを防ぐほどの防御能力ならばかなり大  
きな代償、条件付きリスケの物だろうか

「グッ…何故当たらない!？」

「ふーっ…ふーっ…やれやれ、合わないのは予想外だな」

ザイルの息があがっている……1分にも満たない回避行動だけで息が？

相手はサーヴァント、そういうこともあるのかもしれないが見たところそれだけじゃない、と思う

思考を止めるな、今のザイルの行動には不明瞭な部分が多すぎる

奴はなぜ回避に徹している？何かの時間稼ぎか？それならもっと効率的で危険の無い米陸軍をやった時のような手段がいくらでもあるはずだ

なぜ僕を狙わない？レガリオもそうだ、背を見せて離脱する彼を無視した

狙われたのはアタランテ、次にガウエイン……サーヴァントと戦う理由がある？

「それにその殺気と気配はどうなっている！

貴様本当に人間、いや生物なのか……!？」

「なるほど、お前らサーヴァントはそう感じるのか」貴重な意見だ

貴重な意見、激しくガラティーンを叩きつける轟音の9割がその一言にシャツトアウトされる

「お前らサーヴァントは」少なくとも今ガウエインにとってザイルの気配は動揺を誘うほど異質なものになっている

：僕はといえば特におかしなものは感じない

彼の気配は魔術師よりも一般人、どこにでもいる普通の人間と差が無い

だがこれでひとつだけはつきりした

ザイルは新しく手に入れた魔術の『何か』を試すために伊吹山にやってきた

伊吹童子が呪った影月 彼方が元になっているのなら伊吹山の異

常な環境下でもリスクを負わないという可能性は大いにある

リスクが無ければこの山は神秘の薄れたこの現代において神代並みに魔力で満ち溢れた場所、魔術師として言わせれば楽園と言ってもいい

魔術を試すにはもってこいだ

戦闘開始時、殺していくなんて言っていたがそれなら僕やレガリオから狙わない意味が分からないし思えばそもそも先に攻撃を仕掛けたのはアタランテだった、なら――

「ガウエイン！ザイルの目的が分かった、今すぐ戦うのをやめろ！」

「……！何か分かったのですね！」

「……………やれやれ」

即座に剣を引くガウエイン

…予想通り追撃は来ない

「ザイル・ニツカー！」

「ふっ、はっ…ふう、何か用か？」

「僕たちにはこれ以上お前と戦う意志は無いしこの地で邪魔するつもりもない

調べるべきことを調べたらすぐにここを出て行く

…お前もここで僕らと戦うのは本意じゃないだろうし今も誰一人殺すつもりはなかったんじゃないのか？」

「――ああその通りだ、少なくとももうこの場で戦う必要は無くなった

知りたい事もだいたい分かって満足している

これ以上交戦する動機は既に無い、ここで退散させてもらおう」



結局1発も撃発することが無かった歪なりボルバーマグナムを2  
丁ともホルスターへと納め何かを呟くザイル

「お待ちしておりました♡さ、さ！帰りましたよ！」

「やれやれ、次があるかは分からないがまたな、カドック」

何処からともなく現れた狐耳のサーヴァントに連れられ、ザイルは  
姿を消した

恐らくアイツが獣、コヤンスカヤなんだろうが外見だけでは世界を  
滅ぼしうる厄災だなんてとても信じられないな

…とんでもない中身のおかげですぐ納得できたが。

「カドック！」

聞き覚えのある声に振り返ると丁度ペペ達がやってきたところ  
だった

「…ペペか、せっかく来てくれて悪いがもう人手はいらなくなった、  
すまないな」

「撃退した、というワケじゃなさそうね」

「ああ、恐らくアイツはただ魔術の鍛錬場として伊吹山を選んだだけ  
だ、交戦の意志はあまり無かったらしい」

「バーゲスト！大丈夫かい？」

「ご心配ありがとうございますございますレガリオさん、少々奇妙な相手ではあ  
りましたが何も問題はありませんわ」

と、ふとペペの横にレガリオが居るのに気付いた  
キリシユタリアの班は居ない…？

「そういえばキリシユタリアとは会えたのか？それにペペの班に入っ  
ていたはずの影月 遥の姿も見えないが」

「彼の班とは合流できてないんだ、どこにいるのか…」

「ハルちゃんは山頂よ、ザイルが来てる以上鉢合わせたらあのコまた  
苦しむことになるから置いてきたわ」

そうか、月女神の印象が強すぎて忘れていたが彼女も伊吹童子ゆかりの人間か

「とりあえず…どうするよ？カドック」

クマ…ではなくオリオンが指示を仰いでくる

班決めの際、有事に備えた場合の序列もキリシユタリアは作っていた

確か表ではA班長（キリシユタリア）＜B班長（僕）＜C班長（ペペ）  
正直必要ないと思ったが取り決めた以上は厳守すべきだろう、ここ  
は――

「班員を入れ替えよう

ペンテシレイアはこつちだ、僕やレガリオ、アタランテと一緒にA  
班を探す」

「分かった」

「ガウエインはペペの班に、遙が居ない以上無いとは思うが山頂に続く道で異変が起こる可能性は否定できない

僕らよりこの山を知っていて、かついざという時はガラティーンで強引に道を作れるアンタに行ってもらいたい」

「ええ、従いますわ」

…よし

「行動再開だ！」

）

伊吹山 山頂にて…

「その剣に触るんじやねえ!!」

クレーターの底に突き刺さった草薙に手を触れかけた瞬間、背後から飛んできた男勝りな女性の怒号に身体が萎縮する

…誰？

見上げると一目で良いところのお嬢様だと分かる、フリフリで真っ赤な洋服に身を包んだ女性——いや少女がゴミでも見るような目でこちらを見下ろしていた

実体があるみたいだしサーヴァントでは無さそうだが人かと言われなくても：

「あのクソ蛇封じ込めるのにどれだけ犠牲が出たかも分かってないぞこの分際で！それに近付くんじゃねえよ！」こつち来い！

が、目線や表情、言葉遣いはお嬢様と呼ぶにはあまりにも遠すぎる

「あの、貴女は誰——」

ズボツ

「！」

——触れてない

私は手を近付けはしたが草薙には触れていない

その、地面に突き刺さっていたはずの草薙の刀身が抜けて倒れている

「つ………!!早くこつちに来ねえとクソ蛇が出てくる前にバラバラに裂くぞ！

とつとと動けよザコ女！」

彼女とは間違いなく初対面だが最初からここまで暴言を飛ばしてくる人は初めてだ

だがその分必死さが伝わってきたのでとりあえず彼女の元へ

「そこまで言わなくても…貴女一体誰なの？」

そう聞くと彼女は心底面倒臭そうな表情で答えを返してくれた

「あたしはバーヴァン・シー、ただの…靴職人だ」

## 第74話 とにかく影月が大好きな蛇のお姉さん

《A班》キリシュタリア、カイニス、芦屋道満

伊吹山 山頂跡にて…

「もう山頂だ、ダヴィンチ！反応はどうだい？」

『いる！大気中の魔力濃度が高くて完全に観測できないが間違いなく神がそこにいるよ！気をつけて！』

「…分かった！」

大気中のマナも合わせ脚力を強化し、古びた石階段を駆け上がる

「おい前に出るなキリシュタリア！」

くそ！道満の野郎ここぞとばかりに先行しやがって！」

山頂と思われる場所に着くと目に入ってきたのは機嫌が良さそうな芦屋道満

全身ぐちゃぐちゃの影月 遥とその周りでオロオロしているアタランテとペンテシレイア

腹を抱えて地面にうずくまる巨大な…巨大な…蛇？女性？そして

「ふっ…ぎげん——」

「！」がっし

「ン？」

「 なっ ！ 」

バーゲストよりも高い筋力から繰り出される前蹴りがキリシュタリア——ではなくキリシュタリアを庇ったカイニス…が身代わりにした道満の腹部に直撃する

「ンゴホオツ!? カイニス殿! 何故拙僧を盾に???」

「その声: ガウエインの言つてた元騎士か? とにかく落ち着け、いきなりキレたつて意味が分からねえだろうが」

「無視! 英霊とはいえ拙僧も人、流石にキズつき」は? てめえそれで英霊なのか? ヘタすりや獣とかと戦う前に全員皆殺しの可能性もあつたんだぞ分かつてんのか!」

「ンン: 妙ですネエ、まだ拙僧表向きな悪事を働いた覚えはございませんのに」

「おい! 2人揃つて勝手に消えるな! おかげで少し肝が冷えたぞ」

息を切らせて階段を駆け上がってきたのはカドックとレガリオ

どうやらガウエインは一緒ではないらしい

「キリシユタリア? こんなところにいたのか」

「うん、ところでガウエインは一緒じゃないのか?」

「彼女は今ペペさんの班です、B班全員で山道の警戒についてくれています」

「分かった、とりあえず道満には彼女の後で話を聞くとして

ここでさつき何があつたのか教えてほしい

良いだろうか、バーヴァン・シー?」

「: ツチ」

明らかに不機嫌だが彼女は拒絶することはなく早口に話し始めてくれた

: 根は良い子なのかもしれないな

↳

遡ること数十分前:

「我を、呼んだな？」

「つの…呼んでねえよクソが…！」

元同僚の倍の大きさはある体格の女が抜け落ちた草薙を拾い上げ、私達を見据える

どうすればいい！コイツをあたし一人でどうにかできるとは思えない、仮にここを凌いだとしてもその後誰がアイツを止めるのよ!?

もしお母様がここに居れば——いや弱気になるな、魔術師バーヴァン・シー

ずっと前に決心したじゃない、お母様のような優れた魔術師にはなれずとも名に恥じない魔術師にはなると!

かつて母が持っていたものと同じ杖を握る、厳密にはレプリカなのだがそれでも意味はある

私が止めないと——

「なーんちやって!」

「……………は?」

…は?

につぱー??という擬音が聴こえてきそうな笑顔の伊吹童子に一瞬思考回路がショートする

なに、なにを…言ってるの…??

「出よう出ようと思ってたんだけど居心地が良くてつい…あ!あたしは伊吹童子!多分食べたりしないから安心して?ね?」

「え、えつと…」

どうも隻腕の彼女も伊吹童子のことを知っているらしい

まあ顔つきが影月 此方そっくりだし十中八九関係者よね

「おいお前、アイツのこと知ってるのか？」

「いや、あの知ってるけど…あれは知らないというかなんというか…」  
「もし知ってたらドン引きするってえの！」

口調はフランクなものの気配はカミ、伊吹童子で間違いない

「貴女は伊吹童子…様、なんですか？」

「そーそー！あでも『様』なんて付けなくていいわよ？気軽に伊吹お姉さんって呼んで！」

それでアナタは？見たところアナタもどこかの神様なんですよ？」

「私は影月 遥、力は借り物で一応…多分人間です」

「へー影月 遥ちゃん…うん？影月？アナタ影月家のコなの？」

…あ、ホントだ。印無いけど確かに影月のコね！」

ナチュラルに近付いて会話してる…肝が座ってるのか

「或いはただの馬鹿か、だな

意味が分からねえ、何するのが正解なんだ…」

「ンン、どうやら困っているご様子で！よろしければ手を貸しましょうか？」

ヒョイ

「うわっ!?!…誰だテメエは！」

「拙僧は陰陽師、キャスターリンボと申しまする！」

サーヴァント？バーゲストの言ってたキリシユタリアの…

パク

「あー思い出したぞ！お前芦屋道満っつくソ野郎だろ！」

具体的に何がクソ野郎なのかは聞いてはいないが。

「どうとう完全に初対面の方にも嫌われるようになってしまおうとは…

ンン、一体何を間違えたのでしょうか？」ご存知ありませんか？





「え」

「ン?」

「どっせい!!」

階段下から文字通り飛んできた2人、いや2騎の飛び蹴りが道満の顔面に直撃し派手に吹っ飛ぶ

「だから何故に!!?」

ネムーイ…

「ふう、怪我はないな?ああ申し遅れた、私はハルカ様のサーヴァントペンテシレイア、バーサーカーだ」

「同じくアタランテ、アーチャーだ」

「芦屋道満と一緒に居たようだが何かされたか?」

「いや、なんもされてねえが」

「ふむそうか、事が起きる前に駆けつけることができ良かった」

「…どんだけ信用ねえんだアイツ」

フワー、オヤスミナサーイ

話を聞くとどうやら漠然とした危機感を感じて2人して駆け上がってきたらしい

「妙な胸騒ぎがしたが…まさかあれが原因か?」

どこから取り出したのか分からない酒樽を抱えて寝そべっている伊吹童子を指差しながらアーチャーが言う

「見た目に騙されんなよ、アタシが知ってんのと結構違うところは多いが間違いなくこの山の中で1番危険な奴であることに変わりはないんだからな」

あのバーゲストが手も足も出ずにやられた光景がフラッシュバックする

なんとか封印までこぎつける事ができたのは当時のサーヴァントとマスター全員が全力で奇跡を手繰り寄せたおかげに他ならない  
…まあ、私は大して役に立たなかつたけど

zzz…

「つーかのんびりお喋りしてる場合じゃねえ！とりあえず影月の女を  
アイツから引き離さねえとまた50年前の二の舞だ！協力しろ！」

「影月…？ハルカ様のことと合っているよな？」

「どこに疑問吹っかけてるんだよ、影月が他に居るのか？」

「どこにも居られないが」

「は？……あれ…」

確かに居ない、さつきまで伊吹童子の近くに…うん？

「ンン…」ニヤニヤ

さつき吹っ飛んだはずの道満が真横で不気味な笑顔を浮かべてい  
る

ああこれは私でもわかる

「おいクソノツポ」

「ン？なにか…？」

「お前何か知ってるだろ」

「ええ知っていますとも、ハルカ様ならばあちらに！」

…？

指差す方向を見てもハルカは居ない、居るのは酒樽抱えて爆睡して  
いる伊吹童子だけだ

「アテにしたアタシが馬鹿だったってワケか？もういいからすっこん  
でな」

「いえいえ、なにもふざけておりませんよ？ハルカ様はあちらにおり

ます！」

話しているだけでイライラしてくる、いつそ完全に黙らせようか？

「ンン、拙僧に構っている場合では無いと思われませんが？」

「うるせえな、そろそろ黙らねえと頭のとっぺんから裂くぞ」

「しかし…早く救出して差し上げねば消化されてしまうと思います  
が」

「…あ？消化？」

いきなりなのはな…し…

「…」

「…」

「…」

アタランテ、ペンテシレイアそれぞれと顔を見合わせた後、道満が指し示す先を注意深く観察する

「……………気のせいじゃねえよな？」

「ああ」

「うむ」

……………お腹のところが少し動いているような

「zzz…」ゲプツ

「う……………んぷ…む……………！あつい…いたい…た、たす…けて…」

「」

ガッ

「ン？ンンンン？ン——」

ブン

「吐きやがれクソ蛇女アアア!!」

「きゃーっ!?え、なに!?な、ちよっ…!」

近くにあった道満を渾身の力で投げつけて

? 顔の伊吹童子を3人がかりでタコ殴りにする、もちろん腹だけは殴らないように。

「貴様なんということをするのだ!?早く吐け!」

「吐け!今すぐ吐け!」

「いたた!だ、だからなんで!?影月家のコ以外食べてないの?」

「……………う…」

ま、まずい…!なんか動きが弱々しくなっていていつて――

「クソ!もう腹裂いて引きずり出すしかねえ!

アーチャー、バーサーカー、抑えてろ!」

「ああ!」「急げ!」

「ひえっ!?わ、わかった!分かったわよ!

吐けばいいんでしょう、吐けば!

吐くからそんな猟奇的なコト言わないで!」

「早くしろ!!」「」

「うう…ちゃんと約束守ってたのに…」

オエー…

く

「——つーことがあったんだよ」

「…確かにそりゃ蹴られても文句言えねえな」

「実際に蹴られたのは拙僧なのですが？」

「それでハルカは無事なのか？」

「とりあえずはな、ほらあっちに…」

「はっ…はー…はっ…」

「マスター…いえ、ハルカ様…大丈夫ですか…？」

「これが、大丈夫に…見えるわけ、ないよ…ね…？」

身体が変わるレベルで溶かされかけてたのに『大丈夫』なんて言える人がもし存在するのならそいつは自殺志願者かただの狂った奴だろう

「も、申し訳ありません！」

「いやごめん…助けてくれてありがとう…」

月女神の霊基のお陰でダメージ自体は既に消えたので、とりあえずアタランテが装甲車から取って来てくれたタオルを贅沢に使い、酒と唾液と胃液でぐちゃぐちゃに塗れた身体を拭く

うう…全身酷い臭い＋ベトベトで気持ち悪い…

「うう…そりゃ私だって印がない時点で『あれ？』って思ったわよ…

でも実際に影月家のコだったのに…いくらなんでもあんまりじゃない…」ブツブツ

「……」

それにしてもさつきは咄嗟に殴ってしまったけどどうも伊吹童子

の様子がおかしいような気がする

50年前はもっと威圧感や神霊としての気配があっただけけど今は――

「ツチー！おい芦屋道満！さつき50年前の話を聞く代わりにあいつの機嫌取りをするって言ってたよな？」

「おお、ようやくまともに話しかけてくれましたな！ええ、ええ！もちろん出来ますともし！」

…よし

「魔術師！」

「ええと…私のことかな？」

「そうだ、お前がこのクソハイキングチームのリーダーだよな？」

「くそはいきんぐ…確かに私がみんなを率いてここに来たのは間違いない」

「よしよく聞け、こうなった以上伊吹童子は味方に付けるしかねえ

いつ暴走するか分からねえ危険な奴だが下手に敵対すればこの山もろとも全員消し飛ぶ、他に選択肢はないぞ」

「ああ」

動揺することも無く…はあ

「つたく、涼しい顔しやがって…テメエ本当に分かってんのか？」

「分かっているさ、神霊伊吹童子…獣と戦う上でこれ以上頼もしい味方はカイニスを除いて居ないだろう」

「はあ？」

「ギリシャのサーヴァントも含め戦力も整ってきた、獣を止めることも不可能では無くなってきたかもしれない」

「…チツ！とことんポジティブでおめでたい奴だな」

とりあえずレガリオとバーゲスト、後は…ダヴィンチとキョーコの  
奴にも相談しよう

キョーコの姿はまだ見ていないけどダヴィンチがいるのならその  
近くに居るでしょうし

「…」チラ

「ね、ねえ影月ちゃん？ちよつとだけ味見してもいい？

丸呑みしないから！ちよつと口に含むだけ——いったあい！」

「近付くな!!アタランテ、ハルカ様を連れて後ろに！」

「分かってる!!」

「…！」ブルブル

——もう…どうすればいいのよ、教えてお母様…



## 第75話 それぞれの準備期間

J地区 米陸軍駐屯地 談話室にて…

「…」

15分前にキリシユタリアから駐屯地に戻ったと直接知らせが入り、業務に区切りをつけてこちらに来たのだが

「——キリシユタリア？」

「…うん」

「これはどういう状況か説明してくれないか」

談話室に入るなり『場所を間違えたか？』と思うような阿鼻叫喚の地獄が部屋に広がっている

といつても血飛沫が飛び交うような惨状では無かったがそれでも地獄といって差し支えないだろう

見えるのは樽で酒を飲む体躯の大きな女性、多分彼女が伊吹童子なんだろう

それはいい、それはいいんだが——

「い〜いお酒…♪これでつまみでもあれば最高なんだけど」チヲ

「ひっ…！」

「あーあー、怯えないで遙ちゃん

ぜっつたい！6割がた絶対に！食べたりしないから！ヒツク

…だからバーサーカーちゃんもアーちゃんもそんなに怖いかおし  
ないで？」

「バーヴアン・シー！やはり遥様を伊吹童子の目の届かない場所に連れて行くべきでは—」

「だめだ、影月家に対するクソ蛇の執着はまともじゃねえ

下手にここから引き剥がすのも相応のリスクがあるんだよ…！

バーゲスト、お前も分かつてるよな?」

「ああ、ここを第2の伊吹山にするわけにはいかない」

「く、匂いだけで泥酔しそうだ…」

「マスター、一応バケツを置いておくぞ

ウェイバー、お前は大丈夫か?」

「うぶ…僕のことはいいいから伊吹童子から…目を離すな、鬼斬りのお前以外に止められそうな奴が居ないんだぞ…

そ、それにしても道満のやつ、他に方法は無かったのか…?」

「さあ、さあ、さあさあさア!ここに居られるは荒御魂!

ヒトの姿をもって現世に降り立ったカミなれば!

いぎ、そのカミと一席酒を交わそうと名乗りを上げる勇士はおられぬか!」

「サーヴァントでも人間でも遙ちゃんでも誰でもいいわよ〜ヒツク  
楽しく呑めればそれでいいんだから!」

「うぐ…あの姉さん…酒が強いつてレベルじゃ…ねえ…」

「オロロロ…」

なんだ…いや、本当になんだこれは…?

「とまあ見ての通り伊吹山の荒御魂、伊吹童子が仲間に加わった…かな?」

「疑問系にするんじゃない!そもそもなぜ伊吹童子がここに…」

ハア、とりあえず今は危険なさそうだが」

かといってこのまま放置するわけにもいかない、早急に先のことを話し合わなければならない

その旨を伝えると彼も同意見だったらしく、場所を移そうと言ってきた

「それがいい、使ってない古い作戦室があるからそこを使おう  
だが忘れていないだろうな、キリシュタリア」

つい先日、大勢の部下を殺したのは伊吹童子……ここにいる奴とは別  
存在だろうがそれは間違いないんだ

「納得できる説明をしてくれ、俺たちだけじゃない」

魔術師にサーヴァントに末端の隊員に至るまで全てだ」

「もちろんするさ、君に納得してもらった後でね」カイニス、来てくれ  
ひとまず俺にか……土方も呼んでおくか？

「おい土方……土方？」

……？ついさつきまで横に居たんだが

「あいつなら伊吹童子と酒飲んでるぞ、ほらあそこ」

匂いで既に泥酔一歩手前の魔術師、ウェイバーに言われて彼の指差  
す方を見る

「あああ、呑みっぷりいいじゃない！お酒は強いほう？」

「そういうわけじゃないが少なくとも今日は酔い潰れることは無い

アンタのような別嬪さんと呑める機会なんてもう来ないかもしれ  
ないからな

先に潰れるのは勿体なさすぎる」

「いーじゃないいーじゃない！みんなすぐツブれちゃって少し退屈  
だったのよ、呑みましょ！」ヒック

なるほど、とりあえず伊吹童子を止めに入ったか

確かに奴を放置はできない、影月 遙を無闇に動かせない以上ス  
トッパーは必要だろう

助かったぞ土方、そのまま伊吹童子の相手をしておいてくれ、キリ  
シュタリアとの話の内容は後で伝える

(あ？………ああ、分かった)

「待たせたな、さあ場所を変えよう」

↳

同時刻 アフガニスタン国境付近、紛争地帯にて…

「うおあ!?危ねえ!今のは死んだかと思ったぞ!」

…やれやれ

「だから付いてこない方が良いと毎日言っているだろう

重ね重ね言っておくが魔術の類は使うなよ、使ったら即座に彼方の『人肉料理』だからな」

「あーあ、来るんじゃないか」

死体となった米軍人から剥ぎ取った防護アーマーと鉄帽を横で縮こまっているベリルに強引に着せ、アサルトライフルの弾倉を再装填しつつスマホのカメラで塹壕外の様子を伺う

「…増えてるな」

さっきまで装甲車は1台しか無かったが新しく送られてきたのだろう

少し殺しすぎたか?

「コヤンスカヤ、他に大型兵器は確認できるか?」

「今のところ警戒すべきはその2台だけです」

それにしても魔術を一切使わず銃だけで紛争地帯に入るなんて…」

「なんだ、アサシンのお前を呼び戻した方が良かったか?」

「できますけど!できますけど消化不良なんですよ!」

「…仕事だ、今は諦めろ」

さて、今のところ米軍…いや連合軍か?ともかく連合軍対タリバン

軍の戦況は今のところ連合軍が押し気味だ

というのも俺たちが勝手に介入してこのあたりのタリバン軍を殺し回っただけだが

「くそ、めちやくちや重いんだな装備って

にしても米軍？は余所者の俺らが介入してて気付かないのか？」

「殺し合いしている中で共に戦っている人間の素性を疑う余裕などありませんよ…あ、こっちに手榴弾が」ひよい ぽいっ

……

「厄介だな」

あの装甲を破るにはRPG-7のロケット弾を撃ち込むしかないが完全に破壊するには3発、最低でも2発は必要だ

再装填に必要な時間は1発につき5秒、標準合わせから発射まで計算して1台破壊するだけでも10秒は掛かる

コヤンスカヤなら機関砲を受けたとしてもダメージなんてないだろうがこれは人間として勝たなければ意味がない戦いだ

生身の人間ができる勝ち方でない…

「武器は他に何かある？」

「ええとそこで拾ったAK-47一丁に手榴弾が3つ、ザイルさんが持っているのと同じRPGが1丁、対物ライフルのマクミラン TA C-50もありましたがレンズが割れていますね」

「…塹壕は？」

「装甲車に一番近いところでも20メートルはあります、ザイルさんが走って近付くのは不可能でしょう」

「そうか」

さて、どうするか

装甲車に限らず敵兵の殆どは塹壕に当たりをつけているのは間違いない、少しでも妙なマネをすれば機関砲が飛んでくるのは目に見えるている

なんとか注意を逸らす方法はないだろうか、せめて塹壕から飛び出す一瞬だけでも注意を逸らせば——そうだ

「ベリル、コヤンスカヤ、死体を計3つ持って塹壕内で1番装甲車に近いところに向かえ。あの装甲車を2台とも鉄クズに変える」

「かしこまりました、具体的にはどんな遺体を？」

「可能な限り損傷の少ない遺体を、出血が少なければ少ないほどいい  
手榴弾は持っていいがRPGは貰っていくぞ」

後でな、とコヤンスカヤのRPG-7を受け取り2人とは反対方向

へ

やれやれ、クライムはこんなのを繰り返していたわけか？人殺しが好きなわけでも無いのによくやるな

ゆっくりと移動して20秒、位置に着く

(着きましたわザイルさん！遺体もオツケーです！)

よし、3つの死体の腹を裂いてそれぞれ手榴弾を押し込め

誘爆しないよう死体同士の距離にも気をつけて塹壕内に置き、俺が合図を出したら装甲車に近い場所からピンを抜いて爆破しろ

「後は俺がやる」

(なるほど、分かりました！じゃーベリルさん居ますし手伝っても  
らいますか)

15秒で作業が終わったと判断する、そのつもりで動け

念話を切り、先程銃と一緒に拾った警笛を啜える

手元にはRPG-7が2丁、再装填用の予備ロケット弾が2発、A

K―47とその弾が現在装填済みを含めて40発弱：

「14、15秒経過」

行くぞ

ヴイイイイイ！

銃声や爆発音が響く戦場でも確実に耳に届くような喧しい警笛音が響く

もちろん敵にとっては良い目印だろう、が。

ドンツ

1つ目の死体が塹壕内で爆発し、小さな血の霧が出来上がる

もちろん警笛方向を見たであろう敵兵がそちらに爆弾を投げ込む可能性は低い

ドンツ

2つ目、敵兵の一部は自分達がやったものじゃないと気付き始める

ドンツ

3つ目、全ての敵兵がその爆発に疑問を持ち、注意がそちらに逸れる

ここだ

塹壕から飛び出し、左手でRPGを構えながら左手で予備ロケット弾を山なりに投擲

「…っ」

手前側の装甲車にロケット弾が命中。すぐに背中中のAKを構え、さつき投げたロケット弾が装甲車の上に落ちたのと同時にそれを打ち抜く

装甲車とはいえ2回の至近距離爆発に耐え切れなかったらしく爆発炎上

残るはあと1台。

空のRPGを捨て、塹壕に滑り込みつつコヤンスカヤのRPGをもう1台の装甲車に叩き込む

これが最後のロケット弾、装甲車が1台だけなら――

「塹壕<sup>こころ</sup>から撃ち込んで終わりだ」

再装填したロケット弾を西部劇の早撃ちの如く装甲車へ撃つ

もちろん直撃はしたが…

「壊し損ねたか」

当たりどころがマシだったのか炎上しておらずギリギリ壊れていない、もう移動はできないようだが機関砲は健在だ

…ここからAKで燃料タンクを撃ち抜くのは無理があるな

おいコヤン――

呼ぼうとしたところで装甲車の燃料タンクが爆発、木っ端微塵に。

(一丁上がりです♡あ、余計でした?)

どうやらコヤンスカヤが撃つたらしい、そういえば対物ライフルも持っていたな

いや良くやってくれた、後はザコ処理だ

日没まで殆ど時間は無い、増援を含めて殺し尽くせばこの辺りの今日の決着は連合軍の勝利で終わるだろう



AKを掴み再び塹壕外へ

1発1殺、タリバン兵1人1人の頭部へ正確に弾丸を撃ち込んでいく

8人殺して塹壕へ、そこから小移動してまた飛び出して8人殺すそれを3回繰り返したところでタリバン軍が撤退を始めた

「やれやれ、檻での鍛錬がなかったらこうは行かなかっただろうな」

A―29等の爆撃機の接近も無し、本当にこれで終わりのようだ

「あとはパライソだが「お館様」

良いタイミングでパライソが戻ってきた

「よく戻ってきた、見つかったか？」

「は、お館様の仰る通り腕に星の紋章を付けた人間を補足、びーこんも設置が完了したのでござる」

「よし、その人間が付けていた星の数は？」

「2個でござる」

2つ…階級は少将か

「上出来だ、よくやった」

「ありがたき。しかしお館様

敵対している軍、たりばん軍の人間は調査せずによろしかったのでござるろうか？」

「必要無い、そもそも俺たちはどちらかに肩入れするためにこの戦場に来たわけじゃ無いからな」

「は…」

さして仕上げだ

聞いての通りだコヤンスカヤ、彼方をビーコンの位置へ連れて行ってくれ。分かっているとは思うが――

(少将だけは殺さずに逃がす、分かっていますわ♡)

そうだ、それと草薙も使わせるなよ？あくまでも彼方に、素手で鏖殺させるんだ

(かしこまりました！)

この戦場に来て1週間、米軍には既に『劣勢気味だったタリバン軍がそれを覆すために生物兵器を投入した可能性アリ』という情報、というより噂のようなものをコヤンスカヤに流させた

もちろんそんなものは存在しないがタリバン軍の戦闘服に身を包んだ彼方が米軍前線本部で暴ればそう思うしかないだろう

「ったく、ひつでえ目にあつた…」

「ベリル？こつちに来たのか」

「コヤンスカヤも居なくなつちまつたからな

俺はか弱い人間なんだぜ？守ってくれねえとアツサリ死ぬくらいにはな」

やれやれ、ついさつきナイフ一本で一気に5・6人殺していた人間がよく言う

「ともかくアフガンでの戦闘は今日をもって終わりだ  
暫くはこの国を見て回ろう、これも旅行の一環だ」

決戦まで10年…だがこんなことしていれば10年なんてあつという間だろう

「はっ、今から楽しみになってきたな？クライム」

## 第76話 2年後の米軍基地

アメリカ 米陸軍駐屯地 共有棟にて…

「ベルベットさん、おはようございます」新聞読みます？

「あ、ああ…おはようございます」貰います

2年経っても未だに魔術師と兵士が共存するこの棟は慣れないな  
受け取った新聞を流し読みしつつ食堂へと向かう

伊吹童子が仲間に加わってから2年ほど、世界は大きく変わった  
世界と言うと大袈裟かもしれない、『僕から見える世界』と言え  
いか？

世界情勢も変化が無かったわけじゃないが。

まず何から話せばいいか…そうだ、まず僕がまだ米軍に身を置いて  
いる理由について

といっても分かりきっているようなものだが

『紛争地帯でまたも生物兵器の疑い』か、十中八九コヤンスカヤ達だ  
ろうな…」

ここ最近、コヤンスカヤ達の動きが新聞にまで現れるほど活発に  
なってきた（もちろん記事に連中のことが書いてあるわけじゃない  
が）

どうも様々な戦場に介入しては生物兵器《？》を放っているようで  
米軍在籍の人間も目撃者がチラホラいるようだ

数が少ないことから威力確認じゃないかとキリシユタリアは言っ  
ていたが

話を戻すとAIのキャスター曰くコヤンスカヤのマスター、ザイル  
はどうも衛宮切嗣…あの時のセイバーのマスターと親しかったらし

くアメリカでの聖杯戦争では彼のアドバイスを貰っていたらしい

もちろん冬木の戦争の情報も渡していただろう、そんな中で征服王の召喚経験があるひ弱な魔術師がトコトコ歩いてるのを彼らが見つけたらどうする？まず間違いなく都合の良い触媒として回収され、使い潰されるだろう

ようするに僕が未だに滞在する理由は米軍と時計塔の魔術師の大半が滞在しているここが1番安全だから、というわけだ

もちろんただで居着くわけにも行かないのでこの基地で事務の仕事をしているが

「借金までして先生の教室を買い取ったのが懐かしいな…」

その教室も時計塔ごと消し飛んじやったけど

「おいウェイバー」

明らかにイラついた声で自分の名前を呼んでくることに嫌気が差しながらも仕方なく声の方を向く

…って

「アスクレピオスカ、医療棟から出てきてるなんて珍しいな」

そういえば彼が召喚されたのは伊吹童子が仲間になった後だった

伊吹山で回収した遺物と影月 遥の協力で召喚したキャスターのサーヴァント、医神アスクレピオス

今ではすっかり米軍1の軍医になっている、もっとも本人に軍医の自覚は無いだろうけど

「今日はV地区の診療所に出張する日だ、そんなことより影月 遥をいい加減なんとかしてくれ

叔母さんの霊基を持つてるから大目に見てたがこうしよつちゆうPTSDでベッドと時間を占拠されちゃたまったものじゃない

僕に治させる前に予防策の一つでも取るように言え」

イラつきに混じってノイローゼも見える気がするがそれはこつちも同じだ

「うるさいなあ…言ってるよ、だいたいなんで僕ばかりに言うんだ

キリシユタリアや中将サマに言えばいいじゃないか」

「お前の他に話を通じそうな奴が居ない」

「…………それは医療棟といちばん近い共有棟の中だけを探して居ないって意味じゃないだろうな」

「?当たり前だろう、これまで外的問題が発生するたびに時間を割いて共有棟まで来てやってたんだぞ」

お前も話を通じないタイプの奴じゃないか

そう言いたくなるのを堪えて愛想笑いと了承の応答をし、新聞をリュックに放り込んで廊下を歩く

暫く歩いていると曲がり角から別のサーヴァントが姿を現した

「渡辺綱か? 誰か探してるみたいだが」

「む、ベルベットか。伊吹童子様を見かけなかったか?」

刀に手をかけ、既に臨戦体制へと入っている様子にだいたい察することができた

あー…またこれか、だが幸いこつちの棟には来ていない

「見てないな、だいいちあんなのが動き回っていたらすぐ分かるだろう  
凶体も魔力もデカいんだから」

そう言つて返すが彼の表情は優れない

「今まではそうだったが最近痕跡まで消して動いているらしい、こう言つてはなんだが神がコソコソと小細工をするのが得意とは思えないんだ…」

「誰かが入れ知恵でもしたんじゃないのか?」

「そんなこと一体誰が——」

「ンンン、今日も素晴らしい日になりましょうや！おや、渡辺綱殿にウェイバー殿、おはようございまする」

「……………」

(どうせあいつだろう…)

↳

同時刻 魔術棟にて…

時計塔——の内装を模した廊下を歩く2つの人影。

「悪いな、こんなことでサーヴァントの手を借りてしまつて」マスターでも無いのに

クライムから貰つた食糧の入つた段ボールを抱えながら、僕の3倍の量を運んでいるライダーのサーヴァント、マンドリカルドにお礼を言う

「良いんすよカドックさん、だつて俺、ホラ…普段からロクに役に立つてませんし…これくらいは、ハハ」

「……………」

なんだかんだ言つて僕だけじゃなく色んな人のことを手伝つているみたいだ、ありがたいのだが王だったはずなのにここまで自己肯定感が低いとやりづらい

「とりあえず魔術棟にいる連中に食糧を配ろう」

「了解つす」

まああの黄金のアーチャーみたいなのよりはずっと話しやすいが  
共有棟との出入口から少し歩いてキリシユタリアの部屋へ

いつも思うがなんでよりによって共有棟に1番近いところによ？魔術師なら自分の部屋なんて魔術の無い場所から1番遠ざけたい部屋のはずだが…

扉の前に立ち、ノックする

「？」

…居ないのか？

入っついていいよ！

相変わらず部屋の前に置いてくれ、とは言っついてこない

いやいやいや！自分の部屋だぞ？もつと抵抗持った方がいいだろ

!?時計塔が崩壊してから随分変わっ——あれ

「…時計塔崩壊前のキラシユタリア、殆ど知らなかったな」

「あーカドツクさん」

「分かってる、入るぞ」

で、中に入っつてみれば

「おいキラシユタリア」

「ふむ…よしレベルアップだ、おやこれは…」

「キラシユタリア？」

「カドツクか!?見てくれ！僕がついにイオナズンを覚えたんだ！」

「…は？」

見てくれ見てくれ！と携帯ゲーム機の画面を見せてくる様子は理解するのに数秒かかった

「キラシユタ 47レベル…なんだこれ…」

「ああそれはね、このゲームはキャラクターを自分で作れるんだが5文字までしか入らなくて『キラシユタ』になっつてしまったんだよ」

なんだ？何を考えているキリシユタリア・ヴォーダイム  
彼はまっすぐに僕の目を見ている、カイニスや道満は……ここには居  
ないみたいだ

「カドツク？」

状況を考えろ、ここは娯楽室ではなく米軍が用意したキリシユタリ  
アの自室だ、彼にとって簡易的ではあるが自分だけの空間でもある、  
そこで携帯ゲーム機を？朝から？あのキリシユタリアが？

部屋に入った時キリシユタリアはどこにいた？入ってすぐの座椅  
子だ、見えたのは背中。

背中？唯一の出入口に背を向けて？思えば扉を僕らに開けさせた  
のも理由があるのではないか？そもそも出入口は1つなのか？

「カドツクさん？」

キリシユタリアはこのゲーム機の画面を僕に見せることによって、  
何を見ようとしてるんだ…？

「カドツクさん！」

「っ……なんだ」

マンドリカルドの声で現実に引き戻される

「え、あ、いやその急に大きな声出されちゃ、誰だってビビりますよね、  
ハハ……すいません」

「いや、ビビっていない」

「そ、そうっすよね！んなわけないっすよね、なのに勝手にビビったと  
か言っつて、ホント、ええと……」

キリシユタリアとは別の方向で話しづらい……



「その段ボール箱は？」

「これか？クライムから預かった今日の分の食糧だ、今日食堂に来なかった人の分を配って回ってる」

共有棟の食堂に抵抗がある魔術師や食事を忘れる魔術師も居ないわけじゃないからな

「え？ああーもうこんな時間か

うっかりしていたよありがとう」

携行食と加熱薬、お湯を渡して部屋を出る

さて次は誰が一番近いだろうか

「おや、おはよう。」

「こんなところで会うとは奇遇だね」

「おはようございませ言峰神父」

そういえばこの人も食堂に来てなかったな

「今朝食を配っている最中なんすよ、何か欲しいのはあるっすか？」

「ふむ…ではこれを貰ってもいいかな」

するりとした手つきで神父が取り出したのは麻婆豆腐とかかれた携行食だった

朝からこんなの食うのかよ…

「というか段ボールに入れた奴もそうだ、誰だよ

「…朝から麻婆豆腐っすか」

「何も問題は無かろう、それに私のために用意してくれた物とあっては突き返すのは失礼というものだ」

私のため？…あ

よく見るとパッケージの端に油性ペンで『言峰神父へ』と書いてある

「では失礼するよ、ギリシヤのキャスターが不在の間、診なければなら

ない患者がいるのでね

「素晴らしい朝食をありがとう」

そうして神父とすれ違い、そのまま魔術棟の奥へ

最近では食堂にこない魔術師も減ってきている、この調子なら1年後にはきつと『絶対にこない奴』以外は来てくれるだろう

さて気を取り直して…ここから近いのはオフエリアの部屋か

先日までロンドンの時計塔跡地地下にてH O P Eボーダー建造の指揮をとっていて昨日の夜中基地に帰ってきたんだったな

「とすると今指揮を現地でとっているのはペペで…僕の番が回ってくるのは再来月か、おいオフエリア居るか?」

「カドック? 良いところに来てくれたわ、入って」

「? ああ」

気のせいかわかからない以外の声が聞こえたような…

「どうやらそれは気のせいでは無かったらしく部屋に居たのはオフエリアと——」

「なにやってんすか、オリオン」

「デートの誘い!」

…朝からこのぬいぐるみは

「本当に反省しないな」

「でよ、とりあえず次の交代まで休みなんだろう? 外の天気も良いし今日は俺と優雅なティータイムでもどうだ?」

「…」 ↑疲れている

「遠慮すんな、ゼーンぶ俺の奢りだ! 女の子に奢らせるなんてさせないからよ!」 ↑遠慮してると思っている

「マンドリカルド」

「そうっすね」

通報するか

オフエリアの分をマンドリカルドに任せ、携帯で保護者を呼び出す  
携帯電話の扱いも大分慣れたな

「もしもし…ああ、また…そうだ、魔術棟の…ああ頼む」

怒鳴り声に近い『分かったありがとう！』の声を聞き、配布を終えたマンドリカルドを連れて外へ

「おっ、チクリか？」

「…土下座の準備でもしておけ」

「あいにく俺は秘密兵器を手に入れたんでな、もう大丈夫だ」

やたら余裕そうなオリオンが少しだけ気になったが他にも配らなければならぬ場所があるので特に気に留めず先へ進むことにした

「…とりあえず出て行って、久しぶりに帰ってきたのに部屋の中で月女神に暴れられちゃたまらないわ」

「おう、また後でな！」

道満から貰った秘密兵器を片手に今か今かと身構える

「オリオン！」

そらきた！

「アルテミスちゃんと言うお嫁さんが居ながらまた浮気…！」

今日と言う今日は許さないよ！」

正直アルテミスが目の前にいたらこうはいかないがここにいるのはアルテミスの霊基を持った遙だ、これなら追い返せる

『オリオンが浮気するかもしれない』そう言つてメシ食つてる時もフ口入つてる時も寝てる時も四六時中一緒に居ようとする挙句、撒いたら「浮気だと思つてやがる」

アルテミスでもここまでは…いや、どうだったっけ？アイツいつも空<sup>うえ</sup>から見てみたいだし

「とにかく俺は自由のために立ち上がったんだ、これでもくらえ！」

少ない魔力を込めて札を床へ叩きつける

「え、そのお札は確か道満の——」

「呼ばれて飛び出て2日酔い！伊吹お姉さんよ〜」

おお！すげえ、ホントに出てきた！

「私を呼んだのはあなたかしら？ぬいぐるみのアーチャ…あら？」

「あ、あわわわ…」

さつきまでの勢いはどこへやら、遙が目に見えて狼狽えている！  
よし行ける！

「1柱に1人、影月家。ドーズ伊吹サマ」

「思わぬところでハルちゃん見つけた！」ヒック

「うっ、うわあーっ!!」ダッ

俺を追いかける時よりも早く逃げ出す遙とそれよりさらに早い速度でドスドスと追いかける伊吹童子

「寝酒するから抱き枕になつて〜♡」

「おねが、お願いだから食べないでください!!」

あつという間に見えなくなった、うん。これは…

「や、やったぞー！これがあれば堂々とナンパできるぜ！俺は自由を勝ち取つむぐ？」

………

「えーと」

今誰かが万力みたいな力を込めて俺を握ってるわけですが、一体どちら様、で…

「遥様に伊吹童子をけしかけ『堂々とナンパができる』だと？」

「オリオン、貴様」

アツ、やべ

怪獣みたいな顔をしたペンテシレイアと真っ黒いアタランテがお前は敵と言わんばかりに俺を見ている

だ、だがどうやってここが…？

「ふん、あの胡散臭い陰陽師もたまには役に立つな」

「そんなことより遥様を助けにいかなければ、制裁は任せたぞペンテシレイア」

「ああ、いいだろう」

陰陽師？…道満あの野郎！

「任せたぞアタランテ…さてオリオン？言っておくがアマゾネスの戦士は——アルテミス様のように優しくはない」  
「だっ」

誰か助けてくれえ!!!

## 第77話 コヤンスカヤからの業務報告 その1

ロシア モスクワ とあるマンションの1室にて…

チリリリリッ

「…朝ですか」

まだ日が見えない月曜日の朝

目覚ましにはやや似合わない控えめな音量で鳴る時計を止め、ベッドから起き上がる

時計の針は朝の5時、今日も普段と変わらない1日が始まる

まずは洗面所へ、洗顔クリームとお湯で顔を洗い眠気を完全に追い出してからキッチンに。

フライパンを火にかけて冷蔵庫から出したバターを投入、焦げ付かないよう適度に傾けながら空いた手で卵2つと砂糖大さじ1杯を大きめのボウルに入れる

「とんとん」

バターが全体に行き渡ったのを確認しつつ卵を泡が立つまでかき混ぜ、その中に白パンを浸す

量は…完璧ですね、両面から全体へよく染み込んでいて卵も余り無し！

パチパチと音を立てて待機しているフライパンへ、今浸したパンと昨日買ってきたスライスベーコンを2切れ入れる

今のうちに…

カップにミルクを注ぎ電子レンジへ、キャベツをスライサーで千切りを作りそのまま皿に。

フライパンのパンとベーコンをターナーヘラのような形の調理器

具、フライ返しともでひっくり返しつつ千切りキャベツにプチトマトを加えてドレッシングをかける

今日は果物もプラスしましょう

バナナの皮を剥いて一口サイズに包丁でカットし、キャベツのところに。

パンとベーコンがよく焼けたのを確認し皿へ移したところでレンジから温め終了の機械音が響く

「♪」

皿とカップをテーブルに運び、フォークを出せば準備は完了

「今日も命に感謝をして…いただきます」ぱく

このパン…グレンキでしたっけ？美味しいですけど次はもう少し砂糖を多めに入れてもいいかもしれませんねえ

優雅な朝食の時間を楽しみつっテレビの電源をつける

『昨日国防長官は昨年比べ、軍事費用の1割増しを宣言すると共に継続的な軍備拡大を——』

「…相変わらずこの国は血の気が多いですねえ」

もう1人のワタクシやザイルさんが裏にるのが要因でしょうが今世界各地の紛争地域で生物兵器が使用されているのでは、という噂が流れ始めてからロシア軍は以前よりも軍事力強化に力を入れている

まあこれが小国とかなら良いんでしょうけど生物兵器の疑いがあつた戦場の殆どに何かしらの形でアメリカが関わっていると分かればその気持ちも理解できます

「単にザイルさんが米軍の出張っている戦場に放っているだけでしょ

うが」

朝食を食べ終え、空になった皿を食器洗浄機に放り込む  
手洗い場で今日の香水はどうしようかと考えながら歯を磨いたの  
ち私室へ

化粧を済ましてビジネススーツに身を包めば準備は完了

「さ、今日も働きますか」

午前6時00分、バッグを片手に自宅を出て職場へと向かった

く

モスクワ空軍基地 整備隊事務室にて…

「よう」

だいぶ綺麗になったな

まだ誰も来ていない事務室の清掃を終え、掃除道具を用具入れにし  
まう

コツコツコツ…

足音…もしかして——

一区切りついたのとほぼ同時に部屋の外から聞こえてきた足音に  
身構える

と言っても不審者等を警戒するものとは違う、憧れや好意といった  
感情が先走って身体が強張るものだ

ガチャ

入ってきたのは——

「よ、クオーザ」

「はい！……？なんだお前かよ」



張り切ってるな！と上司面でにこやかな挨拶をする親友のズーク  
「お前最近俺という親友を雑に扱いきすぎじゃねーのか？」

…なんだあ？また点数稼ぎか？」ニヤニヤ

「んなーそんなんじや——」

ガチャ

「!!」

ドアノブが回り、扉が開き始めるまでの一瞬。稲妻が落ちたように  
会話と思考を叩き斬り、何食わぬ顔で向き直る  
今度こそ間違いない

「おはようございますタマモ曹長！」

「おはようございます、クオーザさん！」

おや珍しい、今日はズークさんも一緒にいらしてたんですね

「はっ！おはようございますタマモ曹長！」

「ええ、おはようございます。今日も頑張りましょう」

太陽のような笑顔の挨拶をし、荷物を置いて出て行くタマモさん  
事務室内で使うネームプレートを取りに行ったのだろう  
持ってきた缶コーヒーを飲みながら今日の仕事を確認する

再来週の飛行訓練のための燃料受領、一般公開する4機のMIGの  
外換手入れと演習場の整備…あ、生物兵器調査隊が今日戻ってくるの  
か

「でっ…いつ告白するんだよ？」

「ふぼぼおっ…!?は？…はあ?!」

親友からのエゲつない不意打ちに口から喉までの間にあつたコー  
ヒーを思いつき吹き出してしまった

アレは漫画やアニメの中だけの表現かと思っていたが違うらしい

「うわキツタネー!!」

「お前のせいだろ！なんだよいきなり！」

「いやいきなりも何もお前さ、仕事中也休憩時間もタマモさんがいたらずっと目で追ってるじゃねーか：1日やそこらならともかく1年以上ずっと流石にキモチワリ〜ぞ」

——え

「にも関わらずああしてニコニコ接してくれてるってことは：はあん俺の友人は罪深き生き物だなあ」

「い、い、意味不明なことを言うなよ！」

「じゃーなんでこの基地に来たからこういうことやるようになったんだよ？」

「こういうこと？」

「朝早く来て掃除したりよ、自分の担当以外のことの仕事もこなしたりしてよ」

「お前、前の基地じゃそこまで真面目じゃ無い指示待ち人間だったのに」

く…痛いところを…

「まー認めたくねーならいいけどよ、タマモさんものにしたいいんだったら早く手を打った方がいいぜ」

「うるっせえなあ!?!お前こっちの配属じゃねえだろ！」さっさとどっか行っちゃええ!

「はっはっは！親友のアドバイスは聞くもんだぜ？」

ムチャクチャにライバルが多いからな！と鬱陶しくゲラゲラ笑いながら部屋を出て行くズークの背中に中指を立て——

「クオーザさん？」

「つつは!？」

立てかけた中指を咄嗟に誤魔化す

「た、タママさん……!」

「またズークさんと喧嘩ですか？」

「いえ、ハハハ……」

あぶねー!見られたか?……多分大丈夫だろ

「んークオーザさんって仕事はできるのにどこか子供っぽいですねえ

お節介だろうとは思いますが喧嘩はともかく中指立てるのはやめた方がいいと……」

「ガフツ」

見られてた!ガツツリ見られてあああ!

「まあまあ、でも貴方のそういう子供っぽいところ

ワタクシは好きですよ?」

「好、えつつ」

それはどういう意味ですか?と聞こうとしても言葉が出ない、魚み  
たいにみっともなくパクパクさせる俺へにこやかな笑顔を返したか  
と思うとそのまま彼女は仕事机へと向かってしまった

流石に机まで追いかけて質問する勇氣は俺には無く、逃げるように  
自分の仕事を始めるのであった

「む、また人員差し出しの依頼ですか」

人に頼る前に自分の部署内を見直して欲しいものですがねえ

パソコン内のメールを確認しながら今日出勤してくる隊員の名簿

を流し見する

ここに来て昨日で4年…入隊自体はどうとでもなりましたが大多数からの信用を得るには時間がかかりますねえ（当たり前ですが）

おっと、そろそろ他の皆さんが出勤してくる時間帯ですね

「おはよう、タマモくん」

「おはようございますロクデナ小隊長、警備隊から4名人員差し出しの依頼が来ています」

「なにいままたか、タマモくんが頼りになるからといってこう頻繁にとは…」

「まあまあ、彼らも同じ職の仲間ですし助け合いですよ」

戦闘機の整備からゴミ出しに至るまで一切の妥協無く完璧にこなし、また業務改善にも力を加えた結果この皆様はワタクシを無くしてはならない隊員として『曹長』という階級を与え評価してくださいます

とはいえまだ4年、大きく動くには時期尚早な上にここまでスピード出世では敵も発生しやすい…なので小さいことからボツボツと始めていくとしましょう

「まずは…」

クオーザさんを食事にでも誘いますか

## 第78話 米軍の妖精／人でなしの勇者

アメリカ 米陸軍基地 居住棟にて…

「ツチ、中々良いデザインが浮かばねーな…」

昨日は新しいヒールのデザインを決める途中でうっかり机に突っ伏したまま眠ってしまい、気付けば朝になっていた

「朝なのに目が冴えちまった」

幸いこのあたりは日光が殆ど入らないように建築されてるからまだ良いんだけども

「おはよう！バーヴァン・シーちゃん！朝起きてくるなんて珍しいね」  
「ツチ」

「へ？ぎゃー！いたいいたい！」

「誰お前？馴れ馴れしすぎんだろ、敬語も使えねーのかよ」

潰さないように注意しつつ、爪が食い込む程度に彼女の頭を鷲掴み。

「つかマジで誰だよコイツ」

「私ですよ！この前ハイヒールを作ってもらったネリス兵士長ですよ！ホラ、中距離支援部隊の！」

「いやお前の所属部隊とか知らねーし興味もねー、で？なんか用？」

「ええ！実はあの靴を履いて先日彼氏とデートに行っただんですが」  
「デレレ」

「…」

くねくねしてて気持ちわりいな…

「アイツ靴ばかり褒めて私についての話題は殆ど触ってこないんですよ！しまいには『靴のレベルが高くて他部位のファッションと釣り

合っていない』とか！それでその日のデートは2人で1日中服を買い歩いてて…」

「うるせえしくねくねしててキモいんだよ、何が言いたいんだ？

スカスカなてめえに似合うように手抜きして靴作れとでも言いてえのかよ」

「そうじゃなくて靴のお礼を——あ！彼氏から電話だ〜♡」きやつきやつ

「サルかよ…付き合つてられねえんだけど」

殴りたくなるのを抑え、アホ女から離れる

あの自分勝手さ、アイツみたいだな…

『あつ！店長ちゃん聞いてよ！士郎がさあー！』

『え？お店の名前？貴女にとって世界で1番大事なものの名前を付けるとかはどう？』

「…」

タイガやシロウを冬木に置いてきちやった、店も放つたらかしだし

…

「アイツら元気かな…」

「誰のこと？」

「うわっ！」

ぬっ、とすぐ真下から聞こえた声に少しだけ驚いた

こいつはたしか…

「ミラ・ツールだったっけ、小さすぎて気づかなかったわー」

「ええ！身長伸びてるのに…！で、えーと？何を話してたんだっけ」

「アタシが知るわけ無いだろ、んなことより何やってんだ？」

「それは…ほら」

そう言つて彼女が指し示したのは2人の——

「は？マジでなにやってんだ？」

アーチャーのサーヴァント、パリスが2人立っていた。ご丁寧にぬいぐるみの神を頭に乗せて。

「片方は茨木ちゃんだね？それでもう片方が——」

「本物か、それで当てっこゲームしてるってことか？」

「うん！…でも分からなくて」

「騙されちゃだめです！本物は僕です！」

「違います！本物のパリスは僕です！」

「はあ、くっだらなことで盛り上がるんだな、ガキってのは」

「む、じゃあお姉ちゃんが当ててみてよ！」

「ええ…メンドクセエなあ、文句言うなよ」

近くにあったウォーターサーバーから水を汲み取り、2人のパリスの顔面へ中身をシュート

「うわあ！」

「ひゃっ！」

「おお…大丈夫？」

よし

「今羊人形が覗き込んだ方が本物。はい終了。」

「ず、ずるい！」

「文句言うなっつったろ」

「ええい卑怯者め！もう一度勝負しろ！」

鬼のあなたが言うの…

「は？やるわけねえだろ」

「ふ、そうか、分かったまぐれであろう！」

まぐれで見破ったものだから自信が無いのだな小心者

「お、伊吹童子だ」

「!!?」

脱兎の如く、という言葉がこれ以上無いくらい合いそうなスピードで散り散りに走っていく茨木とミラ

なんでミラ<sup>彼女</sup>まで？

「ど、どこだーどこから来ている!？」

「嘘だバーカ、じゃーな」

「:!? 貴様は鬼か!!」

「知るか、妖精だ」

ミラが戻ってこないのが少し気になったが留まって茨木童子に再度絡まれても面倒なので退散することにした

「はあー、ガキ共の相手はバーゲストとレガリオの仕事だろうが——  
そういうばアイツら居ないな、まだ寝てるのか?」

ピリリリリッ

「ん」

仕事用のケータイが鳴ってる…

電話に出る…前にひと呼吸し声と気持ちを整えてから通話ボタンを押す

「:はいヒールショップ『モルガン』です、どのような靴をお探しですか?」

「茨木ちゃん…? パリスくん…?」

伊吹童子、という単語に思わず駆け出してしまったが無我夢中で近くの部屋に隠れたのがダメだったらしい



こ、この部屋は確か…『冗談抜きで絶対に入ってはいけない部屋』と  
大人が言っていた部屋だ

元々は『絶対に入ってはいけない部屋』で私もそれを守っていたの  
だけど以前茨木ちゃんが入ろうとしてバーゲストさんに止められて  
から今の名前になった

倉庫でもないのに薄暗い…それに奥から変な匂いがする

「早くここから出パキッ

………

今の、音は…

聞き覚えのある音、5年前に鋳物工場へ入った時悲鳴に混じって聞  
こえてきた音によく似ている

「た、確かめなくちゃ」

怖いけど、じいやも牛若姉ももう居ない、もし、もしアイツがいる  
のならみんなに知らせないと…

ばき、ぶちっ、がっがっがっ…

むせ返る鉄の匂い…

サツと見て帰る、サツと見て帰る…！

薄暗い、ほぼ光のない廊下を歩き、物音のする小部屋を覗き込む

そこには――

「!!あ、ああ…」

大きな身体に大きな角を生やした女がベッドの上で人を、人を食べ

て――

「!誰だっ」

女が振り返る

なんとか頭を引つ込めて隠れたが腰が抜けて動けない

鬼が、鬼が近付いてくる

きつと私を食べる気だ…!

「ひ――あ――」

こてん

「…?ミラ・ツール?ここで何を…気絶しているな」

「ぐ…バーゲスト?どうしたの?」

「いえ、誰かが部屋を覗いていたのが見えました

…あとで説明しなければなりませんね」

確かにこの状況を見れば誤解するのは当たり前なのだが

『恋人を捕食しなければ理性を保てない』なんて10歳の子供に説明できる自信がありません…」

「まあまあ、僕も一緒に説明するよ、前向きに考えよう

それよりも理性の方はどうだい?」

ふむ…

「起床時と比べてかなり安定していますが…

その、すみませんレガリオさん、左腕も頂いて良いでしょうか…?」

「良いよ、ただそうすると治るまで少し時間がかかるから…その時は手を貸して欲しいな」

「え、ええ!もちろんですわ!…で、では失礼します」

パキヨツ

く

軍棟屋上　ヘリポートにて…

『こちら第4訓練ヘリ、これより着陸する』

「こちら誘導員、問題無し。そのまま指示に従い着陸せよ」

強烈な轟音と風圧を周囲に発生させながらゆつくりと一機のヘリコプターが着陸する

にしても騎乗スキルも無しに凄いな…彼本当にバーサーカーなのか？

パイロットスーツに身を包んだバーサーカーのサーヴァント土方歳三

たった今から彼は新選組副長であると同時にヘリパイロットにもなった

「お疲れ様です土方さん」

「ああ」

サーヴァントの身でありながらこの5年間で既に戦車、装甲車、戦闘機、ヘリコプターの4種の免許を持ち合わせている

現界時点で多様な乗り物を使いこなすことのできる騎乗スキルを持つサーヴァントなら驚くことではないのだが彼の場合はスキル持ちではない

つまり俺たち人間と同じスタートラインから始めていてこれである

クライムさんが唯一、対等な仲間として背中を預けることのできる人物というのがこの米軍基地の中の認識でそれは間違いではないだろう

「ところでクライムはどこだ？」

「中将でしたら共有棟内の墓地に向かわれました、今は死者の供養を  
していると思います」

「…そうか」

依然としてビースト達に大きな動きは無い、唯一の手掛かりは紛争  
地帯に撒かれた生物兵器ことNFFスペシャルである

生還者からの報告でそれがコヤンスカヤの兵器であることは間違  
いない

そして…連中があえて生還者を出しているのも。

明らかに中将を戦場に誘き出すための罠だ、とはいえ放置もできな  
い

結果、対獣部隊が結成され『極力戦闘を避ける』という条件の元に  
各戦地へ派遣され、情報を集めている

もちろん全ての戦闘を避けられるわけが無く、どれだけ慎重に動い  
ても銃を手に走る以上死者は出てしまうが…

「今日の部隊予定は何があった？」

「13時から射撃演習、15時からヴォーダイム氏を含む何名かの魔  
術師との交流会があります」

「…20分はあるな、分かった」

ありがとうと一言言ったのち早足でその場を去る彼を見送る

大丈夫だ、俺たちは戦える。2年前の大虐殺がトラウマになっ  
ていないと言えば嘘になるが知っている以上繰り返し返させる訳にはい  
かない、家族をあんな目に遭わせる訳にはいかない

だから怖くても銃を握る、クライムさんと共に守りたいものを守る  
ために。

「演習の準備をしなきゃな」

共有棟 屋外 教会前にて

「迎えか？バーサーカー」

「神父のアーチャーか、クライムは中か？」

「居る、がしばし待て。もう出てくる頃だ」

最古の英霊、英雄王ギルガメッシュ

5年前に言峰神父と共に仲間に加わった…訳じゃないが世界の行く末を見守る上でここより良い場所は無い、とは本人の弁

自分の庭を汚す獣へ報復のためもあるだろうが

「…」

時間が惜しいが場所が場所だ、予定自体は奴も分かっているだろう  
ここは待つか

「…バーサーカー、貴様は自分のマスターと向き合ったことはあるか？」

「いきなりなんの話だ」

「質問を返すな、不敬であろうが  
我の問いに答えよ」

クライムと向き合ったことはあるか、か。そんなの決まっているだろう

「無い、奴は自分で道を選んでそれを俺や仲間<sup>オレ</sup>に伝えた

その事実だけで充分、戦うために必要なのは道を選ぶ意思だけだ」

「であろうな、奴には欲が無い

既に死んだ身体だからでは無い、満たされぬ欲ではなくそもそも満たす器が無いのだ、それはもはや人では無い

酒ばかり飲んでいられるごその神霊の方がまだ人間味があるう」

黄金のサーヴァントは不機嫌そうに腕を組んだまま淡々と喋る  
「笑えぬ、微塵も笑えぬわ。あれが希望だと？」

人の上に立つ資格は無い、人の下に付く資格も無い、見ていて痛々しいことこの上無い

本気でかの脅威を打ち払うつもりがあるのか否か、一度確かめよ

——想いで救えるものなど無いと知るべきだ」

：

「……くだらねえな、さっきも言ったはずだ

奴は自分で道を選んでそれを俺や仲間に伝えた、その事実だけで充分

俺はクライムのサーヴァントとして敵を殺すだけだ、それでも

もしクライムと向き合う時が来るとすればあいつが——」

——

「はっ、案外薄情ではないか」

「……………そうかもな」

教会の扉が開いた——

ん……？

教会を出るとよく知った顔がそこにいた

「来ていたのか土方、それに英雄王まで

何かあったのか？」

それにしても珍しい組み合わせだ

「気にするな、既に終わった」

「?そうか」

相変わらず英雄王の俺を見る目はどこか威圧的だ、いや大抵の場合  
そうだとは思うが俺と俺以外を見る時の圧迫感がどこか――

「クライム、次の演習の時間が迫っている」

「分かっている」

奇妙な疑問をひとまず追いやり、教会を後にする

決戦までの猶予は残り半分を切っている、相変わらずザイルの狙い  
はよく分からないが力をつけておくに越したことは無い

「行くぞ」

↳

5年後 ???にて…

――

――

―― 近いうちに

お前は死ぬだろうと前から思っていた  
いやむしろもっと早く死んでいた

それに待ったをかけたのは俺だ

間違いだったとは思わない、その選択を否定はしないし誰にも否定  
させない

だから今選ぶんだ、お前の道を

今は、今だけはただの男としてお前と向き合おう

「……………」

それが答えか、分かった。なら――

「クライム、今日ここで死ぬ」



## 第79話 幕間 バルン・ファクター（1）

アメリカでの聖杯戦争より10年前

ワシントンdc F地区 とある酒屋にて…

とつとつと…

酒類の入った箱——ではなく、この国で違法薬物として認知されている物体が入った箱を運び終えて軽く背伸びをする

「バアちゃん、これこっちに置いてもいい？」

「そんな目立つところに置いてどうする！あと先生か師匠と呼べ！」

…あいかわらずるっせーバアさんだなあ

バルン・ファクター、16歳

学校での成績は良くも悪くも無く、決まりはだいたい守って時々少しだけ破ったりする

普段良く遊ぶ友人もいれば嫌いで嫌いで仕方ないクラスメートがいたりするし

普段は正直者だが魔が差して嘘を吐くこともある、どうしようもなく気に入らないことがあるれば物に当たることまあ少しだけある

目先の益に弱く、楽な道に弱く、美女に弱く、情に弱い

どこにでもいて、まだ何者にもなれる高校生…それが彼、バルン・ファクターであった

）

彼がこの酒屋でアルバイトを始めたのは中学校を卒業し、一人暮らしを始めたのと同様だった

たった1人で経営している日本人の高年女性を上手く誤魔化して、酒を購入してみようと考えていた彼はその女性が近いうちにアルバイトを募集することを知った

「ここバイト募集すんですか？」

「するよ、今すぐじゃないけど…もう歳だからね」

「チャンスだと思った、働いて信頼を得れば誤魔化しやすくなるし遊ぶためのお金も稼げると」

「んじや俺働きたいですー！」

「そうかいそうかい、なら高校生になったらまたここに来なさい」

「梓は空けておくからね」

「っしーありがとうございますー！」

目先の益に釣られて有頂天になっていた俺はそのお婆さんがどんな人物なのか知ろうともしてなかった

そして――

く

「え…これ…もしかして麻薬？」

知らない間に少年は裏社会へ片足を突っ込んでいた

違法薬物に興味はあったが手を出すつもりは一切無かった、酒や喫煙とは違い一度踏み入ればもう取り返しが付かないということとはTVで散々見ていたから

「――軽蔑したかい？」

「!!!バアちゃん…」

店長は目を合わせようとしない

「…いや」

「気を遣わなくていいよ」

「そうじゃないんだ、その…分からなくて」

酒屋が違法薬物の倉庫と化していた事実を知ったのはアルバイトを初めて僅か2ヶ月のことだったがその2ヶ月でも彼女の人となりは子供なりに分かったつもりになっていた

小腹が空いたと言えばお菓子を出してくれたし宿題で困っていることを知れば店を閉めた後で勉強を見てくれたりもした

たったそれだけが狭い視野しか持たない少年の目には目の前の老婆が法を犯す悪人にはどうしても見えなかった

「えっと…なんでなんだ？」

だってこういう犯罪ってお金が欲しいからやるもんだろ、言い方は悪いかもしれないがそんな大金が必要には見えない

手術するような難病に侵されているようには見えないし犯罪を楽しんでるそぶりもない

実はこっそり帳簿を見たことがあったのだが酒屋の経営だけで俺にバイト代を払ってかつ静かに過ごせるだけのお金は間違いなく持つてるはずなんだ

「…忘れるため、なのかもねえ」

普段笑っているか眠っているかのどちらかだった店長が初めて見せた表情

どこか遠い場所でも見るように部屋の隅に設置されたTV画面を見ている

格闘技の番組？あ、フーレンなんちゃらって拳法じいさんが映ってる

「警察を呼んでもええ、このまま黙って居なくなってもええ、どっちだろうとどんな選択をしようと貴方はババアに騙された被害者で通しなさい。ただもし

もし良いのなら…聞いてはくれんか、儂の50年の後悔を」  
「——うん、聞くよ」

この時考えていたことは正直かなりいい加減だった、明日からバイトはどうなるんだろうとか貯金が法に触れて全部取り上げられるんじゃないかとか

上の空で返した返事を真に受けた店長はゆっくりと話し始めるのであった

「50年前、儂は日本の伊吹山というお山の麓に住んでいた

両親は幼き頃に他界していたが村のみんなは良くしてくれた」

「村の人が育ててくれたの？」

「半分はな、学校なんてものは無かったから大人達から勉学を学んだ引き換えに求められたのは酒じゃった」

ええ…子供に酒作らせてたのかよ

「大人達が飲むものでない、神に供える酒じゃ。それに20年は作り続けていたから子供でも無い

…話が逸れたな、酒を捧げる相手の神は伊吹童子と言う

儂の家系は代々神に捧げる酒を作っておったからの、年に一度その年で作った最高の酒を影月の巫女に納めて神を祀っていた」

「儂はそれで一生を終えると思っていた、別になんて事はない

山の外を知らなかった儂は人生はこのようなものだと納得しているからの」

「なんつーか…悲しい人生じゃねーのソレ」

「ええい、儂が一番よく分かつとるわ！…ともかく、あの日いつものように酒を納めに祭壇へと向かったのじゃ」

『影月婦人？何故こちらに…今日は蛇神様にお酒を納める日では？』

『ああ言つてなかつたね、今日は此方が祭壇に上がる日なんだ』

上に居るだろうからそのお酒は娘に渡しておいて欲しい』

『うむ、了承した！』

いつもの通り石階段を登る、登った先には祭壇で正座する影月の巫女ただ1人。彼女に酒を渡してその場を去る、それでその一年の内で最も重要な仕事は終わるはずじゃった

祭壇に居たのは…2人。いや、1人と1柱

「柱？」

「日本では神を数える時に柱が単位となる

まあそれは今いいじやろ」

『つ……んんつ……ぶはつ、ごめ ごめんなさい……ごめんなさい……！』

『何故泣く？何故謝る？』

よい。よい。許す。

影月の子よ、お前はただそこに有るだけでよい』

下半身が蛇の女兒のような何が影月 此方を貪っていた

尾を巻きつけ、涙を舐め取り、細腕に牙を突き立て、蛇のような舌で口を犯した

これまでに無い異常だった、その女兒は理解できる言語を話すというのに何一つ理解出来なかつた

『んむ…あむ——む？おお、酒じやな

よい。丁度酒も欲しかったところ。

近う寄れ女、ここにその酒を持って』

「言っていないが儂は魔術師でな」

「……………ついにボケたか？」

「喧しいわ、くだらん茶々で濁すな」

じゃあ何か、妄想垂れ流し演説？

そう言いかけた瞬間メチャクチャ睨まれたので黙って聞くことにした

目力すげえな店長：

今すぐにも逃げ出したかった

だが今この瞬間、目の前の神の興味はぐちやぐちやの巫女では無く自分の持つているこのお酒に向いている

——逃げれば殺される——

無表情と無感情を貫き通し一步、また一步と神の方へ歩いていく

『——どうぞ』

『うむ御苦労、どれ…』グピ

神の顔を直視できない、かと言って巫女の方も見れない

か細く助けを求める彼女から全力で目を逸らし、ひたすらに神の頭に生えている角を見つめた

』

『……………う』

一口飲んでからかなり時間が経っている、何を考えて

『この酒や今までの酒は貴様が作ったのか』

『は、い……そうです』

『そうか』

気がおかしくなりそうじゃった、神の興味は巫女でも酒でも無く自分に向いている

値踏みしているのか引き裂こうとしているのかただ見ているだけなのか

『影月の巫女に釣り合うよい酒だ、これからも期待している』もう行ってよいぞ

『ありがとうございます』

興味が巫女へと戻った瞬間、儂は息を殺して背を向け凍りついた身体を無理矢理砕くようにその場を去った

『ま、待って——んぐ!』

背中に聞こえた助けを求める声が聞こえないふりをして。

神と巫女の姿が見えなくなった瞬間、儂は無我夢中で山を駆け降りた

他の誰がどうなるかなんて考えもせんかった、ただただ恐ろしかった

麓の教会に転がり込んで中にいた神父に見たままを伝えた、50年前の日本に不釣り合いな教会じゃったが…今思うと聖堂教会がある場所から山を監視しておったんじゃない

儂は保護され、後に1人の少年と共にこのアメリカへ送られてきたその少年は今フーレンと名乗っているが…まあこれは関係無からう

「…えっ?じゃあさつきTVに出てたじいさん、知り合いなの!?!」

「やつと興味を持ったかと思えばそこかい、一方的に知っておるだけじゃ

ともかく儂は逃げ出したんじゃない、本来やるべきことがあったにも関わらずな」

「やるべきことって…酒造り?..」

「起きた神を鎮めるための…英霊召喚じやよ」

…

「だからボケたのかバアちやイイツテええ!!!」

「馬鹿らしくなってきたわ!もうええ!」

これが漫画なら間違いなく俺の頭から煙が出ていると確信するよ  
うなゲンコツ!

オーイテエ…

「んちち…なんだよ!引つかからないからってボーリヨクに訴えると  
かずりーだろ!」

「んぐぐ、よーし分かった!そんなに言うなら魔術を教えてやろうで  
はないか!」

「え」

いやなんでそうなるんだよ、んな大麻より怪しいの要らないよ別に  
「んなオカルト教えるくらいなら酒の作り方でも教えてくゴボバツ  
!?!」

説明書を読まない原始人が車に灯油をブチ込むがごとく口に一升  
瓶が突っ込まれる、もちろん中身は酒

「おべえ!?!なにしやがんだ老害!」

酒に興味はあったがこんな飲酒体験はねえだろ!

「やかましい!魔術を使えるようにしてやると言うんじや!有り難く  
思え!」

「知るか豹変ババア!…ごええ…まず…」

ほとんど吐き出したのにも関わらず10秒で目眩、20秒で意識が  
混濁し、30秒後には目の前が真っ暗になった



だが――

〽

「ぐわー！これ超重い……よし、ここはちよちよいつと強化かけて……」

「こりゃー！」

「げっ!?店ちよこへぶ!?」

またゲンコツ！

毎日一杯は飲めとあの日以来例の酒を押し付けられ、律儀にもそれを守った俺は本当に魔術を使えるようになってしまった(ついでにアルコールへの耐性もup)

：自分でも何を言っているのか意味不明だが俺が飲んでいた酒は伊吹童子に捧げる酒と同じ作り方をしていたらしい、へー俺は神だったのか。

「俺が見ているところ以外で使うなど何度言ったら分かる！それと店長ではなく先生か師匠と呼ばんかい！」

「知るか！押し付けたのは店長だろ！」

使えるもの使って何が悪い！」

多分友人になんでバイトを辞めないかと言われそうだから先に言っておくと……うん。給料がインチキレベルで高いからだ、さすが麻薬倉庫！

裏社会に足を突っ込んでいると知った当初は狼狽えたものだが今は目先のバイト代しか見えていない、慣れとは恐ろしいな

「口の減らない奴じゃ……」

「うーん？バアちゃん、そこに鏡は無えぞたわば！」

再び頭に衝撃、確か一回の衝撃だけで脳細胞が数千個死滅するんじゃないかったっけ？

「というか変わりすぎだろ、バイト入りたての頃にいた優しいおばあさんはどこに行ったんだ…」

「そこまで使えるようになってるのなら儂の話が嘘でない事も分かるじゃろ」

「あーはいはい、英霊なんちゃらね。信じる信じるピヨツ!!」

　　3度振り下ろされるゲンコツ、だが間合いを理解していた俺は颯爽と避けたのである

　　まあ、避けた先に追いついてきた店長にそれまでで最も重いゲンコツを食らったのだが。

　　クソ、これがババア魔術マジックか…!

　　)

　　まあなんだかんだ言つて店の外で魔術を使うことは無かった

　　ああは言ったが魔術というものを目の当たりにして伊吹童子の話が妙にリアリティを浴びていたから…具体的に言えばビビっていたのである

「店長ー来たぞー!」

　　ある日いつものようにアルバイトしに店を訪ねた時のことだった  
　　…?

「店長ー!バアちゃん?アグレッツシブババア…」

　　…

　　あれ…?

　　いつもならここでゲンコツが飛んでくる筈なんだが…

「ん、キミ(この)のおばあさんと知り合い?」

　　ふと通行人に声をかけられた

「そうっすけど、出掛けてるんですかね？」

「あのおばあさんは——」

「バアちゃん!!」

「……………五月蠅い、ここが病院だということくらい分らんのか」

店長が倒れた、どうやら自力で救急車を呼んだらしいがそれで力を  
使い果たしたのか病室のベッドの上でぼんやりと天井を見ている

アグレッシブすぎて忘れていたが店長は俺がバイトをし始めた時  
点で既に80歳を超えていた、いつこうなってもおかしく無かったん  
だ

「だが丁度いい、伝えねばならんことがあった」死ぬ前に貴様に会えて  
よかった

「俺に…う…」

弱々しくも、いつになく真剣な彼女の表情に俺は傍へと駆け寄る

「いったい——」

「バルン・ファクター、今日限りでクビじゃ

…よし、伝えた。伝えたからもう帰っていいぞ」俺は静かに余生を  
過ごしたいからの

「んがっ…！身構えさせといてそれかよ、アグレッシブババア！」

もつと他に言うことあるだろ！と恨みがましく言うと店長はケラ  
ケラと笑いながら言葉を続けた

「ならば聞かせてはくれぬか、儂が伊吹山から逃げ出した話を聞いた時どう思ったのか。第三者であるお前に話の上にある儂の姿はどう見えたのか」

「どう見えたのかって…」

「そりやそれが真実って前提で話すなら——」

「普通じゃねえの?」

「——なに?」

「いやだってそうだろ、家の決まりで仕事するのはまだいいけど家の決まりだから神をなんとかしろとか無茶振りにも程があるだろ」

「そんなん快く引き受ける奴がいるとすればそれこそ作り話の勇者様みたいな気の狂ったお人好ししかない」

「俺だって誰だって逃げるだろそんなの、80年生きててそんなことも分かんないとかやっぱりボケ——ふぎやあ!」

「ゲンコツが!ホントは元気なんじゃねえの!」

「儂は死ぬまでボケン!…それにしてもそうか、普通か」

「いってー…ああ、普通だ普通」

「…」

「…泣いてんのか?」

「それ、もう少し早く聞きたかったの」

「じゃあもう少し早く今の質問しろよ、手遅れじゃねえか」

「そうじゃな、ならば手遅れになる前に1つ頼まれてくれ」

「?」

「酒屋奥の金庫の中に巻物がある、それを持っておけ」

「マキモノ?」

日本のニンジャとかが使うアレか？

「ああ、本来親から子へ託していくものだが口の悪いアルバイトにしか恵まれなかったんでなあ」

んなろー…

「トドメ刺すぞこんのババア」

「お前ごときに殺されるようなら80年も生きとりやせんわ」

死にかけか疑いたくなるくらい口が減らないな！

「時が来るまで中は見るな、そういう掟じゃからの

もし手放したくなっても捨てるな、その時は最寄りの教会にでも投げ込んでおけ」

「注文が多いな…分かったよ、金庫の暗証番号は？」

「忘れた」

…

「は？」

「忘れたと言った、若いくせに耳が遠いのか？」

いや、いや、いやいやいや！

「ふざけんな！開けられねえじゃねえか！」

「喧しわ！金庫ごと持っていけばいいじゃろ！」

必要になったら崖から落とすなり魔術に頼るなり力づくで開ける根性無しめ！

「ぐっ、がっ…」

ボツ、ケ老人があ…！

「そら、邪魔じゃ邪魔じゃ！帰れ！お前にもう用は無い！」

「あーはいはい帰る帰る！帰りますう！」

思いつく限りのサイテーな顔でコケにしつつ病室を出る

あの様子じゃ当分死にそうに無いな…あ、そうだ

「帰る前に聞かせてくれよ、金庫ってどんな奴なんだ？ダイヤル式なら聴診器で開けられるってTVで見たんだが」

「……………」

「……………店長？」

「……………」

返事が、無い

「店長、まさか「ああくん？儂や寝たフリで忙しいんじや、早よ帰れ」

「……………」

…俺より長生きしそうだな

フザけた元気っぷりにまた明日来れば良いか、と納得し今度こそ病室を出た

「はーっ、マジで最初に会ったころの面影無いよな…」またなババア

「ふん！」

『普通じゃねえの？』

「……………普通、か」

50年前伊吹山で何があったのか詳細は知らない、分かっているのはあの山にいた人間は殆どが死に絶えたことだけ

ただ酒を作れるというだけの自分がどうにかできたとは思えない  
が出来ることをやらず逃げ出した事実は時として『あの絶滅を止められたのでは無いか』と問いかけてくることがあった

善い行いをして相殺しようとした

50年前の行動がより浮き彫りになるだけだった

悪い行いで埋め隠そうとした

余計に50年前を思い出すだけだった

葉

1人ではどうにもならないままこの時を迎えてようやく聞いた言葉は誰かに許されたかったのか…いかな

望む言葉が聞けたのは良かったが1つ心残りがあった

それは彼、バルン・ファクターをつい本当の孫のように思ってしまった故の甘え

巻物は放棄していい、捨てていい。お前は若い、何者にだってなれる

どうかこんな老人のわがままに振り回されなくてくれ

——というのは勝手が過ぎるか

…それもそうだ

「何も言わずに分かってくれなんて、虫が良過ぎる話じゃ…」

そしてその翌日、再び面会に来た時のこと

「——え」

………嘘だろ？

店長が死んだのは、俺が面会して僅か20分後だと言う事実を知ることになった

## 第80話 幕間 バルン・ファクター（2）

F地区 ナショナル・ギャラリー美術館 秘密基地にて…

ええと、俺はある魔術師の申し出により金庫を開けてもらいにきたんだが…

「これで終わりだ！」

あの人は金庫相手に何を叫んでるんだ？

「サイコパワーの前にひれ伏せエイ！」

ふん！と女性にしては野太い声と共に突き出された手刀は見事に鋼鉄の金庫にめり込んでおり…

「や、やった！開い——」

「おらあ!!」

直後、まるで風船の如く金庫が紫の爆炎によって消し飛んだ

「…え、消し飛んだ？」

「弱い！弱すぎるウ…！？どうしたの？金庫開いたよ？」

「消し飛んでんじやねえか！中身は!?!ねえバカなの？何考えてるの!?!」

「うるさいなあ、中身ならホラ。その巻物しか入ってなかったよ」ポイ  
「おわわわっわ、わ！」

あの爆発でどうやって…マジでなんだよこの人…

「さっきのなんなんだ？魔術か？」

「え？サイコパニツシャー」

「……………」

もう聞くのはよそう、金庫は空いたというか無くなったし



脇で抱えられるような大きさのくせに、ハンマーで殴ろうが魔術でどうにかしようが学校の屋上から落とそうが盗んだバイクで轢こうが、どうやっても開けられなかった店長の金庫はあからさまに怪しい科学者のウルトラコンボで空くこととなった

彼女の名前はノーア・克蘭ツェル、店長に親戚が居なかったという事で代わりに店の片付けをしていたところ酒を買いに来た魔術師、という訳だが…

「え？中身まで吹き飛ばすところだったって？大丈夫でしょ！知らんけど！」

何も無い虚空に向かって楽しそうに話すその姿は明らかに常軌を逸している

つか絶対薬物キメてるだろこの人…

情緒不安定な魔術師が如何に危険な生物か俺はよく知っている

「で少年Aさんよ、巻物にはなんて書いてあるの？」

「読みたきゃドーズ」

特に躊躇うこともなく巻物を彼女へ手渡し

店長には時が来るまで中は見るなど言われたが人に見せるなどは言われてないからなあケケケ

我ながら結構ヒドイことをしている気がするがあそこまで頑丈な金庫にポツンと入れてあった巻物に何が書いてあるのかどうしても気になったのだ

「ほうほうふむふむ…うつわスゲエ、これ神酒の精製法がビツチリ書いてある」言わば一族の秘伝書ってヤツかな

「え」

あそこまで勿体ぶって隠してたのが酒の作り方って…

「いやいやいや！これマジで凄いよ、作ればボロ儲けできるんじゃない？」

「……………面倒くさいっすね」

が、中身がしようもないとは言え約束は約束だ、手放すのなら教会に。という店長の言葉を守って俺が持つていくべきだろう

「とりあえずありがとうございます、約束のお酒っす」

「その巻物が代金じゃ、だめ？」

「だめっす、店長との約束に反するんで」

「……………中身見せたくせに」

俺は見えないからセーフ！

とまあ肩透かしを食らったもののスッキリとした気分では俺は秘密基地を後にした

…いや待て、秘密基地ってなんやねん。冷静に考えて美術館の地下になんでこんなものがあるんだ？ノーアとかいう女いったい——

「ん”ん？どうしたの？」

「——別に!？」

…関わっちゃいけない人だ、うん。帰ろう

巻物を手に今度こそ秘密基地を後にするのだった

正直麻薬倉庫よりこの人の方が怖いからね！

く

「ねえダヴィンチちゃん、あの金庫と巻物…」

「うん、伊吹山で感じた魔力がこびりついてた」物凄く薄いけど。

「じゃあ少年Aは関係者？」

「——じゃないと思う、多分…誰かに託されたんじゃないかな

教会に持っていくって行ってたし変に干渉しなくても良さそうだよ」

んー…そっか、そうだね

帰り道にあった教会に寄って、そこにいたエナ・アルバート？って  
いう子供神父に巻物を渡してきた

やたら興味を持っていたな…まあ関係ないか

」

そして弓矢のような5年が過ぎ…

「ふいー、大分片付いたかな」

結局俺は酒屋の仕事を辞めることは無かった、店長からクビだとは  
言われたが店を乗っ取るな、とは言われてないからな！

なーんて言ったはいいが勿論からくりがある、高校生1人になんとか  
できるほど経営は楽じゃない

あ、ちなみに麻薬倉庫としての仕事は無くなった、どうも店長が死  
ぬ前に自分でバラしたらしく今はただの酒屋だ

それでもキツイことに変わりはないが

「調子はどうだ、ファクター」

「アンペルドさん？お久しぶりです！」

元々ここを使用していた犯罪組織、ウルフルズの幹部であるアンペ  
ルド・ローラーが店に来ていた

ちなみに17歳。…え、17歳で幹部ってヤバくないか？

「お前の方が年上だろう、他の奴がいるならともかく1対1で敬語は

「必要ない」不自然だ

「…了解」

ぶっちゃけアンタの立ち振る舞いの方が不自然っていうか不気味だけど

既に分かると思うが俺は完全に裏社会へ両足をつっ込んでいる：いや俺自身が違法行為をしているわけじゃ無いが

「言いたいことは分かるが諦めろ。ここで今まで仕事を続けてきたのはお前なんだからな」

「分かっていますよ」

手遅れ、という言葉が1番近いだろう。何にでもなれた少年は今や組織の端で酒屋を営む青年に

確かに向こうからしてみれば俺を易々と逃がすわけではない

ここを仕切っていた人間が死んで、代わりにどこぞの高校生が店を回していれば否応にも尋問タイムだろう

あれは生きた心地がしなかった

「どうした」

「いや別に…」

例え敵だって分かりきってた奴が目の前に居たとしても尋問タイムん時のアンタの目は人間に向ける目じゃ無かったぞ…

結局店長が残していた俺を弁護する遺書も虚しく俺へのスパイ容疑は晴れなかった、店長自身経歴に謎が多く信用が無かったことが原因らしい

監視する名目で酒屋の経営を今日まで俺に任せていたのだ  
だがそれも今日までだ

「行くぞ」

「ういっす」

5年もの歳月を費やしたことで俺への疑いが晴れたらしく、もう酒屋を続ける必要が無くなった

…ああ、もつと友達と遊ぶ時間が欲しかったしなんならその友達が欲しかった

今更ながらに5年前このアルバイトを始めたことを後悔していたが過ぎた時は戻らず。ここから再スタートするしかない

「とところでどこに行くんだ？」

「着けば分かる」

「……………」

彼は多くを語らない、下手すれば用済みな俺を殺…

などと考えて懐にスタンガンを忍ばせてある

とりあえず殺されそうになったらコイツを振り回して「ああそうだ」

ひよいつ

「あ。」

物騒だから貰っておくぞ、とロングコート内ポケットに隠しておいたスタンガンを盗られてしまった

「な、なんでバレたんだ!？」

——はっ!？」

「……………やれやれ」

「いやこれは違くて、ですね」

「自己防衛のためだろう、別にいい

それと隠す気なら普段からそのコートを身につけておくんだな」今日だけ服装が変わりすぎだ

な、なるほど…

それから30分程歩いて着いたのは港の端、寂れた廃工場だったアレ？ここって確かギャングのアジトって噂があったような

「改めて自己紹介だ、俺はザイル・ニッカー

ウルフルズというギャングのリーダーだ、ただ巻き込まれただけかもしれないが諦めろ。お前の働き口は今日からここだ」

「——え」

でええええええ!!??

「お、俺が」

ギャングなんてやれるわけ無いでしょーが!!!

く

更に5年後

廃工場（アジト） 娯楽室にて…

「なーんて思ってたんだがな」

「へー」

へー、って

興味無いねと言わんばかりに携帯ゲーム機をポチる後輩くん

「お前さん、仮にも俺先輩よ？班長よ？君入って何年目よ？」

そこはもうちよつと掘り下げようとか思わない？」

「いや特に、それにこう言っちゃなんすけど5年もやっててヒラ一個

上の班長つてもはやギャグでしょ

自分1年目ですが来週から班長ですし」

「ぐぬう」

しかし仕方ないのかもしれない、俺の仕事はあくまで裏方。酒屋を始めとしたウルフルズ傘下にある店舗の管理だし

いざ銃を握れと言われても十中八九無理だ

出世は無いが危険も無い、ザイルからは『銃を握る覚悟があるなら申告しろ、俺はどっちでもいい』とだけ

もちろん銃も人殺しもごめんだ、ボロ儲けというわけではないが管理の仕事は普通に働くよりも儲かるようだしなによりアジトにいれば生活費は食費以外かからない

そして1番のオイシイ点は――

「え、なに、お前俺のこと嫌いなワケ？」

「嫌いだったら途中で部屋出てるよ」ゲームやらない？

「…へへへ、そうか」やるやる！

友達がメツチャできたことだ！

もう死ぬまでギャングの下っ端で良いんじゃないか、本気でそう思っていた

「フアクター班長ー、お客さんが来てます」

「えっオレ？」

いざゲームを始めようとしたその時、開いたドアから聞こえた声

「よりによって休憩時間中に…どちら様？」

「教会勤めの子供、だと思えます」

…？…そんな知り合い居たかな

「何か言ってた？」

『巻物を返しに来た』と伝えれば分かるって」 どういう意味だ？

——あんだって？

く

教会にて…

「来てくれてありがとう」

「ずっと見なかったが…この際なんで年とってないの？とかはいい、俺に何の用があつてここに連れてきたんだ」

その質問を待ってましたと言わんばかりに彼が俺に手渡したのは以前俺が渡した店長の巻物だった

今更なんでき

「まあまああとで説明するから、とりあえず持って魔力をこめてよ」

「はいはい…あつつつ痛あ!？」

バチンと音を立てて右手の甲に赤い刺青が浮かび上がる  
火傷するかと…いやこれ火傷じゃねえのもしかしたら

ちなみに神父はというと『やつぱりそうだった!』と嬉しそうに  
きやあきやあ言いながら騒いでいる

無性に殴りたい顔だ…

が、そんな気持ちも一瞬で吹き飛ぶ事象が発生した

「サーヴァントセイバー、渡辺綱。…聖杯戦争か」

「はい?。」



日本の侍というか武士というか…とにかく剣士が目の前に立っていた

え、どちら様？

「……………特に言う事はない、鬼や魔性を切る以外に秀でた面は無いが呼び出された以上は役目を果たす、好きに使え」

「神父さん？これは一体どう言うことなんです？」

「え？見ての通り聖杯戦争の準備」

見て分からないの？とか抜かす神父

「いや聖杯戦争って、なにさ？」

「グランドクラスは既に現界している、という事はビーストもどこかに…？いやまだ顕現してないだけかも…へっぴー！」

あまりに腹立ったのでポケットの中にあるハンカチ（洗おう洗おうと思って早2週間の物）を神父の口の中に突っ込んだ  
もういいわ、このハンカチゴミで。

「なにをするの！」

「説明を！しろ！」

お前が暴走するせいでツナとかいう人、どうすればいいか分からないよ多分！一言も喋ってないし！

「ようするに魔術師同士の殺し合いさ、7つの勢力で争って生き残れたら勝ちみたいなの？とにかく私はやる必要があるから聖杯戦争についてはセイバーに聞いて、じゃあね」

「ちよ、おい待てよ——」

バタン

バグレベルに早い歩行で彼は奥の部屋へ行ってしまった

「おいって…ちっ」

「…丁寧に鍵かけやがってあの神父！」

「マスター」

「それ俺のこと？」

「ああ」

………

「ええとセイバーさん、でいいのか？」

「ああ」

『聖杯戦争についてはセイバーに聞いて』

「…いくつか、質問していい？」

「ああ」

く

「おかえりなさい、休憩時間ギリツギリまで戻ってこないからママは心配しましたよ〜？」

「あーうるさいうるさい、間に合ったからいいんだよ」

「はいはい、先行きますからね」

7人の魔術師それぞれ7つのクラスに分かれた英霊を連れ、万能の願望機を巡って戦う、それが聖杯戦争だとセイバーが改めて教えてくれた

つまり魔術師って職業のヒトと彼らが従えているであろう英霊相手に564合いしろってことかなるほど

…無理じゃない？

「マスター」

いやいやいや無理！俺ただの下っ端ギャングよ？高校生の時から中身殆ど成長してないお子様よ？…自分で言ってる悲しいなコレ

「マスター、話を聞いてくれ」

「ツナ!?いつからそこに居たの!?!」

「ずっと後ろから着いてきていた、それと俺のことはセイバーと呼んでくれ」

あ、そういえば名前を晒すことは弱点を晒すことになるからやめた方が良いつて神父が言ってたっけ

「分かった、セイバーの話ってなんだ?」

「マスターは聖杯に託す願いはあるか」

「え、いや無いけど」

嘘である、大金持ちになりたいし巨乳美人と結婚したいしイケメンになりたいし豪邸に住みたいしチャホヤさりたい

だがそれは12人（マスター+サーヴァント）も殺してまで叶えないのかって言われたら答えはNOだ

「そうか、俺も願いは無い」

「……」汗

じゃあなんで聞いたんだよ

「願いは無いが神父の言っていたグラウンドクラスという名前が引つかかる

だが俺はサーヴァント、マスターからの魔力が無ければ現界するのは無理だ」

「はあ…それで…?」

「グランドクラスについて調査をしたい、協力してほしい」

「俺にサーヴァントについての知識はほぼ無いぞ」

「現界できるだけの最低限の魔力が欲しい、あとは自分で調べる

契約早々かなりの勝手を言っていることは重々承知している、だが」

「分かった！」

「む？」

「いいよ、オツケー。他に使い道は無いし（あると言えばあるけど）殺し合いの意思が無いのならいいよ」

んな度胸は俺には無いから

「——本当にいいのか、聖杯を諦めることになるが」

「別に？それよりもその調査ってヤツ俺もやるよ、俺はグランドなんちやらがどんなのか知らないが知ってそうな奴は知ってる」尋ねに行こうぜ

「…感謝する、マスター」

中身が高校生——いや中学生の時からロクに変わっていないなかった俺にとってこれもある種の憧れだった

最優のクラス、セイバーを召喚した未熟な魔術師…端的に言えば『選ばれた』なんて思い込んで調子に乗っていたのである

が、しかし

く

F地区 ナショナル・ギャラリー美術館 秘密基地にて…

「……か？」

「ここだ、サーヴァントのこと知ってるかは分からないが魔術師なのは間違いナシ」

他に手掛かりがあればなあ、正直薬物ウーマンだからあんまし会いたくない

一応好きそうな酒は持ってきたけど…

「誰かいるぞ」

「そりやいるでしょ、薬物女サンが」

「聞いていた話と違う、少なくとも2人の人間と2騎のサーヴァントがいる」

「——なんだって?」

ピッ

「?」

今何か——「マスター!!」

カッ

「うわっち!?!」

天井が落ちるんじゃないかという爆発と一瞬遅れて発生した爆風に身体を持っていかれそうになったが間一髪セイバーが庇ってくれた

べしや

「怪我は無いか」

「あ、ああ無い。ありがとうセイバー」

にしてもいったいなんだってんだ?なんか足の上に乗ってるし—

ーって

「ウワァー!なんじゃこりゃ!!」

右手首の無い男の死体がもたれるように足元にあった

当然たまったものではない、葬式以外で遺体を見るのなんて初めてだったし

っていうかなんでここで人が死んでるんだ?何があつたんだ?

「マスター、ノーア・クラントツエルは敵だ

間違いないクサーヴァントを従えた魔術師でありこの男を殺したのも彼女である可能性が高い」

え

「いったあい!そのハリセンどんな強化したの?地味に痛い!完成された芸術を傷つけるなんて否人道的だ、訴えるよ!」

「後ろから見たモナ・リザなんて描いた本人も知らないでしょ!」

「ど、どうしよう?どうすりゃいいんだ?」

「今すぐ撤退だ、ノーアがマスターならここは恐らく彼女の工房だろう

クラスはキャスターかアサシンのどちらか…」

「コーボー?」

「自分にとって何をすることも最適な空間のことだ

魔性相手なら勝ち目はあるだろうが何も情報のないクサーヴァント相手に相手の工房内で勝負を仕掛けたところで殺されるだけだ」逃げろぞ

そして俺たちは爆発によって生じた停電と煙によっていち早くその場を去った

もし先に彼女の元へ来たのがあの殺された男性ではなく俺だった

ら――

F地区 路地裏にて…

「俺は決めたぞセイバー」

「何をだ」

「決め事は3つ」

ひとつ目はこれからの方針だ、グランドクラスの調査をメインに進めて見つけたら協力を申し込む。グランドサーヴァントは聖杯を勝ち取るつもりが無いんだろ？」

「その通りだ」

じゃそいつに協力してれば他サーヴァントから殺される危険はグッと減るんじゃないか？

上手くいくかは賭けになるが

「よし、ふたつ目はこの令呪だ」

「令呪？」

「そう令呪、マスターの証とも言えるコレは全力で隠す、いつ誰がどんな状況で見えてくるか分からないからな」

「隠蔽魔術に長けているのか？」

「とんでもない、そんな人を騙くらかせるような器用な魔術は使えない  
い

だから頼むセイバー」

本気か？

ああ本気だとも、だから俺の覚悟が変わらないうちに早くやっくれ  
れ

正直かなり怖いから！

渋っていたセイバーだったが説得の末、折れてくれた  
うん、セイバーが炎を使えてよかった

「あ” つつづううあああ!!!」

セイバーの炎が令呪の刻まれた右手を燃やす

「ぐあああつ!!!メチャクチャ痛いし熱い!やるんじやなかった!!!」  
くそう涙も出てきた、何やってんだ俺…

だがその甲斐あって令呪は完全に見えなくなっていた  
これ元に戻るか? 戻るよね、戻るに決まってる! ヨシ!

「はー! はー! はっ、サンキューセイバー。」

2度とやんねえわ」

「…俺も金輪際やりたくはないな

そういえばみつつ目はなんだったんだ?」

「みつつ目? 1番大事な奴だ、グラウンドサーヴァントの調査が終わっ  
たら——」

く顔面歪むまであの神父を殴ってやるく



## 第81話 コヤンスカヤの業務報告 その2

ロシア モスクワ とあるマンション前にて…

「……………」

木枯らしがコートの上から体温を奪おうと夜の街に吹き荒れる中、  
1人の男がマンションへと入っていく

時刻は11時、少々遅くなってしまった

「タママさん、俺です」

「開いてますよ」どうぞ

優しく明るい声に従って部屋の中へ

気になっていた女性の部屋ということので初めの頃は緊張していた  
ものだが今では微塵も——いや少ししかない

「遅かったですね」

「ええ、ただ大きな収穫もありましたよ」

バッグの中のUSBメモリ、ある意味どんな爆弾よりも凶悪な中身  
をしているこれがその収穫だ

「では——「待ってください」

いざそれを差し出そうとして彼女に止められる

「タママさん？」

「貴方は…今の貴方はまだ引き返せませす、それがどれだけ人道的で正  
しい行いであろうとそのUSBをこちらに渡した瞬間、貴方は祖国を  
裏切ることになる

今辞めれば最悪でも罪人として牢屋に入るだけで済むでしょう」

「……………」

彼女は目を合わせない、だがそれはきつと俺の身を案じてくれたの

ことなんだろう

「私と違い貴方には後ろ盾が無い

…このままでは近い未来必ず後悔します」本当にこの選択でいいのか今一度考えてください

最後通告、分岐点、今が間違いなくその時だったが俺の答えは決まっていた

「しませんよ、どうかあのおぞましい兵器から世界を救ってください」

「——ありがとうございます、本当に。」

こうして俺は彼女に核燃料保管庫のデータ及び核発射実験データ、そして…核開発データの入ったUSBを手渡した

くもう後には引けないく

俺一人ならこんな決断はしなかつただろうな、なんてタマモさんが用意してくれたコーヒーを飲みながら考える

きっかけは去年の秋、タマモさんと交際を初めて丁度1年が経った頃だった

く

1年と少し前

タマモのマンションにて…

「——冗談ですか？」

「いいえクオーザさん、私は正真正銘、アメリカから来たスパイです」

告白をしよう、想いを伝えようと決心していたその日、自分よりも早く告白をしてきた彼女。だがそれは愛の告白などではなく——

「私はロシアから世界を救うために来ました、どうか力を貸してください」

平和な日常から一気に逸脱する告白だった

そこで俺は彼女の口から色んなことを聞いた。ロシアが裏で研究している生物兵器のこと、実験として米軍のいる紛争地帯に投入されていること、数年前の米軍大虐殺事件にその生物兵器が使われていたこと、タマモさんはその事件で友人を亡くされていること、そして事件の核に近づくにはどうしても現役ロシア軍人の助力が必要なことを

向けられてこそいないが彼女の手にはベレッタ（ハンドガン）が握られており、ロシアでは見ないタイプの物だった

「もし…断つたら？」

「残念ですがご想像の通りになりますね」

とうとう銃口が向けられる

本気なんだと理解した、同時にそれまで彼女が俺に向けていた笑顔は全てこのためだった、というのも

——本当にそうだろうか

「俺は、どうすればいいんですか」

「それは貴方が決めることです、私を捕まえるのかどうかを「違えます」

「？」

「貴女の力になりたい、俺は何をすればいいんです」

悩んでいたのも一瞬、俺は自然とそう答えていた

「え、正気ですか？祖国を裏切るんですよ？」

「それだけ聞いたら黙ってられませんかよ、それにタマモさん俺が断つたところで俺を殺す気なんて無かったでしょう」

「買い被りすぎですよ、邪魔となれば殺すつもりでしたが」

「安全装置、かかってますよ」いや、かけていたと言えば良いですかね  
「——はあ、敵いませんねえ貴方には

言っておきますが体よく利用するだけですよ」

「良いですよ、貴女になら」

こうして彼女と俺の密約は結ばれた

正直なところ嬉しかった、彼女の力になれることや彼女に頼られたことじゃない、もちろんそれもあるがそれ以上に彼女が俺だけに秘密を打ち明けたという事実が嬉しかった

）

「——よう」

誰もいない事務室で上官のPCからアクセスを試みる

分かってる、多分彼女はこういうことを何度も経験してきたのだろう、俺に接触したのも俺が1番都合の良い立ち位置に居たから。

国なんてどうでも良いと思っていてタマモという女性に心酔して  
いてある程度周囲からの信頼を持つ人間。

日にちをかけて、時間をかけて少しずつデータをコピーする

少しずつならなんとか誤魔化しが効く

だが嘘だとわかっているてもあの出会いを、思い出を嘘と認めたく無  
かった

勘違い、嘘、そんな言葉ではもう片付けられない2年間を彼女と過  
ごしてしまった

）

そして現在

「——ふむ、確かにこれだけのデータがあればロシア政府を脅すには充分ですね」

「じゃあ……」

「はい！ありがとうございます、クオーザさん♪  
おかげでワタクシの仕事は完遂できそうです」

パヒュツ、ピュツ

音を控えた2発の弾丸が、胸を貫いた

「——」

「というわけでもう利用価値が無くなったのでここでサヨナラです♡  
望むなら保護しようかとも思ったのですが利用されるだけで良いとの証言もとりましたのでここで死んでくださいね♪」

「ご協力ありがとうございました！と倒れ伏す俺に彼女が頭を下げる

「……」

いつかこうなるとはどこかで思っていた、のに  
改めて彼女が俺を見る目を見ると——

「ああ——そうなんだ」

この人は俺に興味が無いんだな、と分かる彼女の笑顔  
先程までとは違う誰にでも分け隔てなく向けるその顔ですぐにそ  
うだと分かった

ポロ……

「あれ……？」

不思議だ、彼女にとって俺だけは特別だと思っていた…さつきまで  
そう思い込んでいたのにいざそれが違うと分かると――

「…ああ」

俺は何をやってるんだ？ 出会って数年しか経っていない女性のこ  
とを分かったつもりになって、あっさりと自分の人生を差し出して…

涙が溢れてきた、朦朧とする意識と涙で殆ど前が見えないが見上げ  
ると丁度タマモが玄関から出て行くこうとする後ろ姿が見えた

「すぐく…馬鹿みたいじゃないか」

## 第82話 スカウト

NFFボーダー ザイルの部屋にて…

「というわけで核燃料保管場所の特定は完了、現在は核発射データの解析を実行中です」

「分かった、そのまま頼む」

久しぶりに戻ってきたコヤンスカヤ（アサシン）から報告を聞きつつ支度を整える

「あら、どこか行かれるのですか？」

「冬木市にな。丁度良いからお前も来い

使えそうな人材が無いか見に行こう」

「ちなみに使えそうというのはどっちの意味でして？」

「そうだな…」

「基本使い捨ての兵器としてだ、人類殲滅なんて馬鹿らしいことに付き合う奴がいれば別だが」

「確かにそろそろ次代が育ち始める頃でしょうが…御三家あたりにアテでも？」

「アテか…」

「アインツベルンの内情を齧ってる程度だ。特に無い、しかし拾った弾丸で100人殺せるのなら調べるに越したことは無いだろう？」

「ふむなるほど、是非<sup>ご</sup>同行致します！」

多分例の靴屋目当てだろうな、と内心思いつつも安心した気分そのまま身支度を済ませる

コイツは知らないが今の冬木市には――

冬木市 とあるコンビニ前にて…

「こ、こんなのってあんまりです…」

「…泣く程のことか、やれやれ」

ミンミンと喧しく鳴くセミの声などまるで耳に入っていないようにシクシク泣くコヤンスカヤ

「分かった分かった、俺の分のクレープもやるからそれ以上泣くな。アホだと思われるぞ」

「誰がアホですか！というかザイルさん、分かかってワタクシを連れてきましたね!？」

うう…それはそれとしてクレープは貰いますが」

「やれやれ…」

道路を挟んで向かい側、以前は主張の激しい靴屋だったそこはなんの変哲も無い弁当屋へと姿を変えていた

どうやらコヤンスカヤはこのヒールショップを相当に気に入っていたらしく、ロシアでの仕事中也時々思い出していた程だったとか

…だからつてここまでダメージを貰わなくてもいいだろうに

「お前の気持ちは分か——いや、全く分からないがそろそろ切り替えろ

御三家の調査を買って出たのはお前だぞ」

「……………はっ」

おおよ、とハンカチ片手に報告を始めるコヤンスカヤ

どうやら調査はずっと前に独自でして終わっていたらしいがそれならもっと早く報告してほしいものだ

「ぐすっ…まず遠坂家から、前当主である遠坂時臣氏が死亡してから  
は遠坂凜が当主となっており魔術の才能も申し分ありません。学生



としても特に目立ったような欠点は無く分かりやすい優等生といった印象でしょう

次にマキリ：ここでは間桐と呼びます。こちらには2人の魔術師がおります

まず1人目は間桐慎二：彼は正直本当に魔術師の家系に生まれたのか疑問に思うレベルで魔術の才能が無いです、学生としては成績は優秀なものの性格が悪いせいであまり：というかほぼ友人が居ないようです

もう1人は間桐桜、こちらは元々遠坂桜という名前だったようです  
が遠坂家先代当主の遠坂時臣によって養子に出されたようです

魔術師としての才能は不明ですが時臣氏が差し出した以上、間桐家が納得するレベルの魔術師である可能性が高いです：まあ前述のワカメが一般人過ぎたせいで妥協した可能性も否定できませんが。

性格は：なんででしょうね？引つ込み思案ウジウジ系後輩？

最後はアインツベルンですが：こちらはワタクシよりもザイルさんの方が詳しいのでは？」

「そうだな、イリヤスフィールのことは何度か切嗣から聞いていた  
魔術師としてよりも娘としての話が多かったから詳しくは分からないが一般魔術師の枠に収まらないのは確かと見ていいだろう

どうも外見はあまり成長していかないらしく俺が話を聞いた時はライフルよりも軽いなんて言っていた：今思えば異常だな」

「なるほどなるほど、で？どうします？」

「どうせまだ3年強はある、お前は穂群原学園に教師として潜入して遠坂凜、間桐慎二、間桐桜の身辺調査を。魔術師としての才能も良いがそいつ自身の技能や特技を知っておきたい」

場合によっては即排除も視野に入れなければならないからな

「ええーっ！今からですか？」

「今からだ。ロシア軍に潜入するよりは手間も時間もかからないだろう

俺はしばらく衛宮家にいる、そこから衛宮士郎とイリヤスフィールについて調べるつもりだ」滞在する上で充分な生活費は先に送ったからな

押しかけが過ぎません？なんて言っているコヤンスカヤの言葉を聞き流し、俺は衛宮邸へと向かった

）

3ヶ月後

衛宮邸にて…

トントントン…

「両手とも義手なのに包丁の上達が早いな…」

「これか？生身の頃と使い勝手に差異は無いからな、上手くなったように見えるのなら士郎の教え方が良いというだけなんだろう」

衛宮邸の台所、2人並んで夕食の準備をする

「切り終わったぞ、味噌汁の味はどうだ？」

「んー、もうちよつと濃いめの方がいいかもな」藤姉って鈍感だし

「違ういな」

「しいろー？聞こえてるんですけどー？」

って待てい、何故野郎2人が台所に立っていて私は居間でのんびりしているんだ？ここは…逆！そう、大人の魅力溢れるこの私が台所で女子力を野郎共に見せつける場面では…？」

「藤姉…大人の魅力と女『子』力って矛盾してないか？」

「指摘はやめておけ、余計な爆弾が作動するぞ」くくっ

「キーツ!!!」

アンペルドさん達がここに来て3ヶ月、少々賑やかになったことと食事当番に1人加わったこと、そして玉藻さんが教師としてウチの学校に来たこと以外、思ったよりも日常に変化は無かった

「あのー、先輩？いらっしやいますか？」

「お、桜！俺も藤姉もアンペルドさんも居るぞ、入ってくれ」

いや強いて言えばもう1つ――

「やれやれ時間切れか、悪いが残りは任せたぞ士郎」

「ええ…またかよ？流石に慣れろって」

台所から離脱し、素早く身支度を整えたかと思うとやってきた桜と入れ替わるように家を出て行ってしまった。何故か藤姉を連れて。

「ああっ！まって！私チョコアイ子スが！私の子がまだあの冷蔵庫なかにいるのよ！

てゆうーかなんでいつも私は理不尽に攫われないといけないわけ？

桃姫様？私、藤村大河は桃姫様だった？」

「それが分からないうちはこうやって引きずり出すしか無いな

じゃあ俺たちは散歩に言ってくるから…頑張れよ、間糲」

「っ…はいー」

相変わらずアンペルドさんのこの行動だけは意図が分からない、結局2人で分担していた台所の作業を俺1人でやる羽目になる

それを見た桜が手伝ってくれると言ってくれるが1度や2度ならともかく流石にこう来るたびに手伝ってもらっては桜に悪いしな…

「ごめんな桜、アンペルドさんどうもお前のことが苦手らしくってさ」

「い、いえ！私は気にしてません、むしろその…」

というかこれは流石にあの人が悪いだろ、いくら苦手だからってこうあからさまに避けたら桜だって傷付く

それなのにこうして何度も家に来てくれた上に手伝いまでしてくれる桜には本当に頭が上がりません

結局遅れてやってきた玉藻先生の分を用意するには手がどうしても足りなくなり桜の手を借りることになった

玉藻さんも来るなら来るで連絡してくれよ…

「ごちそうさまでした」

暖かい味噌汁にホクホク白米とだし巻き卵、野菜盛り合わせに唐揚げ…うむ、カルデアでエミヤ食堂が人気だった理由が少し分かった気がします

「お粗末さまでした」

「では片付けはワタクシが」

この3ヶ月ですっかり定着した皿洗いをしに台所へ

貰った分は返す、それは食事だって変わらない。現界する上でサーヴァントに食事は必要ないが娯楽として必要な物だ。提供してくれたことに感謝を込めてお返ししなくてはならない

「待ってください」

いつものように始めようとして士郎さんに止められた

「今日の片付けは俺がやっつくんで藤姉達を呼んできてくれませんか？」

藤姉はともかくアンペルドさんは俺には見つけれませんし…  
「承りました♡」

…ということなので身支度を済ませていざザイルさん搜索に。搜

索と言うほど大したものでもないんですけど

「では行ってきますね」

玄関の戸を開けて目に入ったのは――

「ただいま!!!」

「おや戻られたのですね藤村さん

…彼はどこに?」

一緒に出て行ったはずのザイルさんの姿が見えない

「やったらにしつこかったから撒いたわよ?」

それでも先生なんだから士郎達か健やかで健全に育ち、間違いが起  
こらないように見守らなきゃいけないのに彼ったら間違いを助長さ  
せようとしてる気がするのよねー」

そりやまあ間違いが起ころうが起ころまいがワタクシもザイルさ  
んにも損はないですし面白そうな方に傾けるのは当然かと

「私は夕食をハイエナしに行くから、じゃあね!」

「はいはい、残ってるの良いですね」

ドオン…

「!」

…彼女にも聴こえたのでしょうか、静かに聞き耳を立てつつこちらの  
顔色を見てくる

「花火にしちや…音、重くない?」それに揺れたような…

「どうでしょう?とりあえずアンペルドさんを回収してきますので藤  
村さんは家の中に。ワタクシかアンペルドさんが戻ってくるまで外  
には出ない、出さない、お願いしますね」

ささっと屋内に退避する藤村さんを見届け、先の爆発音の元を探る

今のは爆弾か榴弾が爆発した音に近いですね、地面の揺れと音の大きさが釣り合わないことから地下での爆発でしょうか？

流石に地中貫通爆弾なんてものは無いだろうが周辺に魔力反応が一切無い以上は現代兵器である可能性が大きい  
「何かあったんでしようか」

ワタクシが呼ばれていない時点でそう大したことでは無いでしょうが無視もできない、そう考えて爆発位置を手早く特定し彼の元へと向かったのだが――

く

間桐邸前にて…

「…あのー、なんのつもりですかホント」

「………」

ぷいっと顔を逸らすザイルさんの両頬をがっちり掴み、強引に振り向かせる

「…手加減しろ、痛いぞ」

「折れなきや安いでしょう、それよりもなんで間桐邸が吹き飛んでいいのか説明してくれませんかね？」

彼の手にはたった今使いましたと言わんばかりに硝煙が登っている無反動砲、そして後ろには爆発の衝撃で半壊した間桐邸があり、強引に地下から爆撃したせいかな足元が崩れて今にも屋敷全体が崩壊しそうだった

「…虫がいたんだ、だから爆撃した」

「説明雑すぎです！イチから順に

『報』『連』『相』『！』」

いやもはや事後報告ですが！

「間桐慎二に会いにきた、間桐桜が衛宮家に来ているこの時間なら一対一で話せると思ってな」藤村も勝手に帰ったから丁度よかった

「…それで？」

「チャイムを鳴らしても出なかったから勝手に入った」

「いやいやいや！普通日時を改めるとか予めアポ取っとくとかありますよね!?強盗ですかアナタ！」

「…元ギャングだ」

「屁理屈こねくり回すのは止めてくれませんか!？」

「ハア…それで？」

もう嫌な予感しかしないが聞かないわけにもいかない

「間桐慎二が見つからず屋敷内を探索していたら地下室を見つけて中に入った」

それで、そのだな、あまりにも気持ちの悪い虫がいたから…」

珍しくしどろもどろになっているザイルさんだがそんなことに突っ込んでいる余裕は無い

「虫退治にミサイルを使うなんてあり得ないでしょう!100歩譲っても火炎放射器とか——いえそうではなく!人の家に勝手に上がり込んで爆撃すること自体が非常識でしょう!」

「チツ、じゃあお前は『コレ』を見てもまだそんなことが言えるか?」

ひよい

地面から何かを摘み上げてこちらに見せてくるザイルさん

…?芋虫にしてはデ——

「うわキツツツモ!!!」

「こんなのが床と壁を埋め尽くしてたんだぞ」ポイ  
「ええ…」

確かにこれは気持ち悪い、ちよつとだけ彼の心境に同意するが…  
くつ、顔で『ほれみろ』って言っているのがちよつとムカつきます  
ねえ…！

「いえ待ってください」  
「なんだ」

コレ、明らかに魔術に関する何かですよ？こんなのが蠢く地下室  
までなんの警備もしてないなんてあり得ません、ということは――

「わざわざ警備装置を破壊して中に入ったってことですか？  
それでは流石にザイルさんの方が悪いとしか…」

「警備装置？…そんなものは無かったが。」

「監視カメラとか電子ロックの類があるわけ無いじゃないですか！魔  
術的防衛術です！」

「だからそんなものはなかった」

「警備の痕跡が残ってます！そんなわけ――あ。」

そんなわけがない、と言いかけたがふと彼の特性を思い出す

あー…そういうことか？

「なんなんだ？」

「いえ…とりあえずアナタの義手にリミッター、制御装置を付けま  
しょう」

その特性は意思と関係なく表に出てきているようですし必要にな  
ります」

「？」

魔術特性《現在》…いや魔術というよりかは彼自身の全く新しい特  
性が原因だろう。事実彼は気付いていなかった



「間桐臓硯は居たと思いますが彼は？」

「攻撃してきたから応戦した、俺の銃は効かなかったがお前のナイフは効果あつたらしい」死亡も確認した

ウチの製品にそんな性能はありません！確信ゼッテイしました、絶対分かつてないですね！

「どうかしれつと殺さないでください！魔術界の大物がいきなり消えたら色々面倒なんですから！」

「確かに殺すつもりだったがまさか死ぬとは思わなくてな…」

…ダメですねこれは。

「ハア…とりあえず屋敷の修繕はワタクシがやっておくのでザイルさんは衛宮邸に戻ってください」

「分かった」

終わったら彼に今一度伝えないといけませんね…

不満気味に間桐邸を後にする彼の背中を見送りながらふと呟く

「アナタはアナタが思っている以上に全身凶器人間ということの自覚が必要だと思えますよ？」

「やれやれ」

ああは言っていたがコヤンスカヤも直接目の当たりにしていれば躊躇なく白燐弾あたりを使うだろう、間桐慎二にも会えずじまいだったしな…やれやれ

「ん？」

噂をすれば、と言うのだろうか？目的の人物が前から歩いてくるのがふと見えた

…丁度いい

「こんばんは」

「……………」

相当機嫌が悪いのか目も合わせることなくそのまますれ違つてしまつた

「挨拶くらいしたらどうだ、間桐慎二」

「…は？誰かと思えば衛宮の家に居候してる殺人鬼じゃないか、そんな奴と話すことなんて無いね！」

「殺人鬼、ね」

衛宮士郎曰く、俺が居候していると知って間もなく『あいつは人殺し』『ロクなことを考えていない』『さつさと追い出さないと衛宮が酷い目に』と周りに言つて回つていたらしい、士郎は気にするなど言つてくれたが――

まあ、あ…全部事実なんだが。それはいいとして

「そう言うな、一度こうして話しておきたかつたんだ

——どうせ帰つたところで魔術回路を持たないお前にやる事も無いだろう」

「…?!なんだ、なんだよお前！」

魔術の話題を出せば否が応でも振り向かざる負えないだろう、少々汚いがここは付き合つてもらおうぞ

「俺の名前はザイル・ニッカー、どうもお前は長話が嫌いな顔をしているから結論から言おう」

「——人類を根絶やしにするためにお前の力を借りたい」

## 第83話 埋められていた天才

冬木市 穂群原学園 校門付近にて…

弓道部の活動を終え、学校を出る

「~~~~」

「~~~~」

周囲の女子生徒が何か言っているが聞き取れない、今はそんなことに頭を使う余裕は無い

「ひどーい！間桐先輩はどう思いますか？」

「悪いけど今日はお喋りするような気分じゃないんだ、じゃあね」

女子達へさっさと別れの言葉を投げつけて離れる

『人類を根絶やしにするためにお前の力を借りたい』

「——なんだあいつ、頭おかしいんじゃないのか？」

まっすぐ家に向かいつつもその足取りはいつもとは違う理由で重たい

『もし話を聞く気があるのなら連絡してくれ』と渡された携帯電話、裏面にはNFFと印刷されたステッカーが貼ってある

…少なくとも日本では見ない端末だ

「……………」

——魔術回路を持たないお前に——

「っ…」

携帯電話を開く、画面には《発信しますか？》とだけ映っている  
「ああするとも。文句の1つでも言ってる」

ピッ

プルルルル…

歩きながら電話に耳を傾ける

プルルルル…

プルルルル…

「…なんなんだよ」

一向に電話は繋がらない、なんとなく予想はしていたもののその通りだと無性に腹が立つ

「ん、話を聞く気になつたか」

「うわあ！」

諦めて電話を切つた瞬間後ろから声をかけられた

「…かけろつて言つたくせに電話に出ないの？」

「電話で話すとは言わなかったぞ、まあ落ち着け

おいコヤンスカヤ」

《はーいただきます！》

『単独顕現 EX』

…!?

いきなり学校の教員、玉藻が現れたかと思うとそのまま腕を掴まれ

「はい回収〜」

『単独顕現 EX』

周囲の様子が変わった、いやこれは――

「ここはコヤンスカヤの持つてる艦、その中にある俺の部屋だ

「ここなら誰も気にすることなく話せるだろう」ベッドかイス、好きな方に座ってくれ

「お前ら、やつぱりただの居候と教師じゃないな」  
とりあえず椅子に腰掛ける

…先日彼の口からあつさりと言葉が脳裏に蘇る

『お前の祖父を殺した、殺すつもりで攻撃したがまさか死ぬとは思わなくてな。悪かった』

…あ。あと家も少し壊してしまった』

魔術によって虫になり怪物化していた現間桐家当主、間桐臓硯。死ぬビジョンがまるで浮かばなかったあいつを殺したとあつさりと言つてのけた時は流石に思考が止まった

家に帰っても死体は無かった、だが家のどこを探しても見つからなかった。

「コヤンスカヤはそうだが俺はただの人間だ」

「え？どのあたりがですか？」

「この艦唯一の人間だ、それと今は席を外してくれ」ややこしくなる  
「はいはい」

ジト目の玉藻先生——コヤンスカヤを追い出してこちらに向き直るザイル

「ひとまず賠償から始めるか」

「は？」

人類を滅ぼすとか言っておきながら奴が取り出したのは通帳と判子、そしてカード

「どうも間桐家は臓硯が財源管理していたらしいからな、奴が死んだ以上回収は難しいだろうし収入も無くなるだろうからこれを渡しておく」

お前と間桐桜が3年半普通に過ごせるだけの生活費は入っている」  
持っていていけ

「……」

彼から差し出されたそれを安易に受け取るわけにはいかない、自分には魔術感知はできないが相手が魔術師だと確定した以上はうかつに動くわけにはいかない

「心配しなくても毒なんか塗ってないさ、まあ用心深いのはいいことだ」

帰る時に渡す、と言って通帳類を机に置いてベッドの方に彼も腰掛ける

「さて、詳しい話をする約束だったが正直詳しく話すほど内容は複雑じゃない」

『彼、単純に説明するのがヘタクソなだけですから聞きたいことがあつたらバンバン質問投げた方がいいですよ』

その場にはいないはずの女の声、後であいつのことも聞いてみるか…

「うるさいぞコヤンスカヤ

で、俺の目的だがこの世界の人類を1人残らず殺害することだ。人類と敵対する人間と言えればいいか

俺、コヤンスカヤ、アサシン、ベリル、……あともう1人の計5人で3年後、人類に攻撃を仕掛ける」何か質問はあるか

「は、は？」

あまりにも飛びすぎていて何から質問すればいいか分からなくなるがそんなことでパニックを起こしている場合ではない

「5人？正気か？5人で世界を敵に回す気なのか？」

「戦力差にはキチンと考えがある、それに敵に回すのは全人類だ」世界じゃない

目の前の男が間桐臓硯を殺害している以上、他の4人もコイツと同格かそれ以上と考えるべきだろうがそれにしたって実現の見込みが無い

何かの冗談かと疑ったがそれならここまで場を用意する理由も無い、そもそも動機が分からない——だが今すぐ聞きたいのはそれじゃない

「それで？僕に何をさせたい訳？」

「もしお前がここに来ると言うのなら参謀をやってもらおう、魔術を含めた様々な分野に理解のある参謀は貴重——というか普通は居ない」

参謀？…だとすると

「半月くらい前コヤンスカヤって奴が用意した思考テストの狙いはこれか？」

確か駒を兵士や戦車に見立てたボードゲームだ、簡単に面白くは無かったけど

「ああ、アフガンでの戦闘を参考にコヤンスカヤが作った物だ

コヤンスカヤの言っていた通り頭の回転が早くて助かる」

「そのコヤンスカヤって結局なんなんだ？」

「あいつか？人類悪だが？」

「人る——はあ!?!なんだよそれ！」

それが何か？みたいな態度で返されるとは思っておらず思わず声を荒げる

人類悪、災厄の獣…人類が滅ぼすべき悪が学校でテスト用紙配っていたってことなのか？

「ああ人類悪について説明が必要か、人類悪は——」

「それくらい知ってるさ！…じゃあさっきの転移は魔術じゃなく単独

顕現か」

「…随分詳しいな」

「当たり前だ、魔術回路が無くとも僕は間桐家の後継だった」

少しでも相応しくなろうと、努力は惜しまなかった。だが今は――

「別にそれでお前の全てが決まるわけでも無いだろう、魔術の才能によって決まるのは魔術師としての格だけだ、そんな狭苦しい肩書きに執着するなんて馬鹿らしいと思うが」

さらりと言ってくれるなコイツ…！

「…………お前さ、うざいよ」

「そうか？生憎俺には魔術師の誇りなんてものは無いし魔術回路も無い

そういう意味では俺とお前は似た者同士だと思うが」

「一緒にするな」

ああ分かった、コイツは魔術師じゃない。魔術師の思考とはかけ離れている。

「そうか、それで？他に何か聞きたい事はあるか」

他は――

「僕の他にあと何人いる？」

比較したってしょうがないことは理解している、だがこれも聞いておきたい。コヤンスカヤが学校全体に例の思考テストをばら撒いたのならスカウト対象は僕だけじゃない

「…？どういう意味だ」

「僕以外に勧誘したのは何人だって聞いてるんだ」

「居ない」

「――は？」



「居ない、そもそも誰もスカウトなんてするつもりは無かった。

あのテストは主に遠坂凜と間桐桜の思考能力を見て様子見するために使うつもりだった、本来の目的である参謀候補なんてオマケみたいなものと考えていたからな」

「…遠坂の奴を勧誘しようとは思わなかったのか？」

魔術師として遠坂凜は優れている、ただそれだけ。特に他意は無いその質問に彼ははつきりと答えた

「遠坂凜を？冗談言うな、スカウトする理由がない」

それは実質的に『魔術なんてどうでもいい』と言い切る発言だった

「お前より優秀なのがいればそっちに行くが居なかったからな

それで？他に聞きたい事はあるか？」

「…使い魔の軍勢を見せて欲しい」主力なんだから

「それについてはコヤンスカヤが——待て、なんでそれを知ってる？」

何故って…そんなの簡単だ

「例の思考テスト、あれは多人数対多人数が前提の内容だった。もし5人だけのお前達が参謀としての能力を見るのなら多人数対1人、5人かそれに近い内容にするはずだ

あとアフガンの戦闘を参考にしてたって言ってたよね？ニユースとかで時々見る生物兵器の話題の中にアフガンのものも出ているのを見たことがある

あれさ、お前達の仕業だろ？あと3年も期間が空いてるのはその使い魔の性能確認のための時間ってところだろう」

「…大体合っている、やれやれ…なんでお前みたいな奴が間桐家から見放されていたのか分からん

主力については実物をここで見せるのは難しいから実際に投入された映像で我慢してくれ」7年前の物だが今と性能に変わりはない

ピピッ

最初に貰った携帯電話に動画ファイルが送られてきた、後で見るということだろう

「他にはあるか?」

「見返りは?ここまで勧誘しておいて見返り無しってわけじゃないよね」

「当然だ、サーヴァント1騎とそれを使役できるだけの外付け魔術回路を渡す」重要な戦闘時以外は好きに使え

またしてもさらりとんでもないことを言ってきた

サーヴァント?本気か?

「こっちは今見せられる、コヤンスカヤ」

『席を外せと言った割にはコキ使いますねえ…はいどうぞ』

姿を現したのは身長2mはゆうに超えている大男、理性が見られないことからバーサーカーかと思ったがよく見ると手に弓を装備している

「…アーチャー?」

「そうだ、本来より弱体化はしているがそれでも並の英霊じゃ相手にならない強さなのは保証する」もういいぞ

アーチャーか消え、再び僕とザイルだけになる

「他に聞きたい事は?」

「まだ色々あるけど今は——そうだ、これだけ聞かせてくれよ」

なんだ?と疑問符を浮かべる彼に自分にとって最も重要なことを質問する

「君達が本気で人類を敵に回すつもりなのは分かったけどさ、僕にだって死んでほしくない友人がいるんだ

さっきの見返りにその友人達の保護を上乘せたいんだけど。」  
さてどう出る？

「友人達…？何人いるんだ」

「2人、いや3人かな？もし飲んでくれるなら協力してあげてもいいよ？」

考え込んでいたザイルだったがその言葉で僅かに表情が変わったのが見てとれた

「なんだそれだけか、分かったいいだろう」

「…見かけに反して意外と素直なんだねキミ」

「安過ぎる買い物だ、むしろ不気味だな」

…どうやら自分は相当買われているらしい

「使い魔の映像は見なくてよかったのか」

「後で見ればいいさ、とりあえずひと段落したことだしそろそろ帰してくれないか？」キミが思ってる程学生は暇じゃないんだ

「言われなくてもそうする、またな慎二」

く

間桐家前にて…

ザッ

家の鍵を開けようとしていきなり後ろに気配を感じて振り返るとそこには…

「えっ…兄さん？いつからそこに——」桜

こっちの疑問を意に介することもなく真っ直ぐこっちに近付いてその手を自分の方へ

「っ…」ギョ

殴られる、そう思って身構えたがいつまで経ってもそれは訪れず、  
変わりに――

ぽん

「えっ？」

「……………」

わしやわしやと頭を撫でられる感触、兄さんが真実を知る前と同じ  
ような…

「……………」わしやわしや

「に、兄さん？」

兄さんは何も言わない、分かるのは以前の兄さんに戻ったと言うこ  
とだけ

その日から、兄は私を殴らなくなった。

のちに起こった事件によって、まだ私が殴られていた方が良かった  
と思うのはもう少し先の話…

## 第84話 友人として

NFFボーダー 会議室にて…

「アンタ、実はそこまで人間憎くないんじゃないのか？」  
「うん？」

部屋でチエスをするザイルとベリル、特に会話もなく黙々と駒を動かしていた2人だったがベリルのキングに王<sup>チエックメイト</sup>手がかかった時にと彼が呟いた

「何を根拠に。と言いたいところだが案外そうかもしれないな、正直などころ今はそんな感情は無い」

あまり気にしていなかったがいつからか人間に対する憎悪は完全に消えていた。：最初から無かったわけじゃない、少なくともコヤンスカヤを召喚した時は人が憎くて殺したくてたまらなかった

俺、ザイル・ニツカーはそもそも存在しないハズの人間だ。姉と離れ離れになった影月 彼方が現実に対処できなくなつて生み出した架空の家族

それでも精神が保てなかった彼方の心が閉じこもつた結果として本来表に出てこないザイルという人格が彼方の身体の主導権をそのまま手にした人間：それが俺だ。

厳密に言えば軟禁部屋で寝ている影月 彼方はただ人格を移したコピー体でしかなく、オリジナルと呼べるのは俺の方だ

「へえ、そうかいそうかい！やっぱ俺の思つた通りだ」

「…何故こうなつたのか分かつているような口ぶりだな」

「お、聞きたいか？俺の考察。」

「いや、どうでもいい」

理由が分からないとはいえ知りたいかと言われれば正直どうでもいい。

今の俺には彼方としての人格は無く、言ってしまうえば彼方は赤の他人なのである

「そう言うなよ、何にでも興味と疑問を待った方が良いつてコヤンスカヤも言つてたじゃねーか、な?」

「…」

…確かにチエスばかりじゃ面白くないのも確かだ

「聞いてもいいか?」

「そうこなくっちゃ! 聖杯戦争開幕後あたりからのアンタの記録を見させてもらったんだが多分コンテナ置き場での戦闘あたりまでは――」

ピンポンパンポーン

ええー、ただいま間糲 慎二さんから回収要請を受理しました。保護対象の3名も付近に存在を確認、無いとは思いますが一応準戦闘体制へと以降お願いします。あとザイルさんは出迎えの準備をするので船首甲板にお越しくださーい

ピンポンパンポーン

「話し始めた瞬間にかよ、まあいいか。んじや俺はのんびりやってるから暇な時にでも教えてやるよ」

「また後でな」

ベリルと別れ、空っぽの会議室を後にする

「パライソ」

「(ハハハ)」

1秒に満たない時間で天井から望月千代女が降りてきた

こちらの指示を受ける前から察し、マグナムリボルバー（ゴム弾シヨットシエル仕様）とスタンロッドを持ってきている

「どうぞ」

「ありがとう、じゃあ行くか」

間桐 慎二は協力的だ。彼との間に面倒事は起こらないだろうが…

「よりによって保護対象3名の内2名か」

慎二の説得具合にもよるがこっちとの面倒はあるかもしれんな

）

冬木大橋にて…

「なあ慎二、こんな夜中に呼び出してどうしたんだよ」

「そうつつかかるなよ衛宮、すぐ分かるさ」

「俺は別にいいんだが」

「……………」

多分慎二が俺と同じように呼んだんだろうがすぐ近くを歩く遠坂の表情がかなり硬い、というかあんな表情は初めて見た気がする

「寒くないか桜？」

「大丈夫、です先輩…」

桜も桜で様子がおかしい、怖がっているとかそんな様子じゃないが何というか…

「つーかここらで良いだろ慎二、大事な話があるんだろ？少なくともここには俺たち以外誰もいない、そろそろ話してくれてもいいんじゃないか？」

「焦るなって、もうすぐに来るからさ」

…来る？

ふわっ

「待たせたか？」

「少しだけかな？1ヶ月前に行った通り連れてきたよ」

「あれ？アンペルドさん？」 玉藻先生も

いったいどこから？そんな疑問を嘲笑うかのようにアンペルドさんと玉藻さんが何も無いはずの上から飛び降りてきた

「間桐桜に遠坂凜、士郎もいるな。これで全員か？」

「そう、彼らの保護を頼むよ」 そうしたら協力してもいい

協力？なんの話だ？慎二あいつは何をいつてるんだ？

「…だがこの様子じゃまだ話していなさそうだな、先に話すと言っていないかったか？」

「今から話すさ、キミ達が話の場にくれた方が言葉も少なくて済む」 あ、2人は喋らなくていいよ

「なあ慎二って！一体なんの「衛宮くん下がって！桜あなたも！」

それまで押し黙っていた遠坂が割り込むように前へ出る、何故か玉藻先生を警戒してるみたいだが…

「そう！そうですよね！それが正しい反応なんです！士郎さんも桜さんも無防備すぎてこっちがおかしいのかと…」

「アンタサーヴアントね…それもマトモじゃないでしょ」

「ふふふ、どうでしょう？ただこの場においてワタクシの仕事はありません。どうぞ慎二さん」

玉藻先生が一步下がり、アンペルドさんと話していた慎二が入れ替わるように前へ出る



「さてと、あんまり長々説明するのも面倒くさいから簡単に言わせてもらおうよ。」

桜、遠坂、衛宮、僕と一緒に来なよ」

その言葉と同時にゴウンゴウンと彼の背後から聞こえる轟音、空飛ぶ艦としか言いようのない酷く現実味の無い乗り物が現れ、歓迎するように冬木大橋へ寄ってきており搭乗口と思わしき場所から足場が伸びてきている

「なあ慎二頼む、詳しい説明をしてくれ。俺には何が何だか分からない  
い

アンペルドさんも玉藻先生もお前も何を話してるんだ？」

「ああ、彼の名前はザイルだ。そして玉藻は人間じゃなくて人類悪：なんの獣だっけ？」

「愛玩の獣、コヤンスカヤです。よろしくお願いします♡」

「いや全然分からな…遠坂？」

「…っ」

ふと見ると遠坂の顔が真っ青になっている

「大丈夫か？」

「——間桐くん？人類悪がなんなのか、分かってるの…!？」

こつちには目もくれず押し出すように質問する遠坂

「分かってなきやここにいないさ。いいか、彼ら——ザイルとピーストは今から3年後に全人類への攻撃を始める。攻撃対象は『人間』だ、人である限り全面戦争か虐殺以外に道は無い

でも彼は他の誰でもない僕の力を借りたと言ってきてね、手を貸す見返りにキミ達の安全を保証してもらおうよう僕が頼んだんだ」

得意げに言っているが内容はよく理解できない、全人類への攻撃？  
全面戦争？

「僕がいなくても彼らはやるだろう、つまり僕がみんなを助けてあげるって言ってるんだ。分かるだろ？」

「いや全然分からないぞ！どうしちまったんだよ慎二！アンペルドさんも何か言ってくれ！」

「……………埒が明かないな、山の1つでも吹き飛ばせ。その方が早い」

「短気だなあ。ま、確かに魔術を知らない衛宮には1番分かりやすいかもね」

「ちよつと何する気!？」

まるでこちらを意に閑せず玉藻先生が携帯電話?に何か入力して

「エクスカリバー砲出力は？」

「小山1つだ、5%もあれば充分だろう」

「だから、いったい何の——」

ゾンツ!!

一瞬、昼かと勘違いするような光に目が眩み、そして——

「——は？」

はるか遠く、実際に行ったことはない風景でしか無かった遠方の山の1つが——消し飛んだ。それも山だけではない、高度があったので殆どは素通りしたようだが射線上にあった高層ビルが2つコルク栓を抜き取ったように抉り、消し飛んでいる

「流石に分かっただろ?さ、艦に乗ってくれ。心配しなくてもキミらが戦う必要はない、何もせずただ見てればいいだけさ」

「冗談じゃないわよー!」

問答無用と言わんばかりに遠坂の指から何かが打ち出される

「やれやれ、行く気が無いらしいが」バシッ

割って入ったザイルが虫でも叩き落とすようにそれを弾く、そしてさつきまで笑顔だった慎二の表情に曇りが現れ始めた

「…あのさあ遠坂、僕これでも遠坂のこと認めてるんだよ？だから妹の桜と親友の衛宮だけじゃなくてキミにも声を掛けたんだ。人の善意に泥を塗らないで欲しいんだけど？」

「何が善意よ！人類悪につくってことは人類の敵として、全世界を敵に回すことと同じなのよ!?!」

「遠坂…キミもう少し頭が良いと思ってたけど違うみたいだからもう一度説明するよ。キミらは戦力じゃない、何もせず安全なところから見ればいい。人類悪につくとかつかないとそういう次元じゃないんだ」

いい加減艦に乗ってくれ、と呆れ気味に呟く慎二。だが――

「行くわけないじゃない…!」

「折角呼んであげたのに…桜と衛宮はどうする?」

矛先がこちらに向いた、だが俺の答えは既に決まっている

「慎二…お前が俺達を助けようとしてくれてるのは分かった。でも俺は行けない」

「虐殺をやると分かって黙って見てるだけなんてできるわけがない」

「俺は戦う、そして親友としてお前に人殺しの手伝いなんかさせない!」

「……………衛宮らしいなあ、桜は?」

「私、は」

「答えられずにあたふたとする桜だが無理もないだろう、いきなりこんなこと言われて即答する方がずっと難しい」

「まあ今すぐ開戦ってわけじゃないし答えはまだいいよ、ただ助かり

たいんだつたら他に道は無いんだ。それをよく覚えておいてくれ」行こうザイル

「いいのか？」

「見ての通りみんな強情でさ、また時々説得しに行くよ」

「そうか」

『シンジが仲間になった！』とまあそんなワケでここらで失礼します」衛宮さんの料理美味しかったですよ！

もう話すことはないと言わんばかりにザイルとコヤンスカヤは艦の中へと消えていく、そして――

「またな、衛宮」

「慎――」

消えてゆく親友の背中に声をかけようとして、そのまま声が出なかった

「……………慎二」

## 第85話 決戦1年前の新事実

アメリカ 米陸軍基地 共有棟 会議室前の廊下にて…

「HOPEボーダー建造の見込みは？」

「大まかな建造自体は3年前に終わってる、ただロンドンから発進させるわけにもいかないから本格的な組み立てはこちらで行う

ダヴィンチが使っていた地下基地が役に立っているよ」

「ロンドンから輸送を？…危険じゃないか？」

「そう言うと思ってウェイバーから知恵を借りたよ、ロンドンの武器製造会社を1つ買収させてもらったんだ

武器に紛れさせて輸送を行っている、コヤンスカヤ達も米軍がロンドンから武器を輸入していること自体は分かっているだろうが武器の輸入先は1つじゃないし注意を引く時計塔は既に無い。ボーダー再建造に気付かれることは無いだろう」

部屋の中から聞こえていた話し合いがひと段落したらしくキリシユタリアとクライムが出てきた

「終わったか」

「うん、見張りありがとうアヴェンジャー」

「では我はもう行くぞ」

警戒を解いて本来の目的地へと歩き出す、正確には人を探しているので目的『地』ではないのだが

教会には居なかった、だとすると…医療棟か？

「や、やめてくださいーい!!」

「？」

後ろから何か近付いてくるの察知して隅に避けると――

「先生、パス！」

「ふっ！」

すぐ横を風を切って走り抜ける2つの影

影月 遙と：アスクレピオスか？彼がここにいるということは奴は医療棟にいると見ていいだろう。：それにしても珍しい組み合わせ——何か蹴っている？

ともかくサーヴァントと神霊化した人間をこのまま放置はできない、一般人はもちろん魔術師もぶつかったら怪我をするだろう

「通路で走るな、怪我の元だ」

「：確かにその通りだ。影月、広い場所で続きをするぞ」

「はい」

「ですから！場所に関係なくやめてくださいっ！」

息を切らせて追いかけてきたのはアーチャーのサーヴァント、パリスだった。いつも頭の上に乗せているぬいぐるみが無いが…

「どうして？」

「アポロン様はサッカーボールじゃありません！」

「む」

よく見ると2人の蹴っている物は例のぬいぐるみだった、あれでも一応神らしいが…

「：？変なことを言うね、虫ケラサッカーなんだから虫けらを蹴らないと意味が無いでしょ」

「影月の言う通りだ、むしろボールの代役を務められたことに感謝して欲しいが」 さあ移動するぞ

そう言っただけ時間が惜しいと言わんばかりに何処かへと行ってしま  
う2人

しまった、アスクレピオスに奴がどこにいるのか聞いておくべきだったか、しかし――

あうあうと頭を抱えて立ち尽くす彼を放っておくこともできず声をかけることに

「大丈夫かパリス？影月 遥は相当怒っていたようだが…アポロン神は何をした?」

「景清さん!そ、それが…影月さんが定期検診で医療棟にいらつしやった時たまたま私もそこに居たんですが…」

『アポロン様あゝ!』

『アスクレピオス先生!アポロン神に何を!』

『どけ影月、中の綿を石に詰め替えてやるだけだ』

『だっ、だめです!よりもよってアポロン様を…アルテミスちゃんの弟なんですよ!』

『うーん、私の趣味とは違うけど影月ちゃんもいいね』

『ふん、そういえばお前は叔母さんに懐いていたようだが肝心なところは知らなかったらしいな』

『へ?』

『海中のオリオンを叔母さんに撃ち抜くよう仕向けたのは他でも無いソイツだぞ』

『え?』

『おっと』

…

『え?』ぐりん☒?』

「なるほど、止める者が居なくなつたのか」

「アタランテさんは倒れてしまつてペンテシレイアさんもどこにいるか分からず…」

「止められそうなのは他にいないのか」

「うーん…そ、そうだ！遙さんはオリオンさんと仲がいいので彼ならきつと…！」

もしオリオンさんを見かけたら教えてくれませんか？」

「仲が、良い？」

『9時28分34秒、オフエリアさんにデートの誘い。10時50分02秒、外出する女性隊員を見つけて口説く、11時47分52秒――』

『分かつた！もうしないから――ぎやっ！』

『どこにいくのオリオン』

『え？いや飲み物でも買いに売店に『浮気？』

『流石に違えつて！』

『じゃあどうして遠い方の店に行こうとするの？…店員さんが女の子だから？』

『なんで右足一歩踏み出しただけでそこまで分かるんだよ!?アツ。ぎやっ!!』

『おいハル！お前最近おかしいぞ！なんかここに来たばかりの時にくらべて性格も変わってきた気がするしよ…アルテミスに乗っ取られてきたんじゃないのか？』

『変わっていないよもう！ダーリンったら変な、こと…あ、あれ？』

『え、マジなの？…おい待て、無言で手を伸ばしてくるな！ヤメ――ぎやっ!!』



「…………見かけたら伝えておく」

「ありがとうございますっ！」

ぺっこ、とお辞儀をしてそのまま2人を追っていくパリス

…我には理解できぬがあれで仲が良いように見えるというのなら  
そうなのだろう

さて、早く奴に会わねばなるまい

く

医療棟にて…

途中で見かけたオリオンに先程の情報を伝え、そのまま医療棟へと  
入る

…目的の人物はすぐに見つかった

「あっ…！アヴェンジャー！」

「主、やはりここに居たか」

駆け寄ってこようとする我が主、ミラ・ツールを彼女の横にいた男  
が止める

「ここは医療棟、つまり病院だ。院内ではお静かに頼むよ、ミラ・ツ  
ール」

「ごめんなさい神父様…」

黄金のサーヴァント、英雄王ギルガメッシュと契約している神父…  
我はこの男に会いに来たのだ

「ごきげんよう、景清殿。こちらに来るとは珍しいが…なにか困りご  
とかね？」

なに、英霊とはいえ元が人である以上何も不思議は無いとも」

「…………我は少し彼と話がある、主は先に戻っていてくれ」

「えっ…わ、分かったよ…」

普段なら——いや神父の関わらないことなら『なんで?』と聞いてくるのがミラ・ツールだが反対にこういう時に関しては急に素直になる

怨の塊と言える我でもこの不自然な違いには分かる

医療棟から完全に主が出たことを感知し、改めて神父へ向き直る

ようやく英雄王の居ない瞬間を捉えた、気付いてからかなり時間は経ってしまったが仕方ない

「ふむ、どうやら余程大事な話のようだ。場所を変えよう」

「我が聞くのは1つだけだ、必要ない」

…他に思い当たる人物はいない

「我が主に八極拳を教えているのは貴様か? 神父」

「そうだ、と言ったらどうするかね」

瞬間刀を抜いた、本来源氏を殺すために磨き上げたその刀を主のため、源氏では無い者の首筋へひたりと付ける

「これ以上、主に関わるな」

「手厳しいな、そもそも私は自分からミラ・ツールに干渉していない。それはお門違いと言うものだが。」

「……………」

「報復心という物は時に人を書き換える、染まりやすい子供であれば尚更だ。その上にクライム・アルバートという分かりやすい目標もある

私にはどうすることもできない」

ミラは本音を語らない、言えば反対されると思いつ込んでいるし実際彼女に戦いを期待している者など居ない、だが我は知っている

「ミラ・ツールの報復心は報復を遂げるまで消えることはない、茨木童子やパリスにあれこれ頼んでいたようだが…あれしきで消えるのな

らそれはもはや報復心では無いだろう」

「貴様…」

「何よりキミの存在がそれを決定づけている

サーヴァントアヴェンジャー」

「っ…」

アヴェンジャーという戦力をなんの戦闘経験も無い、魔術的取り柄も無い14歳の少女に当てておくべきじゃない。そう言われる度に『今の主以外に仕える気は無い』と言い返してきた

実際に彼らの言い分が正しいのは分かっている、主の令呪は他の魔術師の物とは違う

ルマス・プライマリという魔術師の残した令呪を本へ加工した言わば誰でも簡単にマスター権を持てる改造令呪である

…だが譲渡などしたらどうなる？

「キミ自身、ミラ・ツールを止められないと理解したからこそ彼女ではなく私の元へ来たのではないのかね？」

「…………その通りだ」

ミラは1人でも戦おうとするだろう、そしていざ始まれば道連れにしてでも。という考えを持っていることも知っている

恐らくこれを知っているのは目の前の神父と我だけだ、怨讐に堕ちた我であるが子供を、それも最初の契約者を見捨てられるほど冷酷にはなれない

「どうしても守りたいのならキミが守るしか無いだろう、私から言えるのはここまでだ」

「……………」

怨讐が誰かに言われて止められるものではないことは我自身がよ

く知っている。

「故に我が守るしか無い、か」

ミラ・ツールが我を召喚できた理由を改めて再認識した

義経の遺品、聖杯の片割れ、源氏の英霊

そして——報復心か

）

訓練場広場にて：

言峰綺礼と平景清が対面しているころ、基地内にある訓練場でカドック・ゼムルプスは頭を抱えていた

「うん？あ！カドックさん！よければ一緒に虫ケラサッカーしませんか！」

「……………いや、僕はやめておく」

「そっか、気が変わったなら教えてください！」歓迎します！

訓練場で米軍との交流をさせていただけたのにどこからともなく現れた影月 遥とアスクレピオスによって訓練場の一部が占拠されてしまった

いやそれはまだいい、まだいいんだが…

「ンン、遥殿！たった今脚力を一時的に強化する符ができましたぞ！」

「ホント!?!」

「そいつはいい！よこせ道満！」

「待て、人体に悪影響が出る可能性がある。ここは僕から試す」

芦屋道満、影月遥、カイニス、アスクレピオス、あの4人に蹴られてまくって今あそこでもみくちやにされてるのは——

「アポロン神、だよな」

いつもギリシャのアーチャーの頭に乗っているアポロン神、それが

ポコポコに蹴られている

「止めたほうがいいのか…?」

「止める?何を言っている、神で球技をするなど滅多に見られるものではないぞ」くくく

う、おっ…!

「ギルガメツシユ王…」

「そら、聞きつけて来たのは我だけではないぞ」  
なんだって?

くいつ、と英雄王の指し示す先には冬木で知り合ったあの3人——  
「虫ケラサッカーしてるとかフザけた話が聞こえてきたけどアンタ何やっつてんの?」

情報早くないか?

「え?虫ケラを蹴ってるんだよ?ちよいどいいからバーヴァン・シーもやる?」

「おい、騒ぎを大きくするんじゃないや——」へえー?影月ってみんな気弱な奴らばかりだと思っただけど少し見直したかも?

…おいレガリオ!バーゲスト!お前らもやろうぜ!

「仰せのままに」  
「むう」

いやいや参加するなよ!?

「アポロン様あ!」

追いかけてきたであろう半泣きになったギリシヤのアーチャーと目が合う

「カドツクさん、どうにか止められませんか?」

「い、いや流石にアレは…」

英霊に止められないものを止めろと言われてもできるわけがない

！

「うん？」

一瞬目を離した間に何故、何故か。米軍の一部がサッカーに参加し始めていて、ご丁寧に道満が『安全のため』と1人1人に符を配っている

「おいアンタらやめておけ！それは神だ、崇られるぞ！」

「え？神様？ああいうボールじゃなくて？」

1人が振り向いた、どうやら分かっていないらしい

「まさか！もし本当に神様だったらなんで大人しく蹴られてるんだ？それに魔力計測器にはあのボールから殆ど魔力を感じない、デタラメさ」

痛いところを…！

カドツクの説得も虚しく、話を聞きつけたセイバーのマスターや、なんだなんだと集まってきた米軍の連中が続々と集まってきており收拾がつかなくなりかけていた

「今日は追跡が無いと思ったら…」ちよいと頭借りるぞが。

「あ、貴方は…」

「ごらー!!!」

「うわっ！オリオン!?」

「ち…」

本格的にアポロン神がボロ雑巾にされるより早く突っ込んできたオリオンによってアポロンサッカーは中止、強制解散となった

「ハル」

「……………」

「ハル」

「……………」

「お前がオレとアルテミスのために怒ってくれたのは分かる」

「いやどつちかと言うとアルテミスちゃんのためというか…」

「話の腰をヘシ折らないで!?!…気持ちちは分かるが」

この騒ぎの元となった2人、ハルとアスクレピオスを正座させての  
お説教タイム

まあ俺自身誰かに説教たれる程できた人間じゃないってのは理解  
してるさ、でもな?

「やりすぎだ!!」

「…はい」

「腹が立って1矢ブチ込んだ程度ならまあ許容範囲だが」

隅のほうから「え?…」と困惑したアポロンの声が聞こえるが知らん  
「だからって私刑(リンチ)は無いだろう、一応俺たちは一緒に世界を  
救う仲間なんだぞ!」

「…うん、やりすぎだった。…ごめんなさい」

ハルは…もう大丈夫そうだ、あとは——

「アスクレピオスも余計なことを言うな!アレはもう終わったことだ  
!」

「僕は叔母さんが気に入った人間が何も知らされていないのはおかし  
いと思ったから教えただけだ」適度な運動はもう済ませたことだし医  
療棟に戻る

んにやろ…

どうやらアスクレピオスの方は聞く耳を持たないらしい、つたく芦

屋道満やカイニス達サーヴァントは良いとしても米軍までやってくるとはな、こんな時にクライムやキリシユタリアは何処に――

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

「なんだ!？」

全ての意識を強制的にそこへ向かわせるような喧しい警報音が基地に鳴り響く

『きつ、緊急招集！緊急招集！各小隊長、通信隊班長以上、並びに各マスターとサーヴァントは大至急共有棟会議室へ集合してください！繰り返――『おいやめろ！悟られるだけだ！放送を切れ！』『あつ！す、すみませ―― ブツツ

「……………」

「切れた…」

今の放送…慌て具合から見て相当ヤバいことが起こったらしいな  
「も、もしかして兄――ザイルとコヤンスカヤが…!？」

「それは無い、もしそうならいきなり戦闘体制に入ってるはずだ

…だがこれは行かない選択肢は無い」

ナンパの予定はキャンセルだな、と内心想いつつもハルの頭の上へと乗る

「よし行くよー!」振り落とされないでね!

「ああ頼むー!」

走り出すハルの頭にしがみつきながらも思考を巡らせる  
いったいななんだ…?

く

共有棟 大会議室にて…



「空軍参謀長官との連絡は!？」

「そ、それがまだ繋がらず…」

「繋がるまでやれ！」

まったく…！茨木童子！よくもそんな事実を9年間も黙っていてくれたもんだ！」

「ええい！人間の作った武器などイチイチ知るわけなからう！いい加減説明しろ！」

ギヤーギヤーと喚き散らす茨木童子を押し除け、どうすればいいか考える

く…！酷く現実味は無いがコヤンスカヤが人類の作った全ての兵器を行使できると言うのであれば不可能じゃない！

「土方！もう伊吹童子と一緒にでもいい、早く会議室に来い！」  
(分かった！)

魔術師の方は今ギリシユタリアが集めてくれている、だがいざ集めてなんて言えばいい…？

ことの発端はH O P E ボーダーの件についてギリシユタリアと話終わった直後だった

『H O P E ボーダー…どんな船なんでしょうか』

『さあな、少なくとも通信兵が乗ることは既に確定している。今のうちにカドツク・ゼムルプスあたりから詳細を聞いた方がいい』

たまたま廊下で出会った通信兵のアリスと話しているとふと意識外から声をかけられた

『そのほーぷぼーだーとやら、カクヘーキはないのか？』

『いたのか茨木童子？…って核？冗談じゃない！アレはそうホイホイ

と使えるような兵器じゃないし持っていたとしても使っちゃいけないものだ』

どこでそんな言葉を拾ったんだ、と問い詰めた直後に彼女の口から出た衝撃的な事実

『嘘を言うな、現にコヤンスカヤ達はカクヘーキによって全人類を攻撃すると言っていたぞ!』

『…ツ!!??』

『何かはよく分らんが同じ物を持って対抗したほうが——『今なんて言った!!』』

コヤンスカヤは核兵器を使用できる、その最悪の事実流石のクラムもどう対処していいか分からなかった

「ああ…」

——最悪だ…!

## 第86話 ザイルの本音

NFFボーダー コヤンスカヤの部屋（元ダヴィンチ工房）にて…

「……………!!」

——バカな

思わず手元のスマートフォンを壁に叩きつけかけたがギリギリ踏み留まった

だがこれは…

「はは、は…」

こんなものを。こんな存在を認めろと？もしそうなのなら今までのワタクシは？いやそれ以外にも！

ここに自分以外の誰も居なくてよかったと内心安堵しつつ自身の携帯を取る

「もしもしベリルさん？」

『おつコヤンスカヤか、もう交代の時間か？』

「いえ、艦の計器確認は続行で。今から異常があった場合の報告はワタクシではなくザイルさんかフォーリナーのワタクシにしてください

い……………少し休みます」

『おいおい大丈夫か？まさかビーストが体調不良ってわけでも「体調不良です、今日は働けません」

言い切った、当然だ。どうしていいか分からない、頭を冷やす時間が必要だ

『マジかよ…分かった、ザイルには？』

「ワタクシから報告します

今は休ませてもらいますわ」

通話を切った携帯をベッドに投げてため息を吐く

報告するとは言ったもののもう一度携帯を拾い上げて彼に報告する気にはとてもなれなかった。だって…なんて言えばいい？

「ハア…処分、始末書は確定ですね…」

机に向かってぼんやり壁と手元のスマートフォンを交互に流し見る

まったく、ノアさんもそうですが全て知った上で一緒に居たダヴィンチさんも相当ですね。普通なら気が狂いますよコレ

「…とはいえ、アナタには感謝しなければならぬのかもしれませんが」  
ノア・克蘭ツェル、いや鈴木京子が現れなければ誰も気が付かなかった

もしこの事実が明るみに出ればワタクシ達が手を下すまでもなく世界は混乱の極みに達し滅亡する——かどうかは分かりませんが少なくとも大混乱を引き起こすことは間違い無い

このことから現在米軍内で存在が確認されているダヴィンチの思考がコピーされた人工知能の記録からこの事実は意図的に削除されている可能性が高い

「…」 ヒラヒラ

鈴木京子のスマホは回収した時点で既に電波やGPSといったものが出ていなかった、恐らく回収直前にその場で使われた宝具が原因だろう

無駄に高性能だったおかげで自動復旧するより早くそれらを取り除くのに苦労したしパス解除にも9年強の歳月がかかってしまった

何もしなくてもプロテクトが進化し続けるとかどうなってるんです？ま、こんなフザけた内容ならロックの固さも納得ですが。

「気分転換に何かしたいところですがそんな気力はありませんし、なんならベッドまで行くのも億劫ですね…

机で休みますか」

未だ治らない頭に響く鈍痛に押し倒されるように机に突っ伏して目を閉じる

「・・・これからどうしましょう?」

◆ノア・克蘭ツェルのスマートフォン解析完了

↳

NFFボーダー トレーニングルームにて…

「ゼー…ゼー…(ぎゅ) (ぎゅ) う…」バタツ

「まだ腕立ては5セットより多くはならないか

なんだ、文武両道な割には思ったよりも少ないな」

「はーっ…うる、さいな！お前みたいに普段から重装備担いで人を殺し回ってるわけじゃないんだ…！一緒にするな！」

「…ふむ?」

トレーニングルームにて筋トレをするザイルさんとワカメ…ではなく慎二さんを扉の影からちらりと見る

思ったより真面目に鍛錬してますねえ…結局彼、何を言ったんでしょう?

忘れそうになるがアレでもザイルは元ギャングのボス、クライムのようなカリスマ性は無くとも口八丁だけで人を使う才能はある程度持っている

「ワカメさん、いっかにも『自分天才だから努力なんてしなくていい』

みたいに見えましたけどワタクシの勘違いだったのでしょうか」

「やれやれ、何の用だフォーリナー？まさか扉の影から野次を飛ばすためだけに来た、なんて言うなよ？」

おっと、これは失礼♡

「ええもちろん！ええと、だからなんだという話になってしまいました  
が米軍がようやく私達が核攻撃する可能性があるを知ったよう  
です」

「そんなことか——ちよつと待て、まさか連中今まで知らなかったの  
か？」

「らしいですね」

「：やれやれ、例の計画を一部盗み聞きしていた茨木童子が向こうに  
渡って10年が経とうとしているというのに今更か」

「まあまあ、仕方ありませんよ。核の脅威を彼女は知りませんから

あ。お2人とも何か飲まれます？」

「アップルジュースを頼む」

「あつぷ：相変わらずお前の見た目に似合わないな」

「何を飲もうが俺の勝手だ、慎二は？」

「水分補給に適した飲料ならなんでも良いよ」

「かしこまりました♡」

いつも通りの笑顔で応えながら部屋を後にする

「ザイルさんが決戦と銘打った期日まであと半年：癪ですが慎二さん  
の助力で例のデータもより精巧な物になりましたし戦力も申し分無  
し

あとは戦場の選択と戦闘時の大まかな作戦立案、そして冬木の3人  
ですか」

割と近くにあるドリンクバーから3人分の飲み物を用意して部屋

に戻る

「…どうせもう忙しくなるでしょうし、ここらあたりで全員慰安旅行とか計画してもいいかもしれません、彼に相談してみましよう」

そして――

日本 愛知県 ホテル天の外にて…

「いー湯ですねぇ」

手拭いを自慢のケモミミに引っ掛けて湯船に浸かる

驚くほどアツサリ通った慰安旅行…ぶっちゃけ本番に向けた訓練と例の3人の説得くらいしかもうやる事が無いので通るのはほぼ確定していたわけですが。

「…で？<sup>ア</sup>ワタクシ<sup>ナ</sup>はどうしてそこまで塞ぎ込んでいるんです？」「ご丁寧に思考共有まで遮断して。」

アサシンのワタクシは答ええない、同じ人物が2人いることを気にするような人間がここにいるわけではない。

別に貸切にしなくても良かったのだが慎二さんが株で儲けたから、とか言っただけ強引に貸切状態にしたのだ

つとと、それは今関係ありませんでした

まあ自分のことだ、聞くまでもなく原因は分かり切っている  
「……………」

さつきはわざとらしく質問したが自問自答するのもおかしい話だし、そもそも元は1つの獣。『教えない』と決めればアサシンだろうとフォーリナーだろうとワタクシから情報が漏れることなどない

——つまりはそれを忘れる程の衝撃だった。と

「ま、例の作戦が終わったら2人（1人ですが）仲良く謝りましょう  
今は忘れてのんびりフレッシュですよワタクシ」

思考共有が切れているお陰でさも会話しているように見えるかもしれないが結局これは自問自答だ。なんの意味もない  
意味がなくても、いいと思いますけどね！

「ひとまずそれは忘れて慰安旅行を楽しみましょう、先延ばしが全て  
悪というわけではありませんし」

「……………」

意味のない自問自答を終えて浴場から出る

「さて、お風呂上がりの牛乳でも飲みますかね」

〽

「はあー……」

自分から木っ端みじんに言われる、という中々に無い経験をしたワタクシは湯船に浸かりながら先のことを考えていた

未だに信じられませんがアレが真実なら人類を滅ぼしたところでワタクシの仕事は終わらない、仕事があるのはまだいいです。問題なのはその仕事をどう処理したらいいか分からないこと。

「生まれてこの方、ここまで悩んだことがありませんでしたよ全く……」  
「なんだ、お前も悩むようなことがあるんだな」

「そりゃワタクシだって悩みの1つや2つ——え。」

やたら聞き覚えのある男の声が真横から聞こえ、何気なく返事をす  
る。普段とさして変わらないやり取りであり特に問題は無い。……こ  
こが女湯でなければの話だが



「ギャーツ??!!」

「いきなり叫ぶな」あと飛沫もかけるな

「いやいやいや！なにナチュラルに女湯入ってきてるんですか！」

「俺たち以外に居るのは彼方とパライソくらいだ、別にいいだろう」

「何が良いんですか!!我が社はそんなサービスやってません！」

ホントもう何考えて「何か勘違いしてるようだから言っておくが俺は女だ」

「――」

は?.....え、無い?

10割悪足掻きの言い訳みたいなセリフに思わず見てしまったが  
…男性なら間違いなくあるはずのものがそこに無かった

「え、ザイルさん女だったんですか?ホントに?」

「むしろこれだけ長く一緒にいてなんで気付かなかったんだ

やれやれ、米軍のことを言えないぞ」

「まさかコヤンスカヤ殿、今まで主殿が男性だと...?」

呼び寄せたのか最初から居たのか知らないうちにパライソさんも来ており、珍しく完全OFFモードにてザイルさんの後ろから野次を飛ばしてきている

「そうですよ!だいたいザイルさん、あんな振る舞いしておいて――あ。」

ふと彼の言動で思い返してみても気がついた

そういえばこの人自分の性別について一切何も言ってません!

「まあお前の言っている通り男として振る舞っていたのはある、ギヤングのリーダーが女だなんて敵にも味方にも悪影響だからな

お前を召喚してからはその必要もほぼ無くなったが。」

ええ…？だからってコレ詐欺じゃないですか？

「あのな、俺はそもそも影月 彼方の肉体にあった空想の兄としての人格が表に出て出来上がった人間だ。」

「神じゃあるまいし人格が変わったくらいで性別が変わるわけが無い」

「くそ正論ですが言われたら言われたでムツカつきますねえ…」

とはいえ言われてみれば思い当たる節はある、フーレンとの戦闘で重傷を負った彼を運んだ際に男性にしては筋肉が少ないとか体重が軽いとか…いや体重はそうでもなかったかも――

「お前だって異星の神のアルターエゴだと匂わせていた時があっただろう、それと同じだ」

「だったらどうして今まで一言も言わなかったんですか！」

「聞かれなかったからな」

「んもう！ノリノリで男性用コーデさせてたワタクシがバカみたいです！」

あれらはあれらで似合っていたものの、実際の性別を知れば当然そっち方面のコーデイナートも思いつきますし…うん？ということ  
は――

「まさかとは思いますが服屋に行くのが面倒だからあえてぼかしてただけじゃないですか？」

「…いや」

否定しましたがワタクシ、アナタが一瞬フリーズしたのを確かに見ましたよ！絶対凶星じゃないですか！

「目エ逸らしてんじゃねーですよ！」

「言いがかりだ」

「シヤラツプ!!」

まったくもう！こちらは真剣に悩んでいるというのに！

「やれやれ、いつもの調子に戻ったな」

「はあ？」

いきなり会話の方向性を変えたザイルさんにキレ気味なため息で返事をする

「コヤンスカヤ」

「なんです？」

「今だから言うが俺はノーア・克蘭ツェルが怖かった」

…はい？

「あの女、常にフザけているくせに観察眼や振る舞いに隙が無く、何を考えているかもまるで読めなかった

たまに未来予知としか言いようが無い行動に出る時もあったな

多分聖杯戦争が始まる前から、いや俺が生まれるよりずっと前から別の次元で物事が見えていたんだろう。9年前に敵として対峙した時も決着は奴の自決に近かった」

「いきなりどうしたんです？」

質問を投げつけるも『黙って聞け』と言わんばかりにシカトされ話が続く

「ダヴィンチの存在が露呈した後もそれは変わらない、お前と違ってあそこまで俺に尽くす理由が分からなかった

だから奴のスマホの解析に賛成した、アイツは不死身の身体を持った化物だったがそれ以上の何かがあると思ったからな」

「彼女の、スマホ…」

「お前が理由も言わずにいきなり仕事を放棄するなんてありえないか

らな、すぐに分かった

：奴は死んだが今もノーアという女は得体が知れないままだ、9年物のロックが掛かっていたスマホにお前や異星の神以上の何かが残っているように不思議じゃない」

「……………」

知らないうちに頭から落ちていた手拭いを拾い、ワタクシの頭へと戻した彼は静かに笑った

「だからノーアの件は全面戦争が終わるまで忘れていい、終わった後も言いづらいのなら言わなくていい」俺の寿命が尽きるまでには流石に言って欲しいが。

「ザイルさん…」

「影月 彼方は最早救えないがザイル・ニツカーという人間の人生はコヤンスカヤのおかげで意味のあるもの…端的に言って楽しいものになった、感謝している。」

そしてそれなら俺もお前に習って貰った分は返さないとな

お前が何を見たのか、まるで想像がつかないがお前と一緒にその『何か』を受け止め、共に歩く覚悟はある。

これについてお前がどう思うかは分からないが…これが俺の嘘偽りの無い本心だと言うことだけは知っておいて欲しい」

……………

まさか温泉地に来てこんな話を聞かされるとは思ってもいなかった、せいぜいザイルが自分のことを話す時なんてパフエか映画の感想くらいだったからだ

「久しぶりに——いや初めてだ、こんなに一方的に喋ったのは。

お喋りになったものお前のおかげかもな」先に上がるぞ

思いもよらぬ告白と長風呂のせいで思考力が普段より落ちていたコヤンスカヤだったが『商人』でもある彼女は1つの事実に気付き、強引に思考力を元へと戻した

がしっ

湯から上がりかけたザイルの手を逃すまいと掴む

「コヤンスカヤ？」 慎二と卓球の約束をしてるんだが。

「貰った分は返す』『共に歩む覚悟がある』：言いましたね？」  
「言ったが」

：ワタクシの前で言った以上、もう後戻りはできませんよ？

「それなら戦争が終わったら手始めにフリフリのお洋服でも着てもらいますね♡ザイルさんが外見的な女子力を見たいですし」

「なっ：おいちよつと待て」

「待ちません♡」

全ての人類を狩り尽くしたら、アナタは絶望するでしょう。ですがどんな手を使っても立ち直ってもらいます

「ウサ耳カチューシャとかもつけてアイドル歌手みたいなこともやってもらいましょう」

「なぜそうなる…!?!」

「?ワタクシが見たいからです。」

そして最終的にNFFサービスへ永久就職してもらいましょう、最も地球には顧客がいなくなるでしょうが

「・・・あー、コヤンスカヤ？」

「はい！如何されましたか？」

「さっきの発言を無かったことにしたいんだが。」

「だめです♡——覚悟、しておいてくださいいね？」

「……………やれやれ」

## 第87話 作戦会議

日本 冬木市 冬木大橋にて…

「慎二、よく聞け」

「なに？」

バーサーク・アーチャーを従えて定期的に衛宮達を説得しに行くという、もう何度目か分からない役目

いつものようにボーダーから冬木大橋で降りてみんなのところに向かおうとしたところでザイルに呼び止められた

「お前がボーダーに来たばかりの時も言ったが米軍、魔術師達との全面戦争が最初で最後の戦いだ。勝とうが負けようが文字通りの最終決戦」

「分かってるよ、後にも先にも僕の力を見せつけられるのはその1戦だけ

だから一切の油断も妥協も無くその日のために準備をしてきたじゃないか」

コヤンスカヤの『檻』まで使って鍛錬したのが記憶に新しい、あれは流石の僕も死ぬかと思った

「そうだ、そしてその期日まで1ヶ月を切った。戦争の開始日を変更することはできないし今日から最後の準備、調整に入る

…つまり客を迎え入れる体制を維持できるのは今日までだ」

「なるほど？衛宮達を護りたいなら今日までに全員説得しろってことか」

正直説得が全く上手くないってないからいつかこうなるとは思ったけど

「いざ戦争に入れば俺は平等に鉛玉を撃ち込むしコヤンスカヤも平等に踏み潰すだろう」

「ここを逃せばあとはお前が戦場で説得するしか無くなる」

最もその場合は力づくで無力化して拉致って形しかないだろうがな、と付け加えてため息をつくザイル

「もしそうなたら離反するか？」

「いやしないよ、戦争にはこっち側から参加したいからね」

そもそもこれだけ年を跨いで説得できなかった僕にも非があるわけだし

「分かった、ならいつも通り明日の朝迎えに——っ…！」

敵だ!!!

聞いたことのないようなザイルの叫ぶ声と橋全体が揺れたような

衝撃

「うわっ！おいザイル!？」

「構うな、お前は自分の身を守れ！」

衝撃波の中心部から飛び出してきたザイルの安否を確認し、ひとまずアーチャーへ護衛に入らせる

「…避けた？」

「あいつは確か——」

「バーゲスト…！一人で突っ込んだじゃだめだ！」

妖精騎士ガウエインとそのマスターのレガリオ、だったっけ？

「はあ、コヤンスカヤ！慎二の護衛に付いて行け、こっちは俺の方で適当にあしらっておく」

『はーんー』

「というわけで行きましょう、慎二さん」



「…ああ」

『単独顕現 EX』

で、来たはいいが

「見事に誰も居ませんね？…先を越されましたか」

衛宮邸、間桐邸、遠坂邸、全てを周ったがもの見事にもぬけの空だった

「セイバーの仲間が困い込みに来たんじゃないのか？」

「ふむ…」

さつきまで居ましたと言わんばかりの痕跡に加え、明らかに昨日までいなかったであろう人間の痕跡も見つかった、おそらくその考えは間違いじゃないだろう

まったく、僕が助けてやるって言ってるのになんでわざわざ…

「今は3人の説得を諦めるしかない、ザイルのところに戻ろう」

「加勢でもします？」

「いや、ザイルの戦いを見に行くだけだ」

魔術師、というか神秘に対して冗談みたいな体質を持っていると常々聞いてはいたもの実際に戦っているのを見たことはない

「『魔術特性《現在》』とか名前付けてるけどさ、魔術って呼べるの？」

だってアレは――

「死んどけクソ雑魚！」

「やれやれ、クソガキ」

格闘術、と言うにはあまりにもお粗末な喧嘩キックやら喧嘩パンチやらを流しつっどうするか考える

バーゲストを圧倒したまでは良かった、剣も打撃も炎も全て無力化。マスターであるレガリオに狙いを定め、後少しでバラバラにできたところにコイツが乱入してきやがった

「気品の欠片も無い戦い方だ、親からロクな教育を受けていなかったらしいな」

「あ？ここは舞踏会でも職場でもねえ、てめえみたいな雑魚になんてお母様から教わった礼儀作法を尽くさなきゃなんねえんだ？自惚れん…なっ！」

妖精騎士トリスタン…真名をバーヴァン・シー、カルデアの記録で見た彼女とは少々違うようだ

「チヨロチヨロ鬱陶しいんだよ！」

「やれやれ、こっちの台詞だ」

こっちの挑発に全く乗らない、正直コイツの目の前でモルガンを貶せば簡単に突っ込んでくると思ったが冷静さも慎重さも変わらない

クラスはアーチャーだろうが弓や魔術が効かないと分かるや否やいきなり殴りかかってくるのにも驚いた、なんとか仕切り直しの爆弾でも投げたいが――

「させるかよー！」

「チィ…」

装備に頼ろうとした瞬間、文字通り死に物狂いで妨害してくる。こぞと言う場面で踏み込んで来ないがそれでも距離を取らせてはくれないし反撃も難しい

付かず離れず、こっちにとってひたすら都合の悪い選択肢のみを選び続けている

「…正直もつとバカだと思っていたが」

「どれだけバカだろうがお前より下はねえよ！」

そして何より――

「らあっ！」

「…っ！」

お粗末に振りかぶった打撃が頬を掠め、僅かに血が流れる

俺の魔術が効かない…少なくともバーゲストに効いた以上、妖精だからという理由じゃなさそうだ

コヤンスカヤを呼べばすぐにカタがつくだろうがそうなら魔術が効かない理由は分からないまま。決戦を控えた今、不安事項不確定要素は消しておきたい

何故効かないのか？

バーゲスト達は参戦してこない、ただこちらの様子を伺っている。ということは奴らもバーヴァン・シーが何故戦えているのか分かっていない

…別段、普段と違うようなことをせず戦っている？

妖精の身体スベツクに任せて繰り出される打撃をいなしつつ思考を回す

苛烈な速度と重さだが動き自体は子供の喧嘩だ、フーレンのような脅威は無い

「……………」

「テメエ、マジでしっつけーな…！」

サーヴァントや魔術師なら俺が負ける道理は無い、というか負けようが無い――待て、だとすると

ふと頭によぎる1つの仮説、だがもしそうなら辻褃が合う。コイツ

の後ろには妖精園の女王がいた、できないとは言い切れない

「――よし」

バーゲスト達に気付かれないよう、魔術を一時解除する

「ツ…の！」

「――」

力を抜き、予備動作を消し、速さだけを追求した裏拳を繰り出す  
バシン

「うわっ！」

なんの力も付与されていない、それこそ一雫の神秘も魔力も無い義  
手の一撃は確かに彼女の肩に命中し、怯ませた

「!!」

当たった…！やれやれ、やってくれたな女王め

神秘はより強い神秘でなければ攻撃自体が効かない、そして当然  
サーヴァントなんて神秘の塊だ。にもかかわらず攻撃が当たったと  
いうことは――

「お前サーヴァントじゃないな？」

それも受肉したサーヴァントでは無い、最初から実体のある生物と  
して足をつけている

「は？…だっただらなに？」

コイツを含めて誰も気が付いていない、気付かれても問題はないが  
ネタばらしする楽しみが無くなるのはいただけくない

「コヤンスカヤ！」

『単独顕現 EX』

「んもう、秘書使いが荒いですねえ」

いつもの権能を使い、出現と同時に対物ライフルの弾丸が発射される

「うっ!？」

避けたか、器用な奴だ。だがこつちに来たのはコヤンスカヤだけじゃない

「慎二」

「うるさいな、言われなくてもやるよ」

ガシッ

慎二のサーヴァント、バーサーク・オリオンが体勢を崩したバ  
ヴァン・シーを掴み上げる

「クソッ！触んな——あぐっ……!」

ミシッ…

データベースではこの女も結構な筋力ステータスを持っていたが  
狂化したオリオンには流石に敵わないらしい

「お嬢様っ!!バーゲスト頼む、彼女を助けてくれ!」ザイルは僕が止  
める!

「分かってます!」

「すぐに潰すなアーチャー、10秒かけろ

…残りの2人の集中を削ぐにはこれで充分だ」

ホラさつさと片付けなよと言わんばかりに目配せする慎二に頷き  
で返し、コヤンスカヤと共にバーゲスト達と対峙する

「退きなさい!」

「…聞きたびに思うんですがそれを聞いて『はい退きます』って答える

方はどれくらいいるんでしよう?」

「お喋りはいい、バーゲストを抑えろ。とつとマスターを始末して帰るぞ」

というわけで2vs2が始まったが今にも握り潰されそうな彼女を気にするあまりどちらも隙だらけだ、これならすぐ終わる

ん、そういえば――

「慎二、あまり派手に潰すなよ

そいつはサーヴァントじゃない生身だ、再利用できるかもしれないからな」

「はいはい」

ビツ、ビキツ

「ぎ――う、うあ――!」

数メートル後ろから骨が軋み、ヒビが入る音が聞こえる  
やれやれ、この様子じゃまともな形は残りそうにないな

「く!?やめろ!やめさせろザイル!」

「お嬢様っ!!」

「先に吹っ掛けて来ておいてよく言う、さっさと死

「ぜりやあ!!!」

――おい冗談だろ?アルテミス神殿の時といいなんでいつも後から来るんだ、面倒くさい

もう何度も聞いた声の主の不意打ちによりバーサーク・アーチャーが慎二を守らざるを得なかったらしく、スクランブルエッグにする前に彼女を取り逃してしまったようだ

「無事か?」

「げほっ、ゴホッ……！来るのが、遅えんだよ、クズ野郎……」

「うっわ、土方さん来てますよ」

「そんなもの見たら分かる」

そして彼がいるという事は――

「くたばれエー！」

見知った男が慎二の横をすり抜け、こちらの首元目掛けてコンバットナイフを振りかぶる

「やれやれクライム……他にやることは無いのか？」

銃を使わないのは流れ弾を危惧しているからか？

義手でナイフを弾き飛ばし、空いたもう片方の手を使ってマグナムを撃ち込む

「ぐがっ……あ、おああああ!!」

顔面から後頭部にかけてマグナム弾が貫通したがそれでもなお、クライムは叫びながら向かってくる

「ノーア、バーゲストのマスターに続いてお前も？」

はっ、ここは不死のバーゲンセールか？

いつだったか『お前を殺すまで死ねない』とのさばっていたコイツだがだからって不死身になることはないだろう

「死ね、死ねっ！死ねエエエ！ザイルウツ!!」

「やれやれうるさいぞ、俺の耳とお前の喉がイカれるだろうが」

戦況は……よくも悪くもない、土方歳三がバーヴァン・シーを救出してそのままバーサーク・オリオンと交戦、バーゲストは先と変わらずコヤンスカヤが抑えている

「おつと」

「フウウウ……！」

不死身だからか以前よりかなり攻撃的——というか一部を除いて  
防御行動を一切取っていない、おかげで何発か喰らわせられたがどれ  
もまともなダメージにはなっていないようだ

守っているのは右手の令呪だけか……

あの令呪を俺の魔術で抉ったらどうなるのか興味はあるが今は試  
している時間は無さそうだ

(あ、コレ増援来ますよ)

分かっている

そう遠くない位置からサーヴァントの気配がする、クラスは恐らく  
セイバー……すぐにでもここに来るだろう

「フッ……」

マグナムを鈍器代わりにナイフを弾き飛ばし、ガラ空きになった腕  
を掴んで橋の下へ投げ飛ばす

「やれやれ、また時間切れだ」帰るぞ

「いい加減にしろ……！また逃げるのか!?!」

投げ飛ばしたクライムが冗談みたいな速度で戻って来た、投げた時  
に腕の骨をメチャクチャに砕いたハズだがあの様子じゃ堪えている  
というより痛覚自体が無くなっているらしい……もう復元しているな

「あのな、いつだってお前から吹っ掛けて来ているクセに何を言っ  
てるんだ？」

こつちとしてはこうして少し付き合っているだけで感謝して欲し  
いもんだが」





「助太刀感謝します、バーサーカー」

宝具であろう旗を突き立てたバーサーカーに礼を言う、彼のお陰で数の差を埋めることができた。

「周囲の兵士が消えてゆく…」

「ああ、一時的な現界だからな」

それにしても征服王以外に英霊を召喚する英霊が居るとは…

「新撰組、土方歳三だ。まさかアーサー王が居るとは思わなかったが」

「！申し訳ありません、先に名乗るべきでした」

騎士王アーサー、アルトリア・ペンドラゴンです。全てではありませんが、せんが事情は遠坂凜から聞いています」

災害の獣の出現、聖剣の担い手である自分が現界できたのは不幸中の幸いだろう。霊基は聖杯戦争で召喚された時と同じ通常のもので、ができることはあるはずだ

「込み入った話は後だ、まずは話にあった3人の保護を。散会している仲間を連れて離脱する」

「ええ、分かりました」

NF F ボーダー 会議室にて…

「…説得はできなかつた」と

「まー仮に会えていたとしても説得は難しかったでしょうね」みんな頑固っぽいですし

殆ど休憩所と化していた会議室を珍しく本来の用途に使って話し合い、情報の交換を行う

参加しているのは俺、コヤンスカヤ（アサシン）、慎二、ベリル、パ

ライソの5名でありフォーリナーは彼方のお守りで居ない

「で？説得の可否を知るためだけに集まったわけではないでしょう」

「ああ…間近に控えた決戦、『全人類生存権剥奪作戦』についての詳細伝達と細かな作戦について決めよう」

## 第88話 宣戦布告

日本 伊吹山 山頂に繋がる石階段にて…

『狂瀾怒濤・悪霊左府』！

ンン〜良いですねえ！ここは魔力使い放題！女狐共に察知される恐れも無し、いやはや良い運動になりましたようカイニス殿！…？おつとそうでした、カイニス殿は留守番でありました！

なんだか拙僧、久しぶりに羽を伸ばせた気がしますね？」

伊吹山の異常な魔力濃度に当てられた怨霊や雑魚鬼を屠りつつ、わざとらしく独り言を言ったり、いつもより多く式神を撒いたりしてみる

…やはり監視の目がありませんねエ、拙僧ようやく信用された？

「まあそんなわけないでしょう、ですがダヴィンチ殿はそれを押して拙僧だけを護衛に指名した」

（コヤンスカヤの慌てる姿を見たくないかい？…ちよつと伊吹山まで護衛を頼みたいんだ、みんなには秘密でね）

「まさか貴女が悪巧みとは、カルデアの貴女と違うことはしようちしっておりますが少々興味がある故こうして1人、黙々と掃除を続けているわけでございます

ン…それにしても」

山頂<sup>うたえ</sup>で何をしたらっしやるのですか？貴女達は？

「このクソAI、いつまでこうしてりや良いんだ」

『もうちよつと…あと少し！』

かつて山頂だったクレーターの端でバーヴァン・シーがイラつきながら手元のスマホに怒鳴る。

長い時間ずっと立ちっぱなしでも疲れなんて感じない身体だが機嫌は悪く、いつ手元のスマホを叩き壊してもおかしくないほどだった

「つーか何を調べてんだ、クソ蛇はもうここに居ないんだぞ？そろそろ答えろよ」

『……………分かった、60年前のことだ』

は？

「誰が過去の話をしろったの？」

『順序があるんだ、聞いてくれ』

「…ちつ、くだらない理由だったらテメエの本体真つ二つだからな？」

『ありがとう、ザイルとコヤンスカヤ、またキリシユタリア達は伊吹童子という神により60年前の聖杯戦争が誘発された、もしくは聖杯に呼ばれて伊吹童子が現れたと考えてる』

妥当だね、神秘の薄れた現代で神が現れるなんてそれこそ奇跡でもない限り無理だ。だが伊吹童子か聖杯、どちらが先かは結局結論は出なかった』

『……………』

『サーヴァントキャスター、レオナルド・ダヴィンチは60年前のこの地で鈴木京子によって召喚され、つい最近までアメリカに居た。私は彼女が作り出した人工知能に過ぎないが彼女が現界している時の記録は全て引き継がれている』

…ただ2つを除いてね』

スマホから声は聞こえるも特に何か表示されている訳でもないの  
で少々変な感じになるがとりあえず続きを促す

『1つは鈴木京子について、彼女のデータはAI作成時に入力されていなかった。存在しているのはノーア・克蘭ツェルの名前だけ。鈴木京子というのもかつての秘密基地からなんとかサルベージした名前に過ぎない』

そしてもう1つはとある妖精についてのデータだ

：妖精騎士トリスタン、バーヴァン・シー、君に関する一切の情報は私の中に無かった

レガリオ君とバーゲストの情報はあったのにも関わらず、だ』

「——だから何？」

『本気で隠したいなら他にも方法があったはずだ、それこそバーゲスト達の情報も最初から入力するべきじゃない』

：思うにダヴィンチは入力しなかったのではなくキミに関することだけを知らなかった、いや忘れさせられていたんだ。多分キミを異聞隊からこの世界に逃した人物に』

…！

『抑止力どころか全ての世界を狂わせてまでもキミを守ろうとしていた、手段は分からないが殆ど力技だったのは間違いない、普通はこんなことできない』：解析が終わった

『…やって来たのはキミ、バーゲストの霊基情報、そしてもう1人の計3人。既にコヤンスカヤに滅ぼされた世界から来たカイニス、道満、ホームズの3人はその時にできた3人分の通路を使ってこの世界に来たんだ』

『おっと、今彼らは関係なかったね、とにかくキミをここに逃がした人物はキミのために霊体ではなく肉体を与えたがそうせざる負えない』

状況でそこまで手間のかかることができたとは思えないんだ  
ええとつまり「——もういい」

あまりにも長々と喋るダヴィンチに嫌気が差して話を切る

：お母様から『この事はここににいる者以外には絶対に話すな』と言  
われてたけど幸いダヴィンチはあの場に居た

こうして私だけを連れて来た時点で多分ダヴィンチの中では答え  
が出ている、のなら黙っていても無駄だろう

「お前の予想通りだ、60年前にこの地に現れた聖杯はお母様——女  
王モルガンが作った物。そんでその聖杯は今、私の中にあってそのお  
かげで肉体を保ってる：これで満足？長いこと待たされた挙句にサ  
イツコーに思い出したくないことも思い出しちゃってるんだけど？」  
『ごめん、でもこれは確認しておくべきことだったんだ』

：ツチ

「そんなことを言うためにここまで来たの？」

『そうだけどそれが全てじゃない、少なくともこの伊吹山の歪みに妖  
精園の女王が関わっているのは分かったからね

：バーヴァン・シー、キミの力を借りたい』

はあ？

「何させる気だよ？」

『それはね…』

この詰みかけている世界にもう一度抜け穴を作ることさ

↳

アメリカ J地区 米陸軍駐屯地 会議室にて…

「衛宮士郎をH O P Eボーダー整備長に？正気か？」

もはや定例となつているキリシユタリアとの作戦会議中。何かの間違いかと思つて聞き返すが――

「整備長補佐だ、彼の魔術は役に立つ」

どうやら肝心なところは聞き間違いでは無かつたらしい

「遠坂家の令嬢とは違うぞ！騎士王がついているとはいえ保護して1ヶ月も経っていない一般人の学生を『魔術が使える』という理由だけでボーダーに乗せる気か？」

もちろん彼を守る以外にも理由はある。騎士王の存在だ、サーヴァントなら主を危険に晒すことは避けるだろうしどんなことがあつても彼の保護を優先するだろう、それでいざという時守りに入つていて戦えないどころか身代わりにならなかつたら最悪だ

「クライム、これは彼も望んでいることなんだ」

「尚更容認できないな。俺には分かる、あの子供は目的のためなら難なく自分を捨てるだろう、だいたい遠坂家の子供を戦力に加えるのだから反対で「やれやれ、邪魔するぞ」

「会議中だ、後に――ツツ!!?」

さも当然のように扉から入ってきた男へ反射でハンドガンを叩き込む

「話し合いをするという選択肢が無いのは理解できるがいきなり撃つてくる以外の選択肢が無いのはどうかしたほうがいいんじゃないのか？」

弾かれた…！

「ザイル…どこから入った!？」

「どこから、って俺は正面から入ったが？」

入る時に邪魔してきたお前の部下を何人かゴミにしたが誤差だ、気



にするな」

…!

「貴様！」

「勝てない相手に立ち向かわせる方が悪い。…つと、こんな話をしに来たんじゃなかった

お前たちに伝えたいことがあるんだが聞いてくれるか？」

「ふざけるな！今すぐここで死——

「落ち着くんだクライム、カイニス！君もだ」

「…ツチ」

「ん、ああ居たのか。バーサーカーも居るがアルターエゴは居ないのか

いいさ、そのまま聞いてくれ」

「宣戦布告かい？」

「そんなところだ、『15日後にお前達——米軍魔術師合同勢力に戦争を仕掛ける』」

「『！』」

『15日後のこの時間、私たちはあなたたちの全てを奪いに行く』

「——彼方」

「久しぶり、お姉ちゃん」

「彼女が遥様の妹…」

「年齢と纏う気配以外は瓜二つ…

…こんな、子供が——」

『言い換えりや15日後のこの時間までは白旗は受けつけるそうだが』

？』

「それ以上近寄るな、ベリル・ガット！」

「お？妖精騎士とそのマスターか

それにしてもオレの情報、初対面の相手に知られすぎじゃねえの？」

『申請さえすれば誰であろうと分け隔てなく、平等に！責任を持って『保護』させていただきます♡』

詳しくは《NFFサービス 人類保護係》までお問い合わせください  
♪』

「…愛玩の獣、コヤンスカヤ」

「おやラスプーチンそつくりの…大して変わってませんねえ

英雄王さんもお久しぶりです♡」あ、電話番号はNFFサービスで  
検索したら出てきますよ

『ま、ボクはみんながどうしようとなんでもいいけどさあ？戦うつもりの人は悔いが残らないよう、この15日間ですっかり準備しておきなよ』

「慎二ー！」

「衛宮じゃないか、やっぱり米軍のところに居たんだ

なあ衛宮、何回も言ってるがちよつと考えれば分かるだろ？人類は  
近いうちに滅ぶんだ。そのままそこに居たら死ぬよ？

あとそれを遠坂の奴に言っつてやっつてくれよ、アイツ僕の言うこと聞  
きそうにないし」

「慎二…こんなことやめてくれ、俺も戦う！俺たち3人を助けるた  
めだけに人類の敵になるなんて自己犠牲、間違ってるぞ！」今ならま  
だ間に合う！

「…衛宮に自己犠牲がどうのこうの言われるなんて思っても見なかつ

たな」

『15日後が残人類の運命を決める日だ。戦争の名は全人類生存権剥奪戦争。』

戦いに来る奴は万全の体制を整えて、全力を尽くしてから——』

『 し ね 』

、

NFFボーダー 管制室にて…

「で？なんだったんだあれは」

「はい？」

宣戦布告を終え、怒り狂ったクライムを適当にあしらって帰ってきた後、俺はコヤンスカヤに先のことを問い詰めていた

「予定じゃ仕掛けるのは5日後だったはずだ、それを直前になって15日にした理由はなんだ」

「ああ、アレですか。クソ坊主とダヴィンチさんが居なかったからです」

「たまたま遭遇しなかっただけじゃないのか？」

事実あの基地には普通じゃ考えられないほど英霊が多い、その全てをあの短時間で補足するのは難しいだろう

「そうなんですけども少なくともクソ坊主と英雄王は捕捉してから掛かるつもりが基地に居なかったんですよ

加えてAIダヴィンチとワタクシ達の誰も接触してないようできて、彼女のことなら少しでもこちらから情報を引き出そうと積極的に話しかけてくると思ったんですが」

…？

「何が言いたい、それが引き延ばしたと何の関係があるんだ」  
「つまり「悪巧みが得意で機転が効く芹屋道満と常に奥の手を用意しているダヴィンチが揃って基地から消えたから不気味だ、って言いたいんだろ」

「ずい、とコーヒー片手に慎二が会話に入ってきた

「…人の会話に割り込むと嫌われますよ？」

「そう？イチイチ周りにくい言い方してイラつかせるよりは良いと思うけど。ザイルはどう思う？」

——やれやれ、勝手に火花を散らしておいてそれを俺に振るな

「そうだな、要約してくれたのは良かった。だがそれをネタに毎度毎度火花を散らすな。鬱陶しい

…あと人の会話に割り込むのもやめろ。やれやれ」

「ふーん、キミがそう言うなら心得るよ」

「ほんっと憎たらしいおガキ様ですねえ」

相変わらず慎二は俺以外にあまり心を許そうとしない、戦争が終わったら一度じっくり話してみたほうが良さそうだ

「お前は優秀だが人との付き合い方は俺より酷い、今度道徳授業の真似事でもやってみるからお前も来い」

彼の場合は周囲の環境と彼自身の高い才能が悪かったが

「はあ？僕の人付き合いのどこが悪いんだよ」

「それを自覚させるのも授業の1つだ」

「いやザイルさんには無理でしょ…犬に空飛べって言ったって不可能なのと同じですよ」

…やれやれ

「とりあえずこれは保留だ、それよりも伸ばした10日分を無駄にするな

芦屋道満とダヴィンチの足取りを追え。慎二は30分後にトレニングジムに來い」追い込むぞ

「かしこまりました！」

「分かったよ」

さて、米軍基地は今頃どうなっているか…

米陸軍駐屯地 グラウンドにて…

「対テロ特別捜査本部責任者及び、バーサーカーと契約したマスターのクライム・アルバートだ。

事態の急変に伴い集まってもらった」

グラウンドの四隅にアンプやスピーカーが雑に並べられたその場所に所狭しと集められた米軍と魔術師達。不平不満を抑えるため、壇上でマイク片手に喋るクライムの隣にはクリシユタリアも居て変わり代わりマイクを手渡していた

「魔術師クリシユタリア・ヴォーダイムだ。知っている者もいるかと思うが先ほどザイル——いや、ビースト勢力から宣戦布告を受けた。

彼らの目的は全人類の死滅もしくは隷属化、そのためにサーヴァントという強力な戦力が多く留まっているこの基地を襲撃し、根絶やしにするつもりようだ

仕掛けてくるのは15日後らしいが奴らがそれを守るという保証はない」

騒つく彼らを鎮めるように言葉を続ける

「確証があるのは聖杯戦争なんて問題にならないような文字通りの

『戦争』が起るといふことだけだ。故に今一度ここで決めてくれ。自分は戦えるのかどうかを、自分は戦ってもいいのかを自分に問いてくれ」

「マイクを、——軍人、魔術師、関係無く戦えない者や戦いたくない者は離脱して良い。特に10年前に伊吹童子を宿した影月 彼方と戦ったことがある者はよく考えてくれ」

コヤンスカヤの『保護』について言うべきだろうか、と目配せでギリシユタリアとコンタクトを取っているといきなり彼のサーヴァントであるカイニスにマイクを取られてしまった

「ギリシユタリアのサーヴァント、神霊カイニスだ。コヤンスカヤの奴は人間が動物を保護するみたいに人間を保護しようとも考えている

事実保護を要請できる手段も残していった、人間的な扱いはほぼ間違はなく受けないだろうが少なくとも生命は保証されるだろう

…そうなってまでも生き延びたい奴のことを、少なくとも俺は否定しねえ。てめえの人生はてめえで決めろ、他人に縋るな」

「カイニス…」

「いきなり入って悪かったな、マイク返すぜ」

確かに開示できる情報は全て開示しておくべきだろう、妙な壁を作るのは悪手だ

「始まるのは10日後かもしれないし明日かもしれない、戦うにせよ離反するにせよ時間は限られている

それを胸に留めておいてくれ」

「これから戦う敵や戦う手段、それ以外の分からないこと、知りたいことがあればいつでも来てくれ。共有棟1階にいる。

情報の出し惜しみはしない」

やはり米軍側から離反者は出そうに無い、魔術師側はまだ迷っている者もいるようだが…いや、これで良いんだ。戦える人間は1人でも多い方がいい。だから——これで良いんだ

無理矢理自分を納得させ、演説を終える

——そして

↳

クライムの自室にて…

「浮かない顔だな」

部下からすっかり教官の印象がついた土方が感情の読めない声で言う

「——15日、いや明日にはとんでもない殺し合いが始まるかもしれないんだぞ、愉快になれる訳がない」

なれるとしたらそれこそザイル達だけだ

「だろうな、だが俺にはそれ以外の要因もあるように見える」

ツ…

「——あつたとして今は関係ない」

「そう言うと思っていた、だからこれは俺の独り言だ。…俺はお前の味方だ」

「…？どう言う意味だ、おい土方！」

返答は無い、どうやら霊体化してどこかへいったようだ

「どういう意味なんだ…」

だが結局それが分かることは無く、時間は矢のように過ぎていった

装備を整える者、鍛える者、異種の勢力の人間と話し合う者、脱走

する者（離反者は魔術師だけだったが）、いつ来るか分からない戦争に身構えながら1日、2日と過ごしていく内あっという間に――

「――土方」

「ああ」

――約束の日が来た――



## 終章 全人類生存権剥奪戦争 第89話 開幕

アメリカ ???にて…

「ぐびぐびぐび…」

「あー…」

「んび？あーちよつと待ってね！キリのいいところまで飲むから！ぐびぐび」

いやそういう問題じゃないというか

「朝からずつと飲んでますけどそれ、何個目の樽ですか…？」

この狭い空間にアルコール臭を蔓延させながら樽単位で酒を飲む伊吹童子に恐る恐る質問する

「え？4つ目だけどう…あ、ごめんなさい！影月ちゃんのこと考えてなかった！はいどうぞ！」

一緒に飲みましょ！とにこやかに酒樽を差し出す神様

ずいつ、と近付かれた瞬間後ろのアタランテが臨戦体制を取るう、酒樽重っ！じゃなくて！

「もう1時間も無いんですよ！酔っ払ってる場合じゃないです！」

「？だから飲むんじゃない」

意味分かんないんだけどこの神様!?

「いい？相手は世界を滅ぼせる力を持ってるし、貴女の妹は私の力の7割は持っていつてる。1時間後貴女達が無事でいる保証は無いの」  
もちろん私もね

「それは…」

「だから今のうちに飲んでおくの！1時間後、2時間後の分まで！だから影月ちゃんだけじゃなくてみんなも飲んでいたほうが良いわよ？』『あの時飲んでおけば良かったー』なんてイヤでしょ？」  
「……………」

「そーだ！土方くんも飲む？」

「せっかくの誘いだが飲酒操縦になる。…終わった後で、2人で飲む」

「いーわよー♪ガエリオくん達は？」

「レガリオです、それは勝った後に。」

「んー、ちっちゃいマスターとアヴェンジャーは？」

「遠慮する」

「わ、私も…」

「つれないわねえ」ひっく

…なんだかなあ

「人間みたいです」

「そーお？あーでもそうかも、このところ神としてなんにもしてないし、影月ちゃんや土方くんに引つ張られたのかもねー？」

「…」

世界の命運なんてどうでも良い、ただ彼方とザイルを止められれば

——でも

ケラケラ笑う伊吹童子に少し、少しだけ勇気を出す

「一杯だけ、貰ってもいいですか」

「オツケーおっけー！はいどうぞ！」

少し、ほんの少しだけ飲んだお酒の味は『死ぬまで』私の口の中に残った

）

F地区 美術館地下兵器廠にて…

「衛宮整備長!」

「補佐ですよ、整備長は貴女じゃないですかネリス軍曹

何かありましたか?」

作業を一時中断し顔を上げると

「先輩!」

「桜? どうしてここに?」

学校の後輩、間桐桜が整備長に連れられていてそこにいた

当たり前だが桜は非戦闘員、戦いはもちろん支援にも入っていないな  
かったものの、桜には珍しく食い下がったようで医師の英霊であるア  
スクレピオスの元で後方支援に加わったと聞いていたが…

「あの、これ!」

そういつて差し出された彼女の手にあつたのは弁当箱

「こんなことしかできないですけど、良かったら食べてください」

そういえば今日の昼食はまだだったな…

「ありがとな桜! いただきよ! あ、でも——」

「整備長以外の分も糧食班で用意してあるから心配しないで!

それとそのお弁当は大事に食べた方がいいわよ? それは糧食班の  
作ったものじゃなくて全部桜ちゃんが1から10まで作った愛の手  
作り弁当だからね!」

「!! ね、ネリスさん!」

「ネリスさん…あまり桜をからかわないでくれ」

そういう茶化しは見ていて気分の良いものじゃない

「…衛宮さん、アナタ朴念仁って呼ばれない?」

「? どういう意味です?」

「ダメだこりゃ」

「ギリシユタリアさん」

美術館跡の真下にあるとは思えない巨大な兵器廠で、これから起こるであろう戦争にどう向き合うか考えていた時、ふと横から声をかけられた

「フアムルソローネ副艦長かい」

「はい、調整班から最後の報告があがりました」  
「聞かせてくれ」

「報告します、H O P E ボーダーの最終点検が終了。管制室からの擬似魔術回路を接続次第飛ばします」

「分かった、では5分後サーヴァント、魔術師、米軍問わず全ての乗組員をここへ。点呼完了後速やかに搭乗し戦闘態勢移行準備を」

「分かりました、ただちに」

「うん——あ。」

——そういえば——

「副艦長、1ついいかい？」

「なんでしょうか」

「これからは私を呼ぶ時『艦長』とつけてほしい、魔術師はいいが艦に軍人も乗るからね。役職を付けて呼んだ方が良いだろう」

「分かりました、ヴォーダイム艦長」

「うん、ありがとう」

——ふふ

「ヴォーダイム艦長、か」

、

J地区 米陸軍駐屯地 クライムの自室にて…

ザイルが明言した決戦まであと20分…米軍、魔術師、サーヴァントが各々態勢を整えている中、彼の元に一本の電話が入った

「…キリシユタリアか」

『うん、HOPEボーダーの最終点検終了、理論上はこれで飛ばせるよ』

「理論上？」

『試運転ができなかったんだ、当たり前だけど流石にやったら墮とされるからね』

あの大きさだ、当然だろう。ついでに言えばHOPEボーダー格納庫は再び入庫させることを考えていない——ようするにいざ発進となれば格納庫全体を突き破って出撃という脳筋のやり方だ

一応向こうにはダヴィンチがついているが

『まあまあ心配しないでくれたまえ！途中参加とはいえ私の自信作でもある。絶対に成功するとも！』

「…分かった」

当人がこう言っていることだし大丈夫だろう

最後の電話を切り、軽く身なりを整えて外へ出る

「クライム？今いいかしら」

「ペペロンチーノ？…何かあったのか？」

スカンジナビア・ペペロンチーノ、キリシユタリアが選出した魔術師の1人であり経歴に謎が多い男。だが魔術師でありながら軍の練兵、特に格闘訓練には積極的に参加しており、誰に対しても変わらない姿勢で向き合うため米軍内でもかなり多くの支持を集めている人物だ

「ええ。以前衛生軌道上に確認されたサーヴァントは覚えてる?」

「——ああ」

5日前突如宇宙空間に現れてすぐに消えたサーヴァント影、外見はコヤンスカヤそのものだったがクラス反応はアサシン含め通常クラスに該当無し

ダヴィンチ、キリシユタリア、カイニス、芦屋道満はこれをエクストラクラス、フォーリナーであると断定。あの時はすぐに消えたために詳しい調査はできなかったが…

「来てるわ、同じ場所に」

「フォーリナーが? 狙いはなんだ」

「分からない、でも放置する選択肢だけは無いわね」

月でも落とすつもりかしら? なんて笑いながら言う彼だったが目は笑っていない

…それぐらいやってきてもおかしくない、ということか

「じゃつ、伝えることは伝えたし私は持ち場に戻るわ!…無理はしないでね」

「人類存亡がかかった戦いだ、無理を通さないといけない時も来る」

「——そうね、でも誰にだって1つくらいワガママを言う権利はあるのよ?」

「???

最後の言葉の意味はいまいちよく分からなかったが即座に疑問を追いやって状況の再確認をとることにした

昨日買ったばかりのメモ帳を取り出し、1枚ごとにギチギチに文字が詰め込まれたページをめくっていく

・住民の避難…完了、かなり広範囲まで区画を広げて苦労したがここまでやれば宝具やミサイルを何発撃とうと被害を受けるのは街だ

けで済む

・各隊の配備：完了、避難が終わっているので基地に籠る必要がなくなり、街全体に部隊を配備することができた。街に被害は出るだろうがもうそれは諦めるしかない、人命第一だ

・魔術師達との信頼関係構築：完了、100点とは行かないがある程度の連携はできる。キリシユタリアが現場に居ない今主な司令塔はカドツクとペペロンチーノだ。彼らとの情報交換を絶やささないよう注意しなければ。

・核ミサイル発射基地の索敵：搜索不能、茨木童子の情報により核の撃てそうな基地を探したが少なくとも国内には存在せず、国外にもアメリカを射程距離に収められ、かつザイルの手が及んだような基地は無かった。茨木童子の勘違いなら良いんだが…

・敗北の条件：俺たちの負け筋は大きく3つ。

1つ目、この周辺が基地の役割を果たせないほど破壊されること、もちろんこの基地が消し飛んでも周囲の建物を代替にする用意もあるが全て吹き飛ばされたらまずい

2つ目、現状ストームボーダーに唯一対抗できると思われるHOP Eボーダーが墜とされること、あんな空飛ぶ要塞に対抗できる手段は対等な戦場に立つ以外にない

そして3つ目、サーヴァントもしくはマスターが全滅すること。理由は：説明不要だろう

この3つだけは阻止しなくてはならない、そうなっては戦争どころでは無くなる

・勝利の最低条件：愛玩の獣コヤンスカヤと神霊伊吹童子を宿した影月 彼方の排除。ザイルが持つと思われる核兵器の無力化

戦局がどう傾き転ぼうと2人さえ排除し、核の脅威を無くすことができれば世界は守れる。最もその最低条件が難しいのだが

「…難しくてもやるしかない」

いつの間にかアメリカから世界へと背負うものがすり替わっている、だが『完璧な勇者』である彼には些細な問題だ

「中将！」

「ああ、今行く」

↳

米陸軍駐屯地より2キロ南 雑居ビル屋上にて…

「ん、と、悪いセイバー、出てくれ」

10年前から使っている通信端末をセイバーに投げ渡し、周囲の環境確認を今一度行う

『こちらウェイバー、聞こえるか』

「聞こえている。セイバー渡辺綱、マスターとともに準備中だ」

「てつきり全員基地にこもって戦うかと思ったがそうでも無いんだな」

『そんなことをしたら基地ごと消し飛ばされるだけだ、民間人の退避が終わっている今基地に拘る理由はない』

「それもそうか」

そういえば、という話だがビーストを迎え撃つにあたって今回の作戦立案…つまり参謀を務めたのはウェイバー・ベルベツトらしい。気になって経歴を又聞きしたことがあったがとんでもなかった

10年前の時点で聖杯戦争を経験、川の水からキャスターの工房をあつさりで見つけたし、契約したサーヴァントの征服王イスカンダルと共に英雄王と一戦交えた上で生き残っている

「頼もしいな」

『リミットまであと5分を切っている、急いでくれ』

「大丈夫だ、今終わった」

魔術的偽装は貰った礼装であつさり終わったが視覚的偽装にここまで手間取るとは思わなかった、背景がコンクリートだからしょうが



ないのだが…

「これで最初の一撃は間違いなく不意打ちが決まるだろう、妨害されなければの話だが」

『分かった、時が来たら頼む』

「了解」

「行けるかセイバー？」

「俺は問題ない、それよりも基地の方に注意を払っておいた方がいい」

「まあ、そうだよな」

どう考えてもこの戦争で真っ先に火の手が上がるのは――

↳

米陸軍駐屯地　グラウンドにて…

「あー…」

「……………」

残り一分…言うべきか？どうしようか、でもいざ始まったらそんな余裕なくなるだろうし言っておこう

嫌われようと見殺しより良いだろうし

散々迷ったもののライダーのサーヴァント、マンドリカルドは意を決してもう一度話しかける

「あの…」

「あ？まだなにかあんのかよ根暗野郎」

「ホントに戦うんすか？バーゲストさんもレガリオさんもメチャクチャ心配してるっすよ

…なんなら俺も心配してますし」

「根暗野郎って言われて否定しねえのかよ」

「・・・まあ事実つすし特には」

「チツ：それと私はここで良いんだよ、バーゲストとレガリオにとって私の意見は絶対だからな

色んな奴に背中押されて辿り着いたつてのに、おめおめ壊されるのを黙って見てられるかよ」

この人クチは悪いがなんだかんだ言つて良い人だな・・・

「ジロジロどこ見てんだよ？」

え？あ。

「いや違うんすよ!？」

俺みたいないな陰キャあるあるなんだが視線が下がってるからといって胸とか見てるわけじゃないんだ、ただ顔を直接見れないだけなんだ！

「そのそういう意図は全く無いってどうか！いえ魅力が無いってわけじゃ無くてですわね！」

「うるせえ、あと10秒だ。喚く前に構えろ」

「…っす」

有無を言わせない剣幕に黙つて構える

どこから来るか分からないが中心部であるこの場所ならライダーのクラスを活かして即座に増援として駆けつけることができる

「始まるぞ」

「……………」

あと5秒――

できればこのまま何も起こらず時間が過ぎて欲しいという思いはあるがそうも行かないようだ

『お時間になりましたので始めさせていただきますね！』

「!どこだ!？」

まるで脳に直接届いているようで声から特定ができない！  
一体どこから来

『単独顕現 EX』

「おっ届けものでーす♡」

「！」

やべえ真後ろに『神剣 草那芸之大刀』

——  
!!!

く

F地区 美術館地下兵器廠 H O P Eボーダー管制室にて…

「うわああああっ！」

まるで地中に爆弾を突っ込んだような音と衝撃が艦内をかける

「始まったか…！総員第一種戦闘態勢、ただちに離陸準備！メインエンジン点火を最優先だ、急げ！」

「」「了解！」「」

今の衝撃、勘違いでなければ基地の方向から——

「どこからだダヴィンチ！」

『基地のど真ん中！包囲上等で現れてる、しかもいきなり草薙を…！』

やはりか…戦力は分散させてはあるがいきなり中心部に来るとは  
ね

「基地は？」

『基地は——えっ？無傷だ…あつ！魔術の震源地が少しズレてる！誰  
かは分からないが草薙を他所に逸らしたみたい！』

代わりにD地区は完全に吹き飛んだけど死傷者はゼロだ！

——それにしてもどうやったんだ…？」

よし

「基地と街のことは彼らを信じて託そう。副艦長、エンジン点火までどれくらいかかりそうだい？」

「――15分です！」

「多少他を捨ててもいい、10分でやってくれ！イヤな予感がする」

「ああ、多分その予感は当たっている」

!!!

ザイル――

「早速で悪いが退場しろ」

乗組員全員、丁度それぞれのコンソールに向かっており誰もザイルに気付いていない！

「っ！」

ダンドンダン！

「ヴォーダイム艦長!?そいつは…」

「敵だ！もう乗り込んできやがった！」

「――やれやれ、魔術師の大将とも言えるキリシユタリア・ヴォーダイムとあろう者が銃器そんなものに頼るとはな

今年に入って1番驚いた」

「そうだね、私もだ」

嘘偽りのない答えだ、こうして持つてはいたが実際に使うとは微塵も思っていないかった

「慣れない武器である速度の切返しか？やれやれ」

だがザイルが相手ならば別だ

「ダヴィンチ、リフトを出してくれ」

『ちよつと待つてくれ！そんなこと「艦長命令だ、頼むよ」  
『わ、分かった』』

「彼は私が相手をする、離陸までファムルソーネ副艦長が指揮を  
取ってくれ」

「…っ、了解！」

ガコン

真上のハッチが開き、司令エリアの一部が甲板上に迫り上がって  
く

私とザイルを乗せて。

「まあいい、こちらも全員位置に付いた。——始めようか？」

全人類生存権剥奪戦争、開幕

## 第90話 強襲

開戦前日 NFFボーダー 会議室にて

「ありや？俺が最後だったか」

悪い悪い！とあまり反省していなさそうな態度で席に着くベリル

「んー、時間にルーズなのはいただけませんねえ」

「来ないよりマシだ、とりあえず彼方とフォーリナー以外はこれで全員集まったぞ。お前の立てた作戦を聞かせてくれ、慎二」

桃色の喧しい色をした円卓テーブルについたザイル、コヤンスカヤ、ベリル、パライソの視線が彼へと集まる

「それなんだけどザイルは僕が居なかったらどういう作戦で戦ったかももう一度振り返ってほしいんだ」

「居なかったら…：そうだな、フォーリナーに彼方の首輪の紐を持ってもらって暴走しない程度に暴れてもらいつつNFFスペシャルの数で押して俺とコヤンスカヤで銃撃戦、あわよくばパライソに暗殺指令でも。ってとこか」

「え？俺は？」

「元々お前が居るプランを考えてない、どうせ好きなように動くだろう」

「いや、面白そうだったら乗るが。」

「狼とか呼ばれてるクセに猫みたいですねベリルさん」

「・・・褒められてる？」

「いえ？」

・・・やれやれ

「やっぱりね、それ白紙。」

「なに？」

「まず米軍基地殲滅に当たるのは影月 彼方、アサシンのコヤンスカヤ、そして僕の3人だ」

「おおー、軍師みたいだぜ慎二！」

「黙っていろベリル。…続きを」

「影月 彼方の戦闘力は確認した。本気で連中を潰したいのならアレは全力で暴れさせたほうがいい」ただでさえ人手が少ないんだからな「だがすぐ横で全力で暴れられたらこっちもタダじゃ済まないぞ」

「横で暴れさせなければいいんだ、コヤンスカヤの単独顕現を使って基地のど真ん中に放り込んで放置しろ

同時にNFFスペシャルの兵器で奴らを包囲、内側と外側から挟み撃ちすればかなりの損害を与えられる

そのまま崩れることはないだろうけど何かしら大きな隙ができるのは間違いない、それを僕のアーチャーとコヤンスカヤの兵器で遠距離から突く：彼方という脅威に手一杯な中で来る遠距離攻撃は向こうからしてみれば最悪だろ

「この不意打ちの一手は上手く使ってくれよ？」どうしてもっていうならそっちの作戦も立ててあげるよ

——なるほど

「あのー、それ1人で考えたんです？」

「他に参謀居ないだろ、あと彼方の戦い方についても広範囲攻撃が草薙とお供の大蛇頼りなのは物足りない。少し彼女とも話がしたいんだけど」

「開戦は明日だぞ、今から鍛錬させてできるとは思えないしそもそもこれ以上彼方を強くさせるのは反対だ」

「同意見です、コストリターンが釣り合いませんわ」

反論するも慎二の方は『そう来るのが分かった』と言わんばかりに笑う

「知ってるさ、不器用な奴にあれこれ教えても無駄なのは。不器用は不器用なりに戦うのが一番強い。だから——」

「えっ。」

「やれやれ、本気か？」

「本気さ、それでザイルは？賛成？反対？」あ、反対ならこれより良い意見は出してよ？

「ごもつとも、さて…」

確かにそれなら1発で凶悪兵器になり得るが。

「お前も『兵器みたいなものだ』って言ってただろ、兵器なら色んな使い方があっていいはずだ」

「ワタクシは嫌ですよそんな使い方！ザイルさんも言うてくださいいましー！」

ふむ

「反対する理由は無い、それで行こう」よくやった

「エー!？」

いざとなれば強制的にオフにできる安全装置までついてるなら使わない手は無い

「だよね、分かってたけど正当な評価として貰っとくよ

じゃあ次はザイルとパライソとベリルの役割についてだ、しっかり聞けよ？」

「…やれやれ」

これは楽しみだ



5

時は戻り現在

J地区 米陸軍駐屯地 司令部3階にて…

「影月彼方及びNFFウエポン地上タイプAからEを確認！」

「タイプAは米軍じゃ相手にならない、新撰組に任せろ！C、D、Eを歩兵隊と魔術師達で叩くんだ！」

タイプBを相手にする隊は補給班との連携を怠るな！あの装甲車はロケット弾が無ければ破壊できないぞ！」

「ベルベット参謀長！タイプAの数が予想より多い、沖田さんの隊を増援に回して欲しいと来ています！」

「分かった！だが送るのは沖田総司の隊だけで彼女は送るな！あの瞬間、爆発力はギリギリまで温存しろと伝えろ！」

「了解！」

かつてないほど騒がしい司令部で彼、ウェイバー・ベルベットは汗だくになって指示を飛ばしていた

「大蛇出現！数は6！」

「HOPEボーダーにザイル侵入！クライム中將が向かわれましたがそれまで持つかどうか…！」

「南方より接近中の飛行物体確認！生体反応キャッチ、速度——約300マイル！350、400、450…更に加速中！」

「く…！」

想定していた以上にメチャクチャだ！グラウンドにいきなり影月彼方が現れたかと思えば広範囲に渡ってバラ撒かれたNFF兵器の数々…

最悪タイプA以外は米軍だけでも相手にできるが問題は今グラウンドに居座っている影月彼方だ、さっきは誰かが防いでくれたが草薙

を何度も凌げるとは思えない

「現在サーヴァント、マンドリカルド及びバーヴァン・シーが影月彼方と交戦中、増援を出そうにも大蛇のせいで近寄れない！」

「分かつてる！10秒考える時間をくれ！」

本当にマズい、なんとかして彼方を基地の外に追い出さないと全滅する……！

始まって5分も経っていないが恐らく奴らは早々に終わらせに来ている、ここが使い時か

「——新撰組副長に繋いでくれ！」

「りよ、了解！」

「参謀長！緊急電話です！」

「受話器をくれ！外の様子は随時報告しろ！」

「まったく誰だこんな時に！」

『逃げて！今すぐ司令部から出て早く!!』

「バーヴァン・シー!?無事なのか？」

『そんなのどうでもいいから早く!!』

一体なんなんだ？NFF兵器は司令部の結界に感知されていない、仮にコヤンスカヤがいきなり現れたとしても警報音は鳴る

「さ、参謀長……あいつが、影月彼方が……！」

「いいか、そこにいたら袋のネズミだ！こちらで弾幕を張るからライダーと協力して影月彼方から距離を取るんだ！」せめて大蛇の包囲の外に！」

「ベルベットさん！」

「うるさい！いっぺんに喋る、な……え。」

窓の外、グラウンドの中心部で大蛇を侍らせた影月彼方がこちらを

見据えて大きく腕を振りかぶって――

「ま、まさか」

『みんな死んじゃう！早く!!』

「みんな逃げろ！司令部から出るんだ！

投石が来るぞ！」

「逃げろ！逃げろ!!」

まるで小石を投げるかの如く桃色の戦車を投げつけてくる影月彼方、数トンはゆうに超える鉄の塊が司令室の窓やコンクリートを突き破ってゆく

「戦車を投げやがった!?!」

「しかも一気に5・6台は投げつけてきてたぞ、コントロールは悪いみたいだがああもバンバン投げられたら……!」

「畜生ふざけやがって！なんて奴だ！」

「悪態は後だ！生きてる人間は走れ！司令部から出るんだ、2発目が来る！」

戦車を投げつけられ、グチャグチャになった機材や人に動揺する間も無く2度目の衝撃が来る

一瞬見えたが影月彼方が投げる瞬間まで戦車は親指サイズだった、ご丁寧に投げた後どこかでそれを見ているコヤンスカヤが大きさを元に戻したんだろう。でなければ同時に手を離れた戦車がそれぞれバラバラの時間差で大きくなったのに説明がつかない、ここからそう遠くない場所からコヤンスカヤがここを見ている！

ガコン

戦車から物音――

「っ……！戦車内部より使い魔出現！タイプA、アトランティス兵です

「！」  
戦車に使い魔を？だとしたらまずい、ここ以外の戦車からも出てきているとすればすぐにでも基地がNFFの兵器で溢れるぞ……！」

「逃げるぞ！あと誰でも良いから土方歳三に通信を繋げ！」

「危ない！」

「うっ!？」

前方からもアトランティス兵が「伏せろ！」

直後紙クズのようにアトランティス兵が吹き飛ぶ

「ペンテシレイア!？」

「無事だったか軍師、今外は影月彼方の投石のせいですこらじゅうタイプAだらけの混戦で危うい、現状を打開できそうな知恵を貸してほしい！」

「簡単に言ってくれるな!？」

「とはいえなんとかしなければ早々に全滅だ、なんとか彼と連絡を――」

「土方さんへの通信、繋がりました！」

「よし！」

「まず影月彼方を基地の外に追い出す！ペンテシレイア、タイプAを可能な限り殲滅してくれ！多分アンタが1番相性良いはずだ！」

「分かった！」

「おいバーサーカー！出番だ！」

『了解だ、目標は?』

「影月彼方をなんとかして基地から追い出せ！」

「…ああ、わかった」

かなり無茶だがやってもらうしかない

「お前は僕と一緒に来い！司令部を『予備4』に移す！移動間も通信は

取り続ける！

他3人は周辺の戦力を集められるだけグラウンドに集めつつ今1番敵が集中している場所にこの発煙等を投げ込め、上にはそれで伝わる！」ヒョイ

「了解！」

間に合うか…!?

「ダメだ！戻れブリリアードーロ！」

危うく草薙に愛馬ごと両断される寸前、なんとか踏みとどまってそれを避ける

『神剣——』

「くそ、また宝具が来る！」

『草那芸之大刀』

『水鏡』

宝具の瞬間、1発目2発目の時と同じ鏡が現れ草薙の一撃をかき消す、いや正確には他所に飛ばしている

「はっ、はっ…はっ」

真っ青な顔で震えながら杖を握るバーヴァン・シー、こうして支えていなければ落馬してしまいそうだ

「もうその魔術は使うな！死んじまう！」

「はっ、使わなかったら、どのみちまとめて死ぬだろうが！」

本来は対象を過去に飛ばす大魔術らしいが彼女はそれを縮小させ、なんとか直撃を避けるように使っているらしい

それでも既に弱っているのを見るに相当な無茶をしているのは俺でも分かる

「しつっこいなあ！」ブン

「っつ!?!」

ズシンと細い見た目に似合わない尻尾の一撃を避ける

コイツは今俺のスキル『ブリリアード』の嘶き』によってここに釘付けになっているがもしそれが無くなったなら何をし出すか分からない、今度は俺に狙いを絞らず戦車を投げ始めるだろう

「いいかげんにどいて」

「退るかよ！」

「そう、それじゃ退かなくてもいいから早く死んで？」

「それで『はい死にます』って答えるとも思ってたのか…うわっ！」

こうなったらイチかバチか大蛇の間を駆け抜けるか？いやモタついている間に戦車投げつけられて終わりだ、ここからどうすれば――

『トライスター・ブリモアモーレ身の程知らずの少女の愛矢！』

真上から弓矢!!

「いてっ、お姉ちゃん？」

『復唱するぞ、現在影月彼方の投石の影響で地上は混戦状態だ

アイツにこれ以上投げさせるな！なんとしても基地の外に追い出すんだ！』

「などと言っていたが本当に上手く行くのか!?!」

音速飛行機から飛び降りて目標、影月彼方の元へ重力に任せて降下しながら叫ぶ

たった今ハルカがアルテミス様の力を借りて撃った矢もたいして効いていないようだが！

「ぐび、さあてね！一応言つとくけど影月ちゃんとの戦闘でお姉さんのことはアテにしないでね！」取り込まれちゃうから！

く、こんな時まで飲酒とは自由な神だ！

「発煙筒……あそこだよアタランテ！あの場所に宝具撃つて！」

「了解した！だが少し時間が欲しい！」

空中で姿勢が取りづらく身体がブレる！

「急いで！」

「全員我と伊吹童子より前へ出るな、投擲が来る

それと何度も言うが——」

「分かっている、ゼツタイにミラちゃんのこととは離さないし落とさないから！」

尻尾に包んだミラ・ツールに『大丈夫だから！』と言い切る伊吹童子に若干不安を覚えたものの気にしていても仕方がない

「え、あれ……この気配……オリオン？」

？彼ならH O P E ボーダーの乗組員になっていたはずだ、ここにいるわけが

ギョーン

「避け——うわっ！」

ハルカが矢を受け流してくれたおかげで助かったが今のは

「熊とは違う、コヤンスカヤが召喚したオリオンか！」

精度と威力はやや落ちてはいるが今のは間違いなく彼の矢だ

「許せない……！彼は私が抑える！アタランテはそのまま宝具お願い！」

戦車は——」

「戦車はお姉さんとアヴェンジャーが防いでみるけど流石に全部は無理かもしれない、打ち漏らした分はなんとかして防いで！……えいっ！」

「怨……！」

影月 遙、アタランテ、伊吹童子、ミラ・ツール、平景清の計5名。降下開始、地上到達まであと50秒

「僕たちで影月彼方を止めるのは無理だ、大蛇を叩け！倒せなくてもいい、上の彼女らを狙い撃ちさせるな！」

「カドックさん！タイプA多数！左後方より迫ってます！」

「結界で足止めしろ！気休めにしかならないがやらないよりマシだ！その位置なら上空のアーチャーが撃ってくれる！味方に寄せ付けるな！」

くそっ、ペペの奴『……お願い！』って理由も言わずに基地の外に……！

もちろん彼のことだ、決して意味のない行動ではない。というかそうせざるを得ない理由があったのだろうが流石に僕1人では荷が重い！

「アイツを追い出さなきゃ終わりだ！弾薬、魔術の出し惜しみはするな！」

『迫撃砲射撃準備完了！』

「大蛇付近に味方が居ないなら報告は必要ない！撃て！」

秘匿もなにもあったものではない、魔術と現行兵器の入り混じった大混戦。正直もうどこから手をつけていいのか分からなくなっている



た

時間が稼げず八方塞がりだ、せめてどこか一つ穴が開けば…!

「命中!——クツソオ!彼方どころか大蛇にも殆ど効いてねえ!」

「魔術も似たようなものだ!」涼しい顔しやがって!

新撰組の戦力をこつちに回すか?だめだタイプAが多すぎる。今動かしたらあつちが決壊する!

「ゼムルプス!アンタに通信だ!」

「渡せ、早く!…もしもし!」

『』

「忙しいから手短に…なんだって?」

「どうした!いつたい内容は

「攻撃止め!攻撃中止だ!全員伏せろーっ!!」

今からここに——

『ゲート・オブ・パピロン  
の財宝』

「うわああああ!?!」

頭上スレスレを大量の宝具がカツ飛んでいき、まるで傷付かなかった大蛇達の身体を削り取る

「場をわきまえろ小娘、我の庭を我が物顔で汚しおつて」

「黄金のアーチャー…無茶しやがる!」

「だがその無茶のおかげで僕たちは助かった。感謝します、英雄王」

神父には1秒じゃなくて10秒前に教えて欲しかった、と後で伝えておこう

「口より手足を動かさせ雑種共、鈍い貴様らのおかげで異物は増え続ける一方だ」

大蛇は我が相手をしてやる、と一歩前に出る英雄王

「…分かりました。大蛇に回していた戦力の全てを対NFFウエポンに回す！伝達急げ！」

「全て、ですか？」

「そうだ！今は彼方にNFFウエポンを近づけるのはまずいんだ！さあ早く！」

どうやら大蛇も彼を脅威と認識したらしく、それまでバラバラに暴れていた6体が英雄王へ向かっていく

大丈夫だ、面と向かえば彼は文字通り無敵だろう。タイプAを含めたNFFウエポン対処への戦力も確保できた

「あと対処すべきはひとつだ、耳を塞げ！」カチッ

予め預かっていた黒色の信号弾を空に撃ち上げる、意味は『救助における支援要請』…それにしてもこの手の道具は未だに慣れないな

「アマゾネスのバーサーカーが応えた、2人を助けに行く！援護してくれ」

「了解！」

「……」

「でえい！」

「っ……」

身体に駆け巡る沸騰しそうな痛みを堪えて杖を振るう

「堪えろ、頼むブリリアード……！」

じたばたと手足と剣と尻尾を振り回して暴れ回る彼方をマンドリカルドが押し留め、攻撃をブリリアードが避け、避けきれなかった

分をバーヴアン・シーが防ぐ。

今にも解き放たれそうな破壊の嵐は2人と1頭の奮闘によってギリギリで抑え込めていたが…それも限界が来ていた

「この——」

また投擲…！

「させない！」

投げられる直前を狙って戦車を狙い撃つ、破壊はできないけど上の仲間を守るにはこれで充分だ

「2人とも、ほんとにしつこい」

真上を狙った投擲攻撃を何度も阻止され、あからさまに不機嫌な表情になっている彼方

「もう無理だ！逃げるっすよ！大蛇の居ない今しか無い！」

「あと少し——」

あと、あと少し時間を稼がないと…

ぐらり

「あ——うぐ」

直角に傾く視界と顔にかかる砂の匂い、見上げるとすぐ目の前に振り下げられた草薙が迫って

『セルマン・デ・デユランダ不帯剣の誓い』!!』

鐘でも突いたような音を立てて草薙の軌道が逸れ、剣がすぐ横の大地を抉り取る

「あ、ありが」

がし、ポイ

「え」

なんで私だけ馬に乗せてるの？なんであなたは降りてるの？

「黒い信号弾に向かって走れ！走れブリリアードーロ！」

「まって…キヤ！」

「逃がさない！」

「こっちの台詞だ…！」

『セルマン・デ・デユランダ  
不帯剣の誓い』!!」

凄いスピードで離れていく中、彼の持っていた木刀が粉々になるの  
が見えた

もど、戻らないと

ズシン

「!!」

そ、そんな…！

「いた！バーヴァン・シーだ…！馬だけ？ライダーは?!」

ペンテシレイアと合流してなんとか彼女は保護できたカドツク達  
だったがマンドリカルドの姿が見えない、いやこれは…

「馬自体が退去しかけている、彼はもう——」

「…っ、彼方がこっちを見た。多分狙われる！」

「私が残って足止めする、行け」そのために来たのだからな

「待て！」

向かっていくペンテシレイアの背中に叫ぶ

「無茶はするな！アンタはサーヴァントの中でも要なのを忘れないで

くれ！」

「元より死ぬ前提など考えていない！さあ行け！」

くサーヴァント ライダー マンドリカルド退去く

## 第91話 Ⅱ

H O P E ボーダー格納庫内 ボーダー甲板にて…

「……………」

魔力を光弾に変換して撃つ…効果が無い  
足元に結界を張って行動を抑制してみる…こちらも効果なし

カチツ

「！」

手榴弾――

ガンマンの早撃ちのように魔術を作動させ、障壁で爆風を防ぐ  
「悠長なのか？」

「そうでもないさ」

一瞬爆風で遮られた煙の中から心臓狙いの手刀が飛び出す

「う…つとー！」

「チツ」

咄嗟にハンドガンを2発撃って下がる、勿論狙っている余裕などない  
のでデタラメ撃ちだ

「相変わらず機転の効く男だ」

予想通り銃弾だけは喰らいたくないみたいだ

「下がってくださいいヴォーダイム！ここは私が…！」

「はあ…そういえばお前も居たな」

甲板へ駆け上がってきたアルトリアが目にも止まらぬ速度でザイルの胴体を輪切りにするも――

「…!? 貴様、何をした!？」

「聞けば答えが返ってくるだけでも? 切嗣に聞いてた通りおめでたい頭をしているな、アルトリア・ペンドラゴン」

狼狽える彼女の方へは見向きもせず弾丸を込め直すザイル、当然のように無傷だ

キリツグ:あの魔術師殺しか? いやそれよりも

今の一撃で確信した、否定したいところだがここまで見せつけられてはそうとしか考えられない

「凄いな、本当に神秘が効かないのか」

「——やれやれ、ということは分かった上で出てきていたのか  
確かにそうでなければ銃なんか持ち出さないな」

いつネタバラシするか考えてたんだが…と少ししよぼくれているようにも見えたがすぐに持ち直し、話し始めた

「神々の時代から、いやそれよりもっと前からあったであろう魔術の元——根源からひっそりと続いてきた目に見えない力、概念。それは今を生き、変えていく現代の人間や動物にはもう必要のない古道具: 少なくとも俺はそう思っている」

あつたら便利なのは間違いないんだが。と付け加え、次の言葉を探すように手元の銃をくるくると回す

「魔術、呪術、あらゆる神秘に干渉しないしされない『魔術特性 現在』  
:今のところ俺だけが持っている魔術特性のようななにかだ」

干渉しない、だつて?

「そんなバカな…」

確かめるように剣を振るうアルトリアだが聖剣が心臓を貫いても平然としている彼に言葉を失っていた

もはやザイルも彼女を敵とすら認識していないようだ

「物で例えてみよう、魔術が霧なら俺は石だ。石を投げつけたところで霧は晴れないが——」

「霧も石を止められない、と」

加えて彼のバツクにはコヤンスカヤ：なるほど、マキリ・ゾオルケ  
ンが倒されるわけだ

「そういうことだ。…いつだったか誰かに同じ話をしたような気がするな」

「私は初めて聞いたよ、それにしてもキミの特性は魔術と呼んでいいのかい？」

「お前もそう思うのか？…やれやれ、面倒だから魔術特性なんて言っているがコヤンスカヤと慎二が言うには『それはもう別の何か』らしい

だからといって他に良い名前も思い浮かばなくてな、こう呼んでいい

絶賛名前募集中だ、コヤンスカヤにコケにされない名前は俺には思いつかない」

欠伸をしながら茶化すように笑うザイルを前にし、額に嫌な汗が流れる

厄介だ、彼は生身だが強い。魔術での身体強化や障壁が無ければあの近接戦闘には対応できない

だが魔術を行使している状態ではどうやっても有効打になり得ない、さてどうしようか

「なるほど、さしずめ『対神秘』ってところかな」

「ん、対神秘か…短くてハッキリして良いかもな。元は専用改造銃に付けていたが今度からそう呼ぶことにする」



ありがとう、と初めての笑顔を一瞬見せるザイル

：気のせいか時計塔の時よりも柔らかかというか人間っぽくなったような――

「さて本題に戻ろう。俺の：『対神秘』はどれだけ優れた魔術師だろうが――いや、優れた魔術師であればあるほど俺の前では無害化していくのは理解したか？」

「理解したわ！つまり魔術は役に立たないわね！」

カンカンツと足元の鉄を蹴る音、そして鎌の横薙ぎのような蹴りがザイルに命中して少し吹き飛んだ

「：やれやれ」

「ペペー！どうしてここに？キミの持ち場は――」

「少しの間カドツクに頼んだの、こっちが離陸したら戻るから2人は艦内に戻って！」

「待ってください！奴の腕：獣程ではありませんが人への特効能力が備わっている、1人で相手するのは「分かった、頼むペペー！」

口を挟もうとするセイバーの手を引っ張って艦内へ

「な：!?!やめなさい！仲間を見捨てるなんてそれでも長ですか!?!」

「私たちにはやるべき事がある」

「いくら世界を救うためとはいえあそこまで躊躇なく見捨てるなんて――「見捨てたつもりは無いよ」

私は彼の勝利を信じている

「ど！そういうワケであなたの相手はワタシよ！」

「言われなくても分かる、妙漣寺：だったな？又聞きだが強さはある程度知ってるつもりだ。だから――お前は徹底的にここで潰させて

もらおう」

「——そう、手加減は必要なさそうね」

）

『ボイボス・カタストロフエ  
』訴状の矢文』！』

『トトライスタ  
』身の程知らずの……うわっ!』

後ろ、正確には真上で今も戦っている2人のことも気になるが――

「来るわよ!」

「分かっている」

今気にしてる余裕は無い!

風を切り、地上から向かってくる桃色の暴風雨をひたすら蹴散らす。草薙で、手で、尻尾で。

なんか急に量増えたわね! ってことは下の2人相当頑張ってたんじゃない?」

「後で、お礼……言っとかないとねっ!」

大蛇パパも呼んで全力で暴れる、戦車の中身に敵が詰まっている以上は弾き飛ばすだけではダメだ。中身ごと粉碎しなければ

「っ!?!」

下の彼女コントロールが悪いせいで投げた戦車のバラつきが酷い、あっちのは防げないかも――

「大蛇を出せ! 我が斬る!」

「お願い!」

パパには悪いけどアヴェンジャーの足場になってもらって右方に来た戦車を破壊してもらおう

とはいえもう影月 彼方はすぐ目の前、ここからは戦車の分散もほ

ぼ無くなる

防ぐだけならいいけど中身も斬らないとダメなのがキツイわね！

加えて被弾もできない、ダメージなんて英霊はもちろん神霊の自分にとつて無いに等しいが身動きのできない空中ではあまりにも邪魔だ。退かしている間に2、3発目が飛んでくるだろう

「わたしこういうの得意じゃないんだけど!？」

「泣き言を言う余裕があるのなら1つでも多く落とせ!」

「分かっているわよもー!」

戦車がほぼ分散しなくなってきた、地上まであと10秒くらい？

——しつこい

眼下に見える彼女がそう言った気がした

あ、コレまずいかも

スラリと引き抜かれたもう一本の草薙、いや霊基配分から考えてあつちが本体なのだが。どちらにせよアレを止める、防げる力は今の私には無い

「ちよつと土方くん! 貴方の予想と違うけど私どうすればいいかしら!?!…土方くん? わっ!」

離れた場所にいる人と話せるツーシンキ? というものを取り出したが慌てるあまり握り潰してしまった!

いくらなんでも脆すぎない?

もう頼れるものも無くなってしまった、今更やーめた☆はできない

し——

「やるしかないわね!」

く

「……………」

草薙を出したけど伊吹童子は構わず突っ込んでくる。お姉ちゃんに付いてたバーサーカーも向かってきてるけどこっちの方が早そうだ

「それならそれでいいや」

振るいかけた草薙をそのままに、手をかざす

影月家は伊吹童子の生贄みたいなもの…というかその通りだったけどそれだけ神は影月家の人間が好きだった。

影月家に神を制御する力は無い、私が神の力を使えるのは私に取り憑いている伊吹童子が影月彼方という人間を気に入っているからだ。力を貸してもいいと思えるほどに

早い話伊吹童子にとって影月彼方はこの上なく居心地の良い神社であり、一度神社に入れば対外的な要因がない限り出ていこうとはしない。つまり――

少しでも彼女に触れればこっちに引き込める

それを知っているのか知らないのか分からないけど取り込むことができれば草薙ももつと自由に扱える。さつきみたいはどこかへ飛ばされる心配もきつと無くなる

向こうも草薙を出したけど7:3で打ち合ったらどっちが勝つかなんて分かりきってるだろうに

瞳の色まではつきり分かるほど近付いた瞬間、互いの剣が振るわれた。元々1つの剣であり決して打ち合うはずのなかった2本の剣。

鏢迫り合いなどすることもなく一種の楽器のような音を立てて片

方の剣が弾き飛んだ

「あっ」

一瞬で飛ばされたのが予想外だったのか神らしくない反応をする彼女の手のひらを握る

「こつちだよ」

これで――

ゴッ

――え？

「え？」

く

「おおおお!!」

彼方の意識が伊吹童子へ完全に向ききったその瞬間を、彼は逃さなかった

2億ドルはする音速飛行機で影月 彼方目掛けて体当たり、不時着と呼ぶにも荒すぎる速度でそのまま地面と水平に突っ込む

神化しているとはいえ彼女の身体は重く見積もっても30kgも無い。意識の外から踏ん張る隙も与えなければ簡単に吹き飛ばせる！

基地の外まであと少し――

「邪魔、ばっかり…！」パシッ

もう草薙が手元に…！飛行機だけで追い出せば良かったんだが  
そうもいかないか！

「俺にできるのはここまでだ、やれセイバー！」

「言われずとも……この剣は法の立証、あらゆる不正を糺す地熱の城壁——」

屋根の上の彼女が攻撃態勢に入ると同時に彼女のマスターを抱え機外へ

「脆け！」

「う、うぐ！草薙——」『ブラックドッグ・ガラテイーン捕食する日輪の角』!!」

巨大化したバーゲストが反撃を許すことなく飛行機ごと彼方を斬り上げて吹き飛ばす

よし、あれなら3エリア分は吹き飛んだぞ

「バーゲスト！頼むバーサーカー、彼女のところに僕を！」  
「分かってる」

奴を追い出せた以上大蛇もじきに消える。NFFUEポンだけなら米軍魔術師連合軍と新撰組だけで充分だ、あとは動けるサーヴァント全員で彼方を叩く！

『おい、おい！バーサーカー、レガリオ！無事か!?!』

「ウェイバーか？ああ無事だ、2億ドルの飛行機はゴミになっちゃまったが」

レガリオを抱えて走りつつ通信機越しに返答を返す

『だがそのおかげでみんな助かった、ありがとう』

それよりも影月 彼方が吹き飛んだのを見た。追撃に行くんだろ  
うが何か必要な支援はあるか?』

「手の空いているサーヴァントを全員増援に回してくれ、NFFUEポンだけならサーヴァントが居なくても止められる」

『分かった!…うん?』

『どうした?』

『いや、影月彼方が使役していた大蛇が…』

消えてない?

ㄱ

「フンようやくか、あれ以上かかるようなら我が奴ら<sup>オレ</sup>ごと消しとばしていたところだ」

「シャアアアッ!」

バックリと口を開けて襲いかかってくる大蛇を英雄王は見ることもなく財宝の雨で轢き潰す

害獣駆除など本来王のすべきことから程遠い、あるとすればこの事件の元凶であるビーストへ自ら引導を渡すことだろう。

6体の大蛇は財宝の雨になす術もなく粉碎、復活、粉碎というサイクルを繰り返しており彼方が離れた影響か倒れて動かなくなる大蛇も出始めていた

そして最後の大蛇が地に伏せた

ㄱ

——よし、サーヴァント達が充分彼方の方へ流れた。ホラ合わせてあげるから早くやりなよ

イチイチ物言いが上からでムカつきますねえ、言われなくてもやりますよ

ㄱ

英霊の殆どはあの小娘の元へ向かったようだがビーストの分霊の1つが未だに姿を見せていないことが気がかりだ。H O P E ボーダーが飛び立つまでは見守ってやるとしよう

討ち滅ぼした大蛇を背に一度司令所に戻ろうと歩き始め  
ずりゆ

「む?」

ダン!ダン!

振り返るより早く側頭部に弾丸が叩き込まれた

「?!?な、なんだ???!これは:!!」

立ってられない!身体が、いや霊基が軋む:!!これは、いつたい

「ふうっ、だから言ったでしょう?アナタは王としての矜持も英雄としての誇りも全て捨てて最初から全力で向かってくるべきだったと」  
にしたって2度とごめん被りますよ、こんな作戦は!

大蛇の血と胃液を振り払いながら悪態をつくコヤンスカヤが銃を両手に立っていた



## 第92話 堕ちる王

以下、米軍魔術師合同勢力内における警戒すべき5つの特記戦力  
確認できる敵勢力の中でも特に警戒すべきである上位5人をリス  
ト化。確認されたし。

### ① サーヴァントバーサーカー 土方歳三

特記戦力筆頭。狂化としての能力値上昇はそのままに理性を保ち、  
単純な戦闘だけでなく単騎戦、集団戦双方における状況判断能力も高  
い。

また征服王イスカンダルと類似した宝具を持っており召喚される  
新撰組隊士は数や質共に高く、本人のスキルによってそこから強化が  
可能。

さらにバーサーカー最大の弱点である膨大な魔力消費もノーア・ク  
ランツェルの持っていた聖杯を取り込むことによつて帳消しにして  
いる

同様の理由でマスターからの魔力供給も必要ないのでマスターと  
いう弱点すら無く、トドメに戦闘続行と仕切り直しが複合したような  
厄介極まりないスキルを持っているため排除するにはコヤンスカヤ  
の持つ愛玩の檻のような特別な手段を用いて封殺しなければ現状不  
可能である

※マスターを持たないサーヴァント達は彼の内包する聖杯の魔力  
によつて現界しているためサーヴァント総大将とも言える。

また彼のマスターであるクライム・アルバートが米軍大将であり、  
彼の生存が米軍の士気に直結していることなどを鑑みて早急に排除  
したいが：

### ② 魔術師 キリシユタリア・ヴォーダイム

実質的に魔術師達の総大将、基本的に自分（と自分の家系）のこと  
しか考えていない魔術師達が米軍と手を組み共同戦線を張れている  
のはひとえに彼の存在無くしてはあり得なかったことだろう

彼を倒せば魔術師達が瓦解する可能性は大きく、排除優先順位は高いが彼の付近には神霊カイニス並びにアルターエゴ芦屋道満が控えており、両者が揃って彼の元を離れるのは考えづらいためサーヴァント戦、魔術戦を仕掛けても撃破は容易ではない

だが魔術師であることには変わらないので排除の際は魔術を無効化できるザイルが適任と思われる

(仮に逃げられたとしても彼の周りには優秀な魔術師が多く居ると予想され、ザイルなら一方的にリスク無くそれらを排除できる)

### ③ サーヴァントセイバー 渡辺綱

頼光四天王の一人、鬼殺しの剣士。

鬼を含めた魔性に対して強力な特効を持つのは元より、厄介なのはその隙の無さである

騎士王や英雄王のようにデタラメな強さこそ無いものの、自分に来ること出来ないことを熟知しており博打をしない。

戦闘に対してあらゆる私情を介入させず攻め時は攻め、守りに入るのなら徹底的に守り、逃げを決めれば即刻背を見せる

こちらの陣営には彼が得意とする魔性属性の入った戦力が多く、無効化しようにも逃げを決められると生身であるザイルでは追いつけないため排除するにはこちらも地に足をつけ、小細工無しのサーヴァント戦の中で唯一の弱点であるマスターを殺す必要がある

※追記。仮に影月 彼方をここで排除するのなら彼の宝具は必須であるため、場合によっては排除しない選択肢も出てくる可能性あり

### ④ 自律型A I レオナルド・ダヴィンチ

キヤスター、レオナルド・ダヴィンチが退去前に作成していたと思われるA I

単騎での戦闘力は皆無だが彼の頭脳がそのままコピーされている様子。そして実体が無いので直接攻撃での排除は不可能

ただし所詮機械なのでメインコンピュータの所在を突き止めれば

撃破可能。

撃破できれば分かりやすく弱体化が見込めるため各員所在が分かり次第、すぐに間桐慎二を呼び求め、彼の指示に従うように。

⑤ サークヴァント？ バーヴァン・シー

ブリテン異聞帯にて妖精騎士トリスタンの名前を着名されていたアーチャー

：なのだが何故か実体を持っていて、異聞帯の時には確認されなかった杖を所持している。

杖の造形は異聞帯の王であるモルガン女王が持っていた物と酷似しているが関連は不明。（モルガンが居ない以上流石に本物ではなさそうだが）

霊基反応を見てもアーチャーというよりキャスターに近く、そもそも受肉サーヴァントである土方歳三と違いサーヴァントの反応自体無いため現状正体不明。

生け捕りにすれば何か分かるかもしれないが冬木の一件以降、彼女の護衛が異常に固くなり生け捕りは困難が予想される

（守りの硬さから彼女には『何か』があるのは察知できるが…）

：以上。対応すべき5つの特記戦力について

レポート作成：コヤンスカヤ

：間桐慎二

）

米陸軍駐屯地 グラウンドにて…

「うええ、ワタクシの一張羅が…」

カルデアデータベースに残っていたプリテンダークラスの特性を悪用…もとい利用して彼の千里眼にダミー映像を流したまでは良かったものの、まさか隠れ場所が大蛇の体内になるなんて思いもしなかった

大蛇の操作権を譲っていただいたおかげで大蛇ごと串刺しにされることなく英雄王を撃破できましたがそれにしたってこれはひどい  
「とりあえず1分でシャワー浴びて30秒で着替えて1秒で戻って  
「——のれ」  
「あら？」  
「おのれおのれおのれエエ！女狐エ!!!」

おお、流石は聖杯の泥を飲み干した英雄王と言ったところでしょうか。並の英霊なら1発受けただけでも充分オーバーキルのケガレ弾を2発もまともに食らって尚乖離剣を出そうとしている  
ですが

3丁めのマグナムを怒号を放つ彼の口内へねじ込み、最後のケガレ弾を脳幹へ撃ち込む

「何度も同じことを言わせないで下さいます？遅いんですよ、何もかも」

新撰組が展開している以上撃たせても良かったがそれはそれ。同士討ちさせるのはまだ早い

「今度こそお片付けおしまい！」

勢い余って預かってた3発全部使っちゃいましたがこれで英雄王は完全排除完了と。あとやるべきなのは彼方さんの援護ですが——  
「報告だけしてまずシャワーですねぇ」

く

HOPEボーダー 甲板にて…

『と、言うわけで英雄王の排除は完了。アタランテさんも慎二さんが撃ち落としたよう目で目ぼしいアーチャーは1騎を除いて削り終わりました

一旦シャワー浴びてきますね」

「分かった、こっちはまだもう少しかかりそうだ。

…やれやれ」

彼のインカムから聞こえてきた衝撃的な言葉に動揺しかけた心を落ち着かせる

「戦闘中にシャワーを浴びに行くサーヴァントなんて聞いたことあるか？少なくとも俺は初めて聞いた」

「」

中指を軸にくるくるとマグナムを回しつつ、ザイルは彼へと問いかける

魔術特性『現在』：神秘の類一切が効かないという魔術師泣かせの特性だとばかり思っていたが――

神秘が込められた兵器爆弾を持って特攻してくるのは予想外だったわ

ね…

「死んだフリか気絶しているのかは分からないが…なにも地雷クレイモアが4発直撃したぐらいでアンタが死ぬとは思っていない」

自爆とは名ばかり、リスクゼロの自爆特攻。それに加えて特性によって無害化した地雷原（もちろんこっちが喰らえば致命傷は必須）

あれらを魔術以外で防ぐ手段は当然こちらに無く、人への特効が備わっているためか魔術を使っても可能なのは『遮断』ではなく『軽減』であるし当然魔術行使の隙を彼が逃すわけもない

狙いは私ではなくキリシユタリアとこの艦、なんとかやり過ごして不意打ちを決めるしかないかも…

「手負いの時が一番危険なのは俺なりに分かっているつもりだ、だから――」

…!?

そう言った声の方向から掛けられたのは妙な匂いのする液体、いやこれは、この匂いは知っている

「ブリテン異聞帯のアンタを俺は見た、加えてこちらの世界でもキリシュタリアの太鼓判を押されているというのなら妥協も油断も一切無く行かせてもらう」

確かこの匂いは――

「死んだフリだろうが気絶だろうが関係無い、死ぬまで燃えろ」チャキツ

「ガソリン……！」

満身創痍の身体を跳ね起こし、ギリギリで弾丸を避ける――が「ぐっ……!?!」

甲板上に飛散したガソリンから糸を伝うように炎に追われ、身体に引火

流石にこれはまずい!

「くっ!!!」

ガソリンを介して燃え上がる身体で何かできないか思案するが――

「やはりか、まあいいサヨナラだ」

こちらが動くよりも早く艦内へとザイルが消えてしまった

キリシュタリア……!

「……やれやれ、やる気か?」

「ンン? いえいえ滅相も! 拙僧はただ甲板の掃除をしに行くのみにて!」

「そうか、なら早く行った方がいいぞ」

入ってすぐすれ違った芦屋道満に軽く甲板の状況を教えてやり（多分分かっていたが）そのまま艦内を進む

当初の作戦通りなら俺がここでやるべき仕事は既に終わっているがアルトリアが乗っているとすれば話は別だ

ギルガメッシュとアルトリアが最優先で排除すべき敵であることに変わりはない。財宝の雨と聖剣だけはまともにより合ってはだめだ

…その上で特記戦力から外れたのは彼らと違い分かりやすい弱点があるからだろうな

裏を返せば特記戦力というのは如何に『攻略しづらいか』とも言える…ん、乗組員が居たな

とりあえず発見した乗組員と思しき3人組へ声をかける

「おい」

「ザイル!？」

魔術師2人に…米軍も乗っていたのか。コイツらのことをほぼ知らないが向こうは顔を見ただけで俺が誰か分かったらしい、10年前じゃありえないことだな

「お前から下っ端と戦うつつもりはない、アルトリア——甲冑を着た金髪の女を見なかったか？」

返答は別に返ってこなくてもいい、大切なのはアルトリアについて質問するという行動だ。こちらの目的と行動を知れば向こうから現れる

「クソ…いくたばれテロリスト——ガッ…!？」

弾が勿体無いのでさつき拾ったクレイモアの破片を投擲、米軍の男

の方の首を掻き切る

魔力の波動や波長は…無し、まだ気付いていないようだ。もう少し殺すか

「く、クライムさ——」

ごしやり

男の身体が崩れ落ちるよりも早く接近、人特効の乗った義手で頭部を殴り碎いて横の女の腹部を突き抉る

コヤンスカヤ本人程ではないが生身の人間を殺すには充分すぎる特効だ

「…!?…え、え…? 魔術、魔術が…効かな「ふっ」

腹を抉られ困惑する魔術師の女の首を蹴り碎き、3人目…腰の抜けた魔術師の女ヘデザートイーグルを向ける

ちなみにだが撃つつもりは無い、殴り殺せばそれで済む

「一応質問するがアルトリアを見たか?」

「ひ…船に乗ってから、見てない…知らない、ごめんなさい…本当に知らないの…!と、投降します…!だから殺さないで…お願い——げほっ!?!」

両手を上げて隙しか無くなった腹部を蹴り上げる

ん…? 義手で殴らないと特効は乗らないのか、俺の特性と両立出来るとはいえこれは少し不便だな

「や、やめて…」

「何を勘違いしているか知らないがこれは魔術師同士の小競り合いじゃない、戦争だ。コヤンスカヤの保護を蹴って戦場に立ったのはお前だろうか?」

その中においてお前ら下っ端の降伏や投降に意味は無い。互いの大将どちらかが白旗を上げない限り戦おうが降伏しようが逃げよう



が勝てなきや大将以外は死ぬだけだ。それを覚えてから死ぬ」

パシユツ

殴り碎こうとしたその手を防御へ移し、飛んで来た弓矢を叩き落とす

…矢？

「うおおおお!!」

「やれやれ」

無謀としか言えない体当たりを仕掛けてきたソイツにカウンターを入れようとして――

「…!」

顎に入りかけたアツパーを抑え込んで飛び退く

…衛宮士郎？

「大丈夫ですか!」

「げほっ、うう…」

「セイバー、彼女を連れて逃げてくれ!ここは俺が戦う!」

「シロウ!しかし彼は…!」

と、遅れて士郎の後ろから出てきたのはアルトリア

驚いた、まさか士郎が乗っていたとは。いや、まさかアルトリアのマスターは――

「…!令呪を持って命ずる、セイバー!彼女を連れて安全なところへ!」

「なっ!?シロウ!…く、分かりました!すぐに戻ります!」

やれやれ、確定だ。アルトリアのマスターは衛宮士郎だ、慎二が知ったらなんて言うかな

「久しぶりだな、士郎」

「アンペルドさん……!」

まさかそれで戦うつもりか?…と聞いて欲しいのか、彼の手には鉄パイプが握られている

皮肉にもその鉄パイプやさっきのただの弓矢が魔術より100倍有効打になってはいるのだが客観的に見ればとてもそうは見えないだろう

周囲には…通路で狭いとはいえ見える限り誰もいないな

想定外ではあるがこの対面は幸運だった、今彼を保護できれば憂いが1つ減る——その前に令呪を剥がす必要があるが。

「構えているところ悪いが士郎を殺すつもりは無い、というかできない」

「自分が…自分が何をしてるか、分かってんのか!台所に立ってた時のアンタの笑顔、あれはなんだったんだよ!」

演技だったのか?と今までに見たことがないような怒りを露わにする士郎に少しだけ驚いたが同時に以前慎二が言っていたことが少し分かった気がする

裏切られた怒り、というよりもこれは…悪に対する怒り?

直感だが多分的外れな推理では無いと思う、慎二が心配していた意味はこれだろうか

「いや演技じゃない、あの3ヶ月は本当に楽しかったしなんならまた料理を教わりたいたいと思っている」

「だったら——うっ!」

特性を維持しつつ予備動作を消してゼロ距離へ。少し反応された

のに驚いたもののそのまま両手で包むように左手を掴む

「戦争を仕掛けたのも同じだ、料理をしたり映画を見たりするのと同じだ」

「そんな理由で人を…!？」

「そんな理由とは酷い言われようだ、楽しむことは生き甲斐…人生に直結する大切なことだと思うが。…さて」

振り払われるままに手を離し、その左手を注視する

「令呪が…!？」

よし成功だ、NFFボーダーのシミュレーションだけだったから少し不安だったが2画残っていた衛宮士郎の令呪は全て霧散した。これでアルトリアは勝手に消えるだろう

「これで憂いも無くなった、行くぞ士郎」

手招きしつつ元来た通路を引き返す

ここでの俺の仕事はこれで本当に終わりだ

「俺は、こんなことに手を貸すつもりは無いぞ！」

「?ああ、別に何もしなくていい。前に言ったかもしれないが士郎を連れていくのは間桐慎二との約束だからだ。遠坂凜、間桐桜、衛宮士郎、3人を保護することが慎二の力を借りる条件だった

お前たちがどういう関係か知らないが慎二のアレは並の覚悟じゃないぞ」

プライドが高く、能力が高く、魔術の才が無く、想定外の事態に弱く、臆病…と思っていたが

「慎二はお前たち3人を守るために自分の右腕を切り落とした、子供ができることじゃない」

「…!?お前、アイツに何をした!!!」

「やったのは俺じゃない、アイツ自身だ」

10年前の残骸…フーレンとの戦闘と時計塔での芦屋道満との戦闘によってそれぞれ破壊されたダヴィンチの義手、コヤンスカヤがそれらをかき集めて復元した『ダヴィンチちゃんアーム3号機 NFFカスタム』…は元の性能に遠く及ばなかったものの本来の目的である外付け魔術回路としての役割だけは保っていたため慎二に使用を勧めた

だが肉体そのものに直接接続する必要があるため義手をつけるにあたって彼は…

「こういうのを親友、と呼ぶのかどうかは俺には分からない。だがそうそう居るものじゃないのは分かる。慎二を裏切らないためにもこつちに——」

たたたたっ

——やれやれ

「死ねエツ！ザイル!!!」

首筋狙いのナイフをデザートイーグル本体で弾き、闘牛を避けるように勢いをいなしして距離を取る

「いい加減空気を読むことを覚えてくれないか？クライム」

「ゼツ…ゼエツ！また、また俺の部下を殺したな…！」

「ああ、それが？普段ならともかく戦争中に人殺しを咎めるなバカが。」

相変わらず怒り心頭だ、その首がヘシ砕けた魔術師の女も気にしてやれよ…

「これじゃ保護は無理だな…仕方ない逃げるか。またな士郎」

「逃がすかアア!!!」

とりあえず元来た通路を逆走して出口へ、怒り狂っているとはいえ

流石に弁えているのか艦の中でロケランを撃つほど馬鹿でもないらしく律儀にアサルトライフルを持っている

通路は一本道、隠れる場所も凌げる部屋も無し、なら——

アルミニウム粉末の詰まった袋をクライムへ投げつける

「小細工を——く!？」

構わず撃とうとしていたクライムだったがそのまま撃てば当然粉塵爆発が起こり後ろにいる一般<sup>士</sup>人に危害が及ぶと分かったのだろう、即座に射撃を中止してコンバットナイフを片手に追いかけてくる

構うか、出口はすぐそこだ

「おや、もうお帰りで？」

「ああ」

途中、全身重度の火傷を負った妙蓮寺に式神を貼り付けて治療？をしている芦屋道満とすれ違ったがお互い特に何をするわけでも無くそのまま外へ

甲板に戻って来たな、クライムに追いつかれても面倒だしさっさと行くか

目撃者が誰もいないことを確認し、甲板から飛び降りて格納庫の外——ではなくノーアの秘密基地奥へと向かった…

米陸軍駐屯地 医療棟前にて：

『ザイルだ、HOPPEボーダー内に衛宮士郎と騎士王を確認した。保護はできなかつたが騎士王のマスターの令呪を破壊、退去は確認できていないがじきに騎士王の無力化もできるだろう』

「分かったよ、じゃあザイルは計画通りそっちに向かつて。じゃあね」

2メートルはある筋肉質な弓兵を従えて医務室と書かれた建物に

入る

「コヤンスカヤが戻って彼方の援護を始めるまで少しある、今のうちに…」

特に情報があつたわけではないが彼、慎二には確信があつた

「桜、ここにいるんだろ？出てきなよ、兄さんが守ってやるからさ」

妹がここにいるかどうかは分からない、だがもし『彼』がまだ生きているのなら――

ザイルは殺したと言っていたけど本当に殺したのか、どうか

「~~~~~!」

「~~~~~!」

そつちか？

右腕の義手で、声のする方の扉を開いた…

く

医務室にて

「グ…」

「ど、どうしたんですか神父様！いきなり倒れて…」

「…恐らく英雄王が倒された」

「え…?」

「医者が患者になってどうするんだ、彼は放っておけ。こっちの兵士の処置をする！サクラ、止血剤を！」

「え、ですが…」

「ソイツはずっと前から死者だ、今の僕には治せない。質問を返すな、医師の行動言動に疑問を持つな、急げ！」

間桐桜を含めた医療スタッフ達に檄を飛ばす医神アスクレピオス、既に脅威は去ったとはいえ影月 彼方の投擲の影響が大きく、ここに運び込まれる人間も爆発的に増えていた

そしてそれに追い打ちを掛けるように現れる敵が1人と1騎――

「ああ、ここにいたのか桜」

「兄さん…？その、右腕は…」

「ち、オリオンのマスターか…!?!」

キャスターアスクレピオスと桜…ベッドにはバーヴァンシーもいる、連れ去るなら今かな？

が、今は桜だ。コヤンスカヤが戻ってくれば本格的に戦争が始まる、それより早く桜を戦線から保護しないと

「心配しなくても桜を連れてすぐ消えるよ、ほら行こう？」

「…はい」

やはりというか桜は大人しくこっちの指示に従ってくれるみたいだ、これでさつきまでの疑念が確信に変わる

「く、この…」

「お前は動かず寝ている、魔力の使いすぎで身体が崩れかけている。患者が医者に逆らうな」

バーヴァンシーは動けないようだが例えそうでも今連れ去る理由にはならない、何故なら――

「じゃアーチャー、援護頼むよ」

「……………」

適当にアスクレピオスを足止めさせつつ桜を連れて外へ

…ここでもいいか

「兄さん…どこに行くの？」

「NFFボーダーさ、そこなら安全だ。それよりも——やっぱり生きてたんだ、おじいさま？」

そう言った瞬間、何かの冗談のように桜の顔色が変わった

「……………」ふん、どれだけ腐り果てても間桐の人間、ということか？」

ここに自分と桜以外の人間は居ない、にも関わらず聞こえる老人の  
声

「そういうアンタは僕の妹にしがみついて随分見窄らしいな、本当に間桐の当主なの？」

「口の減らない小僧が。間桐家の魔術師の血を途絶えさせたばかりか、そんなものに頼った上で魔術使いに成り下がり、それを恥とも思っておらぬ。貴様は間桐家が生んでしまった魔術世界の恥だ。」

「魔術師本来の目的も忘れてただただ生永らえるだけの怪物よりマシだと思っけど？」

桜の意識は無いのか表情や身体に動きはなく、老人の声だけが聞こえてくる…が、声の感じからかなり頭にきているようだ

「『ビーストに付いて強くなつたとしても勘違いしたか？笑わせる』」

「そんなつもりは無いよ、ただ不死に固執して穴蔵を決め込む老害に僕が負ける要素が無いってだけさ」

直後、虫の大群がそれぞれ別の方向から向かってくる

「っと『レオレオ』」

脚部に軽い強化をかけて飛び上がり、真下に集まった虫に向けて義手搭載の火炎放射器を放つ

なんだかんだ言ってザイルとの体力作りが生きてるな

「『貴様を間桐と認めてたまるか、魔術界一の恥晒しはワシ自ら葬ってくれる…！』」



どうやら戦闘はできるようだが間桐家の魔術の要ともいえる水が周囲に無い、それに今の攻撃もそこまで強くなかった

「丁度いいや。…ケリをつけようじゃないか」

ワザと弱くした可能性も無いわけじゃないがこの状況でそれは考えづらい、今の僕なら――

『慎二、人には得手不得手がある。魔術の才が無いのなら魔術以外で見返してやればいい』

『魔術より優れた物は無い?…なら良かったじゃないか、魔術相手に魔術無しで勝てばもう相手はぐうの音も出ないだろう?』

「戻ったらザイルにお礼と文句を言ってやるか、とりあえず僕の妹は返してもらおうよ」

この日、慎二は人生で初めて臓硯と対峙した。

くサーヴアント アーチャー アタラシテ退去く

くサーヴアント アーチャー ギルガメツシュ退去く

く魔術師 言峰綺礼 死亡く

## 第93話 広い世界

G地区 オフィスビル跡地にて…

「いたあい…」

10秒前までビルがあった場所で大量の瓦礫や煙をかき分けながら落とした草薙を探す

あ。別に探さなくてもいいか

「おいでー」

はぐれた子供を探すように呼びかけた直後、コンクリートだか机だか分からない残骸を突き破って剣が戻ってきた

「よしよしえらい、それでええと…なんでこうなったんだっけ？」

手元の剣をよしよししながら少し前の出来事を振り返ってみる

「そうだ、ガラティーン！ガラティーンのせいだ！」あと飛行機！

もう少しで別れた伊吹童子を1つに戻せたのに飛行機に乗っていた剣士のせいで吹き飛ばされたんだ！

飛行機ガラティーンアタック（彼方命名）という全くの予想外の攻撃に少々苛立ちながら使い魔の蛇達を使って周囲を調べる

「それじゃあみんな、報告お願いね」

ふんふん…基地からここまでの距離が…うわあ、すごく吹き飛ばされてるなあ

鱗の防護壁に防がれブラックドッグ・ガラティーンによるダメージは殆ど無く僅かにあったダメージも即座に再生…するが衝撃はどうしようもない、文字通り足の踏み場が無い空中なら尚更だろう

「戻るにはちょっと遠いなあ、でも…うーん」

「お困りのようですね彼方さん」

「あつ、コヤンスカヤ」

困ってるというか悩んでるというか

「こちらの仕事は終わりましたので彼方さんのお手伝いに！

あ、お借りしていた大蛇お返ししますね」

よく分からないまま貸してた操作権を返してもらい、能力が戻ったのを認識する

「基地はワタクシのNFFスペシャルだけで充分、それよりも彼方さんを狙って結構な戦力がこのあたりに集まってきました」

その中に綱さん、例の鬼殺しのセイバーもいるでしょう、とサラツと言っちゃうコヤンスカヤ

「ええ？私あれ嫌い…」

「まあまあ、ここからはワタクシも一緒に戦いますので気を落とさず！」

…まずはこの辺りを薙ぎ払いましょうか？」

「……………」

クライムの部下が用意したアサルトライフル、それに取り付けられたサーマルスコープ越しに『それ』を見ながら彼は考える

シルエットは1つだが誰かと話しているみたいだな

「土方教官？」

「今は訓練じゃねえ、土方でいい」

彼方は囧だ、いや囧だった。ここで英雄王がやられるとはな

「あの辺りにいますけど…動いてきませんね」

「彼方だけじゃねえ、サーマルに映ってねえだろうがコヤンスカヤも

居る。作戦会議中だろう」

「び、ビーストが…!？」

彼方の暴れぶりを見るに奴自身誰かの指示で動いているというより自分の好きなように暴れているな。オリオンのマスターとコヤンスカヤはそれを囿に動いていた、目的は英雄王の排除か？

少し大袈裟すぎる気もするがかの英雄王相手なら妥当、なのだろうか

「ヒューイ、彼方を追ってこの辺りに来ている米軍や魔術師はどれくらいいる？」

「魔術師は分かりませんが米軍は既に4隊到着、あと2隊来るようです」

「全員今すぐ引き返せと伝えろ、ここは恐らく激戦区になる

生身の人間なんか邪魔にしかならない戦闘区域にな」カドックにも伝えろ

厄介だな…奴らは彼方の制御を諦めてる、ということはどう戦況が転ぼうと彼方が戦いの中心になるのは間違いない。ギルガメッシュ排除という役目を終えたであろうコヤンスカヤが今彼方の元を訪れているのが証拠だ

降下中に狙撃してきた奴は…この辺りにはいないのか？

あれが敵側のオリオンだとすれば間も無くこの戦場にも現れるはずだ、だが付近に他のサーヴァントの気配無し

H O P Eボーダーの方へ向かった…というわけでもなさそうだ、仮にボーダーを狙っていたなら既にザイルが撤退したボーダーに向かわせるのは考えづらい。飛び立つ瞬間を狙い撃ちしようとしているのかもしれないがカイニスや騎士王がいる上で落とすのはいくらオリオンでも不可能だ

オリオンとそのマスターは間違いなくここに来る、だが今じゃ無い  
…他に基地の中に狙いがある？

「指示を変える、米軍と魔術師は即時後退。NFFウエポンとの戦闘  
に備えつつ別動隊を編成し、敵サーヴァント及びマスターを搜索し  
ろ。恐らくオリオンのマスターは基地の中にいる」

「了解！」

オリオン相手は厳しいがもし敵マスターの間桐慎二を補足すれば  
米軍でも排除できる、彼の魔術師としての才能はほぼ皆無だからだ、  
とはいえ――

「子供だが甘く見るな、逸るな、ザイルが勧誘した以上見た目通りの強  
さなんてことは無いからな」

それが油断していい理由にはならない、去っていく彼の背中にそう  
呼びかけつつ見送った

「さて…」

中々戻らないバーゲストとレガリオのことも気になるがここから  
離れるわけにも行かない

「どう出る？」

直後、その呟きに反応するように現れる濃密な神秘の気配、数は7  
つ。視界は悪いがそんなことでは隠しきれない大きさの大蛇が出現  
した、それに加えて――

「はい、ちゅっちゅっ♡」

- ▽ 殺戮技巧 (人)
- ▽ 殺戮技巧 (人)
- ▽ 殺戮技巧 (人)
- ▽ 殺戮技巧 (人)
- ▽ 殺戮技巧 (人)
- ▽ 殺戮技巧 (人)

- ▽ 殺戮技巧（人）
- ▽ 殺戮技巧（人）
- ▽ 殺戮技巧（人）

彼方と、そして見間違いでなければ遠目に見える大蛇の目つきが変わった

「それじゃ場所を変えまして…」

『水天日光天照八野鎮石』

隠れるように彼方の後ろへ下がったコヤンスカヤが宝具を展開。10年前の戦車とは違う、名前からして玉藻御前の物か？

「ダメ押しです、ちよーつとだけ力をお借りしますね？立香さん♪」

…！コヤンスカヤの姿が…

子供、彼方ではないが間違いなく10代の少女がオレンジ色の髪をなびかせコヤンスカヤがいた場所に立っており、その右手には令呪が――

「シャドウなのはこの際仕方ありませんがとりあえず3騎！これで戦ってみますか」

「加えてサーヴァント召喚だど？…やってくれるな」

「バーサーカー」

と、こっちの様子を見て駆けつけたのか降下組、平景清と影月 遥が来た

「遅かったな。丁度いい手を貸せ、これは流石に手に余る」

「分かっている、だがアタランテがやられ伊吹童子も戦えるような状態ではなかった。降下組からこれ以上の戦力は期待するな」

「…分かった」

「米軍や魔術師が退いていったけど…こういうこと？」

「ああ、余計な損害を出すだけだ。ここは俺たちだけで戦った方がいい

い  
…影月 遥、やれるか?」

「大丈夫、余力は「違う」

「?」

余力があろうとなかろうと戦うつもりがあるならそれでいい、俺が聞きたいのは――

「妹を殺せるのか?…見栄を張らずに答えろ、俺はそれを非難しないし誰にも非難させねえ」

「……………うん、できる」

「そうか、ならいい」

彼女の覚悟を問い直し終え、改めて正面の厄災と相對する

この戦力で戦うべきじゃねえが…野放しはあり得ねえ、やるしかないな

く

医療棟前にて…

パシユツ

「ははっ、これまで散々無視してきた割には随分しつこいじゃないか」  
ワイヤーガンを発射、アンカーが固定されたのを確認してトリガーを引き絞る

従来であればワイヤーこんなものガンはゲームの中の空想に過ぎないが試作機のフックショットにほんの少し魔術を加えたことで実用に耐える物になっていた。現行兵器と魔術、それぞれの視点と理解が無ければ決して作れなかったものである

生身なら間違はなく脱臼するような力で巻き取られるワイヤーの引力を右腕の義手で強引に耐え、勢いに任せて医療棟裏手の庭へ飛ぶ。移動が終わると同時にピストルタイプのグレネードランチャーを再装填。追いかけてきた蟲群へ焼夷弾を浴びせる

本来かさばるはずのグレネードランチャーをコンパクト化できているのはいいけど1発撃つごとに装填が必要なのは不便だ、これが僕に1番合った大きさと重量なのは分かっているんだけど

後付けのサーマルスコープ越しに見える熱反応：焼夷弾を込めているピストルランチャーに取り付けるなんて本来ナンセンスだが今はこれが必要だ

本体は桜の身体の中か、欠片だが聖杯と思しき影も見える

コストの高い魔術を使ってようやく分かるようなことでも現行兵器1つで事足りる、か。世界は狭かったな

『逃がさんぞ…!』

残っている焼夷弾は今再装填した分を合わせて4発、榴弾も合わせれば数はあるが蟲相手では燃やさなければ効果は薄いだろう

「まだ何か勘違いしてるみたいだね、もう逃げてあげないよ?」

無表情の桜越しでも分かるおじいさまの怒りと蟲群をあしらいつつ手元の武装を再確認。

焼夷弾4発、榴弾6発、発煙手榴弾4個、

拳銃GSh-18と9mmルガー弾が装填分合わせて

54発、ワイヤーガンとこの右腕<sup>義手</sup>、そして例のオモチャ。スナイパーライフルは…アルビオンの背中に置きっぱなしだ

「ま、要らないだろ」

5階建て医療棟の裏手は庭になっており、基地と街を仕切る壁や多くは無いが所々に植えられた木々がある。変幻自在、とまでは行かな



いがアンカーを打ち込める場所がこれだけあれば機動力はハネ上がる。死に掛けの老体を翻弄するには充分だ

医務室の中は…未だにアスクレピオスとバーヴァン・シー、そしていつの間にか居る伊吹童子が援護する形で僕のアーチャーと戦っている

数で言えば不利だろうが全力で戦えているのは戦闘の苦手なアスクレピオスだけだ、押し負けることはないだろう

ダンッ

「バーヴァン・シー!!」

「他に邪魔が入らなければ、ね」パチン

真上から落ちてきたセイバー、妖精騎士ガウエインの横腹に向けて攻撃指示、僕の足であり武器であり良い狙撃ポイントであるアルビオンのタツクルを喰らわせる

「っ?!メリユジ——がはっ?!」

遅れて激突音がすぐ近くから聞こえた、あれは表側に落ちたな

流星に生身でサーヴァントと戦り合えるほど人間を辞めてはいない、あいつはアルビオンで止めておこう

ブブツ

また蟲群が迫ってきた、状況把握はここまで。500年物の老体にトドメを刺そう

「…レオレオ」

腰に括った発煙手榴弾のピンを抜きつつ、空いた手で焼夷弾を蟲群——ではなく少し手前の地面に向けて撃ち込む。地面に近かった蟲は残らず焼き尽くされ、遠かった蟲も炎に煽られて少しでも安全な空

へ退避。

再装填の暇は無い、このまま押し切ってやる！

アンカー射出、蟲の居なくなった超低空を文字通りかつ飛ぶ

『ネズミが…！』

近付きすぎず、離れすぎず、僅かな木々とコンクリートの壁を利用して飛び回る

「そろ」

眼前に迫った蟲群へ焼夷弾を投げつけ、間髪入れずそれをG S h 18で撃ち抜いて爆発させる。

それはさながら西部劇に出てくるガンマンのような早撃ちだったがあちらとは違う。ワイヤーによる激しい空中移動の最中、蟲という群体を相手に障害となる相手を的確に判断、持ちやすいとは言えない焼夷弾を投げつけた上での射撃である

彼、間桐慎二は魔術回路を持たないというだけでそれ以外の才能に關しては非の打ち所がないのだ。ただそれまで触れていなかっただけで。

魔術にしか己の世界を見つけることが出来なかった少年は魔術に見切りを付けて外へと飛び出した

映すならもう少し：

2個目と3個目の発煙手榴弾のピンを抜き、3個目を桜魔視の足元へ向けて投げる

やはりというか防御をしない、魔術的防御はしているだろうか明らかに現行兵器に対して油断している

誰かに認められたかったから？己の能力に自信を持ったから？なるほど、確かにそれもあるだろう。だが根底にある動機はそれじやな

い、そんなもの：腕を切り落とす理由になり得ない

3つの発煙手榴弾で狭い庭は煙に塗れ、視界は最悪だったが撒く前に地形を見て覚えていた彼には何も問題はない。速度を微塵も落とす事なく4つ目の発煙手榴弾のピンを抜き、動きが鈍った蟲群を更に翻弄する

焼夷弾の投下位置は完璧、視界も充分悪い

「頃合いだ」

コヤンスカヤが用意した機能とは別に、彼自身が用意していた小道具の1つを義手の格納スペースから弾き出した

「行くよ」

彼の根底にある『戦う理由』は――

『――』

何故だ

奴は落ちこぼれ、何故間桐に生まれついたのかどうあっても理解できないようなクズだ。そのクズを相手にこのワシが…？

自分が万全ではないことなどあんなのを相手にしててはなんの言い訳にもならない、間桐の当主がこんなクズに手こずるなどあつてはならない

桜と違い、家に居候している一般人程度の認識しかしていなかった小僧が魔術を使わず、軽口を叩きながら蠅のように飛び回っている人を苛つかせる才能に関してだけは間違いなく間桐1と言える、そんな小僧に――

魔術を使わないので魔術反応を探知して索敵することもできない、

頼れるのは蟲を介して伝わってくる音と景色だけ  
そこか…！

ようやく姿を捉えた慎二に蟲群をぶつける、一般人は元より並の魔術師でも一瞬で蟲に喰らい尽くされて終わりのそれは何故か慎二の身体をすり抜け、蟲達はただ煙に突っ込むだけだった

『なんだと？』

魔術の気配は無かった、幻覚や幻ではない！いったいこれは…

《間桐家当主ともあろうお方が、随分焦ってるじゃないか》

！！

左後ろに見えた奴の姿へすぐさま蟲をぶつける、がこれもすり抜ける

な、なんだ？なんだこれは！？

右に左、前、真上、後ろ、どこを見ても小僧の姿が視界に入る。そのどれにも魔術の気配は無い

《ザイルにボコられた時に思わなかったのか？『魔術が全てじゃない』ってさ》

手当たり次第に蟲をぶつけるが悉くすり抜ける

理解できない…！何をした！？

《若い頃はアンタもさぞ優れた魔術師だったんだろう、魔術の使えない小僧なんか太刀打ちできないようなね》

どこだ、どこにいる！？

飛び回っているのだろう、声から場所が特定できない

《でも僕の目の前にいるのはただの500歳。穴蔵決め込んでただ歳を取るだけの老人がいったい何を思い上がったんだ？》

パシユツ

顔のすぐ横をアンカーが掠めた、そしてそのワイヤーの向こうに：「自分の存在が揺るぎない、なんてさ」

『小僧っ！』

ワイヤーを巻き取り一気に接近してくる慎二に左右から最後の蟲群をぶつけ

タンタンツ ボウツ

るよりも早く炎の爆弾が爆発して蟲が消し飛ぶ

「魔術以外の世界がどれだけ広いか、知らないだろうに」

『「こんな、こんなことが！」』

ドズン

鈍い音と共に、黒鉄の義手が胸部へとめり込んだ

ザイルが臓硯を殺したと聞いた時から、僕はこうなる事を予測していた。別にこの場面この瞬間が来ることを分かっていたわけじゃない、臓硯が生きていて戦争のどこかで邪魔をしにくるんじゃないかという程度のもの。

桜に取り憑いているというのは正直賭けにもならない予想だったがその予想に沿った準備もしてきたことは今こうして無駄にならずに役立っている。特に煙に映し出した立体映像は効果覲面だったよ  
うだ

「——捉えた！」

深々と義手が桜の身体に突き刺さっているが僅かな時間なら問題

ない、本来の義手にあつた医療用の機能を復元したものであり少しの間なら人体への影響を最小限に抑えることができる優れたものだ。

とはいえ理屈は貫きながら治療しているという作つた奴の神経を疑う機能なので安全と言える稼働時間は0.8秒

「つ……！」ズボツ

制限時間を越えることなく目的のものを握って右手を引き抜く

「つとつ」

宿主を操っていた寄生虫が居なくなつたのが要因か、糸の切れたマリオネットのように崩れ落ちる桜を空いた片手で抱き抱える

失神した人間というのは例え女性であつても支えるにはそれなりに構えないといけないのだが3年間ザイルとひたすら戦場を駆けていた慎二にとっては構えることでもなかつたらしい

「さてと、これがアンタの本体か？すつごく見窄らしいな」

黒鉄の手の平の上で輝く金色の破片とその下で弱々しく動く1匹の蟲、どうやらまだ諦めていないのか蟲とは思えないもつさりとした動きで桜の方へ向かおうとする

「——もう充分生きてたろ？」

親指と人差し指で臓硯を挟み込み、クルミを粉々にできる義手へ力を込める

「そろそろ退場しなよ」

ぷちっ、と500年生きて怪物が終わるにはあまりにもあつけない、指と指に轢き潰されて終わった

周囲の蟲も完全に死滅した、今度こそ間桐臓硯は死んだと見て間違いないだろう

彼方の方はコヤンスカヤが合流して既に第2ラウンドが始まつて

るみたいだ、一度桜を連れてボーダーに戻ろう

傷つけないよう左手で桜を抱え、ワイヤーガンを持ち直す

「戻れアーチャー！そして仕事だぞアルビオン」

その言葉に呼応しアルビオンが医療棟を超えて戻ってきた、すかさずアルビオンの足元にアンカーを撃ち込んで上昇。勢いを利用してそのまま背に乗る

よし、結構強引だったけど桜は助けられた。あとは…

彼の根底にある『戦う理由』、それは――

「待ってる衛宮、僕が助けに行く」

親友を、守るためである

く間桐臓硯 死亡く

## 第94話 少年の選択

米陸軍駐屯地 上空にて…

気絶した妹をボーダーの自室に送り終え、アルビオンの背中でスナイパーライフルDVL-10の弾丸を込めながら自身の立てた作戦を振り返る

基地壊滅のため降り立った僕たち3人のそれぞれの役目はこうだ

影月 彼方は囷であり主力、あのデータラメな攻撃力と制圧力は利用すべきだ。NFFスペシャルを詰め込んだ戦車投擲により米魔術師連合軍には相当なダメージが入っているしサーヴァントも1騎倒してる。基地の外に飛ばされたが想定範囲内だ。

コヤンスカヤは英雄王の排除及び影月 彼方の援護だ。いくら彼方が伊吹童子の力を行使できるからといって闇雲に暴れるだけでは大蛇込みでも簡単に対処してしまうだろう

そこで彼女の出番だ、乱雑極まりない彼方の戦闘をカバーしてもらう。未だに鬼殺しのセイバーが出てきていないということは上手い具合に彼方の隙を補っていると見ていいだろう

「そして、僕の役割」

アーチャークラスのサーヴァント排除、理想は2騎だったけどアタランテを撃破できただけでも充分だ。そしてその次、2人が戦っている間に残ったアーチャーの排除及び米魔術師連合軍への攻撃。

連中は予想通り無駄な損害を避けるためサーヴァントと一部の魔術師だけでコヤンスカヤ達と戦っている。今基地のサーヴァントは手薄で狙い目だろう

意図に気づいたとしても向こうに行ったサーヴァントも簡単には



帰ってこれない。背中を見せればコヤンスカヤがそれを討つ。

NFFスペシャルという戦力を除けば僕たちと連中との数の差は大きい、削れる時に削っておくに越したことはない

「再開しよう、しっかり守ってくれよアーチャー」

バーサーク・オリオンは僕の護衛に使う、義手のおかげで使役できてるとはいえそうバンバン戦わせられるような魔力は用意できないからね

医療棟の茶番みたいなことでない限りコイツの力を使うのは2つの用途だけだ。『サーヴァントを排除する時』と『僕に迫った危険を排除する時』である。

基本的に戦闘の主戦力は僕自身と魔力供給元がコヤンスカヤになっているアルビオンだ、もちろん操作権は貰っている

よし、この辺りは新撰組も少ないしこの辺りから崩そう

手薄とはいえ地上には土方歳三が召喚した新撰組隊士がかなりの数居る、1人1人サーヴァントなので僕が戦う選択肢は無い。あくまでも米軍と魔術師の排除だけに絞る

「さて、指揮官はいるかな」

双眼鏡で良い狙い目を探す

僕の武装はライフルに限らずひたすら取り回しのしやすさを優先に選んでいる、ワイヤーガンによる空中移動を確実に行うためというものがあるがあまり重量や反動があるものだと言いつつ義手でのアシストがどうしても必要になるからだ。魔力が限られている僕にそれは燃費が悪い

「…よし、あいつを狙撃しよう」

それが原因でザイルが持っているような『どこを撃つても致命傷になる大口径マグナム』のような武装は使えない。なので僕は精密さで

戦うことにしたんだ

改造によりコヤンスカヤから貰ったDVL-10の重量を4kg未満に抑えるというスナイパーライフルとしては破格の軽量化に成功したが弾丸の初速、威力、射程は大幅に弱化しており特に射程に至ってはせいぜい500m強、普及している狙撃銃系統の射程が最長3000mの物もあるということを考えればこの射程減衰は決して軽いものではない

無論、それを鑑みた上での採用である

「…固定よし」

義手をアルビオンに固定、脚代わりライフルを構え知恵の輪を解くような丁寧さで部隊長と思われる人間の頭へスコープを持ってくる「アルビオンの速度と今の風向き、対象との距離…これくらいかな」

息を止め、針を通すようにトリガーにかかる人差し指へ精神を集中し

「――」  
撃つ。

――よし、即死だ

威力減衰しているとはいえ腐ってもライフルである、人体の急所を的確に貫けば殺せることに変わりはない。…最も当てるのが難しいのだがそれをやるのが間桐慎二という人間である

薬莖を排莖、次のターゲットを探す

指揮官級を排除するのも大事だが次点で殺すべきなのはバズーカ兵もしくは補給兵だろう。連中を殺せば虎戦車への有効打が無くなる

射程距離の関係上こちらの存在は地上の兵士にすぐ気付かれたも

のの奴らの武装の殆どはアサルトライフル、そんなもので反撃なんてできないのは調査済みだしバズーカは弾速が遅いからアルビオンの速度なら見てから回避できる

ようするに一方的な無敵ゲームだ、楽な戦いだな

「だが油断はしない、これが最初で最後。僕も全力で行こう」

撃ち、排莖し、狙い、また撃ち、排莖し、装填して、と…ボルトアキシオン式ライフルとは思えないスピードで手元の弾丸と眼下の敵が消えてゆく

「おっと、建物には近づくなよ」

アルビオンに指示をし直し、辺りを索敵

下には新撰組がいる、建物からジャンプして斬りかかってくる可能性もある。それさえ気をつければあと警戒するのは1騎のみ

「まさか逃げ出したわけじゃないだろう？アキレウスを殺した英雄さんよ」

く

T地区 アルゴスタワー最上階にて…

「――」

基地の外、このあたりでもっとも高いビルの最上階で彼は震えていた

「残っているアーチャーは、僕だけ…」

影月 彼方は基地の外に追い出したが竜に乗ったあの狙撃手だけはダメだ。安全圏から一方的に味方を殺し続けているあいっただけは倒さないよ

でもできるの？僕に？

基本的にサーヴァントは全盛期の姿で現界する、だがガラスに映った自分の姿は…

「アポロン様、今だけ全盛期の姿に戻すことは——」

「ん、無理だよ。後から変えられるならあんなに悩んだりしなかったし」

「ですよね、はあ…」

自身の身長の3倍はあるクロスボウを寝そべり撃ちで構えつつため息をこぼす

もし全盛期の力が使えば充分やれる勝負だった、確かにあのドラゴンは素早いがかつて自分が撃ち抜いたアキレウスはあれより速い  
今思えばサーヴァント同士での模擬戦をもっとやっておくべきだったけどどこか楽観的だった自分はそれを怠ってしまった

カタカタと引き金にかかる指が震える

こうして悩んでいる間にも地上では確実に死者が出てる、早く…早く撃たないと、早く僕がなんとかしないと

「うん、やめようパリス。君にはムリだ」

「あ、アポロン様!?!」

ボフボフと音を立てながら横にいたアポロン様がそう言った

「し、しかし今撃たなければ更に死者は増えます、今すぐやらないと」「そうだね。そしてこの狙撃にはこの先の戦いの勝敗、ひいては全人類の未来がかかっている。キミの思っている通りあの狙撃手と竜は絶対に落とさないといけない」

別に人類がどれだけ死のうが——いや流石に絶滅するのはマズい、かも? ええとつまり私が言いたいのはね、そんな震えた手じゃ今撃つても当たらないよってこと。残ってるアーチャーがパリスだけだからこそ、失敗する可能性に足をつっ込むべきじゃない」

「——」

「ほら見てみなよアイツの動き、見やすいところを移動しながら遠くからでも何をしているのか分かるような攻撃手段を使っている。明らかにキミの攻撃を誘う罠だ、邪魔をできるアーチャーが全て消えて警戒の必要が無くなれば今より酷い攻撃を始めるだろうね」  
「なら…なら僕はどうすれば？教えてくださいアポロン様！」

当てる当てない以前にそもそも撃てないのでは何をすればいいのか皆目見当もつかない

「簡単さ、向こうに降りてきてもらえばいい。適任者がもうすぐ到着するよ」

「え、到着…？」

ふと背後で10年前には無かった階段を駆け上がる音がした

「今は彼女を頼ろう、さあ私達も上に…！」

「――」

まあまあ強い風が吹く屋上で飛ばされないように気を付けながら携帯電話の電源を入れる

正直などころこの手の道具は苦手だけれど、これが1番簡単で確実な方法なのは間違いない

『こちらはNFF人類保護係です、申し訳ありませんが保護受付期間は終了いたしました。人類の皆様につきましては残された時間を全力で生き抜いてからブザマに死んでいただきたく――』

「間桐慎二に繋いで」

合成音声を遮り、こちらの目的を単刀直入に通す

『…お名前と用件をお伺いしてもよろしいでしょうか』

「遠坂 凜よ、彼に一騎打ちを申し込むと伝えて」

『かしくまりました』

遠目に見える竜に乗った彼の姿を観察する

動きが速くて視力強化してもはつきりとは見えないけど今この瞬間、攻撃の手が止まったのは確かだね。

：話し合いがしたいと言えれば良かったけどそれを言ったら恐らく彼には繋がらない

「遠坂さん！」

「アーチャーね、来てくれて悪いけど手出しは無用よ」

下の階から来たパリスを見ることなく突き放し、用意できたありつたけの宝石を見やる：まあ実際に用意してくれたのはキリシユタリアさんなのだけど

「一騎打ちのことは今アポロン様から聞きました！ですが間桐慎二がここを爆撃しないとは言い切れません」

「いいえ、彼は絶対に乗ってくる」

「…確信があるみたいだね」

「まあ、ね」

間桐くんが向こう側に付いて3年、その間に彼に何があったか知る由も無い。ただ少なくとも衛宮くん、桜、そして私の3人を連れて行くこうとしているのは明白。

『慎二はあいつなりに俺たちを救おうとしてるんだ』

衛宮くんの言っていることは理解できる、けれど

「こんなやり方、納得できるわけないでしょ」

「万人が納得できる解決方法なんて無いし、そもそも人が人を助けられる数には限りがある。それくらい分かるだろ？——遠坂」

突風と共にアルビオンに乗って現れた元クラスメイトと対峙する

「ええ分かっている、別に他人は関係ないのよ。単に私が気に食わないってだけ！」

「へー、それで僕と一騎打ちを？…なんのために？」

「これ以上あなたを野放しにできないから、それだけよ」

「…？ いや分からないな、僕1人を止めたところでなんになる？」

侮蔑や嘲笑といった一切の負の気配が無く、本当に分からないといった様子で『意味があるのか』と彼が問う

「…少なくとも地上の被害は抑えられる」

「いやだからさあ、遠坂や他の連中は自分達が何と戦ってるか理解してる？ 災害だよ？ 召喚された冠位サーヴァントは10年前に既に敗北、英雄王の排除と騎士王は無力化済み、ここからどう足掻こうとこの世界の人類史は既に詰んでいるんだよ」

「へえ？ コヤンスカヤがそう言ったの？」

「ああ、コヤンスカヤも言ってたね。僕も同意見ってだけさ。…コヤンスカヤを討つ方法は無い、今ここに冠位が湧いて出てでもない限りは。」

人類は獣を倒せない。どこか諦め気味に呟く慎二

—— やっぱり気に食わないわね

「それならどうして誘いに乗ったの？ 獣に屈服した貴方にはコヤンスカヤから与えられた役割があると思うけどこんなところで油売ったら反逆と思われるんじゃない？」

「それはザイルが許可してくれたよ、コヤンスカヤも自分の契約者にはだけは誠実みたいだね。人類殲滅において僕が生きて協力している限りは遠坂や衛宮、桜の命は保証してくれるらしい

彼女は人類の敵だが約束を反故にするような人物じゃない」

「…そのためになんの面識も関わりも無い人たちを撃ち殺したって

わけ!」

「そうとも、遠坂だつてもし聖杯戦争に参加したら他のマスターを殺すだろうか? 聖杯を手に入れるために。」

「僕もそうさ、3人を守るためにそれ以外を殺すんだ。…他に方法は無かった」

間桐くん…

「貴方は——」さて、お喋りはここまでだ。遠坂の望み通り一騎打ち、後ろの小さいアーチャー含め横槍が入らない限りは僕もルールを守ろう

「僕が勝つたら遠坂も連れていく。…行くよ」

多数の見慣れない武器を構え、慎二が戦闘態勢に入る

「く…!」

戦うしか、ないわね…!

く

F地区 美術館地下兵器廠 H O P E ボーダー管制室にて…

「最終調整完了まであと300秒!」

「急げ!」

ヴーツ ヴーツ

忙しなく人が動き続ける艦内へ響き渡る警報音が一瞬、乗組員の動きを止める

「何事です!」

「衛星軌道上のフォーリナーから高密度の魔力反応を検知!」

やはりただ黙って見ているだけではないか…!

しかしコヤンスカヤは宇宙空間からでも攻撃できるのか、ここからじゃ反撃も防御もどうしようもない!



『こ、これはちよつとマズい！艦長！』

『どうしたダヴィンチ！』

『フォーリナーのコヤンスカヤは宝具発動態勢に入ったみたいだけど集まっている魔力質量がとんでもないことに…』

『具体的には？』

『それが…この集まり方だと小さな星ひとつ形成する勢いだ。もし、もし仮にそれをここに落とすって言うのなら被害は——』

手元の端末に送られてきたダヴィンチからのデータを3秒で流し見する

『——もう時間が無い、総員発進準備！ただちに離陸し、フォーリナーを追跡開始！全ての力を用いて宝具発動を食い止める!!』

『し、しかしまだ4割のエンジンエリアの調整が済んでいません！』

『6割あれば発進はできる！残りは飛びながら調整するんだ！フォーリナーに撃たせたら終わりなんだ!!ダヴィンチ！』

『かなり無茶だがキミの言う通り発進可能だ！だが飛行中に調整するとなると作業員の安全は保証できない！それでも飛ぶかい!?』

『飛ばすんだ！今すぐに!!』

『分かった！副艦長、アナウンスを！』

『分かったわ』

…《現時刻を持って全ての作業を中断、発進準備》

あとは——

『道満、彼の容態は？』

（重度の火傷を負っておりますが命は取り留めております）

よし

『彼には悪いが降ろしている暇は無い、衛生班から2人選出し彼を医務室へ！45秒以内にだ！道満は作戦通りカイニスと待機！』

(心得ました)

《第1接続：第2第3接続、第4――》

「ネリスくん衛宮くん、聞こえるかい？すまないが残りの調整は空でやってもらうことになった、時間も殆ど無いし危険な作業だ。：やってくれるか？とは言えない、本当に申し訳ないがやってもらうしかない」

『ええ!?うぐ、わ、分かりました』

『大丈夫です、任せてください!』

《第5第6接続完了、第7から第10までの接続は保留。エンジン点火準備完了》

『準備できたよ!』

「カウントダウンは「カウント省略!接続可能な全てのエンジンを点火!!」

「了解!」

艦内が大きく揺れ、ようやく艦が動き出す

「これより本艦は衛星軌道上にいるピースト/フォーリナーへ向けて発進。これを殲滅し宝具発動を阻止する!」

H O P E ボーダー、発進!!!

## 第95話 新撰組VS旧藤丸立香

G地区 オフィスビル跡地にて…

『報告、H O P Eボーダー発進。戦線離脱までの80秒間、援護求む』  
「分かった、だが全ては防ぎ切れねえ、溢れた分はそっちでなんとかしろ」

幸いアルビオンはどこかに行っているようだがそれを差し引いても――

「来るぞー！」

「えりやあ!!」

薙ぎ払われる草薙を避け、飛んできた瓦礫を弾き飛ばす

彼方だけでも持て余すつてのに…!

「レールガン、来ます！」

「器用な女だ！」

落雷のような狙撃もなんとかやり過ごし、その隙を狙わんとする2騎のシャドウサーヴァントを叩き斬って返り討ち――するがほぼ同時にまた新しくシャドウサーヴァントが補充されて向かってくる

くそ、キリがねえ

「…っ」

向こう側で暴れている8匹の大蛇は景清がなんとか抑えているようだが近くにマスターが居ないのにそんな戦いをしていればいつガス欠になってもおかしくない

「ぜえっ…ぜえっ…もしかしなくてもコレかなりヤバいんじゃないですか!？」

「確かにもう少しくらい味方が欲しいね！」

「喚く暇があったら刀を振れ！」

コヤンスカヤが吸収したカルデアのマスター…その能力によって召喚されたシャドウサーヴァントは無尽蔵に呼び出せるらしく、それをやりながら展開中の宝具の真上でレールガンによる超遠距離狙撃をバカバカ撃つてきている

更に加えてコヤンスカヤの能力で強化された影月 彼方と8匹の大蛇が襲いかかってくるのだから出し惜しみをしている余裕などあるはずも無く、現界中の隊長格含めた全新撰組隊士と共にこれと戦っていた

(土方！おい無事か!?そこであんなに何が起こってるんだ!この異常な連続召喚はなんだ!?)

「G地区で戦闘中だ！敵が強すぎてこっちの戦場じゃ人間は役に立たない！クライム、お前はお前が何をすべきか考えろ！」

クライムからの念話に叫びに近い返答で返す。正直頭の中だけで考え事できるほど余裕がない

「お前が行けば死なずに済む命もあるだろう！」

(――分かった)

さて…!

「このっ…このっ！」

乱雑に振るわれる彼方の攻撃を避け、受け流しながら全体を見渡す

現状を打開するには玉藻御前の宝具を止めるか影月彼方を排除することだ。手っ取り早いのは奴の宝具を止めること、いくらコヤンスカヤと言えどなんのバックアップも無しで無尽蔵にサーヴァントを召喚できるとは思えない、そこさえ抑えりや…!

「沖田ア！」

「今かなり忙しいんですけどなんでしょうか!?!」

「ここから奴の鏡を斬れるか？」

「えー！この中を通って!?!…ええ斬れますよ！ただすんなりとは行きませんがね！」

鯨詰め状態と言つてもいいシャドウサーヴァント群、その遙か後ろの小綺麗なアパートの屋上で構えるコヤンスカヤを相手にヤケクソ気味に彼女は答え、そして――

「聞いたなお前ら！」

『ああ』『はい!』『おう!』

新撰組仲間がそれに呼応し、前を向く

ボーダーが飛び立つ今この瞬間しか無い！

「活路をこじ開ける！」

斬って!!!進めエ!!!

く

F地区 H O P Eボーダー管制室にて…

「全障害物のクリアリング完了！」

「20秒後から整備班は調整作業を再開、進捗は常に報告！ネジの緩急！つ怠らないで！」

こことは別の世界の機神ゼウスと同じ色と神秘を纏った戦艦が格納庫の天井を枯れ葉のように打ち崩して発進、現時点で最も高い脅威を持つフォーリナーの元へ進攻を開始した

「シャドウサーヴァント群接近！また大蛇が2体、こちらに向かってくる！」

「セイバー！甲板に出てシャドウサーヴァントを迎え撃つてくれ！オリオンは砲台でセイバーの援護を！大蛇はこちらでなんとかする！」

魔力供給が切れているセイバーと霊基弱体状態のオリオンには大蛇は荷が重い、だが…

(キリシユタリア)

「分かってるよ」

「ただ、2人の力が必要なのはここじゃない」

「『雷装』展開しろ!」

「了解だ、艦長!」

『整備班第7エンジンの調整開始』

「観測室より報告! 発進方向に高い霊基反応を確認、クラスライダー! …いやなんだあの大きさ!」

『あれは確かロシア異聞帯の——』

山に見間違うほど巨大なマンモス…いやサーヴァントが通さないとわんばかりに前方に出現

異聞帯には彼のようなサーヴァントもいたのか?

無視して迂回したいところだが…

「雷装起動用意! ギリギリまで引き付け、まとめて吹き飛ばす!」

大蛇やシャドウサーヴァント群に挟撃される恐れがあるしアレを基地に向かわせるわけにはいかない

悪いが押し通らせてもらう!

↳

G地区 オフィスビル跡地にて…

「今だ! 斬れエ!」

H O P E ボーダー発進によって敵の注意が逸れた、シャドウサー

ヴァント群の比率がボーダーに傾いた隙をコンマ1秒の遅れ無く見抜いて指示を飛ばす

あの鏡の宝具がサーヴァントを無尽蔵に召喚させている以上、いくらサーヴァントを斬っても数は減らない上に足りないかと向こうが判断すれば前よりも増えるだろう。だが補充されたシャドウサーヴァントが動き出す瞬間にほんの少しだけタイムラグがある、分かりやすく言えば土竜叩きだ

玩具と違って決まった穴から出てくるわけじゃねえが！

『草薙の——』

「テメエの相手は俺だ!!」

通り道のシャドウサーヴァントをズタズタにしながら力の限り彼方の手首を蹴り上げて何度目か分からない草薙の一撃を逸らす

「道を作れ！沖田に消耗させんじゃねえぞ！」

「うるせえ、イチイチ言わなくても分かってたんだ、よっ！」

沖田を除く全隊士が余力や他戦場のことを一切気にすることなく刀を振るっている。ここが力の使い時だと、土方が言うよりも早く皆が理解していた

そして——剣士が動いた

『一步音超え…』

音を置き、仲間が斬り開いた道とも言えぬ長く細い隙間を跳んでサーヴァント群を抜ける。

『一步無間、』

ザイルが使っていたような小細工とは違う、人間が到達できうる中

で最も速い歩み。ガラ空きになった通りを駆け、滝を登るように壁を上ってそこに着く

『三步絶刀。』

——捉えた

水に濡れたコンクリートの床に三步目を踏み出す

繰り返される防御不能の一撃に対してコヤンスカヤもサーヴァントを召喚、大きな盾を持った一目で防御寄りだと分かるシャドウサーヴァントだ

しかしそんなことは想定内である

——でなければ私が来た意味が無い

『無明、三段突き』

時間差の無い3発の突きが鏡の前に立ちほだかったシャドウサーヴァントの大盾に命中し、大きく吹き飛ばした

「——え？」

吹き飛んだ？三段突きを受けて？

『無明三段突き』：第1の突きを防いでも第2第3の突きが同時に命中しているという矛盾によって2重の守りを突破して敵を貫く宝具にも等しい防御不能の1撃。それが何故防がれたのか分からないようですねえ？」

大盾のサーヴァントの後ろ、橙髪の少女の姿をしたコヤンスカヤが不敵に笑う

何故技の詳細を…



「初見ならば間違いなく受けていたでしょうが中身を知っていれば対応のしようはあります、こう見えて貴女の剣術何回も見てますからね」それでも吹き飛ばされはしましたが。

「……………」

私がここに来て戦ったのは10年前と今回の2回だけ、貴女に見せた覚えは無い。…と言いたかったが言葉が出なかった。コヤンスカヤの今の防御はまるで『教科書で見たから知っている』と言わんばかりに完璧なものだったからだ

決して多くはないが生前でも三段突きを防いだ人間は居た（なんとか即死は免れたとかそういうレベルですが）だがこの女のそれは――

「ではネタバラシ♡といつてもバラすような内容でもないんですがカールデアという名前に聞き覚えは？」

「確かあなたが滅ぼしたという…」

土方さんに召喚される過程で知り得た情報、こことは別の世界、様々な時代を修正して人類史を守るために戦っていた組織の名前だ

「ええ、そしてそこには数多の英霊と縁を結びながら戦い続け、何一つ報われることなく…最期は哀れにも獣に捕食<sup>た</sup>べられてしまったと…つてもかわいそうな少女が居ました。

もうまともに自我も残ってませんが彼女の記憶は良い状態で残っていて、さらに彼女を食べた獣はその記憶をメモ帳を読むように知ることができます」

…！

「まさかあなた――」

「ええ、知っています♪なんなら貴女の知らない貴女のことなども」

ジェットパック付けてみます？とどこから取り出したのかコンパクト化された飛行機のエンジンみたいなものを抱えてニヤニヤと笑

うコヤンスカヤだがこつちは全く笑えない

カルデアのマスターがどれだけの数の英霊と関わったのか知らないがコヤンスカヤの反応から少なくとも新撰組の英霊については熟知しているらしい

「…良い性格してますね」

「それほどでも♪…ところでお身体の様子は大丈夫ですか？」カルデアではよく吐血していたもので。

「いくら私でもそこまで耐久力低くありませんよ」

みんなが前に出てくれたおかげで殆ど消耗せずここに、ここに、  
来れ

「こぶっ、えっ？」

ガクンと膝から力が抜ける、生前の逸話に引っ張られた吐血だ。いや吐血よりもこれは

いくらなんでも早すぎる。戦うどころかまだロクに動いてもいないのに――

「お喋りの最中に少し細工させていただきました、兵器と言うには弱い…と言うか慎二さんが作ったオモチャです

英霊どころか人間にも大して聞かないウイルス散布機ですが貴女には効果的だったようで。不便ですねえ、サーヴァントって

…にしてもホント効くとは思ってませんでした、ほんのちよつと免疫下げるだけでいいんですね」

「ぐ…」

これは…ちよつとマズいですね

彼方やストームボーダーに気を取られていたがこのコヤンスカヤの危険度はそれらを超える。仮にシャドウサーヴァントを封じたとしても対サーヴァントの知識が消えるわけじゃない

ビースト相手なら最低でも英霊で無ければ勝負にならないがコイツはルーラーも真つ青な真名看破を持っているのと同義であり能力でもなんでもない記憶のため封じるのも容易ではない

：グランドアーチャーがやられたのはこれが要因の1つですか、厄介というか勝ち目あるんですかねこれ？

「逃げたければ逃げてもいいですよ——逃げる背中では撃ち易いので。」  
「っ、ほんつと良い性格してますね…！」

もう無茶でもなんでもやるしかない、倒れる前に…！

「じゃ、マシユさん？彼女の相手よろしくお願いしますね」

「鏡を、斬る！」

く

T地区 アルゴスタワー最上階にて…

「あ、アポロン様」

「動いちやダメだよ、その瞬間そのアーチャーの鉄拳が飛んでくるだろうし」

「ですが…！」

「あれが『雷帝』か、パツと見た限りデカイマンモスみたいだ。遠坂はどう思う？…ってもう聞こえちやいないか」

「うう…」

散乱した宝石を集めつつ、ぐるりと彼女の周りを一周

魔術師といえど魔術が使えなければ意味がない、そういう意味では今の遠坂は無力だ

宝石は後で洗つとくとして…

スタンガンのバッテリーを新品に交換し非殺傷用シエルショットガンの弾丸を補充

数分前に始まった決闘は遠坂の持っていた宝石を封じたことによりあつという間にカタが付いた

といつても閃光弾投げてから彼女の手元に油をかけたただけだけど。

「宝石が持てなくなったただけでここまで弱くなるなんて思わなかった、身体鍛えた方が良いよ？それじゃ約束通り連れていくから」アーチャー！

見張り役のアーチャーに遠坂を持たせてアルビオンに乗る

「ま、待て——」「パリスくん」

「空気が読めて助かるよ、じゃ後で」

小さいアーチャーを静止させたぬいぐるみに礼を言いつつ離脱。

これであと助けるのは衛宮だけ、希望が見えて来た

「遠坂はそこに降ろして、優しくだよ」

確かボーダーに医療用ポッドがあつたはずだからしばらくそれに入つてもらおう、命に別状はないけど念のためだ

「――」  
ん

「ガンドっ！」

「おっと」ひよい

特に魔術で補助する事なく彼女の魔術を避ける

常人なら防げるようなものじゃないが僕には3年間で培った運動能力と義手のブーストがある、特に問題はない

「遠坂のことだからもう少し工夫があるかと思つたけど…残念だよ」

どんっ

「あ……」

ふらつく彼女の肩を軽く突いて落とす

「これ以上暴れられても面倒なだけだから悪く思わないですよ？」

彼女の体勢がぐらり崩れ、持っていたであろう宝石をバラバラ落としながら真っ逆さまに落ちてゆく

「……まあ大丈夫だろ、彼女は優秀な魔術師だし」

無論この高さ、タダでは済まないだろうが少なくとも死にはしない

「……っウー！」

と、どうやらガンドか何かの魔術で自爆して衝撃で医療棟に突っ込んだみたいだ

人一人吹き飛ばせる威力のものを使ったのならもう立ち上がれないだろう、すぐ回収に「——やっぱり、油断したわね」

「ええと、なんだったって？」

距離があつてよく聞き取れなかったけど……

直後。

「なに、今すぐ分からせてやるまでよ」

「は……!?」

サーヴァントバーサーカー、茨木童子が『してやった』と言いたげの表情をその顔に貼り付けていて——

「……アーチャー！僕の身を守れ!!」  
て——

「……アーチャー！僕の身を守れ!!」

大丈夫だ、僕の方が速い。コイツの攻撃が届くことは

「たわけめ、貴様の首などに興味は無いわ！」  
「っ!？」

「ごうっ——」

「この蜥蜴だ、堕ちよ！『羅生門大怨起』!!」

## 第96話 大海原の砲撃戦

HOPEボーダー 管制室にて…

「全雷装起動完了！行けます！」

「最終安全装置解除、撃てエ！」

両翼の放電機構を介して放たれた雷は大蛇、シャドウサーヴァント、雷帝の雷すらも貫いて超巨大ライダーを打ち砕いた

「これが異聞帯ゼウスの…」

「そうだ」

カイニスの持ち込んだ機神の残骸とストームボーダーの設計図（こちらは半分も無かったが）そしてそれを建造してくれた魔術師と米軍の整備士…彼らのお陰で今の私たちはここにいる

「これならビーストだって倒せますよ副艦長！」

「いえ、確かに強力な武器であることに間違いありませんが…ダヴィンチ、電磁砲は？」

『現在砲身を急速冷却してるけど撃ててあと2発だ。それ以上は砲身が持たない』

「充分だ」

建造段階では1発撃てれば上等だと言われていた（あの時はダヴィンチも居なかったからね）それがあと2発撃てるのなら充分だ

「急速発進！海上に出たのち宇宙空間に向けて発進。衛星軌道上のフォーリナーに攻撃を仕掛ける、何としても宝具を阻止するんだ、行くぞ!!」

「了解！」

「時計塔に居た時も大して知っていたわけではありませんが…キリ

シユタリアさんがあんな大きな声を出しているの、私初めて見ました。副艦長は…?」

「私も初めてです、彼も本気ということでしょう」

「セイバーは整備班の護衛に、オリオンはそのまま砲手を続けてくれ」

3つの障害をなぎ倒し、希望の鑑は空を駆ける

「妨害無し、影月 彼方及びビョンスカヤに新たな攻撃の予兆無し」

『整備班第7エンジン調整完了、第8エンジン調整開始』

あつという間に街が見えなくなり、太陽と海しか無い大海原へと出る

「凄いだか…?」

「いやあれは軽すぎる…副艦長、みんなも聞くんた。先のライダーは恐らく威力偵察が目的で

ドンツ!!!

「キャツ…!?!」

「っ…!」

そう簡単には見送ってはくれないようだ

『左舷より砲撃!左翼膜に被弾!』

『9時の方向に艦影出現!あれは…!』

海面を滑るように左から現れたのはカイニスの話にもあつた例の鑑、機体の色や武装に多くの違いが見られるが――

「なんだあの鑑!?こつちとソツクリだ!」

『『ストームボーダー』:カルデアの要であり切り札の1つでありカルデアそのものとも言える鑑だ、やはり出してきたな』

『別世界の私とアトラス院の魔術師が作り上げた鑑だ、手強いよ』  
――』



「ヴォーダイム艦長？」

不謹慎かもしれない、というか不謹慎極まりない。だけれども。

「ミサイル来ます！」

「はっ、いくらビーストが用意した物と言えどこの艦にミサイルなんか——」

『左翼耐久劣化：!?あのミサイルこっちの神性を剥がしてる！被弾しちゃだめだ!!』

「——ちよ、じよ、冗談でしょお!？」

「あの雑コラみたいに艦の上に生えまくった砲身から撃ち出されるミサイル全部がこの性能つてことか…?」

「第3波来ます！」

「艦長！指示を！」

「——いいじゃないか」

「え?」

不謹慎だけれど、この状況が少し楽しい！

「いいじゃないか、燃えて来た！左翼全砲門解錠！砲撃戦用意！」

「りよ、了解！」

「確かに手強いだろう、相手は並行世界を救ってきた戦艦だ。しかし我々に勝てる理由にはなりはしない！」

ファムルソローネ副艦長の放送マイクをかつさらい指示を飛ばす

「銃座に付ける軍人は配置につけ！オリオンと共に可能な限りミサイルを撃ち落とすんだ！」

「ムチャ言いやがる！」

「やるしかないでしょ！」

「手の空いている魔術師は彼らの援護を！叩きのめして先に進むぞ  
!!!」

：

同時刻 NFFボーダー管制室にて

「やっぱりこれ人選ミスじゃねえの？」

乗り物、それも戦艦の操縦なんて柄じゃない。殆どオートで動いてくれるとはいえ…いやそれなら尚更俺がここにいる意味無いと思うんだがな

「ただっ広い管制室越しに件のボーダーを見つめつつ超苦いコーヒーを飲む  
まっず。しっかしヒマだな

一応HOPEボーダー内のスピーカーをジャックして野次を飛ばすくらいはできるが面倒くさい、そもそも俺がここにいる理由は宇宙戦争するためじゃないって言ってたしな

向こうも防衛とは別に反撃してきちゃいるがこっちのミサイルに阻まれて半分も届いていないしそもそもダメージ自体が微々たるものだ

「…」

本当にやることがねえな

「…あいつらが撃ち落としたミサイルでも数えるか」  
ちなみに開始15秒でこれも面倒になったのは言うまでもない

く

HOPEボーダー エンジン区画【9】にて…

「第9エンジン調整完了!」

『了解』

人数を絞ったせいでもかなり時間がかかってしまった

「やった!これであとひとつ…伏せろ!」

「ひゃっ!」

ほんの2メートル上の装甲に直撃したミサイルの爆風から彼女を守る

熱っ!くそ、なんて奴らだ!

「ネリスさん、大丈夫か!」

「私は大丈夫、でも貴方の腕が…!」

っ…

かなり無茶な体勢だったために右腕に熱風をモロに受けてしまった、だが――

「――これくらい平気です、それよりエンジンは残り1つ。あと少しで」

そう言い終わるよりも早く真上でミサイルが爆発を起こす

バツン

「あつヤバい!」

急増の足場から聞こえた今1番聞きたく無い音

「上がるしかない!」

未だミサイルが降り続く翼上によじ登り、そのまま第10エンジンを目指す

「ぐっ!」

当たり前だが本艦は障害物の無い大海原を全速力で飛行しており翼上や甲板の風圧は凄まじい、甲板上は魔術師達が軽減しているようだが

動けない！とはいえあのまま下の通路にいれば大海原へ真つ逆様、登るしかなかったのだが！

くそ、どうすれば!?

『ここは拙僧にお任せを!!』

まるで風圧の影響を受けていませんとばかりに飛んできた式神から聞こえるサーヴァントの声

「道満さん!?!」

『ん、その顔と声で《道満さん》はおやめなさいとあれほど…いえそんなことよりその式神を肌身離さず！少しの間風の影響を無くす故走り抜けるのです！効力は

「走って!!」

聞く時間も惜しいとばかりにネリスさんが俺の手を引く、もちろん同意だ

『残り8秒!』

くそ、遠い上にミサイルが多すぎる！

ここから第10エンジンまで地味に距離がある上に今も頭上を桃色のミサイルが飛び交っている

道満の符と言えど流石に至近距離の爆風を防ぐことはできず、ひとつひとつ距離をとってミサイルを避けるしか無い

『こほん、ヴォーダイム艦長のサーヴァント芦屋道満より甲板上の魔術師達に！現在整備班2名が翼上と甲板を伝って移動中なり、付近の者は2人を守られよ!』

『『了解!』』

「！ ミサイルが…」

「減った！ 今だ、走れ!!」

『あと4秒！ 急ぐのです!!』

「やばい、1発取りこぼしが——」

ザンツ

「はあっ!!…はあっ、はっ、行ってくださいシロウ！ 命に換えても守ります—」

礼もままならないまま装甲の隙間に身を滑らせ第10エンジン区画へ滑り落ちる

ついた！ あとは——

『整備班最終点検開始！ 援護を』

『『了解！』』』

俺が整備するだけだ！

「まったく！ アタランテみたいな撃ち方しやがって！」 何本落としたかもう分からねえぞ！

焼き切れそうな砲台の中で目につくミサイルを次々に撃ち落とすオリオンが誰に聞かせるわけでもない悪態をつく

「ヴォーダウム！」

『全エンジン調整完了まで堪えてくれ！ 頼む！』

「ああはい！ 了解！」

ですよね！ 他に選択肢無さそうだもんね！

俺とセイバーはまだ持つが魔術師や米軍達は既に限界で当然死人もでている

「このままじゃマジで——っ！」

「新手だ！右から来るぞ!!」

『右翼砲門開錠戦闘用意!』

気配にNFFウエポンの物が混ざっているが間違いなくギリシヤに関する何かが来ていやがる

——なんの冗談だ？

あんなメカメカしい見た目から

「なんでアフロディーテの気配がしやがるんだ!？」

「副艦長……!」

「狼狽えないで!……ダヴィンチ!」

『3時の方向より詳細不明のNFFウエポンの出現を感知!』

「そんなこと分かっています!タイプは!？」

『タイプ:該当無し!だが反応を見るに先のライダーと同じようなものか……?』

(チィ、ギリシユタリア!外にいるのはアフロディーテだ!)

「! それは確かなのかいカイニス!」

「艦長?」

どう見ても衛星兵器にしか見えないそれは確かに神秘を纏っている、機神ゼウスの残骸を使った時から話は聞いていたがギリシヤ異聞帯にはあんな神があちこちに……?

(本物よりかなり弱つちいが間違いねえ!)

ドドドドドッ

「ぐわああっ!？」

「NFFウエポン《アンノウン》より攻撃！ミサイルと比較にならない速度です！」

これで《かなり弱っちい》とききたか

「今の攻撃により甲板上に展開された37%の武装が大破！」

「第2主砲がバラバラだ！使い物にならねえ！」

「出撃中の迎撃要員はただちに報告！戦力再編を急げ！」

「エンジン調整まだか！」

「ダヴィンチ！あれはアフロディーテだ！」

『ええっ!?あ、あれがアフロディーテなの?』

「そうだ、それを知った上で教えてくれ。アフロディーテは破壊できるか？」

『うーん、やろうと思えばできるかもしれないけどゼウスの一部を使つてるこの鑑に対してそこまで有効打が無いよ』

それよりもミサイルを阻止して神性を守らないと！アフロディーテの攻撃で被害を受けてるのは人、鑑共に神性を剥がされているところだけだ！」

「違う、私達はどうあつてもアフロディーテを撃破しなくちゃならないんだ。いまの武装でそれができるかどうかを…いや！絶対に撃破しなくちゃならない、雷装を使つてもいい！最優先で撃墜方法を探してくれ！」

『分かった!』

「ファムルソローネ副館長、何度も悪いがここを頼む！」

「はっ!…えっ?」

杖を引つ掴み、離陸前と同じ要領で甲板へ

「…!?艦長！何故ここに?」

「NFFボーダーのミサイルは私が引き受ける！君たちは整備班の2

人を守るんだ！」

「りよ、了解！」

ここで終わるわけには、  
いかない！



## 第97話 艦長の奇策

「……………」

——来ている

カルデアのストームボーダーを参考に建造されたH O P Eボーダーが。

ストームボーダーに及ばない性能をどこから持ち込んだか機神の残骸を組み込むことによって上乗せしている

もちろんそんなことそうそうできるものではない、例えるならダンプカーに大砲を無理矢理取り付けているようなもので付け焼き刃に等しい

「…ああ、見えておる」

既にもう1人の我からH O P Eボーダーが飛び立っていることは聞いていたが実際にこうして見ると改めて実感するのだ  
《そんな玩具でも彼らはやってくる》と

はて、さて、

自身の対界宝具、ツングースカ・ナインドライブはまだ撃てない。10万トンを超える質量攻撃にはそれなりに準備を要する

もちろん準備が終わればすぐさま終末へと加速し、そこから新しい世界が生まれる

迎撃態勢 デメテル、アルテミス、起動

「ふふふっ」

木っ端の如き人類達よ、いかにしてこれを止めるか見せてもらおうか

HOPEボーダー 第10エンジン調整路にて…

「くっ…あ…ま、まだですか衛宮整備長！」

ミサイルは丸々ヴォーダイム艦長が防いでくれてるが反対方向から来るよく分からないレーザー攻撃が激しすぎる！

「これで最後…！よし、第10エンジン整備完了！」あと俺は補佐です！

「整備完了！繰り返す、整備完了オ！」

「よし、みんなよくやってくれた！すぐに艦内に戻れ！」

ダヴィンチ！15秒後に全エンジンの回転数を最大まで上げるんだ！」

『分かった！』

「甲板上の戦闘員は全員退避！」

「急げ！急げエ！」

「聞こえるかセイバー、オリオンだ！」

俺が殿をやるから乗務員と一緒に艦内へ行け！俺だけならダクトを伝って砲台から戻れる！」

「アーチャー…感謝します…！シロウ、こっちです！」

最後まで残っていたオリオンとキラシユタリアの援護により、なんとか甲板上の乗務員は無事艦内に帰還したものの――

「で？ここからどうするんだ艦長！」

なんとか俺とネリスさん、他のみんなの協力でエンジン調整は終わったが依然として外の脅威は無くなっていない、いったいどうやって奴らを倒すのか…

「我々の目的はフォーリナー、コヤンスカヤの宝具の阻止！第一目標

のそれを最優先にすることに変わりはない」

普段の白いスーツではなく表が黒、裏地が赤の、まるでヴァンパイアのような軍服を着こなしたキラシユタリアがこれまた黒い帽子の鍔をつまんで静かに言う

…ええと

「つまり？」

「速度で突き放す！ダヴィンチ！」

『回転率97：99：101：！行けるよ！』

「全エンジン加速！最高速度まで加速させろ！」

『了解!!乗組員は衝撃に備えて!』

「うわ！」

ガクンと艦内にかかる強烈なGに思わずすっ転ぶ

「衛宮さん！」

「悪いけど衝撃緩和の機能まで付けている余裕は無かった！それよりも整備班は今のうちに艦内後部入口に向かってくれ！多分仕事が増える！」

セイバーは整備班の護衛だ、間違っても後部には入らないでくれよ！

「ま、待ってください！いったい後ろに何が!？」

「セイバー！ここは艦長の言うことを聞こう、ついて来てくれ！」

「分かりました！」

——さて！

「ぐ…なんてG…！」

『作っておいて言うのもなんだけどここまで速度が出るとはね!』

「残骸とはいえ機神ゼウスの一部が使われている艦だ、その気になれば広大な宇宙の端から端まで移動することだってできたかもしれないゼウスの力なら…！」

「…！NFFボーダーとの距離、1500！…1600！1700！」

「やった！突き放したぞ！」

「まだだ！」

ドドドドッ！

「うっおっ…！あ、アフロディーテより再び砲撃！距離が離れるどころか近付いてきてます！」

「構うな！全速前進！」

これでNFFボーダーを突き離れたとしてもアフロディーテは追ってくるだろう、ゼウスという核があるとはいえ機神の純度、精度はアフロディーテの方が上だ

「みんな、私の合図を待て、それまで全速前進だ！」

「し、しかしこのままじゃアフロディーテに！」

「静かに…：ヴォーダイム艦長、何か作戦が…？」

「ある！だからファムルソーネ副艦長、そしてみんな！私を信じてほしい！」

「…了解！」

「ダヴィンチ！先の結果は？」

『雷装なら破壊できそうだが、でも相当近くで当てないと…』

「やはりね、うん、それでいい！」 雷装起動用意！

NFFボーダーはともかく機神を振り切るのは不可能に近い、そして2機とも撃墜することなど更に不可能だ

…まともな、やり方なら——

ドドドドッ！

「第4、第5エンジン被弾！出力低下！」

『まずいバランスが!』

「第9、第10エンジンの出力を抑えろ!」

「し、しかし艦長、それではNFFボーダーに追いつかれます!」

「艦長命令だ、やってくれ!」

「く、了解!」

ダヴィンチには悪いがこれしか方法が無いんでね!

「後方よりNFFボーダー急速接近中!」

「NFFボーダーより高魔力反応感知! ロンドンの時計塔の時と同質の物です!」

『聖剣砲!? いくらこの艦でもあんなもの食らったらバラバラに吹っ飛んじゃうよ!』

「雷装を撃ちましょう! このままじゃ墮とされる!」

「まだまだ! 私の合図を待て! ダヴィンチ、NFFボーダーの正確な位置情報を表示してくれ!」

時計塔の時のデータを参考に聖剣砲がこの艦を落とすのに必要な破壊力、それを溜めるまでの時間…

「ひいい、か、艦長!」

「まだ、まだまだ…!」

恐らくあと9、いや8秒、NFFボーダーがあと8秒魔力を貯めればこの艦を粉々にする破壊力になる

「副艦長! なんとか言ってください!」

「黙って彼を信じるんです!」

6、5——ここだ!

——っ「今だっ!」

「艦内の全魔力回路を反転! 全エンジン逆噴射!」

「はっ、はあっ!」

『嘘!?!そんなことしたら——』

「やりなさい!早く!!」

「ああクソ!もうどうにでもなれ!!」

戸惑う乗組員を副艦長が一刀両断、全エンジンが反転し——

「総員、直撃に備えろ!」

『なんて無茶な使い方をするんだキミは——』

「きゃあつ!くつ、ぐ!NFFボーダー、本艦背部に直撃!!」

「ヤバイヤバイ!死ぬ!死ぬつて!」

「時計塔にいた時の100倍ヘビイだ……!」

「ウワアーツ!クライムさあん!!」

回転自体はそのままに推進力だけが真逆になったHOPPEボーダーは大海原の上で急停止、そのGも消えぬまま背後から叩き込まれる轟音と衝撃に私と副艦長以外が動揺と混乱の極みに達している——  
—が

「雷装起動!目標、NFFボーダー!」

「はっ!」

半ばパニックになりかけている雷装担当の軍人を副艦長が押し退けて雷装を起動、残存する全ての主砲がNFFボーダーへと狙いを合わせる

「! NFFボーダー、急速後退!」

「ここまで来て逃がすと思うか!」

「標準よし!誤差0.03以下!」

「よし!!発射ア!!」

「くらいなさい!」

3つの主砲から放たれた機神の雷がNFFボーダーへ直撃!……と  
はいかなかった

「く！ギリギリで割り込まれました！効果はあったようですが——」  
『アフロディーテが盾になったのか……？』

ギリギリで割り込んだアフロディーテは雷装によって中心から抉れるように真つ二つ、もう完全に再起不能だろうが盾になったせいかNFFボーダーを撃墜するには至らなかったようだ

——だがこれでいい、アフロディーテはNFFボーダーの盾になったが同時に雷装の衝撃をそのままNFFボーダーに伝える版のような役割を果たした

「チャンスだ！全エンジン反転を解除！このままフォーリナー迎撃に向かうぞ！」

衝撃を殺しきれず、アフロディーテにのしかかれるようにNFFボーダーが海に落ちたのを確認して指示を飛ばす

「これで時間が稼げた、というわけですね」

「ああ、ただそう長くはないぞ……みんな聞こえたか？艦長命令！返事は!？」

「…ハッ!?!りよ、了解！」

「分かりました！」

「整備班は後部の応急処置にかかってくれ！管制室以外の人員ならいくら使っても構わない！150秒後に宇宙空間に突入する！」

全速前進!!」

「『『了解!!』』』」

## 第98話 それぞれの守るもの

米軍基地 司令部跡にて…

「だああつ！くらえ！」

『左より増援、虎戦車8！』

「補給班急げ！近寄らせるな！」

魔術、バズーカ、銃弾、目まぐるしく飛び交う戦場で1秒1秒を生き延びながら戦う

「ちい！カドックさん！」

「…！アトランティス兵だ！米軍は下がれ！」

まだ残っていたみたいだ、本来人間がまともに戦えるような相手ではないが――

『猛獣退避』

ガクン

「今だ、無反動砲を撃ち込め！」

「ツシャ喰らエツ！」

ほんの一瞬怯んだアトランティス兵に向けて雨のような砲弾が降り注ぎ、瞬く間に粉微塵にする

「――よし」

コヤンスカヤの使い魔とはいえまさか対獣魔術が通用するとは思ってなかった。だがおかげでここは凌げそうだ

それにしても軍人は魔術師と違って生真面目だな、僕の…言わば余所者の指示にも関わらず問題なく戦ってくれてる

「カドックさん！例のアルビオンが接近中と観測から報告が！」



「く、もう戻ってきたか」

遠坂凜が足止めする手筈だと聞いていたが流石に相手が悪かったらしい、もちろん放置すべきじゃ無いのだが――

「――少なくとも今この瞬間アルビオンはここに居ない、1秒でも早く基地内の敵勢力を殲滅することだけを考えろ！」

コヤンスカヤは基地の外で新撰組と交戦中だ、彼らが引き留めている限り新しいNFFウエポンが基地内でいきなり出現することはない

「観測より報告！基地内のアトランティス兵の全滅を確認！」

「分かった」

よしいいぞ、アルビオンとアトランティス兵を同時に相手取るということはこれで無くなった

「班を2つに分ける、僕は予備の司令部に向かって守りを固める

魔術師から3人、米軍から2隊来てくれ

残りはアルバートのところに行って彼の指示で戦うんだ！」

今の場所に留まっていたらいい的になる

「了解！」

「アルビオンを視認！こっちに來ます！」

「まずい、まだ移動が――」

「落ちよ！『羅生門大怨起』!!」

「なんだ!？」

翼をめいっばい広げて空を飛ぶアルビオン、その片翼を巨大な手のような物が突如現れて握りつぶした

「落ちてくる！みんな離れろ！散るんだ！」

片翼の浮力を失えば幻想種と言えど飛ぶことなんてできるはずも

なく隕石のように眼前へと落ちてきた

墜落前に数人飛び降りたのが見えた、茨木童子と…狙撃手だろうか？いずれにせよ気にしている余裕は無い

「グ、グギ、ギ」

「ドラ、ゴン？」

「カドックさん、指示を…」

「サーヴァントを呼ぶんだ…！僕らじゃ太刀打ちできない！」

翼のもがれた竜が今にも起き上がろうとしているが完全に起き上がられる前にサーヴァントを呼ばなければ

ヘタをすればここら一带吹き飛ばされる…！

「ペンテシレイアを呼ぶんだ！急げ！」

もう基地に残っていかつ全力で戦えそうなのは彼女だけ、彼女は今アルバート中将と一緒に居たはずだから――

「ヤツの口内に凄まじい魔力が…！」

「こ、ここからブレスを吐くつもりかコイツ！」

もはや自分も一緒に焼けても構わないと言わんばかりにアルビオンの口元から炎が漏れ出てくる

「くそっ」

対獣魔術も当然効果が無い、死ぬ――

「そうはさせせん！」

「バーゲスト!？」

体格に見合わぬ速度で駆けつけたバーゲストがアスファルトの大地ごとアルビオンの顎をガラデーインで抉り上げ、ブレスはあらぬ方向へ爆発しながら噴き出した

彼女も基地に居たのか

「バーゲストだけじゃねえよ」

「そ！ここはお姉さん達に任せて！」

「バーヴァン・シーに伊吹童子……」

どうやら医療棟に居たサーヴァントが来てくれたらしい、それにバーゲストのマスターであるレガリオも居るみたいだ

「カドック、お前達は司令部に言って守りを固めろ。これは妖精騎士の仕事だ」

「そういうこと！ザコはよろしくね？」

「助かった、頼む！……全員撤退だ！N F F ウエポンを叩きつつ司令部まで後退する！」

その場を任せ、全員が撤退。数の減ったN F F ウエポンを道中で排除しながら僕達は予備の司令部へと辿り着いた

く

医療棟 3階にて……

「よし」

サーヴァント連中はアルビオンに釣られて外に出たらしく医療棟内に反応は無い

「いたぞ！アーチャーのマスター……ぐはっ！」

「弾丸も魔力も無限じゃないから邪魔しないでほしいんだけど？」

まあ警備兵もいるにはいるが……

「あ、いたいた、まったくやってくれたよね？遠坂」

ガラスをブチ破って気絶している遠坂をようやく見つけ、警備兵を適当に排除しつつ彼女の様子を確認する

……命に別状は無いけど何箇所か骨が折れてる、多分自爆ガンドのも

のだな

あとは…ガラスで切ったのか腹部と左足からの出血が少し多いな、幸い気絶していることだし警備兵も大体排除した。応急処置だけ済ませてから連れて行こう

腰の救急バッグに手をつっこみ消毒薬と止血剤、  
包帯とベルトを取り出す

「あくっ…う…」

「我慢しなよ、僕なんか自分で右腕切り落としたんだから」

傷口を消毒し止血剤を使った上から迅速に包帯を巻いてベルトを使って緊縛止血。

「足はこれでよし、腹部は…処置できないから少し服を切るよ」

いいね？という質問に答えが返らないままハサミを入れて傷を確認する

…ちよつと深いな

服の上からでは分からなかったが足よりも深く切ってしまったようだ、幸い内臓に到達しているような出血ではなかったのでその点は良かったと言えるだろう

が、流石に腹部を縛るわけにも行かないので僕の作った瞬間接着剤でひとまず腹部の傷を塞ぐことにした。医療用のものを参考に作った物だが人体にとって異物であることには変わらないためなるべく早く医療ポットに連れて行く必要がある

これで腹部もよし、さてさっさと終わらせよう

添え具も出して折れた左腕を固定、最後に背中を含めた全身に他の異常が無いかどうかを確認して処置を終了。

「んー」

外ではアルビオンとサーヴァントが交戦してる、戦闘に魔力を割いているせいかわの再生が予測より遅い

仕方ない、翼が再生するまで僕は僕にできることをやろう

戦闘に参加しても良かったがこのまま僕が雲隠れしたほうが混乱を狙えるしチャンスも増えるだろうからね

「それにしても…」

基地内のNFFスペシャルの数が少なすぎる、コヤンスカヤが外に行ったから彼女のいる正門の方向からしか来ないにしてもこれは少ない。事実最初にばら撒かれたNFFスペシャルを連中は既に淘汰し始めている

「調べたほうがいいかもしれないな」

く

基地 正門前にて…

「????????  
ツッ?????!!」

「????????!!」  
「全部を焼き尽くさんばかりの叫び、この世の憎悪を全て凝縮させたような怒号を発しながら彼は眼前の敵を穿ち続ける」

獣人の胴体を吹き飛ばし、四足歩行の怪物の頭を踏み砕き、戦車内部に爆弾を投げ入れる

「っ!アトランティス兵…!」

「バ??サー??ツ!」  
「??????」

「分かっている!」

かろうじて聞き取れた自身のクラスを呼ぶ声に呼応し、アマゾネスの女王がアトランティス兵の頭部を殴り砕く

極限まで絞った戦力と守備範囲、その中でただひたすらに武器を振るう2人のおかげで今現在米軍基地にNFFウェポンの侵入は無い

発生源となるコヤンスカヤも流石に新撰組を相手にしながら細かな操作をすることはできないらしく正門からのみ押し寄せるNFFウエポンの脅威は全体で見れば少しずつ下がり始めている

「もう何体倒したか分からない、脳が、身体が焼き切れそうだ

既に死人と化している身体へ令呪を通して流し込まれる聖杯の魔力、それによつて彼の身体は摩耗と再生を同時に行つておりいつ人の形を失つてもおかしくなかった、聖杯からの支配を肩代わりしていた土方がおらず暴走状態に入っていたから。だが  
自分がここで踏みとどまっていることで部下の被害が抑えられるのなら安いものだ

これまで守れなかったことの方が多かった彼にとつてその事實は土方無しで泥の支配を跳ね除けるにはあまりに充分すぎた故に

戦える

また新しく投入されたアトランティス兵に飛びかかり

「おい下がれアルバート！アトランティス兵は私が相手を——」

「???  
ツ!!!」

首を締め潰し、殺す

泥の支配がなんだというんだ、俺がここで戦うことで守れるのなら。部下を、民間人を、仲間を、そしてあいつらの勇者の像を守れるのなら

「かかって…きやがれ…!」

永遠にだって戦つてやる、俺は…勇者だから

G地区 アパート屋上にて…

「ええ…あれ2人でやってんですかあ？」

NFFスペシャルから送られてくる情報を流し見して気づいたが  
どうやら基地の外から差し向けている使い魔は1つ残らずクライム  
とペンテシレイアに撃滅されているらしく基地の中核に全く近付  
ていない

「ふむう、アキレウスさんでもけしかけてペースを乱してみますか」

「けほつ、う、ああつ、あああつ！」

ああ、まだやってたんですね沖田さん

呼吸すらままならないほどの吐血(サーヴァントに呼吸は必要ない  
なんて揚げ足取りは置いとしまして)をしながら刀を振るう沖田総司  
生前にも病人でありながら駆り出されていたことがあったのは  
知っていましたがか中々耐えますねえ

が、残念なこと的一切届いていない、宝具鑑にもマッシュクシルダーにも  
さてと、どうしますか新撰組？

弱った彼女をこのまま押し潰すのは容易いが相手は新撰組、それは  
少しもつたいない。ここはひとつエサになつてもらいましょう

かつてカルデアに保管されていたサーヴァントの情報は立香さん  
を介して全て知っている。…新撰組副長 土方歳三、あなたは決して  
仲間を見捨てない

生殺しにしていれば彼女が死ぬ前に必ずここへ貴方は現れる、そし  
て無茶な突撃をしてアツサリ死ぬまでがセット。

だってそうやって死んだのでしょうか？

英霊を相手にするにあたり生前の死因をなぞるのが一番確実だ、聖杯によって擬似的な不死を会得してしようとサーヴァントの枠組みからは逃れられない

「土方歳三さんが受肉してもザイルさんに触れられないように、ね」  
：こうして考えるとますます疑問ですねえ、バーヴァン・シーさんはどうやってザイルさんを殴ったのでしょうか？

なんて考えながら玩具の強度を微調整、死なないように気を付けつつレールガンを構え直す  
ん？

影月彼方の近くに新しいサーヴァント反応：だが新撰組ではない  
神霊伊吹童子の霊基を殆ど掌握した彼方の周辺は現伊吹山と同じ  
：言わば魔力の暴風雨が吹き荒れており観測が難しい、故に直接目で確認したのだが――

「ようやく出てきましたか、魔性殺しのセイバー 渡辺綱」



## 第99話 詰め3手前

米軍基地 医療棟前にて…

「ガギツ、ギギツ…!!」

「っ、ふんー!」

コンクリートを粘土細工のように抉り取る爪の一撃をガラテイーンで逸らし、返す刃で肩部を斬る

…やはりか

妖精騎士の時点で彼女に勝る騎士は妖精園に居なかった、その彼女が（兵器化されているとはいえ）竜としての姿で立ちはだかっている以上ちよつとやそつとじゃダメージにもならないらしい

茨木童子がやったように翼のような鱗や甲殻のない場所なら通るかもしれないが…

「メリュジーヌ、今のテメエに意識があるのかどうかは知らねーけどな、私達にはもう躊躇してる余裕はねえんだ！これ以上邪魔すんなー！」

「できればもつと違う形で会いたかったわね！」

レガリオさんの魔術はもちろんバーヴァン・シーのフェイルノートや伊吹童子の草薙も殆ど効いていない、全員で掛かっても彼女を倒すには至らないだろう。——ならば

「レガリオさん」

「…分かってるよ、妖精騎士バーゲスト」

流石は我がマスターであり伴侶、どうやらわたくしの言いたいこと、考えていることはお見通しのようですね

「伊吹大明神、バーヴァン・シー、ここは私が食い止めます。今すぐここから離れなさい！」

「はあ!?…っておい!レガリオ!?降ろせ!」

直後レガリオが有無を言わさずバーヴァン・シーを担ぎ上げて離脱、やや困惑した伊吹童子もそれに続く

「待て…おい…バーゲスト!!」

背中に聞こえる彼女の声に振り返ることなくガラティーンを構え直す

「ギ、ギギイツ!ガガ…!」

「歪な再会であるが…今度こそ決着を付けようか、メリユジーヌ」

陛下、ガウエイン卿、どうか私に

護る力を。

「降ろせつつつてんだレガリオ!私の命令が聞けねえつてのか!」

ガスガスと背中を叩いて暴れるバーヴァン・シーを宥めながら走る

「——いくら貴女の命令でも今だけは聞けません、あのまま全員残ってもメリユジーヌは倒せない」

「んなことはお前より分かってんだよ!今の状況もメリユジーヌの強さもな!一人でもどうにもならないんだから全員でなんとかするしかねえだろ!」

「分かっています」

「分かっている!妖精園でメリユジーヌがどれだけ強かったか知らないくせに!バーゲストが殺される!」

「殺させません」

「——え?」

担いだ彼女が落ちないように支えつつ急停止し、決断する

「伊吹童子」

「つと、なにかしら?」

「お願いします、バーヴァン・シーを守ってください。∴私は戻りません」

「ちよ、ちよつと!?!」

「ん、言っても聞かなそうな頑固なカオ!仕方ないわねー、終わったらお酒奢ってよ?」

「ええ、樽で用意しますよ」

「ちよ、やめ——」

言うが早い伊吹童子に彼女を託してUターン、バーゲストの元へ倒すにしても足止めするにしてもバーゲストが宝具を使わなければ不可能だ。そのためにできることは周囲の人間の避難誘導、彼女の宝具を使うのならもっと避難の範囲を広げる必要がある。それと――

「∴理性の肩代わり」

伊吹童子に彼女を任せるのは少しだけ不安だったがこっちはこの世界で僕にしかできないことだよし、戻ろう

「レガリオ!あなたまで!?!」

追いかけてようにも伊吹童子の尻尾に巻き取られて動けない

あなたまで死んでしまったら――

「さ、行くわよシーちゃん!」

「待ってって「聞いて、この先貴女の力が必要になるの」

50年前の尊大な態度でも飲んだくれのフザけた態度でもなく伊吹童子が言う

「異郷の魔術師∴いいえ、モルガン・ル・フェから妖精騎士の名を着名

し魔術を受け継いだ貴女にしかできないことなの」

「なんであなたがそこまで知って…それに私にしかできないことって？」

「あなたの言う通りアルビオンは2人だけでどうにかなる相手じゃない、だから私達は私達にできることをして2人を護るの

いい？魔術師バーヴァン・シー。…私達で影月ちゃんを倒すわよ」

）

G地区 オフィスビル跡地にて…

『プリモ・アモーレ』!!…はっ、はっ、バーサーカー…!」

「喚くな!シャドウサーヴァントを片付けろ、綱とファクターに寄せ付けるな!」

30秒前まで繋がっていたアヴェンジャーとの通信は途絶え、彼女が押し留めていたであろう大蛇が中心部…つまりこの場所に向かって来ているのは魔力の反応で分かる、コヤンスカヤの元に辿り着いた沖田も死にかけている

こうなってしまった以上彼方を殺す以外の突破口は無い、無いのだが――

彼方を中心に円形に広がった空間の中の2人に対する疑問。

何故姿を現した？

新撰組とその他戦力を囿に機を伺い、不意打ちで彼方の首をはねる。サーヴァントとコヤンスカヤの妨害が激しくチャンスが無かった故に姿を現していなかったが何故今になつて…

もう戦力も時間も無いのは分かるがここまで堂々と姿を晒せばコヤンスカヤは全力で潰しに来るぞ…!

「またレールガンが…!」

「フアクターっ！」

「ぐアっ…!!」

サーヴァントでも無い彼が避け切れるはずも無く磁場によって放たれた弾丸は彼の脇腹を抉り取った

「フアクタ「構うな！あいつはもう救えない！綱を守れ！」

何箇所かの急所ごと抉られ、膝を突く彼はどう見たって致命傷であり魔法でも使えない限りもう助からないことは明白だった、が

綱に狼狽している様子はない、こうなることが分かった上で出て来たのなら何か策があるはずだ

「全撰撰組隊士に告ぐ！綱に敵を寄せ付けるな！…斎藤、ここの指揮を頼む！」

「そりやいいですけど副長は？」

「沖田を助けに行く、俺一人で良い」

これ以上戦力は裂けられない

「……………分かりましたよ、こっちは任せてください」

「ああ、助かる」

行くべきじゃないのは分かっている、もちろん斎藤の奴も。間違はなく俺を始末するための罠だろう、それでも助けられる可能性を無視して見捨てることはできない

…だがな、甘く見るなよ

現界してから覚えたモールス信号を頼りに彼へ連絡を取る

「俺の首はそう安くは無いぞ」

……………出て来た

鬼殺しのセイバー、渡辺綱。今のところ私を殺し得る唯一の英霊。だがこうして相對している以上斬られることはない、どれだけ速く動いたとしても。どれだけ重い一撃だとしても。彼自身に鱗の防護壁をすり抜けて斬る力はない

そして斬るといふ行動上、確実に草薙の間合いに彼は入る。そこを

つぶす

コヤンスカヤがあいつのマスターを殺したから私はあいつが消えるまでただ待てばいい。向かってくるなら斬ればいい。

「それでぜんぶおわり」

勿論一人で突っ込んでくることは無いだろうけど他の英霊が何人向かってこようとセイバーさえつぶせば怖くない、あいつ以外に多少攻撃されたとしてもすぐに治るし

こい、やっつけてやる

く

米軍基地 正門前にて…

「があっ…くそ、補給はまだか!？」

最後の補給からだいぶ時間が経っている、このままじゃ先に弾が尽きる!

! また新手…!!

「」

「バーサーカー、左だ!…おいバーサーカー?」

バーサーカー…ペンテシレイアの様子がおかしい、いきなり立ち止まって…

「まさかとは思ったけど2人だけで足止めしてるとはね」

!!

鉛玉と共にやってきた衝撃を踏ん張って押し殺し、敵を視認するより早く撃ち返す

「うわっ、今まで会ったどの兵士よりも血の気多いな、ザイルの言っていた通りだ

こうして面と向かって話すのは初めてかなクライム中将、僕は間桐慎二。あんたのことは聞いてるよ」

やたらと小さなスナイパーライフルを手に現れた間桐慎二が涼しい顔で自己紹介するがそんなものを気に留めている余裕はない  
「っ！」

頭部目掛けてアサルトライフルを再び速射、だがなんらかの魔術によつて防がれ、弾丸が彼に届くことなく弾かれる

「悪いけどあんたと真つ向勝負するつもりは無い、こつちとしてはNFFスペシャルの足止めが無くなればいいんだ」

「逃がすと思うか？」

「僕と戦つてる余裕は無くなると思うよ？」

「ふぎけ「アキレウスウ!!!」」

…!?バーサーカー？

「来いアーチャー、ペンテシレイアを正門から引き離す。

…追いかけてきたければ好きにしなよ、ガラ空きになった正門からNFFスペシャルが雪崩れ込むだけだからね」

「ちいっ！」

バーサーク・オリオンに抱えられてその場を去る間桐慎二の背を俺は見送ることしかできなかった、あいつの言った通り俺までここを離

ればNFFウエポンが雪崩れ込んでくる

残ってる弾丸はそう多くない、まずいぞ……!

く

G地区 オフィスビル跡地にて……

「——セイ、バー」

気を抜けばそのまま死んでしまいそうな朦朧とする意識の中、残った令呪を全て解放する

……これで俺の役目は終わりだ

ただのクソガキでしか無かった俺が自分の身を犠牲に戦えるなんて俺自身思わなかった。いや、俺の力じゃない。人でありながら英霊と肩を並べて戦い、みんなを先導してくれた彼——クライム・アルバートのお陰だ

父さんや母さんは今何をしてるんだろうか、ウルフルズに入ってから一切連絡を取れなかったがまだこの辺りに住んでいたのだろうか、そうだとすれば今は避難所にいるのだろうか

最後に会いたい、父さんに俺の勇気を褒めて欲しいし母さんの作った炙りチーズハンバーグが食べたい

——でもそれは叶わない、だから託そう。家族のことを、彼ならきつと守ってくれるから

く 魔術師 バルン・ファクター 死亡く

「……ファクター」



魔術的繋がりは無かったが後ろにいた彼の、命の気配が消えたのが確かに分かった。バルン・ファクターは死んだ。

「っ」

もう後には引けなくなった、影月 彼方はここで仕留めるしかない  
「ハルカ！手を貸せ！」

了承したのか拒否したのか、返答は振るわれた草薙の剣圧に掻き消され、影月 彼方との最後の戦いが始まる

「――」

やはり彼方は自分以外を全く警戒していない、いや今この瞬間自分以外を見ていないし見えていない

ハルカの援護も新撰組の攻撃も防御すらせず全身凶器となった尻尾と両腕を草薙と一緒に振り回してくる、もちろん1発でも喰らえば致命的なものばかり

…地を薙ぐ尻尾を飛び越え、爪の乱撃を打ち払って懐に飛び込む

「っ『トライスター・プリモアモレ』！」

月女神の1矢が鱗の防護壁の一部を砕き割った

「うわ」

まさか割られるとは思っていなかったのか衝撃で彼方がよろめく

――首がガラ空きになった

「そこだ影月 彼方!! 『大江山――』

ザン

「――え？」

「な」

彼方の首が飛んだ、だが自分は斬っていない。首を斬ったのは自分でもハルカでも無い他ならぬ彼方自身だった

「う、嘘、何を…？」

抜刀した刀は既に無い首の上に振り抜かれ、虚しく空を切る

「いたい、すごくいたいけど、すぐ治るからいいか」

忘れていた。元々伊吹童子と酒吞童子は側面が違うだけで同一人物、これは――

『鬼の首 EX』

「つと、じゃあね鬼殺し」

ぺたんと曲芸師のように斬った自分の首を付け直した彼方の爪の一撃が自分の左肩から斜めに薙いだ

「かつ、は…！」

「綱さ――」

やけに周囲の時間がスローに見える中、自分の身体は硬いコンクリートの大地へ投げ出されるのだった

後ろで何が起こってるか気になるものの振り返ることなくアパートの屋上へ駆け上がり、再び彼女と対峙する

「おや、まさか一人で来るとは！お茶でも飲みます？」

「カヒユツ…くあ…ひじ、かた、さ…」

力なく倒れた沖田の首元をヒールで踏み付けながら容姿以外これまでと変わらぬ様子でコヤンスカヤが笑う

「――沖田を放せ」

「ええ放しますよ」はいどうぞ

脇腹を強く蹴られ自分の方へ吹き飛ばされた沖田を抱き上げる――と同時に下以外の全方向から来る衝撃

「っ……!!があっ！」

コヤンスカヤが呼んだであろうセイバー、アーチャー、シールド、アサシン、アヴェンジャーは弾き飛ばしたが残ったランサーとアルターエゴの攻撃は防ぎ切れず受けてしまった

ぐ……!

傷は聖杯の力ですぐ治るがランサーからの、右足に受けたダメージはまずい。立てない――

「ぐあああっ……！」

休むことなく続けられるシャドウサーヴァントの第2波攻撃に対し俺が出来たことといえば沖田を下に逃がすこととこれ以上にダメージを貰わないようにするだけだった

いくら聖杯の力があると云っても無傷というわけにはいかない(それが不完全なものなら尚更)

再生の後間も無く次々とシャドウサーヴァント達が攻撃を仕掛けてくる

なんとか無傷の左足を死守し、飛び退く一瞬で3騎のシャドウサーヴァントを斬り伏せる

「再生の際は――」

くそ……!

「与えません♪」

いったいどこにそんな力があるのか甚だ疑問になる華奢な足から

放たれたコヤンスカヤの蹴りが自身の身体を宙へと打ち上げる

「くたばりなさいませ♡」

空中で無防備になった彼をシャドウキヤスターとシャドウフォーリナーの放った爆炎が包み込む

「グバツ……」

痛みはどうでもいいが右腕と右足が吹き飛んだ……！

「さっ、満身創痍のその身体を引き取りましょう。

……まあ引き取るのは中身だけです」

コヤンスカヤの纏う少女の腕が自分の身体にめり込み――

「――やはりここにありましたか、この聖杯はNFFサービスが回収させていただきます」ご理解とご協力のほど、お願いします♡

聖杯を、奪われた

## 第100話 宇宙戦争

HOPEボーダー 管制室にて…

「現在、後部復旧率は37%」

「宇宙空間突入まで残り30秒、作業員は退避！」

「雷装起動準備完了！いつでも撃てます」

アフロディテを撃破し、ストームボーダーを突き放したHOPEボーダーは宇宙空間、衛星軌道に鎮座するビースト・フォーリナーとの距離を確実に詰めていく。その途中

「艦長、報告が。米軍基地との通信が今——」

「———そうか」

通信機に不備、故障無し、その上で繋がらないとすると

「…分かった、このことを知ってるのは？」

「担当者の2人と私、ヴォーダイム艦長の4人だけです」

「なら宇宙空間における電磁波の影響で機材に不調が出たことにするんだ。味方に嘘を流すのは忍びないが」

今は必要な嘘だ

「分かりました」

繋がっていた時も地上の状況が全てわかっていたわけじゃないが…みんな無事だろうか

「宇宙空間に突入します！3、2、1…突入!!」

「ビースト・フォーリナーを望遠で補足！」

「よしっ！間に合ったぜ、奴はまだ宝具を使えない！」

ゆらゆらと6つの尾を揺らして星を見下ろすフォーリナー、どうや

ら宝具発動までの魔力はまだ溜まりきっていないようだがあの魔力の集まり方は…

『まずい、もう魔力充填が終わりそうだよ艦長!』

「分かっている、全速前進! 詰められるだけ距離を詰めるろ!」

近づこうと再発進した3秒後、またしても警報が鳴り響く

「新たな魔力反応検知! アフロディーテと似ていますが別個体です!」

「カイニス、分かるか?」

(ああ…忘れねえよ、アフロディーテが出てきた時点で予想はしてたがありやデメテルだ)

デメテル…穀物と大地の神か

「さらにもう一機出現! 霊基反応は…月女神アルテミスです」

「ライダーに加えて機神を3機も投入とは相当警戒されていますね」

「ああ、だが裏を返せばそれさえ突破すれば阻止できることの証明でもある」

でなければここまで防衛しようとはしないだろう

「砲撃戦用意! 1倉から5倉までの全ミサイルの発射を準備!」

「はっ!」

今は我々にできることをやるだけだ

「………艦長」

いつの間にか横にいた彼の言葉に振り向く

「オリオン?…ああ分かった、アルテミスは任せていいんだね」

アフロディーテを撃退した時点でオリオンから既に申し入れはあった

「勝手を言つてすまん」

「構わないさ。ミサイル発射後になるが可能な限りサポートする」

一足早く砲台に向かう彼の背中を見送り改めて現状確認に移る

「副艦長、騎士王は？」

「魔力不足のためこれ以上の戦闘は厳しいと言わざるおえません、解析不能の妨害により再契約も難しく戦闘はできてあと1回です」

「……ここでの戦闘は不可能に近いな」

基本的にサーヴァントは宇宙空間では戦えない、ガガーリンやボイジャーといった宇宙での功績を元に歴史に刻まれた英霊なら戦えるかもしれないが現戦力にそのような英霊は居ない

「ビースト・フォーリナー、ミサイル射程距離内に捉えました！」

「目標、フォーリナー！1倉より順次ミサイル発射！」

ズズン…

「つく！デメテル及びアルテミスより砲撃！」

「くそつたれ！ストーカーみたいの後部を…こつちの嫌がることを分かってやがる！」

『まずい艦長！デメテルはともかくアルテミスからの精神汚染はまずい！軽減はできても防ぐ手段が無い！』

透過してくる月の光がダヴィンチの訴えに説得力を持たせている、  
が

「構うな！続けて2倉3倉のミサイル発射を最優先、撃ち続けろ！」

「し、しかしミサイルに対しフォーリナーは防御行動すら取っていません！このままでは宝具発動の恐れが！」

「雷装発射許可を！宝具阻止にはもうそれしかありません！」

「許可はできない、発射用意のみ続行。」

「艦長命令だ、5倉までのミサイルを撃ち尽くせ早く!!」

全てのミサイルを撃ち切ることができれば最悪艦が落ちてもいい

《2倉、3倉、全ミサイルの発射を確認。続いて4倉》

「駄目だ、やっぱりロクに効いてない！」

「艦長……！」

「狼狽えないで、5倉発射！」

《5倉、ミサイル残弾無し》

「よしー！」

いつ空中分解してもおかしくないほど揺れる艦内で5倉までのミサイルが全て発射されたのを確認し、自然と笑みが溢れる

「5倉までの全ミサイル発射！」

「よくやった、これよりデメテルとアルテミスの迎撃を開始！」

何度も済まないがこれで最後だ副館長

「……なんなりと」

流石にこの短期間で何度も頼っていれば察してくれるか

「指揮を頼む」

「了解、艦長は？」

「……援護をしてくる」

「……………」

先程から相当数のミサイルが撃ち込まれているものの肝心の破壊力がお粗末で目眩しくらいにしかなっていない

爆炎の中で涼しい顔をしながら魔力を集めるコヤンスカヤは静かにH O P E ボーダーがいるであろう場所を見据えて考える

当然これで終わりではないだろう、事実H O P E ボーダーの主砲と思われる場所に魔力が集まっている。あれがA N 6 0 2 — I v a n



を消し飛ばした物だとすればいくら自分でも無傷では済まない、集めた魔力も霧散する

が、来ると分かっていたら対処は容易い。所詮はストームボーダーの劣化コピー、そう何発も撃てるような代物で無いことは想像に易い。加えてあの質量が飛んでくるとなればそれは視界が良からうが悪からうが関係なく直進する猪を避けるように回避できる

「それでそのあとはどうするか？」

あのキラシユタリアがここまで追ってきたのなら更に大きな隠し弾がある、最低でも主砲に並ぶ何かを出してくるはず

顔の横で爆発するミサイルを無視し、HOPEボーダーの一挙一動に集中する

妙な動きを見せた瞬間、隕石の雨でもお見舞いしてやろう

爆煙が晴れていき戻る視界

当然見えたのはHOPEボーダー…？何故反対を向いて

「——射程距離内だ」

!!!?

顔の横、本当にすぐ横から声がした

まさかこんな近くに——

『飛<sup>ラ</sup>翔<sup>ビ</sup>せよ わが金<sup>カ</sup>色<sup>イ</sup>の大<sup>ネ</sup>翼<sup>ウ</sup>!!!』

「つぐううっ?」

「うおおおああ!!!」

霊基を2つに割っているとはいえビーストクラスのこの身体。宝

具であろうと簡単には傷付かない

しかし予想だにしなかった人物、予想だにしなかった一撃が顔のすぐ横にいきなり現れたとなれば話は変わる

宇宙空間でめいいっぱい翼を広げて突き抜けようとする黄金の鳥に対し、私は宝具発動に既に用意していた魔力の内のおよそ半分を使つて宝具ごと全範囲を吹き飛ばすしか無かつた

——もしかしたら慌てるような威力じゃなかつたかもしれない、見かけだけで防ぐ必要のなかつたものだったのかもしれない、半分も使つてまで防ぐ必要は無かつたのかもしれない

だが未だ残るミサイルの残骸が魔力をばら撒いていてカイニスの魔力を上手く感知できなかつたこと、なにより魔法の如く真横に出現したカイニスに完全に虚を突かれて——ありていに言えば驚いて使つてしまったのである

「……………」

それまで無表情で星と人類を見下ろしていた獣の口元が歪む

「——小癩な真似を」

「ンンンンン！その表情、良いですねえ！それでここここまで来た甲斐があると言うもの！」

吹き飛ばした黄金のランサー、カイニスを補佐するように芦屋道満がその隣に立つ

「どうやらここに来たのは2人だけのようだ」

「キリシユタリア・ヴォーダイム、彼がどんな切り札を出してくるかと思えばポセイドンの慰み物と安倍晴明の噛ませ犬以下の影法師…」

まさか、本気で、それで我を止めると？」

「止めることならもう終わった、その減らず口を黙らせてやる

行くぞ道満、やれるか？」

「ええ、ええもちろんでございませとも、この距離ならば充分！ さあ力  
イニス殿！ 我ら2人で世界を救いましょうぞ！」

「ああ…正直こういう台詞はどうでもいいがあえて言わせてもらう

我が名はカイネウス！ コロノスの子にしてラピテス族の王！

全人類の代表としてコヤンスカヤ、てめえをぶっ殺す」

## 第101話 鬼殺し

H O P Eボーダー 甲板にて…

「届いた!」

星1つ形成しようとしていた膨大な量の魔力は風船に穴を開けたように霧散、全てが消えたわけではないが少なくとも戦っている間に先の量まで集めることは不可能だ

——とはいえ私達が負ければそれも無意味となってしまう

2人とも、しつこいようだがもう一度言うよ。この作戦は後戻りがきかない

(ああ)

(はい)

米軍、魔術師、ミサイル、雷装、H O P Eボーダー、あらゆる人員とリソースを使い切って君達2人をフォーリナーの元へ送るからだ  
失敗すれば再現できるようなりソースもチャンスも、もう来ない

(分かってる)

故に令呪行使の権限を2人に1画ずつ分配した、使用は現場各自での判断に任せる

手の甲から2画の令呪が消えていることは既に確認済み、反応からも2人の手に令呪が移ったのは間違いないようだ

(……………)

(おや拙僧にも?…よろしいので?)

私はキリシユタリア・ヴォーダイム、だが異聞帯の存在する世界のキリシユタリア・ヴォーダイムじゃない。

この10年、惜しみなく努力した自負がある。だがキミはともかく

異聞帯の私に召喚され、その私と共に歩んだカイニスとは認識にズレが出るだろう

…正直、フオ<sup>コ</sup>ーリナ<sup>ヤ</sup>ーとどう戦っていいか測りかねているところもある

影月 彼方や核兵器と比べてもフォーリナーの脅威度は頭ひとつ抜けている、排除とはいかなくともせめて地上に引きずり落とさなければ人類に未来は無い

「……………すまない」

(キシユタリア?)

「2人の肩に文字通り全人類の生存権、未来をかけてしまった」

突き詰めれば2人にとって人類がどうなろうと知ったことでは無いはず、2人がいた元の世界の人類史は既にコヤンスカヤによって食い尽くされている。この世界の人類を救ったところで彼らの世界は滅びたままだ

その2人に私達、いや私は全てを託して送ったのだ。迷った、オフェリアに反対されもした、だが――

(オレ以上に勝てる見込みのある奴が居なかった、だろ?ま、当然の話だが)

遠すぎてぼんやりと背中しか見えないがその背中がやけに大きい気がした

カイニス…

(任せとけ、あの女狐を引きずり降ろしてやる)

分かった、世界を救ってくれ

(大役、確かに承りました)

(ああ…やるぞ!)

米軍基地 第1司令部跡にて：

「アキレウスウウ!!」

「……………」

「ぐび…ふう」

ペンテシレイアとバーサーク・オリオンの追いかけてつこを眺めつつ  
手持ちのスポーツ飲料水をひと口

正門が崩れ始めた、NFFスペシャルももう間も無く入ってくるだ  
ろう

欲を言えばNFFスペシャルと自分で米軍、魔術師達を挟み撃ちす  
れば基地内の連中はあらかた排除できる。そのためには高速移動す  
る高台ことアルビオンを回収しなければならないのだが…

『ブラックドッグ・ガラティーン捕食する日輪の角』!!』

「随分しつこいなあ、妖精騎士ガウエイン」

全て数えていたわけでは無いが両手の指では数えきれない数のガ  
ラティーンをアルビオンに撃ち込んでいるのは間違いない

マスターとガウエインのどっちかが聖杯の泥を持っていてるつての  
が妥当だろうけどいくら持っていてもここまでの連続使用で  
は余程燃費が良く無い限りそう持たないはずだ

「暫く隠れさせてもらおうよ」

力を使い切って潰れた時にまた来よう

「グギッ、ぐううあ…!!」

14 発目の宝具を撃ち終わり、とうとう膝が地につく  
効いてはいるがそれ以上にメリユジヌの再生速度が速い…!

「バーゲスト!」

医療棟から拝借したであろう車椅子にもたれかかったままの我が  
マスターレガリオ、理性を保つため宝具使用↓捕食↓宝具使用という  
かつてない戦い方によって彼の四肢は令呪の刻まれた腕を除いて欠  
損していた

「食べるんだ!僕は大丈夫だから!」

「——あぐっ」

ぞぶり

「…つくう」

もう捕食衝動を抑えている余裕など無かった、負ければ全てが無に  
返す。これまでの全てが無くなるから

伊吹山での謁見は1分にも満たないものだったがあの時の誓いを  
破るわけにはいかないし、なによりもう失うのは嫌だ…!

壊れかけた、いや完全に壊していた角<sup>理性</sup>を彼から出した内臓——大腸  
を食べて無理矢理治す

「つぶはあ…ッ『この剣は法の立証…!』」

治ったばかりの角<sup>理性</sup>を砕き、かつての仲間であり目標でもあったそれ  
に剣を振り下ろす

「ぐじゅ、ぐぎ、ギギイツ…!」

「メリユジヌ、もう——」

く

正門前にて…

「ゼエ…ゼエ…」

身体が重い…！

「クライムさ「俺はいい…！敵戦力の報告を！」

ペンテシレイアの離脱と重油に放り込まれたような体の重さにあ  
わや決壊まっしぐらだった正門前は駆けつけてきた15人の部下の  
おかげでその一瞬は防いだ。…その一瞬は。

「左より虎戦車1！右前方よりヤガ4、カリ1、アトランティス兵3  
！」

「戦車を殺れ…！俺は右だ、1秒でも早く片付けて加勢しろ！」

「了解！」

少し気を緩めば泥のように倒れそうになる身体を気力だけで動か  
し、近い敵から打ち砕く

いくら精密操作下にならないNFFウエポンだとしても15人で止め  
られる数はそう多くない、身体の調子が戻る気配もない、まだなの  
か土方…!?

G地区 オフィスビル跡地にて…

「綱さん！」

小さな手から振り下ろされた一撃が赤色の三本線となって切り裂  
き、その身体をコンクリートの地面へと叩きつける

まさか自分で自分の首を切り落とすなんて…！

「彼方…！」

「無駄だよお姉ちゃん、サーヴァントとはいえヒトの英霊がそんな傷  
を受けたらもう終わり。…ね、今のうちに戻ってきてよ」



間に合うよ。と手を伸ばす彼方の目には未だに彼女の信じる『お姉ちゃん』と『それ以外の敵』が映っている

「っ、できない…」

ほんの一瞬それを掴もうとした自分の手を握りしめて月女神の弓を構え直すそれでも彼方の信じる目は変わっていない

「じゃあ勝手に連れてくね」

気配が変わった、来る…！

ガァン

！

「あれ、まだ動くんだ」

「…下がれ、影月 遥」

手を伸ばしたまま突撃してくる彼女の腕を割って入った綱さんが打ち払う

「片手で防ぐなんて意外と力持ちだね」

え？あ…

言葉に釣られて思わず見たが綱の右手首の先が欠損しており、刀を握る左腕も少し震えていて今にも刀を落としてしまいそうだ

「綱さん…」

「下がれと言った、マスターが死んだ以上は渡辺綱という英霊に先は無」

「そうはいかないよ」

「へ？きやつ!？」

NFFボーダーの時より長くなっていた尻尾に身体がぎゅるりと巻き上げられる、苦しくは無いが力づくでは抜け出せそうにない…！

「く…」

「もう離ればなれはイヤなの、分かるでしょ？お姉ちゃんなら分かってくれるよね？」

「…強いくせに、懇願するとは随分、小心者な鬼もいたものだ」

「——うるさい」

綱の挑発で小学生のように一気に沸点まで達した彼方が彼を殴り飛ばす

「綱さん…！」

「最初から強かった奴に何が分かるの？」

「…分かるさ、鬼はまず悩まないし懇願もしない、欲しいものは考えるより先にまず奪うし悪を躊躇しない、するのは格上が相手の時だけ

お前は自分の悪を認められない、1番欲しい者物からの同意を欲しがっている小娘だ、自分を鬼だと思い込んでいる小娘だ」

綱さん…？

「——なんでも知ってるみたいなくち、やめてくれない？」

「少なくとも、お前が知らない…お前にとって大切なことをあと1つ知っている」

瞬間、さつきよりも重い一撃が彼に叩きつけられる

「グ…」

「何を知ってるかなんてどうでもいい」

「いや…知るべきだ、お前の未来に関わることだ」お前は何も分かっていない

三度振り上げられた拳が一瞬止まる

「…私何が分かってないっていうの」

「……………頼光四天王、渡辺綱のことをだ。お前は分かっていない」

…？何を――

「剣は折った、お前も裂いた、ここまで来て何ができるっていうのよ」  
「なんの、ことだ？剣も、俺も、五体満足だ」魔力供給元は無くなった  
がな

「意味の分かんないことを…」

「綱さ――え？」

彼方の肩越しに一瞬見えた彼の口元が歪んでいた、普段の彼からは  
想像がつかなくらいにんまりと笑っていた

「――くく、く、まだ気が付かんのか戯けめ…だがそれも仕方の無いこ  
と。酒呑ですら看破できんものを小娘が分かるはずが無い」

「…!?待って、おまえはだれ――」

「聞かずとも今すぐ教えてくれるわ！

『らしようもんだいえんぎ羅生門大怨起』!!」

無くなっていた筈の右腕が怪異となって彼方の身体に叩きつけら  
れ、シヤドウサーヴァントの包囲網の外へと吹き飛んだ

「こっ…の…!」

「あつ、お姉ちゃんだめ…うわっ!」

衝撃に便乗して尻尾から抜け出し、月女神の光を放つ。ただの目眩  
しにしかならないがこれで充分だった

「くう、目が…草薙、草薙はどこに」

ザッ

「あっ…」

狼狽える彼方の前に現れた1人の武士の存在は目が眩んでも  
分かつたらしく注意がそちらに向かう

「我は鬼を殺害する剣…我は鬼を燃やす焰…」

「ひ…!?草薙！早く戻ってきて、早く！」

生前と同じように己へ九字を切り、生前と同じように刀に手をかける

言葉の意味は分かっているが彼方の表情に怯えが見えた、先の戦闘や10年前の時には無かった『死に対する恐怖』を表した顔  
マスター、茨木、すまない…

鬼を斬るのに感情は必要ない、とはいえ思うところはあった。10年前彼方を仕留めていれば少なくともマスターは死ななかつたし自己犠牲を容認するような性格にはなっていないかつただろう  
結局性格が変わった理由は最後まで分からなかったが。

「な、んで…草薙がもどらないの！」

「探してるのはコレかしら？」 ヒラヒラ

「！…伊吹、童子？返して、早く！」

「悪いけどそうもいかないの。…ごめんね」

茨木童子にも悪い事をしてしまった、この世で何よりも憎いであろう俺に化けさせたばかりか身代わりにしてしまった、謝りたいところだがしたところで火に油を注ぐだけなのは分かりきっていること。  
だからこの一刀を持って彼女の望む『平穏』を…

「鱗の防護壁！首をぜんぶ囲えば——

「怨…！」

「なんで!？」

怨念の刃が鱗の防護壁を存在ごと削り取る。物質としての破壊ではなく存在として削り取られた鱗の防護壁は霧のように霧散した

アヴェエンジャー…!?

「——貴様を救うこの一振りのためだけに我が主は2画の令呪を使った、それを忘れるな。鬼を斬れ、源氏!!」

満身創痍のアヴェエンジャーはその場に留まることなく離脱、一瞬見えた苦悶の表情は腹部に突き刺さった大蛇の牙によるもの…ではないだろう

「鱗が！首が!？」

草薙は来ない、鱗の防護壁は消えた、マスターが残した最後の令呪はこの霊体からだに宿った  
今度は、斬れる

「やだ…いやだやだやだ！死にたくない！」

もう彼方には自分を迎撃しようとする意思すら無くなったように走り出した、だがその逃げ足は茨木のものには遠く及ばないヨタついたもの

「——」  
すぐさま追いついて剥き出しの素足に一太刀浴びせる

「ぐえっ」

バランスを崩して転倒しつつもそのまま這って逃げようとする彼方の前へゆっくり、1歩1歩回り込む

「許して…！殺さないで…！」

「——無理だ、お前は人を殺した。何十人も何百人も、な

ならば俺は渡辺綱として鬼であるお前を斬らなくてはならない」

涙で塗れた彼方の顔を見下ろしながら刀に手をかける

行くぞ

1センチ、2センチ、焔を纏った刃が鬼の首に沈み込んでゆく

「お、お姉ちゃ——」

沈み込んだ刃が肉を斬り進んで…

「大江山・菩提鬼殺」

鬼<sup>彼方</sup>の首を、完全に切断した

## 第102話 かなた

C地区 大通りにて…

「ぎゃあああああつ!!!」

「今のは叫び声は!?急いで茨木!」

「ええい我に指図するなアヴェンジャーのマスター!振り落としてしまうぞ!」

「…彼方」

ボロボロになった身体を遥の力で治してもらいながら声の方へ、路地裏を通って大通りに飛び出したのと同時に――

ぼてん

「ぬわ?つつお!?!」

「きやつ!?!」

「……………」

頭の上に降ってきたのは生首、それも影月 彼方の…ということ。「ふ、ふん、ようやく斬ったか!まあここまで我がお膳立てして失敗しようものなら有無を言わさず貴様の首を引きちぎるところだったかな!」

「…茨木、ミラ・ツール、それと――」

静かに自分の名前を呟く綱は…マスターを失ってそこそこ時間が経っているせいかやや疲弊しているように見える

……………

「影月 遥…」

「――彼方は沢山の人を殺した、それも全部彼女の怒りとは無関係な人ばかり…これは当然の結末、それはちゃんと理解してるよ。本当は

私がやるべきだったこと。ありがとう、綱さん」そしてごめんなさい  
彼方の首を抱えた彼女の表情からは感情が読み取れない

「悪いが同情なんてしている余裕は我らに無いぞ」

「分かってる」

「ならよい、さて綱よ？頼光四天王の1人のくせにたった一太刀で疲れたとは言わさんぞ、まだ敵は残っているからな」

消えゆくだけになった綱が相手なら惨たらしく殺すに絶好の機会ではあろう。しかしまだ戦える以上それをやれば他の魔術師や新撰組が黙ってはいまい

己の欲を優先させて格上に反感を買うのは本末転倒、世界が救われた後真っ先に潰されるような行動は慎むべきである。…今のところは、な

「主」

「あつ…アヴェンジャー。さつきはごめん」

「この我に『源氏を守れ』という命令をしたこと、気にしていない…と言えば虚言になる。だが仕方なかったのもまた事実だ、令呪の効力が効いているうちにここを離れる」抱き抱えるからこっちに。

「…うん」

……………ああ。えいづき。

アヴェンジャーどもは行ったか？…よし

「どうせ長くなかろう？幸い敵の殆どは魔性の者。消える前に1匹でも多く道連れにしてから死ぬがよいわ」

「…俺の役目は既に終わったようなものだ、そうさせてもらう」

再契約の目が無いわけでは無いが綱の魔性特效はコヤンスカヤにとっても脅威。この戦況で再契約を黙って見てるほど間抜けでもないだろう



……やむをえん

腑が煮え練り返りながらもフラつく綱を抱える

「つと…茨木？」

「我が見たところ基地正門前が最も魔性が多い、残った余力は全てその場の道連れに使い。…そこまでは運んでやる」

やめるべきだ、分かっている

今は人類史を守らなければ自分を守れない、そのためならプライドなんていくらでも捨ててやる

——いかな

とはいえあまりモタモタしていると殺意の方が上回りそうだ、さつさと投げ捨ててしまいたい

ん、そういえば

「ところで綱、草薙は回収したのか？」

野晒ししておくにはあまりにも危険な物だ、回収してキリシユタリアあたりにも押し付けておくべきだろう

「それなら伊吹童子が回収して…む」

「どうした？」

「居ない」

「誰が？」

「さっきまでその飲食店の前に居た伊吹童子が居ない、草薙は彼女が持つて——っ!?戻れ茨木！」

しかし…ああ、なんと抗い難き誘惑か

…!!まずい、あれは止めねば

「伊吹童子を止めろ遥！」

「え？」

「遺体に触れさせるなっ！」

草薙を片手にフラフラと一步、また一步と首のない彼方の遺体へ近づいて行く伊吹童子、その目は虚ろで足取りもおぼつかない

奴め、影月の血にあてられておる！

「っ『身の程知らずの——

首を置いた遥が矢を放つ

「……………ふふ」

吹き飛ばそうと胴体を狙った弓矢は腕に阻まれ、その左手首を抉り飛ばした

首を置く、という動作をしなければ間に合ったかもしれない。なりふり構わず撃つていれば阻止できたかもしれない

「…まずいな」

「冗談でないぞ…！」

すぐさま戦闘体制へと立ち戻る我と綱、だがこれはもう…！

落とされた手首を気にも止めずに残った手で彼方の遺体に触れる伊吹童子、そして辺りが光に包まれ——

『蛇神の重圧』

先ほどまで対峙していたものより更に大きい重圧が身体にのしかかる

「もう、やめて…——彼方」

切断された片腕を除いてこちら側の伊吹童子の気配は完全に消滅、代わりに出来上がったそれは光をかき消しつつ20代の女性の姿を

形成してこちらを見ておりその手には当然のように草薙が――

ゾン

「うおお!？」

殆ど予備動作無しに振るわれる草薙の一撃をすつ転んで避ける  
斬撃を飛ばしおった!

「綱――」

あの身体ではこの重圧の中避けられん!

「ぐふっ……!」

「:!?アヴェンジャー!!」

綱を庇ったのはなんと離脱したはずのアヴェンジャーであり突き  
飛ばした綱に代わって胴体へ草薙の一撃を受けていた

「――口惜しや、よりによってこの我が源氏を庇うなど……令呪に、よる  
ものだったとしても、あつては、なら――」

胴体を輪切りにされたアヴェンジャーはそのまま消滅、残されたの  
は我と満身創痍の綱、泣きながら弓矢を構える遥の3人だけ

「お姉ちゃん以外、みんな死んでしまえばいい」

「ぐう、しぶとい奴め!現代になってあんな鬼がでてくるとは!おい  
綱、どうにかしろ!」

「――鬼である以上、俺が首を斬れば死ぬはず」

「こんな時になにをぬかす!?現に生きて動いておるだろうが!」

例え神であろうと同時に鬼でもあるのなら切断し、絶命した時点で  
どんな存在だろうと生き返らせるのは不可能だ

――それなら斬り落とされた頭部はそのまま新しい頭部が出来  
上がっているあれは一体なんだ?

「…俺が斬るまで、確かに彼女は鬼の気配がした」

「綱?」

だが今日の前にいるあれは鬼のようで鬼ではない、人でもない、神でもない、魔性の気配すらも、それならば

「俺は一体、何と戦っているんだ…?」

↳

G地区 オフィスビル跡地にて…

「まずいねこれ…!」

さつきまで玩具のように振り回していた刀が異様に重い、それも自分だけではなく召喚されている新撰組全隊士にいきなり疲労の色が…

「新八「うるせえ!もう一暴れしてくる!本当にヤバいのはここじゃねえ、お前は土方んどこ行け!」

…やっぱりそうとしか考えられないか

僕ら新撰組の現界は副長が掲げた旗<sup>宝具</sup>あつてこそそのもの、状況はさっぱり分からないが今副長を救わないと満足に戦えもせず新撰組は全滅しちまう

「助けにいきたいとこだけど…」

瞬間、こつちの意図を見透かしたようにシャドウサーヴァントの増援が出現、とてもじゃないがコヤンスカヤの元まで近づけそうにない

「——そう簡単には行かせちゃくれないよな」

「どきやがれエ!!」

沖田ちゃんも戻ってこない、こりゃ本気でヤバいな…

「ふーむ、こうなりましたか」

正直あの一刀で終わったかと思いましたがちよつと…いやかなりしぶといですねえ彼方さん、居座られても困るんですけど

あちらの伊吹童子を統合したことにより神っぽくなつちやつてますし場合によつてはワタクシが手を下す必要も出てきそうです

ここから先、ザイルさんの描くシナリオに影月 彼方は出ない。必要ないのではなく出てはいけないのだ

対神兵器どれくらいありましたっけ…？

聖杯片手に尻尾を振りながら考えていると不意にその手を掴まれる

「うわあまだ動けるんです？感心しますよホント」

周囲の肉ごと聖杯を抉り取ったせいで胸部に拳大の穴が空いた土方さんが死にかけの、それでいて闘志に満ちた目でこちらを見据えている

「……………」

「そろそろ諦めたらどうですか？…なーんて言葉、あなたには意味のないのよく知ってます」

もう後がない負け戦だったとしても彼は戦う事を放棄しない、腕がもげようが足が消し飛ぼうが。勝つにせよ負けるにせよ最後まで戦い抜くのが新撰組副長の土方歳三という男なのを藤丸立香は知っている

空いた手で軽く指を鳴らし、侍らせていたシャドウサーヴァントと交換で現行兵器を呼び出す

「なので…あなたを粉々にして新撰組へのトドメとしましょう、サーヴァントとはいえ刀しか振れない人間の英霊がワタクシ相手によく

戦いました

——誇りながらくたばりなさいませ♡」

無反動砲2発、RPG—7が4発炸裂し彼の身体が屋上から投げ出され——

「——てませんね」

「……………く……」

落ちそうになりながらも片腕だけで屋上の淵にしがみついている彼の頭を踏み付ける  
「間違いありません、以前の世界も含めて…ワタクシが戦った中で最もぶとかった英霊はアナタです  
ですがたった1人でできることなどたかが知れている、沖田総司は見捨てるべきでしたねえ」

「——」

「おや？」

「……………り、……………え」

なにやらボソボソと言っているが聞き取れない  
「アナタは敵に遺言を残すタイプじゃないでしょう、もっとはっきり言ってくれませんか？」有益な事かもしれないので

「ひとり、じゃねえ」

「ふむ、そうですね」

うわあ少年マンガみたいなセリフ、まあ彼が新撰組を召喚している以上まとめて消えるんですが

たんっ

「おや、おかえりなさいませ」

「コヤンスカヤ…！」

縮地で背後から飛んでくる沖田総司を見ることもなくタイミングを合わせて蹴り上げる

「かぼっ……」

「症状はただいまも進行中なんです、動きが鈍いですよ」

吹き飛ばした沖田総司に対して警戒の姿勢をとったもの——

あれっ…起き上がってこない？…もしや今のでどこかの臓器、いつちやいました？どちらにせよすぐ消える運命なんですけど起き上がってこないのならほっときましょう（あの量の吐血が出るダメージなら動けないでしょうし）

仮に死んだふりだったとしてもその行動にはなんの意味もない

「さてお待ちせしました土方さん」

トカレフの銃口を彼の頭に押し付ける

「…ああ、本当に待たせてくれた」

「——なんですって？」

最後の意味不明な一言によってコヤンスカヤにできたほんの少し、瞬き程の一瞬の間。だがそれで充分だった

『彼』が撃ち抜いた人類最速の英霊…あれと対峙していた時は常に瞬き程の一瞬で戦局が目まぐるしく変わっていたのだ

それに比べれば逃げない、避けない、防御も攻撃もしてこない鑑を撃ち抜くことなんて——瞬き未満で充分だから

『トロイア・ヴェロス  
輝かしき終天の一矢』

神の寵愛を受けた光の弓矢が頬を掠め、無防備な鑑…玉藻鎮石に叩き込まれた

「とつとつと——まあまあ…やってくれましたね」

ど真ん中をブチ抜かれた玉藻鎮石は当然宝具として保てる筈もな

く引つ込んでしまいシャドウサーヴァント達の増援がここに来て止まった

「これは——こぶ、返してもらいますよー!」

ついでに生きていた沖田総司に聖杯を奪い返された

…新撰組ってなんなんでしょう、不死身剣士の集まりですか？

「土方さん!」

「ああ、助かったぞ沖田」少し休め

聖杯は即座に土方さんへと戻され、戦線復帰。また振り出しに戻ったことになる

「…言っただろう、1人じゃねえって」

「そうでしたね、ですが貴方が新撰組以外に託すとは思っていませんでしたよ」

戦略として新撰組以外の戦力を使うことはあってもこんな場面でアテにするとは計算外でしたし

「…俺達が生前積み上げてきたものはお前には通用しないんだろう——なるほど」

「ふふふ、あっはっはっは! 現界後の付け焼き刃ですか! それでビースト<sup>ワタクシ</sup>を斬ろうとは一本取られてしまいましたわ!」

「今のうちに笑っている、人類をお前の好き勝手にはさせん」

「いやはや、これは想定以上! 特記戦力筆頭は伊達ではありません!」

どうやら…八百長はせずに済みそうですねえ?

くサーヴァント アヴェンジャー 平景清 退去く

く神霊 伊吹童子 消滅く



## 第103話 異郷の魔術師、その後継者

C地区 路地裏にて…

「みんな…！」

もう意味が無くなった令呪本を抱えて走る

誰でもいい、早く伝えなきゃ…！」

『小娘！お前はこの事をカドックに伝えろ！ウェイバー、新撰組、米軍でもいい！』

『ここは俺たち3人で足止めする、その間に対策を練るよう伝えてくれ』

アヴェンジャー…

平景清が退去する寸前、ミラが最後に聞いた言葉は『復讐をやめろ』という到底アヴェンジャークラスに当てはめられた英霊とは思えない言葉だった

「！・ N F F ウエポン…」

どこから流れてきたのか獣人型の量産兵器が3体、狭い路地に立ちはだかるが――

「そこを…どけっ！」

令呪本を前方に投げながら最も近いヤガの銃を蹴っ飛ばし、そのまま胸部に掌打を叩き込んで2体まとめて吹き飛ばす

この10年間ひたすら鍛錬し続けた神父仕込みの八極拳を使い、立ち止まる事なく3体目を殴り倒すと同時に落ちてきた令呪本をキヤツチして前へ

…復讐やめるつもりはない、あいつを、ザイルを殺さなければ世界は終わってしまうしなにより祖父が浮かばれない

「そのためには、まずあいつを倒さないと——ぐにやつ!？」

D地区の大通りに飛び出した瞬間何かにぶつかって地面を転がる敵!？」

「敵じゃねーよ…それにしても伊吹童子のやつ、アツサリ寝返ってるじゃねえか、笑えねえ」令呪マジック本貫うぞ

あなたは——

「……………っ」ガクン

「綱さん！」

3人がかりでなんとか凌いでいたがやはりマスター不在が響いたらしく綱が膝をついてしまった

「お、おい綱！」

「俺は、いい…それよりもまた草薙が来るぞ…！」

「！」

綱の言葉で一瞬早く気付いて飛び退く

「ぐう…！我らにあれをどうしろと言うのだ…！」

宿敵であると同時に切り札でもあった綱はもう戦えそうにない、彼の宝具無しで彼方を倒す手段はあるのか…？

「おい遥！お前の力で綱をなんとか延命しろ！今綱に死なれるわけにはいかぬ！」

「わ、分かった！」

一目散に逃げたいところだがコヤンスカヤやザイルならともかく彼方が相手ではとても逃げきれない、どれだけかかろうとどこまでも追ってくるだろうし重圧もどんどん強くなってきている

「草薙」

「またかくそ……」

コンクリートに押し付けられる身体を強引に動かし何発目かも分らない草薙を避ける

「避けないで」

「ええい黙れ黙れ！」

無人の街を破壊しながらしつこく追ってくる彼方から全力で逃げ回る。もはや規格外すぎて攻撃の殆どは見切れるようなものではなく、生存本能だけで避けきっているものの、このまま重圧が強くなり続けると……

おのれ……手足の生えた山が追いかけて来ているようだ、しかも特大の暴風雨を巻き起こしながら！

「諦めん、諦めんぞ我は……！」

「……！」

「遙、もういい」

「なんとかする、なんとかするから……！」

ペンテシレイアやアタランテを強化した時みたい……！

「これ以上力を使うな、俺はもう治らない。立つことも刀を握ることもできそうにない、だから……」

「っ……」

触れていれば分かる、彼の霊基崩壊点はとつくに過ぎてしまった。仮に今から再契約できたとしても魔力が回るより先に霊体が持たず

に消える

アルテミス神殿で、やっと覚悟できたのに。やっと選べたのに。神の横槍で何もかも終わっちゃうなんて認められるわけがない

最後の最後に立ちはだかったのは妹に対する情ではなく、ただの圧倒的な暴力。単純で覆しようのないそれを前に私の心は既に折れていた

「彼方…」

「誰か来るぞ」

「え?」

自分の世界に入りかけたところを引き戻されて一瞬眩暈がしたが抑え込む

カツカツとハイヒールを鳴らして歩いて来たのは――

「バーヴァン・シー?どうしてここに「お前は殺せるか?」

…?」

「お前にとって一番大切な奴を、殺す覚悟があるのか」

さつき切断された伊吹童子の腕を持ちながら低い声で質問してくる彼女に私は答えた。『ある』と

「――分かった。機会は私が作ってやる」

「一体何の話をしてるの…?」

「……………」

4歩、遥達から距離をとって深呼吸。失敗への恐怖を1度目の深呼吸で、杖を掴みながら震える手元を2度目の深呼吸で抑えつける

…よし

「――やるか」

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公、降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

理論上、充分やれる勝負だった。触媒に関しては不安だったが丁度いい腕モウがそこに転がっていて手に入ったから

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度

ただ、満たされる刻を破却する

…今更利用したところで伊吹童子のやつが文句を言うような資格はないだろうと勝手に納得して詠唱を続ける

—— 告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に  
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

召喚陣なんて書いている余裕は無く、場所も霊脈とは程遠い最悪な場所だが幸い私の中には聖杯がある。人工呪の1つでも作る気概だったがその必要は無くなったためそちら方面の無茶に集中できる、私ならやれる

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者  
我は常世総ての悪を敷く者

母から譲り受けた魔術と杖を通じて英霊の座にパスが繋がりに、コンクリートの大地が光に満ちてゆく

…このムチャクチャな召喚をコヤンスカヤは見逃さないだろう、これで私が聖杯を持っていると連中にバレることになる。だからこれ

は最後の手段

汝三大の言霊を纏う七天、  
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ……」

眩い光と共に5秒前まで存在しなかったサーヴァントの反応が目前に現れる。クラスは……アサシン。

どうかお許しくださいお母様、ですが私には守りたい人が、守りたい場所が出来たのです。誰かのためではない、私自身の願いのために。

「サーヴァント……？こんなデタラメな場所で……？」

「いや、それよりも……この、気配は……遙、誰が見えるか教えてくれ」

50年前、命……いえ、全てを賭して私を守ってくれたお母様のように、私も守りたいのです。守りきって、また一緒に笑いたいのです  
「……………」

『ここには私以外にもお前を大切にしてくれる者がいる、お前は自由だバーヴァン・シー。』

厄災も妖精も人理も、何者もお前を縛らない。やりたい事をやるが良い、お前は……お前のために生きていいのだ。

どれだけかかってもいい、彼の元で……それをこれから学ぶのだ』

「——よく来たな、私がお前のマスターだ」

「つかんだ」

破壊の嵐に気を取られ彼方の尻尾に文字通り足元を掬われる

「この、離——もがっ!？」

玩具のように振り回されて地面に、壁に何度も叩きつけられ身動きが取れない

「ぐ、があ……！」

「しねしねしねしね」

女の形をしたそいつは狂ったように眩きながら尚も私の身体を叩きつけ続ける

……いや実際に狂っている、汗をかかず、まばたきも呼吸もしていない人に似た形をした『何か』

身体が、粉々になりそうだ……！しかし、このまま黙って死ぬるか……！

「っ……の！」

砂だか粉だかよく分からない粉末を彼方の目に投げつける

「！」

瞬間緩んだ尻尾を力一杯殴りつけて拘束を解く

「かふ、はあっ……！」

視界が、おかしい

地面に落ちたのはいいが片方、右側の視界が悪い。片目が潰れたかもしれない

「……生きておれば上等。」

余力を振り絞って這い、瓦礫の影へ

くそ、身体が言うことを――

ほんの一瞬でも身を隠せそうなああの瓦礫の影がやけに遠い……！  
ザクツ

「~~~~~!!!」

前へ前へと伸ばした手に草薙が突き刺さる

「逃げてばかりで生き意地汚い、それでも私と同じ鬼？」

「き、さまこそ……！何！つ楽しまず何が鬼か、そんな自由の無い生き方をしてどこが鬼か、笑わせ——くあつ……！」

踏みつけられた首から聞こえた軋むような嫌な音

「鬼であろうと人間側にいる以上お前も敵だ、さっさとしね」

「う、ああああつ……！！」

く、砕け、折れ——

「あらまあ、縁ない場所とはいえ名指しで呼ばれたさかい出てきて見れば……見知った顔がもうひとつ。……そないなもや纏ったおなご何してはるん？茨木」

「……!？」

まさか、そんなばかな

耳に届いたその声から想像できる人物は一人しかいない、首の骨にヒビでも入ったのか頭が動かせないがなんとか視線だけでもそちらへ向ける

く、見えぬ……！

「——だれ？……鬼？」

「そ、鬼。お嬢ちゃんと言つとる鬼。ウチも聞きたいことあるさかい、少し付き合ってくれへん？」

「分かった」

影月 彼方は姿の見えない声の主と共に驚くほどあつさりその場から離脱、おかげで我は助かったが……

「茨木童子！」

「遙、か？」



入れ替わりでやってきたのは彼方とは別の神を宿した小娘、普段の我ならばすぐにでも傷を治させようと命令するところだが首の痛みを忘れるほどに先の衝撃は深かった

「さつき、さつき声が「治療するから喋らないで！」

「痛っ！ええい、もっと優しく抜かんか！」

突き刺さった草薙を抜き取ってそのまま治療を始める遙に悪態をつく、つきたくもなる。我はこんなことをしている場合ではないのだから

早く、早く我も向かわねば…！

突然現れた鬼の少女に連れられるまま隣接ブロックにあつた無人のレストランに入る

「できれば茶室とかあればええんやけど…ま、こないなところで探し回るのも面倒さかい、ええか」

果物の乗った杯と（匂いから多分）お酒の入った杯をテーブルの上に置いた彼女は人懐っこい笑顔をこちらに向ける

聞きたいこととはなんだろう…？

「…」

「まあそんな真面目な顔せんと。一杯、呑まへん？」

「…飲む」

実を言うと結構気になっていたお酒の匂い、少し飲んでみたいという私の心境を知ってか知らずか、分けてくれるようだ

「ぐび…」

「どお？」

…！

「おいしい…」

伊吹山の実家で飲んだ酒もかなりおいしかったがこのお酒はそれよりももっとおいしい

「やろ？それ、ウチのお気に入りにんよ」

おいしい上に身体もあつたまつて気分が良い、目の前の少女がどんな鬼かは知らないが氣にいるのも納得のお酒だろう

「気分も良うなつたところで、人間ゼーんぶ殺そうとしてる話、ホント？」

…どうやらお酒以外の前置きはせず話をするらしい

「うん、本当」

「…んー、なんで？」

「なんで、ってそれは——」

「自分たちを化け物だと知らない人間達を分からせるためだよ」

「？ …いや分からんなあ、つまりどういうこと？」

「あいつらは言っても分からないのばかり、自分たちがなんなのか氣付かず、認めない。それならもう殺すしかないでしょう？」

「躰と同じだ、言葉で分からないのだから殴るしかない、殴って分からないのなら殺すしかない」

「——ウチは別に口が堅いほうやあらへんけど…どうせすぐ消える夢幻みたいなものさかい、酒の肴に小娘の本音の1つでも聞きたいんやけど」

「これが本音だよ」

「そう。…そら可哀想になあ」

少女の目元から僅かに微笑みが消えるもそもそも目の前の少女へ鬼に対する興味しか無かった彼方は気付かないまま、憐れむ言葉に噛み付く

「かわいそう？私か？」

「そ、かわいそ。人でも神でもない、せやから鬼になろうとしたんかもしれんけどアンタは鬼ですらあらへん。ただそう思い込んどるだけの小娘やから『かわいそうになあ』って」

目の前の少女は何を言っているのだろう、人じゃないのは分かっている。神の力も所詮は借り物、でも…鬼じゃないって？

「鬼や言う幼子が居る言うからどんなん思つて来てみれば…期待外れもええとこやわ、小娘」

「ちよつと…待ってよ、好き放題勝手なこと言つて」

呆れ顔で去ろうとする彼女の肩を掴んで止める

「そら小娘と違つて鬼さかい勝手もする。せん時もあるけど」

「私は鬼だ」

「…まだ言うてんの？そろそろ目え覚ましや小娘」

本当に面倒くさそうに振り払われるもすぐさま掴み直す

「…なに？」

「私は、鬼だ」

「もーそれでええから離してや、ウチが言うこと聞くこと、もうなーんにもあらへんのよ」

「あなたが無くたつて私にはあるんだ、いい？私はずっと前から人じゃなかった」

「はいはい、それで？」

「私はそれを知っていたけど他の奴らは知らなかった、だからそうい

う奴らを沢山殺したんだ。死んで当然の奴らを殺したんだ。あなたと同じように、ね」

「――」

「あなたが誰なのか、なんとなく分かる。いや知っている、あなただつて最期は卑怯な奴らに騙されて

「もうええわ、黙れ」

「――え？」

痛覚が鈍くなっていたからか、彼女の肩を掴んでいた左手が引きちぎられたのを知覚するのに数秒かかった

「あむ…ああやつぱり。小娘、お前は神でも鬼でもあらへん、どこにでもおるただの小娘や」

ただ味はウチ好みやで？と、引きちぎった断面の肉をアイスを食べるように咀嚼する鬼の少女

「なんの、なんの、つもり…？」

「そらこつちの言葉、別に小娘とは仲良しこよしでもなんでもない、何を言おうと何になりたかろうとウチの知ることやない、せやけど」

「ウ…!？」

少女は私よりも細い腕で私をレストランの外に投げ飛ばすとゴミでも見るかのような目で見据えて言った

「一切の楽しみも無く独りよがり、怒りに任せて殺しまくって『あなたと同じ』？」

鬼の皮だけ被った人間風情が、巫山戯るのも大概にしや」

「――うるさい」

私は何も間違つてない、悪いのはあいつらだ

「そうだ、間違っていない」

「間違いか、どうか、そう考える時点でおかしい事に気付かんから言うとのに」

いつの間にか2つの杯が彼女の手に戻っているが知ったことじゃない

「だまれ」

「心配せんでもすぐ終わるわ小娘、お前がおるだけでどんな酒も不味なる。去ね」

「ッ！」

逃げようとする背中へ呼び寄せた草薙を乱雑に投げつけつつ追いかける

あいつの言っていることなんて知らない、私は鬼で、神だ。

「お前も、お前も奴らの味方をするのなら敵だ、敵ならしんでしまえ！」

「もう喋らんでええゆうに、会話が噛み合わん」

「自分こそが鬼だって言うなら黙らせてみればいい、できるのなら……！」

「はあ、召喚早々不快な気分や、言われんでもすぐ何も分からなくしたるわ」

——『千紫万紅・神便鬼毒』——

## 第104話 並び立つ大江山の鬼たち

T地区 アルゴスタワー屋上にて…

「はっ、はー…はっ！」

いくらなんでも数が多すぎる

ついさつきコヤンスカヤの宝具を撃ち抜き、シャドウサーヴァントの無限湧きは終わったはずなのに…？

正直何体撃ち抜いたかもう分からない、例え自分の肉体が全盛期だったとしてもここまで多いと…

「…いや、さつきと違って数は減ってる。少しずつだけど確実に。ここが踏ん張りどころじゃないかな」

アポロン様はそう仰ってくださるが実際のところ踏ん張るのは狙撃しかできていない僕ではなく――

G地区 オフィスビル跡地にて…

「形無きが故に無形…流れるが故に無限…

故に我が剣は…無敵。」

ライダーを斬り捨て、そのまま背後のセイバーの首を斬り飛ばし、キャスターの弾幕を斬り払いながらバーサーカーの殴打を避ける

…いやいやいや数多すぎ、キツすぎでしょ。ホントに弱体化してんのコレ？

とりあえず同じ奴が復活してくることは無くなったみたいだが逆に吹っ切れたのか出せるだけ出してきたらしい

「影だからと言って侮るな、隊長格以外は3人1組で対処することを忘れないで！」

副長がコヤンスカヤを抑えている限りこいつらに連携は無い、確実に1騎ずつ仕留めるんだ！」

「ぐ、ううーくそがああ!!新撰組舐めんじゃねえぞ!!!」

指示を飛ばす山南さんと全く関係なくひたすら暴れ続ける新八を尻目に1番近いキャスターの霊核を貫く

ランサーとかライダーとかはまあなんとかなる。1騎1騎メチャクチャ強くてキツイけどなんとかなる、問題は――

「うおっ!?!」

死角から飛んできた剣だか槍だか分からん突き…いや蹴りをなんとか身を逸らして避ける

出やがったな…!!

時折出てくるエクストラクラスのシャドウがマジでキツイ…!

中でもアルターエゴとフォーリナーはどんな攻撃をしてくるかわかるで予想が付かない。例え初対面だろうと剣持ってりやいつかは斬りかかってくるだろうし弓なら弓矢、銃持ってりや弾丸持ってることも予想はつくが…

「つとー!」

大槍のような靴で滑るように弧を描き、1秒と待たずに来る2撃目、なんとか隊服を擦っただけで済んだが――

『メルトウイルス D』

その擦った1部分が溶け、大槍の靴へと吸い込まれていった。布切れひとつまみ分だったから良かったものをあんなもの喰らったらどこに当たろうが即死or瀕死だろう

「いやホント、ウチらなんでこんなのと戦わされてるんですかねえ?!」  
刀も溶かされる可能性がある以上防ぐこともできない、横殴りの雨のように繰り出される蹴りを避けながらなんとか反撃の機会を狙うが――

『神明裁決 A』

「は!?!」

訳の分からない硬直の仕方をした自分の身体に迫る猛毒の蹴り  
やべ、これ死ん――

『無明：三段突き』!」

エクストラクラス（多分アルターエゴ）の霊核を見知った剣技が突き砕き、オマケと言わんばかりに俺を縛ったサーヴァントをも斬り伏せる

「おかえり沖田ちゃん、お変わりない様子…ってワケじゃなさそうね」  
「助けてあげたのにお礼のひとつも無しですか?ま、死なれたら困るので無くても助けますが」

「副長は?」

「1人でコヤンスカヤと戦ってます

…今の私では足手纏いになるらしいです」  
「だろうね、顔色悪いことになってるよ」

いつものように軽口を吐いている彼女だが息が荒く足元も少し震えている、相変わらず無茶をしているらしい

「やっぱりそうなってます?…まあ生前にもこういう状況はありましたしそういう意味では生前の戦いよりマシでしょう!」



「いや、尊敬するよホント…」

いつ倒れてもおかしくなくらい真つ青な顔の彼女と一緒に片っ端から斬りまくる

沖田ちゃんが戻ってきてくれたとはいえキツイことに変わりはない

…副長ー、まだですかー？

「――」

「くらえ!!」

シャドウシールドーへ大楯越しに蹴りを打ち込んで体勢を崩し、そのまま頭部を吹き飛ばそうと火縄銃を――

「おっとっとー!」

桃色の弾丸がそれを遮る、コヤンスカヤを対処しようにも今度はシールドーが邪魔だ

「シャドウの中でも彼女は多くのリソースを割いた特別製…そう簡単に撃破されては赤字まっしぐら、まだまだ働いてもらわなければ♡」

「ち…」

厄介だ、レールガン阻止ができてるのはいいが…

「……………」

それに。

「はて、そんなにワタクシを見つめて…なにか?」

コヤンスカヤの戦い方、何かおかしいような…?

く

米軍基地 正門前にて…

「くそっ、何体倒せば終わるんだ!？」

獣の返り血で真っ黒になった身体を動かし敵を屠り続ける  
身体の調子は戻ったがこれでは余力より先に弾丸が尽きる…!

「無事か、アルバート中将!？」

——カドック・ゼムルプス? 魔術師に…少ないが隊の奴も居る

「ここは僕らが引き受ける、息を整えろ!？」

「それは部下だけでいい! 弾丸を寄越せ!？」

隊の奴らが居るのなら持っているはずだ

「おい、アンタが強いのは知ってるがいくらなんでも「中将! 補給です  
!」

「よし、適当にばら撒いておけ、後で拾う! 次持ってこい!？」

「了解!？」

「っ、仕方ない! 僕らも行くぞ…!？」

部下を休ませつつそのまま戦闘継続。

今度もギリギリ補給が間に合ったが基地内の物資も無尽蔵じゃな  
い

ガヂッ…

返り血が入り込んだせいかライフルの装填がせき止められる

——知ったことか

「舐めるな!？」

ヤガの顔面を掴み上げ、そのまま叩き潰す

「まだ終わるには、早すぎる!？」

さつき撒かれたライフルと弾丸を拾い体制を立て直す

この首取れるものなら取ってみろ!!

Ｃ地区 レストラン街にて：

みな、必死に戦っている  
負ければ全てが無に返すのだ、当然だろう

しかし――

「しね！」

「もう聞き飽きたわ」

世界なんてどうでも良く、ただ目の前の不快なモノを消してのんびり酒を呑みたいがために戦う者がここに1人――

「だありゃー！」

地面に広がる酒を草薙で吹き飛ばしながら鬼の少女を追い詰める  
多分あのお酒に触れるのはまずい

この上なく良い匂いのするアレは彼女の宝具だろう、鬼である彼女が鬼に有効な宝具を持っている理由はよく分からないが分からなければそれでいい、それごと薙ぎ払うだけだ

「ほのお、あらし」

分たれていた分霊ちからを統合して完全に神霊化しているとはいえ影月彼方にそれを使う術は無い（欠損部位の復元くらいはできるが）  
制御できないのではなくそもそも使い方を知らないのだ

しかしそんなことは全て終わった後で調べれば済むこと、自分の中  
にいる伊吹童子に聞けばすぐに答えてくれるだろう

今はこいつをころす――

「かみなり」

少女の逃げ道を塞ぐように：なんて調整はできないのでメチャクチャに雷を降らす。自分にも少し当たるがあんまり痛くないからどうでもいい

「駄々っ子やなあ」

が、さすがに疲れてきた。そろそろしんで欲しい

「神威抜刀――」

ただ1人屠るためだけに使うのもどうかと思っていたが面倒な思いと軽い倦怠感に押されて使うことにした

「っ――」

少女の顔色が少しだけ変わったのが分かった

これを喰らえばしぬかな？

「草薙の

「かなた！」

！

この声は――

「お姉ちゃん…？」

注意が逸れ、斬撃は少女ではなく少し横の廃ビルを粉々に斬り砕く  
大好きな姉が自分を呼んでいる、ならばそれは絶対に優先すべきこと。他の何かにかまけている場合ではない、だから――

「…?」

声の方を見ると通りの向こうに何故かケガをしているお姉ちゃん  
と…一緒に茨木童子もいる

ヘンだ、茨木童子はたくさん痛めつけたはずなのに平気な顔をして  
立ってる…それどころか調子が良いように見えるような

「見せつけたら今度は死ぬまで狙われるよ。…本当にいいの?」

「知れたこと、返り討ちにしてくれるわ」

「分かった、じゃあ——あの子をお願い」

そう言ってお姉ちゃんが膝をついた

「???なんの話?」

いったいなんのことを言っているのか理解できないまま、茨木童子  
がその小さな口を開けて

…!?まって、何するつもり——

ぞぶ

「く…」

お姉ちゃんの、月のように真っ白で無防備な首筋に噛みついた

「あむ…むぐ」

「…っあ」

顎を動かし、一口分の肉を噛みちぎって、咀嚼して、飲み込み、用  
済みと言わんばかりに姉の身体を路地裏へと投げ捨てた

「——!!!」

全くの予兆無く噴火した山のような感情のまま駆け出し、大地を割  
る勢いで草薙を鬼の頭蓋に向かって振り下ろす

が。

「これが贄巫女と言われた影月家、その末裔の肉…そうか」

「ええっ…!」

すがたが違う…これは、霊基再臨…?」

手加減無しに振り下ろした左手首は私より小さな手のひらへすつぽりと収まり、勢いは完全に止められていた

「なるほど、酒が欲しくなる味だな」

「きゃー!」

本当に同一人物なのか疑う膂力で殴り飛ばされ、今度は自分が廃ビルへと叩きつけられた。威力だけならガラディーンに吹き飛ばされた時と同じかそれ以上…

もう、見間違いでも何でもない

邪魔な瓦礫を蹴り飛ばして通りに戻る

「おまえ…!お姉ちゃんを喰ったな!!」

5秒前に殴り飛ばされたことなんか既に忘れ、怒りのままに飛びかかって草薙を振るうも当たらない、涼しげな顔で全て避けられる

「ああ喰ったとも、月女神のせいで薄れているとはいえこの湧いて出る力…魔性共に狙われるわけよのう」

得意げにしながら尋常じゃない速度と重さの蹴りを叩き込んでくる茨木童子、これ以上無いと思っていたが怒りの炎がさらに燃え上がる

「くき、く、ゆ、ゆ、ゆゆるゆるゆるゆる」

もう制御しようとも思わなくなった力が雨に、雷に、風に変換されて周囲に拡散し、大地を揺らす

「ゆるさないぞ茨木童子!!!」

「お前がしんだってゆるさない！  
角をおつて、てあしちぎつて、なかみひきずり出して、泣きわめいたつてゆるさない！

何回でもころして、何回でもよんでやる！霊基がすり切れて無くなるまでゆるさない！かくごしろ!!!」

『ポーションコレクター百花繚乱・我愛称』

「えぼつ…!?…く、ああ?」

生前に何度か見た絶技によって彼方の腕の骨が抜き取られ、草薙をあらぬ方向に取り落とす

「よそ見、しとる余裕あるん?」

「あああつ!!」

ぶんぶんと骨の無くなった腕を振り回す彼方をあしらい、私の隣に彼女が立つ

やはり、見間違い聞き間違いなど無かった

「会えて、会えて嬉しいぞ酒呑!ううつ…」

なぜ、どうやって、そんなものはどうでもいい。あの酒呑が、今こうして隣にいる事実が、ただただ嬉しい!

「はいはい、話すんも泣くんも呑むんもあと。…まずはあれ、片付けよか」

「ずびつ…うむ、うむ!!」

「うつとおしい…!じゃまじゃまじゃま…!いますぐごろす!しなす!!」

…っふ

「今の貴様が、我らをか?…っふ、くっく」

最早恐れる必要は無い、こいつが何者でどれだけ強かったとしても、こうして2人揃った以上勝る者など存在しないのだから

「やってみよー!影月 彼方!!!」

まあ不可能だろうがな!



## 第105話 騙る少女の行く末は

C地区 レストラン街にて…

「あああああ!!!」

「おおおおお!!!」

激しく殴り合う、いや茨木童子が一方的に殴り続け、避け続けている。アサシンも攻撃してはいるが怒りのあまり眼中に入らないのか防ごうとすらしていない

有効打になり得そうな酒の宝具もあいつから噴き出す魔力の嵐で全部吹き飛ばされていて届いていないようだ

令呪のブーストをかけるか？だがもし仕留め損ねたら綱アイツの二の舞だ

(心配せんでええよマスターはん)

アサシン…？

と、こっちの考えを読んだのか令呪本を通してアサシンの声が聞こえる

(もうすぐ終わる、後始末はよろしゅうな)

「——なるほどな」

どうやらアサシンにも分かっているらしい

「シーさん…？」

「バーヴァン・シーだ、次そんな腑抜けた呼び方したらぶっ殺すからなあと遥、お前の出番はまだ終わってねえ」

齧り取られた部分の治療をしつつ伝えるべきことを頭の中で簡単に整理してから伝える

「…今度はあっちの鬼の方にも食べさせらつてこと？」

なにを早とちりしたのかアサシンにも自分の肉を喰わせる気らしい、これだから影月家の奴はムカついてしょうがねえな

「違えよマヌケ。お前も影月家の人間だったなら多かれ少なかれ伊吹童子の呪いを受けていたハズだろ

…どうやって解いた？」

60年前、伊吹山という特異な環境だったとはいえ影月に掛かった呪いはお母様でも解けなかったが目の前のコイツにはそれが無い、多分鍵になるのはそれだ

「呪いは、確か——」

「あううっ、うう〜っ！」

こっちはもうクタクタなのに目の前のコイツは全然平気と言わんばかりにひたすら殴りかかってくる。抜かれた骨を再生する暇も無い

「ふははは！緩い！緩い！緩いぞオ！そんなものか影月 彼方！」

「ちよう、調子に乗るな！」

全身から魔力を放出し手当たり次第に吹き飛ばす。これのおかげで酒の宝具は私に届かないが大したダメージにはなっていないようだ

「な、なんで…！」

この鬼はお姉ちゃんの肉を食べて強くなった、それは間違いない。しかしいくら強くなったところで殴ることしかしてこない鬼に負けるのなんておかしい

「はふ、はあ、はっ」

なんだか、へんなかんじ、この気分、どこかで…？

「下がつとり茨木」

！ また酒の宝具——

「わっぷー！…え？」

手を振った風圧で吹き飛ばそうとしたものの思ったような力が出ず、もろに酒を受けてしまった

「え、え？…え？」

「中身が乳臭い小娘だったんが悪かったんかなあ、えらい時間かかったわ」

蕩けそうな快感が全身から力を奪い、気を抜けば眠ってしまいそう  
だ

「ど、どうして??？」

今食らったから力が抜けた？ちがうちがうちがう、力が抜けたから  
宝具を避けられなかった！

「宝具は全部吹き飛ばしたのに！」

「いややわあ、小娘うちの杯でさつき飲んだやないの」

さつき…？あ。

確かにさつきレストランの中でお酒を飲んだ、まさかあれも宝具…  
!?

「だました…！」

「騙す？鬼相手に何を期待しとるん、だいいち人間でも『今から毒飲んでくれ』なんて言う奴おらんやろ、おつかしいわあ」

「んぐー！」

まともに動けない私へ酒呑童子は更にお酒を飲ませてくる  
おいしい…ね、むい…

フラフラの身体を殺意でなんとか制御しつつ草薙を杖代わりにバ  
ランスを取る

「ふー…」

「ま、そんだけ飲んだら動けんやろ、うちだつて動けんくなつたんやし  
茨木。…この小娘、どつか吹き飛ばしてくれへん？」

もう関心は無いと言うばかりに杯片手に酒呑童子が下がる、そして

「茨木、童子…！」

「貴様がなぜ負けるのか、特別に教えてやろう」

どうやらもう勝つたつもりでいるらしい  
…ふぎけるな

こいつはお姉ちゃんの肉を喰った、ゆるせるものか、ゆるせないゆ  
るさない、なにがあらうと

「おまえだけはしね…！」

『フェッチ・フェイルノート  
痛幻の哭奏』

「ぴきやつ」

怒りと殺意で強引に草薙を振り回そうとした瞬間、突き破るように  
生えてきたよく分からない棘が身体の内側から自分を串刺しにした  
お酒のせいかわりも無い、だが礫にされては痛み以前に動けない

「前置きとかどうでもいい！トドメ刺せ！」何するか分かんねえぞ！  
あいつは…

異郷の魔術師のむすめ…？もしかしてアサシンを喚んだのは――

「ええい空気の読めない魔術師め、手出し無用だぞ！貴様が酒呑を召喚してなかったら八つ裂きになっているところだ！」

「…！」

魔力の流れが変わった、宝具がくる…！――あ、あれ？

「…貴様の敗因を教えてやる」

いつの間にか再生の力も、鱗の防護壁も、声すら出ない

燃える右腕、いや両腕を携え茨木童子が歩み寄ってくる

「それは貴様が『人間』である故よ」

「…っ？」

どういう――

「見るがいい、恐れるがいい！今一度、真なる鬼の姿を見せてやろう！十を数え、骨となるがよいわ！」

両腕が激しく燃え上がる、だがさっきのように巨大化はしていない

「ひとつ！ふたつ！」

1撃目が顎を下から掬い上げ、続く2撃目が私の身体を空中に追放する

「みっつ！よっつ、いつつ！」

空中できりもみ回転しながら吹き飛ぶ身体に追いついた彼女の灼熱の拳が地面につくことを許さない

「むっつ、ななっつ！」

だが当の私には地面に戻ろうなんて考えはその時なかった

――人間、私が、人間。

「やっつ！このっ！」

最初の一撃から2秒も経っていない内に叩き込まれ続けた炎の連撃、小柄な女性の身体の中で行き場を失った灼熱が至る所から漏れ出している。そんな中でも

私は――

「矮小な人間の分際で！鬼を語るな小娘え！」

『おおよやまだいえんぞ』  
『大江山大炎起!!』

10発目の攻撃の瞬間、身体の中に押し込められていた熱とエネルギーが一気に膨張し全身から炎を吹き出しながら吹き飛ばされる。ここまでされても痛みは無い、故に落ち着いて考えることができたんだ

『人間』という言葉の意味を――

「草薙は貴様には過ぎた宝物、鬼らしく略奪させてもらうぞ」

静かな神秘に包まれた草薙を拾い上げ、既に見えなくなった影月彼方への勝利宣言。

∴そしてこの勝利の影響は他の戦場でも出始めており――

∴

G地区 オフィスビル跡地にて∴

「山南さん報告が！大蛇の包囲網が全て∴」

――よし綱さんがやってくれたみたいだ

「大蛇対応の隊士全員を呼び戻すんだ！戻ってくる彼らと僕らでシャドウサーヴァントを一掃する！」

「っしやあ！行くぞおい!!」

アヴェンジャー不在によって戦力を分割せざるを得ず、劣勢にあった戦局は7体の大蛇消滅と共に完全に逆転。

あらゆる時代、世界から集められた万夫不当の英霊達と言えど今はただの操り人形であり、旗の元に集まった剣士たちには及ばず確実に数を減らしていったのである

「――ふむ」

彼方さんが死にましたか、予定通りとはいえまさか綱さん以外にアレを殺せる存在が出てきたのは想定外でした

妖精騎士トリスタン…いえ、魔術師バーヴァン・シー、彼女をモルガン陛下のオモチャとばかり思っていたのは間違いだったようですね

「うおおおお!!」

「――」

マシユさんを吹き飛ばした土方さんが好機とばかりに特攻してくるのを避けつつグレネードランチャーを撃って距離を取る

それにしても聖杯持ちだったとは…直接見たわけではありませんがここまでの無茶苦茶を可能にするにはもう聖杯しか無いでしょう

おそらくこの世界の物ではなくモルガンさんが作ったもの…

なんとしても回収したいところですがタイムリミットが迫っている

「これは…ちよつと無理そうですね」

空を見上げ、いずれ現れるであろう場所を見ながらコヤンスカヤは1人呟いた

く

C地区 レストラン街にて…

「――勝った、のだな?」

もう起き上がって来ない、であろうな?

実を言うと内心少し、本当に少しだけアレに対する恐怖が残っているものの4つ程ビルを巻き添えにして吹き飛んだ彼方にその気配は無かった。どうやら今度こそ死んだようだ

「よ、よし……よし!ふっ、思い知ったか!我らの力を!」

昂っていた霊基状態を元に戻す

「おつかれさん茨木」

「酒呑!……もう何度助けられたのか分からぬ、改めて礼を言う」

本人は否定するだろうが生前から何度も何度も酒呑は我を助けてくれた。……まさか現代で巡り合うなどとは思っていなかったが

「ええって、うちも茨木のお陰で現代で美味しい酒、呑めそうやし」

「2人とも……怪我は無い?」

若干フラフラの遥が路地裏から出てきた

「我らを誰だと思っている、あるわけなからう!……それより貴様の方が酷い顔をしているぞ」

女神……アルテミスとやらの力を今まで休みなく使い続けてきたのだ、なんの神かは知らんが人の身に過ぎた力というのは分かる

「ホント……?あつ……」つと、少しは足元見ろマヌケ、コンクリートとキスするつもりかよ?」

倒れかけた彼女を子猫をふん捕まえるように掴んで支えるバー

ヴァン・シー、隠してはいるようだがこっちも限界が近そうだ

「ありがとう」

「勘違いすんなよ。……まだ終わってないからな」



「…うん」

どうやら残っているシャドウサーヴァントとNFFウエポンと戦うつもりらしい、あれでは足手纏いになりそうだが…

「――茨木」

「ぬ!？」

聞き覚えのある忌々しい声…!

「綱か、まだ死んでおらんかったとはな」

こつちもこつちでミラ・ツールの肩を借り、足を引きずってこつちに來たらしい

「綱さん」

「…ここがいい、離れていてくれ」

文字通り足から崩れそうな死に体をコンクリートの壁にもたれかかる彼は…あと1分もあれば消え去るだろう。…その死にかけの男が今更何の用か？

「そして…酒呑童子、今回は「礼言うためだけに消えかけの身体引きずってきたんとちゃうやろ？礼が欲しくてやったやんやないし早う用件言っとき」

「…その通りだ、見ての通り俺はすぐに消えるだろう、これ以上この戦いに貢献できそうにない。だから『代わりに戦って欲しい』…ってこと? いややわ、断る」

あつさりと一刀両断する酒呑童子だが綱も綱で『予想はしていた』といった表情

しかし出来ることがあるのならやらずに終わるのは間違いだ、武士としての責任感もそうだが何より己のミスで一般人とそう変わらなかつたマスターを死なせてしまったことも後押しになっているだろ

う

「我もだ！断固断る！」

「…そうか」

…とはいえ彼女の力を借りるに値する対価を持ち合わせていない以上、交渉は続かない。こればかりは諦めるしか無いだろう

「ただまあ…武士の代わりとしてやなく鬼としてなら、木っ端の十や二十、片付けてやつてもええ」

「酒呑!?!」

「酒呑童子…」

「興味無いとはいっても折角現界したさかい、戻る前に適当な肴見つけて酒を呑んでもええやろ。…至る過程で出た邪魔物は、なあ?」

どうやらあと少しだけ戦ってくれるらしい彼女の言葉、現界時から殆ど表情の変わらなかつた綱の口元が僅かに安堵の角度に吊り上がった

もちろん相手は鬼だ、気まぐれに攫い、犯し、喰らう悪。トドメに自分はもう何もできない、彼女が悪事を働いたとしても止める役目は他に押し付けることになるだろう

「ありがとう」

だがそれを推してなお、一時だけとはいえあの酒呑童子が味方に付いた。彼方が倒れた今、八方塞がりだった戦局は大きくこちらに傾いたはずだ

この場で唯一彼女の实力を知る人間である綱は、生前ではあり得なかつた鬼への感謝の言葉を口にした

」  
茨木にも声をかけようかと一瞬思ったが：俺が何を言ったところで彼女にとつては不快でしかない。このまま黙って「おい綱、我への言葉は無しか？」

そういうわけにもいかないらしい

「：お前と酒呑童子、バーヴァン・シーの機転で俺達は救われた。ここに  
にいる者だけではない、人類全てが」  
「うむ」

比喩でもなんでもない、ここで彼方を止めなければ地上にいた米魔  
術師連合軍は全滅。結果人類の未来は早々に絶滅へと確定していた  
だろう

「だから」

「だから？」

礼を言ったところで茨木には火に油だ、だが酒呑童子の時と同じく  
彼女に返礼として返せる物は無い、だから。

「——死ぬな、生きろ」

「んな！貴様がそれを言うのか!？」

鬼か否か、それを決めるのは出生ではなく生き方だ。どんな動機で  
あろうと彼女は10年間、米軍内で人間を守るために生き、戦ってき  
た。ならば彼女は『鬼ではない』のだろう。

生前に犯した罪は消えない、反英霊の彼女だ。しかしこの10年、  
守った分だけでも報われて欲しいという願いを込めてこの言葉を。

」  
↓

当然怒り狂う茨木童子、もう目も見えず聞こえないが：少し、悪い  
ことをしたな…

くサーヴァント セイバー 渡辺綱 退去く

「ええい待てー！まだ終わっておらんぞー！綱ア！

…おのれ、勝手に死におって！」

「茨木」

最後の最後で言いたいことだけ言って逃げられ、かなり腹の立っている茨木だったが唯一尊敬する彼女の言葉で我に帰る

「む、すまん酒吞」

「ええつて。で、これからどうすん？」

「？ どう、とは…」

「うちは酒吞みに邪魔なりそうな木っ端を潰してくるつもりやけど…来る？…残る？」

!!!

生前と変わらぬ蹂躞の誘いに怒りなどあらぬ空へ、特に差し出されでもない酒吞の手を握り締めて答える

「勿論！酒吞と共に行くぞ！」

「そ。…そんなら久しぶりに、2人で行こか」

「うむ!!!」

何を考えているか分からない酒吞童子と嬉しさが隠しきれない茨木童子が崩壊した街を駆けて基地の方へ

「つたく自由な連中だな、アタシも人のこと言えねえけど」

杖に少しだけ体重を任せながらバーヴァン・シーが呟く

正直今すぐ倒れ込んでしまいたいがまだ終わっていない、まだやるべきことが残っている

「ミラ、お前はそこら辺に隠れてろ。アヴェンジャーが死んだ今お前が前線に出てくる意味も無くなったしな」

「え、でも「言つとくがにわか八極拳で戦おうなんて考えるなよ？」この連中はどいつもこいつもお人好しばかり、ピンチの奴は放っておかない

…下手なことをして敗因を作りたくはねえだろ？」

キツイ言い方だったかもしれないがミラは年齢の割に周りがよく見えている。少なくとも上司を信じて全く疑わず命賭けてる米軍よりは冷静だからこれで良い

「分かった」

「よし…行くぞ遥」

「うん」

互いにボロボロの身体を支え合って基地、とは反対方向へ歩き出す

影月彼方に、眠りを。

## 第106話 はるか

米軍基地 正門前にて…

「ふははは、ははははは!!どけどけ人間共!巻き込まれても知らんぞオ!」

拮抗状態にあった正門前の戦場は突如現れた茨木童子並びに謎のアサシンにより文字通り崩壊。そのまま滝を登るようにNFFウエポンの群れの中を逆走してコヤンスカヤと新撰組が戦っているG地区へと向かっていった

「嵐みたいな2人組だな…ウエイバー、どうなってる?」

『影月彼方と大蛇の反応が消えた、今お前達を救ったのは恐らく彼方を抑えていた戦力だろう』

ただ現地にハルカとバーヴァン・シー以外の魔力反応は未だに無い…』

「…そうか」

セイバーのマスターはコヤンスカヤにレールガンで撃ち殺されたらしく、単独行動を持っているわけでも無いセイバーは恐らく生きてはいない、また彼方から感じた先の異常なパワーアップも伊吹童子が取り込まれたのなら説明がつく、アヴェンジャーとミラは…ここからでは分からないな、生きているといいが

「休んでる暇は無い…!隊を再編、基地の守りを固める!残っている脅威はアルビオンとオリオンだ

ウエイバー、アルビオンに有効打を与えられそうな手段を探してくれ!土方達が戻るまでここを死守する!

カドツク、俺の部下を頼む!」

あれだけ戦い続けた後でどこにそんな気力があるのか、アサルトラ

イフル片手にクライムが基地内へと駆けて行く

「中将……お、俺達も——」待て、お前達は医務室行きだ」少し休め立ちあがろうとした兵士の肩を抑えて止める

「ぎっ……痛っ……！」

「そんな状態じゃ足手纏いだ、休んでろ」

改めて再認識するが米軍、特にクライムの直下部隊は彼の分身みたいな連中が大勢いる。魔術師にも多少狂ってる奴は居るが——いや、居ないな。他人のために躊躇なく自身の命を削れる奴は魔術師に居ない

見習うべき……ではないだろう。およそ彼の部下には何か人として大切な物が欠落している、中心に居るのは勿論クライム中将だろう  
「アスクレピオスが『病氣』だと言い切った以上、まともじゃない……」  
「? 何の話ですか?」

「なんでもない、それより死傷者の数と度合いの確認をしてくれ。応急処置しつつ医務室に向かおう」

今も残っているといいが……

G 地区 アパート屋上にて……

「……はあ、やっぱり足りませんよねえ」

破壊されたレールガンを捨て、超至近距離での銃撃の応酬を繰り返しながらコヤンスカヤは呟いた

『時間』が来たのである

「誠に残念ながらこちらの戦場はワタクシらの敗北になりそうです」  
「……っ? なんの話をしてやがる」

お前まだまだやれるだろうが、と言いたげな土方さんを無視して全シヤドウサーヴァントを撤退させ、NFFスペシャルは即時再生のみ停止。退却の時間稼ぎにはこれで充分です

「本当はもつと色々考えて戦うつもりだったんですがあなた方がみーんな戦闘狂ばかりで全部いらなくなってしまうました」  
はてさて良いやら悪いやら

「…もしも慎二さん？ええ、彼方さんが死んだ以上は残るべきでは無いでしょう。撤退です」

これ以上潰しあったところでもう利は無い、タダ働きなどごめんである

意外なことに土方さんからの引き留めや質問の類は一切なかった。こちらの動きを怪しんでいるようですが…まあ辿りつくことはないでしょう

「では皆さま、ごきげんよう♡」

『単独顕現 EX』

「……………」

コヤンスカヤは本当に撤退したらしい、意図は分からないが余力が尽きたということだけは絶対に無いだろう

「…考えるのは後だ」

今は残存敵戦力を潰すことを最優先、無駄死にを減らすべきだろう  
無人となった屋上を後に、土方歳三は仲間の元へと合流。基地方面より現れた2騎のサーヴァントと共に残ったNFFウエポン殲滅にかかった



米軍基地 医療棟近辺にて…

「くそっ、時間切れか」

先程までその場に居なかつたはずの男の声、半狂乱になりながらもその方向に向けてガラティーンを薙ぎ払う

「フーッ！フ、ヴ…！」

理性角どころか全身までバラバラになってしまいそんな感覚を抑え付  
けながら前を見る

間桐、慎二…？

「おめでどう、キミたちの勝ちだ。ただ抑止力に呼ばれて出てきただけのサーヴァントには無い『守るべき物』があつたお陰でかな？

とにかく僕らは撤退するよ」じゃあね

さつきまでの凶暴性はどこへやらアルビオンは借りてきた猫のように大人しくなり、バーサーク・オリオンと間桐慎二を乗せて離脱。周囲はあつという間にこれまでの平穏を取り戻した

「が、ぐ…！れ、がりお、さ…！」

車椅子の上の彼にはもう右腕と頭を繋ぐ僅かながらの胸部しか残っていない。僅かずつ再生してはいるもの——

だめだ

いくら泥の魔力で不死になっていたとしてもこれ以上捕食すればそもそも再生する身体が無くなってしまふ

抑えろ、抑えるんだ。私は妖精騎士、『後を頼む』と陛下から託された最優の妖精騎士だ。黒犬じゃない

身体が勝手に、虫の息の彼へと吸い寄せられて行く

「ああっ…！」

拒絶してくれ、だめだと言ってくれ、理性が保たない。

折角守り切ったのにこんな仕打ちは

「逃——」

彼の身体に手が触れる

「——ああ」

なんて美味しそうな「オラア!!!」

!!??

普通の人間なら粉々になるような一撃に吹き飛ばされた

「バー、ヴァン・シー……」

何かの魔術を使ったのか、もしくは彼女が無事だったことで安心したのか。少し、ほんの少しだけ理性が戻った。…気がする

「まったく、危なかったな。とりあえずお前の食欲はあたしが代わりに抑えてやる。いいな？妖精騎士ガウエイン」

…どうやらかつて陛下がしてくれたのと同じようにギフトを使って抑えてくれるらしい。彼女曰く15分も保たないらしいが魔力さえあればレガリオさんが再生しきるのは不可能じゃない

「他の、戦場は……？」

「礼の一つも無えとはそれでも騎士かよ？…まあいい、影月 彼方は死——いや排除した。コヤンスカヤもこのこと同じように撤退し始めた

あたしたちの勝ちだ。…今のところはな」

——そうか

犠牲が出ている以上手放しには喜べないが…そうか、勝ったか

「よかった…む？」

安堵の息を吐きながら寝そべったままの身体から力を抜いて、ふと気付いた

「太陽が…2つ…？」

）

予備司令室にて…

「影月彼方の反応消失。大蛇も消滅。

またコヤンスカヤ、並びに残存していたシャドウサーヴァントの完全撤退を確認。バーサーク・オリオン、間桐慎二、アルビオンも同様。残っていたNFFウエポンは新撰組と茨木童子、詳細不明のアサシンによって撃滅されました」

「正体不明のアサシン、か…分かった。安直に考えたくはないが味方だという予想が合っていることに期待しよう。

謎のアサシンについては新撰組に一任、司令部の人間でH O P E ボーダーとの通信復興。それ以外は負傷者の手当と生存確認だ

「急げ、まだ戦いは終わっていない」

「はっ、ただちに！ベルベット参謀長！」

…慣れないな

）

D地区 街跡にて…

バーゲストのただならぬ気配によりバーヴァン・シーが彼女を救うために離脱したのは幸運だったかもしれない

最初の一撃で粉々になったD地区の街はもはや瓦礫すら無く、この場所だけこの世から削り取られてしまったかのような更地が広がっ

ていた

人も動物も植物も、文化の欠片すらない更地を歩いてゆく

「やっぱり、居た」

自分と瓜二つの顔をした、それでいて別人の彼女。影月 彼方が倒れている

鼓動は無い、呼吸もしていない。間違いなく死んでいる彼女の身体が少し動いている

伊吹山山頂で見たようなケガレが欠損した足を治し、抉れた内臓や燃え尽きた眼球を治そうと蠢いている

「……………」

もしあれが影月 彼方という人間だったのなら、恐らく伊吹童子もここに居ただろう。だが霊基は消滅、力だけが残った

神でも人でもない、渡辺綱が首を斬った瞬間に鬼としても既に死んでいる彼女の正体は――

「おや、こんなところで会うとは奇遇ですねえ」

「――コヤンスカヤ」

撤退したと思っていたがコヤンスカヤもこっちに來たらしい、目的は…彼方の回収だろうか

…ここまで来て邪魔されるわけには行かない

「まあまあそんなに身構えないで下さいませ、ワタクシはただ彼方さんの死亡を確認しに來ただけ。少なくともこれ以上ここで戦うつもりはありません。…それよりもアレ、いったいどうなっているんです？」

「どうやらコヤンスカヤは分かっているらしい、それもそうか。ついでさつきこうなったのだから」

「彼方は、もう死んでる。でも伊吹童子が影月家に掛けた呪いは消えてない」

目印として影月家に染みついた神の呪い。私のはアルテミスちゃんに打ち消してくれたけど彼方のは違う

「打ち消せるほど強い加護か、もしくは影月家が潰えない限りこの呪いは終わらない。これまで影月彼方として存在していたのは影月彼方の意思を持った『呪いそのもの』なんだ」

コヤンスカヤの用意した空っぽの肉体に『要らないもの』としてザイル・ニツカーが吐き捨てた『人への殺意』『神秘』『呪い』『影月彼方』…それがここに居る彼女の正体「ワタクシも知らないことを…」

当然だ、変わったばかりというものもあるがこればかりは実際に呪いを受けた人間にしか分からない。実際呪いに引つ張られるカタチで鬼化していたし。

「それで彼方に何の用？死んだことを確認するだけならわざわざ来ないでしょ」

「いえ、ホントに確認するだけで、はい」

『感知した結果死んでました』では感知できない者にとっては不十分なんですよ。

業務報告というものは受ける側が納得する方法で調べた情報でなくではなりません。…それにほら、実際今動いてますし」  
「…そう」

意外と仕事人なんだこの獣…

ひとまず戦う意思が無いことは伝わったので一安心。無情、冷徹で

あれど約束を破る人物で無いのはNFFボーダーに乗った時から知っている

「今度はこちらから質問をば。…何をするおつもりでここに？」

「それは…」

——別に、話してもいいだろう

「彼方を、完全に殺すため」

「具体的には？」

「彼方に憑いてる伊吹童子の呪いを私の中の月女神の力で打ち払う。私の呪いは月女神の加護で打ち消せたから出来るはず」

「ふうむ」

へ  
邪魔はしないでね、と釘になるか分からない言葉を刺して彼方の元

…意識は、無いみたいだ

話したいことがあった気がするし、意識が無くて良かったと思って  
もいる。しかしここまで散々選択を後回しにしてきたのだ、どちらを  
望むにしても今更虫が良すぎるだろう

「解呪、開始」

かろうじて人の形を保っている彼方を抱き抱える

大丈夫だ、できる。10年前を思い出すんだ

月女神の力をそのまま月光に変換するようなイメージ、ゆっくりと  
暗い部分を、影になっている部分を光で塗り潰すように

「ギツ、ガギ、ギャアアアアッ!」

「うわっ!なんですかこれ!」

「ここにいる彼女は呪いそのもの、私がやろうとしてるのはそれを消

し去ることだ。…有り体に言えば私はこの子の心臓を握り潰そうと  
してることになる

我慢して彼方…！楽になれるの、もう誰も憎まなくていい！憎まれ  
なくていい！今度は一緒だから…！」

再生しかけのボロボロの肉体では流石に抜け出せないらしいがそ  
れでも力の限り暴れ、必死になってもがく彼方

速く終わらせないと…

「っ…深すぎる」

だがそう上手くもいかないらしい、私の時は上手く行ったはずの解  
呪ができない

どうして…？アルテミスちゃんの霊基を貫った時どうやって呪い  
を解いたのかの記憶も貰っている。方法は合ってるはずだ

言葉にするのは難しいが『月の光で打ち払う』という手段は間違っ  
ていない。それなのに何故…？

先の見えない洞窟をひたすら進んでいる感覚、それがいつの間にか  
足踏みだけしている感覚に変わっていく

呪いを抽出する？…いやザイルがやったようにただ追い出すだけ  
ではダメだ、消し去らない限り呪いのしわ寄せ彼方に戻る。でも、ど  
うしたら——

「助言、いりますっ？」

ふと緊張感の無いコヤンスカヤが口を挟んだ

「お金なんて持ってないよ」

「お金はいりません、しかしワタクシ側の誰も彼方さんを殺しうる手  
段を持っていないのですよ

ワタクシ達にとっても影月彼方は邪魔なので利害の一致、というや  
つです」

もはやコヤンスカヤ達にとつても彼方は邪魔者らしい。…もう、居場所はないらしい

「――教えて」

返答は早かった。ピーストと取引したら周りがなんで言うかなんて考えている余裕はないしあつたとしても考えない。

本当に守りたいものを守るため、他の誰かを気にして迷うのはもうやめたんだ

「遙さん、貴女の呪いを解いたのは貴女自身ではなくサーヴァントアーチャー…オリオンに着いてきた月女神アルテミスですね？」

「そうだけど」

「なら原因はそれです。霊基を譲り渡さねばならぬほど力を使ったのなら少しでも月女神本来の霊基に戻す必要があります

具体的には月女神の力を行使するにあたって人間という不純物が多すぎるんです」

…！

それは考え付かなかつた、でもそうだととして

「そんなの、どうしたらいいの？」

10年間ずっと内包してきた月女神の霊基はもはや身体の一部になつている。今更元に戻すのは難しい

「考えている通り元に戻すのは不可能。しかし近い形に掘り出すことは可能です」

「余計な前置きはいらさない、どうしたらいいの！」

未だ苦しみ続けている彼方の前に感情が昂る、方法があるならさつさと答えてほしい

「ふむ、では結論から。遙さん、可能な限り貴女から人間としての部分



を削ぎ落とします」

！

「靈基復元は不可能、ですが不純物さえ無くなればかつての月女神と同じ力の行使が可能なはずです」

「削ぎ落とすには!？」

「うわっ、どうどう。落ち着いてくださいまし。自分で自分を削ぎ落とすなんてできませんよ、故にワタクシがヒトとしての貴女を削ぎ落とす——いえ、噛み砕きます」

ナイフで縦に裂いたような金色の瞳が怪しく私の眼を見通す

10年前もたしか——

「ワタクシ、こう見えてビーストですので♡ヒトだけ殺すことなら右に出る者は——居るかもしれないですけどそうそう居ませんので♪」

「…………分かった、やって欲しい」

「わあ即答、少しは危機感持つと思いましたが」

おちやらけた様子のコヤンスカヤだが商人としてか、はたまた揶揄うためか言葉が続ける

「逆恨みされてもイヤなので言っておきますと成功率はかなり低いですよ？影月遥という器が壊れたらアウト、月女神の靈基が呪いに押し負けてもアウト、妹を救いたいという想いが砕かれてもアウト、その他もろもろ失敗の要因になる要素は多く予想されます

——後悔、しませんね？」

恐らくこれが私の、影月遥としての最後の選択だ。だが何度も何度も先延ばしにしてきたこれまでとは違う

「しないよ。…やって」

「ふむ、かしこまりました♪…では。

前触れなく発生、肥大化した狐の尾が私と彼方を包み込む

月明かりの導くまま、その手を伸ばした――

## 第107話 だいすき

「とめたいと思っただけだ。それでもとめられなくて

終わったはずの報復を  
果たしたはずの復讐を

延々と繰り返し続けている

分かってる、ひどい八つ当たりだ。  
でもこれをやめたら私は何を目標として生きればいい？

死にたくない、だが生きたくもない  
姉に嫌われたくない、でも目的を失いたくない

これだけ無関係な人たちを殺しておいて無責任で虫のいい話なのは分かってる

でも私は幸せになりたい。ハッピーエンドがほしい

——もう殺したくない

「皮肉にも姉以外で私を人間だと認めてくれたのはあの2人の鬼だけだった。もつと早く彼女達と会えていれば、結果は違ったのだろうか」

「…今さら、どうにもならないよね」

人間どころか鬼としても生存できないような欠損を負った身体、それを主を失ったケガレがしつく治している

もう自分ではどうにもならない力の塊を、まるで第三者が交通事故を遠くから眺めるように見ていた、その時

——た

「……………？」

普通なら聞き逃してしまいそうな小さな音。どこかの誰かが針でも落としたような小さな音がケガレの向こうから聞こえた気がする

気のせい…？

「——な」

いや、確かに聞こえる。断続的に削り取るような音が。少しずつ大きくなりながら聞こえてくる

「——なた」

声のようなものも混じっている。くぐもつてとても聞こえづらいが確かに——

「つく!!つア…!」

全身が硫酸の海に取り込まれてるように熱い、獣の尾に生えた目から覗く捕食者の視線が視神経を通って脳を焼き、獣の唾液が喉を通って内臓の中で針山がのたうちまわるように跳ねている

目元から、耳から、鼻から、口から10年前より酷い量の血が出ている。  
記憶も曖昧になってきた。苦しみのあまりか、実際に頭の中を噛み

砕かれているのはわからない

私はもうじき死ぬだろう。それでも――

「っ…かなた!!!」

自分自身が何者か忘れ始めていてもこの記憶だけは消えさせない  
ようやく選んだ選択肢、死んだって手放すものか

さつきまでケガレに押し負けていた月の光が少しずつ強くなる。  
人としての終わりが近づくにつれて彼女に少しずつ近づいて行く

もう少し、もう少し

「かなた!…っぐえ…!う、あああ!!」

千切れ飛んだ脇腹が月女神の霊基に置き換わる。それを皮切りに  
次々と私の人間だった部分が獣に抉り取られ、神のものへと置き換わ  
る

――だからどうした

自分が誰なのかももうほとんど分からない、でも何をやるべきなのか  
は分かっている

「…伊吹童子、あなたに落ち度は無い。始めたのは私の先祖だ」

もう全て置き換わった、髪も瞳も身体も在り方も、影月 遥から月  
女神アルテミスへ。

…この記憶以外は、全て

「でも、もういいでしょ?もう放っておいて」

月の光に塗り潰されかけたケガレが明確な敵意を持って向かって  
くる

それを黄金の矢で切り払い、10年前と同じように弓を携え――

「いい加減に……私の妹から出ていけえ！」

『<sup>フアー</sup>遥<sup>アウエイ</sup>か彼方<sup>カ</sup>まで 私の愛<sup>ロ</sup>矢』

月の光と家族への愛を乗せた最初で最後の1矢が、ケガレを完全に切り裂いた――

↳

D地区 街跡にて…

「ふむっ？」

どうやら成功…したんですね？少なくとも彼方さんは今度こそ完全に死んだみたいですが。

元々、影月 彼方の身体は人間というよりホムンクルスがベースである。ようは劣化のさらに劣化…

彼女の身体は人間ベースで作られたホムンクルス…を元に作られていた。…それならばすぐにガタがくるかと思っただけのものこんな遠回りするのはコヤンスカヤも予想外だった

で、問題は遥さんですけど

「――」

姿形は今のところ影月 遥のままだが気配は完全に女神のものでありコヤンスカヤの殺戮技巧も反応が無い

むしろあれだけ人間の部分を溶かしたのにヒトの姿を留めているだけでも凄いことですよ、愛されてたんですね彼方さん♡

…さて

動き出さないか警戒しつつ遥の脈を測ってみる…

「んー、こつちも死んでますね」

だからって動き出さない保証はないですけど

最悪の場合、月女神アルテミスが再臨して向かってくる可能性も考えられますが…ひとまずこれでいいでしょう

例の作戦、全人類生存権剥奪戦争が始まればもうこの人類史に打つ手は無いのだ、今更不完全なギリシャの神が増えたところでどうにもならない

とはいえ月女神の霊基が目の前に落ちているのならそういうの関係なしに欲しいと思うのもコヤンスカヤである

なにせ仕入れ先を考えたり交渉するまでもなく、道端に落ちているものを拾うだけで利益に繋がるのなら尚更だ

「…いえやめましょう」

約束したばかり、と首を振って伸ばしかけていた手を引っ込める

一度した約束は違えない、おそらくこの信用があったからこそ遙きんもワタクシに話したんでしょう。人間ならここで裏切る場面でしょうが生憎とワタクシは約定を守りますので♡

踵を返してその場を去ろうと振り向いた瞬間

「おっと」

顔面目掛けて飛んできた鉄球を蹴り返す。もちろんお気に入りのハイヒールが傷つかないように丁寧に

「帰るつもりでしたのに」

こちらの存在を察知したのか単純にたまたま見つけただけなのか知らないが怒り心頭といった様子でアマゾネスの女王さんがこちらを睨みつけている

「彼女に何をした!？」

うわあすごい剣幕、鎖を握り潰す勢いですねえ。ただまあ意思疎通ができるのでバーサーカーでもマシですね

「彼女の頼みで不純物を取り除きました。それ以外は特に何も？」

再び飛んでくる鉄球をそこに落ちてた彼方の遺体でガード…しようとしたが粉々になったため1発目と同じように蹴り返す

あ、これはマズい!

「!!」

パツキンと嫌な音がして鉄球が持ち主に返っていく

ヒールが欠け――

「――て、ませんね、モロに接合部に当たったと思ったんですが」

どうやらこのハイヒールを作った人物は相当優秀な人材らしい、戦争に巻き込むのが惜しいですし回収したいのですがどこの誰だかわからない職人を今から探して間に合うのか…

「コヤンスカヤっ!」

「ん? ああはい、居ましたねそういえば」

彼女を相手にする必要は皆無ですしこのままサヨナラするとしましよう。…それにしてもワタクシの対戦成績って対バーサーカーが多くありませんかねえ?

『単独顕現 EX』

「くそっ! 逃げられたか!」

付近に獣の気配は無く、今度こそコヤンスカヤは撤退したらしい

それよりも…



眼下にあるのは倒れたまま動かない影月 遙と既に殆ど朽ち果てて塵になつている影月 彼方の遺体…

——ここで何があつたというんだ…？

「遙様…」

嫌な予感がして脈を測る

直接会うことはついぞ無かつたもののアルテミス神殿で召喚された時、私は聞いた

『この子の力になつてあげて』

：アタランテも同じ声を聞いたのかは分からないがああの神殿で聞こえる女性の声など一人しか思い浮かばない

「！」

脈は無かつた、呼吸も止まっているし心音もしない

「…っ」

守り切れなかつた、アルテミス様は私とアタランテを信じて招んだのであろうに

「私は——「大丈夫？」

!?

ありえないはずの声に釣られて顔を上げる

「遙、様？」

影月 遙が海のように透き通るような瞳でこちらを覗き込んでいる

そんなバカな、今も呼吸をしていない、身体もこんなに冷たく——  
「…もしかして貴女と私は知り合いだったのかな、だとしたらごめん

ね

もう何も分からないんだ。自分の名前も、ここにいる意味も、この力のことも」

何も分からない、何も思い出せない、でも。

何をやるべきか、それだけは分かっている

「――」

「っ…？今なんと――」

「ごめんね、私、行かないきゃ」

ふわりと重力を無視して遥の身体が浮き上がる

空を飛ぶ魔術というのは本来そう簡単にできるものではない、それはペンテシレイアも知っていた

だが遥はそんなこと意に返さずそのままふよふよと幽霊のように空を飛んで、行ってしまった

…見失うわけにはいかん、追いかけよう

基地の仲間が無断で離脱したペンテシレイアだったが、その頃基地では彼女の存在が忘れられている程の異常事態が起こっていたのだが――

「かなたっ！」

全てのケガレを打ち払って転がり込んだのは…あの伊吹山だった

あ、あれ？

伊吹山のはずなのだが、どこか自分の知る伊吹山と違う気がする。解呪のための記憶障害だろうか、だとしたら何故自分にはここが伊吹山だと分かったのだろうか

気持ちのいい風が太陽のない青空の下に吹き焦れて、林に囲まれている草原がそよそよとなびく

…ああ、わかった。違和感の正体が

草原の中央で楽しそうにお喋りしている2人の少女、1人は分からないがもう1人のことはよく分かる

「ねえ彼方にとってこの場所<sup>伊吹山</sup>は、私が思っているよりも楽しい場所だったのかな」

「…ある意味、そうなのかも」

多分始めから居たんだろう、私の宝物、この世で1番大事な妹、影月 彼方が隣にいた

「嫌なこと、辛いこともたくさんあったけど、お姉ちゃんが毎日一緒に居てくれたから、毎日連れてきてくれたこの原っぱが、私は好きだよ」  
にこやかにそう言う女性にはいつか見た、神の力に犯されて狂っている姿は無い

「追いかけてっこして、泥団子作って、トカゲとか捕まえて、永遠にこの時間が続けばいいのにつて思ってた」

2人の視線の先には記憶の幻視…楽しそうにくすぐり合う彼方と少女がいる

多分今くすぐっている方がかつての私…なのだろう

「私もだよ、でも」

結局、交わした約束を果たせないままここまで来てしまった

「私はあなたを迎えに来れなかった」

あの時ああすれば良かったとずっとずっと、何回も何回も、様々な場所で後悔を重ねてきた

「ごめんなさい彼方、あなたがこうなった原因を作ったのは私よ」

今謝らなければ、今言わなければそのまま妹が消えてしまいそうな気がして、ずっと会えなかった『ごめんなさい』を伝える

「うん、知ってる。正直あのままだったらずっと恨んでたかも」

「う…」

ばっさりと言われてしまつて顔が見れない

いや私が悪いんだから当然だけど……？あのままだったら？

？が浮かぶ私の頭をずいっ！と抱き寄せて彼女は笑う

「でも今こうして迎えに来てくれたじゃん、お姉ちゃんは約束を守ってくれたよ」

「っ…!？」

それでいいじゃない、と微笑んでいる彼女の顔が。まるでぐしゃぐしゃのフィルターがかかったように見えなくなる

「私、あなたを見捨てたよ？」

「うん」

「それから何度も、あなたの前から逃げ出したよ？」

「うん」

「わたし、わたしは」

「あなたは私のお姉ちゃん、だいすきなだいすきなお姉ちゃん！ずっと前からそうなんだよ！」



でこを引っ叩かれた

「あう」

「…死ぬつもりだったんだね、まったくもう」

「う」

ぐ、地味に痛い、言葉もビンタも…

「どうひっくり返ったって私に、影月 彼方にこの先は無いらし生きるつもりもない」

あっさりと言ってしまふ彼女に思わず食い下がる

「待って、私は今コヤンスカヤと取引したの！何か助かる方法が「仮に助かったとしても魔術師達や米軍は私を許せないよ、私は無関係な人たちがあまりにも多く殺しすぎた」

特にクライムって人は私が生きていると知ったら全力で殺しにくると思うし」

「…」

それは…

「でもお姉ちゃんは違う、妹の私と敵対してまで米軍や魔術師達のみんなを守ろうとしたしアマゾネスのバーサーカーを始めたくさんの英霊がお姉ちゃんのことを知ってる。まだ…命を捨てるには早すぎるよ」

目の前の、かなたの身体が崩れていく

「かなた」

「お姉ちゃんにはお姉ちゃんを支えてくれる人がたくさんいるよ、だから死ぬなんて言わないで、私の分まで生きて、楽しんで」

足先から、塵なのか土くれなのか分からないものになって消えてゆく

「ま、ま…」

「しわくちゃのお婆ちゃんになるまでこっちに来ちやダメ、私はお姉ちゃんが来るまで——えっと、あるかどうか分からないけど地獄の閻魔様？のところで償うよ。…それが終わったらまた一緒に喋りしよう」

じゃあね、とまるで遊びに出かけるように軽い一言と共に彼女が消える、消えてしまう

ひどいよ、あなた…置いていくなんて

今度こそ一緒に居ると決めていたのに

「ねえお姉さん」

ふと私とよく似た少女が私の手を引いているのに気付く

「あの、妹を探してるの。私に似ててちよっと怖がりな子、見なかった？」

いつの間にか原っぱからも『妹』が消えていたらしい

「——ここには居ないよ、それとその子は怖がりなのかもしれないけど…この世の誰よりも姉を大事にする、とても、良い子だと思う」

こんなことを言っただって気休めにもならない、だが選択する前の自分がそこにいるのだから、言わずにはいられなかった

「だから、だからあなたも妹を大切にしていあげて、妹を裏切らないで、かなたを、助けて」

涙の枯れ果てた瞳で、精一杯訴える。少女は終始困惑していたが妹を助けてほしいと言うのは伝わったのか「うん！」と、今の私には無い元気を持って答えてくれた

「——ありがとう。」

それが聞ければ、もうここに居る理由はない

まだやるべきことがある

「幸せになる前に、もう1人の家族を、ザイルを止めなくちゃ」

「っ…？今なんと——」

「お姉さん、どこにいくの？」

「ごめんね、私、行かなきゃ」

「ここが心象風景だからなのか、身体が自分の意思で簡単に浮かび上がる

「あの、お姉さん！」

ん…？

「私、妹を、彼方を守るから！」

「——うん、お願い」

もう1人の私に託し、私は向かう。行くべき場所へと

く影月 彼方 死亡く

く  
米軍基地 予備司令部にて…

「ベルベット、参謀長…なにか、策は、」

「策でどうこうできる次元じゃ、無い」

司令部にいた米軍、魔術師、後からやってきた新撰組隊士、その全てが小さなノートパソコンのいち画面に釘付けになっており、やがて



1人、また1人と凝視の対象が窓の外の景色へと移ってゆく

「ギリシユタリアさんは、ボーダーのみんなはどうなったんだよコレ……」

「さあな、宙の間は全員無事で、応答が無いのは機材の故障と決めつけたいが。」

魔術師と米兵が半ばヤケクソ気味に話している中、私はただ茫然と画面に表示された残り時間を見ていた

「——これ、を」

これを、どうしろと言うんだ？

窓から空を見上げれば見えるのは2つの太陽。……うち1つはどんな大きく、いや近付いてきている

それは太陽ではなく、太陽よりもっと小さく、恐ろしいもの。かつて地球の支配者だった恐竜を絶滅させた物と同質のもの。

『彼』の臣下としてウェイバー・ベルベットに諦めるという選択肢は存在しない、が。この状況で即座に動ける程の精神力は無かった。当然だろう、なんなら気絶した魔術師もいたくらいであるし強い方である

「——っ、突っ立っている場合じゃないな……！基地内にある全ての車両と航空機の所在を1分以内に明らかにしろ！……ここを離れる！」

そんな中どうにか正気を取り戻し、放心状態のみんなに指示を飛ばす

「し、しかしあの規模は——」

「ならお前はそこで何もせず突っ立ってればいい！どれだけ絶望的だろうと何もしないでいい理由にはならないだろう……！クライムを呼ぶんだ、急げ！」

その言葉を聞いた人間、魔術師、サーヴァントが弾けるように動き出す

そうだ、まだ終わっていない

「諦めてたまるものか……！」

：《ツングースカ・ナインドライブ雷天日光・禍音星落火流錘》激突まで

残り予測時間……あと10分09秒